
旅人 ~世界の終わる日まで~

にせごるご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人 ～世界の終わる日まで～

【Nコード】

N9212H

【作者名】

にせーるい

【あらすじ】

雪山での遭難中に会った女性から託された『旅人』という役割。最初は戸惑いながらも目的のため、『旅人』の力を使い旅を続ける瞬。そして、旅の最中、さまざまな出来事が彼を襲う。

爽快感などはあまりないかもしれませんが、読んでいただければ幸いです。

第1話：出会い（1）（前書き）

2010/03/12 修正版を更新（いくつか表現を修正、
今の流れは変えていません）

2010/04/16 修正版を更新（いくつか表現を修正、
今の流れは変えていません）

2011/10/25 修正版を更新（かなりの表現を修正、
今の流れは変えていません）

第1話：出会い（1）

「救助できないってどういことだよ！」

そう賢悟はどなるように言つとオレンジ色の服を着たレスキュー隊員に掴みかかる。

だがその周りにいた人達が迅速に賢悟を抑えつけ、伸ばした手は襟にも届かずに力なく下に落ちていく。

「・・・今、言ったとおりだ。この吹雪では搜索しようにもへりも飛ばせないし、下手に行えば二次災害が起きかねない。吹雪が収まるまで待機するしかないんだ」

レスキュー隊員も苦渋の判断だったのだろう。

俯いて答えた彼の顔はまるで苦虫を噛みつぶしたかのような顔をしていた。

それでも友人を助けられないと言われるのは賢悟の神経を逆なでするだけでしかなく、彼は話の内容などまるでお構いなしにまだ掴みかかるうと体を動かす。

「そんなの納得できるか！あいつらは今も死にそうになってるんだぞ！助けるのが仕事じゃないのか！」

「できるなら私達もすぐにでも救いたいんだ！だが、状況が状況なだけに無理なんだ！分かってくれ！」

お互いが1歩も譲ろうとしないためか、重苦しい空気が小屋の中に流れる。

しばらく睨みあった両者だが、その膠着状態を破ったのは賢悟だっ

た。
抑えていた人を無理やり振りほどく事に成功した彼は、テーブルの上にあつたキーとオレンジ色のバッグを素早く取るとドアから外へと飛び出る。

開いたドアから暖かい室内へと流れ込む吹雪にのつて、木の階段を駆け下りる音が全員の耳に届いた。

「・・・っ！いかん！彼を止める！」

すぐさま彼が何をするか気付いたレスキュー隊員が静止するよう叫ぶ。

それと同時に外に止めてあつたスノーモービルのエンジン音がけたたましく鳴るのに気づいた。

小屋の中にいた全員が外へと出るが止めてあつたはずのスノーモービルが1台なくなっている。

まだ消えていない雪の上に出て来た溝を目で追つていくと、1台のスノーモービルが猛吹雪の中に消えていくのが見えた。

レスキュー隊員が止めに行こうとスノーモービルにまたがる。

「くそっ！・・・うおっ!？」

だが、まるで追う事を拒むかのように突然の突風が隊員を吹き飛ばす。

態勢を立て直した時にはもう賢悟の姿は何処にもない。

追うのは被害を増やすだけか、くそっ！

今までの経験が冷静な判断を告げるが、どうしても納得しきれない隊員はスノーモービルに拳を叩きつけた。

救助する人間が2人から3人に変わったと認識を改めた隊員は、止められなかったことを後悔しながら小屋の中へと戻っていく。

「行つたか」

その様子を何時からいたのか小屋の上に立つ黒い帽子に黒い皮のマントを纏つた1人の女が見ていた。

着ている皮の服、その上にまとっているマントはどことなく古ぼけている上に全て黒一色であったが、束ねて垂らした髪は綺麗な銀色で整つた顔立ちはどこか人形を思わせるような風貌だった。

賢悟が消えていった先を見つめる細められた青い目は凍りそうなほど冷たく、見るもの全てを萎縮させてしまうような威圧感を放つ。

周りが白で埋め尽くされている中に黒づくめの格好でいるため、まるで白紙に墨を1滴落としたように目立つものの、外には誰もいるはずがなく注目を集める事もない。

荒れ狂う猛吹雪の中に出てこようと言う者などいるはずはないのだ。ただ、そんな中に彼女は悠然と立っている。

不思議なことに雪が埋め尽くさんとはかりに吹雪く中で雪や風の影響を受けることなく、彼女を中心に半径1m程の雪が積もらない場所が出来ていた。

「・・・さて、追うとするか」

風に消されるほど小さく呟くと黒い女はその場から瞬間移動でもしたかのように消える。

そして、今までいた場所に押し寄せるように雪が積もっていき、そこに彼女がいたという痕跡は完全に消されていく。

賢悟の乗ったスノーモービルは森の木々の間をすり抜けながら軽快に進んでいた。

だが、それも途中までの話だった。

登っていくにつれて新雪の積もる高さは高くなり、スノーモービルのスピードは徐々に落ちていく。

更に吹雪の勢いは弱まるどころか増す一方で、吹き荒れる猛吹雪はまるで周りが白い壁に囲まれてしまったかのように視界を遮り、そして身を締め付ける様に錯覚するほどの寒さが賢悟を襲う。

「ちくしょう・・・寒いな」

賢悟は震える体で寒さに耐えながら危険を承知でアクセルを強く捻る。

スピードをうまく制御しながら木々の間をスノーモービルの側面を擦りつけてでも先へ進む。

どこにいるんだ、瞬！花梨！

友達を思う意思一つで様々な困難に耐え続ける賢悟。

すると突然、風が急激に強まり、バイク並みの大きさであるスノーモービルは風の影響を諸に受けてしまい、あらぬ方向へとハンドルが取られる。

すかさず賢悟は違う方へと進むスノーモービルを戻そうとハンドルを力一杯傾ける。

だが、その努力も虚しくスノーモービルは進むべき方向とは違う方へと進み、賢悟の目前に大木が迫ってきていた。

「くそっ！まずい！」

間一髪の所で賢悟はスノーモービルから飛び降りる。

彼は雪の中を何度か転がり、直進し続けたスノーモービルは大木に激突すると黒煙を上げてエンジンが止まった。

幸い怪我もなかった賢悟はすぐにスノーモービルへと駆け寄るが、完全に先がひしゃげってしまった使い物になりそうにないほど大破し

ていたため乗り捨てる事を決め、己の足を頼りに前へと進み始める。スノーモービルという足がなくなり進むスピードが遅くなったところか、猛吹雪のせいで一歩ずつといえども先へ進むのも困難な状況に陥っていた。

それでも吹雪によるめきながら1歩1歩進み続け、彼の険しい顔からは諦める意思は全く感じ取れない。

「待つてるよ、瞬！花梨！今行くぞ！」

自らに気合いを入れる様に助けを待っているであろう友人の名を強く叫ぶ。

木々に手をかけては引つ張る様に進み、その歩みは決して止まりはしない。

そうやって10分ほど進んだ頃だった。

スノーモービルの時の様に一瞬だけ強い突風が賢悟を襲う。

慌てて彼はバランスを取ろうとしたものの、予想外の風の強さによるめいて新雪に足を取られる。

半ば反射的に彼は近場の木に手を伸ばして立て直そうとするが間に合わず、態勢を崩して頭から木にぶつかるとそのまま木にもたれるように倒れこんだ。

「い、てえ・・・」

ぶつけた彼の頭からは血が滲みだし、鈍い痛みが彼を襲う。

衝撃で意識は徐々に薄れていき、それに伴って視界も段々と狭まっていく。

体を動かそうにも今までの疲労が現れたのかまるで体中に重りが巻きついてきているかのように全く動くことはない。

次第にまぶたが完全に閉じていく中で賢悟はここで終ってしまふ事を悟り、ボンヤリとした中でもまだ生きることが渴望するがまぶた

は完全に閉じられる。

「しゅ、ん・・・か、りん・・・」

二人の姿が瞼の中に浮かぶ。

最後の言葉を呟いた彼は、まるで強烈な睡眠薬でも飲んだかのように意識と体中が眠りにつき始める。

ピクリとも動かなくなった賢悟を捕食するかのように雪はあっという間に積もっていく。

今、正に一人の青年が死に瀕していた。

そこに天の助けか、はたまた死の迎えか、何処からともなく黒い女が現れた。

「ここが限界か、しょうがない・・・」

その場からまるで手品ののように消えたかと思うと、次の瞬間、彼女は意識のない賢悟の前へと立っている。

手をかざしてまだ生きてることを確認した彼女は賢悟を持ち上げて肩にかけた。

「さてと」

賢悟の向かっていた方角へと向けてその場から消えてはまた先に、更にその先にと連続で移動していく。

高速で移動し続け、やがて森を抜けるとそこは開けた平原のような場所だった。

開けた場所に来ると尚更、吹雪の体感する威力は増す。

何しろ、木で遮られた森とは違い、四方八方から殺人的な吹雪が襲いかかるのだ。

仮に賢悟がここまでたどり着いたとしても、この平原を抜けるのは

無理だっただろう。

そんな中を彼女はまるで何事もないかのように平然と、それも吹雪が吹き荒れる平原のど真ん中を消えながら移動し続ける。

消えては移動し、移動しては消え。

何度目かの移動をした時、彼女は移動をやめて周囲をうかがうように止まった。

「あれか」

彼女の目の中には白一色でしかない周りの風景の中にオレンジ色の小さい明りが映っていた。

目的地を見つけたと確信した彼女はすぐさまそこに向かって移動し始める。

進むにつれて徐々に大きくなっていく明りは揺らめきを帯びていき、焚火の明りだとわかるのにそう時間はかからなかった。

焚火は岩壁をくり抜いたように出来た洞窟の中で焚かれ、時折洞窟内に入ってくる吹雪の勢いによって消えかける寸前だった。

彼女は続けざまに移動し続け、ようやく洞窟内へとたどり着く。

肩にかけていた賢悟を火の側におろすと、その周りの先客へと目を向ける。

焚火を囲みながら寒さに震え、グッタリと横たわるスキーウェアを来た男女のペアだ。

うつ伏せになつていてるため二人とも顔は見えないが、横たわる男を視界に捉えた彼女は途端に心臓が大きく飛び跳ねた様な錯覚を覚える。

それほど、彼女の鼓動は早くなっていた。

落ち着け、確認するのが先だ、落ち着け……。

ざわついた心の中を静めながら彼女は恐る恐る、だがゆっくりと彼女は男に手を伸ばす。

「…………ど、どなたです……か？」

突然の声に彼女の手は止まり、今の声が頭の中に響き渡っていた。この、声だ……。

今更、凍りつかせる吹雪の影響を受けたかのように彼女はその場で固まった。

「き、救助の方ですか？」

返事がない事で男は弱々しい声でもう一度問う。

その声に慌てた彼女は止めた手を動かし、男を仰向けに起こした。

男は息も絶え絶えだったが安心からか苦しいながらも笑顔を浮かべる。

……………会いたかった

その表情を女が見た瞬間、彼女の中で色々な感情が激しく渦巻く。

反応が無いのを不思議に思っていた男はの前で、彼女の目から一筋の涙が頬を伝って零れ落ち、それを皮きりに両の目から大量の涙がこぼれ落ちては地面へと吸い込まれていく。

そして感情のまるで感じ取れなかった人形を思わせる無表情は簡単に崩れ落ち、横たわった男の体に抱きつくとも声を上げて泣き続ける。

「うわあああああああああああああああああ！」

「い、一体どうしたんだ？・・・うん」

突然の事態だが、意識がはっきりしない男にはどうしたらいいかわからない。

とりあえず彼女が泣きやむのを待とうとまるで小さい子供をあやすように頭を何度も軽く撫でた。

その多少冷たいながらも不思議と温かみを感じる手で優しく頭をなでられているのに気付いた彼女。

美人が台無し程、泣いてグシャグシャになった顔を上げると、微笑みながら見ている男と目が合う。

途端に彼女の中で更に積もった感情が暴走したかのように荒れ狂い、男の体を強く抱きしめて先ほどより一層大きく泣き始める。

「え、え〜と？」

泣き止んでくれるどころか更にヒートアップしてしまったのに男は更に困惑しながらも、手は休めることなく彼女の頭をなで続けた。

一体、何時からこうしていたのだろうか？

そう男が思うほど時は立ち、ようやくスッキリしたのか胸の中の彼女の泣き声は吹雪の音にかき消されてしまうほど小さい。

泣いている間ずっと抱きついてきた男から離れ、彼女は立ち上がった後ろを向いた。

まだ小さく泣きながらも涙を服の裾で拭いたり、まるで精神集中でも行つかのように深く深呼吸を続けて、女の表情はまた元の硬い無表情へと戻っていく。

「????？」

何が何だか分からない男はとりあえず、この間に泥の沼に浸かっているかのような重い体を起こし、岩壁にもたれかかったところで気が静まった女もちょうど男に向き直る。

すぐに女は口を開いてしゃべろうとしたものの、男の前でいきなり大泣きしてしまった手前、赤面し咳ばらいをしながら切り出せずに困っているようだ、

するとそれを察したのか男が先に口を開いた。

「あの、あなたは一体？その格好からしても救助・・・ではないですよ？もしかして、僕らと同じように遭難されたんですか？」

男は多少失礼とは思いながらも彼女の姿を上から下まで見てみる。だが、やはり全身黒づくめでどこか中世の旅人を連想させるような服装はこの吹雪が吹き荒れる雪山では場違いに感じる。

そもそも、そんな格好ではあつという間に凍死してしまうはずなのだが・・・。

「地元の獵師の方、とか？」

「両方とも違う、私は・・・『旅人』だ。それもここに来たのは旅のためではない。お前に用があるからだ」

「僕に、ですか？」

「ああ、そうだ・・・な」

二人の目が合うとさっきの泣いてしまったのが恥ずかしいのか、彼女はすぐに目を伏せてしまう。

その際に下に寝ている二人に目がいき、男もそれに釣られていつの

間にかもう一人増えているのに気づく。

「え？なんで賢悟がここに？」

「彼は一度無事に下山してきたが、救助が悪天候のせいでは出来ないと聞くとお前達の方に向かって飛び出していった。私は彼の後をついていくことでここにたどり着けたが、彼は途中で力尽き、私がここまで運んでやった。心配ない、命に別状はない」

「そうですか、賢悟の奴、助かったのにまた飛び込んでくるなんて……。助けていただいてどうもありがとうございます」

男は壁にもたれながら器用に礼儀正しく深いお礼をすると、彼女は横を向きながら答えた。

「気にしないでいい、私も彼に助けられてここに来たわけだからな。それより、話を戻そう」

「えっと、僕に用があるとか？心当たりはないのでよくは分かりませんが……？」

すると彼女は一度目を閉じて深く呼吸を続ける。

全てはこのために……。

大きく息を吸い込み、意を決したかのように目を見開いた彼女は男へと言い放った。

「雨堂 瞬、お前に『旅人』になってもらいたい」

第1話・出会い(1)(後書き)

初投稿なので色々とおかしい表現や誤字があるかもしれませんが
容赦ください。

第2話・出会い(2) (前書き)

2010/03/15 表現をいくつか修正(内容は変わってないです)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今までの流れは変えていません)

2011/10/25 修正版を更新(かなりの表現を修正、今までの流れは変えていません)

第2話：出会い（2）

「僕が旅人に？・・・まあ、旅は好きですけど」

瞬、と呼ばれた彼の頭の中には、電車を乗り継いで当てもなくブラブラするような旅行が浮かぶ。

テレビでよくある旅番組の様なものだ。

だが、彼女の格好を改めて見たところで強風に耐えながら帽子を押さえ、荒野を歩いていく、そんな何世代も前の旅のイメージへと変わってしまった。

それを見透かしたかのように女は答えた。

「残念だが、お前が思い描いているような旅ではない。今の生活を全て捨て、日陰をずっと行くような孤独な旅を続けなければならぬ。詳しくはまだ言えないがひとつ言えるのはこれは誰かがやらねばならない。そして、それを行える限られた人間の1人にお前は選ばれた。強制はしない、やってみないか？」

衰弱からか意識はボンヤリとしているものの、それでも瞬には妄想めいているようにしか聞こえない。

それどころか、最近流行っている新興宗教への勧誘ではないかと彼は思い始めていた。

わざわざ雪山にまで勧誘しにくるほど根性ある勧誘員など世界中探してもいるはずがない、とまでは考えが回っていないようだ。

「・・・お断りします」

「そうか、引き受けてくれるか、ありが・・・え？今、何と申した？」

「いや、お断りと・・・」

壁にもたれながらも断固として拒否する意思を表す瞬。

それに対して、彼女は一旦背を向けると予定した内容と違う事に頭を抱えながらどうするべきか悩み始める。

ええと、確か・・・そうだ。

うつすら残る程度の古い記憶の海から対処法を見出した彼女は、即座にそれを実行に移すべく服の中に両手を潜り込ませる。

すると、どこから出したのか刃渡りが1mはあるつかという西洋剣を右手に持ち、左手にはパンやハム、チーズといった食料が所狭しと詰め込まれたバスケツトが持たれていた。

今は夢の中にもいるのかと錯覚させられてしまう程、上手い手品を見た気分の瞬は拍手でも送りたい気分だった。

そんな彼の目の前で、気分をぶち壊すように女は右手の剣をゆっくりと下に倒れている賢悟の首元へと突き付ける。

「さっきの強制しないというのは無しだ。友達の命を助けたければ『旅人』になれ。なるなら君の友達が救助されるまで生きていられるだけの食糧や道具も提供しよう。どうだ？」

一瞬、彼女が何を言っているのか瞬には理解できなかった。

今までと同じく淡々と無表情に言っているが、その行為は確実に犯罪行為そのものだ。

担いでまで助けた賢悟をいきなり人質に取るという女の変わり様に瞬は啞然とした。

「そんな無茶な・・・」

「無茶じゃない！一言だけお前が「はい」と言えば全て収まるん

だ。素直に言え」

「す、素直につて……。人質とつて言わせる言葉じゃないでしよう」

状況がよく飲み込めないがとりあえずどうするべきかを瞬は考える。気だるい体に荒れ狂うような吹雪、あと10cmだけ剣先が進めば死んでしまう親友の賢悟、そして、彼女の足元に人質同然に倒れている幼馴染の花梨。

あまりの絶望的な状況にたまたま通りすがりの正義の味方が助けしてくれるや、神様が落雷を起こして彼女だけを倒してくれるなど都合のいい考えにばかり至ってしまうが現実はそのなに甘くはなかった。

「あと5秒で決断しろ。5・・・4・・・3・・・」

「ま、待つて待つて！し、質問！質問があります！」

カウントを続けていた女の口がピタリと止まり、瞬をジツと見据えると剣先を少しだけ上に戻す。

呆気なく停止したカウントに少しだけ安堵した瞬だったが、それも束の間だ。

浮かぶ質問があまりにもあり過ぎて逆にどれを言えばいいのか迷っていた。

貴方は誰ですか？旅人つてなんですか？そもそも、どうして僕が？瞬はどう質問すれば現状を打破できるのかと悩む。

ただ、悩んでいる最中、ふと目のあつた彼女の真剣な眼差しに押され、彼はなんとなく思い浮かんだ質問を自らの口で問うた。

「・・・ケ、ケーキもだせますか？」

今度は彼女が何を言っているのかと、一瞬目が見開いて石像のように固まった。

ただ、彼の言った意味を理解していくうち、その石化は解けるどころかそのうち肩が小刻みに震え始めると次第にその震えは体全体に広がっていく。

「もしや、やってしまったのか!？」

自分が何を言ったのかようやく気付いた瞬は、彼女があまりの場違いな質問に怒りで震えているのかとすぐさま訂正をしようとした。

「す、すいません、今のは無し!」

「ッブ!アハハハハハ!ケーキ!ケーキですって!こんな状況でケーキ!アハハハハ!」

「で!・・・って、え?」

吹き出したように女は笑いだすと、剣を地面に突き立ててバスケットの中をぶちまけながら腹を抱えて体をくの字にして笑い始めた。大泣きしたのは別としても、先ほどから冷静な表情を保ち続けていた彼女のどこかが壊れてしまったかのように笑いは尽きることなく出続ける。

盛大に笑われ続ける恥ずかしさからか顔を真っ赤にしている瞬だったが、その目は突き立てられた剣を捉えていた。

「今が剣を奪うチャンスだ!」

気付くやいなや、すかさず地面に突き刺した剣へと飛びかかり剣の持ち手を取った。

彼女はその様子をまるで気にしていないかのようにまだ笑い続けており、瞬は立場が逆転した事を示そうと剣を抜くべく力を込めた。

「んんっ！・・・お、重い！？」

体力を消耗してはいるものの普通の剣なら問題なく抜けるだろうというだけの力を瞬は出していた。

ところが、剣はまるで巨大な岩でも持ち上げようとしているかのようにビクともしない。

更に力を込めてはみたがまるで動く様子はなく、とうとう力尽きてその場に腰をつくと肩を上下させながら大きく息をする。

不意に隣から伸びた白い手が剣の持ち手を瞬の手ごと握る。

慌てる瞬を余所に剣は瞬の苦労が嘘のように軽々と持ちあがる。

驚きながらも瞬は自然とその手が誰なのかを目で追っていき、その先にいたのはついさっきまで腹を抱えながら笑い続けていたはずの彼女だった。

ようやく落ち着いたのかまた冷静な表情へと戻っていた。

その人形を思わせる程の整った顔に近い瞬は今の状況など忘れて見惚れてしまう。

ただ、よく見てみるとまだ気持ちが悪く落ちて着いてはいないのか彼女の口元がまだ多少ヒクついているように見える。

瞬は我を取り戻して慌てて彼女から離れようとするものの、不自然なほど力強い彼女の手がどうしても外すことができない。

結果として剣の持ち手から手が離れないため、杭につながれた犬のように遠くに行くことができない。

「放してくれませんか？」

今できる精一杯の笑顔で聞いた瞬だったが女もそれにこたえるように一度だけニツコリ微笑んだ。

すると次の瞬間、瞬の手を剣から放したと同時に背中にもひねり上げ、痛みでよろけた瞬を手際良く羽交い絞めにする喉元に剣の刃をあてる。

見事に反撃のしようがない状態へと追い込まれ、瞬は諦めたように目を閉じて大きくため息をつく。

「一応聞きたいんですけど、僕が死んじやうとまずいとかは・・・？」

「ない。ダメなら別の者に行くだけだ」

「そうですか。はあ・・・、分かりました、降参です」

「では、『旅人』になるんだな？」

「そうですよ、だからその物騒な物を早くしまつて下さい！」

女は剣を再び地面へ突き立てると瞬を捕まえていた手を放し、突然解放されてよろけた瞬はフラフラと壁にもたれかかる。

「よし、では今から『旅人』についての説明を行う！しっかりと聞くように」

「いつつ、強引な人ですね。でも、出来れば救助を先にお願いできませんか？もう僕も、げ、限界・・・」

極度の疲労状態でありながら無理やり動いた代償はかなりでかかったらしく、瞬はもたれかかった壁から地面へと倒れこむ。

瞬の視界は次第に狭まっていき、心配そうな彼女の顔を捉えながら視界は完全に閉じると瞬の意識は深く沈んでいった。

そんな表情もしてくれるということにどこか安心を覚えながら。

第3話・出会い(3)(前書き)

2010/03/15 表現をいくつか修正(内容は変わってないです)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今までの流れは変えていません)

2011/10/31 修正版を更新(かなりの表現を修正、今までの流れは変えていません)

第3話・出会い(3)

暗い闇の中にいつの間にか瞬は立っていた。

周りを見渡しても瞬の他には誰も、何も存在しない深い暗闇があるだけ。

なぜこんな所にいるのか？

なぜ誰もいないのか？

訳も分からず焦ってその場から駆け出す瞬。

だが、先に進んでいるのかも分からないほどの暗い闇は一向になくならず、瞬の中で焦りばかりが増大してゆく。

「誰か、誰かいませんかー！」

立ち止まって出せるだけの声を出して返答を待つてはみたが、闇の中に声が吸い込まれたのかのように何処からも全く返答はない。

どうしたらいいのか途方に暮れる彼は、諦めたかのようにその場に膝をついた。

ここから出る事は出来ない、このまま一人でいるのか、と。

彼の脳裏に恐ろしい考えばかりが浮かぶ中、不意に目の前に光る点が現れる。

誰がいるかもしれないと瞬は立ち上がり、光る点に向かって走り続けて近づいていく。

すると、光る点の前に影があり、次第に誰かが横たわっているのだと彼は気づいた。

更に近づいていくとその横たわっているのが賢悟と花梨であると分かり、瞬は自然と力の限り走っていた。

「賢悟ー！花梨ー！」

彼の呼びかけに反応しない二人は気を失っているのか少しも動く様子はない。

走るスピードを上げてすぐに駆け寄ろうとした瞬だったが、突然、揺れているのが目に見えるほどの地震が起こる。

まともに走る事どころか立っている事もままならず、瞬はバランスを失ってその場に倒れ込んだ。

地震が収まるまで待とうと瞬はどうにかうつ伏せになる。

ところがそんな彼を苦しめるかのように地震は収まるどころかさらに激しさを増し、横たわる二人の周辺に、来る者を拒むかのような亀裂が入った。

収まるまで待っていたら2人がまずい！

直感でそう感じた瞬はどうにか立ちあがり、ふらつきながらも前へ前へと歩く。

一步一步と距離を詰めていき、瞬と二人の距離がもう少して埋まるかと思われた時だった。

「そうはさせん」

何処からともなく聞こえた声の後、地震は今までにない程大きく揺れ、二人の周りの地面に走る亀裂は人を呑みこもうとする程大きくなった。

二人へと手を差しのばそうとした瞬だが、突如、地面の中から何かが生える様に二人を乗せて上へと伸びていく。

あっという間に瞬には手が届かないほどの高さにまで到達したそれは、誰が見ても巨大な人間の手と腕だった。

一体何が起こっているのか唖然とする瞬を余所に、手に続いて黒い衣服をまとった銀髪の女が亀裂の中から現れる。

最早、理解の範疇を超えた瞬に対し、巨大な女は左手で茫然と見上げている瞬を指差した。

「この2人を助けたいならお前は『旅人』になるんだ！」

「そ、そんな無茶な。・・・おわっ！」

女が現れたために起こった亀裂は瞬の足元にまでおよび、地面が割れると瞬は飲み込まれるように下へ落ちていく。

「いいな！『旅人』になるんだ！」

「う、うわあああ！」

瞬がベッドから飛び起きるように目を覚ます。
跳ね上がる体に合わせて視界も移動し、その中に賢悟の顔が飛び込んできた。

慌てて瞬は体を止めるとちょうど覗き込むように呼びかけていた賢悟に近すぎる状態で顔が合い、二人とも気まずい感じで顔の位置を少し後ろに戻す。

「言つとくが、俺にその気はないからな」

「心配しなくても僕にもないよ。それよりも、ここは・・・？」

辺りを見回す瞬の目には、雪山とは違った白さが飛び込んでくる。
雪山の洞窟とは違った白く整った壁が周りを囲み、部屋の中には瞬が寝ているベッドと棚が1つあるだけ。

全体的に清楚な雰囲気が出ており、何か薬品臭いような独特なおいが彼の鼻につく。

「病院だ。雪山の洞窟で倒れていたのを吹雪が収まって出勤した救助隊に助けられたらしい。ちなみにお前は丸一日寝たままだったんだぞ」

「そうか・・・、なんとか助かったんだな。花梨は？」

「心配しなくても救助されてすぐに回復してるよ。今は別室のベッドでぐっすり寝てる。お前が目を覚まさないのをずっと心配してたぜ」

「全員無事に助かったのか。よかった」

瞬が安堵の息をつくとそばに立った賢悟はベッドの上に腰かけ、怪訝な顔をしながら瞬に向き直る。

「なあ、不思議な事があるんだが、聞いてくれないか」

「どうかしたのか？」

「さっき言ってた救助隊がさ、吹雪が収まらないからって出動できなかつたから俺が一人でお前らを助けに行こうとしたんだけどよ・・・イテッ！何しやがる」

話の途中ではあったが、いきなりの賢悟の暴走話にすかさず瞬はチヨップを賢悟の頭に叩き込んだ。

「全く、また暴走して。そういう事はするなってあれほど・・・」

「分かった分かった。今後はしないから、な？というか、そこは

いいんだよ、最後まで聞け。俺はスノーモービルを拝借してお前らの洞窟めがけて進んでる途中で木にぶつかってさ、歩いて向かってる途中で木にぶつかって気を失ったはずなんだよ。ところがだ、次に意識が戻った時には洞窟の中で救助隊に救助されるどころだったんだよ。しかも、どういうわけか洞窟には毛布やら乾燥した薪、ポットに入った熱々のスープやハムなんかの食料品、おまけに入口に防寒用のシートまで付いてたんだよ」

親友の無謀話を最後まで聞いたら一発殴ってやろうと思っていた瞬間だったが、途中から話の内容に冷や汗が止まらなくなってきており、その考えは何処かへと吹き飛んでいた。

あれは夢とか幻覚じゃなかつた？

瞬は頭の中であの時の事を思い出してみよう、どう考えても賢悟の話の原因は彼女しかあり得ないという結論にたどり着く。

『旅人』の仲間にしたらしいけど、一体彼女は何者なんだろう？いきなり瞬にしがみついて号泣し、その後で仲間になる様、脅迫行為まで行ってきた。

瞬から見た彼女は悪人の様な感覚はなかったものの、何を考えているのかはまるで分からない、得体の知れない女性といった所だった。疑問を浮かべていた瞬は、ふと彼女の肌が触れた手首に目が行く。

そして、見た瞬間に彼は見た事を後悔した。

腕の手首、そこには捻り上げられた時に捕まえられていた手の跡がクッキリと残っていたからだ。

瞬の背筋にホラー話を聞いた時とは比較にならないほどの寒気が走り、彼の体はまるで凍ったように固まった。

「花梨に聞いても知らないって言うし、お前何か知らないか……
つて、お前大丈夫か？」

「……え？あ、うん。喉が渴いたらしくてさ、はは……」

「顔が青白くなってるぞ？まあ、腹も減ったんだろっし、飲み物と一緒に何か貰ってきてやるよ」

「あ、ああ、悪いね」

賢悟が外に出て行った途端、あの時の事が瞬の頭の中を駆け巡ってハッキリと思い出す。

黒い衣服を身にまとった銀髪の女性が『旅人』になれと賢悟と花梨と瞬自身を人質に脅し、それを瞬は受けてしまった事を。

「どうしよう、こんな事、だれにも相談できないし」

「どうもしなくていい。ただ『旅人』になってくれればな」

「・・・え？」

あり得ない返答に瞬は周りを見渡してみるがそこには誰もいない。外から聞こえた気がした瞬は窓を開けてベランダを覗いてみると、そこには夢にも記憶にも出てきたのと全く同じあの黒い女が座っていた。

「ギャアーツ！」

小さい悲鳴を上げながら慌ててドアに向かって瞬は逃げだす。だが、次の瞬間、突然現れた女がドアの前に立ち行く手を遮っていた。

「い、いつの間に！？なら、こっちに」

ベランダから素早くドアの前に立つのに驚きながらも、瞬は切り返して今度はベランダから逃げようとする。そんな彼を嘲笑っているかのように振り返った瞬間、今度は目の前に彼女が立っていた。

「お、おわっ！」

驚いた瞬はバランスを崩し、その場に腰をつきながら彼女を見上げる。

女はまるで動じる様子などなく、無表情で瞬をただジッと見ていたかと思うと右手を差し出した。

「掴まれ。そこじゃ話しにくい」

単調に言われるのが瞬を落ち着かせたのか、素直に右手を掴んだ瞬を彼女は立ち上がらせて手を放す。やっぱり悪い人ではない気がする。

もう瞬には逃げる気がなくなっているのを察した彼女はベッドへと腰掛け、隣に座るようにベッドを軽く叩いた。

殺されたり、攫われたりする訳ではないというのが分かった瞬も素直に彼女の要求に応じ、ベッドに腰かけ彼女を見る。

開いた窓から流れ込む風に銀髪が舞い、ただ座っているだけでも絵になる彼女に瞬は思わず見惚れる。

そんな彼に対して、彼女が先に口火を切った。

「何か聞きたい事があるんじゃないのか？」

「え・・・あ、そうでした。あの、洞窟の中に色々物があつたのは貴方が？」

「当然だ。あの時、そう言ったであろう」

「そうですか、それはありがとうございました。おかげで僕たちは全員助かりました」

「お前が『旅人』になるなら問題ない。これも言ったはずだ」

「・・・それでその『旅人』というのは？」

「そうだな、説明するには時間がかかる。夜12時に改めてここに来る。それまでは友人と過ごしているのがいいだろう。おそらく顔を合わせる最後の機会になる、悔いのない様にしておくんだな」

「え！？それは一体」

「言葉通りだ」

そう言うと彼女は立ち上がり、どういう意味か聞こうとした瞬を余所にベランダへと消えた様に移動する。

「ではな」

「ちよつと」

慌てて追いかけてようとした瞬だったが、ベランダに立った彼女が振り返りざまに微笑む。

その今までの雰囲気とはまるで違う、優しさを含んだ微笑みに魅了された瞬が気がつくところには誰もいなかった。

彼は一步も踏み出せないままベッドに腰を落とす。

「食い物と飲み物もらつてきたぞ・・・ってどうした？」

タイミング良く帰ってきた賢悟は両手にいくつかのパンとペットボトルのお茶を持ち、落胆している彼を見つけると心配しながら棚の上にパンとペットボトルを置く。

「いや、別に・・・」

「そうか？ならいいけど、とりあえずこれを腹にいれとけ。食べば少しは元気も出るだろう」

そのいつもと変わらず笑う親友の顔がこれで最後かと思うと無性にせつなさを感じる瞬であった。

第4話・出会い(4) (前書き)

2010/03/18 表現をいくつか修正(内容は変わらず)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今

までの流れは変えていません)

2011/10/31 修正版を更新(かなりの表現を修正、今

までの流れは変えています)

第4話：出会い（4）

口に入れるパンとお茶はまるで味がしないかのようにおいしく感じていなかったが、とにかく瞬は入れるだけ腹の中へと入れる。

今夜12時にまた来ると言った黒い女は、賢悟と顔を合わせるのもこれが最後になると言っていた。

瞬の頭の中は消える直前の彼女の言葉で一杯だった。

ベッドに腰かけた賢悟の話すことなどまるで頭の中には入っていないのも当然と言える。

「・・・おい、おい!」

「え!あ、何?」

「はあ!。お前どうしたんだ?俺が戻ってきてから心ここに在らず、って感じてまともに喋ってねえじゃねえか。会話のキャッチボールつつうのは大事なんだぞ」

「うん、そうだね・・・」

何を言おうがまるで変わらない瞬の態度にイライラ感が募っていく賢悟。

彼はふと何かを思いついたのか、すぐにベッドから立ち上がると部屋の外へと出て行った。

「いいから」

「ちょ、ちょっと」

少しして戻ってきた賢悟は傍らに誰かを連れているようで、強引に部屋へと突き飛ばすように入れる。そして、すぐさま邪魔が入らないようにドアを閉めると、彼は口笛を吹きながらその場を後にする。

「わつとつと、もう賢悟ったら・・・」

部屋の中によろけながら入ってきたその人はどうにかバランスを保つと、賢悟への不満をもらしながら瞬の方へと振り向く。

そこに立っていたのはストレートの黒髪で瞬と同じ病院着を着た見た目おとなしめである女性だった。彼女はその瞳の中に瞬を捉えると賢悟への不満などどこかに飛んでいき、跳び跳ねる様に瞬の隣に座る。

「瞬！大丈夫なの？」

「あ、うん、何とかね。花梨も怪我はなかったって聞いてたけど？」

「うん、私は全然大丈夫。これも瞬が守ってくれたから・・・かな」

口の端を上げて笑ってみせる花梨に瞬は少し照れ、頬を掻きながら目線を少し下へと落とす。

「そんな、僕は何もしてないよ」

「あの時、もし私だけだったら洞窟も見つけられなかったし、薪を探すこともできなかったし、焚火を作ることでもできなかったのよ？それでも何もしてないって？」

花梨は足をばたつかせながら遭難した時の事を思い出すように上を見上げて目を閉じる。

「それはまあ……でも……あ」

言った瞬間、瞬は言ってはいけない一言を言ったのに気づき、恐る恐る彼女の方を見てみる。

何かが湧きあがるかのような、例えるなら火山の噴火前の様な雰囲気がある花梨に瞬は慌てて彼女から離れようとする。

だが、もう手遅れだった。

腰を浮かせて立ちあがろうとし瞬だったが、彼の胸倉を掴み上げた彼女は見た目とは裏腹に彼を前後に振りながら勢いよく捲し立てる。

「でも？でもじゃない！瞬がいてよかったって言ってるんだから、素直にそう受け取りなさい！それとも何？私のお礼なんて聞きたくもないって？ふざけるんじゃないわよ！この私がお礼を言うなんて珍しいことじゃない！瞬も昔から知ってるでしょ？でしょ！私はありがとうつてお礼を言うんだから貴方は素直に受け取る、いいわね！分かった？」

昔からこうなる度に彼女は二重人格ではないかという疑問を瞬は抱き続け、いまもまた同じ疑問を思い浮かべていた。

言い訳じみた「でも」という単語が花梨の不快感を瞬時にMAXに出来るらしく、瞬から「でも」という言葉が出るたびにいつもこうだ。

ただ、それも他の人が言ったところで花梨は我慢でもしているのか、掴みかかるところか暴言の一つも吐いたことはない。

見た目通りの控え目なままだ。

瞬はただ単に怒りの吐き出し口が自分になっているのだと思ってい

る。

いつかこれは治る日が来るのだろうか。

そう考えながら、とりあえず最後に頷いておきさえすれば解決するという、彼が約10年近く前に発見された花梨の法則に基づいて彼は何度か頷いておく。

効果は上々らしく、納得した花梨は瞬の胸倉を放すとまたベッドの上に座り込む。

無意識に安堵のため息をつく瞬。

「そう、分かったならそれでいいのよ。ね？」

そんな彼に首をかしげながら微笑みかける花梨。

不意に彼女の一点の曇りもない笑顔を瞬が目にした途端、彼は己の心臓が大きく脈打ったのを感じていた。

そして、改めて深く実感していたことがある。

僕はまだ、彼女が、花梨の事が好きなのだ、と。

胸に何かがかみ上げてくるのを感じていた瞬だが、現状は彼にもどうしたらいいのか分からない状態にあった。

今の花梨の恋人は何を隠そう親友の賢悟だ。

それに対して、瞬はいまだに告白もしないままに思いを秘めたままであった。

これでいいんだ、これで……。

彼は何度も心の中で唱え、手で胸を抑えながら無理やり心を納得させる。

残っていたお茶を口の中に含むと水泡のように浮かんできた花梨への気持ち、それを心の奥底へと隠すようにお茶を一気に喉へと流し込んで心を落ち着ける。

「……本当に助かったんだよ、それに格好よかった。昔から困った時にはすぐに助けてくれるんだから……」

少だけ頬を赤らめながらポツリとつぶやいた花梨の一言は、お茶をのみこんでいる彼の耳には届いていなかった。

「え？」

「もう・・・」

「よう、どうだ？」

瞬が気付いていない事に花梨は肩を落とすと、ちょうど賢悟が戻ってきた。

そこからは3人でのいつものくだらない話や世間話が始まった。

話は尽きることなく続き、瞬も色々な事を忘れて話続けていたが、不意に飛び出た賢悟の一言が現実へと引き戻した。

「にしても、一体なんだったんだろうな、あの洞窟に置かれてた毛布とかハムとかありえねえけど1ホールのケーキとか。助けてくれたから有難いけどよ、通りがかりの猟師でもいたのか？」

「そうだね、そんな人がいたのならばぜひお礼しないとね。貴方のおかげで助かりましたってね」

聞いた途端に瞬の脳裏にあの銀髪の女がよぎり、そしてこの二人とも今日で最後かもしれないという事も思い出した。

これが・・・最後・・・？
考えるだけでも瞬の心の中を喪失感が漂い、物哀しい気分が湧きあがる。

なんとなく押し黙ってしまった彼に気付いたのか、二人は心配そうに瞬を気にかける。

「大丈夫か？お前、今日はおかしいぞ？まだ体調が悪いなら俺たちは引き上げるよ」

「そうね、無理させちゃ悪いわよね。じゃ、また明日ね、瞬」

「う、うん。・・・待ってくれ！」

二人が部屋から出ようとドアを開いた所で、彼は反射的に二人を呼び止めていた。

少しでかい声に慌てて振り返った二人は真剣な顔をした瞬に空気が重くなっていくのを感じた。

「・・・その・・・二人とも幸せにな、おやすみ」

「お、おう、おやすみ」

「うん・・・、おやすみ」

今の事を言ってしまったおうと言う衝動を抑え込み、瞬にとっての最後の言葉を捻り出した。

彼が手を軽く振りながら見送るのを後にして、賢悟は彼の行動を不思議に思いながら、花梨は少し俯き気味に自分達の部屋へと戻っていった。

二人がいなくなると瞬は倒れこむようにベッドに横になり、壁にかかった時計へ目を移す。

今の時刻は夜の11時半。

彼女が来るまでの時間は残り30分を切ろうとしていた。

二人と別れた直後は涙が浮かびそうな程、彼の胸中は切ない気持で一杯だった。

ところが、不思議な事に時間が立つにつれて恐怖や不安といった感情は薄く、逆に好奇心と興味の方が強くなっていくのを瞬は感じていた。

その原因は神秘的な美しさと大量の謎を抱えている彼女の存在。

さっきの話から1ホールのケーキまで置かれていたらしく、二人とも不思議な顔をしていたが瞬にはケーキのあった理由は分かっていた。

「ケーキも出せますか？」

彼の言った咄嗟の一言を彼女は真に受けてくれたようだ。

こんな冗談めいた事を素直に受け取ったあげく、雪山で実際に調達してみせる彼女に興味を持つなどというのは無理だろう。

「……名前も聞いてないな。どういう訳かこっちは知られてたけど」

後で聞いてみようと思いつながら、彼はベッドの上で物思いにふけりながら彼女を待った。

雪は止み、雲の隙間からこぼれる様に降り注ぐ月の光が辺りを照らした中、黒い女は病院の屋上にある給水塔の上に腰かけていた腕に巻いた時計に目をやり時間を確認する。

そして、その場に仰向けに寝て目を覆い隠すように腕を置いた。

「後30分……それで終わる」

彼女の中には時間が経つにつれ、増長し続ける不安と期待が入り混じった不思議な感情があった。

長い間、生きてきた中で久しぶりに感じるものだ。

ふと、後の事を託すべくずっと探し続けていた瞬の事を考え、瞬とのやり取りや久しぶりに笑わせてもらったことを思い出す。

「あいも変わらず愉快的な男だ、それでこそ……。できればもう少し一緒にいたかったがな」

女は一粒の涙をこぼしながらさびしそうな表情を浮かべると、空に浮かぶ月をボンヤリと眺めながら時を待った。

第5話・出会い(5)(前書き)

2010/03/18 表現をいくつか修正(内容は変わってないです)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今までの流れは変えていません)

2011/10/31 修正版を更新(かなりの表現を修正、今までの流れは変えていません)

第5話・出会い(5)

壁に掛けられた時計の長針と短針が上を向いて重なる。

ベッドに横になったままの瞬はまたベランダから彼女が来るだろうと予測し、不安と期待が入り混じる中、緊張しながら窓の外を眺めていた。

今も実は夢の中で、目が覚めてしまえば彼は安堵の息を漏らすだろう。

ただ、同時に残念な顔を浮かべているかもしれない。

いまいち、自分自身の気持ち分からない彼だったが、その背後でドアが音もなく開く。

不意に背中で人の気配を感じ取った瞬は、体を起して振り返った。

すると、やはりそこに立っていたのは黒い女だった。

普通なら驚く所だが、瞬はもう慣れたものと驚く様子もなくベッドから立ち上がる。

「約束の時間だ。ここでは話がしにくい、屋上へ行く。これを着ていけ」

彼女はマントの下に隠れた腕を動かすと、持っていた黒い生地丸められた物を瞬にほうり投げる。

瞬が慌てて受け取って広げるとそれは肩から足までを覆うコートであり、例え、雪山であっても寒さなど防いでしまいそうな程、分厚い生地で作られている。

気を使ってくれるのを嬉しく思う反面、瞬にはどうしても分からない事が会った。

雪山で見た剣の時と同じようにコートは少なくともマントの下に収まるほど小さい物ではない。

一体、どこから？

それも全て答えてくれるのかと、多少の期待を胸に今は黙ったまま彼はコートを素直に羽織った。

先に部屋から出ていた彼女の後に瞬も続き、二人は屋上へと歩いていく。

不気味なほど静まりかえる病院の廊下に二人の歩く音が響き、巡回中の看護婦にでも気付かれやしないかと瞬は冷や冷やするが何事もなく屋上へと出られた。

屋上のドアから先は一面が銀世界で、平坦な屋上の上に積もった雪には誰の足跡もない。

幸い、雪は止んでいたが、それでも瞬の顔に吹き付ける壁はとても冷たい。

白く染まった息を吐きながら女に続いて瞬も歩き、やがて屋上の真ん中にまで来ると彼女が足をとめて振り返った。

「今一度聞いておくれが、旅人になるんだな？」

「……まあ、あの時は脅迫されたからでしたけど、僕も友達も貴方に助けられたから今ここにいます。貴方の交換条件を飲みますよ」

「そうか。ならば、私が合図するまで後ろを向いている」

言われたとおりに瞬が後ろを向くと、女は歩いてマントの下から取り出した物を次々に置いていく。

まるで際限がないかのように次々と取り出された物は屋上の中央から端を埋め尽くすまで置かれ、ようやく手を止めた彼女は瞬の側まで移動し、合図を出した。

「いぞ」

合図に従い、瞬が振り向く。

彼の眼前に広がった光景、それは屋上を所せましと埋め尽くす剣や盾、銃、他には見たこともないような武器、防具が並べられている光景だった。

「え……、な、何ですかこれ。ほ、本物？」

「見て覚えろ、覚えておかないと死ぬことになる」

啞然としたまま、瞬は一番近くにあったハンドガンを手を取ってみる。

ただのドッキリでしたという事を少なからず期待していたが、持ってみた瞬間、その期待は粉々に粉碎された。

彼の手にあるそれはやはりモデルガンなどではなく、鉄で作られたズッシリと重い本物であり、持った手の熱が冷えた鉄によって失われていく。

人を殺せる道具を手を持ったと思った瞬間、瞬の背筋に冷たい何かが走る。

関わりたくないかのようにハンドガンを放して床に落とし、その場に尻もちをついて雪を掻きわけながら後ろに下がる。

「こ、こんな物を覚えてどうするっていうんです！？殺人でもやらせるつもりなんですか！」

小刻みに震える瞬が少し声をでかくして問い詰めたものの、言われた当の本人はいつもと変わらない無表情で淡々と答えた。

「『旅人』には常に危険が付いて回る。場合によっては人殺しをする事にもなるだろう。……言っただけだが、私も既に1万人近くは殺している、この手でな」

「そ、そんな・・・！貴方の仲間になるのはいいが、人殺しだけはできません！」

「・・・どうしてもか？」

「どうしてもです！」

瞬はここだけは譲れないと震えながらも彼女に主張する。

女は眉間にしわを寄せながら険しい顔をしたが、何か思うところがあつたらしく、小さく笑ったかと思うと元の顔に戻り、マントの下から新しい銃を取り出した。

「それならいい、それがお前の決めた道ならば、な。ほら、この麻酔銃ならそれには反しないだろう」

手渡しでもらった銃は普通のハンドガンと違って独特な形状をしており、興味深げに瞬は麻酔銃を見ている。

その間に女はまた次々と銃器や非殺傷武器を取り出し床に並べる。もう屋上は武器の闇取引現場と言われても否定できない程の武器に溢れていた。

仮にここに警察が現れたら問答無用で取り押さえられるのは間違いない。

「そ、そんなに、一体どこから・・・」

「後で説明する、先にここにある物を見るだけでいい。全て見るんだ」

疑問は湧く一方で一切なくならないが、とりあえず言われたとおり武器を簡単な彼女の解説付きで見て回る瞬。

すると彼女はどうやっているのか、見た銃器を次々にマント内に入れていくがまたどういうわけか溢れだす様子もない。

まさか、どこぞの青いネコ型ロボットと同じポケットでもついているんじゃないのか、と手品のように消していく彼女を見て瞬は思う。やがて全ての武器が消えると女は手近にあったベンチの上に腰かけ、瞬も隣に腰かけた。

「さて、これからは質問の時間としよう。何から聞きたい？」

「そんな急に・・・、えと、じゃあ、あのお名前は？『旅人』って言うのは名前じゃないんですよね」

「あ・・・」

言われた途端、面食らったように女は瞬の顔を見返した。

・・・そうか、この瞬はまだ・・・。

哀しげな顔を浮かべた彼女に瞬は何かまずい事を聞いたんじゃないかと取り繕おうとするものの、何を言えばいいのかも瞬には分からない。

対応に困っている瞬を見ている彼女は、彼の反応に気づいて元の顔へと戻る。

そして、もっと聞くべきことは他にあるんじゃないかと思っただが、やはりこれも彼らしいと彼女は軽く吹き出したように笑う。

「クククツ、そうかそういうえば名前は言ってなかったな。だが、残念ながら今の私は『旅人』であり、他の名前はない。呼びたければ好きに呼べばいい」

それを聞いて瞬は少しの間考え込むと思いついた呼び名があったのか、笑顔で聞いてみる。

「じゃ、姫って呼んでいいですか？なんとなく雰囲気が高貴な人って言うか、上の人って感じがするし。ね、姫」

「ひ……め？」

呼ばれた途端に女の視界はブラックアウトし、代りに彼女の脳裏に過去の記憶が呼び起こされ色々な記憶が頭の中を駆け巡る。

様々な人からそう呼ばれ続け、そしてその呼ばれ方にふさわしい生活を送る日々。

そして、最愛の人からの……。

そんな記憶が女の中を駆け巡っていた。

呼んだ当の本人はそんな事が起こっているなどつゆ知らず、固まっている彼女を不思議そうに見ていた。

手のひらを彼女の目の前で振ってみてもまるで反応がなかったため、肩を軽く叩いてみると元に戻ったのか女の頭が一度だけ大きく揺れた。

揺れた拍子に彼女の目から涙が零れ落ちる。

「だ、大丈夫ですか！？もしかして呼んじゃいけませんでしたか？」

「……す、好きに呼べばいい、そう言ったはずだ。ほ、ほら、次の質問はないのか？」

偶然でもまた姫と呼ばれる日が来るとはな。

彼女は思い出した過去の思い出に浸るように少しだけ心が上の空になる。

明らかに様子の変わった彼女を気にする瞬だが、これからの事を考えると少しでも謎を減らしておくべきだと質問を続ける。

「じゃあ、『旅人』って一体何なんです？確か、覚えてる限りだと今の生活はすべて捨てないといけないだとか」

「その通りだ。『旅人』になるというのは今の人生を全て捨てることに他ならない。そしてただ一つの使命をこなすためだけに世界中を旅する存在へとなる」

「使命？」

「そう、地球を守るといって使命だ」

「・・・一応、確認ですけど冗談無しですよね？」

いきなりスケールがでかくなりすぎたためか、瞬は啞然としながらできれば冗談であることを願う。

だが、その反面、彼女が言うからには冗談ではないのを頭では理解していた。

できれば、ただの冗談でした、とでもかわいい笑顔付きで言ってくれないものかと思う瞬だが、現実はいつても非情だ。

「もちろんだ。まさか、今までの話は全部冗談だとも思っていた訳では・・・あるまいな？」

「と、当然ですよ、は、ははっ・・・。そ、それで具体的にはどうすれば？」

乾いた笑い声を出しながら少しめまいを覚えている瞬。

そんな彼を姫は鋭いながらも冷やかな目で見ていたが、まあよろうと回答に戻る。

「地球に害をなす物の排除、つまり人体で言うなら白血球のような役割になる。今のお前では人一人止める力もあるか疑わしいが、『旅人』になる事でそのための力も地球から与えられる。まずは体力、筋力といった全体的な身体機能の強化。少なく見積もっても成人男性の20倍にはなるはずだ。そして・・・」

突然、姫は話をやめたかと思うと口元に人差指を立てて当て、瞬に黙っているように促す。

そして周囲の様子を探るように目を細め周りを見回す。

「・・・魔力が漏れたか。しょうがない、場所を移すぞ」

「え？一体どうし、うわっ！」

何が起きたのか不思議に思っている瞬を目にも止まらぬ速さで人形でも持っているかのように軽々と抱きかかえた姫は、その場から何歩か軽く歩くとその勢いで足に力を込めて空へと飛びあがる。

屋上の柵を超えるところか更に上へ上へと登っていき、ビル10階分ほどの高さにまで達したところでようやく止まる。

な、なんだっ!？

急激にかかるGで悲鳴を上げることすらできない瞬だったが、跳躍の最高点にまで達したところでGがなくなり自然と悲鳴も上がる。

「うわあああっ!？」

悲鳴を上げる中で今から落ちるのだけは理解していた瞬は半ば死を覚悟していた。

「大丈夫だ、少し黙っている」

姫の声が瞬へと届き、反射的に落ちる先から姫へと視線を移す瞬。

・・・綺麗だ

ちょうど差し込んだ月明かりに照らされる姫の横顔を見た瞬間、彼は今がどんな状態かも忘れてしまった。

自然と悲鳴も止まり、ただ、その横顔から目が離せないでいる。

姫の横顔は力強いりりしさの中に幻想的な魅力と美しさを併せ持ち、まるで彼女を照らしだす満月を背景とした一枚絵のようであった。ただ見ていたい。

純粋にそう思わされるほど見惚れてしまっていた瞬だったが、視線に気づいた彼女が現実へと引き戻す。

「しっかり掴まっておけ」

「え？・・・あ」

その言葉で我に返った瞬だったものの既に自由落下運動は始まり、既に始まり下へと落ちるスピードは増していく。

瞬の頭の中では死ぬ直前に見るといわれる走馬灯が始まるうとしていた。

「うわあああああ！し、死ぬー！ー！」

夜の闇に紛れるように空に浮かんだ2人の人影は病院の裏手にある山の中へと消えて、いや落ちて行った。

ジェットコースターではどうやってもお出ないような絶叫を伴いながら。

第6話・出会い(6)(前書き)

2010/03/23 表現をいくつか修正(内容は変わってないです)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今までの流れは変えていません)

2011/10/31 修正版を更新(かなりの表現を修正、今までの流れは変えていません)

第6話：出会い（6）

雪の積もった木の枝を何本も巻き込みながら2人は落ち続け、ちよつと走馬灯が終わつた瞬は目前に迫つてきている地表に死を覚悟する。

「し、死ぬうううっ!？」

「・・・」

対照的に彼を抱きかかえている姫は何を思っているのか、いつもと変わらぬ無表情のままだった。

死への恐怖などは微塵も感じられない。

二人の落ちる先に枝の間から地面が見えたかと思うと、次の瞬間には雪と土が混じつた粉塵が轟音を上げながら舞い上がった。

舞い上がる粉塵は3m近い高さにまで舞い散り、視界はほぼ無い。

見えはしなくてもあれだけの高さから落ちたのだ。

二人とも良くして重体か、そうでなければ死亡しているだろう。

吹き荒れる風がすぐに粉塵を吹き飛ばし、視界をクリアにした先には横たわる二人がいるはずだった。

だが、そこには何事もなかったかのように立つ黒い女の姿があった。勿論、隣には瞬も抱えられているが、二人とも怪我を追っている様子などどこにもない。

恐怖のあまり目を閉じていた瞬だったが何時まで経つても何の衝撃や痛みを感じなかったため、不思議に思いながら恐る恐る目を開けてみると目の前には落下の衝撃で窪んだ地面が広がっていた。

「え？助か・・・った？」

その窪みの中心に立っていた姫は変わらぬ無表情で何事もなかったかのように歩きだし、窪みの中から出ると固まる瞬を雪の上に落とす。

慌てて瞬は自分の体を確認してみたが、やはり掠り傷一つなく、姫の方を見ても傷どころか雪や土すら被っていない。

「・・・な、なんで無事？あんな高さから落ちたら死にますよね？」

「普通は死ぬな。普通は、な」

自分が『旅人』だから無事でした。

彼女がそう言わんとしているのを瞬は理解した。

とは言え、さっき言っていた身体機能の強化だけが衝撃のなかった理由にはならないのも同じように理解していた。

さっき言おうとしていた別の能力が関係しているのか？

瞬がそう思うのも当然であり、彼が確かめようと質問のために口を開こうとすると姫が先に言葉を発した。

「今のも与えられる能力の一つだ。ちょうどいい、私が合図したら雪玉でも作って全力で投げてみる」

そう言うと、彼女は少しだけ離れて挑発するように人差し指を曲げて合図を出す。

瞬は頭の上に疑問符を浮かべながらも、足元の雪を掴んで雪玉を作り、軽くぶつけるつもりで投げてみる。

放物線を描きながら飛んでいく雪玉は彼の狙い通りに姫の体にぶつかると思われ、黒い衣服に少しだけ跡を残すと、彼女は目を細めてあくまで無表情のままに瞬を睨みつける。

「全力で、と私は言ったはずだ。優しいのはいいが、その優しさはいずれ自分の首を絞めるぞ」

怒っているようではないが、彼女の全身や視線から感じる威圧感に瞬は慌ててもう一度雪玉を作る。

今度はさつきと違い、テレビで見た野球のオーバースローを真似て全力で彼女めがけて投げつける。

雪玉は直線でさつきと同じ場所に向けて飛んで行ったが、次に起こったのはさつきと同じではなかった。

姫の衣服に当たる直前、いきなり雪玉があらぬ方向へと飛んでいったのだ。

まるで彼女の前に見えない壁が雪玉をいなしたかのようで、木へとぶつかった雪玉は原型が残らないほど碎け散った。

「何か、が？」

見えない何かがあるのに気付いた瞬は、雪玉の代わりに手を前に出しながら進んでみる。

ちょうど雪玉が不可解な軌道をした辺り、見た目には何もないが歩いてきた瞬が押し返される様な感覚を感じた。

手で何度も確かめてみると、大理石のようになめらかでありながら硬いのか柔らかいのか分からない、彼も初めて体験した不思議な手触りを感じた。

試しに叩いてみると勢いをそのまま跳ね返されるようにはじかれてしまう。

彼が強く押してみれば合気道の達人にでも流される様に、受け流されてしまう。

間違いない目には見えないが何かが一瞬と姫の間に存在していた。

「これは……一体？」

「『旅人』の意思一つで出せる見えない障壁だ。範囲は自分を中心とした半径1mといった程度だが、この地球上でこの障壁を壊せる物は今のところない。たとえ、銃だろっが爆弾だろっが核爆発だろっが、な。余談だが、これがギリシヤ神話の『イージスの盾』のモデルとも言われているためにこれを『イージスの盾』とそのまま呼ぶ者も多い」

『イージスの盾』、それはギリシヤ神話であらゆる攻撃を防ぐといわれる最強の盾の事である。

神話に関してはあまり興味がなかったためにその事を瞬は知らない。ただ、現代の破壊の権化でもある核爆発を防ぐと言われればそれが最強の防御であるのは分かる。

どうやって見えない壁何て物を作り出せるのかは不可解なままではあるが。

「さあ、納得したならここを離れるぞ、連中はまだ追ってくるらしい」

「まだ、納得は・・・連中？一体、何なんです？」

「いずれ話す。今はここから離れるのが先だ。今度は静かにしていろ」

「へ？」

そう言うともまた瞬を抱きかかえた姫は数歩歩きだす。

またアレが来るのか！？

咄嗟に瞬は彼女の体に腕をまわしてしがみつき、また来るであろうGに備えて身構えると次の瞬間には空へと飛んでいた。

今度は落ちても大丈夫であるのが分かっているだけ、さつきよりは瞬にも余裕が出来てはいた。そのはずなのだが……。

「うわぁあつ!?!」

落ち始めると映画やCGで見るのとは違い、まるで地面へと吸い込まれていくような感覚に一度体験した瞬でもその余裕はなくなってしまう。

慌てる瞬をよそに姫は先ほどと同様に見えない障壁、『イージスの盾』を展開して地面へと無事に落ちる。

彼女は地面へと着地すると、一息つきながらうなだれる瞬を余所にもう一度空に飛びあがる。

「えっ!?!? そんな、もういつかいいいつ!?!」

地面に着いたかと安心したすぐ後にまた空へと飛び上がったため、瞬は身構える間もなくまた急激なGがかかり、意識が飛びそうになる寸前でどうにか保っていた。

早く終わってくれと願う瞬だが地面に着くとまた空に、空に飛び上がるとまた地面にという繰り返しはこの後5回も続いた。

ようやく姫の動きが止まった時には瞬の息は荒々しく、また意識も朦朧としたまま地面の上へと横たわる。

その態勢のまま、病院で食べたパンとお茶が混じった吐しゃ物を吐きだす。

「……も、も、もう……む、無理です」

「全く、この程度でそれでは先が思いやられるな。しょうがない、連中は撒けたようだし、少し休憩をとるとしよう。ちよつと洞窟が

ある」

グツタリとした瞬を姫が担ぎあげるとちょうど近くにあった洞窟の中へと移動し、毛布をどこからか取り出すと地面に敷いてその上に瞬を横たえる。

気持ちよく眠れそうなほどフカフカな毛布で横になっていたためか、瞬の顔色はすぐに良くなっていくものの感覚が麻痺しているのか体を動かかそうとするのはまだうまくできないようだ。

軟弱なのは相変わらずか。

相変わらず無表情だが彼をしつかり気にかけている様子の姫は、近くの岩に腰かけながら見下ろしており、それに気付いた瞬はそのまま喋りだす。

「毎回、あんなことしてるんですか？」

「よくある事ではない。奴らに追われるような緊急事態の時だけだ。……ああ、奴らについての説明がまだだったな。奴ら、というのは私の力、いや『旅人の力』を狙い、私を殺す事でその力を奪い取る事を目的とした組織、正式名称『白い世界』ホワイト・ワールド、通称『W2』と呼ばれる世界中に展開している組織の構成員だ」

「『イージスの盾』を狙ってるということですか？確かに核にも耐えるなら……」

「違う」

瞬の言葉を遮るように姫は首を横に振り、おもむろに右手を差し出す。

手の平を上に向けて少しだけ淡い光を放った瞬間、そこにはさつき病院で手渡されたのと同じ麻酔銃があった。

今までの常識から当然何かのトリックかと思い、瞬は彼女の右手の周りをジロジロと見てみるがまるで何も見当たらない。

「お前は知らないだろうがこの世界には魔法という物が実在する。人が内蔵している魔力を用いて火を出したり、空を飛んだり、まあおとぎ話や神話で聞くようなのと同じ事が出来る。これもその一つで、『イージスの盾』も魔法によって作られた盾だ」

「ま、魔法・・・そんな物が実在するんですか・・・。じゃあ、僕も練習すれば火が出せたり、人を治せたり出来るんですか？」

ゲームや漫画の中でしかありえないような魔法が実在すると聞いて瞬はすごく興味を持ったのか身を乗り出しそうな勢いで聞いてくる。そんな彼を尻目に彼女は手に持った麻醉銃を少しだけ力を込めて握ると、それは光の粒子になり散らばって消えていく。

「残念ながら人によって使える魔法の種類は生まれた時点で決まっている。例えば、火を出せる奴は水を出せない、人を治せる奴は空も飛べない。更に通常、魔法を使えるようになるには100年に一度の天才か、その道の厳しい修行をおこなった者だけ。唯一の例外は『旅人』になる事だ。『旅人』になったその時点から『旅人』のみが使用できる魔法が使えるようになる」

「もしかして、それが物を出し入れする秘密・・・？」

「その通りだ。正確に言えば意思一つで記憶上の物を魔力で作成し、また作成した物を自由に削除できるといった魔法だ。『リアルメモリー』と呼ばれている」

「・・・！それでさっきは武器を見て覚えさせたんですか」

姫は一度だけ頷くと話を続ける。

「作れるのはあくまで記憶にある物、そして無機物、つまり命のないものだけだ。人間、動物、植物といった命には魂があり、この力をもつてしても魂の作成だけはできない。それ以外なら、水でもお前が寝ている毛布でも飛行機でも島でも可能だ。『W2』の連中はこれを狙っているというわけだ」

それもそのはずではある。

もし、彼女の言うとおりであるなら物理の常識などを全く無視して、無尽蔵に金や宝石、油、それどころか核や水爆といった物などの製造がその場で行える。

仮にそういった野望を持った者がこの力を手にした瞬間、その時点から世界はその者の手に落ちてしまいかねない。

その事を考えた途端、瞬の体中に鳥肌が立ち、怖いと思う反面、さすが世界を守るための力だと納得するように思う。

「さて、これではお前自身を『旅人』へと変えるだけだ。心構えはいいか？」

「え？いきなり！？・・・痛いですか？」

「フツ、痛みはないから気にするな。そのまま仰向けになり、目を閉じている。全てを受け入れるように体を楽にしていればいい」

これから別世界への扉が開かれるのか・・・。
色々な感情が入り混じった複雑な心境で目を閉じる瞬。

姫は液体の入った注射器を作り出し、瞬が完全に目を閉じたのを確認した瞬間、注射器を瞬の首筋に突き刺すと中の液体を押し込む。

痛みがないと聞いていた瞬は一瞬、刺さった痛みに動じて目を開こうとしたが姫を信じて目を開かない。徐々に体内へと液体が流れ込んでいくのを瞬は感じていた。やがて、全ての液体が流れ込まれ、空になった注射器を姫は消し去った。

「よし、後は眠っている」

まるで遭難していた時のように体が重く感じ始めた瞬に、意識が段々とまどろんでいくほどの眠気が襲ってくる。

彼は眠ってはいけなさと意識をしっかりと持とうとしたものの、洪水に一本の木が流されるように抵抗空しく、やがて深い睡眠へと陥る。静かな寝息を立てる彼は完全に夢の中へと行った様だ。

眠ったのを確認した姫はその場に座り込み、最後になるであろう瞬の寝顔を見つめながら髪をかき分けるように頭をなでる。

その表情は今までとは違い、無表情ではあるものどことなく寂しそうであり、また、幸せそうだった。

「……もう少しだけこのままでいたいものだが、そうは言ってもらえないな。お前に全てを託すぞ、瞬」

身を乗り出した彼女は寝ている瞬に乗りかかると、彼の唇に自分の唇を重ねる。

無反応な彼に対し、感情の籠った彼女の目からは何筋もの涙が零れ落ち、地面へと吸い込まれていく。

瞬……後は任せたぞ。

彼女は『イージスの盾』を展開させると、見えないはずの障壁は薄い水面のようにつつすらと見えるように出現する。

球体となった障壁が徐々にその場で不規則に回転を始めると姫と瞬は少しだけ上に浮かびあがる。

姫が手を離すと瞬は球体の中心に位置するよう少しだけ上に浮かびあがり、それを確認した姫は目を閉じて意識を集中していく。すると体の全身から『リアルメモリー』を使用した時のような淡い光が溢れだし、体全体が光に包まれると今度はその光が回転し続ける障壁の中へと少しずつ同化するように消えていく。

全ての光が障壁に吸い込まれると球体の中には姫の姿はなく、いまだ深い眠りに落ちたままの瞬だけが残されていた。

いまだ睡眠からは目覚めない瞬。

彼を中心として残った球体は、球体自体が発光し始めると回転によって発生した光の渦が徐々に範囲を狭めていき、瞬の体にまとわりつくように体を包み込んでいく。

瞬の体が隠れて見えなくなると一際強い光を放ち、障壁や光がはじけ飛んで宙に浮かんだままの瞬がゆっくりとしかれたままの毛布の上に降りていった。

毛布の上に横たわった瞬は姫と同じような黒い衣服を身にまとい、黒い皮の帽子をかぶり、そして体を覆い尽くすようなマントを羽織っていた。

『旅人』：雨堂 瞬が誕生した瞬間だった。

『旅人』へと変わった瞬はその効果からか深い睡眠から抜け出し、体を起こすとぼやける視界で周りを見回す。

「……姫？」

見当たらない彼女を呼んではみたが、そこに返事をしてくれる者はだれもいなかった。

第7話・出会い(7)(前書き)

2010/03/23 表現内容を修正(話の展開も最後を少々
修正)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、今
までの流れは変えていません)

2011/11/08 表現内容を修正(話の展開も最後の方が
変わっています)

第7話：出会い（7）

ほんのりと辺りを照らす程度の月明かりの下、まだ新雪の積もる雪山の斜面を走り続ける人影があった。

常人とは思えぬスピードでありながら、まるで平地を走っているかのように木々の間を軽快に走り続ける影。

ただ、その数は1つではなかった。

高速で移動し続ける影は分身でもしたかのように1人が2人、2人が4人と増えていき、最後には約30人ほどの大所帯へと変わる。

影の団体は少し開けた所へ抜け出ると足を止めた。

そこに現れたのは雪に紛れるための白迷彩服の下に防弾チョッキや防刃アーマーを着込み、手にはサブレッサー付きP90（サブマシンガン）で武装した一団だった。

全員が辺りを警戒し、場には緊張感が漂っている。

「クリア」

「クリア」

「警戒を続ける、何かあれば知らせろ」

腕に装飾の施された腕章をつけた指揮官らしい男が命令を飛ばす。

彼自身は警戒には加わらず、何かを探すように辺りを見回して歩き回る。

「・・・ハッハー、見つけた」

ふと、彼はある一点で目を止めた。

彼が凝視する先には、木の枝が何かに巻き込まれるように不自然に

折れている木があり、彼は警戒する部下そっちのけで移動する。茂みを掻きわけて彼が進んだ先には、何本もの枝が縦に折れている中心に綺麗な半円状の大きい窪みがあった。姫が落下の際に造ったそれを見つけた男は口の端を吊りあげる。

「ふん、ここに落ちて・・・更に飛んだらしいな。巨大な魔力を感知してやってきたがどうやら大当たりらしいな」

「隊長、追いますか？」

「ああ、本部に連絡を入れておけ。まだなにかは分らんがもしかするとこれは奴かもしれん」

「奴・・・『旅人』ですか」

「まあな、これが当たりかどうかは直に見なきゃわからん。まあ、聞いている話通りなら内心戦ってみたくてしょうがないがな」

元傭兵として戦場を駆け回り続けた隊長の一言。その一言で、彼の部下として同じように戦場を渡り歩いてきた男達の頭に過去の記憶が蘇る。

常に死神が付きまといている様な神経がひり付く感覚の中で戦い続け、仲間の死を直に自分達の目で何度も見てきた。

そして、自身が怪我を追うと消耗品と同じように簡単に切り捨てられた時、『W2』に拾われたが戦う力を与えられたもののやる事は単調な仕事だった。

戦場に比べれば穏やかな毎日だが、彼らはただ燻り続け、生活に満足している者は誰一人としていなかった。

それがただの一言により、久しく感じていない高揚感、あの戦場に戻ったかのような緊張感が全員の中で貫くように駆け巡る。

彼らが伝え聞いている『旅人』が追う先にいるのなら、それは化物対自分達という図式になりかねないからだ。

「隊長！ 搜索を続行し、『旅人』であるならすぐに連絡し、監視しろとの事です」

「よし、とりあえず奴かどうかは置いて追っぞ」

隊長が手を挙げて前に進むよう合図する。

俊敏に全員が動き、あっという間に何者かが消えていった方向へと向かって広場からいなくなってしまう。

その胸中では、これから遭遇するかもしれない者に期待を膨らんでいた。

「姫？ どこですか？」

瞬は消えてしまった姫を探して洞窟の奥へと進んだ。

だが、思ったよりも洞窟に奥はなく、彼は洞窟から出てみたがどこにも姫の姿は見当たらない。

彼女が消えた事実は意識のなかった彼には分かるはずもない。

「姫……どこにいったんですか？ 僕はどうすれば……？」

自分を連れ回した姫の姿が見えないのに落胆すると、彼は一旦洞窟の中に戻ると手頃な岩に座り込む。

溜息をついた彼は自分の服装を見直して見る。

「やっぱり、『旅人』になっただけで言う事なんだろうな」

彼の記憶にあつた服は入院服だったのだが、意識が戻った時に来ていたのは姫と同じ古い旅人の恰好だった。

更に、彼は今までに感じたことのないような巨大な力、強さといったものを体中から湧きあがるのを感じていた。

何気なく転がっていた石を手に取った彼は軽く外へと投げしてみる。

すると、石はまるで弾丸のように一直線に飛んでいき、木に当たると鈍い音を上げて振動が木を揺らし、枝の上に積もっていた雪が全て下へと落ちた。

「な……」

信じられない出来事に瞬も固まる。

あまりにも予想と違う石の動きぶりに、彼は夢でも見ているのかと本当に勘違いするほどだった。

さすがにこの力で軽くでも頬を抓る気にはならなかったようだが。

これが全力ならどうなるんだろう？

自身の力を把握するため、今度は立ち上がり本気になって瞬は石を投げる。

狙いは先ほどと全く同じ場所。

ただし、その結果はまるで違っていた。

彼の手から離れた石は……消えた。

正確に言えば、常人の目には捉える事もできないスピードを出し、誰の目にも映らないだけだ。

投げたと思った次の瞬間には轟音を上げ、木に深い窪みを作りながらも石自体が粉々に砕けていた。

「す、すごい……。これが『旅人』の力の一つなのか」

元々、力などに興味が湧かない瞬でさえ、常識はずれな力に気分も高揚する。

彼の頭の中は想像を超える力を試してみたい欲求のみで埋め尽くされ、姫を探す事を一旦止め、他の力を試しにかかる瞬。意気揚々とやり始めたまではよかったが、すぐに彼は手を止めた。

「やり方が分からない・・・」

『旅人』になつたからには瞬にも魔法は使えるのだろう。ただ、今の彼にはそのやり方も何も分かりはしなかった。

教えてもらっていないのだから、当然と言えば当然だ。なれば自然と使える物だと思っていた瞬だが、姫がやっていたように頭で出したい物をイメージしながら手を出しても何も出ない。何度か試しても結果は空しいものだった。

「うーん、『リアルメモリー』よりは『イージスの盾』の方が簡単な気がするし、そっちを先にやってみよう」

彼が覚えていた限りでは、『イージスの盾』を出す時に姫は特に身振り手振りもしてはいなかった。

イメージする力があるであろう『リアルメモリー』よりもON・OFFのみで出来そうな『イージスの盾』が簡単と思えるのも最もだ。その切り替えは頭の中ですると考えた瞬は、試しに『イージスの盾』を思い浮かべる。

透明な最強の盾は出ているのかが彼には分からない。

試して見るべく、瞬は足元にあった石を手にとって軽く投げると、意思是洞窟の壁で跳ね返り瞬へと向かう。

彼のイメージではそのままどこかに飛んでいくはずだった。

「痛っ!?!」

のだが、石は瞬の頭へとぶつかって地面の上を転がった。木を揺らすほどの剛速球に近い速度で飛んでいた石だったが、体が強化されているため、瞬はそんなに痛がっている様子もない。出ない最強の盾に疑問を浮かべるだけだ。

「ん〜、どうやってたら盾が出てくるんだ？」

（馬鹿者！魔法を出す場合はキーワードが必要だ）

「そうか、呪文みたいなものか・・・って、姫！？ど、どこに？」

彼はすぐさま辺りを見回してみるが、どこにも声の主の姿は見えない。

声が聞こえたというよりは頭に声が直接入ってきたような感覚。初めて体験する感覚を瞬が不思議に思っていると、またどこからともなく彼の頭に声が届く。

（お前の中だ）

「僕の・・・中、ですか!？」

（先に言っておくが、私はもう消えたも同然な存在。正確に言うなら魂だけの存在であり、お前の体の中に留まっていることで会話だけ出来ている状態だ。今はどうにか会話できるが、それもすぐに出来なくなる）

「出来なくなる？どういいう事ですか？」

（私の魂は別の存在へと転生するための準備に入る）

「・・・よく分かりませんが、まさか、死んでしまったという事ですか？そ、そんな・・・」

（気にすることは無い、『旅人』の継承はこうして行われる。『旅人』を今以上に増やすという事はできないからな）

「気にしないなんて出来るわけないでしょう！僕が『旅人』になつたから貴方が死んでしまったという事じゃないですか！それならそうと事前に・・・」

瞬はその場に頭を抱えながら頂垂れる。

自分が『旅人』になりさえしなければと本気で後悔をしていた。

彼は命という物は重い物であり、簡単に捨てたり、ましてや奪つたりする物ではない事を常に頭の中においていた。

生物や植物にも同様の考えであるため、殺して食べる事で自身が生き延びる事は人間の罪の一つだとも考えている。

ただ、今回に限って言えば、瞬自身も気づいていない姫に対する感情が考えに強く絡みついていた。

最早、彼の中には後悔の念しかない。

（・・・事前に知っていたら優しいお前の事だ、絶対にやらなかつただろう。それでは困るんだよ）

「困る？貴方の命を引き換えにしてまで僕を『旅人』にする価値でもあるというんですか！」

（ああ、その通りだ）

「は、ははっ、残念ながら僕にそんな価値はないですよ。何しろ、

好きな人に告白の一つもできないただの気の弱い奴ですよ」

(まあ、今はそうかもしれないがお前は変わるよ、私が保証する。だから、私の事でそんなに気負うな。・・・それよりも敵がまた迫ってきているかもしれない、『イージスの盾』と『リアルメモリー』のキーワードはお前の脳に刻まれている。意識を集中してまずキーワードを引っ張り出してみろ)

まだ心の整理がつかないままである瞬。

どこか彼女に誤魔化された様な感じはぬぐえないものの、ひとまず言われたとおりに意識を集中させる。

記憶の海からサルベージを行うように深く奥へと潜っていくイメージの中、彼は今までに聞き覚えも見覚えもない単語があるのに気づいた。

どこの国の文字かもわからない様な文字はだが、不思議な事に瞬には読み方が理解できていた。

「これかな？でも、言葉に出せないよ、姫」

(言葉に出す必要はない。その言葉を頭の中で呼んでみる)

言われたとおりに瞬は頭の中でそれを唱えてみる。

すると、彼の体中が何かに包まれたような感覚があり、恐る恐る瞬が手を伸ばしてみると姫が出していたのと同じ『イージスの盾』の感触があった。

「出た・・・」

(それでいい。出す時と消す時はその単語を頭の中で唱える。その調子で『リアルメモリー』もやってみろ)

同じようにもう一度聞き覚えも見覚えもない単語を彼は見つける。単純に彼は『イージスの盾』の様に唱えてみたが、さっきとは違って特に変化は起こらなかった。

姫の時は淡い光が溢れて、手の中に物が生成されていたが手の中にも何もできてはいない。

瞬はキーワードが間違っていたのかと思ったが、よくよく考えれば何を作るべきなのかの情報を与えていないのに気づいた。

とりあえず、彼はさっき投げた石を思い描きながらキーワードを唱える。

すると手の中で淡い光が溢れだし、光が凝縮した次の瞬間にはさっき投げたのと全く同じ石が出来上がっていた。

（ほう、最初で出来るとは優秀だな。だがいいか？これを何時いかなる時でも即座にできるよう練習しておけ。もしもの時、イメージすらまとまらなかったなら何も作成することはできないのだからな。試しに色々やってみることだ。食べたい物だろうが、武器だろうがなんでも作ってみろ）

「・・・分かりました。やってみます」

彼は石を作った時と同様に頭の中でイメージを作り、キーワードを頭の中で唱える。

また淡い光が溢れだし、凝縮した光の中から今度はイチゴのショートケーキと香り高い紅茶のセットが現れ、彼が持つお盆の上に収まっていた。

（クククツ！またケーキか！アツハハハツ！）

「い、いいじゃないですか、好きなんですよ。心を落ち着けたい

時にはこれが一番なんです。これは食べても・・・？」

(大丈夫だ、心行くまで堪能するがいい。)

「そ、そうですか。では」

瞬は嬉々としてフォークを手に取り、弾力のあるスポンジケーキを押し込むように切ると、三角状に切れたケーキを突き刺したフォークで口の中へと放り込む。

生クリームのなめらかな口当たりの後に強いけれども上品な甘みが口いっぱいになり、イチゴの甘酸っぱさとスポンジの弾力を噛みしめる事でじっくりと味わう。

彼の中で最高峰に位置する地元で有名なパティシエが作ったケーキは瞬の心を解きほぐし、少しだけ憂鬱な気分を解消させていく。

「おいしい・・・。あの時食べたケーキの味、記憶の中にあった物そのままです」

(それがお前の力だ。使い方次第では誰をも喜ばせる事も出来るが、誰をも恐怖に陥れることもできる。お前なら力に溺れる心配はなさそうだが気をつける事だ。まあ、ケーキなら私がとびきりの奴を作ってやりたい所だったかな)

「姫の手作り・・・。ぜひ、食べてみたかったな」

また自分が命を奪ってしまった事を悔いてしまい、瞬は途中まで手をつけていたケーキをキーワードを唱えて淡い光へと変えて消した。そして、彼はうずくまるように小さく丸まって足の間顔をつづめながら座り、落ち込んで顔を上げようとせずのため息をつく。

(中々難しい奴だ。気にするなと言って・・・盾を出せ！)

「え？どうし」

(早く！)

突然の緊迫した姫の声に瞬は埋めていた顔を上げて『イージスの盾』をすぐに展開する。

その直後、盾の表面に目にもとまらない速さで何かが飛んできた。瞬が驚く間もなく、盾によって流される様に弾かれた何かは洞窟内の地面や壁で何度か跳ね、最後には力を失って下へと落ちる。

「な、何だ！？」

いきなりの出来事に彼は落ち着かないまま落ちたそれを見る。

彼の周りには変形した金属が幾つも転がっており、それが発射された弾丸だと気付くのはすぐだった。

もし、盾の展開がもう一息遅ければ銃弾は間違いなく瞬の頭や体を貫いていた事だろう。

その事実気づくとゾツとする寒気を瞬は感じ、身震いしながら腰を抜かしてその場に座り込む。

「な、なんですか一体！？なんで弾が！？」

(敵だ。気をつける！もうそこまで来ているぞ！)

無傷ではあるものの反射的に近くの岩陰に瞬は隠れる。

表からは瞬がいる場所は見えてもそう容易に狙えはしない。

だが、そんな事などお構いなしに無数の銃弾が瞬目がけて飛び交い、強力な弾丸の波に岩は徐々に削り取られていき、終いには砕けてし

まっ。

身動きが取れない瞬の姿は敵の前に露になった。

「わああっ！」

咄嗟に動く事が出来ない彼だったが、彼を襲う大量の銃弾は瞬の意思とは無関係に次々と弾かれていく。弾幕は途切れる事はなく続くものの瞬は怪我の一つも負ってはいない。

(しっかりしろ！お前は無傷だ！)

「え？あ・・・」

姫の言葉で我に返った瞬は1発も弾を食らっていない事で多少の余裕が生まれた。

とにかく逃げようと抜けた腰でどうにか彼は立ち上がる。

岩や雪が砕けて舞い散って粉塵立ち込める中、視界はまるでないものの彼は歩き出そうとした時だった。

「・・・音が止んだ？銃弾も？」

今までの攻撃が嘘のように止まり、辺りは元の静寂に戻ったかに思われた。

この隙にさっさと逃げよう！

方針を決めた瞬は不意に耳で何かが転がる洞窟内で反響する音を捉えた。

それもただの1個ではなく、幾つもの堅い何かが転がって瞬の方へと寄ってきているのに彼は気づく。

ちようど粉塵の切れ間から彼の足もとへと転がってきたそれに、薄

暗がりながらも丸い金属製の物体に彼は見覚えがあった。

「これは・・・まさか、さっき見たっ!?!?」

(手榴弾だな)

「し、手榴弾!?!?」

驚く彼の前に粉塵の切れ間から更に大量の手榴弾が顔を出す。

途端に転がっているその最初の1つが爆発し、続けて転がってきた手榴弾全てが爆発し、合わさった大爆発が瞬を襲う。

洞窟内を全て吹き飛ばすほどの爆発は次々と洞窟内部を破壊し、洞窟は跡形もなく崩れていく。

大量の粉塵が辺りに舞い散り、辺りはもう一度静かになった。

「やったか?」

崩れた洞窟の周りの木々から白いニット帽で顔を隠した一団が現れる。

P90を構えながらゆっくりと前進し、警戒を続けながら洞窟の跡地へと歩み寄る。

彼らの心の中ではこれだけやれば生きてはいまいと、幾度にも渡る戦場での経験から多少の気の緩みがあった。

ただ、彼らはすぐにその認識が甘く、気を締め直す事となる。

洞窟が崩れて積み上がった岩が彼らの目の前で微かに動いたかと思うと、次々に岩が弾け飛ぶように空へと飛び上がり、彼らの間に緊張が走った。

反射的にP90を構えている先で、最後の岩が飛んだかと思うとその中から『イージスの盾』に守られた瞬が現れる。

「ば、馬鹿な」

「はあはあはあ・・・、び、びっくりした。生きてる・・・？」

（当たり前だ。核爆発でも耐えるといったらるう？ほら、次はお前の番だろ。思つとおりにやってみろ。ちょうど向こうから出てきたしな）

動かない連中が見ている前で、『イージスの盾』の信じられない強度に瞬は段々と落ち着きを取り戻していく。

彼は頭の中で病院の屋上で見せてもらったハンドガンタイプの麻醉銃を頭に浮かべ、心の中でキーワードを唱える。

すると、彼の手の中に淡い光が集まり、形をなしたかと思うと手の中に麻醉銃が収まっていた。

映画などの見様見真似で、瞬は固まったままの手近な者へと狙いをつける。

「はっ!？」

狙われているのに気づいた男は逃げだそうとしたが、瞬が引き金を引く方が早い。

腰は引けてはいたものの、しっかりと狙いをつけて撃たれた麻醉針は『イージスの盾』を通り抜け、男の背中へと突き刺さる。

「ぎっ?？」

小さい痛みに逃げ続けようとした男だったが、襲いかかる睡魔に抵抗も出来ず、意識は夢の世界へと連行されていく。

前のめりになって男が倒れ、我に返った一団はP90で瞬を撃ち始めた。

連中が必死で撃ち続ける中、場違いにも瞬は初めて人を撃って当たったのに驚き、戦場のど真ん中で立ち止まっていた。

「あ、当たった」

(無風なのが幸いしたな。よし、この調子でやるんだ)

「はい！」

動きまわりながら襲いかかる男達へと彼は麻醉銃を向けて撃つ。それは言ってしまうえば無敵状態のシューティングゲームだった。敵の弾は隠れなくても撃ち落とさなくてもライフは減らず、さらにこちらはいくらでも撃ち放題であり、時間も無制限のためゆっくり狙って撃つても構わない。人を撃つ事に多少抵抗がある瞬でも、簡単に倒していく事が出来る。最後には彼の感覚が麻痺してきたのか、淡々と狙って撃つという作業をこなし、次から次へと一団の数を減らしていく。その様子を木の陰から見ている者がいた。

「つち、ここまで一方的かよ！にしても、話とは違ってまるで遊んでいるかのようにチマチマとやりやがる！くそ、見てやがれ！」

一方的に戦える隊員の数を減らされるのを目の当たりにした隊長は、手元のトランシーバーを軋むぐらいに強く握り、まだ動くことのできる部下達に指示を出す。即座に指示に対応した部下達は、その場から木を蹴って空へと飛び上がる。木から木へと高速で飛び移りながらまた銃撃を続ける。

「くっ！狙いづらい！」

飛びまわる隊員達に狙いが定まらずなかなか撃つ事が出来ない瞬。
その立ち尽くす瞬を狙って、隊長は特殊な形状のロケットランチャ
ーを構えていた。

彼は組織内で試験的に作成されたロケットランチャーの威力を信じ、
赤くぼやける様に光る弾頭を360度から銃撃を受け続け、狙いを
つけられずに立ち尽くす瞬へと向ける。

頼むぞ！奴を焼き尽くせ！

強く願いながら、彼は引き金に指をかける。

「散れ！」

彼の部下は一斉にその場から飛び去り、残った隊長はまだ反応して
いなかった。『旅人』めがけて引き金を引いた。

第8話・出会い(8)(前書き)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、
今までの流れは変えていません)

第8話・出会い(8)

ロケットランチャーから放たれた弾頭は背中を向けたままの瞬めがけて飛ぶ。

まだ反応しきれていなかった瞬へと弾頭が直撃すると特殊弾頭による大爆発を巻き起こす。

それだけにとどまらず、爆発によって発生した熱量と火炎を外に逃がすことなく形成された球体の中に完全に閉じ込め、見た目は赤く綺麗な球体だが中はおよそ生物が生きている事は不可能な地獄と化していた。

『W2』で行われている魔法の研究、それにより作成された科学と魔法とが融合した武器の試作品『スコルピオン』。

その一撃は間違いなく対人武器として一撃必殺の威力を持ち、魔法の使えない者でも使える魔法と成り立っていた。

「ハッハー！直撃だ！コイツを食らったら『旅人』でも死ん・・・

」

死を確信した隊長だったが、その高慢に笑いながら吐く言葉は目の前で起こっている事を目の当たりにした途端に途切れてしまう。

それどころか隊長は口を何度かパクパクしながら目を見開いて石像のように固まる。

なぜなら隊長の眼前には紅蓮の炎が渦巻く赤い球体が時間によって徐々に小さくなっていくと、まるで何事もなかったかのように麻醉銃を構えた瞬の姿があったからだ。

周りの地面は圧倒的な熱量によって黒こげになり、触ればいまだに火傷を負うほどの熱を持ったままだが、その中心に立つ瞬は驚いてはいるものの涼しい顔で汗の一つすらかいてはいない。

「びつくりしたー。目の前が急に真っ赤になるから」

「な、なんで死なない！？アレを食らって生きてられるはずが・
・！」

当然、『イージスの盾』の完全防御によるものだ。

だが、隊長は切り札として放った『スコルピオン』が無力だった事でもう自分たちではどうにもならない事を悟った。

（増援が来る前にここから離れる。そいつは眠らせておけ）

引き金を引いて撃ち出された麻醉針は隊長の腕に狙い通り飛んでいくが、当たる直前で感づいた隊長は下へとしゃがんで針をかわす。瞬は続けざまにしゃがんだ隊長を狙ったが、今度は針が撃たれるよりも早く左へと飛びのき、木を蹴りつけると部下がやっていたように木々の間を高速で動きまわる。

狙いがうまくつけられないうちに隊長はその場から徐々に離れていくと、その場から人の気配は完全になくなってしまった。

（逃したか。まあいい、急いでここを離れる。私がやったようにな）

頷いた瞬は2、3歩歩きだし、それだけの勢いで地面に足を埋めるのかと思うほど強く踏み込み、力を全て足へと集中させるとその場から空高く跳び上がる。

何度か姫に抱えられて体験したのとは違って自分の力で飛んだのが良かったのか、はたまた着地が必ず無事であるという安心が良かったのか、瞬はバイクで風の中を突き抜ける様にとばすのと似た爽快感と共に気持ち良さを感じていた。

「高い・・・けど、気持ちいい」

(それはよかったが、また後にしろ。前を見るんだ)

瞬は促されて前を見てみると、闇夜に隠れて良くは見えないが規則的な機械音を伴った何かがこつちへと近づいてきているのに気づく。意識的に遠くを見ようとすると視力も強化されているらしく瞬が今まで見えなかった距離もハッキリと見える。

その視力は近づいてくるのが完全武装されたヘリ5機からなる編隊であり、一番前にいるヘリの操縦者が男である事まで分かる程の常識はずれな視力だった。

その編隊の射程に入ったのか、ヘリが横一列に展開すると瞬に向かってバルカン砲による一斉砲火を行いながら、次々に両翼に備え付けられたミサイルを撃つてくる。

次から次へと攻撃が続けられるが全てを『イージスの盾』で防ぎ、落下し始めた瞬は姫の指示で閃光手榴弾を作り出し、教えられながらピンを抜いて力強く投げる。

閃光手榴弾は上空の強風など物ともせず編隊目がけて弾丸のように飛び、一番前にいるヘリにぶつかりそうな所で破裂した。

すると、眩みそうなほどの光と爆音のような大音量が発生し、ヘリの搭乗者を根こそぎ巻きこんで視界を少しの間とはいえ奪う。

その内に瞬は森の中へと着地すると今度はジャンプせずに森の中を隠れながら疾走する。

(よし、このまま走り抜けて山を越えろ。見失えば奴らは撤退していく)

瞬は次から次へと迫ってくるように立つ木をかわしながら山の斜面を一気に駆け抜けて山の頂上に到達する。

そこで一度立ち止まって後ろに振り返ってみたが編隊はまだ瞬を見

失っているのか反対側を向いたままであり、それ以外の追手の姿も見えない。

それを確認した瞬は山の向こう側へと降り、そのまま麓を目指してまたものすごいスピードで降りていく。

あっという間に麓にたどり着くとそこは今は何も育っていない畑や田んぼが広がり、その間に何軒かの民家が建つほどの小さい集落だった。

深夜だけあってどの民家も灯りもついておらず、また出歩く者はだれ一人としていない。

瞬は気付かれないように出来るだけ静かでありながらすばやく集落の中を通る田んぼ道を走り抜ける。

そして、また別の山を登って距離を取ると常識はずれな『旅人』の視力でもヘリの姿は見えなくなっていた。

（いいぞ、これで奴らは撒いた。だが奴らはしつこい。このまま遠くに走れ）

その言葉に従って瞬は山の上から飛び降りてその姿を消す。

追手が痕跡に気づいて集落にたどり着いたのは瞬が通り過ぎてから20分ほど後の事であり、瞬がどちらに行ったのかすら分からずその場で途方に暮れるしかなかった。

白い軍服のような服を身に付けた者達が何台も設置されたコンピュータの画面へと向かい、画面上に表示される情報を次々に処理していき、有用な物だけを抽出する。

その結果を随時、彼らを統括している上司へと転送し、またその上司も有用だと判断すると上へと報告を行う。

そうして複数の部署から上に届いた報告というのはこれ以上の『旅人』捜索は発見できる可能性は限りなく低いという報告であった。

「逃がしたか・・・」

ある一室にて届いた情報に頭痛を覚えながら撤退の指示を部下へ出すと、男は本革張りの高級椅子に深く身を沈める。

初老で白髪交じりの髪をした男はいまだに慣れないパソコン操作に疲れたのか、目頭を人差指と親指でギュツと抑えつけながら深いため息をつく。

「なんてことだ、せつかく私の管轄に現れたというのに先走った奴らのせいで失敗とはな。・・・くそ、この失態をどう報告するというんだ」

彼の頭の中に『W2』の日本支部長である彼よりも更に上としてアジア一円を統括している男が浮かぶ。

奴にかかれればこの失態に対する制裁が容赦なく行われる事を知っているため、次第に男の顔が青ざめていく。

降格されるだけならまだしも場合によっては死を持って責任を取るといふ事も過去にあったため、青ざめるだけでなく体中が恐怖で小刻みに震え始める。

こうしている場合ではないと彼は失敗を帳消しにするべく再びパソコンに向かい、日本から国外へと逃亡させぬよう非常線を張るよう指示を出す。

更には何時でも出撃できるよう彼直属の特殊兵装部隊にも待機しておくよう指示を入れておく。

彼の中ではこれ以上ないという位までに人事を尽くし、後は天命を待つとばかりに目を閉じて祈るように『旅人』の発見報告を待った。

追手から逃れた瞬はさびれた港町の郊外まで逃げ切り、誰もいない無人の小屋の中へと身を隠していた。

（ここまでくれば大丈夫だろう。もうすぐで夜が明ける、それまでここに居ることだ。ん、どうかしたか？）

埃の積もった木箱の上に腰かけた瞬は、信じられないかのように自分の体を見返しながら所々を触ってみたり揉んでみたりしている。

「すごい、ここまで走りっぱなしだったのにまるで疲れがない。息すら上がっていないなんて・・・」

（言っただろう、強化されると。仮にお前がオリンピックにでも出たならば、以後、破られる事のない新記録を全種目で打ち立てる事も可能だろうな）

「そ、そうですか、それはすごいな・・・。それで今後はどうしたらいいんですか？地球を守るなんて具体的にはどうしたらいいか・・・」

（お前の好きにしていればいい。ただし、地球への脅威が発生した場合、お前の魔力を通じて地球からの命令が入る。何らかの脅威を取り除くのがお前のやるべきことだ。言っておくがそれが何を差し置いても優先するべきことであり、もしそれに背いた場合は即刻削除、つまりは死に至る）

「死・・・ですか。それは怖いな」

(安心しろ。そんな脅威など早々に発生はしない。・・・それよりもお前にお願ひしたい事がある)

突然、姫の雰囲気が変わったかのように今までの説明口調とは打って変わり、低く押し殺したような声で話し始める。

その変わり様に瞬も今までとは違った緊張感を持ち、周りの空気が重くなつていくように感じていた。

「お願い、ですか。命令ではなくて？」

(そうだ、お願いだ。お前に断られたなら私も諦めるしかない、あくまで私個人のお願ひだ)

「・・・内容は？」

言うのを躊躇しているのか、少しの間、姫からは言葉が発せられなかったが、瞬はただ黙って姫の返事を待つ。そして、姫がようやく話し始めた。

(・・・『W2』を壊滅させてくれ)

一瞬、驚いた顔を見せた瞬だが少しだけ考えるとすぐに返事を答えた。

「分かりました、やります。」

(・・・理由を・・・聞かないのか?)

そう言われて瞬は少しだけ笑いながら答える。

「貴方がそこまで言うのに時間がかかったなら理由は聞いちゃいけないかなって。それに僕に力を渡す前に貴方なら一人でそれもできたのにやらなかった、ならそれ相応の理由があるのも確実、と考
えましてね」

（そうか、それなら何も言わない。理由を聞かないでくれて、その・・・ありがとう）

感情の入った心の底からの感謝に少しだけ頬を赤くした瞬は少し照れくさそうに頬をかく。

「べ、別に命の恩人の頼みですからね。聞かない訳には・・・」

（そ、そうか、ならこれで貸し借りなしだな。頼んだぞ、『旅人』
いや瞬）

「お任せあれ、姫」

（フフッ！それでは、そろそろ私は消えるとするが、忘れるな。私は何時でもお前と一緒にだ。では、さらばだ！）

そう言うと姫の言葉は途切れ、また瞬の体の中に感じていた暖かいような感覚が少しなくなったように感じる。

姫がいなくなってしまうた事を寂しく思いながらもお願いを達成するべく心を奮い立たせ、普段は温厚な彼の優しい顔つきを多少の邪魔など物ともしないような強い者への顔つきに変貌させる。

「やってみるよ、姫・・・」

聞こえているかは分からないが小さく呟くと朝を待つべく、目を閉じて眠りへと落ちていった。

第9話：旅立ち（1）（前書き）

2010/04/16 修正版を更新（いくつか表現を修正、大都市の名称を固定）

第9話：旅立ち（1）

ある場所に秘密裏に建造された基地。

その内部の薄暗い指令室では中央に設置されたメインモニターに『旅人』との一戦の様子が映し出されていた。

『旅人』と戦った部隊員、それとヘリからの映像で構成された部分部分が一本の流れのように映し出される。

一方的な戦いではあるがそれは『旅人』と戦う時はいつものことであるため、映像を見ている者、つまり『W2』の構成員たちはこれといった反応がない。

映像が終わると一番奥で椅子に腰かけながら見ていた司令官が腰を上げ、モニターの前に立つと『旅人』の顔がアップで映し出される。

「コイツは私達の間で伝わっている現在のどの『旅人』とも合致しない。だが、『旅人』は知つての通り、5名より増える事はない。つまり、コイツが新しく『旅人』を継承した者ということだ。誰から継承されたかはまだ不明だが、これは大きなチャンスだ」

「チャンス……といいますと？」

近くで聞いていた一人が聞いてくると司令官は腕を上げる。

それを合図に後ろの画面が切り替わると瞬が麻醉銃で撃ち続ける画面が映し出される。

「今存在する『旅人』というのは、どれを取っても我々を平気で皆殺しにするような奴らばかりだ。だが、コイツは違う。この撃っている銃は麻醉銃であり、交戦した者はだれ一人として死亡、もしくは怪我を負つてはいない。そして……」

司令官がまた合図を出すと木々の間を高速で動き回る隊員達に翻弄され、まるで狙いが定まらない様子の瞬が映し出される。

「『旅人』の力を使い慣れているならば、ここで隊員達は全員眠らされていたが実際は誰一人食らってはいない。つまり、コイツは殺しも知らないただの一般人が『旅人』になっただけのいうなれば、赤ん坊だ。化け物級の力を持ってはいるが使い方も覚悟もない」

「今が倒すには一番の機会という事ですか」

「そういう事だ。分かったなら奴の位置の特定、この顔写真のデータベース登録、そしてコイツの素性を洗い」

司令官の一声に映像を見ていた者達はその場から散っていき、自分の持ち場に戻るとものすごい勢いで仕事をこなしていく。念願の日は近いとばかりに皆が一心不乱に『旅人』を、瞬を殺す事に一丸となり、その熱気は基地の中全体に渦巻いていった。

夜が明けて太陽からの日差しが小屋の中に差し込んでくると瞬は目を覚ました。

後を引くような眠気も感じることなく、またあれだけ派手に動きまわったのに疲れは全くなかった。

辺りはまだそんなに明るくはなく、まだ朝の6〜7時といった感じだが近くを走る車道に何台もの車の走る音が瞬の耳にも届く。

「さてと、とりあえず・・・どうしよう?」

よくよく考えれば特に考えもなくお願いを引き受けたものの、『W2』について瞬の知っている事と言えば『旅人』の力を狙っているという位しか知らない。

安易に壊滅させると言った所で、昨日のような追手を倒すだけじゃ到底それは難しい。

やはりその大元、要するに『W2』の本部、もしくは指導者を倒さない事には何時まで経ってもトカゲのしっぱ切りでしかない。

「・・・本部の場所とか位、聞いておけばよかったかな」

いきなり出鼻をくじかれた感が否めない瞬だった。

落ち込むかと思われたがそのうち見つかるだろうとあっさりと思考を切り替え、まずは情報収集として近くの港町に行こうと決める。

どんな場合でもポジティブに考えるのは瞬の性格だった。

小屋を出ようとしたりとところでドアを押した自分の腕が目に入ると、瞬はドアから手を離しその場に立って自分の姿を見返してみる。

まるで時代に取り残されたかのような中世の服装の上に全身黒づくめというどこに行っても異質さが際立つ組み合わせ。

さすがにこのまま町に行けば変に目立ってしまうのは間違いない。

当然、瞬もそう考えたため、服を変える事が出来ないかと『リアルメモリー』を使用して記憶の中にある日常の服を生成してみる。

そして体に付けたマントから外そうとするが手で掴んだ所で変な違和感を瞬は感じていた。

マントを手で引っ張ってみると、まるで皮膚に密着でもしているように一緒に伸びる。

同じように服もズボンもマントも帽子さえ全く取れる様子はない。

「もしかして、一生このままとか？・・・それは困るな」

これからの事が不安になっていく瞬だが、ふとこれも『旅人』にな

つた時に自然と身に着けていたのを思い出す。
そこからこの服自体も魔力で作成されているのではないかと考える。
まだ魔力と言われてもピンとはこないものの試しに目を閉じて、意識を自分の体に集中させてみる。
すると衣服が少しだけ淡く光り始め、続けて今の衣服がいつも来ていたラフな格好に変わるのをイメージする。
やがて光が治まっていくと腕や胸がやたらとスッキリした感覚に瞬は成功を確信した。

「やった、出来・・・た？」

だが目を開けた時、上の服の部分だけがいつも来ているようなＴシャツに変わったものの、帽子やズボンなどは今までと同じ『旅人』のままであった。

Ｔシャツだけ変わったおかげで異質さは減ったものの、逆にとてもシユールな格好になってしまった。
慌ててもう一度やり直したものの、今度はズボンだけがいつものジーンズだったりと、町の中を歩いていても目立たないような服装になったのは30回近く試した後だった。

「要練習・・・かな」

中々苦労したのに苦笑しながらようやく小屋の外へ出ると、既に日はハッキリ見えるほどにまで高くありお昼に近い時間帯であった。
町はもう見えているくらい近いいため、瞬は車道まで出た所で空まで飛んだり、常識はずれなスピードで走ったりせすにのんびり歩いて町の中に入る。

町の中は港町だけあり、漁を行っている最中なのか人気はあまりなく、特に目をつけられそうな事はなさそうだった。

「調べるにも、『W2』なんて誰も知らないだろうしな……どこかにネット環境でもあれば……」

どこかにネットカフェでもないものかと辺りを見回す。だがざっと見渡した限り、そんな物はありません。

瞬はしょうがない、と別の町に行こうと足を止めて振り返ろうとする。

するとそこに一人の老人が通りかかったため、瞬は念のために老人を捕まえて質問をし出した。

「すみません、このあたりにインターネットが使える場所ってありますか？」

「あー、いったーねつと？……兄ちゃん、都会じゃどうかしらんが、この町じゃそんなもん……いや確か、最近図書館に入ったとか町長の奴が言うってたかの」

「図書館ですか。それはどこに？」

「ほれ、あの丘の上にあるのがそうじゃ。この道をまっすぐいってりゃすぐに着く」

指差された方向には確かに丘の上に立つ建物があり、瞬は老人にお礼を言うと丘の上の図書館目指してその場を後にする。

瞬が去った後で老人は入れ違いに地元の駐在が自転車に乗って来たのに出くわした。

特に何事もない平和な毎日を過ごしているため、いつもと変わらない日常会話をする。

ただ、その日だけはいつもと違い、会話が終わるころに駐在は思い出したように内ポケットから折りたたんだ紙切れを取り出す。

そして、不思議に見ている老人の前に伸ばした紙を突き出すように見せた。

「コイツは凶暴な殺人犯で何人も殺してるらしいんだが、まだ逃亡中でこの近くに潜伏してるらしいんだ。まあ、こんな所にはこんと思うが見かけたら連絡をしてくれるか？」

「はあ、優しそうな顔して恐ろしい奴だな・・・ん？これはさつき通った奴と顔が一緒じゃな」

「そ、それは本当か！い、い、一体どこに行った？」

警告だけして特に何も起きず終わるといついつものパターンではない。

突然降って湧いたかのような一大事に警官は腰を抜かしそうになりながら老人に訪ねる。

「ここらじゃ見かけねえ顔だったし、ついさっきだったからよく覚えとるよ。間違いない。いったーねつとやらを使いたいって言うつたから図書館を教えてやった」

「と、図書館だな！分かった！危ないかもしれねえから家に帰ってる！いいな？」

「ああ、分かったよ。素直に家に帰るとる」

それだけ確認した駐在は支給されている無線機で地元の警察署に連絡を取りながら、図書館に向けて慌てて後を追うようにその場から居なくなってしまった。

残された老人はしょうがないと来た道を戻りながら、家に戻り始め

る。

「・・・にしても、あれが殺人犯だなんて、信じられねえな。まあ、そういう世の中だったことかね。恐ろしい世の中になったもんだ」

図書館にたどり着いた瞬は少しくたびれたようなドアを押しこんで中へと入る。

そこは小さいながらもいくつかの本棚が並び、奥の方にパソコンが2台並んでいた。

休みを利用して訪れたであろう親子が二組と受付の女性がいたが、誰もパソコンを使おうとは思わないのかパソコンの電源は入ってすらいなかった。

瞬は受付のカウンターまで移動し、受付の女性にパソコンの使用許可をもらおうと電源を入れながら椅子に腰かける。

よほどパソコンに向かうのが珍しいらしく、その場にいた全員から注目の的となった瞬。

だが起動待ちをしている間は特に何をするわけでもなく、すぐに注目はなくなる。

そのうちパソコンが起動し終わると瞬は慣れた手つきでインターネットを使い、単純に『W2』で検索を行ってみる。

出てきたのはW2がアドレスに含まれるページや何かの略称の途中で含まれていたりするページばかりで、『W2』を特定するようなページは一つも見当たらなかった。

「そうだ、確か・・・」

背伸びをしていると『W2』の正式名称である『白い世界』を思い出し、それで検索をかけてみると一つの気になるページがあった。世界地図の地表部分だけがまるで雪を被ったかのように白く表示され、争いのない世界を実現させようとしている組織であると説明文が載せられている。

様々な企業からの援助を受け、世界中の紛争地帯に物資援助や人材派遣を行っているらしく、活動の履歴がずっと過去から続いている。更には世界各地に支部があり、総力を挙げて争いをなくすよう努力していると外国人達と日本人が握手をしている写真入りでアピールされている。

「これは違うかな、でも他には思い当たらないし・・・」

他の手がかりも思い当たらないため、まずはここに行ってみるべきだと日本支部の位置の地図を出した。

そしてそれをプリントできないか受付の人に尋ねようと席を立った所でふと瞬は異変に気付いた。

いつの間にか親子だけならまだしも受付の人までいなくなっており、図書館の中には瞬だけが取り残されていた。

瞬はこういう状況と全く同じ状況を映画で見た事があった。

その後の続きを頭に浮かべると慌てて頭の中にデジカメを思い浮かべて手の中に作り出すとパソコン画面を写し取る。

直後に映画と同じように窓ガラスを割りながら手榴弾に形状の似たスモークグレネードが投げ込まれる。

スモークグレネードは跳ね返りながら床を転がると煙が噴出され、すぐに辺り一帯に煙が立ち込める。

「や、やっぱりですか！」

慌てふためきながらすぐさま瞬は盾を展開し、煙が入ってくるのを

防ぐ。

続けて麻醉銃と閃光手榴弾を生成しておき、間違いなく突入してくるであろう敵を待ち構える。

すると、窓ガラスから飛び込むようにまたは玄関、裏口からと続々と黒一色の装備で身を固めた特殊部隊がなだれ込むように入ってきた。

あっという間に瞬を包囲すると次々に銃の先を瞬へと向ける特殊部隊。

ただ、昨日とは違っていきなり撃ってくるような事はなく、ただ銃を突きつけながら微動だにしない。

反射的に手を上げてしまった瞬だったが、警察のマークが取り囲む人達の腕につけられているのに気づき戸惑う。

「ええと、警察？なんで警察が僕に？」

「武器を捨てて頭を頭の上に乗せる！おとなしくしていれば危害は加えない！」

「べ、別に捕まるようなことは何も」

「うるさい！早く武器を捨てるんだ！」

まるで話を通じる相手ではない。

瞬は話をする事を諦めると麻醉銃だけ床に落とし、閃光手榴弾のピンに手をかける。

特殊部隊は騒然とし、一人が手榴弾を落とすように腕を狙って一発撃った。

だが見えない盾に阻まれた弾丸は音もなく違う方向へと飛んでいく。狙いははずしてしまったのかともう一度撃つものの今度もまた銃弾は見当はずれな方向へと強制的に飛んでいく。

今にも抜かれそうな手榴弾のピンに慌てて他の者も次々と銃を撃つ。

まるで弾は当たることなく全てが弾かれていき、誰が言うでもなく全員が瞬に向かって連射していた。

だがその努力も虚しく、やはり彼らから見ればまるで弾が当たりたかないとでもいうかのように異常なほどに逸れて外れていく。

その内にピンが完全に抜けると瞬は放り投げるように部隊の真ん中めがけて投げる。

盾を構えた特殊部隊員が爆発を押さえこむように前へと出ると同時に手榴弾が空中で破裂すると、爆発ではなく爆発音と閃光だけが辺りに広がる。

特殊部隊がそれに目が眩んだ隙に瞬はすかさず窓を割りながら外へと飛び出す。

どうしてこうなったのか訳も分からず外に出るとそこには丘を埋め尽くすほどのパトカーが図書館を包囲するように停まっていた。

そのパトカーに身を隠しながら警官が周りを包囲している後ろにたくさんのやじ馬が来ていた。

瞬はなんとなくやってはいけない事をやってしまったような感覚に苛まれながら立っていると、そういった場面でよく見るスピーカーで話をする警官が出てきた。

「おとなしく投降しろ！これ以上逃げられないぞ！」

「そう言われても・・・」

困ったように頬を人差し指で掻きながら人前で余力を使うわけにもいかないかと、両手を腹のあたりで服の下に入れる。

何をやる気なのか分からない警官を尻目に、瞬はさつき見たスモークグレネードをピンの抜けた状態で大量に生成すると服の中から出す勢いでそこから中に放り投げる。

次々に現れる黒煙が瞬の姿を隠し、更に警官達も煙の中に巻き込まれる。

すると瞬はすかさず黒煙の中を走り抜け、黒煙を抜けるとその場から離れる。

その後を黒煙に咳き込みながら必死に追いかける警官達にさらに追加と、瞬は逃げながら次々にスモークグレネードを後ろにばら撒く。そして、完全に瞬を捉えられないほどの黒煙が立ち込めた所でスピードを上げて一気に逃げ切る。

「ごめんなさい！悪いことしたかもしれないけど、こっちも止まれないんだ。」

進路をデジカメに記録した『白い世界』日本支部に決める。

野性児のように森や山の中を駆け巡りながら最短距離を取って支部のある大都市『神灰市^{かみはいし}』を目指した。

第9話：旅立ち（1）（後書き）

前回で出会いの方は終わりとなります。

ようやく投稿し始めて一区切りついた感じですが、読み返してみると説明口調がとにかく多い気がします。

しょうがないと言えばしょうがないんですが、もう少し自然にできれば……。

ここまで読んでいただいている方がおられるなら、ありがとうございます。

趣味として自己満足な部分が多いですが、これからも読んでいただけるとうれしいです。（――）

第10話：旅立ち(2) (前書き)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、大都市の名称を固定)

第10話：旅立ち（2）

『W2』の指令室の中で何人もの人間が所狭しと動き回れる。

その中央では司令官を中心とし、この基地の上級幹部の面々が椅子に腰かけ、神妙な表情を浮かべていた。

警察が先に『旅人』を発見した時点で接点のある上層部から『W2』に情報が流れるより早く、警察内部で情報が流れると『W2』が動くより先に地方の特殊部隊が動いてしまった。

当然、何の装備も知識もない警察には『旅人』への対処のしようがない。

軽々と『旅人』はその場から立ち去ってしまったが、『旅人』の特徴と逃げた方角などの情報はとても有用な情報であった。

その情報を元に再び行方をくまらました瞬間の行方を検討しはじめる。

「で？奴はどっちに向かったと？」

「情報によればこの国道を南下していったそうだ。昨日発見された『旅人』で間違いないようだな」

デスク上に表示された広域MAPを遭遇した場所から各々が下へ下へと目線が下がっていく。

行き着いたのは人口も規模もかなり大きく、郊外には空港まである大都市『神灰市^{かみはいし}』であった。

「・・・分かんない、なぜ人の目や監視カメラがどこでもつきまとう大都市へ向かう？」

「何か目的があるのでは？」

一同が次々に意見を出すものの全てがただの推測であり、裏付けを行つものが何一つないためどれもが説得力に欠けていた。結局、一番可能性としては高そうな空港の飛行機に紛れこんで遠くへ逃げる事を目的と決め、『W2』の構成員達に空港周辺、更に周辺道路への配置を通達するよう決める。司令官が指示を出そうとしたところで、デスク上に飛び込んできた新情報が表示され、司令官は手を止めてその情報を読んでみる。

「これは・・・、どうやら空港が目的ではないようだな」

新しく表示された情報を読んだ途端、『旅人』の狙いを察した司令官はニヤリと笑つと即座に指示を出す。その情報とは突入の直前までパソコン上で表示されていたのが『白い世界』のHPであり、更にその日本支部の住所を調べていたという図書館からのアクセスログであった。

森の中を抜けて切り立った崖の上に出た瞬間の視界には目指していた大都市『神灰市』が広がっていた。

住宅からビルまでの建物が数え切れないほど建つ間を車や電車が常に流れ続ける。

今まで落ち着いた地方の街中で育ってきた瞬からすれば見たこともないような巨大な街に心が躍る。

まるでお祭りに初めて行くような子供のように自然と期待が高まり、目が輝き始める。

すぐ前には警察に包囲された状態から脱出するという映画のような事やつてのけたにも関わらず、彼の心はすでに都市への期待感で一杯であった。

「大きいし、広い。色々面白そうなものがありそうだなー。おいしいケーキ屋もたくさんありそ・・・じゃなかった、『白い世界』を目指さない」と

すっかり目的を忘れていたのを思い出し、用事が終わってからならよってもいいかなとすっかり旅気分で気持ちを切り替える。

崖の上から軽く跳んで飛び降り、下の森の中へと突っ込む所で盾を展開する。

地面へたどり着くとそのまま森を抜けて都市へ出ようとしたが、後一步で出るという所でふと足が止まる。

「うーん、なんで警察に追われるかなんてわからないけど、今捕まるわけにもいかないし・・・。そうだ！」

服を変えた要領で意識を集中させると服の一部が帽子へと変形し、更に度の入っていない眼鏡を生成してかける。

そう、彼が考え付いたのは変装であった。

「いける・・・かな？まあ、いくしかないからね」

多少不安は残るものの、特に深くは考えずに森を抜けてとりあえず近くにあった駅へと立ち寄った。

たまたま駅の入口に立っていた駅員を瞬は見つけると住所から行き方を尋ねる。

「えーと、ああ、『白い世界』ですか。それならここから歩いて5分位でつきますよ」

「『白い世界』を知っているんですか？」

「ええ、もちろん。こちら辺で知らない人はいないですよ。募金のイベントとして大規模なバザーや有名なミュージシャンを呼んでのライブをやってますからね。楽しんで払ったお金が世界平和に使われるものですから、地元の人たちは一度はイベントに参加しているはずですよ」

快く教えてくれた駅員にお礼を言って言われたとおり歩き始めた。だが、駅員の話がずっと頭の中でひっかかり行っても意味がないかもしれないとさえ考え始める。

教えてもらった内容からは「旅人」の力を狙っている「W2」とはますます結びつかず、瞬の胸の中ではモヤモヤとしたわだかまりのようなものさえ感じられる。

そんな引け目を感じているうちに目的地へと到着したらしい。そこそこの広さを持つ広場の奥に教会をイメージしたような神々しさを放つ中世風の建物があつた。

白いレンガが敷き詰められた広場へと入ってみると、掃除をしている職員らしき人が瞬に気づき、作業をやめて寄ってくる。

「こんにちは。何かご用でしょうか？」

「え？あー・・・、いや、実はここが世界平和のために募金活動をしているって聞いたんで募金を、と」

「そうですか、それはありがとうございます。募金はその建物で行っていますので、さあ、どうぞついてきて下さい」

ニッコリと微笑みながら奥の建物に行くよう腕で促され、先を歩きだした職員の後について建物の中へと入っていく。

重厚な木の扉を押し開けて中へと入ると、そこはでかいホールとな

っているだけで特に何もなかった。

ただ、天井には神様とその周りを飛ぶ天使が表されたステンドグラスがはめ込まれており、ちょうど真上にある太陽からの光で絵が抜け出たように床の上に投影されていた。

「へえ、これはすごい。まるで絵が床の上に描かれているみたいだ」

「ええ、来ていただいた人に喜んでもらえるようにと後から追加で造ったものなんです。造られてから色々な方のご好評を頂いております」

「なるほど。確かにこれは芸術品の域ですね。とてもきれいですよ」

褒めてもらったのを笑顔で返した職員は近くの部屋へと誘導し、瞬はテーブルを挟んで対面になるよう置かれた2つのソファアがある来客用らしい部屋へと通される。

ソファアの片方に座って待つように言われ瞬がソファアへと腰かけると、職員はさらに奥にある給仕室へ入り手馴れた手つきで紅茶を入れる。

熱い紅茶をテーブルの上に2つ置き、どうぞと勧められると瞬はお礼を言いながら紅茶を一口飲んで香りと味を楽しみながら一息つく。職員もそれに合わせて紅茶を一口飲むと、ティーカップを置いて話を始めた。

「それでは寄付という事でしたが・・・」

「あ、えっと、そんな大した金額じゃないんですけど。こんな待遇をしてもらって悪いんですが・・・」

瞬は手を後ろに回すとなんとなく後ろめたい感じで1万円を1枚だけ作り出し、そのままテーブルの上へと置く。

「いえ、貴方の寄付してくださる金額は問題ではないですよ。大事なのは寄付をしていただくお気持ちです。仮に貴方がいくら寄付してくれても私達の対応は変わりません。ですから、お気になさらないでください」

職員はまた笑顔を見せると瞬は安心したように同じく笑顔を浮かべ、また紅茶に口をつける。

その後、『白い世界』についての簡単な説明を行われたものの特におかしい点はなく、また職員はとても嘘をついているようには見えない。

ここは関係ないと瞬は決めつけると適当な所で帰る事を切り出し、席を立った。

ドアノブに手をかけようとすると、勝手にドアが開き、瞬の目の前に白いスーツを着た40代半ばの紳士的な印象を受ける男が立っていた。

「あつと、失礼」

「ああ、所長。こちらはご寄付いただいた方なんですよ。今お帰りになる事です」

「そうですか。西山君、後は私が対応するから作業に戻ってくれ」

そう言われ、西山は瞬に向かって会釈をするとすれ違つように出ていき、代わりに所長だけが残った。

所長はそのままドアの傍から身を引くと瞬が続けて外に出ると、所

長はさっきの西山と同様ににこやかに話しかけてきた。だが、不思議と瞬にはこの所長が気に食わないのか、嘘のような笑顔がひっかかるのか、どこことなく嫌な感じがしていた。

「寄付頂いてありがとうございます。このお金は世界平和のために有効に使わせていただきます」

「そ、そうですか、世界平和のために募金しているなんて実には有意義ですし、また募金しますよ」

「そう言っていたけると助かります。今後ともよろしく願います」

スツと出された手を瞬は力を入れ過ぎに気をつけながら握った瞬間、親指に鋭い痛みが走り、反射的に手を離れた。

「痛っ！は、針？」

手を見てみると小さい傷から血が滲みだし、周りが赤く腫れあがり始めると焼ける様な痛みが走る。

更には手が痺れるような感覚で自由に動かないようになる。それは体中に広がっていき、足も徐々にふらついてくる。

それを見た所長は今までと同じように笑っていたかと思うと、瞬の体を見えないほどの速さで蹴りつけてステンドグラスの下にまで吹き飛ばす。

「さすが『旅人』。常人なら確実に死ぬ強化された蹴りでも吹き飛ばされるだけとはね。だが、これで終わりだ」

直後にステンドグラスの表面に六芒星とその周りを囲むように呪文

のような言葉が浮かびあがる。

不気味に紫色の光を放ったかと思うとステンドグラスの光が紫色を帯びて触れるように実体化する。

瞬はステンドグラスの光の中に閉じ込められてしまい、更に握手の時の針から入った毒が体中を蝕んでいた。

焼ける様な痛みと痺れが体中を駆け巡り、最早起き上がることもすらできない朦朧とする意識の中で瞬は視界の中に薄ら笑いながら見下す所長を捉える。

「な、な、にを、し・・・た。あ、あぐううっ！！がああああああつ！！」

「ふうむ、わずか1mgでシロナガスクジラでさえ殺すといわれている毒がまだ苦しんでいるだけとはね。やはり『旅人』というものは凄いものだ。いや、正確に言えば『旅人の力』が、かな。まあ、これでようやく『W2』の悲願が達成される。後は安心して死ぬ事だ」

すると今までどこに隠れていたのかホールを埋め尽くしそうなほどの武装した集団が現れ、中心で痙攣している瞬に向かって銃を向ける。

所長はそれを確認すると天井のステンドグラスに向かって一言だけ聞いた事のないような言葉を発する。

それに合わせてステンドグラスから降り注ぐ光の円が徐々に狭まっ
ていき、瞬のいる場所を段々と狭めていく。

瞬の足が光に触れた途端、電撃のような痛みが走るが自由にならな
い体では足を離す事もできず、ずっと痛みが続く中で瞬の意識はな
くなる寸前だった。

しかし、瞬は意識が飛びかける寸前で盾の呪文を頭の中で唱えた。
展開された盾がステンドグラスからの光を完全に遮断し、周りにい

る者達から瞬を完全に手が出せないように隔離する。
傍目には急にステンドグラスからの光が弾かれるように見えるだけだが、それを見た所長は近くの者に試しに撃たせてみると弾は瞬の体に届くことなくあらぬ方向へと弾かれる。

「ほう、これが最強と評される『イージスの盾』ですか。ここでは並ぶ者がいない、私の魔法でさえこの扱いとは。だが、今更出した所でもう毒は消えないでしょう」

所長の言うとおりいまだに瞬の体の痺れや痛みが治まらない。
いやそれどころかより一層ひどくなっていくばかりで苦痛に顔がゆがみ、大粒の汗が床で水溜りが出来るほど出続ける。

「ぐううう！も、も、うだめ、・・・か」

もうこれ以上痛みに耐え続けているのが限界だと感じた瞬は、意識を保つ事をやめようとする。

瞬の目の前が暗くなっていく。
走馬灯なのだろうか、完全に暗闇とかした視界の中に姫の姿が映し出される。

『馬鹿者！この程度で敗れるようとしているとは情けない！』

そんなに知っているわけではない、会ってから1日立ったかそうではないかといった位でしかない。

だが、瞬の人生を変えた彼女の叱咤はズッシリと瞬の心に響き、彼女のお願いを思い出す。

幻なのかそれとも記憶が作り出した彼女なのかは分からないが、瞬の心を奮い立たせるには十分であり、意識がはっきりすると目を見開く。

「ほう、まだ意識がありますか。でも、頑張るだけ無駄」

「だ、黙ってください！僕は姫の・・・お願いを叶えなければならぬんだ！」

すると、瞬の床につけられた右手に力が込められ、同様に左手も床に向けて力が込められる。

いまだに痺れはなくなりがゆっくりと痛みを耐えて上体を起こし、足を引きずるようにして引つ張るとその場に尻をつけて座る。

「まだ動けるとは!?!」

「動けるだけじゃ・・・ないんだ！」

手の中に大量のスモークグレネードを生成すると辺りにばら撒き、ホールの中はすぐ黒煙で一杯になると視界はほぼなくなった。

続けざまにあの時見せてもらった武器の中から非殺傷の特殊ゴム弾がセットされたAS12（セミオートショットガン）を両手に1つずつ生成する。

そして大量の黒煙にむせながら取り囲んでいるままの『W2』の隊員達目がけ、両腕を広げてその場で回りながら引き金を引き続ける。

「うあああああ！」

撃つたびに回るたびに弾切れになって生成するたびに耐えがたい激痛が走るが、瞬は痛みを歪めながらそれでも撃つのを止めない。隊員達は反射的に中央に向けて銃を撃ち続けるものの、黒煙で見えないが弾丸は全て弾かれて跳弾となり、別の隊員へと突き刺さる。しばらくすると銃声は瞬のAS12だけとなり黒煙が少しずつ晴れ

ると、そこに立っていたのは瞬だけだった。

残りの隊員達は全てが床の上に横になりながら痛みで呻いていた。

「はあ、はあ、はあ・・・つつ！」

誰も立っていないのを確認した瞬はAS12を床へ落とし、その場に腰をつけながら荒々しく呼吸し痛みと痺れが治まるのを待つ。

その様子を黒煙が室内を満たしたと同時に、ただ一人柱の陰に隠れていた所長がうかがっていた。

「うち！あの毒でもまだ動ける上に魔法まで使えるとは信じられん。だが、奴が盾を解きさえすれば私でも仕留められる」

そう言いながら所長は手元にさつき使った毒が滴るほど塗られた矢を専用の銃にセットすると、気の緩む瞬間を待つてジツとその場で待つ。

すると、瞬の周りを流れていた黒煙が今までは瞬の体にまで届いていなかったのが、瞬の体にまとわりついていくのに気づき、盾を展開していない事に気づく。

できるだけ音をたてず、瞬を狙って心臓の鼓動が普段より大きく聞こえながらゆっくりと銃を構え、後は引き金を引くだけとなった。

あのまま死んでいればよかったと後悔させてやる、と所長は殺意の念を込めて引き金を引いた。

狙い通りに飛んでいった矢は背中を向けている瞬へと一直線に飛んでいく。

所長も当たる事を確信したが、当たる寸前で後ろを向きながら盾が発動し、矢は空しく下へと弾かれた。

「そこですか・・・」

その言葉に誘い出す罠にはめられた事に所長はようやく気付いた。急いでその場を離れようと自分の魔法である相手を拘束しながら死に至らしめる結界魔法、そのホール内に仕掛けてあった全てを言葉を発して発動させながらすぐに逃げ出す。

だが、当然のように全てが瞬には効き目などあるわけなく、瞬は全てをはねのけながら新たに生成したAS12を構えると背中を向ける所長目がけて撃つ。

「ギャッ！」

ゴム弾が当たると小さく呻きながら近くの壁にぶつかり、そのまま意識を失ってズルズルと壁にもたれながら倒れる。

これでようやく一息つけると、AS12を落とし体調の回復を待ちながらどうやってこの施設を壊そうかと考え始めていた。

第11話：旅立ち(3) (前書き)

2010/04/16 修正版を更新(いくつか表現を修正、大都市の名称を固定)

第11話：旅立ち（3）

目を開くよりも先に体中がズキズキと痛み、痛みに顔をしかめながら意識を取り戻した所長。

なぜこんなに体中が痛むのかと、体の背筋を丸めて痛みに耐えながら思う。

意識を失う前の記憶が軽く飛んでいた彼は、とにかく現状を把握しようとして目を開く。

ぼやける視界で辺りを見回すと目の前に黒い塊があつてよく分からないがどうやら所長室のようだ。

なぜ私が所長室の床の上に横になっているんだ？

そう不思議に思いながら所長は体を起こそうとするが、どういう訳か何度やっても体を起こす事が出来ない。

所長はよくよく自分の体を見てみるとロープで体中を締め上げられ、まるで芋虫のように手すら出さず事が出来ない状態になっていた。

「ふ、ふがーっ・・・??」

助けを呼ぼうとしたものの口にまで猿ぐつわがされており、どうにかしようともがくものの前に進む事さえできない。

最早どうにもならない状態だった。

「起きましたか」

突然の声に所長は声が出た方を向くと、黒い塊に見えていた物が動き出す。

黒い塊は言葉を合図に動き出すと人の形へと変わっていくと、所長の寝ぼけている目でもよく分かる位置まで顔を近づけてきた。

目の前にいたのは笑ってはいるもののどこか引きつったような表情

をしている『旅人』だった。

その顔を見た途端、所長は直前の記憶を全て思い出し、現状を理解した。

つまり、自分は今、『旅人』に捕えられているのだと。

「ふが！ふががが！フーツフーツ！」

「少し黙っていた方がいいですよ、まだ僕も毒が消えたわけではないですし、痛みや痺れがずっと続いているんです。うっかり血でも入るような事があつたら・・・」

後は分かるよね？、と血管が浮き出そうなほど怒ってはいるがまだかろうじて笑顔で堪えている瞬。

それを見た所長はその意図を察し、冷や汗をかきながらとりあえず黙る事にした。

根元から気の優しい瞬が本当に怒ることなど生まれてこのかたありはしなかった。

だが、今がその初めての瞬間になるのではないかというほど瞬の頭には怒りが溜まりこんでいた。

まるでガソリン塗れでマツチを擦るような危険を感じた所長は、とにかく機嫌を損ねないようにするべきだと石になったかのように動かず、ただ彼が何をしているかを見ていた。

瞬は所長の食らわせた毒から『旅人』の力により回復しているようだ。

だが、回復には時間がかかるらしくフラフラとした足取りで机や棚を漁っている。

しばらくすると目的の物は見つからなかったのか瞬は探す手を止め、千鳥足のような足取りで所長へと向かって歩いてくると所長の顔は恐怖に歪む。

その場から逃げると生存本能が所長に告げる。

それに従って芋虫状態のまま転がって逃げようとしたものの、いつの間にか先回りしていた瞬に足蹴に止められてしまった。

「ふ、ふが、ふががが！」

「一体、どこに行こうというんですか？それとも、天国に……いや地獄に送ってほしいと？」

「んーっ！んーっ！」

所長の目尻には涙が滲みだし体中がガタガタと痙攣し始めていた。もう私の命はここで終わるのかと死を意識し始めていた。だが、それをあっさり無視するように瞬は猿ぐつわを外すと所長室の奥へと転がしながら移動させる。

「ゲホッ、ゲッホ！わ、私をどうする気だ！？」

「『W2』について知っている事を全て喋ってもらいます。そうすれば命は助けましょう。どうですか、『白い世界』神灰市支部、所長さん？」

所長は事前に上から聞いていた『旅人』が別人へと変わったの思いつくし出す。

そして質問の内容からまだ無知な『旅人』が知識を仕入れようとして来たのだろうと考える。

「い、いいだろう、何が聞きたい？なんでも答えてやる」

「そうですか、あっさり了承してくれて助かります。では、『W2』の日本支部はここで合っていますか？」

やはりか、と自分の考え通りである事を所長は確信した。
すかさず所長は短い間に嘘で言いくるめて誘導する事を考え付くと
すぐさま実行に移す。

「い、いや、ここはただの表向きの場所だ。本当の場所は（ビーツ！）」

突然、所長の言葉を遮るように所長の足元付近から電子音が鳴る。
不思議に思った所長を余所に、それを聞いた瞬はゴム弾の装填され
たM92FSを所長の体に向けるとためらいなく引き金を引く。
ハンドガン
ボクサーにでも殴られたかのような痛みと衝撃が所長の腹部を襲い、
予想だにしていなかった衝撃に思わず咳き込む。

「ゴフツ！ぐ、ぐうう・・・」

「嘘は吐かない方が身のためですよ。嘘はすぐに分かりますからね。あなた達のご自慢の機械ですね」

その言葉でピンと来た所長は痙攣したまま足元を見る。

そこには尋問用に使う最新の嘘発見器が置かれておりその先端が所長の足に取りつけられていた。

性能については既に何度も使った事がある所長からすればとても信頼できる物であった。

だが、使われる側となつては嘘を離す事をできなくするという非常に邪魔な存在でしかなく、都合の悪い事まで話してしまう事に青ざめた所長は慌てて訂正を行う。

「そ、それは不良品で（ビーツ！）」

途端に躊躇なくまたゴム弾が撃ち込まれると、所長は悶絶しながらその場を転がる。

「節操のない人だ。僕も好きで撃っているわけではないんですよ。ただ、貴方が素直に答えないから悪いんです」

ここで知っている事を全て放せば、『W2』からの肅正により自分の命はすぐになくなる。

だが、ここで黙り続ける事によって目の前にいる『旅人』から何度か痛めつけられようが、所詮は命を奪った事もない一般人。

命を取られる事までではないとたかをくくった所長はこのまま時間稼ぎを行おうとする。

そうするはずだったのだが、所長が涙交じりの視界で立ちながら背中を向けたままの瞬を捉えるとその考えは一瞬にして変わった。

目の前に立っていた瞬からオーラとして実体化しそうなほど溢れだすどす黒い雰囲気か辺りに立ちこめ、所長は部屋の温度がまるで氷点下にもなったのかと思う寒さを感じた。

そして、まるでホラー映画のようにゆっくりと振り向いた顔に所長は鬼を見た。

「ひ、ひいいい！お、鬼い！」

「アツハツハツ、やだな鬼なんて……。まあ、鬼になるかはどうかは……。ね？」

「た、助けてくれー！ー！ー！ー！ー！」

「アツハツハツ、ハーツハツハツハツハ！」

狂ったように笑い続ける瞬により所長室の扉はゆっくりと閉じられ

る。
そこからずっと悲鳴と銃声、時には鈍い音が聞こえたりしたのは言うまでもない。

ようやく瞬は毒から完全に回復し、痛みと痺れが取れる。
白目をむきながら涙を流して失神している所長をそのままにし、所長室を出ると顔をパチンと両手で叩く。

「う、うーん、僕にもあんな一面があったとは。できれば、今後は気をつけよう・・・」

さすがにやり過ぎたのかもしれないと反省をする瞬。
自分が殺される寸前まで追いやられた事で怒り、更に途中からはそれに悪ノリまで加わってしまったため仕方ないとは思える。

だが、まるで性格が180度変わってしまったかのように変貌した瞬は、時には所長の苦しむさまを楽しんでいた時までであった。
それは怒りが頂点に達したからなのか、実は2重人格なのか、それとも『旅人』の力による自己防衛なのかは今はまだ謎である。

今度はこうならないように気をつけると決めた瞬は、頭の中で涙目の所長から聞き出した情報の整理を行う。
聞き出せた情報としては以下の通りだった。

・『W2』とは『白い世界』の一部が『旅人』の力を奪う事を目的として活動している組織であり、その規模は世界全体に及ぶだけでなく、政府や国にまで影響力を持つ。

・表側の世界平和を謳っている『白い世界』は『旅人』や魔法の事を知らず、純粹に募金活動や援助活動を行っているだけのただの

隠れ蓑である。

・日本支部は表側としての支部であり、『旅人』を追う方の、瞬にとつて本物といえる支部はある山中の地中に建造されている。

・所長の立場は日本の中で上位の方ではあるものの、その上には日本支部の司令官、更にその上も存在している。

これで大体の事を把握できた瞬はここからそう遠くはない日本支部へと向かうのを決める。

そして、廊下からまだ何人も隊員が横たわっているホールを横切り、外へと出る扉を開く。

すると、いきなり大量のライトが瞬を照らし、眩しさに目が眩み腕で目の前を覆う。

目を覆いながら何が起こっているか見ようとすると、ちょうど先頭に立っている男が腕を振り下ろすのが見えた。

「撃て！」

様々な方向から銃声が鳴り響き、大量の弾丸が瞬目がけて飛んでいくものの瞬がすばやく展開した盾に阻まれ、弾は次々に弾かれていく。

だが、それでも攻撃の手は止むどころか更に激しくなっていく、グレネードランチャーやロケットランチャーなどの重火器による攻撃まで加わる。

あまりにも激しく続いたため、爆発によって上がった黒煙が瞬の周りに溜まり、瞬からは周囲の状況を探れないほどに視界を悪くする。

「いきなり激しい事です・・・ね！」

瞬は黒煙を吹き飛ばすように空中へと飛び上がる。

すると『白い世界』の敷地内をホールにいた人数の比ではない大量

の隊員で埋め尽くしているのが見える。

あまりの多さに瞬はどうするべきか戸惑っていると、下にいる隊員達は空中の瞬を狙って銃の照準を上に向けると引き金を引く。

瞬はそれに対抗するように閃光手榴弾を大量に生成すると、「豆まきでもするように辺りに下へとばら撒く。

弾幕の間を縫う様に地面へと落ちた閃光手榴弾は大音量と閃光を伴って爆発する。

今のうちにこの場を離れようとした瞬だったが、下からの攻撃は一旦は途切れたもののすぐに再開され、大量の弾丸が盾に次々と当たる。

あまりにも早すぎる反撃に瞬は近くのビルの屋上に降りて隊員達をよく見てみる。

どうやら隊員達は遮光ゴーグルに防音用のヘッドホンをつけているようで、瞬もそれとなくその装備が何かを察する。

「僕の攻撃に対する対策、ですかね。全員眠らせるのは厳しいし、人を殺したくはないし……」

実際、瞬がその気になればここにいる全員を殺す事は可能だ。

巨大な重火器をいくつか作り出してもいいし、さっきばら撒いた閃光手榴弾を手榴弾に変えてもいい。

被害を気にしないなら爆弾を作り出して一掃するのも可能だろう。

最も気優しい瞬にそんな事が出来るはずはなく、圧倒的な火力をあえて使わずに生かしたまま戦闘不能にするというのは、戦闘の素人である瞬には閃光手榴弾が封じられてしまった時点で難しい。

それを銃弾の雨の中で瞬は目を閉じて深く考え込むと、どうするか決めたらしく目が見開かれる。

「支部まで逃げよう。それでは！」

下の隊員達に瞬はにこやかに手を振ると反対を向き、ビルの上からまた上空へと飛び上がる。

「あつ！あの野郎・・・！全員追え！逃がすな！」

笑ってみせたのがよほど癪に障ったらしく、隊員達は止めてあつたバイクや車へと乗り込む。

けたたましいエンジン音を上げながら次々に発車していくと、瞬が飛び去った後を猛スピードで追う。

ビルから降りて道路上を走りだした瞬がやたらうるさい音に後ろを振り返ると、そこにはバイクや軍用車、更にはヘリまでもが瞬を追いかけてきていた。

更に隊員達は追いかけながらも瞬目がけて銃を撃ち続ける。

銃弾はやはり盾によって弾かれるが、それよりも大量の追手というのが瞬に焦りを生む。

そのせいか瞬の走るスピードは出せる限界まで高まり、およそ100 km/h近い速度を出しながら支部を目指して走り続ける。

当然、後ろからついてくる車やバイクもその速度を出し続ける。

だが、そもそも道路はそんな速度で走り続けられるよう設計されておらず、急に止まったり曲がったりができる瞬とは違い、車とバイクは急カーブがあるたびに次々に操作を誤って追う列から消えていく。

瞬は周りが森から平地の何も無い所に抜けると、後からついてきている車やバイクの数は半分以上に減っていた。

追撃の手は少しだけ緩んだもののそれでも攻撃自体は止まない。

そのうち目的地である山が見えてくると隊員達は瞬の狙いを察知したのか、前からも大量の軍用車が迫ってくると瞬を包囲すべくバリケードのように行く手に何台も展開していく。

その間を縫うように大量の隊員が現れるとまた銃かと思っていた瞬だったが、一人が速度を考慮しながら調整して閃光手榴弾を投げる。

こちらから投げられる場合は意識していたため特に問題なかったが、向こうからの攻撃としてはこれが初めてだった。そのため、爆音はまだ耐えられたものの光に目が眩むとすぐにその場で足を止める。

隊員達は足を止められた事に喜んだものの、後ろからついてきていた車とバイクは急に止まる事が出来ず、次々にバリケードの車に衝突していく。

瞬をそのまま轢こうとした車もいたが盾によって弾かれ、弾と同じように違う方向へと弾き飛ばされる。

「今だ！ 囲め！」

それでもめげずに隊員達は目のくらんだままの瞬を取り囲む。

効かない銃をしまいこみ、代わりに肩に取り付けてあった鞘から刀身が少しだけ普通の物よりも長いアーミーナイフを抜く。

どことなくボンヤリと紫色に光っているアーミーナイフを全員が逆手に構え、一斉に膝をついて目を押さえている瞬目がけて突き刺す。本来ならば刺さった瞬間にアーミーナイフに封じ込められた魔力が相手の体内へと入り込み、傷口は小さくてもそこから内部を猛獣にでも食い荒らされたかのようにスタスタにまでするという一撃必殺であるはずだった。

だがその刃は瞬の体に1mmの傷も付けることなく、また瞬の肌に触れる事もなく盾によって弾かれる。

それどころか空中で止まっているように見える刀身は次々と簡単に折れていく。

「ちい！ これでもダメか！」

折れたナイフを見て隊員が舌打ちをしながらナイフを投げ捨てる。

その間に回復した瞬が立ちあがり、隊員と目があつた瞬間にまた自

然と笑顔を浮かべる。

「う、うっ……この野郎！」

その笑顔が目があった隊員の逆鱗に触れたらしく、隊員はホルスタ
ーからデザートイーグル（ハンドガン）を抜くとその万人受けしそ
うな笑顔を掻き消すように撃ち続ける。

当然、弾は全て盾に弾かれていき、弾切れになるとそこには無事だ
がなんで怒っているのか分からずキョトンとした瞬。

そして、流れ弾で手や足を負傷して横たわりながら恨めしそうに睨
んでいる彼の仲間達がいた。

「あ……ああっ……」

「えーと……じゃ、そういうことで」

瞬はその場から逃げるように飛び上がるとバリケードを悠々と越え
て、支部めがけて一目散に走る。

その後をヘリが追いかけていくが車やバイクはほとんどが使用不可
能な状態であり、使用できるものもバリケードのおかげで前には進
めそうにもない。

「あれが『旅人』か……！畜生！あんなの反則じゃねえか！」

瞬を追うように指示を出した指揮官は頭に載せた指揮官の象徴でも
あるベレー帽を取ると、力任せに地面にたたきつけ、その場に力な
く膝をついた。

夕暮れの中に傷ついた隊員達が呆然と立ち尽くすさまはまるで終戦
した時の兵士のものであった。

隊員達が諦めると同時に、暴走した隊員の処理も含めた後処理を始

めたのはこれから1時間後の事であった。

時は2時間ほど巻き戻る。

瞬が神灰市を目指して南下していたころ、瞬がいなくなった病院では入院患者がいなくなったという事で大騒ぎしていた。

病院のスタッフ総出で病院中を探し回ったもののどこにも見当たらず、病院周辺の捜索が行われていた。

その捜索には親友の賢悟と幼馴染である花梨も心配から加わり、どこにも見当たらない瞬を土地勘はないものの探していた。

「おい、瞬！出てこいよ！・・・くそ、あいつどこいったんだ？」

「うん、何かあったのかな？」

「何か・・・ねえ？誘拐されたとか？」

「それはないと思うよ？瞬は孤児だし、孤児院からはもう独立してるんだから。それよりも事件に巻き込まれちゃったんじゃない？」

2人の頭の中には過去にもその馬鹿がつくほど気が優しすぎる性格が災いして、逃げていた犯人がつかまずいたのを助けてそのまま人質に取られたのを思い出す。

他にも日常的なトラブルには毎度毎度巻きこまれてしまい、それが勘違いを招いてトラブルメーカーの呼び名まで一部ではついていた。

「・・・あり得る」「」

2人して同じ事を言いながら同じように頭を頂垂れてため息をつく
が、それならそのうち帰ってくるだろうとも安心できていた。
なぜなら、その優しさから関わった人達を癒し、トラブルを納める
上で非常に役に立っているのも事実だからだ。
人質に取られた際は人質とは思えないほど不思議と落ち着きながら
犯人と話をし、最後には自首を促された犯人は瞬にお礼まで言う
瞬を解放し、追っていた警察官に自ら両手を差し出していった。
まさにネゴシエーターのような働きに周りのやじ馬から惜しみない
拍手をもらっていたのが2人の脳裏をよぎる。

「君達、この子を知らないか？」

突然、温和なムードをぶち壊すように目の前に黒いスーツの男が現
れ、一枚の写真を2人に向かって見せていた。
怪訝な顔を浮かべる2人。
写真を見てみるとそこには演劇で着る様な古ぼけた中世の服を着て
いるが見覚えのある顔があった。

「瞬じゃないか。瞬を知ってるんですか？」

「ほう、君達この人を知っているのかね？」

「知っているも何も俺達は小学校からの親友だ。今はどこに
いるか知らないけどな」

礼儀正しくはあるがどこか得体のしれない男達に賢悟は語尾を強め
て話す。

「どこにいるか知らない、とは？」

「彼、私達と同じ病院に入院したんですけど、昨日の夜からいなくなっちゃって……」

そこまで聞いた所で男の中では間違いがないとまで確信すると、手を上げて合図を出す。

すると、物陰に隠れていた男と同じように黒いスーツを着た者達が次々に現れる。

何か嫌な予感がした2人はすぐに逃げ出そうとするが黒いスーツの者達はあつという間に2人を捕まえる。

「なにするんだ、放せよ！」

「そうもいかない、何せ君達は彼の親友なのだろう？」

「瞬が何かやったとしても言うんですか！」

「まあね、その内に話そう。連れていけ」

賢悟は暴れて逃げようとするがまるで動く事が出来ないほどにガツチリと掴まれ、近くに止めてあった黒の4WDに花梨と一緒に放り込まれる。

すかさずドアを開けようとするがロックがしつかりとかかり開ける事が出来ない。

警察の車のように前部と後部を仕切るように透明な強化プラスチックの板が挟まれ、助手席に座った質問してきた男に触ることすらできない。

「出せ！出せよ！」

「そう暴れないことだ、今から彼のしたことについて話してやる。それから逃げるかついてくるか決めるんだな。出せ」

車は発進し、病院からドンドンと遠ざかっていくと男は事の次第を話し始める。

話が進む事によって段々と青ざめていく2人を乗せて、車は日本支部を目指して速度を上げた。

第12話：旅立ち（4）（前書き）

2010/05/02 修正版を更新（いくつか表現を修正、山に名称設定、隊長を副司令官に変更）

第12話：旅立ち（4）

追ってから逃れた瞬は日本支部のあるという『神降山』^{かみおりやま}の麓へとたどり着いた所で足が止まる。

山を囲むように有刺鉄線が見える範囲全体に張り巡らされ、『私有地につき立ち入り禁止』の看板がいくつも立てられている。人が入ってくるのを完全に拒んでいる『神降山』。最も中に入ってきてほしくないのは山ではなく、『W2』の方なのだろうが。

「ここらしいけど、入口は・・・見当たらないな。」

辺りを見回してみてもそれらしい人が出入りしているような跡が見当たらない。

とりあえず中に入ろうと有刺鉄線を飛び越えようとした瞬だったが、そこである事に気付いた。

本拠地であるはずなのだがどこにも人氣が感じられず、辺り一帯が不気味なほどに静まりかえっている。

いや、人氣どころではない。

虫や鳥の声一つ聞こえないのだ。

見た目は至って普通の山だが、足を踏み入れたかなくなるようなそんな雰囲気漂っていた。

だが、だからと言って瞬は行かないわけにはいかない。

ホラー映画の呪われた館に自ら入っていくような主人公の心境で瞬は中へと跳び込んだ。

すると有刺鉄線を越えた所で何かの層を破ったようなことなく空気が変わった感覚があり、瞬は不思議に思っ て体を見ているが特に変化らしいものはまるで見受けられない。

ただ、肌に触れる空気がイメージで変わる『旅人』の服を着ている

のと近い感覚があり、どことなく気持ちがいいようだ。

山の外と内とで空気が明らかに違うのだけは瞬にも分かっていたが、瞬に分かるのはそこまでだった。

彼がいる『神降山』に満ちている空気、それは魔力の元を通常の空気よりも多量に含んでいる空気である。

魔法を使える者は空気中にある魔力の元を体内に取り込み時間をはかる事で魔法を使うための魔力を生成している。

その生成された魔力の許容量は一人一人違っているため、自分の魔法を1日1回ペースでしか使えない者もいれば、1日に100回ペースで使える者もいる。

ただ、魔法で使われる魔力にも差はあるため厳密に言えば魔力の許容量だけでは比べる事は出来ない。

ちなみに、瞬が何気なく使っている『リアルメモリー』や『イメージの盾』は1回使うだけでも魔法を使える者を10人集めて1秒持続できるかどうかといったレベルであるが、『旅人』になる事によりその魔力は生み出し元である地球からの魔力供給を受け続けているためほぼ無尽蔵となっている。

姫がいればこういった説明もできたであろうが、今の瞬はそういった知識は皆無に近い状態であった。

話を元に戻そう。

魔力の元の密度が高いということは、魔法を使う者にとって非常に快適な場所である、ということだ。

そこにいるだけで個人個人の魔力回復は早まり、より早く魔法を使う事が出来る。

魔法使いの組織としてはこれ以上ないほど拠点を構えるにはうってつけの場所だ。

そんなことなどつゆ知らず、瞬は空気を気にせずに素早く山を登っていく。

跳ぶように山頂にまで到達すると周りを見下ろしていると、ふと不自然に感じる場所を見つけ、すかさずその場所へと飛ぶ。

瞬が降り立った所は目の前に切り出した岩場が広がり、地面の土には車やバイクの通った跡に人が歩いた跡まで見られる。その跡は片方は下へと降りていく下りの道へと続き、道はずっと下まで続いている。

もう片方の跡はというと、不思議な事に巨大な石壁に向かって一直線に向かった後で消えている。まるでまだ道が続いているかのように。

「・・・秘密基地？」

なんとなく察した瞬は昔見た特撮ヒーローものの悪役達がこういった場所にばかり基地を作っていたのを思い出す。

そう思うと敵は世界平和を謳う集団であり、ヒーローは自分という事になる。

そんな柄ではないな、と吹き出すように軽く笑うと手の中にRPG7（ロケットランチャー）を生成する。

映画で見たように腰を落としてスコープを覗きながら跡の消えていく石壁を捉えると引き金を引く。

白煙を噴きながら飛んでいったロケット弾は石壁に激突すると爆発し、周囲の石壁を吹き飛ばす。

爆発の黒煙が晴れていくとそこには金属製の巨大な扉が現れ、ロケット弾の直撃でも少し表面がへこんだ程度であった。

「堅いなあ・・・。それなら」

瞬は扉の前に立つと手では抱えきれないほどのC-4（プラスチック爆弾）を作り出す。

粘土のように変形させ、粘土細工を楽しむように鼻歌交じりでペタペタと扉の表面につける。

つけ終わったところで屋上で姫に説明されていたのを思い出しなが

ら小型の起爆装置を作り出す。

そして、装置をC・4に適当に取り付けた所で後ろに跳ぶと耳をふさぎながら遠隔装置のスイッチを入れた。

途端に爆音の大音量が辺りに響き渡り、木に止まっていたカラス達は一斉にその場から逃げるように飛び上がる。

扉は爆発により中に3、4回転しながら吹き飛ばされ、離れた所からでは見えないほど基地の奥にまで飛んでいった。

てつきり、扉が壊れて人一人分の入口くらい出来る位だと思っていた瞬だったが、予想外の結果に冷や汗をかく。

「……りよ、量を間違えたかな？は、はは……」

今度からは気をつけるし開いたからいいよね、と勝手に決め付けると盾を展開させながらまだ黒煙の上がる敵陣の入口へと立った。

中からはけたたましい程のサイレンが鳴り響き、何かの金属で作られた通路に反響しながら瞬の耳へも届く。

エマーゼンシーだの『旅人』が基地に入ったのだと機械音声によるアナウンスがずっと流れている。

瞬は中へ足を踏み入れると赤いランプが点灯し続ける長い通路を真っ直ぐに走り出す。

すると突然、盾によって弾き飛ばされる無数の何かが奥から聞こえる轟音と共に次々と瞬に襲いかかる。

驚いた瞬は走るのを止めてその場に立ち止まり、突然の攻撃に多少慌てながら薄暗い通路の先を凝視する。

通路の突き当たりにエレベーターらしきものがあり、その前に狙撃銃や重機関銃を構えた隊員達が陣取っていた。

それを見た瞬は銃弾が絶え間なく飛び交う中を走り出す。

手の中に麻酔銃を生成し、超人的な力を駆使してまるで狙撃銃で寝ながら狙っているかのように走りながらもピタリと照準を合わせる。そして、ギリギリ届くであろう距離に達するとすかさず撃ち、麻酔

針が重機関銃を撃っていた隊員へと突き刺さる。

刺さった隊員はすぐに眠りの世界へと誘われ、次の瞬間には体が崩れ落ちる。

その調子で瞬は次々と陣取っていた隊員達を夢の世界へと案内していく。

瞬がエレベーターにたどり着いた時には抵抗できる隊員は一人もおらず、全員が寝息を立てて寝ていた。

「失礼しまーす」

そう簡単に起きる訳はないのだが瞬は起こさないようにソロソロと歩き、ちょうどこの階で止まっていたエレベーターに乗り込む。

エレベーターの中にはボタンが1つだけしかなく、瞬がそのボタンを押すと扉が閉まり下へと降り始める。

一定距離を降りるのに連動して扉の上のランプが緩やかに動くように点灯していく。

だが、途中で上から小さい爆発音がしたかと思うとエレベーターが揺れる。

そして慌てる瞬を余所に自由落下を始め、ランプの点灯する速さは徐々に増していく。

「お、落ちてるう!？」

ランプ表示は行くべきはずの階層を通り過ぎ、最早表示すらされなくなつた直後に下の地面へと激突する。

その直後、エレベーターが停止するはずだった階のドアが開かれ、顔を出した隊員達はシャフト内を覗き込む。

粉塵の舞うシャフト内部の下ではエレベーターがグシャグシャに潰れ、電気系統が壊れたのか火花も散っていたが中に乗っていた瞬の様子は外からでは分からない。

それだけ確認した隊員達は時限式のC4を放り込み、すぐさま顔を引っ込めてドアを閉める。

すぐさま足元が揺れ、巨大な爆音がドアの向こうから隊員達の耳にまで届く。

振動が治まり、ドアの隙間から黒煙が上がると隊員達はドアを開いてまた中を覗きこんだ。

爆発によってエレベーターは完全に破壊されているようだが、立ちこめる黒煙のせいで『旅人』がどうなったかを確認できない。

薄暗いシャフト内部をライトで照らしながら搜索していると一人の隊員がライトを下に落とす。

一体何をやっているのかと他の隊員が搜索しながらその隊員を目の端で見据える。

するとその隊員はどういう訳かその場に横たわり、呼びかけてみても反応が無い。

不思議に思っただけで横たわる隊員を手で揺らしてみるとそれにつられて頭が動き、顔が見えた途端、その場にいた隊員達に緊張が走った。

倒れた隊員の頭には1本の針が刺さっていたのだ。

「攻撃を受けた！まだ生きてるぞ！殺せ！」

顔をこわばらせながら隊員達は次々と銃を取り出し、少しでも動いた物があつたなら即座に引き金を引く。

だが、まるで当たっているのか反応が無く、次第に黒煙が晴れていく。

途端に下から次々と針が飛び出し、針の刺さった隊員達は意識がまどろんでいくと銃から手を放してその場に横たわる。

それでも攻撃の手を緩めない隊員達だったが、黒煙の合間から何か飛び出してドアへと入る。

それに突き飛ばされる隊員が尻もちをつきながらその何かへと視線を向けると、そこにいたのは爆発にも傷一つない『旅人』だった。

「う、うおおおお！？」

驚きながらも訓練された動きで銃を構えた隊員達は瞬へとその銃口を向けて撃つが、弾はあらかじめそう飛ぶのが決まっていたかのようにならぬ方向へと飛んでいく。

瞬は銃で撃たれている状況下ではあるが落ち着いて麻醉銃を撃つ。次々と倒れていく隊員達。

最後に残った一人はその理不尽なまでの強さに青ざめた顔で銃を撃ち続けるがその抵抗空しく頭に針が刺さり、意識は遠のいていく。

「ふう」

一息ついた瞬はまだ終わっていないと気を引き締めし直し、廊下の奥へと進む。

急に何も無いでかい空間へと出ると瞬を何人もの隊員が包囲し、その前に一人だけ剣を携えた雰囲気のある男が立っていた。

瞬が何も考えずに歩くと後ろの入口が閉じられ、同時に奥にあった扉まで閉まる。

「待っていたぞ、『旅人』！」

「はあ、どうも」

気の抜けた返事に瞬を除く全員が軽くこけそうになる。

「ぬう・・・、私はこの基地の司令官を任されている、し（パシユッ！）あぐっ！」

名乗ろうとしている途中で司令官の頭には麻醉針が刺さり、司令官

は信じられないといった顔でその場に崩れ落ちる。

「司令官！？すっかりしてください！」

「き、貴様！名乗っている最中に撃つとは卑怯な！」

「え！そ、そんなんですか！？まさか、特撮ヒーローのあの常識が通じるとは……」

瞬の言っている常識。

それは変身中は襲ってはいけない、名乗っている最中も襲ってはいけないという正にお約束、というよりは暗黙の了解のようなものである。

てつきり現実の戦闘にはそんな事などありはしなないと思っていた瞬は司令官と知り、先手必勝とばかりに先に撃った。

……のだが隊員達から物凄いブーイングを受けて考えを改める。

「ごめんなさい、それは知りませんでした」

「誤って済むか！司令官は完璧に寝ちまつてるじゃねえか！くそ、作戦の段取りが……、もういい、めんどうだ。お前から出てこい」

寝ている司令官を奥へと運ばせた少し上の立場らしい男が代わりに前へと立ち、手を振って合図を出す。

隊員達が間を開けるとその間から瞬の見知った顔が現れ、瞬は茫然とその場に立ち尽くす。

「瞬……お前、なにやってるんだよ、『旅人』ってなんだよ！」

「そうよ、瞬。お願いだからもう……もう止めて」

「え……、賢悟？花梨も？なんでここに」

別れてから1日と立ってはいないが瞬にしてみれば、10年近く時がたってからの再開のような懐かしい感覚が頭の中にあふれ出る。少し感動すらしている瞬だが、それとは対照的に賢悟は怒りの顔で、花梨は逆に泣きそうな顔で瞬を見ている。

「お前、なんで殺人なんてしたんだよ！」

「そ、そんな！僕は殺人なんてしていない！」

「嘘よ！この人達から瞬が殺してる映像を見せてもらったんだから！」

「そ、そんな馬鹿な。僕は殺していない！」

上部に取り付けられたモニターに瞬が次々に人を撃っていき、血の海になった中に立ったまま狂ったように笑う瞬の映像が流される。勿論、瞬はそんな事をしてはいない。

だが、その映像を信じた親友たちの叱咤に目まいを覚え足がよろめき、その場に足をついて頭を押さえる。

呼吸も段々と荒くなっていくが、それでも親友たちの追及は終わらない。

「警察からも指名手配されているし、早く自首しろ！」

「そうよ、早く自首して！」

「そんな……。僕は……。僕は……。何も」

「罪を償え！」

「や……て……ない」

「この人殺し！」

最早、何を言っても2人の親友に理解してもらえないと知った瞬間は、まるで世界が逆転したかのようにその場に倒れる。

心の中で信じていた二人との思い出がまるでガラスのようにヒビが入り、今にも崩れ落ちようとしている。

あとひと押しで瞬の気持ちは完全に崩壊しようとしていた。

「でもどうせ死刑なんだから、せめて俺達が殺してやるよ」

「そうよね、私達が殺した方が償いになるわよね」

そう言いながら倒れた瞬に歩み寄りながら手にはM92FSが握られ、二人してスライドを引いて弾丸を装填する。
ハンドガン

盾も正常に機能していないのか銃が涙を流す瞬の頭へと簡単に突き付けられる。

「痛いのは一瞬だからな。死ね、瞬！」

「バイバイ、瞬」

今、正に引き金が引かれようとした瞬間、銃のスライドが突然現れた手によってガツチリと掴まれる。

2人は手を振りほどこうとするがまるで動かず、人間では持ちえぬ力によって銃は握りつぶされる。

舌打ちをしながら魔力の封じ込められたアーミーナイフを腰から抜いた2人は、抜いた勢いそのままに瞬に突きたてようと振り下ろす。だが、今度は振り下ろす腕を掴まれると尋常ではない握力にナイフは2人の意思を無視して手から離れると地面に突き刺さる。

「は、放せ……！」

「は、放してよ……。い、痛いよ」

「……違う」

横になっていた瞬は体を起こし、二人の腕を掴んだまま立ち上がる。その顔からは涙は消え、いつものように優しそつでありながら意思の強そうな目に光が戻っていた。

ただ、今は少しだけ怒りが溜まっているらしく、どことなく引きつっているように見える。

「違う！ 貴方達は賢悟でも花梨でもない！ あいつらなら笑いながら僕を殺そうなんてするはずがない！ 貴方達は誰ですか？」

「うち！ 撃て！」

隊員達が一斉に銃を構えると瞬は2人を突き飛ばし、即座に盾を展開させる。

間一髪で一斉射撃で放たれた弾丸は盾により全てが弾かれる。

瞬は両手に生成した麻酔銃を次々に撃ちこんでいき、隊員達はなすすべなく眠りへと落ちていく。

その場に残ったのは賢悟と花梨の偽物、それと司令官のそばに控えていた男だけが残った。

「ここまでか。おい、変身は解いていいぞ。」

「分かりました、副司令官。」

偽物は姿を変える魔法が使えるらしく命令にしたがって魔法を解く。すると服はそのままだが2人には似つかない筋肉質な男と女へと変貌していく。

「本当の2人はどうしたんですか？」

「いるさ……、あそこにな！」

モニターが切り替わると部屋の中でウロウロと歩きまわる賢悟と、青ざめた顔で椅子に座ったままの花梨が映し出された。

途端に副司令官は得意げな顔をしながらスイッチのような物を取り出し、親指を手にかける。

「賢悟！花梨！2人はどこですか！」

「本当はここまでしたくはなかったが、お前がスンナリ殺されなのが悪いんだ。何を言いたいかはわかるよな。ん？」

両脇に控えていた変身を解いた隊員2人が寝ている隊員達の銃を拾い上げると瞬に向かって構え、ジリジリとにじり寄ってくる。

「ほら、さっさと盾を解いて銃を捨てる！2人の命がなくなってもいいのか!？」

「……盾を解いて銃を捨てれば2人は解放するんですか？」

「約束しようじゃないか」

副司令官は笑みを浮かべながら言うものの、その目は笑っておらず誰の目にも間違いないく嘘を言っているようにしか見えない。魔法研究の実験材料にでも本気でされかねないと考える瞬。

だが、現状を打破するようなうまい手段も思いつかず、ここで諦めるしかないのかと麻醉銃を構えた腕を下におろすと2人の隊員はすぐに距離を詰める。

(姫、貴方ならこんな時どうしていたんですか？)

ふとそう考えた時、姫が病室内を消えたように高速で移動して瞬がびっくりして腰をついたのを思い出す。

一瞬の間さえあれば、あの高速移動を使って一気に形勢を逆転する事も可能だろう。

(ぶつつけ本番だけど、やってみるしかない。)

覚悟を決めると近くにまで迫っていた隊員達が近づき、手で触れて盾がまだ展開しているのを確認すると副司令官は苛立ったように命令する。

「さっさと盾を解け！親友を殺すぞ！」

「ああ、分かりました・・・よ！」

瞬は盾を解くと同時に麻醉銃を副司令官の上を飛び越すように投げる。

全員の視線が一瞬だけ後ろに落ちた麻醉銃へと移った、その瞬間、瞬はあらん限りの力で地面を蹴りつけるとまるでロケットのように

飛び出す。

姫の存在を消すかのような静かな移動方法とは全く異なる別の移動ではある。

だが、近くにいた隊員達は突如発生した竜巻のような風圧に軽くふき飛ばされ、瞬はその勢いのままに副司令官の前まで飛ぶと足でブレーキをかける。

副司令官との距離を一瞬で0にした瞬に振り向いた副司令官が反射的にボタンを押しにかかる。

親指がボタンへと触れる寸前、瞬は万力のような力を持って副司令官の左手を握り、副司令官のボタンを押そうとする親指が強制的に止められる。

「ぐお!？」

痛みに顔をゆがめる副司令官。

瞬はそのまま掴んだ腕を捻り上げ、痛みに耐えきれなくなった副司令官はスイッチを手から落とすと瞬は優しくそれを受け取ると握りつぶす。

2人が無事らしいのをモニターで確認すると瞬は力が抜けたように一息つく。

視線を下へと落とした瞬間、瞬は副司令官が殺気の籠った目で睨んでいるのに気づいた。

「貴様、何時の間に!つく!いてて!お前らアレだ、アレをやれ!」

「はっ!」「」

吹き飛ばされた状態から素早く態勢を立て直した2人は銃を投げ捨てるとその場に膝をつく。

いまだ瞬には出来ない細かな体内の魔力制御のため、2人とも目を閉じて自分の肉体に留まっている魔力を捉える。

その魔力の全てを望んだ姿に変身できる魔法、その実体として体中を薄く覆っているオーラ状の物へと呪文を詠唱しながら注ぎこむ。途端に2人の体を覆うオーラが黒く堅い皮膚のような実体を持ち、体を一回り大きくすると腕を床につけて獣のように四つん這いになる。

オーラは徐々に巨大化していき、元の大きさから二回りほど体を大きくすると表面には皮膚と同じ黒いなめらかな毛を生やし、腕や足の部分が発達した筋肉のような物で固められ、顔の部分は耳が上に突き出し、更に口は顎ごと前へと突きだして口からはみ出るほど巨大な牙が2本生える。

全ての変身が完了するとそこにいたのは獣そのものであり、見た目はまるで黒豹のようだが絶滅したサーベルタイガーのような巨大な牙が口から飛び出し、更に牙は魔力をため込んでいるらしく薄く紫色に光っている。

しばらく変化を見ていた瞬だったが人間が獣に変わる様子に呆然とし、その隙に力の緩んだところから副司令官は腕を振り切る。

副司令官は走って逃げだし、それを追いかけてようとした瞬間の間に2人、いや2匹の獣が割って入る。

「俺は詠唱に入る。お前らは時間を稼げ」

2匹の獣に副司令官は小声で話しかけると獣たちは分かったと頷き、瞬へと向き直ると敵意をあらわにする。

「グルルルルツ！グオオオツ！」

2匹の獣はシンクロナしながら瞬に威嚇するように咆哮を上げると、姿勢を低く保ち、いつでも飛びかかれる態勢になる。

その間に副司令官は魔法の呪文詠唱を始め、それを合図に2匹の獣が瞬へと襲いかかった。

第12話：旅立ち（4）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

色々好き勝手に書いた自己満足な小説ですが、何かご意見等ございましたら是非書きこんでいただけると助かります。

第13話：旅立ち（5）（前書き）

2010/05/02 修正版を更新（いくつか表現を修正、隊長を副司令官に変更）

第13話：旅立ち（5）

黒い2匹の獣は己の最大の武器である牙を瞬へと突き立てるべく、常人の目には止まらぬほどのスピードで襲いかかる。

風が吹き抜けるような素早い速度で飛びかかる2匹ではあったが、当然のように見えない盾によってそれは止められ、牙は瞬へと届く事はなく空中で止まる。

獣たちは諦めずに前足を振り下ろし、盾に触れながら牙へと力を込めるがこれ以上牙が先に進む事はなかった。

素早い動きに驚いていた瞬だったが、無防備にさらされた獣の腹へとすかさず麻醉銃を撃ち込む。

だが、撃ちこんだ針は堅い石のような皮膚に弾き返されて床へと落ちる。

「効いていない！？いや、弾かれているのか」

「どけえ！」

副司令官の言葉に2匹の獣はその場から飛ぶように離れる。

次の瞬間、瞬の周りに青く輝く塊が次々に浮かびあがり、徐々に瞬を中心として周りを漂う様に回り始める。

中に浮かんだ青い球の回る速度は上がり続けていき、それに合わせ青い球から不規則に伸びては折れる青白い線が走り出すとその線は徐々に太く多くなっていく。

それが帯電している証だと瞬が気付いた時には球から出る電流が別の球へと繋がるように球と球の間を走り、また高速で周りを回るために青白く光る電流の壁に囲まれて最早逃げ場はどこにもない。

「ふははは！食らえ『ライトニングウォール』！」

球の間を流れる電流が四方八方から中心にいる瞬目がけて襲いかかり、当然のように盾によって阻まれる。

だが、勢いを失った電撃は消えることなくそのまま瞬の周りを浮遊し続け、時間にして5秒程度立つとまた襲いかかる。

「どうだ！俺の『ライトニングウォール』は！一度放つたら最後、お前の体を貫くまでその電撃は消えないぞ！」

一日に一回だけ放てる副司令官ご自慢の魔法はその言葉通りまるで消える様子がなく、また勢いも衰えずに何度も瞬を襲う。

更に電撃が盾と衝突する度に目が眩むような発光を起こし、瞬は必然的に目を閉じさせられる。

「くっ！厄介な」

それならばと瞬はその場から移動して電撃の渦の中から逃げようとしたが、瞬が動くのに合わせて同じように移動したため、何時まで経っても抜けられない。

副司令官の言葉通りならば一度電撃を食らってしまえば、それで電撃は消えるだろうがその身は確実に消し炭になる。

たとえば、『旅人』の力を持っていたとしてもまだ日が浅すぎる瞬には耐えられるかどうかの判断はつかない。

なにより、瞬自身、所長の魔法の時のようにまたシヨック死しかねないほどの痛い思いをするのもごめんこうむるだろう。

だが、このままというわけにもいかず、目を閉じたまま瞬は方法を考える。

「どうやって電撃を消せば・・・いや、周りに飛んでいた球からその電撃は出ていた。それなら！」

手の中に数個の手榴弾を生成すると、ピンを抜いておおよその力加減であるはずの電流の壁に向かって放り投げる。

飛んでいった手榴弾は電撃の壁へと接触すると途端に爆発し、手榴弾の破片が辺りに飛び散る。

その破片が高速で瞬の周りを飛んでいた青い球を襲い、破片がぶつかった球は衝撃に耐えきれず砕け散った。

すると激しかった電撃の勢いが弱まり、耳に届く音で電撃の襲いかかるタイミングが遅くなったのを聞きとった瞬は自分の考えが合っていたのを確信し、次々に手榴弾を投げていく。

爆発音がなるたびに電撃は次第に弱まっていき、最後の球が破壊されると電撃は状態を維持できないのか空気中へと散っていった。

瞬が目を開くとそこには低く構えた獣が2匹とその真ん中に口を開けたまま固まっている副司令官の姿があった。

放てば必ず相手を死に至らしめるという一撃必殺の魔法、副司令官の自信の元であった魔法。

それをそんなでたらめな方法で破られた瞬間、今まで『W2』日本支部の副司令官としてやってきた自信は粉々に砕け散った。

「ば、馬鹿な……。お、俺の『ライティングウォール』がそんな力技で……」

正に茫然自失といった感じで焦点の合っていない目で瞬を捉えてはいるが、頭の中にまで入っているかは定かではない。

「グオオオオン！」

そんな副司令官に元女性隊員だった方の獣が吠えたと、その咆哮に副司令官は沈んでいた意識を表にまで引っ張りだしたのか瞳に光が戻る。

1日に1回の制限がある魔法なため、別の攻撃手段として近くに落ちていたM16-A1（アサルトライフル）を取ると、2匹の獣に向けて指示を出す。

「俺の魔法が敗れた以上、最早手の打ちようがない。お前らはここで時間を稼げ、俺は本部に連絡を取る！」

いつもの冷静な判断を2匹の獣は了承したと頷き、すかさず瞬へと飛びかかると副司令官は背を向けて奥の扉へと走る。

扉の横に取り付けられたパスコード入力装置から震える指で扉を開閉するパスコードを入力し、正常なパスコードにより扉が開き始めた所で後ろを振り向いた。

その途端、視界一杯に黒い綺麗な毛並みが広がるほど副司令官目がけて黒い獣が飛んでいた。

「う、うおおおおお！？」

慌てて副司令官はその場でしゃがむ。

その上を意識を失っているように白目をむいた獣が飛び超え、まだ開ききっていない扉に当たって跳ね返るとちょうどしゃがんでいた副司令官の上へと落ちる。

「ぐへえ！・・・っ、な、なんだ！？」

背中に乗っていた獣を隣へとどけながら何が起こっているのか瞬の方を見てみると、そこではまだ獣と瞬が戦っている姿があった。

副司令の援護として瞬の盾にその素早い動きで何度も攻撃をし続ける獣。

だが、瞬は手の中に作り出した角材のような太い木の棒を持ち、盾に攻撃が当たる瞬間を狙ってカウンター気味に棒で殴りつける。

無防備になっていた横腹に棒がぶつけられると衝撃に耐えきれず木の棒は碎け散るが、獣の方も直接的なダメージは受けていないものの衝撃によって壁まで弾き飛ばされ、受け身も取れずに壁にぶつかると完全に意識を飛ばす。

動かなくなつた2匹の獣に一息ついた瞬は、副司令官が動けないのを見ると碎け散つた木の棒を握りつぶして消し、獣をどけられずに唸っている副司令官の前へと立つ。

副司令官もそれに気付いてどけようとする手を止めて恐る恐る顔を上へと上げる。

そこには表向きの『白い世界』日本支部で所長に見せた引きつった笑顔でありながら、物言わずとも確実に頭にきているのが分かる圧力を体中から放っている鬼がいた。

「人の友達を巻き込むどころか人質にするなんて、人として恥ずかしいとは思わないんですか？」

「ふっ、ふっはっはっ！ 恥ずかしい？ 綺麗事を抜かすんじゃない、勝つためにはなんでもすればいいのさ！ お前に勝つために人質が必要だったから使つたまでだ！ ただそれだけの事だ！ 何一つ間違つちやいないだろ！？ ふっはっはっ！」

「……そうですか、そういう考えをお持ちですか」

瞬はがっかりした様に肩を落とし、体からにじみ出ていた威圧感が消えると身動きの取れない副司令官はこの隙にと体の上にいる獣をどげにかかる。

寂しそうな顔を浮かべている瞬は口を開いてポツリと呟いた。

「それなら」

「ん？それならなんだ？俺を殺してもするか、ああん？」

副司令官が威嚇しながら手を止めて瞬を見る。
瞬が殺しはしないという事を知つての行動だった。
だが、彼は知らなかった。

『白い世界』日本支部で瞬が情報を引き出すために所長に対して何を
をしたのかを。
獣をどかすのを再開した副司令だったが、前に立つ瞬の一度は消え
うせた威圧感が復活し目が一瞬だけ輝いたように見えた。

「『W2』に勝つために貴方に僕が何をしても構わない、という
ことですね？」

「・・・へ？」

突然そう言われた副司令は手を止めて再度、瞬の方を向く。

そこには張りついたような笑顔を浮かべた瞬がゆっくりと下にいる
副司令官へと手を伸ばしていた。

慌てて副司令官は逃げようと獣をどかしかかるが人間一人分+
の重量が簡単には動かず、瞬の手は段々と迫ってくる。

「な、なんだお前！や、やめろ、何をする気だああ！？」

「・・・さあて、なーにーをーしーよーうーかーなー？アツハハ
ハハ！」

「ひ、ひいいいいい！た、たすけ、ひぎやあああああ！」

副司令官の心の底からの恐怖の叫びは基地内部の同じ階層に響き渡
り、聞いていた者を凍りつかせる。

そして、聞いた者たちの中に『旅人』。恐怖という図式が刻み込まれたのは言うまでもない。

そう広くはなくただテーブルとイスがいくつがあるだけの個室。その中を賢悟はうろろと歩きまわり、花梨は沈んだ表情で椅子に腰かけていた。

「くそ！いつまでここに閉じ込めておく気なんだ！？誰も来ないし、どこかも分からねえし、おまけに携帯も繋がらねえ」

閉じ込められてからまだ30分近くたっただけだが、賢悟にも花梨にも車中で男から聞かされた話が頭の中に残っていた。それが賢悟には苛立ち、花梨には気落ちとなって表れていた。恋人でありよく知っているお互いがいるだけではあるが、監視カメラが規則的に首を振って室内を映していたのも賢悟を苛立たせる原因の一つだった。

「おい！誰か見てるんだろう！早くここから出せ！」

監視カメラに食ってかかる賢悟だが、当然監視カメラからはただ首を振り続けるだけで何の反応もない。賢悟が椅子を持ち上げて壊しにかかるうとしてもそれは変わらなかつた。

「ねえ……。瞬は本当に犯罪者になっちゃったのかな……。？」

椅子に座った花梨が重い表情で呟くように賢悟に問いかける。

その脳裏には車中で見せられた瞬が殺人を行っている映像と全国指名手配されている手配書が浮かぶ。

賢悟は持ち上げた椅子を花梨の対面になるよう置くと、その椅子に座って花梨と対面する。

「あいつがそんな事する訳ないだろう。そもそもあいつは虫すら殺せないような奴なんだぞ？」

「そう・・・だね。瞬がそんな事する訳ない、よね。でも覚えてる？私達と最後に別れる時、何か言おうとした。もしかしてこの事を・・・」

「しつかりしろよ、俺達が信じてやらなきゃどうする。どうせ、また事件に巻き込まれちゃっただけさ、全国規模レベルのにな。あんな胡散臭い奴の言う事なんか信じる必要ないし、協力する必要もない」

賢悟の言っている協力というのは、瞬を捕まえるために情報提供をするだけでなく実際の逮捕に協力をする事だった。だが、2人はそんな話は信じられないとして協力する事を拒否したため、仕方なく『W2』は変身魔法を持っていた工作人員を使用することになったのである。

「だからさ、とりあえず帰ってくるあいつを待とうぜ？な？」

「・・・うん、分かった。賢悟の言うとおりだよ」

落ち込んでいた花梨の気持ちも賢悟の言葉で救われたように向上し、普段から見せている優しい表情へと戻る。

それを見た賢悟も落ち着いてきたのか何度か頷いて笑顔を浮かべる

と、突然、この部屋唯一の扉が開くと2人は椅子から半ば反射的に立ちあがった。

「瞬！」

その開いた扉の先にいたのは昨日の夜ぶりの再会になった瞬であり、二人とも瞬を見た瞬間に驚きと喜びが混ざった顔で出迎える。

「お前、どこにいったんだよ！」

「よかった、瞬、無事だったんだ・・・」

「ごめん、色々と事情が」

「瞬の事情じゃないでしょ」

いつもやっているやり取りをやると自然に3人とも笑い、花梨は尻に浮かんでいた涙を拭きとる。

「それよりお前、一体どうしたんだ？それにここ、何処だ？色々聞きたいことが山積みだ」

「ああ、答えるたいのは山々だけど、今はここから出るのが先だ。僕が先に行くからついてきて。決して離れないで」

2人は先に外へ出た瞬の後について行き、所々に横たわっている人を踏まないように交わしながら先へと進む。

銃やらナイフやらやたらと物騒な物が転がっているのを見ると、さすがに2人も顔が青ざめる。

「お、おい、こいつらは？」

「心配ない、寝てるから起き上がりはしないよ。・・・ここだ」

瞬はある部屋の前で止まると扉を副司令官から奪ったカードキーで開け、中へと入ると2人もそれに続いて中に入る。

そこには一人ずつ座れる座席シートが壁に埋め込まれたようにポツカリと空いた中に5つあり、瞬は2人を座らせる。

「今から地上に出る。多少揺れるからしっかり掴まって。地上に出たらここから早く離れるんだ」

「瞬は行かないの!？」

「そうだ、お前はとうするんだよ!」

少しだけ寂しい顔を浮かべた瞬だが、またいつものように笑顔を浮かべると口を開いた。

「まだ、僕にはやるべき事がある。大丈夫、後ですぐにおいかけから」

「やる事ってお前・・・」

さすがに銃がそこら中に転がっているような危険な場所にいるのを賢悟が止めようとした。

だが、瞬は先にシートの隣についているボタンを押す。

するとシートとそれに座った2人を囲むように金属製のシャッターが下り始め、2人は瞬に手を伸ばそうとしたがシャッターによって遮られる。

そしてそのまま脱出装置として設置されていたカタパルトにより2人の乗った座席ごと外へと打ち出される。

「ごめん、賢悟、花梨」

瞬は聞こえないであろう眩きをこぼしその部屋を後にする。廊下を走り、そこから中から現れる隊員達を眠らせるか、気絶させていきながら副司令官から丁寧に教えてもらった指令室へと走る。指令室の前には最後の抵抗であろうバリケードが組まれ、何人もの隊員が銃器を構え瞬の行く手を阻む。

「この先か・・・、よし」

閃光手榴弾のピンを抜いて弾丸のような速度で投げつける。バリケードの内部にまで飛んだ手榴弾が爆発すると同時に一気にバリケードの中へと瞬は飛び込む。目が眩んでフラフラとしている隊員達はまともに立っていられず、突然飛び込んできた瞬が撃ちだした麻酔針は防ぐことも隠れる事もままならず、次々に眠らされていく。あつという間に全ての隊員を眠らせた瞬は指令室の扉を無理やり力づくでこじ開け、機械音が途切れることなく聞こえてくる指令室の中へと入る。

当然、中にいる隊員達からは歓迎されるわけもない。

何人もの隊員達が小さいバリケードを築きながら瞬へと銃を向ける。

「ここまでよく来たものだ。『旅人』よ」

司令室の一番奥から立派な白い軍服を纏った初老の男が鞘におさめられた日本刀を片手に現れる。

普通の隊員とはまるで違う重い雰囲気纏った彼は、例えるならば

RPGで言うところの魔王様といった感じだ。

「貴方は？」

「私は『W2』日本支部総司令官を務めている小田切 総一郎というものだ。まあ、君なら少しは知っているんじゃないか？雨堂瞬君？」

自分の事が知られているのには対して驚きはなかった瞬だが、小田切総一郎という名前には聞き覚えがあった。思い起こしてみると全く同名の人物が記憶の海の中に一人だけ存在していた。

それが同一人物という事を考えると瞬は驚きを隠せず、自然と確かめるための問いかけが口から出ていた。

「まさか・・・、小田切財閥の・・・？」

「その通り、小田切グループの会長を務めている。私は知らなかったが君はうちの関連会社に面接を受けているそうじゃないか。『旅人』がうちに就職しようとしていたとは中々面白い話だ」

小田切財閥とは100を超える会社を傘下に置き、日用品から食料品に衣料品、果ては乗用車などの日本国内で流通する物全てをカバーできるほど巨大な企業グループで日本で知らない者はいない。噂では自衛隊の兵器開発などにも関わっており、最早ただの民間企業とは言えないほどに成長を続けているこのグループには当たり前のように就職希望の学生や社会人が殺到し、大学生である瞬も就職志望の一人として応募していた。

瞬が会長を覚えていたのも就職前の下調べがあったからこそである。

「まあ、『W2』の援助でここまで来たわけだが、当然ながらその援助には見返りが求められる。そして、その見返りの対象は目の前に立っている。さあ、ここでおとなしく殺されてくれ、『旅人』よ！」

「すいませんが先約があるのでそれはできません。逆に貴方がたにお願いですが、この基地は壊させてもらうので即刻退去してください」

「つくく！どうやらやるしかないようだな。総員構え！」

隊員達が銃を構え、小田切は日本刀を抜くと鞘を投げ捨てて上に掲げると、それを受けて瞬は両手に麻酔銃を生成する。

一瞬にして空気が張り詰め、静まりかえる室内でただ機械音だけが規則正しく鳴り、何度目かの機械音が上がった瞬間に掲げられた日本刀が瞬を指すように振り下ろされた。

第14話：旅立ち（6）（前書き）

2010/05/02 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第14話：旅立ち（6）

「総員攻撃！」

小田切の命令が響き渡るように飛ぶと、それを受け取った隊員達は即座に構えた銃の引き金を引く。発射された何十発もの銃弾は当然のように瞬の盾によって弾き飛ばされる。

それを受けて瞬も麻酔銃を身をバリケードから晒していた隊員に向けてと引き金を引いて麻酔針を飛ばす。

この基地に入ってからずっと繰り返されるような一方的な攻防だったが、隊員達は銃撃の合間にスモークグレネードを放り投げる。

すると大量の煙幕が瞬を取り囲み、視界が完全になくなると同時に銃撃が止むと戦闘が行われているとは思えないほどに不気味に静まり返る。

これから何かが来るであろうことを察知した瞬も、自然と身構えてその場を動かさずに辺りを見回す。

突然、煙幕の一部が盛り上がったかと思うとその中から日本刀の刃が突き出し、瞬目がけて振り下ろされる。

振り下ろされた日本刀は見えない盾にぶつかる。

ナイフの時のように弾かれるかと思っていた瞬だが、何時まで経ってもその刃は弾かれずに盾に切り込んだまま残っていた。

次第に煙幕が晴れてくるとその日本刀の後ろから小田切が浮かびあがるように現れる。

気迫がそのまま表情に出ているかのような恐ろしい形相で日本刀に力を込めていた。

「ぬっっっっっっっ！」

その迫力に瞬は気圧されながら麻醉銃を小田切に向ける。
小田切はすかさず日本刀を手にその場から後ろに飛び、近くのバリケードに隠れる。

「ふははは！この『天狼』でも切れぬか！さすがに世界最強を誇る『イージスの盾』だ！」

「『天狼』？」

「そうだ！魔法使いによって造られた日本刀の最高傑作の一振りであり、その刃に切られたあらゆる魔力を断ち切るとされている！」

幕末初期に日本刀の美しさに魅了された一人の魔法使いがいた。

彼は収集するだけでは飽き足らず、最後には自分で作り出すまでに至り、彼の最後に造り出したその一振りこそが『天狼』だった。

『天狼』は造り出した魔法使いの魔法なのか、それとも魔力による偶発的な能力かは分からないが魔力で造られた物はすぐに両断され、また空气中に浮遊する魔力へと分解されるはず、だった。

『イージスの盾』は切られてもまだ存在しているばかりか、機能はまるで損なわれてはいない。

小田切は『天狼』では分解させる力が足りないのを知ると同時に、『イージスの盾』がとんでもない人知を超えた魔力を誇っている事を思い知らされる。

「それならそれでこちらでも防御を行うとしようか」

まだ立ち尽くしたままの瞬を小田切は見据えながらバリケードから飛び出す。

そして、ベルトに取り付けた小さい箱のような装置のスイッチを入れる。

途端に箱から青白い光が放たれ、その光は小田切の周りを取り囲むと瞬の盾と同じような球状に落ち着く。

球状の表面は青白く、時折、電流のような青い光がその上を流れる。瞬が麻醉銃を撃ち込んでみると飛んでいった麻醉針が球体に触れる。途端に触れた場所に表面を走っていた青い光が収束して麻醉針を包み込んだかと思うと、電撃のようなバチバチという音の後に焼け焦げた麻醉針が下へと落ちる。

「・・・電撃のバリアということですか」

「そういうことだ、これで貴様の攻撃は私には届かん！さあ、いくらでも撃ってくるがいい！」

わざわざ手を広げてアピールする小田切。

瞬は挑発に答えるように麻醉銃を連射し、何本もの麻醉針が小田切へと向かって飛んでいったが全てが電撃によって焼け焦げた状態で床へと落ちる。

得意げな顔で小田切は瞬を見据えながら『天狼』を構えると即座に真剣な表情へと変わり、次第に空気が張り詰めていく。

だが、お互いに相手の攻撃を完全に防ぐ防御があるためにお互いが手を出し辛く、まるで将棋の千日手のようにお互いの動きが対峙しただけで止まる。

時間にして約1分と経たないがずっと対峙し続けているかのように感じていた2人。

だが、瞬は何かを思いついたのか麻醉銃を消し、指先の動きや足の運びなどをずっと見ていた小田切に向かって軽く笑って見せる。

突然の笑みに面食らった小田切。

不思議に思った次の瞬間、10mはあったであろう距離が一瞬にしてなくなり、その瞬の笑みが目前にまで迫っていた。

「ぬ、ぬおおお!?」

驚きながらも何十年と剣術に携わってきた体は、自然と瞬に向かって左肩から右下に抜ける袈裟切りを自分を守る電撃のバリアを切り裂きながら放つ。

意表をついた攻撃に即座に対応してみせたものの、瞬の勢いは止まらず『天狼』の刃を勢いで弾くばかりか電撃のバリアを無力化して小田切の体へとぶつかる。

まるで車にでもはねられたかのように空中へと舞い上がった小田切だがそれでもなお小田切は意識を保ち、痛みに耐えながら一回転して地面へと着地する。

一方、瞬は勢いが余りにもつきすぎたために小田切の目の前で停止するどころかそのまま何人かを巻き込み、壁へ激突すると壁にめり込んだ所でようやく止まり慌てて後ろを向く。

するとそこには何人かの隊員達が横たわり、いくつもの機械を壊しながら出来た一本の道が出来上がっていた。

その道の一番向こうには小田切が怒りの表情で瞬を睨みつけていた。あまりの気迫に瞬は尻込みしながら、まるで近所の窓ガラスを割った子供が家主に対面した時のようにおどおどしている。

「ご、ごめんなさい。ちょっと力の加減が・・・」

「やってくれるわ、さすがは『旅人』だ!この痛みは油断した私への戒めとしよう!もう出し惜しみはなしだ!」

小田切がまるで獣のような目で瞬をにらみながら手を上にあげる。すると隊員達は腰につけていた鞘からサーベルを引き抜くと一斉に瞬へと襲いかかる。

隊員達の振り下ろしたサーベルは瞬の盾に止められるが、それらも全て『天狼』のように弾かれずにその場にまだ留まり続けようとす

る。

「全部が魔力を切り裂く力を持っているということですか！」

「その通りだ！ただし、『天狼』程の威力はないが足止めには十分だ！」

小田切はその場に腰を落とすと頭の中で呪文の詠唱を始める。次第に小田切の周りに手の拳台の大きさをした赤い火の玉が何処からともなく浮かびあがっていく。

更に詠唱を続けていくとその火の玉はいくつにも増えていき、小田切の姿を覆い隠すまでに増えた所でようやくその増殖は止まる。

麻酔銃でようやく襲いかかってきた全員を眠らせた瞬もその大量の火の玉を目にすると、今までは違うレベルの魔法による攻撃を想像するのは当たり前だった。

ただ、ふと瞬の頭の中にはRPGでよく使われる呪文がよぎり、好奇心から確かめずにはいられなかった。

「……もしかして『ファイヤーボール』ですか？」

「違う、そんな安直な名前ではない！『炎龍』、それが私の魔法の名だ！」

苛立つように答えた小田切の説明を聞いた瞬はまたふと思うところがあるらしく、少し考えるように目を閉じている。

「なんだ？私の魔法に怖気づいたか！」

「……地元にそんな名前中華料理屋が」

核爆発にも耐えると聞いていた盾が破られるとは思っていない瞬だったが、食らうたびに発生する黒煙と爆炎で視界がなくなるのをどうにかせねばと考えていた。

一定の距離を保ちながら司令室内部を飛び回り、逃げながら後ろ向きに作り出したP90（サブマシンガン）を両手で連射してみたが実体が無いのか弾は素通りする。

そして火の球は変わらずに瞬を追尾し続けて飛びまわる。

離れた場所から見ていた小田切はそんな状況を『旅人』が自分の魔法に追い詰められていると勘違いし、更に追い詰めるために周りに浮遊している火の玉を操作して集結させる。

集まった弾が溶け合う様に一つの巨大な球になると、何かの形を作っていくように念じる。

まるで粘土細工のように変化していく火の玉は次第にその名でもある龍の形へと変貌する。

まるで生きているかのように体を波打ちながら主人の前でその場を泳いでみせる。

「よし、これで終わりだ『旅人』よ！消し炭になれ！」

炎の龍は電撃のバリアの周りを一周すると、その全身に電撃が絡むようにまとわりつき赤い体に青い線が何本も走る、

一周した勢いそのままに加速した炎の龍は、瞬に向かって火の球の比ではない速さで飛んでいく。

咄嗟に盾で受けようとした瞬だったが足元に何人かの隊員達が倒れているのに気付くと寸前で龍を回避し、その場からいったん離れて逃げる。

「これが爆発したら貴方の部下も死にますよ!？」

「ふん！お前が死なないならば、結局、我らは処罰される身だ。それが多少早まるのが問題あるまい。それに勝利には犠牲はつきものだ」

「なんて勝手な！」

「お前さえ死んでくれればそれで部下も報われる！さあ、死ぬがいい！」

小田切の意思を受けて炎の龍は逃げ回る瞬の後を飛んで追いかけて、今すぐにも瞬にぶつかろうとする。

瞬も爆発させられるだけの場所を探すが室内は所々に隊員がいるために断念し、一旦外へと出ようとする。

だが入口に上から強固な金属製のシャッターが現れて外への扉を閉じてしまい、寸前のところで瞬は方向転換をして龍から逃げる。

「逃がすか！」

声の元を見れば小田切がシャッターを下ろすよう操作したらしく、手もとのコンソールに手を置きながら瞬をずっと見ている。

その状態で龍を操作しながらまだ倒れていない隊員達に指示を出し、ついに瞬は追い詰められる。

室内の角にまで瞬は追いやられ、前方には龍が陣取っており逃げ場は何処にもない。

「これで終わりだな『旅人』！」

「……一応、言っておきますが『イージスの盾』は貴方の攻撃なんて効かないですよ？ただ、その龍の爆発が貴方達を傷つけるだけでなく、殺してしまう。僕はそれが嫌なんです。だから、龍を引

っ込めてください！」

「お優しい事だな！だが、そんなたわ言など聞かん！行け、『炎龍』！」

瞬の忠告を無視した小田切は龍を隅に固まっている瞬目がけて行くよう、『天狼』を振り下ろして瞬を指し示すと龍はそれに従って瞬へと突進する。

高速で飛ぶ龍はその場から動かない瞬を完全に捉え、瞬に激突するのを周りにいた隊員達と小田切は確信していた。

「これで終わりだ！」

龍が瞬の盾に触れようとした瞬間だった。

一瞬だけ炎の龍を両断するように何かを通り抜けたかと思うと室内にあるはずのない風が吹き抜ける。

次の瞬間、龍は頭からしっぽまでを綺麗に2つに割られ、その割れた口から淡い光が漏れるとそこから崩れるように消えていった。

全員が何が起こったのか分からなかったが、瞬の手に握られている見覚えのある日本刀を見ると小田切は何が起こったのかをいち早く察した。

「貴様、まさか・・・！」

「ええ、そのまさかです。『天狼』、作っちゃいました」

この世に一振りしかないはずの自分の愛刀がニコニコと笑う瞬の手にも握られる。

刀には『旅人』の力で強めに振るったためか、はたまた『炎龍』を切ったためか、刃に小さいヒビが入っていた。

更に瞬は『天狼』を何本も作り出すと茫然と立っている小田切から少し外すよう狙いをつけて力一杯投げつける。

それを事前に察知していた小田切は炎の球を作り出し、その全てを防御へと回す。

だが投げつけられた『天狼』はその全てをバターでも切るかのようになんげと切り飛ばし、小田切の周りに張られていた電撃のバリアをも貫くと壁へと突き刺さる。

その場から逃げようとした小田切だったが次から次へと壁へ『天狼』が突き刺さっていき、飛んでくる刀に次第に逃げ場をなくしナイフ投げの的にもされているかのように追い詰められる。

その様子にどうにもできない隊員達を余所に、瞬は室内を低く飛ぶようにして小田切の前まで移動する。

『天狼』を構えるとまだかろうじて稼働している電撃のバリアを切り裂き、小田切の腰についていた装置を上半身の力のみで貫く。

すると今まで小田切を覆っていたバリヤはバチバチと音を立てながら消えていき、瞬は『天狼』を消すと再び麻醉銃を作り出し、小田切の眉間につきつける。

「終わりです」

超人的な身体能力、絶対無敵の『イージスの盾』を持ち、魔法の無効化を行う手段まで持ってしまった『旅人』に最早勝てる手段がない事を察した小田切。

茫然とした様子でその場に膝をつくと、それを見て終わった事を察した隊員達もその場に銃とサーベルを落としていく。

小田切にさっきまでの自信に充ち溢れた傲慢な姿はまるで見られず、今は茫然自失といった感じで焦点の合っていない目で床を見ながらつぶやき出す。

「お、終わりだ……。終わり……」

「……『W2』の本部はどこですか？」

「!?!?……っ……っく、くはははは！貴様が本部に何の用だ
！」

「約束がありましたね。『W2』を壊滅させないといけないんです」

簡単にとんでもない事を言うのに対し、小田切は嘘のような発言に驚きのあまり言葉を失い、ただ信じられないといった様子で瞬を見ていた。

「お、お前が『W2』を潰す？それは何の」

「冗談じゃないですよ、本気です」

本気と言う割には軽く言うものだと思っていた。だが、瞬の目を見ると瞳の奥に強い意志を秘めているのが分かり、間違いなく本当の事を言っているのだと思知らされる。

「……貴様には無理だ。人も殺せないような甘い奴にはな」

「人を殺さなくても組織を潰すやり方はあるはずですよ。なら、やってみないと分からないでしょう?」

「そうか、それなら行ってみるがいい。ただ、私もその場所は知らない。知っているのはアジア中の『W2』を統括する男だ」

「その人は何処に?」

「ロシアのどこかにいる。私のようにそれなりの社会的地位に
いている男だ。そこから先は自分で探すんだな」

そう言うと小田切は腰につけていたホルスターからM92FSを引
き抜くと警戒して離れた瞬を余所に、自分のこめかみに銃を突き付
ける。

訳が分からないといった様子で小田切を見ている瞬。

だが、小田切はそのうるたえる様子を見ると冷や汗をかきながらも
ニヤツと笑う。

「これはお前のせいだ。これから先はお前の行動一つで必ず死が
付きまとう。子供のように甘いお前が何処まで出来るか地獄から見
てみよう！」

「や、やめっ……！」

止めに入ろうとした瞬だったが、それよりも早く乾いた音が室内に
響き渡る。

そして、小田切の体が衝撃でグラリと揺れたかと思うとそのまま床
へと頭から血を吹き出して倒れる。

絶命した小田切の体はまるで動くことなく、事切れた瞳は何も映し
はしない。

瞬は悪人だったとはいえ止められなかったのを悔みながら小田切の
体の隣に立ち、見開いたままの目だった小田切の目を閉じる。

「そんな……、なんで、なんで死ななければいけないんだ……」

「
」
呟きに答える者は誰もいなかった。

代りに大音量で鳴り響く警告音が基地内に流れる。

内容としては基地の自爆が30分後に行われると言う内容であり、それを聞いた隊員達は総司令の小田切の死を悲しみながらもその場を後にする。

「姫、僕は約束を守るべきなんだろうか・・・」

瞬は自分のせいで死んだという小田切の死んでいったシーンが頭から離れない。

それと同時に姫との約束のシーンが頭の中で流れ続けて自分はどうしたらいいのかとその場に立ち続けていた。

相談ができる人も話を聞いてくれる人もおらず、ただただ己の中で疑問が繰り返され続け、簡単に答えは出そうにない。

自爆を告げる無機質な警告のカウントだけがずっと聞こえていた。

第15話：旅立ち（7）（前書き）

2010/05/02 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第15話：旅立ち（7）

基地内部でけたたましく鳴る自爆のアナウンス。

だが、それがまるで聞こえていないかのように、瞬は事切れた小田切を見下ろしながらその場に立ち続けていた。

自殺にまで追いやったのが自分だと言う自責の念と、どうしようもなかったと自分に言い聞かせるような考えが頭の中で入り乱れる。

人の死が絡んでいるためにそう簡単に結論は出ず、瞬はその場に立ち尽くし続けた。

ふと先に脱出させた親友二人の安否が気にかかるとそこで自爆のアナウンスが流れている事に気づき、すぐさまその場を後にする。

司令室から出る所で後ろを一度振り向いて、床に横たわる小田切の死体を忘れないためにしっかりと目に焼き付けるとその場を後にする。

通路には銃器がいくつも転がっているがその持ち主であるはずの瞬が眠らせた隊員達の姿はない。

おそらく無事だった別の隊員達がその場から移動させたのだろう。

最初は自爆まで30分と言っていたアナウンスも瞬が立ちつくす間に残り10分と迫っていた。

瞬は二人を脱出させた部屋へと急いだが部屋の中には既に使用できる脱出装置は一つもない。

他にも聞きだしていた脱出装置のある部屋を見て回るが、どれもが使用済みで使用できる物は一つも残っていない。

仕方なく来た道に戻り始め、超人的な脚力で今までの道を一気に戻っていく。

破壊されたエレベーターシャフト内を鉄骨を足場にして駆け上がり、上へ抜けると長い通路の奥に外の光が見えるはずだった。

だが、外へと通じる通路には誰が落としたのか、それとも自爆による爆破漏れを抑えるためか金属製のシャッターが下りその行く手を

阻む。

また爆破するべきかと考える瞬だが、ふと屋上での姫の教えを思い出す。

物を破壊する時に使うといい、そう教えられたM82A2（ライフル）を2つ作り出す。

それを常人には不可能な両肩に1つずつ乗せるといふ荒技に出ると、世界最大級の銃をシャッターへ向けてその引き金を引く。

通常であるなら1発撃つだけでもかなりの反動があるはずだが、まるで何事もないかのように瞬は連射する。

次々に銃弾がシャッターへと撃ち込まれていき、銃痕が丸い穴を描くようにいくつもつけられる。

瞬はその真ん中を力一杯蹴り飛ばし、ちょうど人一人分がくぐれるだけの大きさの穴が開く。

予想以上の破壊力に教えた姫に呆れながら瞬はその穴をくぐり抜けた。

しかし外の景色が見える事はなく、またシャッターが行く手をふさいでいた。

瞬は軽い苛立ちを覚えながらも同じようにM82A2を撃ち込んで穴を開けると、また穴を通り抜けてはまたシャッターに出くわす。

「・・・いくつあるんでしょう?」

距離的にはそこそこ進んではいるものの自爆までの残り時間は既に5分を切っていた。

瞬は自分よりもより2人の身の安全が心配だった。

次々に同じようにシャッターを処理しながら先へと進み続け、ようやくシャッターの穴の中に夕暮れの光が見えたかと思うと自爆までのカウントは既に2分を切っていた。

慌ててシャッターをくぐり抜けた瞬は爆破漏れを考慮し、入口にあったのと同じ金属製の扉を通路にはめ込むようにいくつも生成する

とすぐにその場を離れる。

岩場へと出た瞬間は2人の位置は分からないがとにかく探すしかないとその場を後にする。

山中を駆け回っていると、木が不自然に折れている場所にでかい球体のような物が転がっているのを見つけた。

すぐに側へと駆け寄るが中は覗き込む事が出来ず、球体に張り付いたようなドアが一つだけある。

まだ開けられている形跡もないが瞬には開け方も分からない。

「誰かいるのか!？」

中から聞こえてきた声に少しだけ驚いた瞬だったが、その聞き覚えのある声に安堵する。

だが、すぐに爆破されるのを思い出すと焦りながら中に返事を返す。

「僕だ!時間がない!何かにつかまっけていてくれ!」

力任せに球体を担ぎあげると木を避けながら山を駆け下り、麓に着いた所でその時間は来た。

基地内部でカウントダウンが0になる。

するとあらかじめ基地内部の至る所に仕込まれていた爆薬が次々に爆発し、爆炎を上げながら今まで積み上げてきた基地を破壊していく。

爆発によって破壊された場所から元は坑道だった基地内部に大量の土砂が流れ込み、山の表面も崩れ陥没していく。

その様子を先に脱出し周りにいた隊員達は全員が呆然としながら見続けていた。

ある者は涙を流し、ある者は地面に両膝をついて頂垂れる。

近くに『旅人』がいるのにもかかわらず、まるで気が付いていないかのようにその場から動こうとする者はだれ一人としていなかった。

彼らの心の拠り所になっていたのかも知れないな、と少しだけ罪悪感を覚えた瞬間。

とりあえず気付かれていないうちに球体を抱えたままその場を離れると、十分に離れた別の山中で球体を下ろす。

「もう大丈夫。2人とも出てきてくれ」

「・・・それが開け方が分からないんだよ。そのせいでさっきから出れないんだ」

「・・・そ、そう。分かった、こっちで開けてみる」

とは言ったものの外から押す開閉スイッチのような物はまるでない。仕方なくドアの隙間に指を差し込むとドアを力ずくで剥がしにかかる。

表面は金属できていたが内部的には衝撃吸収用のスポンジなどの素材が使われていたため、力を込めるだけで簡単に開いた。

中は白いソファのような素材で覆われた丸い部屋になっており、その中に2人は座っていたが瞬の顔を見ると喜びながら外へと飛び出す。

怪我がないかと2人に聞こうと口を開こうとした瞬だが、2人は瞬に詰め寄るように顔を近づけて捲し立てるように言う。

「瞬！無事か！足付いてるよな！」

「瞬！大丈夫？怪我はない？」

「あ、ああ、僕は大丈夫だから、2人とも少し離れてくれ」

てつきり自分が心配する側だと思っていた瞬だが、まるで立場が逆

転してしまったかのように心配される側になつていたのに面食らう。とりあえず近すぎる2人を少し離れた瞬は2人の様子を窺う。どうやら瞬の言葉を聞いてはいるが、まだ不安があるらしく心配な顔を浮かべている。

花梨に至つては顔が青ざめたままで瞬から視線を外す事はない。

一旦仕切りなおすように瞬は小さく咳払いをすると、2人に向き直る。

「コホンツ！・・・2人とも怪我はない？」

「どこも怪我しちゃいねえよ。それより今度は何なんだ？あれは何かの組織なのか？瞬、お前、かなり厄介な事に巻き込まれたんじゃないのか？」

「そ、そうよ、瞬！一体どうしたの？昨日からいなくなるしちゃんと理由を説明して！」

もう自分に主導権がない事を悟つた瞬は諦めたかのように肩を落とす。

手早く説明するために2人の前に手を差し出すと、差し出された手を不思議に見ていた2人の前で熱々のコーヒーが3つ乗せられたお盆を作り出す。

突然の出来事に驚いた2人ではあるが、あくまでその反応はマジックを見て驚いた時のような反応であり、当然。

「突然、マジックか？何時の間にそんなネタを仕込んだんだ？」

「そんなことでごまかさないで！手品はいいから説明して！」

となる。

瞬はこれではダメだと素直に雪山での出来事から話し始め、そのまま質問を交えながら説明し続けて約30分ほどたった。熱心な説明のおかげか2人ともおおよその話は理解してくれたようだ。

空になったコーヒーカップを瞬に返しながら、賢悟と花梨はそれぞれが深く考え込んでいた。

2人とも言葉を発しないため、瞬は少し居心地が悪く感じていたが何かを切り出そうにも2人とも真剣な表情をしていたため、下手に喋れずにどうしたものかと悩む。

「なあ……、なんでお前なんだ？お前じゃなくてももつと他に強い奴ならいるじゃないか！なんで俺の親友が……」

「……賢悟、ごめん。でもこれは引き受けないといけないと思っただのは僕自身なんだ。半ば脅されたにせよ、僕は間違っただとは思っていないよ」

「ふざけんな！お前はよくても周りはそう思わなねえよ！これからどうするつもりなんだ？姫とか言う奴の約束を守って組織の親玉を潰しに行くのか？仮にそれがうまくいったとしてその後は？世界を放浪する『旅人』にでもなるのか！」

「先の事までは分からない。ただ、約束は守ろうとは思っているよ」

「それが人殺しでもか！？」

「ッ！……それは」

言われた途端に瞬の脳裏に小田切が自殺した瞬間が浮かび、胸を締

め付けられるような感覚を覚える。

「人一倍、いや人の何倍も優しい奴が人殺しなんて出来るわけないだろ！なあ、そんな約束なんて無視して普通どおりに暮らしていようぜ？遠い所で生活してればばれないって。その『リアルメモリ』とかいう魔法が使えりや生活に困る事はないだろ。な？そうしろよ！」

賢悟の意見は瞬にとつてもとても魅力的な話に思える。

だが、姫に命をかけてまで託された約束を破ると考えると瞬にはどうしてもその話に飛びつく気にはなれない。

「……ごめん」

謝罪を聞いた賢悟は意見を一向に曲げようとしないうちに苛立ち、頭をクシャクシャと掻きながらその場から立つと近くの木にもたれかかる。

「瞬……、いつ帰ってくるつもりなの？」

「花梨！行かせる気なのか！？」

「昔から瞬は決めたら言っても聞くような奴じゃないのは知ってるでしょ？瞬はきつと全部終えて帰ってくるよ、私達の元に」

泣きそうな所をグツとこらえて、花梨は多少不自然な笑顔を浮かべて瞬を見る。

瞬と賢悟の2人はその花梨の気持ちを察して何も言えず、花梨はそのまま言葉を続ける。

「そ、それに瞬なら人を殺さなくても解決してくるよ。今までもそうだったじゃない。だから・・・だか、ら・・・」

花梨の言葉は段々と弱弱しくなり、涙が目から溢れるように流れ出ると瞬は自然と花梨を抱きしめていた。

「・・・もう言わなくていいよ。僕はちゃんと帰ってくるし、人殺しにもならない。約束するよ。だから、2人とも待っていてくれ」

吹っ切れたように瞬がそう言った途端に花梨の体は大きく震え、泣き声を上げながら抑えていた涙が目から流れ続け、瞬の胸の中でずつと泣き続ける。

賢悟も顔は向けないものの頬に涙を流し、何度も腕で拭うものの涙は止まらない。

「馬鹿野郎！さっさと行っちゃえ！・・・ちゃんと帰ってこいよ」

「うん・・・、2人ともさよなら」

「ひぐっ・・・、ち、違うよ、ぐすっ、またね、でしょ？」

花梨の笑顔に心臓の鼓動が早まっていくのを瞬は感じた。

出来るだけそれが分からないように気持ちを抑えながら笑顔を浮かべて答える。

「ご、ごめん。・・・2人ともまたね！」

言い終わると花梨を放してその場から飛び上がり、空の中へと消えていくように見えなくなっていく。

見送りながらもまだ泣き続ける花梨の肩を賢悟は抱き寄せ、2人は

瞬が消えていった夕暮れの空をそのままずっと見続けていた。

あるビルの窓のない閉め切られた一室。

丸い会議用テーブルの上にくつものディスプレイが中央を向くように並べられ、その画面には『W2』の白い軍服を着た人たちが映りこんでいた。

本人達はここからかなり離れた位置、それこそ大陸レベルで離れた場所にいながら同じようなディスプレイの前に座っている。

「さて、日本に現れたという話ですが一体どうなったのですかな、アジア統括長？」

年老いたがただならぬ重圧感を身に纏った白人の男が、少しやせ細った金髪の白人の男へとディスプレイの上についたカメラを操作して向ける。

それに合わせて周りのディスプレイのカメラも一斉にそちらを向き、注目されたアジア統括長は少し焦り気味に手元の書類を読み上げる。

「・・・残念ながら取り逃がしたようです。現地時間の17:00頃、日本支部に侵入した『旅人』の手により日本支部は壊滅、重軽傷者は約30名、死者1名。『旅人』は今もまだ日本内部に張り巡らせた網にはかかっています」

「その『旅人』のナンバーは？」

「まだ推測でしかありませんが、ちょうど同じ所で目撃報告のあったナンバー1、ヴァネッサ・イーグランドの後任だと思われます」

そう聞いた途端、年老いた白人の男だけが驚いたように反応し、細かった目を見開く。

「何だと！？・・・いや、まだ可能性でしかないか。そんな事があるわけが・・・」

老人だけがあまりにも反応するのがおかしいのか、周りの全員もなぜそんなにも驚いているのかが分からず動揺する。

ただ、何時まで経っても独り言をブツブツとつぶやき続けていたため話が先に進まず、アジア支部長が声をかける。

「あの、本部長。どうかされましたか？何か気になる点でも」

「・・・あ、ああ、気にしなくて結構だ諸君、ただの私事だ。で、現在の旅人の情報は？」

「皆様にお送りした日本支部侵入時の『旅人』の映像と拡大画像、それと判明している情報を参照してください」

各々が送られてきている動画や画像を見ると、ざわめきのような声がいくつもあがる。

「これは・・・日本人か？今までの中で日本人は初ではないのか？」

「ふむ、まだ動きには慣れていないうえにまるで無駄が多い。継承が行われてまだ間もないという事か」

「使っているのは・・・麻酔銃か。ならば人殺しにはまだ抵抗が

あるようだ。先ほどは死者1名とあったが・・・なるほど、日本支部長の自決でしたか」

「それにしても継承されてまだ間もない新人が一体何のために日本支部を壊滅させる？資料によれば継承される前はただの大学生のようだ」

「その事についてはこちらをご覧ください」

アジア統括長は手元のキーボードを操作する。

全員のディスプレイに日本支部内部で行われた戦闘の後に瞬が日本支部長と会話している内容の動画が映し出される。

やり取りの一部始終を見た所で全員が納得したが、まるで危機感のようなものはなかった。

「ふん、約束のために我々を壊滅させる、か。奴は出来ない約束をしたものだ」

「ははは、そうですね。すぐに追撃の手配を」

「いえ、待つて下さい。彼が向かってくるならばそれを逆手にとり、捕獲、もしくは殺害すればいいのではないですか？まだ継承されて間もなければ付け入る隙はいくらでもあるはず」

「罖を仕掛けるといふことか。よかろう、その意見を採用だ。ただし、悟られないためにあくまで搜索の手は緩めるな、アジア統括長」

「はい、分かりました」

そう言うと全てのディスプレイの通信が終わり、アジア統括長はその場に頭を抱えて頂垂れる。

完全無欠の防御を備え、何でも作成できる力を持つ『旅人』に有効な罠とは一体何なのだろうか、と。

向かってきた所にカウンターのよう罠を食らわせる、案としては悪くはない。

がその仕掛ける罠が一番の問題であり、また『旅人』に関しての有効な攻撃方法は確立されていない。

彼はすぐに手元の電話に手を伸ばし、部下や魔法研究者を収集するよう電話先の部下に伝える。

これから旅人が訪れるまでの間、彼は眠れない日々を送る事になるようだ。

2人と別れた瞬間は目の前に広がる海の前に立ち、どうしたものかと頭を悩ませていた。

瞬は『W2』による圧力が何かにより表立ってはいないものの警察による指名手配がされているのは理解している。

それによりロシアに渡るための飛行機や船が使えないであろうことも分かつている。

一般的に知られている海を渡る手段がこれではなくなったために瞬は頭を悩ませていた。

それならば自分で船を造ってしまえばいいのではと思うものの、操縦の仕方など2日前までただの大学生だった瞬が分かる訳がない。

当然、飛行機も同様の理由で却下となった。

「……うーん、密航船でも探す？」

とは言つものの当然そんな犯罪沙汰の情報など持っているわけもない。
不安で一杯だがいかだで頑張ろうかと考えた時、ふと最強を誇る『
イージスの盾』の事が頭に浮かぶ。

「ひよつとして・・・？」

考え通りならいけるかもと盾を展開させると、意を決して冬の海の中に飛び込んでみる。
すると盾が周りの海水を弾き、瞬の周りだけがまるで空気の泡にでも包まれているかのように丸い空間が出来ていた。

「これは凄い・・・」

静まりかえるように音のない海の中にオレンジ色の夕暮れの光が差し込み、海もオレンジ色に染める中を魚が泳ぎ回る。

そんな光景が目の前に広がり、まるで360度体感型の水族館にでも来ているかのようだ。

瞬は盾の外へと指を突き出してみると間違はなく水に濡れた感覚があり、指を抜くとその隙間を一瞬で周りの海水が埋めてしまう。

足元は砂の上に直接立っているようだが不思議と砂は乾き、海水に濡れている様子もない。

試しに軽く走ってみるとまるで陸を走っているかのように水の抵抗など一切感じずに走れる。

「これならいけそうだ」

移動手段がどうにかなりそうな事に安堵して一息つく。

手元に山登りをした時に使っていたGPS装置を作り出すとその座標位置を世界地図で確認しながら海底を走り、一路ロシアを目指し

た。

第16話：魔狼（1）（前書き）

2010/05/02 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第16話：魔狼（1）

そびえ立つ雪化粧した山が月を背負うように月明かりに照らされ、その月光によって出来た巨大な山影は麓の村を飲み込むように覆い尽くしている。

雪が羽毛のように柔らかく降る村の中には誰も出歩く者はいない。まばらに立つ家の明かりも全体の1割程度が付いている程度であり、村は眠りに着く寸前であった。

「アオオオオオオーッン！！」

突然、その静まりかえった村の中に響くほどの遠吠えが山の方から響き渡る。

そして、遠吠えを合図にして家の電気が次々につくと灯りと銃を手にした男達が村の少し開けた広場へと集まる。

「奴だ、奴が来るぞ！」

「男は集まれ！女、子供は戸締りして立て籠っている！電気はつけるな、奴を呼ぶぞ！」

防寒具に身を包んだ男達は自前の銃の動作を確認しながら、事前に決めていた作戦通りに各々の持ち場へと移動していく。

所定の位置へと移動し終わると、その場から動かずにひたすらジッと奴がやってくるのを待ち構える。

また一時の間だけ静まりかえった村だったが、山側の村の入口、そのずっと向こうに雪煙りが上がると村へと一直線に向かってくる。

そのスピードは自動車並みの早さがあり、雪煙りの前には一匹のいかい4足歩行を行う獣がいた。

獣は雪に紛れるような白い毛並みに肥大化した2本の牙を持ち、大きさは標準の人間の2回りもでかいがその姿は誰の目にも狼に見える。

ただ一つ普通の狼と違って点があつた。

目がまるでルピーのように赤く光っているのだ。

山影の薄暗い中で不気味に光り輝きながら迫ってくる赤い目は待ち構えている村の男達に恐怖と焦りを与える。

すぐそこにまで悪魔が迫ってきているかのような錯覚に何人かの男達は、今すぐにも構えた銃を撃つてしまいたいそうだった。

「う、うああ・・・」

「ま、まだだ、まだ撃つんじゃない！」

「もう駄目だ！」

狼が村の入口を超えた所でその恐怖に耐えられなくなった一人の男がその銃の引き金を引く。

それに釣られて他の男達も耐えきれず、次々に発砲していく。

弾は狼へと向かっていくはずだったが距離があるうえ、山から吹き下ろされるように吹く風が狼に味方するように追い風となりただの一発も当たりはせずに逸れていく。

その間も狼の走りは止まることはない。

赤い瞳が一番近くにいた男に狙いをつけると勢いのままに空へと飛び上がる。

男達は遅れて空中の狼へを撃つがまるで当たらず、狼は恐怖にひきつった男の顔を捉えながら喉笛を一瞬で食いちぎる。

「がああああつ！」

悲鳴にならない悲鳴を上げて男が倒れる。

首から大量の血を辺りへまき散らし、その周囲の雪と狼の白い毛並みも真つ赤に染めていく。

狼は食いちぎった喉笛を吐きだすと、恐怖で石のように固まってしまった男達へと殺意の籠った赤い目を向ける。

「撃て！撃て！」

かろうじて恐怖に押し勝った一人の年輩の男が銃を撃つ。

慌てて全員が銃を撃ち始めたが、狼は逃げるどころか逆に男達の中へと駆けだす。

狼は銃弾が飛び交う中を信じられない速度で回避しながら、行く手を遮る男を何人も吹き飛ばして駆け抜けていく。

その狼とは逆に、周りの男達は撃つた位置が悪くお互いの射線上に居合わせた男が同士討ちする形になり、何人も銃弾に倒れていく。

「くそ！撃つな！巻き添えを食うぞ！」

狼はさつきから命令し続けている一番奥にいた年輩の男へと狙いを定め、赤い瞳にその姿を捉える。

男の命令によつて銃撃の止んだ中を狼は俊敏に走り抜けて男へと飛びかかる。

男は構えた猟銃を飛びかかる狼へと一瞬で合わせると引き金を引いた。

弾が撃たれる直前、危険を察知した狼は体を捻るものの飛び出した銃弾は狼の右足へと突き刺さる。

お返しとばかりに狼は男とすれ違いざまに男の左腕に深々と爪をつきたてながら通り抜けて地面へと降り立つ。

怪我を負った狼は村に来た時ほど素早くは走れないものの、一目散に村の反対側の入口へと消えていく。

「ぐううう・・・、奴め、逃げ寄ったか。あ、相討ちか、ううっ・・・！」

「おい、じいさん、大丈夫か！医者だ！診療所へかつぎ込め！」

脅威が去った事で皆は安堵した。

だが、その代償とでもいうかのように左腕に3本のでかい爪痕を刻まれた年輩の男はものすごい量の脂汗を掻き、出血はいつまでたっても収まらない。

とうとう痛み立っていらなくなり、その場で意識を無くして倒れる様に横たわる。

何人が無事だったの男達が担架へと彼を乗せ、村の診療所へと急ぐ。

「ウオオオオーッーン！！」

どこからともなく響き渡る遠吠えはその場に残った男達や家の中に隠れていた女、子供を恐怖のどん底へとたたき落とし、村は静寂を違った形で取り戻した。

穏やかな波が打ち寄せる海岸で一人の地元の釣り人が竿を大きくしならせて振り、勢いよく飛んでいった釣り針は遠くの方で着水する。

釣り人は手馴れた手際で何度かリールを巻いたり、竿を振ったりして巧みに釣り針を操作し、魚が食いつきやすいように色々アクションを起こす。

何度か繰り返ししているうちに魚がかかったのか、急に不自然な形に

竿がしなる。

「きやがった！こりゃ大物だな！」

手繰り寄せようと勢いよくリールを巻こうとしたものの、今までに体験したことがない程に力強く引つ張られてしまい、まるで動くよ
うな気がしない。

それどころかこのままでは竿が折れると判断した釣り人は一旦リールから手を離す。

魚が泳ぎ疲れた所で一気に釣りあげる作戦に出た釣り人は糸が切れないよう、糸を伸ばす。

するとリールは激しく回転を続け、糸がずっと出続けていく。

最後にはリールの中の糸がすべてなくなり、釣り人が抑え込もうとするより先に釣り竿は海へと飛び出すと海中へと沈んでいった。

「ちくしょう！マグロでも迷い込んできやがったのか!？」

釣りを始めてから初めて体験するほどの理不尽な戦いにただ悔しがる釣り人。

ふと釣り竿が消えた海の辺りがまるで割れるように穴が空いているのに気づいた。

その穴は徐々にでかくなっていき、更に釣り人の方へと向かってドンドンと近づいてくる。

「な、なんだあ!？」

穴がある程度大きくなった所でその穴の中心に人が立っているのに釣り人は気づいた。

腰を抜かしながらも釣り人はただ傍観し続けていると中心にいた人は砂浜の上へと上がった。

未確認生物や超能力者を想像している釣り人を余所に砂の上に立つたのは気優しそうな青年である瞬、「旅人」であった。手には先ほど引っ張ったであろう釣り竿が握られており、衣服の方はまるで濡れている様子がない。だが、何処となく顔が青ざめ、目は死んでいるようにまるで活気のない目をしていた。

「……も、……も」

「も？」

「……もう海の底は歩かない」

「はあ？」

あまりの意味不明さに思わず聞き返してしまった釣り人。

瞬はそんな釣り人など見えていないように釣り竿をその場に落とすとフラフラと歩き出す。

釣り人は訳が分からないが落としていった釣り竿を持つと酔っ払いの千鳥足のように歩いている瞬の手を捕まえにかかる。

ところが見えない盾によってそれは遮られ、釣り人は触れない事を不思議に思いながら瞬の先へ回り込む。

瞬は前に現れた釣り人を認識するとその場に立ち止まり、それに安心した釣り人はさつきから体験している不思議な現象に興奮した様に話しかける。

「お前は何なんだ！？海の中から現れるわ、見えない壁があるみたいに触れないわ！ひよつとして宇宙人か！？」

「……は、はは、……ただの臆病な人間ですよ」

「ただの人間がさつきみたいなさ出来るわけないだろ！正直に言ってみろ！」

「いや・・・まあ、ね・・・」

釣り人はそのどことなく虚ろな感じであいまいな返答をしてきたのにイラツとした。

携帯電話を取り出そうと一度俯いた途端、前からよるめくような風が吹いたかと思うと目の前にいた瞬間は消えていた。

慌てて周りを見渡すが砂浜には隠れられるような場所はどこにもない。

また起こした不思議な現象に驚きながらも問い詰める対象がいなくなつてどうしたらいいかわからず、釣り人は叫びながら辺りを探し始める。

その様子を上空で眺める瞬間は釣り人をまいたのに安心し、近くの森の中へと落ちていく。

地面へと降り立って辺りを窺うが人気は全くないようだ。

瞬間は人目がないのいい事に草の上に寝転がると疲れたように深いため息をつく。

「はああ・・・」

何をするでもなく、ただ木々の合間から見える太陽を無気力に眺める瞬間。

彼がこんなになってしまったのには訳がある。

日本から意気揚々と海底を走り出すとまだ浅い場所にいる間はよかった。

初めて見る様な魚や生物などに心躍っていた。

だが、途中から深くなつていくにつれ日の光も徐々に届かなくなり、

薄暗い中を作り出した懐中電灯を片手に走り続けることとなった。まだその位ならば瞬には平気ではあったものの完全に日が落ち、更にもっと深い場所に行くと懐中電灯の光程度では暗闇が全く消えない。

いくつも懐中電灯を作り出して体にくくりつけてようやく前が少し見える程度の今まで経験した事のない闇に、不安や恐怖が押し寄せていた。

それでも瞬はどうか前に進み続けていた。

少し休憩を取ってその場に座りながらお茶を飲んでいた時だった。

不意に後ろから獲物と勘違いした深海魚が迫り、それに反応して瞬は後ろを振り向く。

その途端、グロテスクな深海魚よりも押しつぶされてしまいそうなほど目の前に広がる深海の闇が瞬の目に飛び込んでくる。

すると巨大な闇はいとも簡単に瞬の心へと入り込み、その心を負の心へと一気に塗り替えてしまう。

瞬はパニック状態になると早くここから出ようと海面へと向かってあらん限りの力を使って飛び上がる。

海水全てを弾いてしまう盾によって足元は地上と変わらず、また水圧も水の影響も全てなくなるため一気に上へと上がる。

だが、逆に海水の影響をなくした事で飛び上がった位置に漂う事が出来ず下へと落ちていく。

更に悪い事に落ちた先が深く裂けた海溝だったため更に深い海の底へと飲み込まれるように落ちていく羽目になった。

そこから絶叫を伴った更なる恐怖を叩きこまれることになる。

その後、どうにか正気を保つと『旅人』の力を使い、ただひたすらに走り続けた結果、何時の間にかロシアにまでたどり着いていたという訳である。

結果的には無事に目的地にまでたどり着く事が出来たものの、その体験はトラウマとして瞬の心の奥底に深く刻み込まれたのと言ってもいい。

特に動くでもなくただ横になるだけで30分近く立つとようやく少しは落ち着いたらしい瞬はその場に立ちあがる。ただ、その表情はやはりまだ暗いままだった。

「・・・ふう、いくとしましょうか」

それでも気持ちが無理やり切り替えた所で今の現在地を作り出したGPSで再度確認してみるとロシアには確かに入っていた。

これで立派な密入国者になったのを考えようしながら瞬は次の目的地として、とりあえず表側の『W2』支部を探しに行くのを決める。

目的が決まった瞬は森の中からさっきの釣り人が暮らしているであろう小さな漁村へと目を向ける。

どう見ても電気が通っているのがせいぜいといった程度でしかないパソコンでネットを使うというのは難しいように見える。

それならばと大学で使っていたノートパソコンと世界で使えるのがうりとなっていた自分の携帯電話を作り出す。

パソコンの電源を入れて携帯電話を接続してみたもののいつまでたってもネットは使えない。

不思議に思っただけでノートパソコンと接続した携帯電話を見てみると、アンテナが立つどころか圏外の表示が空しくついていた。

「圏外、ですか・・・そうですね・・・」

わざわざノートパソコンまで作り出したにも関わらず、問題外な状況に瞬は肩を落としながら2つとも消しておく。

しょうがないと瞬はもっと発展してる場所にまで移動するのを決める。

そして、GPSと地図を頼りに発展している街を目指して森の中を西へと進み出す。

森の中をスピードを落として約3時間近く走り続けた。目指していた街まであと半分という位置にまで到達すると日も暮れ始めていた。

さすがに海底で体験した暗闇の恐怖がまだ体に残っているらしく、瞬はこの森の中で夜を迎えるのが怖く思えてきた。

普段なら夜で一人である事などまるで苦にならない瞬だが、ホラー映画を見た後に夜一人でトイレに行けないような子供のように今は一人でいるのが心細い。

野宿は無理かなと近くにある街や村を探してみる。

すると、ある山の麓に村があるらしく自然とそちらへ向けて足を進めていた。

程なくして村へとたどり着いたのだが、村は日がまだあるというのに誰も出歩いていない。

まるで死んでいるかのように村は静まりかえっていた。

「誰もいない・・・訳ではないようですね」

点々とある家を見てみると点けられた灯りが窓から漏れており、煙突や換気扇からは夕飯の準備か煙が上がっている。

人がいるのに安心すると『W2』がない事を祈りながら村の中を歩き回る。

そのうち瞬はベッドの絵が描かれた看板が風に揺れている店を見つけた。

店自体はかなり古いらしく、所々にひびが入っている上に壁が風化によってボロボロでどこことなく人を近寄せないような雰囲気がある。

しかし背に腹は代えられず、瞬は意を決して中へと入ろうとした所でふと気付いた。

「ロシア語、知らないな」

言葉が通じないのではどうにもならないかなと引き返そうとする瞬間だが、上陸した所で出くわした釣り人と普通に会話していたの思ひ出す。

釣り人は明らかに地元の人のようだった。

ただ、話している言葉は瞬の耳には日本語を話しているようにしか聞こえなかった。

これが『旅人』の力の一つなのか、それとも釣り人が日本語を習得していたのかは分からない。

だが、よくよく考えると姫も日本語を話していた。

ならば前者だろうと推測した瞬は、再び宿屋の中に足を入れようとした所でまた足が止まる。

「・・・会話できるかどうかの前にそもそもお金がなかったなあ」

瞬はロシアで流通している通貨は名前は知っていても見た事がない。しかし、それよりも瞬にはお金を生成するのは偽札を作るようで気が引けるため作りたくはなさそうだ。

店の前でどうしようかと瞬が悩んでいると店のドアが開いた。そこには店主であるう年老いた老人が銃を片手に立っていた。

「なんじゃ、お前さんは？さっきから店の前が騒がしいと思ったらお前さんのせいかな。知らん顔だが、もしかして客か？」

「え、ええ、泊まりたいんですけど・・・その」

「その、何じゃ？」

「お金が無くて・・・」

やはり話す内容は日本語にしか聞こえず、更に日本語を話している自分の言葉も通じているのには瞬は安心した。だが、言っている内容は店主からすれば客ではないと言っているようにしか聞こえない内容である。店主の老人はそれを聞いて中に入って扉を閉めてしまい、瞬は諦めてその場を後にしようとして背を向けた。

「入らんのか？」

老人の声に慌てて振り向くと、そこにはドアを迎え入れるように開けている老人が立っていた。さっきまで持っていた銃は奥へと立てかけられていた。

「でも、お金が」

「お金が無けりゃ客じゃない。ただ、客じゃなくてもわし個人の客として泊めてやることはできる」

「えっと、つまり？」

「宿屋に泊まるんじゃない。宿屋を経営する男が家に泊めてやるって言っておる、そういうことじゃ」

「あ、ありがとうございます！」

「気にせんでええ、どうせ人の来ない安宿じゃ。ただ、泊まるかには少し働いてもらうぞ？ 後、外国の話も聞いてみたいの。それでよけりゃさっさと入るんじゃない」

瞬は感極まってその場で一度深くお辞儀をすると盾を解除して中へ

と入る。

中はやはり外と同じようにボロボロで今にも崩れそうなほど古いが、今の瞬には高級ホテルのように見える。

老人は階段を上がっていき、その後瞬はついていくと3つある内の1番手前の部屋へと通される。

部屋の中はこじんまりとした中にベッドが一つとテーブルがあるだけでテーブルの上には年代物のスタンドが置かれていた。

老人がそのスタンドのスイッチを入れると強い光が部屋の中を照らす。

その後しばらく使っていなさそうなベッドを軽く叩くと埃が舞い上がる。

「ここを使つてええ。風呂は共同。飯は出来たら呼ぶが、お前さんには作るのを手伝ってもらおうかの。ついでにその後は風呂の用意じゃ。見た所、手荷物は無いようじゃが・・・?」

「み、道に迷ってる時に落としちゃいまして、その、翌朝探そうかなと」

どことなくごまかすように言う瞬に気づいた老人は、小さく息をつくと部屋から出ていく。

「まあ、お前さんがどうしてここに来たかなんぞどうでもいい話じゃな。深く詮索はしないのが良い宿屋の主人、と言う事じゃ。じやあ、さっさと下に降りてくるんじゃぞ」

「は、はい」

老人が扉を閉めていなくなると、瞬は感謝しながらベッドへと倒れこむと舞う埃を気にせず枕へと顔を埋める。

深海での肉体的な疲労は全くないものの、精神的な疲労がどつと出てきたために一時とはいえ、落ち着けて休まる場所が出来たのはうれしい事だった。

例え、それが枕から変な匂いのするボロ宿であろうとも。

「おい、まだか！」

「はい、今行きます！」

瞬は慌てて枕から顔を離すと部屋から飛び出て台所へ急ぐ。

ロシアの料理を食べれる事ということへの期待と料理の腕がからつきである事の不安を抱きながら。

第16話：魔狼（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。前回で旅立ちが終わりとなりました・・・が、このペースで書いていくと頭の中で考えている最後まででの展開を考えるとかなりの量に、それこそ平気で100話くらいまで行きそうです。好き勝手に書いているため継続的に読んでくれる人がいるのかいないのかいまいち分かりませんが、いることを信じて・・・、信じ・・・、し・・・、信じたい・・・（ーA、；）・・・頑張ろうorz

第17話：魔狼（2）（前書き）

2010/05/04 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第17話：魔狼（2）

料理の腕に全く自信のない瞬はひたすらに人參やジャガイモの皮をむき続けていた。

老人はそれを手馴れた手つきで切り分けて料理していき、大した時間もかからずにすぐに料理は出来上がってしまった。

どちらかといえば瞬は料理よりも『旅人』の力の調節に苦戦しながらやる皮むきの方が時間がかかっていた。

その事情を知らない老人は呆れてため息をついていたが。

とりあえずテーブルには熟練の腕によって作られた野菜スープにサラダ、いくつかの小さなパン、地元で捕れたという鹿肉のソテーが並ぶ。

老人と瞬は椅子に腰かけるとお互いにパンを取る。

ちぎったパンを頬張りながら2人は料理に手を伸ばし、しばらくすると老人が話しかけてきたところで会話が始まった。

自己紹介から始まってこの村、『カラフ村』の事や瞬がいた日本の事などの色々な事を放した。

老人、ミハイルが昔は狩人だった時の話をする頃には2人の食事は終わってしまった。

今はミハイルが淹れた食後のコーヒーを飲みながら会話していた。

瞬もミハイルもコーヒークップを片手に楽しい会話を続けていたが、不意に壁に掛けられた時計が10時を指し示すとミハイルの会話が止まる。

不思議に思った瞬を余所にミハイルの温和だった表情が厳しい顔つきへと変わる。

「・・・こんな時間だ。そろそろ、終わりにしようか」

「あ、はい。じゃ、お風呂の用意をさせてもらいますね」

「ああ、風呂はこの奥じゃ。言わんでも大体やり方は分かるじゃろ」

少し雰囲気の変わったミハイルを気にしながら瞬は椅子を引いて立ち上がる。

すると、台所の奥へ向かおうとする所で突然ミハイルが振り向いた。

「お前さん、何だってこんな時にこんな村へ来たんだ？」

「こんな・・・時？」

「いや、知らんのなら気にせんでええ。くれぐれも言うっておくが何があつても外には出るな、いいな？」

「？・・・はあ、分かりました」

言ってる意味がよくは分からないが、とりあえず瞬はその場を後にすると年季の入った風呂場へと入っていく。

老人は戸締りをしようとする扉の前に立った。

するとちよつと扉がノックされ、その後には勢い良く開かれると肩が激しく上下するほど息の荒い村の若者が立っていた。

ミハイルは若者を中に入れて椅子に座らせる。

若者は休みながら息を整えていくと垂れた頭を上げた。

「はあ、はあ・・・、や、奴が崖に立っているのをついさっき見た奴がいる、今夜もまた襲いに来るはずだ！」

「そうか・・・、しかし昨日、足に銃弾をもらっているはずじゃろ？」

「それが普通に歩いていたらしいんだ！こっちは昨日の戦いで奴に対抗できる男手が少ないうえに、イワン爺さんはまだ診療所で意識がない！それで・・・」

どことなく言い出しにくそうに若者の言葉が小さくなる。

ミハイルはここまで話を聞いて若者が何を言わんとしているのかを察し、軽く息をつくとも男の言葉を補うように話す。

「それでこの隠居した老いばれに指揮をとれ、と言う事か？」

「うっ・・・、そ、そうだ。イワン爺さんほど腕があつて、経験があるのはアンタしかない。頼む、これは男達全員からの願いだと思ってくれ！」

青年は祈るようにミハイルに懇願する。

その祈られた当の本人はどうしたものかと長く生えた髭をいじり出す。

風呂場にいるであろう瞬の方をチラツと見て若者に向き直ると、しよつがないと首を縦に振った。

「分かった、男連中を集めて畏を張る、集会場に集合じゃ」

「ありがてえ！じゃ、俺は皆に声をかけてくる！」

顔が晴れたように明るくなった若者は慌ただしく宿屋から飛び出ていった。

ドアも閉め忘れていなくなった若者に呆れながらミハイルはドアを閉めると、ちょうど風呂場から出てきた瞬に出くわす。

「お風呂の準備出来ました」

「そうか、お前は先に入っとね。わしは用事が出来たから出かける」

「こんな時間にですか？」

「そうじゃ、急ぎの用でな。わしが出ていったら鍵をかけて部屋に閉じこもっておれ、いいな？何があっても絶対に出るな。2時間もすれば戻ってくる」

「は、はぁ・・・」

瞬がよく分からないといった感じではあるがひとまず頷く。

ミハイルは壁に掛けてある狩人の時に使っていた愛用のハンティングライフルを取り足早に宿屋から出る。

夜の寒さに身を縮こませながら集合場所として指定した集会場を目指す。

一人取り残された瞬はとりあえず言われたとおりに鍵をかけて、自室へと戻る。

異臭のするベッドへと横になるとミハイルの事が引つ掛かっていた。ミハイルの険しい表情と銃を持っていったのが、今から何かが起ころうとしているのではないかと不安に駆られる。

ただどういう用でどこに出かけたのかも瞬は知らない。

なにより余所者が首を突っ込むべきではないのかもしれないと愛用していた小型のミュージックプレイヤーを作り出すと、ヘッドフォンを頭にかぶると登録してある音楽をランダムで流す。

むき出しの裸電球がユラユラと動くさまをただ目に移すだけにとどめておきながら、瞬はただボンヤリと物思いにふけっていく。

村中の家から猟銃を持った男達がライトで照らしだされて他よりはかなり明るい集会場へと集まる。

集会場には罠に使うであろう集められたトラバサミやドラムに巻かれた有刺鉄線が置かれていた。

集会場の中央には小屋があり、その中には重い雰囲気の中、何人かの狩人や狩りの経験者がテーブルを囲むように座っていた。

ミハイルも当然その場に座っていた。

テーブルの上には村の地図が広げられ、周りにいる男達は一言もしやべることがない。

地図をジッと睨むように見続け、頭の中ではずっと罠の配置を考えている。

普通の狼程度なら彼らも特に迷わず、大体の罠の配置は考えられる。ただ、今回の相手は常識が通用しない相手だった。

なんせ村を襲うようになってからも罠は何度か配置したが、それが常識はずれの力や事前の察知により全て無駄になっていたのだ。

そのために誰ひとりとして自分の考えに自信が持てず、しばらく沈黙の時間が流れる。

これではいかんとその沈黙を破るようにミハイルは立ちあがった。地図に指を置くとなぞりながら口を開く。

「村の周囲は有刺鉄線で囲み残った出入口は2つ、奴が来るなら山側しかあるまい。そこに埋めたトラバサミと捕獲ネット、落とし穴を仕掛ける。後は罠の後ろで待ち構え、奴の速度が落ちた所を仕留める。これが現状できるところじゃないか？」

「……奴が山側から来なかったらどうする!？」

「そもそも奴に畏は効くのか!？」

「畏が効かなかつたその後は!？」

周りの男達が苛立ちを吐き出すように一気にまくしたてて質問し続け、ミハイルは目を細めながら椅子に座って一息つく。

男達が困惑しているのを余所に、ミハイルは頬を掻きながら特に焦りもなく質問に答えた。

「さあてな」

「・・・さあてなつて!俺達の命がかかっているんだぞ!分かっているのか、爺さん!」

「分かっておるさ、お前達が自分の家族を守るために参加しているものな。だがな、奴が現れてから6日、奴について分かったのは驚異的なスピードや力を持ち、今まで通りのやり方じゃ通じんと言っただけじゃ。警察や軍が来ようものならもつとましな作戦をやってくれるじゃろうが、この老いぼれにはこんな案しかでやせん。他に良い案があるなら聞くが、どうじゃ?」

「・・・」

熱が冷めていくように男達は冷静さを取り戻していく。

それと同時に、他の案を考えてはみるものの男達の頭の中にはそんな案など浮かぶこともなかった。

「これに命を賭けずとも、家で奴がいなくなるのを待った所で咎めん。それは個人の自由じゃ、好きにするがええ」

男達はミハイルの言葉にお互いに顔を見合わせる。

やがて戸惑った顔から決意した顔へと変わるとミハイルに向かって全員が頷いた。

その決意にミハイルは微笑むと同じように頷くと、それを合図に決まった罍の配置に合わせて男達は罍の材料を手に集会場から散っていく。

自分の家族を、そしてこの村を守りたい一心でひたすらに罍の設置作業を行っていく。

集会場の小屋に取り付けられた鐘がちょうど12時を鳴らす頃には作業は終わっていた。

入口の見張り台にだけ人を残し、残った男達は小屋の中で温かいコーヒーを片手にただその時を待つ。

そして、村の鐘が12回鳴り終わった時だった。

「ウオオオオオーン！」

山から響く狼の遠吠えが村中に響き渡る。

家にもつた子供や母親はそれに涙を浮かびながら震え、男達は奴が来る事に恐怖して肩にかけた猟銃を震える手に持つ。

小屋からミハイル達は飛び出すと、周りにいた男達を率いて山側の入口に築いた罍の奥に控える。

同士討ちをしないよう道一杯に広がり、溢れた男達は家の屋根の上に登る。

ミハイルはその男達の中心から少し出ると小屋から持ってきた赤い袋を取り出し、罍と男達の間辺りにぶちまける。

袋の中からは何かの臓物や血が飛び散り、辺り一帯に独特の生臭い匂いが漂うと慣れない男達は途端に咳き込む。

「こいつで奴もここに来るじゃろう、風向きはちと悪いが何とかなるじゃろう」

ミハイルはそういうと男達の列の中に戻り、自分の銃を持って奴が来るのを待ち構える。

すると村の入口に立てられた見張り台の上で見張っていた男が山の麓付近で雪煙りが起こっているのを捉えた。

まさかと男が思っていた次の瞬間にはその雪周りが一回り大きくなる。

実際は大きくなっているわけではなく近づいてきているだけだ。だが、それが逆に分かっているからこそ男も自然と焦り出す。

「や、奴は山を下りた！そのうちやってくるぞ！」

「よし！お前さんはそこで見張っておれ、決して手出しするな！」

下で待ち構える男達は自然と銃の横についた取っ手のようなボルトを引く。

それをもう一度戻す事で弾を銃身に装填するボルトアクションを行い、来るであろう山側に銃を向けて待ち構える。

見張り台にいる男もジツと雪煙りが迫ってくるのを見張っている内に手元は自然と弾を装填していた。

次第に距離もなくなってくると雪煙りの中からこの村に恐怖をばら撒いた赤い目の狼が見え、奴の顔が一瞬だけ男の方を向く。

「ヒッ！」

少しだけ離れた位置ではあるものの男は目が合ったと錯覚し、この時点で彼の思考はまともではなくなっていた。

恐怖に駆られてすぐに村に迫る奴目がけて猟銃を構えるとミハイルの忠告など完全に忘れて引き金を引く。

奴の移動位置を予測しての中々正確な射撃ではあったものの、飛び

出した弾は奴の後方の雪の上に突き刺さる。
これに驚いたのは狼よりも下で待っていたミハイルだった。

「馬鹿者！なぜ撃った！」

下から男に向かって激怒の声が飛んでくる。

しかし、上の男はまるで聞く耳持たずにボルトアクションで次弾を装填すると次々に撃ち続ける。

狼は攻撃されているのを認識して弾を回避するためなのか蛇行するように走り出し、男の撃つ弾丸は次々と雪の上に穴を穿つ。

当たらない事に恐怖しているうちに銃が澄んだ音で弾切れを知らせる。

男が震える手で弾を装填しているうちに狼は村の入口までたどり着いてしまった。

ミハイル達に緊張が走る。

自然とミハイルの手にも緊張から汗が出るが、そんな彼を余所に狼は入口で足を止めた。

畏に気付かれたのかと思ったミハイルだが狼は見張り台を見上げ、すかさずその巨体を見張り台へと体当たりさせた。

地震でも起こったかのように見張り台は大きく揺れる。

上にいた男は慌てて銃を捨てて木の柵に掴まったものの見張り台自体が村の方へと倒壊していく。

男はなす術なく空中へと放り出され、地面へと何かが壊れるな音を上げながら叩きつけられる。

見張り台の倒壊によって倒れた場所の雪が舞いあげられ、立ちこめた雪煙りによって待ち構えている男達の方からは狼がどうなったのが見えない。

しばらくすると雪煙りの中に黒い影が浮かび上がる。

男達は銃を持つ手に力が籠るが雪煙りから抜け出てきたのは見張り台にいた男だった。

男は至る所から血を流し、右足を骨折したらしく引きずるように左足で歩いて助けを求めるように左手を差し出している。

何人かの男が向かおうとした瞬間、雪煙りの中から飛び出した巨大な口が男の首へと食らいつく。

1本1本の歯が男の首に食い込んで大量の血をまき散らす。

男はあまりの痛みにあらん限りの力で狼の口を外そうとするがまるではずれない。

それどころか首を挟んだ状態で体を中へと持ち上げられる。

首を抑えられた男は声を上げることすらできず、ひたすらに助けを求めて男達に手を伸ばす。

だが、男の散らした血が周囲の雪煙りを赤く染め終わると同時にその手は下へと落ち、男の体からは力が抜けていく。

赤い雪煙りの中で赤く光る眼は奥にいる恐怖にひきつった男達を捉える。

狼は口にくわえた男の屍をその辺に放り投げると男達に向かって走る。

すると1、2歩進んだ所でカモフラージュして仕掛けられたトラバサミが狼の足へと食らいついた。

男達は罠にかかったのに希望を見出したように「よし」、「やった」などと口走る。

狼はそんな希望を粉碎するかのように足を振り払うとトラバサミはあっさりとはずれてしまった。

おまけに足にはかすり傷程度の傷しか付いていない。

啞然とする男達などそっちのけで狼はトラバサミが前を向き地面を凝視し出す。

すると、トラバサミが仕掛けてある場所を狼は的確に避けて軽々と跳びまわり先へと進む。

1つ目の罠を物ともしていない様子に周囲の男達に動揺が走る。

「まだじゃ、まだ罠は残っておる!」

それを止める様にミハイルは男達を叱咤するように叫ぶ。

狼がトラバサミを抜けると同時にミハイルは足元に伸びた2本のワイヤーを思い切り引っ張った。

狼の眼前に両側から射出された捕獲ネットが広がると奴は足を動かすのを止めてブレーキをかける。

確実に捉えたミハイルや男達も思った。

だが、奴はそこからバックステップを行って後ろに飛び退くと、捕獲ネットは空しく地面へと落ちる。

仕掛けられた罠に殺意が更に増していく狼は低く吠えたと走りだし、最後の罠の落とし穴へと足を踏み入れた。

途端に落とし穴の中へと引きずり込まれるように狼の体は沈むが、狼は残りの足で無理やり跳んで落とし穴を回避すってしまった。

「信じられん、あれだけの狼なんぞ見たことない・・・」

全ての罠をかなり強引ではあるがあっさりと突破されてしまったのにミハイルは驚く。

長い狩人生活の中でもこれだけ賢く力のある動物など見た事が無かったからだ。

とんでもない性能の狼は仕掛けられた罠に怒りが有頂天へと達したのか、今までにないほどの速度と殺意を持って男達の方へと向かう。残虐性とそれを実行できる力を持ち、狩りの罠がまるで通じない相手がすぐ目前にまで迫っている。

男達の恐怖を頂点へと達し、戦意喪失した男の何人かはその場から逃げだし陣形は穴だらけになってしまう。

ミハイルが気づいて慌てて止めようとしたものの、もう奴は目前にまで迫っていた。

「くっ、全員撃て！」

号令に合わせて一齐に撃たれた銃弾の群れは狼へと向かっていく。狼は銃声がすると同時に右に跳び、弾は狼の体を掠めるだけに終わる。

次弾の装填が済んだ者から次々に弾を撃ち続けるが、右へ左へと跳びまわるように向かってくる奴に何発か当てる事は出来ても決定打となる致命傷を与えることはできない。

そして、ついに男達の最も恐れ、狼からすれば待ち望んだ瞬間がやってきた。

狼はまず目の前で対峙して慌てて逃げ出そうとする男を跳ね飛ばし、違う男に跳びかかると一撃で喉元を食い破り、また違う男に飛びかかる前足で胸を深くえぐる。

応戦し続ける勇敢な男もこの時点で残りは少なく、最早数えるほどしかない。

「ウオオオオオー……！」

勝利を確信したかのような大音量の遠吠えにたまらず残った男達も耳を手で塞ぎ、銃を下へと落としてその場に膝をついてしまう。そうなればもう狼の独壇場だった。

狼は飛び跳ねる様に次々と男達をその牙と爪で攻撃していく。

「ぐ、ぐうう、ここまでか……」

下に残った動ける者はミハイルだけとなり、屋根の上にいる男達もまだすぐには動けない様子だ。

目の前にまで迫った狼にミハイルは死を覚悟しながらも、手を後ろに回すとせめて一太刀とばかりに腰に差していたナイフを抜く。そんな事を知らない狼は巨大な前足をミハイルへと振り下ろす。

ミハイルも抜いたナイフでそれを迎撃に入る。

「うおおおお！」

殺人的な勢いを持つ鋭い爪が生えた前足と年老いた腕で振られたナイフでは結果がやるまでもなく見えている。

屋根の上で助けようとしていた男達も凄惨なミハイルの姿をイメージし、その激突の瞬間を見たくない顔と顔を伏せた。

ミハイルの全力で振ったナイフと狼の前足が交わる時だった。

その間に何かが現れたかと思うとミハイルのナイフと狼の前足は強力な力で抑えつけられ、まるで動きはしない。

何が起こったか分からず茫然としたミハイル。

狼が前足を外そうと暴れまわるのに我に返ると、自分のナイフの先を見る。

そこにいたのは涙を流しながら右手でナイフの刃を持ち、左手で狼の前足を止めている瞬だった。

瞬は狼が暴れまわるのをまるで気にしていないかのように左手一本で軽々と抑え込んでいた。

そのとても信じられない光景にミハイルは絶句してしまうが、頭の中から言葉を絞り出すように喋り出す。

「……しゅ、瞬！？一体、どうして、……お前さんは？」

まるで質問になっっていない途切れ途切れな言葉だった。

それでも瞬はミハイルの方へ向くとまだ泣いたまま頭だけを下げる。

「ごめんなさい、僕がもっと早く気付いていれば……。そうすれば、死者も出さず……」

「……お前さん」

「話はとりあえずこの狼を黙らせてからにしましょうか、ね！」

瞬はナイフを挿んでいた左手を放すと狼の腹へと向けてそのまま手を突き出す。

腹の中にめり込むほどの力で勢いよく押された狼の体は仕掛けておいた落とし穴の上まで吹き飛び、そのまま落とし穴の中へと落ちる。落とし穴の中で血を吐き出しながら狼は殺す対象を瞬へと変えると力強く穴から跳び出す。

だが、跳び上がった狼の前に罾の一つから射出されたネットが広げられる。

地面ならまだしも空中では回避のしようがない。

広げられたネットに狼はどうする事も出来ずに包まれる。

地面の上に落ちると、落ちながら暴れたためにネットが体中に絡みつき、まともに身動きが出来なくなっていた。

それでもまだ狼は逃げようともがき続ける。

瞬はその狼の体の上に添えるように手を置くと、狼はまるで巨大な岩石が乗っているかのような錯覚をするほどに重みを感じ、次第に身動きが取れなくなっていく。

次第に観念したのか狼は動く事を止めて小さく吠えりと、瞬は手を放してその場に立ちあがる。

「・・・信じられん」

いとも簡単にあれだけ暴れまわった狼を捕獲してしまった瞬に、ミハイルや男達は呆気に取られて手に持っていた銃をその場に落とすていた。

涙を流しながら神々しささえ放つ青年に、ただ男達は黙るだけだった。

第17話：魔狼（2）（後書き）

親不知3本の痛みと風邪にやられました。

親不知は来年にならないと抜けないため、年内と来年の頭はこの痛みに耐える日々が続きそうで気は滅入る一方です。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第18話：魔狼（3）（前書き）

2010/05/04 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第18話：魔狼（3）

捕えられた狼はネットに絡めとられたまま、飼育用として使われていた頑丈な檻の中へと閉じ込められた。

檻の周りには何人も村人達が集まり、血走った目で見る者、涙を流しながら見る者と様々な反応をしていた。

その村人の中にはこの狼によって身内が殺された、または重傷を負わされた者が大半であり、出来る事ならば自分の手で狼の息の根を止めたいと考える者ばかりだった。

身動きの取れない狼は村人達の恨みの対象でしかなく、止める者は誰一人としていなかった。

この村の年老いた村長でさえ、狼を殺す事には賛同していた。

だが、深夜にやることもないと全員を一旦家に帰らせ、自分も家に帰ろうと歩きだす。

するとちょうど狼を捕まえた通りにさしかかり、生々しいほど血が飛び散った村の通りの惨状と血の匂いに目眩を覚える。

村長は出来るだけ血を見ないようにしながら帰るその足で様子を見ようとけが人の運び込まれた診療所へ足を進めよた。

その時だった。

不意に服の背中側を引っ張られて足が止まり背筋が凍った。

こんな事があつた直後だけに心臓の鼓動は早まっていき、壊れた歯車のようにゆっくりと後ろを振り向く。

そこにいたのは毛皮を身にまとつた小さい赤毛の少女だった。

村長は内心ホツとしながら少女の目線に合わせるようにしゃがむ。

のだが、少女の顔を見た村長は下にしゃがむ勢いが途中で止まらずにそのまま血塗れの雪の上に尻もちをつく。

少女の目がある部分を通るように頭に黒い革のベルトが何重にも巻かれていたのだ。

異質な彼女のそれに村長は言葉が出ない。

まるで目が見えないのではなく目を見えないようにしているようなその巻かれたベルトに村長は動きが止まる。

「ねえ」

「な、な、なんだい？」

不意に話しかけてきた少女に村長は腰を抜かしながらも言葉を絞り出し答える。

それと同時にこんな子供が村にいたかを思い出そうとするが、何度思い出してもこんな子供はいない。

村長は狼を捕まえたという宿屋に泊っている青年の連れかとも考えたが、真相はどうか分からない。

「ここに狼が来なかった？」

「あ、ああ、それならもう捕まえて檻の中だから心配しなくてもいい。そ、それより、君は村の子じゃないね？」

一瞬、少女はハツとした様に驚いた。

かと思うと目が隠れているのでよく分からないが、怒っているのか表情が険しくなる。

「……そうね、この村の子供ではないわ。私は帰るわ、おやすみなさい村長さん」

「お、おやすみ……」

そう言うと少女は村長に背を向けて歩いていく。

得体の知れない少女に村長は血のついた腰を上げて後をつけ始めた

が、家の角を曲がった所でまるでマジックのように少女はいなくなっていた。

村長は辺りを見回してみたもののどこにも少女の姿はない。

夢でも見ていたかのように消えてしまった少女を追うのを村長は諦めた。

そのまま診療所へと向かってその場からいなくなると、家の屋根の上にはいた少女は地面へと降りる。

まるで見えているかのように歩き出した少女は誰もいない鉄の檻の前へと立つ。

すると、中でネットにくるまれた狼が今までにないような優しい声を上げる。

「クウウン・・・」

「シート。今出してあげるからね」

少女は檻の中で横たわる狼へと手をさしのばす。

狼の襲撃によって傷ついた人達は村の小さな診療所へと担ぎこまれた。

村に一人しかいない中年の医師は玉の様な大粒の汗を浮かべながら怪我の処置に追われている。

診療所の看護婦として長年務めている彼の妻もまた傷の縫合や血止めと手が休まる事はなく、診療所はここ数十年間の間で一番忙しい日となっていた。

重軽傷者10名、死亡3名という人数に当然ベッドは足りず、仕方なくシートを敷いた床に寝かせる。

それでもまだ足りず、軽傷の者は近くの家の居間を借りて寝かせられていた。

瞬とミハイルは椅子に腰かけながら軽傷者の様子を見ていた。横になっっている者は疲労のためか既に眠りへついでおり、そろそろ頃合いと見たミハイルは燃え盛る暖炉の火に薪を放り込みながら尋ねる。

「さて、聞かせてもらおうかの？お前さんは・・・、何者じゃ？」

「・・・僕はただの『旅人』です」

「ただの旅人、か。あんな怪力を持っているならただのとは言わんな」

「あれは生まれつきの特異体質なだけで・・・」

テレビの音量が小さくなっていくかのように段々と瞬の音が細く小さくなっていく。

ミハイルは瞬を問いたですようにジッと見つめるが、瞬はどこことなく違う方へと目を逸らす。

ミハイルは瞬が嘘をついているのを確信した。

だが、彼は深く椅子に腰かけながら息をつくとその嘘を見逃すように目を閉じる。

「まあ、そういう事にしておこう。・・・それでじゃ、わしから礼を言わせてくれ。瞬がいなければわしもやられていたし、村の中ももつとひどい事になっていたじゃろう。ありがとう、助かった」

「そんな・・・、もっと早く気づいていれば他の人も救えたのに気づくのが遅れて・・・」

「そう自分を責めんでくれ。わしもただの用事としか言っていないし、おまけにお前さんはたまたまこの村に立ち寄っただけじゃろ？そんなお前さんに全部救えなんて神様のような事は期待しやせん。救えた命があるんじゃ、それでよかつたと思わんのか？」

「そう・・・ですね」

納得はし切れないもののミハイルの言う事も間違っていない事を瞬も分かつていた。

そして、彼の言葉を受け止める事で罪悪感に縛られていた心が軽くなつていくのを感じていた。

瞬の表情が緩やかになつていくのを見たミハイルは側にあつた毛布を瞬へ手渡し、もう一枚の毛布を自分の体へとかける。

「もう明け方に近い、後は診療所に任せてわしらは寝よう。明日からも後始末で少しばかり忙しいからの。すまんな、手伝わせる羽目になつてもうて」

「いや、気にしないでください。一宿一飯の恩義は返さないといけませんからね」

そう言いながら瞬が体に毛布をかけようとした時だつた。

まるで車の衝突事故が起こつた時のような衝突音が外から聞こえた。一体何事かと立ちあがつた2人だが、音のした方向にちょうど捕えた狼がいるのを思い出す。

2人は顔を見合わせると毛布を椅子の横によけて立ちあがり、ミハイルは壁に立てかけてあつた猟銃を手に2人は狼を捕えた檻の場所へと急ぐ。

走っている間にも何度か衝突音が聞こえる。

2人が檻にまでたどり着き、ちょうど檻が視界に入った時、今までよりも一際でかい衝突音が辺りに響く。

月明かりが照らす檻は内側から外側に鉄柵が折り曲げられて穴が空いていた。

その檻の中に狼の姿はなく、かけられていた捕獲用のネットだけが落ちていた。

「や、奴がない、じゃと！鉄檻ですら破るとは信じられん！」

狼の姿は見えないがどこにいるのかも2人には分からない。

ミハイルは猟銃に弾を装填して緊張した表情で構え、瞬も出会い頭でも掴めるように両腕を前に構える。

2人は背中合わせに辺りを警戒していると瞬が左側を向いた途端、物陰から暗闇から浮かび上がるように狼が飛び出し、大きく開いた口の牙で瞬に噛みつきにかかる。

瞬時に狼の上顎と下顎を食いつかれる寸前で瞬は両手で掴みとり、飛びかかってきた勢いを利用するようにそのまま投げ飛ばす。

だが、狼は一回転しながら地面へと華麗に着地する。

狼は奇襲が失敗して更に瞬への警戒を高めたのか、その場で姿勢を低くして今にもとびかかりそうな状態で小さく吠える。

後ろを向いていたミハイルも狼へ猟銃を構える。

狼が動いた瞬間を狙っているためにすぐに引き金を引かず、ジツと狼の動きを視界の中に捉え続ける。

何かのきっかけ一つでまた攻防が始まるうかとしていた時だった。

狼が何かに気付いたかのように耳を動かすと構えを解いて後ろに走り、ミハイルはすぐに引き金を引いたが弾は外れて地面に弾痕を作る。

即座に弾丸を再装填し、家の陰に隠れた狼がまた現れる瞬間を狙って猟銃を構えた。

だが、狼が頭を見せて引き金を引こうとした瞬間、瞬が猟銃を掴ん

で上にずらし弾は見当違いな方向へと飛んでいく。瞬の行動をすぐに問いただそうとしたミハイルだったが、狼の全身が見えるようになってその理由は分かった。

「初めまして」

狼が薄暗がりの中から月明かりの下へと出ると、その背に赤髪の少女が跨がっていたのだ。

2人は少女の目に何重にも巻かれた黒い革のベルトに驚く。

更にそれとは別に瞬の目にはうつすらとベルトの隙間から光のようなものが漏れだそうとしているのが見えていた。

ただ、今の瞬にはそれが何かは分からず、ミハイルの目にも見えていた物だと思っていた。

よく分からない状況に固まったままの2人。

先に我を取り戻したミハイルが猟銃に弾丸を装填し、狼へと狙いをつけながら叫ぶ。

「早く逃げなさい！その狼は人を殺す悪い奴だ！」

少女の身が危ない事に気がついた瞬も狼に飛びかかろうとする。

しかし、少女がまるで逃げようともせず、それどころか逆に狼の背にもたれるように掴まる事で動くようにも動けない。

2人がまるで違うように考えているのが分かった少女は少し呆れたように言っている。

「逃げる？私にはそんな必要ないわ。逃げなければいけないのは貴方達よ。ね、ボリス？」

同意するかのように小さく吠えた狼は敵意を露わにしながら低く唸り、少女を背に乗せたまま飛びかかるために姿勢を低く構える。

ミハイルはすぐさま引き金を引こうとするものの弾が少女に当たりにかかず、仕方なく銃を下ろした所で代わりに瞬が前へ出る。どこかで見た空手のような構えを見様見真似で構えてみた瞬に、狼はさっきの一方的な戦いに恐怖してかその場からジリジリと後ろに下がり出す。

これに慌てたのは上に跨り、さっきの戦いの様子を全く知らない少女だった。

「ちよ、ちよっと、なんで下がるの!？」

慌てる少女を余所に狼はまだ下がり続け、それを見た瞬は逆に前へ1歩踏み出すと狼は反射的に後ろへと飛び退く。突然の揺れに少し気分を悪くしながら少女は狼へと問いかける。

「もう!アイツが怖いのか？」

それを肯定したくはないが心の中では得体の知れない人間に恐怖を感じている狼は答えに迷い、ただ唸るだけだった。

その反応で少女はその通りである事を察したのか、狼に小さく耳打ちをする。

すると狼は即座に反転し逃げ出した。

「バイバーイ!また遊びに来るからねー!」

「待て!君は一体・・・クツ!」

「追っぞ、瞬!」

二人は狼の後を追って走り出した。

村の外へと飛び出す様に出たものの、既に狼はその通常の足よりも

一回りも二回りもでかい足から生み出される脚力で遠くへと逃げた。

最早、2人の視界から消える寸前だった。

「ミハイルさん、失礼します！」

「お、おい、何を!?」

「舌を噛むんでしゃべらないでください、いきます！」

瞬は慌てるミハイルを背中に背負った。

そして、『イージスの盾』を発動させ、おんぶした状態で走りだす。すると2、3歩目で一気に加速し、すぐに100kmに近いスピードへと加速する。

背負われた常人のミハイルには森の木が一瞬で後ろの方へ飛んでいったような錯覚を覚え、更に急激に加わった加速で体が後ろへと引っ張られる。

しかし、下半身を瞬がしっかりと捕まえていた事で何とか飛んでいく事はなかった。

それでもこの絶叫マシンのようなスピードと加速は老人にはきつい。

ミハイルは目はかろうじてあけながらも体は強張ったように瞬の体をガツチリと掴んでいた。

雪上の雪を物ともせずにあっという間に視界の中に逃げる狼を捉える。

そして段々と差を縮めていき、狼に跨った少女が信じられないと言った顔をしながら狼に早く走るように叫ぶ。

狼もそれを受けてスピードを上げるものの瞬を突き放す事は出来ず、せいぜい今の差を保ち続けるのが精一杯だった。

やがて森の先に立つ山が進路を塞ぎ、狼はそのスピードを保ったま

ま棚のような足場を飛びまわり、慣れたように山を登っていく。瞬も当然そうしようとしたが初めて登る山であり、なおかつ今のスピードを保持しながら飛びまわるのはさすがに出来ないと走る速度を落として狼の飛んだ後を登っていく。

それが仇となり、狼は次第に差を突き放していき、瞬が最後に狼が飛んだ足場へとたどり着いた時、狼の姿は何処にもなかった。

「まかれちゃいましたか・・・」

「・・・も、もう降りてもいいかの？」

狼を追うのに夢中になっていた瞬はミハイルの事が頭から抜けていた。

慌ててその場に息も絶え絶えなミハイルを降ろし、近くの岩場にもたれかかるように座らせる。

殺人的なスピードにミハイルの足腰はまともに立たず、恐ろしいものを体験したと顔が強張ったままだ。

「し、信じられんわい、に、人間があんなに早く走れるなんての」

「・・・ま、まあ、あれも特異体質なもので」

「そんな特異体質がいるならオリンピックピックにでもとりゃいいんじゃない！わしみたいな老人を虐待するのに使うんじゃない！」

「あー、ごめんなさい、やっぱりきつかったですかね？」

「当たり前じゃ！全く、・・・それは今はいいでしょう。肝心の狼と女の子はどこにいったか分からんか？ここら辺なら、ほれあの辺りなどいそうじゃがな」

休んでいるミハイルが指差した場所を瞬が見てみる。

確かに少しだけ開けた場所があり、更に岩壁に囲まれるように洞窟があるようだ。

瞬はミハイルを背負いながらその場所にまで移動してみる。

すると、狼の姿は見えないものの足跡が雪の上にクッキリと残っており、その足跡は洞窟の中へと向かっていた。

洞窟は人一人なら楽に入れるほどの大きさであり、月明かりも及ばない暗闇が中に漂っている。

それを目にした瞬は自然と足が止まり、また海底で体験したような暗闇に押しつぶされる感覚に体中が自然と小刻みに揺れ始める。

おぶられたミハイルは超人のような瞬の突然の変わり様に驚きながら背中から降りて瞬の顔を覗き込む。

そこにはいつもと変わらないようではあったがよく見ると引きつっているのがよく分かる瞬の顔があった。

暗闇を見据えているかのようにではあるが視線はまるで定まっておらず、動作しているエンジンのようにただ小刻みに震えている。

「ど、どうしたんじゃ？洞窟が駄目なのか？」

「・・・い、いや、洞窟は・・・で、でも今はちょ、ちょっと・・・」

「何か知らんが、閉所恐怖症かトラウマでも抱え取るのか？無理なら」

「いえ、だ、大丈夫です」

さっきまで狼に勇敢に立ち向かっていった男とは到底思えないような変貌ぶりにミハイルは瞬を置いていこうとする。

だが、瞬は懐から取り出す仕草をしながら2本の懐中電灯を作り出すと、ミハイルに1本を渡して中を照らすように伝え、もう1本を自分の手元に持つ。

中を照らしてみると懐中電灯の光は闇を取り除き、どうにか瞬も耐える事ができるのかそのまま先へと2人は進む。

静まりかえる洞窟の中に2人の歩く音だけが響き渡る。

瞬が不意に足元の石を蹴ってしまうと飛んでいった石が上にぶら下がっていた蝙蝠の集団を叩き起こし、蝙蝠の大群が瞬とミハイルの方へと飛んでくる。

2人は手で払いながら収まるまで待とうとしたものの瞬が前方を見た途端、蝙蝠の群れがまるで暗闇が襲ってくるように錯覚する。

瞬は反射的に盾を展開してしまい、洞窟を隙間なく埋め尽くした盾により蝙蝠の大群は盾にぶつかっては奥の方へと飛んでいく。

やがて羽ばたく音が聞こえなくなったかと思うと瞬は盾を解除してその場に腰を落として一息つく。

「び、びつくりした・・・」

「全く、あんな怪力をもつとる割には度胸はいまいちじゃな。ほれ、心配せんでももう少し歩けば出口があるはずじゃ」

ミハイルが指さす方には確かに小さい穴のようなものが見えていた。歩いて近づいていくとその穴はドンドンとでかくなっていく。

洞窟の中から少し焦るように瞬が走って飛び出る。

すると、そこは周りを岸壁に囲まれ、村の広場と同じほどの開けた場所に木と岩を組み合わせて作られた小屋が一つだけ立っていた。

後から追い付いたミハイルが雪の上の足跡を見してみる。

狼の足跡はその小屋へと向かっていく。

暗闇から解放されてすっきりしたような感じの瞬はミハイルと共にその足跡をなぞるように小屋へと向かう。

ふと瞬が小屋の不格好に曲がった煙突から煙が上がっているのに気づく。

「誰かが住んでいるんですか？」

「いや、あれは元々変わり者の猟師が住んでいた家じゃが、その猟師も死んで誰もおらんはずじゃ。身内もおらんはずじゃし……ひよつとするとさっきの女の子が住んでるんじゃないかの？」

ミハイルの推測を裏付けるように小屋に近づくにつれて足跡が狼のものと子供の足跡に分かれ、二つとも小屋の中へと消えていった。出来るだけ足音を立てないよう気をつけながらミハイルは小屋の周りをまわる。

煙ですすけたガラス窓が取り付けられているのを見つけるとそこから中を覗こうと顔を上げた瞬間だった。

木を砕くような音が聞こえたかと思うと覗いた窓の中では狼が今まさに開いた口を閉じようとしていた。

ミハイルは反射的に体を逸らすが窓を壊すどころか小屋の一部も砕きながら現れた牙がミハイルの頬を抉る。

「ぐおお！？」

ミハイルは勢いで雪の上に倒れこむ。

だが、狼は攻撃の手を緩めず、小屋にひっかかりながらも壊した場所から前足を伸ばしてミハイルを叩きつける。

慌ててミハイルは体を腕や脚で覆うが、1回叩きつけられるだけで腕や脚は使いものにならないほど痺れる。

更に骨が折れたのか尋常ではない痛みがミハイルを襲う。

その痛みに顔をしかめながら堪えるミハイル。

前足が離れた時を狙って離れようにも体は言う事を聞かず、そこ

うしているうちに振りあげられた前足が頭めがけて再び振り下ろされる。

どうにもならないと悟ったミハイルは死を覚悟しながら目を閉じた。しかし、いつまでたってもハンマーを振り下ろされたような痛みは来ない。

不思議に思つてミハイルが目を見開くと目の前で狼の足が痙攣しているかように震えながら止まっていた。

狼の足を横から伸びた瞬間の手がガツチリと掴んでいたのだ。

狼は本日3度目の遭遇となる瞬間を睨みつけるとそのまま空いた口で側に立っている瞬間の頭を砕くために噛みつきにかかる。

瞬は空いた手で少し太めな木の棒を作り出す。

その木の棒を迫ってきていた狼の口の中にはめ込むように差し込み、狼の噛みつきを木の棒をつつかえ棒にして阻止する。

口の中の違和感に気付いた狼は頭をその場で振り、そのまま口を大きく開き木の棒を口の中から弾き飛ばす。

つつかえがとれてスッキリするまでにあまりたいした時間はかかっていなかった。

それでも瞬がミハイルを救い出すまでは十分な時間であり、狼が頭の振りを止めて獲物を探した時、既に2人は離れた場所に立っていた。

それに気付いた狼が小屋から飛び出して2人に襲いかかろうと走り出した。

だが、小屋に開けた穴の中から何かが飛びだし、雪の上に落ちたかと思うと狼は進路を変えてすぐにそっちへと駆け寄る。

「もうまだいたの？しつこい人は嫌われるのよ！」

雪の上にはいたのはさっきの少女だった。

もう明け方であるため眠いのか苛立ったような声を上げ、どこことなく足元がふらついている。

「君が何者なのか知りたいんですよ。それにその狼がまた人を襲うのなら止めなければいけない」

「あつそ！それなら別の日にしてよ、私はもう眠いのよ！全く・
・え、何？」

狼が少女にすり寄って無理やり会話を中断させる。

何かを伝えようとしているらしく小さく呻き、少女も何を言おうとしているのかを察してすぐに狼を連れて小屋の中に入ろうとする。

その時、ちょうど夜空が茜色に染まっていき夜明けを迎える。

洞窟の中に差し込んだ日の光が広場の中にも届き、光の筋は瞬とミハイルを照らし、狼にも伸びていく。

慌てる様に小屋へ入ろうとした狼だったが光が触れた途端、小屋に入ろうとしていた狼の動きが止まる。

少女は黒い革ベルトによって表情こそわからない。

が、狼が動かなくなったのに焦っているようで小屋の中に押し込むように体全体で押すが、狼の体は少女の非力な力では動かず次第に狼の体に変化が現れる。

体中の至る所で毛が抜けていき、骨や筋肉が変化しているのか肉体の表面が波立つように膨らみ、立っていられないらしく狼はその場に倒れる。

それでもまだ変化は続き、顎が引っ込んでいったかと思うと顔つきがドンドン変わっていく。

瞬とミハイルがその変化を離れながら見守っているうちに段々と変化は収まっていく。

やがて変化が終わり変貌を遂げた狼の姿に2人は声も出ない。

まるで幽霊を見たかのように信じられないものを見て固まった2人だったが、瞬が捻りだすように一言だけ呟いた。

「・・・ひ、人？」

そう、雪の上に横たわっていたのは狼ではなく、全裸の男性だった。

第18話：魔狼（3）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
コメント等していただけると非常に喜びます。

もうあと数時間で来年ですが、今年は結構不幸な年だったので来年はもう少しまともな年になってくれないものでしょうか。
といっても、いきなり親不知の手術からスタートなので既にダメな気が・・・。

読んでいただいた方はよいお年を（・A・；）ノシ

第19話：魔狼（4）（前書き）

2010/05/05 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第19話：魔狼（4）

夜明けの日の光すら差し込まない森の中。

木々の合間をぬうように造られた細い道に何台もの軍用車が一列に並びながら走る。

オフロード仕様の軍用車だが、そのでかい車体に加えて道幅がかなり狭いため、茂みや木の枝を破壊するように突き進む。

やがて車の列が森を抜けると策に囲まれた村、『カラフ村』が見える。

夜明けを迎え、静まりかえる村の中をかき乱すように軍用車の列は広場へ入るとその場で停車する。

車の中から軍服に身を包んだ連中が現れると綺麗に整列していく。

少し遅れて先頭の車の中からベレー帽をかぶった指揮官らしい男が降りる。

男はその場を少し歩くと、雪の上に残った血痕を見つける。

しゃがんでその血痕を目で追っていき、その先で燦々たる狼との戦闘の後を目の当たりにする。

それを見た男は口の端を釣りあげながら声もなく笑う。

ひとしきりその場を観察し終わった男は並んだ軍人達の列の前へ歩く。

すると、ちょうど騒ぎに気づいて遠くから見ていたやじ馬達の中から村長が飛びだして男に駆け寄る。

「はあはあ・・・、あ、あんた達は一体？」

男は足を止めて村長に向き直る。

軍人たちの列から一人の女軍人が男の側に立ち、手に持っていた封筒から書類を村長に突き出すように出した。

「私達はこの村に現れるという狼退治に参りました。これがその書類です。」

村長が眠い目をこすりながら見てみる。

そこには確かに「出勤要請書」とでかく書かれたタイトルの下に小さい文字で何行にも文が書かれている。

おそらく狼の捕獲、または殺害についての内容なのだろう。

疲労しきっていたために頭の回らない村長にはよくは分からなかった。

そんな村長を見限ったかのように女は書類を封筒に戻し、村長へ手渡そうとするが手が何時までたっても軽くならない。

不思議に思っただけが村長を見ると彼が小刻みに震えているのに気付く。

そして、村長は封筒を手に取りうとせず、はたくように地面へと叩きつけると怒りながら叫ぶ。

「い、今頃来ても遅いんだよ！もう何人も村人が殺され、傷ついた！なんで、なんでもっと早く来てくれなかったんだ！」

「・・・お気持ちは分かりますが、残念ながら私達が出動要請されたのは昨日の事です」

「くそ！あんた達なんかより、よっぽどあの外国人の方が助けになっただよ！」

「外国人？」

今まで一言も発しなかった男が、気になったのか不意に村長に尋ねる。

男の不気味な態度に村長は少し怯みながらも、まるで村人を殺され

た怒りを男にぶつけるように荒々しくしゃべる。

「そうさ、あんた達が来る前に訪れた外国人が狼を捕まえたのさ！最も今は閉じ込めた檻から狼が逃げてそれを追って山に向かったがね！」

男はそこまで聞くと胸ポケットから一枚の写真を取り出し、村長に見せる。

「・・・その外国人つてのはこいつか？」

「あ、ああ、そうだ！」

「ツハ！そうかそうか、どうやら狼以上の大物が釣れたらしい」

「お、大物・・・？」

男はそう呟きながら呆気にとられる村長を部下の女軍人に任せ、並んだ軍人達の方へと向かう。

再び男の胸ポケットにしまわれた写真には日本支部を壊滅させた時の瞬が映っていた。

目の前で起こった変化に驚くあまり、変化が終わった後でも2人はただ茫然と見ている事しかできなかった。

『旅人』になり魔法の存在を知っている瞬はまだよかった。

ミハイルはというとモンスター映画を見てしまった子供のように失神しながら固まっていた。

狼の近くにいた少女は慣れたようにその狼が変貌した男の体をゆする。

男はそれに気がついて立ちあがる、全裸で。

目の前にいる革のベルトを顔に巻いた少女には見えない。

だが、男は羞恥心から大事な体の部位を手で隠しながら小屋の中へと逃げるように駆けこむ。

ものの数十秒で服を着て小屋から現れた男は通常の成人男性よりも一回りでかく、筋肉質な体つきに髪は狼に生えていた鬣をそのまま移したような銀色の長髪だった。

「何度やつてもこの全裸になるのだけは勘弁してもらいたいもんだ」

「もう、しょうがないでしょ。貴方が狼になるたびに服着てたら全部破れちゃうんだから。それよりあの人達はどうする気？」

「村人ってんなら決まってるだろ！・・・ただ、あの外国人だけはかなり強い」

「ふーん、貴方がそういう位なんだから本当に強いんでしょうけど、外国人？てつきり村の青年の一人とか思ってたけど違うのね」

「ああ、しかもあの華奢な体つきで俺と同じ、いやそれ以上の力を持ってやがる。ひよっとしたら・・・、いややってみれば分かる！いくぞー！」

「え、ちよつと！」

突然、男が瞬を指差したかと思えば止めようとする少女を無視するように瞬に向かって走り出す。

積もった雪を物ともせず、狼の時と同じ位の速度で飛びかかる。飛びかかる男に我に返った瞬は失神したミハイルを抱えたまま盾を発動させる。

男の殴りかかった拳は見えない盾によって阻まれ、届かない拳に男は見えない何かに止められたのを察した。

まるで力が分散していくかのように見えない何かを殴りつけた衝撃はまるでない。

それでいて見えない何かの手に触れた感触が堅いのか柔らかいのかも分からないような不思議な感触だった。

瞬が男に向かって手を伸ばそうとした所で男はすぐに後ろへと飛び退き、自分の手がおかしくなっていないのを確認すると瞬に向かって叫ぶ。

「お前！俺達と同じ魔法使いか！」

「え！？・・・そうですか。やっぱり、さっきの変身は魔法の一つでしたか」

「質問に答える！」

「は、はい、その通りです。貴方達と同じ魔法使いですよ」

威圧的な態度に反射的に瞬が答えてしまう。

それだけ聞くと男は瞬の格好を下から上まで見ながら何かを考えるように黙り込む。

やがて考えがまとまったのかまた口を開く。

「お前！俺を追ってきた奴か！」

追ってきた奴と言われた瞬も考え込む。

追ってきたからこそここに来たはずなのになんで今更そんな事を聞くのか、と。

疑問に思う瞬だが、とりあえず答える。

「?・・・そうですよ?」

「そうかそうか、ならここで死んでもらう!」

「な、なぜですかあー!?!」

戸惑う瞬を余所にまた飛びかかってきた男は瞬目がけて何度も殴りつける。

だが、当然のように盾によって全ての打撃が防がれてしまう。

瞬は話をしようとするが男の形相にまるで話を通じなさそうなのが分かると、瞬自身がその場から男に向かって1歩歩いた。

それにより『イージスの盾』が前へとせり出し、男へと体当たりするようにつつかると男はその場から吹き飛ばされる。

雪の上に倒れこみながら男は素早く立ち上がる。

男はふと目についた落ちていた握り拳台の石を拾い上げ、あらん限りの力で瞬に向かって投げつける。

メジャーリーガーの球をも軽く追い抜くような速度で飛んでいった石だが、盾につつかると表面を滑るようにならん方向へと飛んでいく。

後ろの岩壁に激突した石は粉々に砕けちり、男の投げた早さを物語っていた。

その結果に苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべながら男は瞬を睨みつける。

瞬はその間に抱えていたミハイルを後ろの岩壁にもたれかけるように座らせ、再度、男と対峙した。

「つち！てめえの魔法は一体何だ！村では怪力で今は見えない壁だと！？」

「・・・さ、さあ？僕もまだ成り立てなんであまり詳しくないんですよ、は、はは・・・」

「て、てめえ・・・！」

間違っていない事を言っではいるものの男からすればふざけた態度を取っているようにしか見えない。

男は頭に血が上ったように再度飛びかかるうと足に力を込める。すると少女が男の足にしがみついて動かないように体で伝え、それに気付いた男は飛びかかるのを止めて少女へと視線を落とす。

「落ち着きなさい、ボリス！そんなんじゃアレには勝てないわよ！」

「す、すまない、ソーニヤ。・・・も、もう落ち着いたから離れてくれ」

「本当に・・・？」

「本当だから・・・、な？離れてくれ」

ソーニヤは目が見えないはずなのだが、まるで見えているように冷や汗をかいているボリスとしばらく向かい合い、納得したのか足を放して離れる。

ボリスが安心したかのように一つため息をつくと敏感に反応したソーニヤが怒ったような雰囲気を出す。

あえてボリスはそれを無視して瞬と対峙する。

のだが、対峙しているはずの瞬は今のやり取りの一部始終を見ていて気が抜けたように突っ立っているだけで、ボリスはその気が抜けた相手にまた苛立ちを覚える。
せつかく下がった血がまた頭へと上っていく。

「お前、殺し合いをするんだからやる気を出せよ!？」

「と言われても今のやり取りを見てたら・・・、ねえ？」

頬を人差指で搔きながらどこか笑う様に言われるとボリスは顔を赤くし、その場で何回か地団駄を踏んで叫ぶ。

「そ、それとこれとは、かつ、かつかか、関係ないだろうがっ!・
・・・いいか、いくぞ!」

無理やり張り詰めた空気になると瞬めがけて走り出すボリス。

また飛びかかるのかと瞬は思った。

しかし、ボリスは飛ばずに俊敏に瞬の側面へと回りこみ、そして瞬目掛けて殴りつける。

それでも同じ感触であるのにボリスは舌打ちをしながら瞬が振り向くより早く今度は背後に回り込み、そして同じように殴りつける。

やはりどこを殴っても全く同じの結果であり、瞬の周りが見えない盾で完全にガードされているのが分かるとボリスは歯がゆい思いをする。

それでもまだ諦めないボリスは岩壁に向かって勢いよく跳ぶ。

そして、岩壁を力強く蹴りつけて三角飛びをすると瞬の頭上高くに跳び上がる。

そのまま空中で態勢をつまく整えると瞬に向かって頭から急降下しながら、左手を前に出しながら右手だけを握り締めて後ろに引く。

「食らいやがれ！」

気合いのこもった叫びに合わせて引いた右手をため込んだ力を解き放つように突き出した。

見えない壁があるであろう場所に絶妙なタイミングで衝突する。

空手の要領を用いて全力で放ったこの拳はクレインについた鉄球ですら叩き割った事があった。

更にそれに加えて真上からの落下の威力も合わせたこの一撃は今の彼が繰り出せる中でも最高の一撃だった。

放った彼自身も見えない壁にぶつかるまではこれで叩き割れる事を間違いない確信していた。

そう、ぶつかるまでは……。

衝突の瞬間、彼は頭が認識するよりも体が先に認識してしまい、まるで戦う事を拒むかのように体中に悪寒が駆け巡り筋肉が委縮する。右拳にまた同じ感触が広がったのを混乱する頭で理解した時、目の前には麻醉銃を構えた瞬の姿が見えた。

「すいませんが眠っていてください」

乾いた発砲音が広場に一発響いた。

麻醉銃から発射された針がボリスの眉間に突き刺さり、針に塗られた睡眠薬はボリスを夢の世界へと誘う。

何が起こったかわからないままボリスは雪の中へと倒れ、体の感覚が麻痺していく中で小さい痛みを感じる眉間から震える右手で針を抜いた。

ボリスはそこでようやく自分がやられた事が分かった。

「く……そ……、て……めえ」

抗える事の出来ないような強烈な睡魔がボリスを襲う。

ボリスは強靱な意志でそれに抗いながら瞬に向かつて右手をのばすものの、その右手は瞬に届くことなく雪の上に沈む。普段なら銃で撃たれる程度でボリスが死ぬはずが無いとソーニャは信じていた。

だが、音が無くなつてからしばらくしてもボリスの声は聞こえず、相手が得体の知れない相手だけに不安を覚える。

「ボリス、ねえ、大丈夫？・・・返事してよ！ボリス！」

「・・・彼は寝ているよ」

一部始終を見ることの出来ないソーニャはその瞬の言葉にボリスが殺されたと錯覚した。

1人になつたという孤独からの悲しみ、そして奪つた奴に対しての強烈な怒りが体の中で大きな渦となり少女の中で渦巻く。

彼女は激情に駆られて己の目を封印している黒い革ベルトを次々に外していく。

「許さない！許さない！よくもボリスを・・・！」

「・・・え？あれ？」

おとなしそつだつたソーニャの突然の変貌ぶりに瞬は何か焦るようなものを感じ、嫌な予感がしてたまらない。

その道の達人が見ていたならソーニャを中心に真っ黒などす黒いオーラがあふれ出ている、などと表現出来るだろう。

それほど革のベルトを外していく彼女は色々な意味で異様であつた。

「殺してやる！殺してやる！絶対に！」

「・・・へ？彼は寝てるだけ、寝てるだけなんだよ！？」

「フッフ！もう知らない！貴方が悪いのよ！さあ、ボリスと同じ目に合わせてあげる！」

「ま、待つてー！ー！」

どこをどう聞いても優しく眠らせてくれるだけの台詞には聞こえない。

彼女の雰囲気とは別に瞬は彼女のベルトがほどかれて行くとともに威圧感が高まっていくのも感じていた。

瞬は何か凄いものが来ると言う予感に従って、巻き込まないようボリスとミハイルから遠くに離れる。

もう言葉では止められないと瞬は麻酔銃を構えてソーニヤへと狙いをつける。

「ごめん！」

小さくつぶやきながら麻酔銃のトリガーを引いた。

発射された針が狙い通りにソーニヤへ刺さる寸前、ちょうど巻かれていた黒い革のベルトが全て雪の上に落ちる。

目を閉じている彼女はただのかわいらしい少女であったが、彼女が目を開いた瞬間、その認識は一変する。

開かれた目から一瞬だけ眩しい光が走り、思わず目を腕で覆いながら瞬は目を閉じる。

瞬が恐る恐る目を開くとそこにはさっきまでとは別の世界が広がっていた。

「これは・・・一体！？」

瞬の周りにあつた積もつた雪が全て石になり、まるで波打つ海のように不思議な形状の一枚岩になっていた。

さらにチラチラと揺らめくように振っていた雪は全てが小石へと変貌し、重力に従つて小石の雨となり辺りに降り注ぐ。

ソーニヤの目の前まで迫っていた瞬の放つた金属製の針は石の針へと変わりその場に力を失つて落ちていた。

そして、たまたま広場の中で休んでいた山鳥は魂の籠つた石の彫像となり、もう空へ飛び上がる事はないだろう。

ソーニヤの足元から広がるように広場の半分が石の世界へと変わつてしまい、その中でイージスの盾により瞬だけが無事に立っていた。

「信じられない・・・、まさか見たものを石に変える魔法、とでも言うんでしょうか」

「つく!?!・・・なんで、なんで生きてるのよ!」

驚きながらも無事に立っている瞬にソーニヤが驚く。

ソーニヤの魔法は視界に収めたものを全て石に変えるという使いようによつては最悪の魔法だった。

だが、それでも全ての攻撃を防ぐとまで言われた『イージスの盾』には及ぶ事はなかった。

魔力が尽きてしまい同じ魔法を放つ事が出来ないのか、見開かれた綺麗な瞳からは石にする光はまた出る事はない。

その目にははまるで爬虫類のような目と同じ縦に細長い瞳孔があった。

瞬を初めて見る事が出来た少女だったが視界は徐々にぼやけていき、更に視界の中に暗闇が入りこんでくる。

ソーニヤは力が尽きたようにフラフラと歩き、ボリスの傍へ行くと添い寝するように隣に倒れる。

少女が最後に見たのは倒れたボリスの寝顔だった。

初めて目にしたボリスの顔に少女が笑顔を浮かべた次の瞬間、彼女の視界は全て暗闇となり意識は深く沈んでいった。 彼女

第19話：魔狼（4）（後書き）

あけましておめでとございます。

今年もボチボチと投稿させていただきます。

今年中に考えている内容が全て書き出せればいいんですが・・・。

コメント等いただけると非常にありがたいです。

第20話：魔狼（5）（前書き）

2010/05/05 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第20話：魔狼（5）

背中にミハイルを背負い、両脇にボリスとソーニヤを抱えて器用に3人を持ち上げた瞬は穴のあいた小屋の中に入る。

小屋の中はリビングの中に簡易なキッチンと暖炉、それにベッドがあるだけで、他にある部屋といってもトイレと風呂だけだった。

瞬は3人を炎が燃え盛る暖炉の前に並べて横たえる。

ボリスが跳び出して空いた穴を作り出した木の板で塞ぐと雪で冷えた体を温めるようその場にあつた毛布をかけていく。

ふと2人が目を覚ました途端にまた襲ってくるのではないかと瞬は不安に駆られた。

見ただけで石に変えてしまう魔法を持つ少女。

彼女にかかれば、例え『旅人』であつたとしても反撃や回避をする間もなく、盾が無ければ一瞬で石に変えられてしまふかもしれない。あまりやりたくはないがしょうがないと、瞬は手の中に縄を作り出して二人を縛り上げる。

そして、外に落ちていた革のベルトを拾い上げると少女の顔に巻きつけておく。

罪悪感を覚えながらも一仕事終えた瞬だが、夜通し動いた割には特に眠気が感じられない。

徹夜は瞬もそんなにした事がないが、それでもここまでスッキリとした程に眠気が無いのは初めてだった。

それならばと瞬は何も無い場所に木製テーブルと椅子を作り出し、その上に朝食として熱いコーヒーと焼き立てのクロワッサン、それにジャムやバターを作り出す。

満足げに椅子に腰かけるとコーヒーを一口飲み、芳醇な香りと苦みや酸味を十分に味わいながら飲み込む。

次に表面がきつね色に焼けたクロワッサンを頬張ると表面がひび割れるいい音を上げる。

コーヒーの後味が残る口の中をパンのほんのりとした甘みが満たし、その食感や味に自然と瞬は誰に向けるでもなく笑顔になる。

「おいしい・・・、一度食べてみたかったんですよ、このクロワッサン。小さな夢が叶いました。」

テレビの特集で一目見た時からいつか食べてみたいと思っていた三ツ星ホテルのクロワッサンにご満悦の瞬。
ふと横になっていたソーニヤが呻きながら動いたのに気づき、気になつて席を立ちあがる。

ミハイルとボリスの間に挟むように寝かせていたため、ミハイルをまたぎながら彼女の側に行こうとする。

不意にミハイルの目が開き、そのまま欠伸をしながら起き上がった。
きた。

「おわ!?!」

起き上がったミハイルとまたいでいた瞬は当然ぶつかり、瞬は押されてソーニヤの方へと倒れこむ。

「いたたたっ! な、何じゃ?」

ぶつかった痛みにもミハイルは頭を抑えながら、見覚えのない小屋の中を見回している。
すると隣に見知った顔がいるのに気づく。

「瞬、一体どう・・・し・・・」

そこでミハイルの言葉は止まってしまった。
目の前の光景に言葉が出なくなる。

すつきりしない頭ではあるが今がどういう状況なのか全く分からずに混乱する。

「あ、ミハイルさん、起きましたか。おはようございます」

「……」

ただ目の前にいる瞬は特に何事もないように呑気に挨拶をしてくるが、ミハイルは固まったように動かない。

「……どうかしました？」

「……お前さん、そういう趣味か？」

「そういう……趣味？」

「それじゃよ、それ」

信じられないと言ったような表情でミハイルが指さす。

その先には、ソーニヤの小さい胸に手をつけている瞬の左腕があり、少女は呻きながら荒い息を上げる。

それを見た瞬はミハイルと同じように一旦思考が停止し、石像のように体が固まる。

数秒後、再起動した頭の命令に瞬は慌てて寝ている少女から飛び退く。

顔を少し赤くしながら少女が気付いて起きてこないのに瞬はほっとするが、隣からの冷やかな視線に誤解を受けているのに気づく。

「ちっ、違います！いい、いい、今のはぶつかった拍子にくっ、偶然
「！」

「・・・そうか」

「絶対信じてないですね！彼女が呻いていたから大丈夫かなと思っただけで！」

「それで胸を触った、と？」

「事故です！事故！僕にはそんなやましい気持ちはありません！そもそもミハイルさんが急に起きてくるから！」

「ほー、ワシのせいじゃと？」

そこで瞬は気づいた。

ミハイルがニヤニヤと楽しげに笑っている事に。それを見て段々と熱が収まっていった瞬は、落ち着いてから一言咳く。

「・・・ミハイルさん、分かってて楽しんでるでしょう？」

「ははは、ばれたか。お前さんのような優男がそんな事するとは最初からおもつとらんよ。ただ、起きていきなりぶつかった痛みの気晴らしじゃ」

「そうですねかそうですね・・・」

笑ってすまそうとするミハイルとは対照的に瞬は精神的な疲れを感じながら肩を落として椅子に座る。

無言で残っているクロワッサンを食べる瞬を尻目にミハイルも椅子に腰かける。

ただ黙々と食べ続ける瞬にミハイルは少しだけ悪気を感じながらクロワッサンに手をつける。
すると村の中では食べた事のないようなおいしさに自然と言葉がこぼれる。

「・・・うまい！こんなうまいのを食べたのは初めてじゃ」

俯いていた瞬はその言葉に顔を上げ、驚いた顔で目を見開きながらクロワッサンを味わって食べるミハイルを見る。

瞬はまるで用意した自分の事を褒められたかのように思えた。
すると瞬の沈んでいた気持ちが上が向きになり、さっきの事などすっかり忘れて饒舌に話したず。

「そ、そうですか！いや、実はこれテレビで放送されるほど有名なクロワッサンでして、バターから小麦粉まで厳選された材料を元にヨーロツパのパンコンクールで1位を取った外国人シェフが作っているんです。ホテルの朝食として食べる事が出来るそうなんですが、これを目当てに泊まる人が後を絶たないそうです。それ位、人気があるそうなんですよ」

「ほう、ホテルか。パン屋でなく、ホテルが作ったパンが人気とは変わった世の中じゃ。・・・さて、そろそろ本題じゃがあの人二人は一体？」

「ええっと、まあ、僕が捕まえたんですけど、今は気絶してましてまた起きたら暴れるのも困るのであんな感じに縄を」

「そうじゃない、狼が変身してあの男になったじゃないか！あれは一体何じゃ！何度も狼と出くわした事はあるが人間に変身する狼なんぞ見たこともないわい！」

さっきの戦いからもあの二人が魔法使いなのは間違いが無かった。だが、瞬としてはミハイルに魔法の存在を話すべきなのか悩む。なぜなら魔法の話をしたならばおそらく信じてはもらえるだろうが、そうなるとおそらく自分も魔法使いである事を知られてしまう。そうなった時、ミハイルの自分を見る目が変わってしまうのではないだろうか。そう考えると言いようのない不安感が瞬を襲い、自然ととぼけるように答える。

「さ、さあ、分かりません。ただ、狼から人間に変身するなんて狼男みたいでしたが・・・」

「ふむ、夜が明けたから人間に戻ったと言う事か。じゃが、そんなおとぎ話みたいな話信じ・・・るしかないかの、現に目の前で起こった事じゃし」

ミハイルは眠っているボリスへと視線を移すが、どこからどう見てもただの人間にしか見えない。

長髪の銀髪だけが狼とのつながりがあるように思えるだけだ。そうやってボリスを注意深く見ていると不意にボリスのまぶたが何度か動き、ゆっくりと目を開く。

「う・・・、んんっ!？う、腕が動かん・・・!」

目を覚ましたボリスが巻きつけられた縄で動かないのを知らず、床の上を左右に転がりながらどうにかして腕を動かそうとする。振り子のように行ったり来たりするのが止まると自分の体を見る。ボリスは体中に縄が巻かれている事に気づき、そして呑気に朝食を食べている二人と目が合う。

「お前ら！俺を捕まえたつもりか！」

「まあ、そのつもりです」

「甘いな！ふん！」

ボリスが寝転がったまま腕に力を込める。

すると縄が切れる音を上げながら弾け飛び、ボリスは得意げに立ちあがる。

その隣に寝たままのソーニヤを見つけると顔を平手で軽く叩いてみる。

だが、意識がもどらずに小さく呻き続けるのに血相を変えてその場にしゃがみこむ。

「お前！一体何をした！」

「別に何も。ただ、彼女が目を開いて僕を襲ってきたと思ったら、その場で倒れてしまったんです」

「目を開いた！？ベルトを取ったのか！なんだってそんな事を……」

強気だったボリスの態度が見る影もない程に彼は少女の心配をしていた。

意気消沈した様に隣に座り込んで少女の様子をずっと見ている。

そんなボリスを見てるとさすがに勘違いでこうなったとはどうにも言えない瞬は黙っていたが、逆にボリスの方から話しかけてきた。

「なぜだ、なぜお前は無事なんだ？ソーニヤの視界に入ったなら

全部石に・・・」

「まあ、その・・・、運が良かったもので」

「くそ！どこまでもふざけた奴だ！お前のせいでソーニヤはまた一晩うなされ続ける羽目になった！」

ボリスはやり場のない怒りをぶつけるように握り締めた右拳を壁にぶつける。

その拳は大きな音を上げながら壁の中に完全に埋没する。

そこに事情がよくは分からないもの立ちあがったミハイルがボリスのそばに立ち、ソーニヤの様子を見ながらボリスに問いかける。

「話してくれんかの、なんでお前さん達が此処に住み、わしらの村を襲うのか？それにその狼から人間になった事も」

ボリスはミハイルを睨みつける。

だが、ミハイルが村人達を殺された怒りを爪が食い込むほどに手を握り締めて必死にこらえているのにボリスは気づく。

そして、しばらく黙ったまま、考え込んだかと思うとおもむろに口を開く。

「・・・いいだろう、今はソーニヤも聞こえてはいないはずだ。

だが、小屋に運び込んだ分の借りはそれでなしだ。いいな！？」

二人は了承して頷き、ボリスはソーニヤに目を落とすと静かに語り始めた。

「あれは・・・」

遡る事、3か月前。

ロシアの市街地に建てられたある施設の地下にボリスは閉じ込められていた。

街に出たボリスがちょっとした事で喧嘩を吹っ掛けられ、気性の荒い性格であるため相手を半殺しにまで追いやってしまった。

程なくして到着した警察に連行されるとどういふ訳か留置所や刑務所ではなくここにまで連れてこられた。

部屋の中はベッドとトイレだけがあるだけで他の物は何もなく、見た目から言えば刑務所の一室と言っても誰も信じるだろう。

ボリスはベッドの上に寝転がると不貞腐れた様に天井を眺めながら、喧嘩を売ってきたチンピラと捕まえた警察への文句を呟く。

そうして過ごしていると不意に開いたドアから二人の警備員が現れた。

起き上がったボリスを有無を言わずに両脇を抱えながら部屋から連れ出していく。

ボリスは連行されながら同じような部屋のドアが並んでいる長い廊下を出ると、ある部屋へと連れて行かれる。

薄暗い部屋には真ん中に手術台があるだけで、白衣を着た医者らしき者がその周りを囲むように数人立っている。

誰が見ても嫌な予感しかしない状況に当然ボリスは暴れて逃げようとした。

だが、どういう訳か見た目はそれほど力のなさそうな感じの警備員の腕を外す事が出来ない。

「てめえ、放せよ！・・・ぐほっ！」

反抗するボリスを腹を殴る事で簡単に黙らせた警備員は手術台の上

う。

だが、不意に鉄格子付きの窓から見える満月の光がボリスの体を照らした時だった。

不思議な事にその光が当たった部分の痛みが和らいでいくのをボリスは感じていた。

更に体にも変化をもたらし、手術痕がまるで逆再生のビデオでも見ているかのようにうつすらと消えていき、人間の毛とは思えないほど体毛が濃く長くなっていく過程で銀色の体毛へと変わっていく。雲に隠れていた月が全体を見せた時、降り注ぐ光はボリスの体を全て照らし出す。

それに応じて口と顎は前へと突き出していき、腕や脚はしなやかでありながら盛り上がっていくと肥大化した筋肉を持ち、全身がでかくなっていく。

全ての変化が終わった時、そこにいたのは月の光に銀色に輝く巨大な狼であった。

「ウオオオオオオオーン！」

狼は誕生の産声を上げる様に建物中に響き渡る遠吠えを上げる。

それを聞きつけて駆け付けた警備員がドアを開いた途端、その警備員の目の前に現れた巨大な赤い目と目が合う。

警備員は恐怖に足元がすくむと、狼は警備員へと弾丸のように飛び出し体当たりする。

ぶつかった警備員の胸からは骨が何本も折れる音が上がる。

口から血を吐き出しながら警備員は吹き飛ばされて壁へと叩きつけられ、意識は一瞬で刈り取られた。

もう一人いた警備員はM92Fを腰のホルスターから抜いて逃げながら狼へと果敢に撃ち続ける。

だが、当たっても狼の巨大な筋肉の壁に血がにじむ程度で終わってしまう。

警備員はあつという間に弾切れになったM92Fを投げ捨てる背中を見せて逃げ出す。

アスリート並みの脚力を持って逃走しようとしたものの、狼は廊下の壁を蹴りつけて反対側に跳ぶ。

狼は目前に反対側の壁が迫るとまた蹴りつけて反対側に跳ぶというのを繰り返し、ジグザグに壁の間を跳び続けて警備員を追いぬくとその目前に降りる。

退路を断たれた警備員は牢屋へと戻ろうと反転したが、その1歩を踏み出す前に狼が右前脚を振るう。

警備員の背中に深々と刻まれた3本の爪痕が刻まれ、内臓にまで達している傷からは大量の血があふれ出る。

狼は警備員が動かなくなるとその場から走りだし、行く手を阻む警備員や壁を易々と突破していくとやがて外へと出る。

その狼を追って警備員達が次々とわき出すように出てくるのを尻目に狼はその場から走りだす。

狼はあつという間に警備員達を突き放して森の中を駆け回り、その姿をくらませた。

翌朝、目を覚ましたボリスがいたのは小さな洞窟の中だった。

狼になっていた時の事はハッキリと記憶しており、自分自身の体がどうなったのか腕や体を見てみるとそこで2つの事に気付いた。

まずは全裸になっていること。

狼になると体格がでかくなるために服が弾け飛んでしまい、風が吹くと体中で風を感じる。

周りに人がいなかったのは幸いだった。

そしてもうひとつ、それは体中にあつた手術痕が全て綺麗に消えていた事だった。

狼になった効果か、銃で撃たれたはずの場所も銃痕すらなく、捕まる前となんら変わりない体のままだった。

自分の身に何が起こっているのかさっぱり分からないボリスだったが家に帰ろうと洞窟から出ようとした。

その途端、いきなりナイフを片手に飛びかかってきた男が現れる。反応の遅れたボリスは迎撃しようとパンチを繰り出す。ナイフの方が先にボリスの胸に突き刺さるうとしていた。にも関わらず、骨を砕くような音が鳴ったかと思うと出遅れたはずのボリスのパンチは男の胸にめり込み、男は軽く3mは吹き飛ばす。目の前で起こったまた信じられない出来事にボリスが驚く間もなく、次々に同じような男達が現れて襲いかかる。

ボリスはその場から逃げだしたが、狼の時ほどではないが男達をあつさりともいてしまうほどの脚力ですぐに男達の追跡は途絶えた。狼になったのに関連しているであろうこの力を頼もしく思う。

だがその反面、奴らにされた事がいまだ何なのか分からない恐怖に怯えながらどうにかボリスは家に帰り着いた。

残念ながら家は既に敵が待ち伏せをしており、命からがらボリスは逃げ出した。

それから盗みや強盗をしながらどうにか食いつなぎ、ロシア国内を転々としながら逃げ続けた。

その間、夜に満月の光を浴びるたびにボリスは狼へと変身し、それが窮地を救ったり逆に陥ったりと制御できない力に振り回され続けた。

そして逃亡生活にも疲れ切ったある日、彼は人などいる事はないであろう山に逃げ込んだ。

山を登って手頃な洞窟に身を隠しているとその奥が抜けているのに気が付き興味本位で奥へ進んだ。

洞窟を抜けた先は周りが石壁に囲まれている開けた場所だったがその中心に一軒の小屋が建ち、小さい煙突から白い煙が上がっている。人がいるのを確信したボリスはちょうど腹が減っていたのに気づき、食料を強奪しようとその小屋のドアを蹴り飛ばす。

「強盗だ！食料を寄こ・・・せ・・・」

威勢よく叫びながら中に入るが、途中から声は消える様に小さくなっていく。

中にいたのはベッドの上に横たわっている老人、その隣で老人に寄り添いながら俯いて泣いている赤毛の少女だった。

少女がボリスの存在に気づいて顔を上げる。

その顔を見たボリスは少女の目のあたりに巻かれた革ベルトに驚き、思わずその場から1歩下がる。

「グスツ、貴方・・・誰？」

弱弱しい声で彼女はそう尋ねる。

さすがにボリスもこの状況はまずいと感じたのか目の見えていない少女から逃げるように無言で小屋から出る。

「待つて！」

逃げ出そうとしたボリスに気づいて少女は呼び止めるが、ボリスは走って逃げ出す。

「待つて！待つてよ！・・・あっ！」

少女もボリスを追いかけようとしたが小屋の段差に足をつまずき、地面の上に倒れこむ。

「ま、待つてよ、・・・一人に・・・しないで」

「・・・つち！しゃあねえ」

横たわりながらすすり泣く少女にさすがのボリスも足を止め、少女を起こしてやると小屋の中へと連れていく。

ベッドの端に少女を座らせて、寝ている老人をよく見てみる。どうやら既に息を引き取っているらしく、呼吸音も心臓音も聞こえない。

今でも既に厄介な状態なのに別の厄介事に巻き込まれたのにボリスは軽いため息をつく。

「はぁ……、とりあえず名前を覚えてくれるか？俺はボリスだ」

「ソーニヤ……寝ているのはセルゲイ、私のお爺ちゃんよ。もう死んでしまったけど……」

「……そうか、それで他には誰かいないのか？」

「誰も……いないの。捨て子だった私をお爺ちゃんが拾ってくれたの」

これから先、この子は一人で生きていかなければいけないだろう。目が見えないのは更にこの子の人生を厳しくしてしまう、とボリスは巻かれた革ベルトが気になった。明らかに治療などといった類の物ではない。

「目はどうしたんだ？」

「……別に見えない訳じゃないの。ただ、私の目は物を見てはいけないの」

「どういことだ？」

ソーニヤは覚悟を決めた様に一度深く息を吸い込むと、ゆっくりと話した。

「私の目は『メドゥーサの目』。見た物を全て石に変えるの。例え、それが木でも水でも魚や鳥でも見た物全てよ。勿論、人間や貴方も、ね」

冷やかに話す少女の言葉とその内容に周りの温度が急激に下がったように感じるほどボリスの体に寒気が走る。だが、それと同時に自分と同じような得体の知れない力を持っている事に共感を覚え、仲間が出来たようにさえ錯覚する。勿論、彼女の言う事が本当であるなら、だが。

「それは本当か？」

「本当よ、それにボリスも同じような力を持っているでしょう？」

「!!!・・・っなんでだ!？」

「貴方の体から普通の人よりも大きい魔力を感じるからよ。当てずっぽうだったけど、当たったみたい」

「ま、魔力?なんだそりゃ？」

そう言われてソーニヤはまるで何も知らないらしいボリスにため息をつく。

ため息で馬鹿にされたのが分かったボリスが少しイラつきを覚えた。ソーニヤはそれを無視するように話を続け、魔力や魔法についての説明をボリスに行った。

聞いている内容はあまりにも突飛すぎるが、実際に自分の身に起こっているだけにボリスは信じるしかなかった。

逃亡生活の中で唯一のそしてまともな情報だった。

救いを見出したかのように自分よりも一回りも年の離れた少女の話に耳を傾ける。

「それで、貴方はどういう魔法なの？」

一通り説明が終わると、初めて自分以外の魔法使いにあつたソーニヤはボリスの力が何なのか興味を持ち問いかける。

だが、ボリスはどのような魔法かと言われても具体的に説明されたわけでもない。

とりあえず謎の組織に捕まつた所から今に至るまでの内容を全てソーニヤに話す。

手術の辺りから青ざめた表情のソーニヤは少し考えり素振りを見せる。

ソーニヤは何か思いついたのかベッドの下に手を入れて古びた1冊の本を取り出すとボリスに手渡す。

「それの中に書いてあつたかもしれない。ただ、私もお爺ちゃんに読んでもらつて聞いたただだから分からないわ」

カビ臭い本の匂いに耐えながらボリスは本をめくってみる。

その中に狼と人間の絵、それに月から光が降り注いでいる絵が描かれたページを見つける。

文字が何語で書かれているかさえボリスにはさっぱり分からない。

ただ、絵を見る限りではまずこの魔法で間違いはなさそうだった。

全く文字が読めない事をソーニヤに告げるともう一冊ベッドの下からノートを取り出してボリスに渡す。

ノートにはその文字の解説内容が手書きで書かれていた。

ボリスはその内容を元に久しぶりに本と向き合いながら解説を続ける。

そして、ようやくページ内の解説を全て終えた頃には日は沈んで辺

りは暗闇に包まれており、お爺ちゃんに寄り添っていたソーニヤは疲れからか眠っていた。

ソーニヤに毛布をかけたボリスは早速解読内容を読んでみる。書いてある内容は逃亡中に自分で気付いた内容とほとんど同じであった。

一つ分かったのはこの魔法『狼化』は狼と暮らすある種族での遺伝によるものでしか発生しないらしい。

だが、ボリスはその種族とは何らかかわりが無い。

先祖や親戚にもそんな種族が関わっているなど聞いた事はなかった。つまり、無理やり植えつけられた魔法と言う事なのだろう。

体をいじられた事に対する怒りがまたボリスの中で湧き上がる。

物に当たるように振りあげた拳を振り下ろそうとした所で先に腹の方から空腹を知らせる音が鳴る。

探しては見たが特に食べる物も見当たらず、ボリスは空腹を紛らわせるようにその場に横になると一仕事終えた疲れからかすぐに眠りへと落ちた。

第20話：魔狼（5）（後書き）

今回は回想シーンを入れてみたので結構なグダグダ感が否めない・
・・。

それととりあえず今年の目標としては、何方からかお気に入りをもら
うことですね。

でも、自分の趣味で書いている内容なので・・・そう望めるもので
はないのかも・・・。

読んでいただきありがとうございました。

第21話：魔狼（6）（前書き）

2010/05/09 修正版を更新（いくつか表現を修正

第21話：魔狼（6）

暖炉の前で横になっていたボリスは凍える寒さに目を覚ます。

寝ぼけながら起き上がったボリスは体をさすりながら暖炉の小さくなつた火に隣に置いてあつた薪をくべる。

程なくして薪に移つた火は大きくなっていき、それと同時に朝日も差し込み始めた。

ふとソーニヤを見ると死んだセルゲイ爺さんの側で眠つたままだつた。

ソーニヤに気づかれないようボリスは静かにドアを開けると、外へと出てここから去ろうと足を進める。

かわいそうな少女をできるなら助けてやりたい。

だが、自分が此処にいれば必ず追手が現れてソーニヤを危険に晒す。見た事はないが彼女が持っているという石化させる『メドウーサの目』とやらも、奴らに見つかれば自分の様に体中を切り刻まれることにもなりかねない。

ボリスの頭の中に泣き叫ぶソーニヤを切り刻む連中の様子が浮かぶ。想像するだけでボリスは眉間にしわが寄るほど厳しい顔つきに変わるが、その妄想を振り払うように顔を左右に振る。

逃亡してから初めて休まつた一時を名残惜しみながら、ボリスは洞窟を抜けると強化された身体能力で飛び跳ねる様に山を下りていく。すぐに山の麓にまでたどり着くと遠くに村らしい集落が見えた。

起きてから鳴りっぱなしの空腹を静めるべく食料を調達しようとボリスは村へと向かう。

まだ夜が明けたばかりのため、村の中を歩く者はボリス以外に誰一人としていない。

それをチャンスとボリスはある家の自家菜園で実っている果実や野菜をいくつかもらい、生のまま食べられる物にかじりついて空腹を満たす。

残った野菜と果実を採取用として使われている籠に入れ、籠を持たままその家を後にしようとした。

すると、ちょうど家のドアが開き、ボリスは慌てて家の陰に隠れる。息を整えながら悟られないようにジツとし、開いたドアの様子を物陰から窺う。

すぐに家の中から中年の男が現れ、辺りの様子を窺いながら外に出ると村のはずれの方へと歩き出す。

どことなく怪しい感じの男にボリスは興味を抱いて後をつけていく。その男は山側の入口に建てられている見張り台の下で足を止めた。誰かを待っているのか何もせずにもその場から動かないが、しばらくすると一人、またしばらくしてもう一人といった様に人は増えていく。

最終的に計5人の男が集まった所で何かを話し始めた。

隠れるように話す会話の中身を聞いてやろうとボリスは近寄り、会話の内容に聞き耳を立てる。

「・・・は死んだのか？」

「ええ、間違いなく。昨日飲ませたスープの毒がまわって死んでいるはずですよ」

「本当に警察にはばれないのだろうか？」

「大丈夫です、体からは検出できない毒で死因もただの心臓麻痺になるそうです。奴らから買ったので間違いはないでしょう」

「そうか、これであの山を売り渡す事が出来る。得体の知れない連中だが、破格の値段であの山を買い取ってくれるなら大歓迎だ！まあ、セルゲイ爺さんには悪い事をしたがな」

「なあに、身寄りの一人もいない変わり者の爺さんだ。いつ死んでもおかしくはないのだから構わんさ」

「そうだな、これで村も発展するのだから尊い犠牲という奴だ。せめて葬式は私達で開いてやるう」

「おお、それはいい！」

「そうしましょう！」

「ははは、ではまた後で」

そう言うと男達は楽観的に自分の家へと帰っていく。

当然、この時間に自分達以外には外を出歩く者はいないと思つての会話だった。

だが、それを物陰から聞いている男がいるのにはまるで気づくことはなかった。

ボリスは胸糞悪くなる内容の会話に近くの木を殴りつけてその拳を木の中にめり込ませる。

八つ当たりで気持ちが少し静まるとボリスは急いでソーニヤの元へと走る。

信じられないほどの速度で一気に小屋にまで戻り、息を荒くしながらドアの前に立つと中からソーニヤの声が聞こえてきた。

「ヒグツ、ヒック……。一人……。一人になっちゃった。グスツ。お爺ちゃん……。ボリス……。ウウツ」

ボリスは良心がチクチクと痛むのを感じてドアに手が触れられない。数秒固まった後に意を決してドアを開けると、それに気付いたソーニヤは革のベルトの間から流れる涙を拭う。

「だ、誰？」

「ボリスだ」

「・・・え？ボ、ボリス？・・・ウウツ、ウワーーン！」

拭ったそばからまた流した涙そのままにボリスの足へと精一杯の力でしがみついて泣きだす。

「馬鹿！ボリスの馬鹿！私を一人にしないでって言ったじゃない！」

良心が更に痛むのを感じながらボリスはどうしたものかとソーニヤの頭に手を軽く添えてやりながらしばらくその場に立ち尽くした。特に何かしたわけでもないのにやたら懐かれているのを多少困ったようにボリスは思っていた。

だが、ベッドに横たわっているセルゲイを見ると村で聞いた会話が頭に浮かび、泣き続けているソーニヤの両肩を掴んで放す。

「おい、爺さんはどうして死んだんだ？」

「ヒグツ、ふ、ふえ？昨日、村から帰ったら胸が苦しいって。グスツ、ベ、ベッドで横になってたんだけど、全然息がなくて、ヒクツ」

涙声で分かりにくい内容だったが、ボリスが村で聞いた内容とは一致する。

それを聞いたボリスは眉間にしわを寄せ、また怒りがこみ上げてくる。

ふと奴らの一人がスープを飲ませたと言っていたのを思い出し、足元で泣く少女は飲んでいないのか慌てて問い詰める。

「お前は飲んでないのか、スープ!？」

「ス、スープ? 私は昨日から何も・・・」

そう言うときちょうどソーニヤの腹の音が鳴る。

ボリスは安心するとともに自然と笑いがこみあげ、逆にソーニヤは笑われたのに顔を赤くしながらようやく泣き止む。

ボリスは村から頂戴してきた野菜と果実を手早く調理し、皿の上に盛り付けてソーニヤへと手渡す。

おいしそうな匂いにソーニヤの腹の音はまた鳴る。

だが、今は恥ずかしさよりも空腹を満たすほうが先だと野菜炒めを見えない割に器用に口へと運んでいく。

その食べっぷりを見ながら、ボリスは頭の中で今の状況を整理し始めた。

まず、村の連中はこの山を得体の知れない連中とやらに売り渡そうとしていた。

だが、この山に住んでいたセルゲイ爺さんがそれを拒否したため、あの村で見た5人が話し合いでもするために村に降りてきたセルゲイ爺さんに毒入りスープを飲ませた。

セルゲイ爺さんはどうにか小屋にまで帰ってきたが、そこで力尽きてしまった。

邪魔者がいなくなった所でこの山を謎の連中に売り払い、その金で村は発展するといった所だろう。

ここまでの話になったのであれば警察に通報して調べてもらうのが手っ取り早い。

だが、この野菜炒めに集中している少女はどうなるのか。

『メドゥーサの目』という常人なら胡散臭い話をまともに信じては

もらえないだろうし、逆に信じてもらっても厄介な事にしかならぬい。

村人の一人はセルゲイ爺さんは身寄りが無いと言っていた。セルゲイ爺さんがソーニヤの存在を隠していたのも分かる。

ボリスは自分も騒げば逆に自分が捕まるだけであるために警察沙汰はごめんだった。

「どうしたのボリス？黙ったままだけど？」

野菜炒めを全て胃袋に流し込んで少しは満足したらしいソーニヤは、静かに黙っているボリスに気がついた。

「いや、なんでもねえ。・・・それよりお前はこれからどうするんだ？」

「えっと、その、ここにいるよ？」

「飯の調達はできるのか？炊事、洗濯は？水汲みすらできるか怪しいぞ。どうせ今まで爺さんに頼りっぱなしだったんだろ？まあ、しょうがないがな」

「む、むう・・・、それならボリス」

「俺はいなくなるからな」

「えっ、ちよっと！なんでよ！ここにいてよ、ボリス！」

「はあ、残念ながら俺は追われてる身でね、このままここにいればお前を巻き込みまう。それにさっき村で聞いたがこの山は何処かに売られるらしい。つまり追い出されるって事だ」

「そ、そんな・・・」

ソーニヤは言いようのない不安が体にのしかかったように感じ、肩を落として立ちつくす。

ボリスなりに出来るだけ優しく伝えたつもりだったが、ソーニヤのあまりの落胆具合にボリスはまた良心が痛むが頭も痛い。

何しろまだ伝えなければいけない本当の事を伝えていないからだ。

ただ、内容がソーニヤには辛すぎる内容であり、なおかつこんな事を話した日には村中が『メドゥーサの目』とやらで石化されかねない。

「じゃ、じゃあ、ボリスについていく！」

「お前なー、俺は殺されかけてばかりなんだぞ？ 奴らの植えつけた魔法が無けりゃ確実に死んでることばかりだ。そんな所にお前が来てみる、殺されるか奴らの実験材料にされちまうぞ」

「・・・それならボリスはどうしろって言うの？」

「それは、だな、うーん・・・」

「もういい、ボリスの馬鹿！」

怒ったソーニヤはセルゲイの死体に生きていた頃の優しさを求めるように寄り添い、小さな声ですすり泣くようにまた泣きだす。

「勘弁してくれ・・・」

色々と頭の痛くなる出来事ばかりにボリスは頭を抱える。

ふと外を誰かが歩いているのに気付き、窓から外を窺って見ると村で見たあの村人達が小屋へと歩いてきていた。あらかたセルゲイが死んでいるのを発見した芝居でも打つつもりなのと証拠隠滅にでも来たのだろうか。そう考えたボリスは泣いているソーニヤの後ろに立つ。

「何よ、ほつとい、もがっ！」

てつきりソーニヤはボリスが言い訳でもしてくるのかと思っていた。だが、いきなり口を塞がれるとは全く思っておらず抗議するように体をバタつかせる。

「こ、こら、静かにしろ。静かにっ。村人が来る」

それを聞いてようやく動きを止めたソーニヤだったが、既に遅かった。

物音に気付いた外の男達はまだセルゲイが生きているのかと全員が顔を見合わせ、小屋へと駆けこむように入る。

だが、そこにはベッドの上に寝たまま動かないセルゲイがいるだけだった。

周りを見渡しても誰もおらず、空耳だろうと思った男達の注意はセルゲイに向く。

全員がベッドへと向かっていく隙に、ソーニヤを担ぎながら天井の角に張り付いていたボリスは物音をたてないよう静かに降り立つとドアから外へと出る。

幸い誰にも見つかることなく外へと出るとそのまま外側に張り付くように隠れ、窓から中を覗き込んで様子を窺う。

男達はセルゲイが間違はなく死んでいるのを確認して安心したようだ。

これからどうするかをその場で話し合っているらしく、とりあえず

葬式を開くために遺体を村に持ち帰る事で決まった様だ。

「ねえ、あの人たち何しに来たの？」

「しっ！黙ってる。どうやら村で爺さんの葬式をやるうとしてい
るらしいぞ」

「お葬式・・・か。でもお爺ちゃん、村の人たち嫌いだった。嫌
いな人達にお葬式してもらっても・・・」

「そう言うな、爺さんも村人全員が嫌いって訳じゃないだろ。そ
れに世の中にはお葬式どころか人知れず死んでいく奴もいる。それ
に比べれば人の手であの世に送ってもらえるだけマシじゃないのか
？」

「うん・・・」

その葬式を開こうと言っている村人達がセルゲイを殺した張本人で
あるのはセルゲイも浮かばれないだろう。

ボリスは湧き上がる怒りを拳を握り締める事で堪えながら奴らを見
るしか出来ない。

そうしていると一人の男がセルゲイの死体を背中に担ぎ、村人達は
足早に小屋を出たかと思うと最後に調子に乗った一人が喋り出す。

「これでこの山ともおさらばだな！それでこそセルゲイ爺さんを
殺したかいがあるってもんだ！」

「シッ！そんな事を大声で言うんじゃない。どこで人が聞いてい
るか分からないんだぞ！」

「こんな場所にこの爺さん以外に誰かいる訳が無いだろ！さあ、さっさと帰って奴らに連絡を取ろうぜ」

「全く……、皆行くぞ」

そう言つて洞窟の中へ消えていった村人達は知る由もなかった。

ここに死んだセルゲイ以外にも住人がいる事を。

彼らの会話を全て聞いたソーニヤはただ無言でその場に立ち尽くす。頭の中のまとまらない考えに足元がふらついて地面に腰をつく。

慌ててボリスはソーニヤを抱きかかえると小屋の中へと連れ込み、本来の主人がいなくなつたベッドへと横たえる。

すると、ソーニヤは怒るでもなく悲しむでもなくただ淡々とボリスに問いかけ始める。

「……ボリス、どういう事？お爺ちゃんは殺されたの？ねえ？」

村人の不用心な会話のせいで、もうソーニヤには隠し通せない事をボリスは悟つた。

そして、ボリスは観念した様に村で聞いた内容もソーニヤへと話す。話しながらボリスはソーニヤの様子を心配するが、横たわつた少女は終始黙つたまま何も喋らずに話に耳を傾けていた。

全てを話し終えると怒りをこらえているのか震える声で喋り出す。

「ボリス……、私を村に連れて行って」

「駄目だ」

「……それなら勝手に行くわ」

ベッドから体を起こしたソーニヤは小屋から出ていくとおぼつかない

い足取りで洞窟へと向かっていく。
ボリスはすぐさまソーニヤの後を追って捕まえる。
すると彼女は腕を激しく振り回して抵抗するが、ボリスの掴んだ手を外す力は少女にはなかった。

「放して！放してよ！」

「駄目だ！お前、村に行つてどうする気だ！その『目』を使つて村全部を石にでも変えるつもりか！そんなことしてお前の爺さんは喜ぶのか！？自分の孫が人殺しになつて喜ぶのかよ！」

「ぐっ……」

「それに村人全員が爺さんを殺したかつた訳じゃないだろう、悪いのはあの5人だけだ」

「じゃあ、私はどうしたらいいの！？お爺ちゃんを殺されてただ黙つてるの！？そんなの耐えられない……、グスッ」

悔しさと怒りがソーニヤの中で渦巻き、それは彼女の顔にも表れる。ボリスは少しだけ考え込むと、静かに泣く少女の頭を撫でながら口を開く。

「……俺が代わりにやる」

「え？」

「俺が爺さんの仇を取つてやる。この狼になる力を使つてな。お前は何もしなくていい」

「で、でも、ボリスは追われてるって。此処からすぐに出ていく気だったじゃない」

「気にするな、お前みたいな子供を泣かせたままほっとくのは目覚めが悪いからな。そう何度も後悔するくらいならやるだけやってやるさ。お前を危険にさらす事になるがそれでもいいなら、だが？」

提案を受けたソーニヤだが考えるまでもなく答えは決まっていた。

「お願い……します」

「分かった、お前がそれでいいなら俺も従おう。ただ一つだけ条件がある！」

突然、声を荒げて言うのにソーニヤの体が自然とびくつく。空気が重く感じる中で一体何を言うのかとソーニヤは強張った体で身構える。

「な、何？」

「……食事から人參は抜いてくれ」

「へ？……プツ、アハハ、アハハハハ！」

場を和ませようとした一言が予想以上にソーニヤにうけてしまい、顔を赤くしながら小屋の中へと戻るボリスとそのボリスに手をひかれて戻っていくソーニヤ。

色々な事が起こり過ぎて混乱していたソーニヤもこの時だけは安らぎを感じていた。

という事だ。これが全て・・・だあ？」

話が終わって目を開いたボリスが目にしたのは、泣いている瞬間に悲しそうな表情ではあるが怒りの表れか体が少し震えているミハイルだった。

話す前と明らかに違う2人の変わり様、特に声を上げはしないが頬を涙が伝うほど泣く瞬間にはボリスもさすがに驚いていた。

「お、おい？」

「・・・そんな事があつたなんて。うつつ、信じられない」

「お前さん達の事は分かった。お前さん達の過去にも同情するし、誰かは知らんが村の者達が悪いのも分かった。じゃがそれでも復讐なんて止めてくれ。死んだ村人の何人かはセルゲイを事した事とは無関係のはずじゃ」

「そ、そうです、人殺しなんてやってはいけないんです！貴方が人を殺せばその遺族たちから恨まれ、また新しい怨恨が生まれるだけです」

2人の言い分を聞いたボリスは小さく低く笑い出す。だが、目はまるで笑っている時の目ではなかった。

「ハハッ、・・・復讐を止める？人を殺すな？・・・ふざけるな！奴らはそれだけの事をしているんだ、許せるわけがない！それにソーニャはどうだ！育ての親を殺されて一人ぼっちになったんだ！

彼女に、殺されたのはしょうがないから諦める、とでも言うつもりか！」

「それは……」

「いいか？お前なら分かるだろうがソーニヤの力は本物だ。その気になれば村どころかその周りの森は全て石に変わるんだぞ！勿論俺はソーニヤにそんな事をしてほしくはない、だから俺が村人の被害を買って出た。残っているのは後一人、その邪魔をするならお前達も殺すぞ、いいな！」

言い終えたボリスは胸糞悪い気分を晴らすために外に出ていく。

小屋の中に残された二人は再び椅子に腰かけると深いため息をつきながら対面の男と顔を見合わせる。

「こいつは困った事じゃ、どうしたらええんじゃ？」

「……僕は彼らを全力で止めます。ミハイルさんは街に戻って残っている一人を警察を呼んで捕まえるというのはどうです？」

「そうじゃの、それで行こう。ただ、最後の一人というのは一体だれ」

突然、小屋の周りの石壁に反響するように銃声が辺り一体に鳴り響く。

それに続けて外の方が急激に騒がしくなる。

つい今しがた出ていったボリスに何か起きたのを察知した二人は急いで外に飛び出る。

そこには雪に紛れるための白い迷彩服を着込んだ軍隊の一団、そして隊長格らしい腕章をつけた男の前で地面にひれ伏したまま動かな

い血を流すボリスの姿があった。

第21話：魔狼（6）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第22話：魔狼（7）（前書き）

2010/05/09 修正版を更新（いくつか表現を修正）

第22話：魔狼（7）

洞窟から吹きぬける風がボリスの体の上を吹き抜ける。

その風は小屋の前に立つ瞬とミハイルに届くころには血生臭い風へと変わっていた。

「ボリスさん！」

得体の知れない連中の前に倒れたボリスに2人は駆け寄ろうとする。だが、連中の先頭に立つ男が腕を上げると後ろに控えた下の者達が一斉に銃器を構える。それが警告だと気付いたミハイルは慌ててその場で足を止めたが瞬の足は止まらなかった。

「しゅ、瞬！止まれ！」

制止しようとするミハイルを振り切つて瞬は倒れたボリスへと一直線に走る。

先頭の男はそれを見て躊躇なしに手を振り下ろすと一斉に瞬目がけて大量の弾丸が吐き出される。

遮蔽物もなく逃げ場のない瞬にミハイルは間違いなく死んだと思い止められなかった後悔で歯を食いしばりながら瞬が死ぬ場面を見たくないと思を伏せる。

だが、いつまでたつても銃撃音が止む事はなかった。

それに自分も流れ弾に当たる位置にいるはずなのに1発すら飛んで気はしない。

恐る恐る目を開いたミハイルの目に映ったのは、大量の弾丸が飛び交う中を平然と走る瞬の姿だった。

展開させた見えない盾によって撃たれた弾は分散するように違う方

向へと飛んでいき、それが当たり前である瞬は雨の様に銃弾が飛び交う中を走っていた。

ただ、盾の存在を知らないミハイルにとってその様子は十戒でモーゼが海を割るかのような奇跡にしか見えなかった。

それは銃を撃ち続ける相手側も同様だった。

いくら撃つても弾が逸れていくように見えているため次第に銃を撃つ連中の間に動揺が広がっていく。

唯一、撃つように指示を出した男だけは特に感情も表わさずにただ観察し続けるようにその場に立っていた。

男はいくら撃つても無駄なのを悟ったのか腰に付けたホルスターからトカレフ（ハンドガン）を抜く。

今更、ハンドガンの弾丸が増えた位で瞬はどうということはない。

だが、男は構えたハンドガンを瞬に向けるのではなく血塗れで倒れるボリスの頭へと向けた。

「止まれ『旅人』！こいつにとどめを食らわすぞ！」

「ぐっ！」

ボリスまであと十メートルといった所で仕方なくその場に止まる瞬。その視線の先のボリスはもう既に生きてはいないのか全く動こうとはしなかった。

銃を構えた男は瞬が心配そうな目でボリスを見ているのに気付くと足のつま先で軽くボリスの肩を蹴り飛ばす。

反射的に瞬は男へと飛びかかるうとした。

だが、蹴られた衝撃でボリスが小さく呻きながらも荒い息を吐出したのに気づくとどうにか足を止める。

「このまま放っておけば間違いなく10分で死ぬ。ただ、お前が素直に殺されるならすぐに治療して助けてやるう、この力だな」

そう言うと男が開いた左腕を側に控えていた女軍人の前に差し出す。すると、女軍人はその腕に腰から抜いたナイフで切り傷を作る。一体何をしているのか分からない瞬間を余所に、女軍人は右手を赤い血が下へと落ちていく傷口に当てる。

集中するように目を閉じた次の瞬間、淡く青い光が右手の中からあふれ出す。

光はすぐに消えてしまう。

何が起こったのか分からず瞬は不思議に思っていると、女軍人が男の腕から手を離す。

腕にはナイフの切り傷があったはずだった。

だが、それは完全に消え去っており、腕の何処にも傷は見当たらない。

流れ出た血だけが傷があった事を示していた。

「治った!?!?・・・治癒魔法、ですか?」

「その通り!うちの衛生兵と言ったところか。断わっておくが俺達を殺して彼女に治すよ!言っても無駄だ。彼女は俺の命令しか聞かんようにプログラムされている!」

「プ、プログラムって・・・、そんなロボットみたいに!」

「ククク、あながち間違っではないな、彼女は俺にしか従わないロボットの様なものだ。洗脳、とでもいった方が分かりやすいか?本来ならここに転がってるこいつも俺の手駒になるはずだったんだが、植えつけた力が強すぎたせいでこうやって追い回す羽目になった。ククク、皮肉なものだ、俺の部下になるはずが俺に追いかけまわされるんだからな!」

自慢げに話す男とは対照的に、瞬は頭が俯いたまま体が小さく震え、独り言のように小さく喋り出す。

「……ったい」

「ん？なんだ？」

「……ったい、……一体、人を何だと思ってるんですか！」

激怒した瞬の努号は辺りの雪を震わすほどに響き渡る。

だが、男はまるで気にしないように言い返す。

「何って決まってるだろ、駒だ！使えない人間を使える人間が駒として扱う、それが世の中の常だ！社会はそうやって出来てるんだよ！……そうだ、お前も俺の駒にしてやるよ。何も考えずに俺の言葉に従ってるだけでいいんだ、楽だろ？ククク！」

「貴方は間違っている！そんな人の道に反した事をするなんて！」

「……やれやれ、『旅人』ってのは人をゴミみたいに扱う連中だと聞いてたがな。まあいい、綺麗事で片づけられると思ってる奴とこれ以上話す気もない。ほら、さつさと『イージスの盾』を解いて殺される！総員、頭を狙って構え！」

軍人達は一斉に銃口を瞬の頭へと向けて構え、次の指示をただ黙って待つ。

男は左手を女軍人の前に差し出すと、彼女は自分のホルスターからトカレフを抜いてその左手に手渡す。

男は右手のトカレフはボリスに向けながら、左手のトカレフで瞬に狙いをつける。

多少距離はあったが男の狙いが定まると1発の弾が撃ち出された。今までは見えない盾に弾かれていたはずの弾丸だったが、何も無いかのようにあっさりと瞬の右肩に突き刺さる。瞬は初めて体験する銃の痛みに右肩を抑えながら膝をつく。

「ぐううっ！」

「よしよし、盾は消したらいいな。これで俺が『旅人』だ！」

男は口の端を吊りあげながら笑みを浮かべ、左腕を太陽に向ける様に真上へと上げる。

その腕を振り下ろせば、凝視しながら合図を待つ後ろの部下達から一斉射撃が始まる。

それで全てが終わるはずだった。

だが突然、男は足に猛烈な痛みを感じて下を向く。

そこにはボリスが息も絶え絶えながら男の足首を出せるだけの力を込めて握りつぶそうとしている姿があった。

「こ、この死に損ないが！」

男は反射的に右手のトカレフの引き金を引く。

ボリスの体に弾丸1発分の穴が開くとそこから血があふれ出る。

足を掴む力が緩んだのに男は安堵したが、冷静になるとやってしまった事に気づく。

約束と違う男の行為に瞬はすかさず男に向かって跳び込み、ちょうど瞬と目があった男の腹に突き出しただけの腕がまともに腹に食い込んだ。

男はまるで車でぶつかられたかのように何十メートルも吹き飛んでいく。

自己防衛からか銃を構えた軍人達は瞬目がけて銃の引き金を引くが、

瞬の盾を展開させる方が早かった。

弾は違う方へと飛んでいき瞬にはまるで当たらない。

そんなことなど気にせず瞬はかろうじて目は開いているボリスを抱えると、ピンの抜かれた閃光手榴弾を軍人達に向かってばら撒く。閃光と爆音に軍人達の動きが止まった隙に瞬はミハイルの元へと走る。

「ミハイルさん、お願いします。小屋の中に姿勢を低くして隠れていてください」

「そ、それはいいが、お前さんは・・・？」

「僕はあつちの相手をしてきます。すぐに、戻りますから・・・」

ミハイルに向かって瞬は軽く微笑む。

そして、戸惑うミハイルを余所にその場を後にし、両手に麻酔銃を作り出しながら爆音と閃光から回復した軍人達の前に戻る。

瞬を視界に捉えて即座に軍人達は銃を撃ち出すと、瞬もそれに合わせるかのように麻酔銃を構える。

盾によって流される銃弾の嵐の中で瞬は淡々と麻酔銃を撃ち続ける。次々と軍人達に麻酔針が突き刺さり、針から流れ込んだ睡眠薬が強靱な意志と体力を持つている彼らを強制的な眠りへと陥らせる。

まるで流れ作業のように瞬は軍人達を眠らせていく。

ふと雲が太陽の光に陰ったのか瞬の視界が暗くなり、上を見上げた瞬に確かに太陽の光は見えなかった。

だが、瞬が見たのは雲ではなかった。

視界に飛び込んできたのはさきほど突き飛ばしたはずの男だった。

男は空中で態勢を整えると太陽の光を背負いながら瞬に向かって飛びこんでくる。

その勢いを保ったまま意表を突かれた瞬に向かって蹴りつけるが、

当然のように蹴りは瞬に届く事はなく弾かれる。

反応した瞬が男に向かつて麻醉銃を向ける。

すると即座に男は飛び退き、周りにいた軍人達も倒れた仲間そつちのけで男の後ろへと集まる。

不思議な事に吹き飛ばされたはずの男はまるで何事もなかったかのように無傷であり、多少、服が破れている程度だった。

「ふん、やはり『旅人』相手にこの程度では無理か。総員、魔法使用許可！」

その言葉にさっきの女軍人だけ1歩後ろへ下がり、横一列に軍人達は並ぶ格好になると銃をその場に捨てる。

瞬には一体何をするのか分からなかったが、魔法を使ってくると公言している以上、嫌な予感しかない。

見逃さぬよう瞬が見ている中、軍人達は腰につけられた小さい金属製の筒へと手をかける。

まるで缶詰の缶の様な筒の頭には押し込む様な丸いスイッチがあり、軍人達はためらいもなくそのスイッチを入れる。

その途端 筒から低い起動音が鳴りだしたかと思うとつつすらと淡い光を放ち始める。

光は弱々しく細い光から次第に眩しく太い光へと変わっていき、その光が軍人達の体を包み込んでいく。

すると、光が当たった体の部位に白く太い毛が生えていき、筋肉や骨組織が外から体を見ただけでもわかるほど隆起していく。

筒からの光は最終的に人一人をすっぽり包み込むほどの大きさにまでなる。

光の繭に包まれている様に軍人達の姿は外から分らないほど光は強く、その中で軍人達の体組織は人間から別の物へと変化し続ける。やがて変化が終わり光の強さもつつすら光る程度に収まっていく。

眩む目をこすりながら瞬が改めて軍人達を見る。

だが、そこに並んでいたのはボリスと同じような大きさの狼達であった。

「一体・・・まさか全員、狼に!？」

「少し違うな」

後ろからの声に慌てて瞬は振り向く。

そこにいたのは世にも珍しい2足歩行をする狼だった。

いや、どちらかといえば人間に近い狼、狼男と言った方が正しいだろう。

体の形は人間のそれだが体中に白い毛を生やして筋肉ははち切れんばかりに膨張し、頭は周りにいる狼達の頭と変わらないがどこか人間の表情が読み取れる。

瞬が言葉を失うほど驚いていると狼男は軽く右腕を振るう。

消える様に右から左へと右腕が移動し、直後、轟音とともに瞬の周りの雪が後ろへと吹き飛ぶ。

それどころか、瞬の前の地面に横一文字に綺麗な切れ込みができていた。

理解の追いつかない瞬だったが、そんな瞬を余所に狼男へと変貌した男は手を握って感触を確かめる。

そして、男は体中に溢れる力と高揚感を感じ取ると、瞬に向かって次々と両腕をふるう。

瞬は何かが来るのを察知するが、盾の力によって見えない何かは全て消えうせる。

見えない盾に見えない攻撃による攻防。

傍目から見れば真似事でもしているかのようにも見えるだろう。

だが、実際は見えない何か次々に盾へとぶつかっては消滅していく。

瞬も麻酔銃を構えて撃つが、全てが男に届くまでに叩き落とされて

しまった。

そのうち、はずれた見えない攻撃の1発が地面や壁にぶつかるときよりも深い切れ込みが入り、周りの雪はそこだけ裂けたように吹き飛んでいた。

「カマイタチ、ですか！？腕を振るうだけで人が切れる狼なんて聞いたことが無いですよ！」

「俺をそこら辺の狼と一緒にするなよ？狼男として完成されたこの力、貴様に存分に味あわせてやるわ！」

「結構です！」

すかさず瞬は麻醉銃を構えて狼男に向けて何発も連射する。

それを受けて狼男は落ち着いたように何度か腕をふるう。

発生した衝撃を伴うカマイタチに麻醉針は叩き落とされ、逆にカマイタチが次々と瞬を襲う。

盾で瞬が耐えているとカマイタチに紛れて狼男が距離を詰める。

「食らえ！」

大きく振りかぶった右腕が消えたかと思うと次の瞬間には盾の前に拳が現れ、轟音と伴って盾に激突する。

その衝撃で地面が揺れ、辺りの残っていた雪が外へと飛び散る。

だが、それでも破れない強固な盾に狼男は舌打ちをすると後ろへと飛ぶ。

「これでも壊れんとはな！さすが世界最強の盾だ！」

「分かっているならこれ以上無駄な事は止めたらどうです？」

「ククク、言ってくるな！それならそれで破り方を変えるだけだ！さつきと同じ方法でな！」

狼男が腕を上げて振り下ろすと控えていた狼達は次々と瞬に襲いかかる。

全てが盾によつて塞がれるが瞬の視界を塞ぐほどに狼の数は多い。その隙に狼男は小屋へと向かつて走り出し、瞬は目の前の狼達に麻酔銃を向けるので気付かない。

人を超えた脚力ですぐさま小屋にたどり着いた狼男は閉じられたドアを蹴破る。

中には瀕死のボリスに少しでも時間を伸ばそうと救命処置を施すミハイル、そしてベッドの上で寝たままのソーニヤがいた。

寝ているソーニヤを見て口の端を釣りあげてニヤリと笑うとソーニヤに向かって歩き出す。

その途端、乾いた発砲音が鳴ったかと思うと胸に1発の銃弾が撃ち込まれた。

「こ、ここから出ていけ！」

ミハイルはここに居るべきではないという体中から警告として起こる震えを抑えながら、構えた猟銃の次弾を装填する。

彼の人生の中でこれほどまでに危険を感じた時はなかった。

狩りの時でも、事故にあつた時でも。

おそらくこのままここにいれば確実に殺されるのは分かっていた。

だが、逃げるべきではないとミハイルは体の芯から来る恐怖を奥歯を噛みしめて堪える。

そんな決死の覚悟でいるミハイルを狼男は銃弾を食らったとは思えないほど落ち着いて見据える。

わざわざ胸に突き刺さった銃弾を見せるようにミハイルに向き直る。

そして、狼男が胸に力を込めてみせると食い込んでいた銃弾は少量の血と共に外へと飛び出た。

「ば、化け物め！」

ミハイルは胸を狙うのを諦めて頭を狙おうと猟銃の照準をずらす。だが、狼男は床の板を踏み抜くほどの脚力で一瞬の内に間合いを詰めてしまい、ミハイルが引き金を引くよりも早くその猟銃をいとも簡単に奪い取る。

狼男は奪い取った猟銃に少し力を込めて半ばからへし折り、猟銃の銃としての機能はもうなくなってしまった。

打つ手立てがなくなり、恐怖に身を任せて体中が震えるミハイル。狼男は失笑するように笑いながら顔を近づけて呟く。

「今はお前に用はないが、これ以上邪魔するなら殺す。ククク、ただ何をしようが俺には効かんがな」

ミハイルに背を向けた狼男は寝ているソーニヤの足首を掴み、吊るすように持つ。

そのまま小屋の外へと出ていこうとすると急に引きずるように足が重くなる。

狼男が下を見てみるとそこにはミハイルが右足に必死の形相で掴まっていた。

「止める！その子を連れていくな！」

「……俺は言ったよな？邪魔したら殺すつてな！」

ミハイルに向かって無慈悲に左足が振り下ろされる。

死を覚悟して痛みが少しでも和らぐようミハイルは体中を硬直させ

て耐えようとした。

だが、人外の力で踏みつけにきた左足はミハイルの頭を外れて床をぶち抜いて突き刺さる。

情けをかける相手とも思えないミハイルはその左足を見てみると、いつの間にか左足に小さいナイフが突き刺さっていた。

誰かに助けられたのにミハイルは気づいた。

助けてくれた相手を探そうとするミハイルとは逆に、狼男は痛みよりも驚きがでかいのかその相手を信じられないと言った顔で見えた。

「その怪我でまだ動けるとは、信じられんな」

狼男の視線の先には息も絶え絶えに右腕だけを伸ばしているボリスの姿があった。

それを見たミハイルはボリスが助けてくれたのに気づく。

「そ、その子に、手を出す・・・な、ゴフツ！・・・ハアハア、か、関係、ない！・・・そいつもだ！」

まるで死んでいく者とは思えないような目で狼男を睨みつけながらそう言い放つ。

ボリスはもう一本ナイフを取りだすと狼男目がけて投げつける。

だが、狼男は飛んできたナイフを軽く手で弾き飛ばし、2人が必死になって守ろうとしている子供に興味を持つ。

「ほう、コイツはそんなに大事か。さっきから気にはなっていたがコイツから感じる魔力とこの目に巻かれたベルトは一体何だ？」

「ぐっ！」

ただの盲目であるならこんな革ベルトを巻く必要もない事に狼男は気づいていた。

それどころか、組織の中でも一般から上位レベルクラスの魔力を狼男は感じ取っていた。

2人とも口をつぐんで黙ってしまったのを見て、狼男は思わぬ収穫の予感に笑みを浮かべる。

「これはいい手土産が出来たかもしれんな。人質にはもったいない！」

「や、やめろお！！ソーニャー！」

ボリスが反射的に体を起こそうとしたが体中が動く事を拒否する。唯一伸ばしていた右腕だけが意思に従ってはいたが腕が届くことなく、そのうち狼男はしがみついていたミハイルを軽く蹴り飛ばして離す。

「ソ、ソーニャアア！」

ボリスの悲痛な叫びを心地よく聞きながら狼男はいまだに狼達の相手をしているであろう瞬の前に戻ろうと小屋の入口から外へと出る。これで『旅人』の力が自分の物になると思いこみながら。

だが外へと出た途端、突然腹に衝撃が走る。

それによって気が緩んだ一瞬のうちに無理やり掴んでいた少女を奪い取られ、更に強い力で弾き飛ばされるように吹き飛ばされ小屋から離される。

「つちい！何だ！？」

地面の上に着地して口惜しそうに小屋の辺りを見る。

そこにいたのは狼達の相手をしているはずの瞬だった。すぐにさつきまで戦っていた場所を見た狼男だったがそこには大量の煙が立ち込め、その中で狼達は伏せたまま動こうとしない。

「ど、どついう事だ!？」

狼男には事態が把握できない。

とりあえずやるべき事は『旅人』の抹殺だと小屋の方へと向き直る。すると目に映ったのは小屋ではなく見慣れた閃光手榴弾だった。

「しまっ!」

狼男は反射的にその場から逃げようとしたが、いくら強靭的な脚力を持っていようと使用前では意味が無い。

動くよりも先に破裂した閃光手榴弾の大音量の爆発音と閃光に狼男の目と耳がやられる。

人間よりもよく聞こえる耳とよく見える目は両方とも一時的にだが使いものにならなくなり、狼男はその場で留まるしかなかった。狼の持つ能力が逆に仇となってしまう結果だった。

それを見た瞬は小屋の中へと戻ると優しく抱えていたソーニヤを床の上に下ろし、既に意識のないボリスの前に立つ。

「何をやる気じゃ？」

蹴り飛ばされてから体中に痛みがありながらもミハイルはどうにか起き上がっていた。

そして、瞬が何かをやるうとしていたのに気づき、痛い体を引きずるように側へと移動する。

「これで、もしかすれば治せるかも知れません。見ていてください

い

最早、世界最高の外科医が見たとしても手遅れといった状態のボリス。

だが、瞬はさつき隊員がつけていた銀色の筒を作り出すとボリスの胸に置く。

そして、軍人達がやってきたのを見様見真似でスイッチを入れる。低い起動音と共に淡い光を放ち始めた銀色の筒は段々と光が強くなっていき、ボリスの全身を包み込んでいく。

すると、ボリスの全身が徐々に狼へと変化していき、全ての変化が終わると横たわった一匹の白い狼へと変身していた。

ボリスは変身した事により意識を取り戻し、目を見開いて立ちあがる。

すると痛みがまるでない事に気づき、見える範囲で自分の体についているはずの怪我を探す。

瞬とミハイルも血の跡がある個所を見ては見る。

だが、怪我は何処にも見当たらず、血の跡が残っているだけだった。

「どうやら大丈夫みたいですね」

「一体、どうやったんじゃ？」

「ウオン！」

「いや、彼らがこの装置を使って今の時間でも狼に変身していたので、もしかするとこれでボリスさんを狼化できるかもしれないって思ったんです。ほら、狼化すると傷もふさがるらしいですから。じゃ、僕はまた相手をしてきますって、ボリスさん！？」

瞬が外に出ようとするとそれよりも早くボリスが飛びだし、慌てて

後を追う様に瞬も出ていく。

まだ閃光手榴弾から回復しきっていない狼男を見つけたボリスは向かっていく。

そして、手術された恨み、瀕死に追いやった恨み、そして何よりソニーヤに手を出した恨みを晴らすように飛びかかる。

牙は狼男の首筋に食い込んだものの、常人とは違う狼男の信じられないほどの筋肉に牙は致命傷にまで届く事はない。

逆に狼男の手でボリスは頭を掴まれてしまつとそのまま力任せに口を開かされ、上に持ち上げられる。

そこでちょうど回復した狼男は目を見開く。

狼が襲ってきたのに驚いたが部下ではない事に気づくと苦い顔を浮かべる。

「貴様！狼化して傷を治したのか！・・・そうか、『旅人』の魔法か！」

「ボリスさんを離せ！」

遅れて狼男に向かって瞬は次々と麻酔針を撃ち込む。

ちょうど両手が塞がっていた狼男はボリスを投げ捨ててその場から飛び退く。

狼男が地面に降り立った背後から回復した狼達が次々に飛び出すとボリスと瞬に向かっていく。

それを見たボリスは瞬に向かって小さく吠えたと、背中に向かって首を何度か降る。

「乗れって事？」

「ウォーン！」

「じゃ、お邪魔します」

瞬がボリスの背中に跨るとボリスはすぐに駆けだす。
ボリスは向かってくる群れに対して猛然と向かっていき、瞬は背中の上から麻醉銃を連射する。

瞬は群れと交差する寸前で麻醉銃を消すと代りにスタンロッドを両手に作り出し、襲いかかる狼に向かってスタンロッドを振るう。
高圧電流の流れるロッドに触れた途端、狼の体中に電流が流れこみ、意識は一瞬にして飛ぶ。

そうやって群れを抜けた先には狼男が控え、狼男は迎撃するかのようにならぬ腕を振るう。

発生したカマイタチが次々に瞬達へと襲いかかる。

「右に！」

ボリスは咄嗟に右へと飛んで回避し、カマイタチをかわす。

今度はお返しとばかりに瞬が麻醉銃を撃ち返す。

だが、針は狼男に届くまでにまた腕をふるって発生したカマイタチに全てが叩き落とされる。

「何度やっても一緒だ！」

「それならこいつで！」

瞬はすかさず闪光手榴弾を勢いよく投げつける。

同じ手は食わないと狼男は下から上に腕を振りあげ、発生したカマイタチが闪光手榴弾を上へと弾き飛ばす。

そして、空中で爆発したものの大した効力も発揮せずに終わる。

「ボリスさん、向かってください！」

言われたとおりにはボリスは狼男へと向かっていく。
狼男がまたカマイタチを発生させると瞬が右へ交わすように指示する。

ボリスが風を感じるほどのギリギリの距離で回避した瞬間、瞬はボリスの背中から空へと飛ぶ。

すぐに狼男が跳び上がった瞬へと気付き、次々とカマイタチを繰り出す。その全てが出現させた盾によって弾かれて散ってしまう。

瞬は狼男へと一直線に落ちていくと狼男はその場で足に力をためて右腕を後ろへ引くように大きく振りかぶった。

ため込んだ力を解き放つように狼男は瞬へと向かってロケットのように飛び出し、右腕の拳を固めて力を込める。

「食らえ！」

瞬の見えない盾と激突する瞬間を見計らい、狼男は振りかぶった右腕を渾身の力で瞬に向かって突き出す。

狼男は今度こそ盾を壊してやるとかなり感情が昂ぶっていた。

だが、盾があるはずの場所を腕が素通りした瞬間、その感情は困惑へと変わる。

「な、なんだと？」

盾を消してタイミングをずらした瞬は狙い通りいった事に内心でホツとする。

狼男の殴りつけるタイミングが完全に狂わされ、突き出した右腕が伸びきった。

腕から全ての力が解放された瞬間、瞬の左手がその腕を掴み取り、右手に大きめの注射を作り出すと固定された狼男の右腕に突き刺す。狼男は小さい痛みを感じながら後手に回ってしまった判断ミスを悔

やむ。

押し込まれる注射の中身を止めるべく左手で瞬を殴りつけようとす
るが、強く引つ張られたように左腕がうまく動かない。
見れば左手には人間に戻っていたボリスがしがみつき、体中の力を
使って左腕に負荷をかけていた。

「っ、この！」

「てめえには一発返すだけじゃたらねえが、とりあえずコイツは
先付けだ！」

ボリスはそのまま右手を握り締めて狼男の顔面を殴りつけた。

人間に戻ったとはいえ、ボリスはかなりの力で殴りつけ、狼男が怯
んだ隙に手を放して離れる。

ボリスに対しての怒りが一気に湧いた狼男。

それでも頭のどこか冷静な部分が先に瞬を片づけるべきだ、と自由
になった左腕でいるはずの右腕付近を力一杯殴りつける。

だが、またしても拳は空を切るだけに終わり、すぐそばにいるはず
の瞬を狼男は見失った。

「どこだ！」

「ここですよ」

上から聞こえた声に狼男は即座に反応すると見るよりも先に左腕で
殴りつける。

今度は空振りすることはなかったものの左腕は瞬によって止められ、
更にその掴んだ腕を捻りあげられる事によって狼男の態勢は崩れた。
そのまま瞬は力任せに狼男を揺さぶりにかかる。

狼男が必死になって抵抗する力が緩んだ瞬間、瞬は叩きつけるよう

に壁に向かって投げつける。

信じられないほどの力に狼男は改めて『旅人』の魔法に脅威を覚えながらも体は態勢を整えるよう自然に動作していく。

狼男が回転しながら岩壁に着地しようとしていた時だった。

態勢を整えている所で狼男の視界が歪み始める。

バランス感覚までもが狂ってしまったのか着地する態勢はまた崩れていき、背中から石壁へと叩きつけられた。

その衝撃によつて石壁に亀裂が入り、石壁の一部が崩れ出すと無数の石や岩が地面に落ちた狼男の上に降り注ぐ。

まるで墓のように積み上がった石を吹き飛ばして狼男が立ちあがる。フラフラしている狼男目がけてボリスは走りだす。

歪む視界でそれに気付いた狼男だったが、腕を振るうにもまるで借り物の体のように体が動かない。

その間に瞬の打ち込んだ薬で意識の混濁している狼男へとボリスが飛びかかる。

ボリスは人間の姿に戻っていながらも常人を超えた力で狼男の顔面を殴りつけた。

防御もままならない狼男がよろけて背後の石壁へと追いやられると、ボリスは棒立ちになつている狼男を殴りつける。

今までの積もつた怒りを晴らすように何度も何度も。

「ボリスさん！」

20発を越えたあたりで瞬が止めに入る。

体で無理やりボリスの拳を止めたものの、ボリスはまだ足りないと言わんばかりに抵抗し続ける。

「放せ！殴つても殴つても俺の怒りが収まらねえんだよ！」

「もう・・・もう終わってます」

見れば棒立ちになっている狼男はいつからそうなのかは定かではないが、白目をむいて完全に意識が飛んでいるのか少しも動かない。殴るのが止むと狼男はその場にゆっくりと倒れ、地響きを上げる。それを見たボリスは舌打ちをすると残りの狼の相手をしようと後ろを振り返る。

だが、そこに狼達と女軍人の姿は何処にもなく、いつの間にかこの場から撤退していたようだ。

ついさっきまで戦闘があったとは思えないほど広場は静まり、その痕跡だけが戦闘を物語っていた。

第22話：魔狼（7）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。ありがとうございました。

申し訳ないですが当分の間、休載させていただきます。

『旅人』を書くのがうまくいかない訳ではないのですが、小説の書き方などをいくつか調べていくと、三人称視点での書き方としてどうもおかしいらしいので当面の間、勉強してみようということでした。期間としては2〜3ヶ月くらいと考えていますが、最悪の場合、ここまで書いた『旅人』を全部書き直してみるのもあり得ます。

とりあえず、順番的に一人称視点の勉強として『如月探偵物語』の方を書いていきますので、よければそちらを参照して、意見等いただけるとありがたいです。

とはいっても、最終的に書きたいのは三人称視点の『旅人』なので練習小説が他にもできる・・・かも。

第23話：魔狼（8）

狼の群れが脇目も振らず山の麓を目指して山を一気に下っていく。先頭を進む狼の背には女軍人が跨り、振り落とされぬよう必死に掴まっていた。

彼女達は洗脳されており、狼男の絶対服従の部下だ。

本来なら彼女達は狼男を救うべく、今頃は瞬、ボリスの2人と戦っているはずだった。

だが、彼女達の内部ではより上位の命令によって狼男を救う命令が上書きされ、今はその命令、撤退し情報を持ちかえるという命令に従って動いていた。

麓に止めた車に乗り込んでここから逃げるのを目的とし、狼達は次々と下山する。

不意に先頭の狼が足を止めた。

背中に跨る女軍人が不思議に思っていると、その目の前を1匹の狼が力なく下へと落ちていく。

その狼の頭からは血が流れ、先に下へと到達すると地面へ叩きつけられる。

既に命はないのかピクリとも動かないが、彼女達は見ていた。

落ちていく狼の頭に大きな弾痕が刻まれ、既に絶命していたのを。

「散開！」

敵が来たのを認識した女軍人はこの場にいない狼男の代わりに司令塔となり、狼達に命令を出す。

狼達は固まるのを止め、別々の場所へと逃げていく。

だが、場所が悪かった。

切り立った石場がずっと続く場所には隠れる場所などどこにもない。銃声すら聞こえないうちに1匹が同じように頭を撃ち抜かれ、それ

を見ている間にまた1匹とやられていく。
間違いなく遠距離からの狙撃だった。

「ウォーン！」

突然、1匹の狼が吠えたと、仲間達は一斉にそちらを向く。

その狼の視線の先には別の山があり、山頂付近で何か太陽の光で反射して光っている。

全員がそれが敵だと気付いたが、同時に表には出さないがそのスナイパーに驚愕していた。

敵との距離はおよそ1km。

それほど離れている距離で1発も外さずに次々と仕留めていく程の凄腕だ。

今度は吠えたとる狼の頭に銃弾が撃ち込まれ、強制的に黙らせられると下へと落ちていく。

反撃しようにも彼女達に反撃の手段は近寄る以外にない。

だが、あまりにも離れている上に隠れる場所すら途中にはない。

「山の麓まで逃げろ！走れ！」

ここは逃げるしかないと言われ、女軍人は判断し、自分の乗った狼にしっかりとしがみつく。

仲間達が次々とやられていく中でどうにか女軍人と彼女の跨った狼は止められた車にまでたどり着く。

女軍人は急いでエンジンをかけ、狼はすぐに魔法を解いて元へと戻っていく。

だが、戻った瞬間、男の頭から血が飛び散り、最早生き残ったのは女軍人だけとなった。

彼女はアクセルを思い切り踏み込んで車を走らせる。

急発進した車が細い道をかき分ける様に走り、『カラフ村』へと戻

っていく。

ある程度距離が取れると女軍人は片手に通信機を持ち、本部へと連絡を入れようとした。

その途端、ハンドルを切ってもいないのに急に左へと曲がり出し、女軍人が立て直そうとするも木へと激突する。

急停車した車のフロントはへこむように歪み、ボンネットからは黒い煙が上っていく。

自動的に動いたエアバッグで衝撃は和らいたが衝撃自体が強すぎたため、女軍人はまるで貧血にでもなったかのようにフラフラと車から出た。

彼女は怪我らしい怪我はないが、意識と視界は混沌としている。

その状態でありながらも女軍人は車の中に転がっている通信機を手にとると、通信のスイッチを入れた。

「こ、こちら第91特殊小隊。敵の襲撃にあい、自分以外、部隊は全滅。隊長は『旅人』と実験体305に敗れ、おそらく捕獲されました」

『敵？『旅人』ではないのか？』

「まだ分かりません。遠距離からのスナイプで敵の姿すら分かり」

彼女の言葉を遮るように銃声が辺りに鳴り響く。

女軍人が銃声に反応する前に通信機が撃ち抜かれ、通信機は女軍人の手から衝撃で地面へと落ちていく。

即座に女軍人は近くの茂みの中へと飛び込み、痛い体を引きずりながら弾の飛んできた方を向いた。

するとそこには誰もいなかったが、女軍人は不意に背後に何かがいるのを感じった瞬間、首筋に冷たい物が押しあてられる。

「動くな」

背後にはいつの間にか全身黒づくめの衣装をつけた赤い長髪を垂らした男が立っていた。

その手にはCZ75（ハンドガン）が握られ、銃口は女軍人へ当たるほど近い。

誰が撃つても間違いなく女軍人へ当たるのは間違いない。

女軍人は捕まった事に気づくと冷や汗が頬を伝い、緊張のために呼吸のペースがどんどん上がっていく。

ところが、彼女の眼はまるで死んでおらず、それどころか振りかえれず見えない相手を睨むように目を細め、腰に付けたナイフへと手を伸ばしていた。

一瞬で殺る。

息こんだ女軍人は腰のナイフを掴み、素早く抜かれたナイフが男を襲う。

ところが男の頸動脈を狙ったナイフは首どころか、男の手の辺りを超えるか超えないかといった所で止まる。

何も無い場所で止まり、男は止める様な素振りなどまるでない。

一見すると女軍人が止めたように見えるが実は違っていた。

女軍人は歯を食いしばりながら力を込めていたが、どういう訳かナイフはそれ以上先には進まなかった。

古ぼけた帽子の奥で男はため息をつくど、開いていた左手で簡単にナイフを取り上げる。

よろけた女軍人の頭へと、男は再度CZ75を突き付けた。

「動くな、と言ったつもりだ。聞こえてなかったならさっきのは見逃そう」

「ふざけ」

女軍人はそこまで言った所で男から発せられる殺気に気づいて口を閉じる。

ここに立っているのさえ苦痛に思えるほどの禍々しい気が男から放たれ、このままいけば間違いなく殺されるのを女軍人は感じ取った。

「ふざけ？何？」

「……き、聞こえなかった。さ、さっきのは聞いて、いない」

そう答えるだけで女軍人は精いっぱいだった。

男はそれを聞くと黙りこみ、沈黙だけの時間が流れる。

まるで消え去らない死の予感に女軍人は生きた心地がせず、至る所で冷や汗を掻き続けていた。

ふと、突然男から殺気がなくなり、呼吸の止まりそうなほど息苦しい状態から解放された女軍人は耐えきれずにその場に膝をつく。

女軍人は苦しそうに咳き込むが、男は向けた銃を微動だにしない。

「まあいいでしょう。じゃ、質問だ」

「はあはあ……、し、質問、だと？」

「そ、質問。あの『旅人』はどうだった？強かった？」

「……！」

女軍人は男の発言に驚く。

男は『旅人』を知っている上に戦った事まで分かっている。

どうやって知ったのかも気になる所ではあったが、それ以上にどこまで知っているのかが彼女は気にかかった。

出来れば情報を引き出して司令部に伝えたい所だが、迂闊に事を話

せない彼女は口をつぐんで黙り続けようとする。

「……」

「ふうん、もしかして黙ってれば済むと思ってる？」

「……」

「そうか、じゃあ用はない」

男に殺気が戻る。

殺されるならと女軍人は意を決して俯いた顔を上げ、銃を向ける男の顔を見た。

見た途端、彼女が洗脳されている間に覚えさせられた重要機密情報のある写真が頭をよぎる。

彼女はようやく誰を相手にしているのかが分かった。

「！？お前、旅び」

女軍人が言いきる前に銃の引き金が引かれる。

1発の発砲音の後に女軍人はその場に倒れ、2度と動く事はなくなる。

死体にまるで興味が無いように男は山の方を向き、手に持っていたCZ75を握りつぶす。

するとCZ75は光の粒子へと変わり、一片の金属片すらなくその場から完全に消える。

「やれやれ、今度の新人は子供みたいに甘い奴だな。さて……」

男はその場から消える様になくなる。

彼がいなくなり、その跡に残ったのは大量の死体だけだった。

気絶した狼男から瞬が金属製の筒を取り外す。

すると、狼男の変身が始まり、風船がしぼんだように小さくなっていくと元の隊長へと戻っていく。

怪我などは全て治っているようだが、気絶に関しては回復しないらしく動こうとはしない。

その隊長を瞬は背負って運びにかかるが、瞬にはさつきからすごく気にかかる事があった。

前を歩くボリスといい、今背負っている隊長といい、狼から戻ったためか裸なのだ。

隊長はまだ狼男だったために破れた服が腰みののようになっているためでした。

問題はボリスだ。

なぜなら、狼化した時に来ていた服は弾け飛んでいた。

思えば村から追跡してきて人間に戻った時も全裸だった。

瞬は眉間にしわを寄せながらボリスが来ていたのと同じ服を生成する。

「ボリスさん」

振り向いたボリスに服を投げるとボリスは受け取り、意味を理解して服を着る。

ただ、その表情はまだ戦った時のように硬いままだった。

「・・・助けてもらった礼は言っとく。だが、てめえは村の連中に味方する敵だ。今のが落ち着いたらてめえはぶっ倒す」

「それは違います」

きっぱりと瞬は言い切り、予想外の返答にボリスは困惑する。

「あん？どう違うっていうんだ！」

瞬は静かに目を閉じて言う。

「……村の、罪のない人達の味方です。私利私欲で殺人を犯してそれを隠そうとする人を僕は守りたいとは思わない。ただ……」

「ただ、なんだ？」

その問いに瞬は閉じた目を細めながら見開き、対抗する様な意志を示すようにボリスを見据える。

「命を取るべきではない。罪を償わせるべきです」

「うち、またそれか。まあいい、てめえの性格がそうなら俺はてめえをぶっ倒して最後の1人を殺す。お前はそれを守る、それだけだ」

「話し合いで解決はできないと？」

「そういうことだが、そいつは後回しだ。……その隊長とやらをどうするか考えないとな」

ボリスの言葉が急に重みを増したようにトーンが低くなる。

瞬はそれに気付いたが、特にこれといった事をするでもなく歩きだ

し、ボリスもそれに黙ってついていく。

何時、背後から隊長目がけて襲いかかるか分からないほどボリスの気は立っている。

だが、瞬は特に『イージスの盾』すら出すことなく、前を向いてまるでボリスに無関心がないように小屋へと歩く。

それは根拠はないが、瞬がボリスを信頼してのことだった。

瞬の中ではボリスは多少、口は悪いがしっかり筋は通す男だと捉えていた。

「瞬！無事じゃったか！」

小屋から握りつぶされた猟銃を杖代わりにミハイルが出てきた。

瞬が五体満足なのを確認すると気が抜けたようにその場に座り込み、勘違いした瞬は慌てて駆け寄る。

「ミハイルさん、大丈夫ですか？」

「ま、まあなんとかの。それで終わったのか？」

「まあなんとか」

頬を軽く掻きながら苦笑して答える瞬にミハイルも笑みを浮かべた。その間に小屋の中へとボリスは戻り、ベッドの上に横たわるソーニヤを見て肩を撫で下ろす。

ふと、それを後ろで見ていたミハイルと瞬がニヤニヤと笑っているのに気づく。

こいつら・・・っ！！

恥ずかしさからか顔を真っ赤にしながら壊れたドアを持ち上げると、小屋の入口を見えないように塞ぐ。

締め出しを食らってしまったミハイルと瞬だが、ミハイルは石の地

面へと座り込む。
その表情は険しい。

「それで、お前さんはこれからどうするつもりなんじゃ？お前さんは村とも彼らとも関係ない。言うなればただの通りすがりじゃ。まあ、彼らと同じで不思議な力を持っているようじゃがな」

ミハイルの最後の一言に瞬の表情が変わる。

「き、気づいていたんですか？」

驚く瞬に対して、逆に呆れたようにミハイルはため息をついて答えた。

「元々おかしいじゃろ、体つきも普通なのに怪力がある。荷物を落としたはずなのに、どこからともなく有名ホテルのクロワッサンを持ってくる。おまけにさっきの戦いを見ておったが敵の攻撃は弾くわ、銃で撃たれた傷も治るわ、もう訳が分からん。お前さんも魔法使いとやらなんじゃろ？」

苦笑いを浮かべながら、多少困ったように瞬は頷く。

どういう力なのかと興味がわいたらしいミハイルに、瞬は知っているだけ『旅人』の魔法について話す。

最後には実演としてミハイルの目の前で瞬は十何メートルはあるとかという鋼鉄製のワイヤーを作り出す。

それを地面に下ろしたいまだ意識のない隊長に巻きだし、絶対に動けないよう念入りに何重にも巻く。

まるでみの虫のようになった隊長をその場に転がすと瞬はミハイルの向かいで腰を下ろした。

「ふむ、物を作り出す事が出来るとは……。ん？という事はさつき食べたクロワッサンも……？」

「勿論、魔法で作った物ですよ」

途端にミハイルの顔が少し青ざめる。

得体の知れない力で作ったパンを食ったと知れば当然だ。

「魔法で作ったといっても本物同様ですし、おまけに食べても問題ない物なんです。おいしかったでしょう？」

悪気なく何時ものように笑いながら言う瞬にミハイルはさっきの事を思い出す。

確かに今まで食べた事もない様なうまさのクロワッサンだった。

魔法で作られたといっても変な味もなく、至って普通の食べ物だった。

瞬が嘘をつくとも思えないミハイルは安心し、瞬へと向き直る。

「さて、お前さんはこれからどうするつもりじゃ？」

「旅を続けますよ。約束がありますから。ただ、このままいくとというのは……」

瞬はミハイルを含む村の人達の身の安全、そしていまだに村との確執が消えていない2人の事を案じる。

ミハイルは出会ってまだ1日も立っていない他人を本気で心配している瞬に、聖者のような気位を感じていた。

まともな解決案も浮かばないまま、2人は考え込んでいるとふと頭上の太陽を遮って影が出来る。

てつきり最初は雲の影だと思っていた瞬だが、その影は次第にでか

くなつていき、人の様な形へと変わっていく。

それに気付いた瞬は上を見上げると、黒い服に身を包んだ男が瞬目がけて落ちてきた。

慌てて瞬は落ちてくる男を両手で受け止めようと腕を開く。

だが、瞬が男を捕まえようとした瞬間、男は手品のように消えてしまい、瞬だけならずミハイルも男の姿を見失う。

「消えた？一体、どこに!？」

「のろいな、こんなんでよく今までやってこれたもんだ」

「!?!」

瞬は背後からの声に慌てて後ろを振り向くと、さっきの男がめんどくさそうに座り込んでいた。

何時の間に・・・？

2人が疑問に思いながら男を見ていると、男は頭を掻きながら立ち上がる。

男は燃える様な赤い長髪を肩まで垂らし、顔立ちはヨーロッパ系の白人のようであり、歳は30代のように見える。

ゆっくりと男が立ち上がると着ている黒一色の服が全て見えるようになり、その時、瞬は既視感を覚えた。

既視感の元が何かと瞬は頭の中で模索すると、姫と最初に出会った時であるのにたどり着く。

そう、目の前の男は着ている物も雰囲気もどことなく姫を連想させるのだ。

「あの、貴方は一体？」

敵かもしれないと瞬は身構えながら尋ねる。

だが、男はそんな瞬などまるで気にしないように懐から煙草を取り出すと口に一本銜え、手品のように手から出したライターで火をつける。

煙草から出る煙を男は肺一杯に吸い込み、その味や匂いを堪能しながら吐きだすと瞬を視界に捉える。

「お前、どこまで分かってる？」

ぶしつけない質問だが、人の良い瞬は彼の話へ乗る事にする。ただ、瞬には質問の意味がよく把握できていなかったらしい。

「え？何がですか？」

「察しが悪いな、『旅人』についてだよ」

「……貴方は一体？」

さっきの質問をもう一度ぶつけた瞬だが、今度は手の中に麻醉銃を作り出していた。

瞬は男の牽制の他に、真面目な返答をしなければ撃つという脅しを込めて麻醉銃を男に向ける。

ところが男は至って冷静に煙草をただ吸い続けるだけで、何も言おうとしない。

それどころか挑発するように右手の人差指で撃ってみると言わんばかりに挑発し出した。

これだけなめきつた相手に瞬は今まで出会った事はなかったが、素性が分からない無抵抗な者を撃つ気はない。

何時まで経つても動こうとしない瞬。

その間に男は煙草を吸い終えると、瞬が麻醉銃を作ったのと同様に手の中にCZ75を作り出す。

瞬が自分に似た力に驚くあまり無意識に麻醉銃を下げた瞬間、男は目にもとまらぬ速さで瞬の麻醉銃を撃つ。

撃たれた銃弾は麻醉銃の銃身を潰し、2度と使用できないほど変形させてしまう。

すぐさま瞬は次の麻醉銃を作り出したが、向ける相手はいつの間にか目の前から消えていた。

危険を感じて咄嗟に盾を展開させようとした瞬だったが、突然、瞬の体が浮くように空中へと舞い上がり、瞬の視界は上下反転して上へと落ちていく。

何が起こったのかまるで分からない瞬の目の前は、さっきまで立っていた地面が広がっていた。

咄嗟に瞬は腕で激突を防ごうとしたが地面の迫るスピードが急激に上がり、ガードする間もなく地面へと叩きつけられる。

「ぐあっ!!・・・いつつ!!」

叩きつけられた痛みには瞬は呻き、地面の上で横たわった事でようやく自分が投げられた事に気づく。

常人離れた筋力の鎧を纏っている『旅人』なのだが、地面には瞬を中心として小さいクレーターが出来上がっていた。

投げつける方もわかには信じがたい力を持っているのは間違いが無かった。

「なるほどね、こいつはまずいな。まだひよっ子どころか生まれやすくない。めんどくさい奴を作ってくれたもんだ」

「あ、貴方は一体、誰なんですか!? 『W2』ですか?」

本日3度目の同じ質問に嫌気がさしたのか、男はその長い赤髪を宙に浮かせるように前髪を払う。

そして、倒れた瞬間を踏みつけると藍色の目がジッと瞬を捉えていた。こいつが嬢ちゃん希望、か。男は瞬を値踏みし終えると足をどかし、瞬は咳き込みながら立ち上がる。

再び麻醉銃を作り出そうとした瞬だったが、男は飽きたように地面へと座り込み煙草を吸っていた。

もう何が何やら瞬には分からない。

戦うべきなのか話し合うべきなのかすら全く分からない得体の知れない男だった。

「答えてください！」

真剣な表情で詰め寄る瞬に、男は頭を掻きながら答える。

「やれやれ。めんどくさい事になりそうだがしょうがない、か。俺はロビン、そう呼ばれている。お前と同じ『旅人』だ」

「『旅人』、ですか？僕以外にも『旅人』がいる！？」

その発言に男は掻いていた手を上げ、軽い頭痛を感じる額に当てて押さえる。

ここまで知らないとは頭の痛い事だ。

ロビンはたまらずため息を漏らし、前任者である嬢ちゃんへの不満を心の中で言い続け、次第にそれは声になって出ていた。

「やってくれたぜ、嬢ちゃん。・・・畜生」

「嬢ちゃん？」

「てめえの前任者だ。ほら、てめえに『旅人』を譲った・・・っ

と、そんな話よりお前に話がある」

「は、はあ。話、ですか？」

「そうだ。簡単に言えば、お前は『旅人』としては弱すぎる。世界に5人存在する『旅人』の中でもダントツで最下位はお前だ」

5人存在しているという事実を受け、残りの3人ともいつかは出会うのだろうかと瞬は見当違いなことを考えていた。

ロビンは指差してまで指摘したつもりだったが、そんな事を瞬が考えているとは知らない。

仮に知られていたならロビンの鉄拳制裁が瞬を襲っていただろう。

「おまけにさっきの戦いぶりからいつて素人もいいとこだ。『旅人』の力どころか魔法での戦い方が分かっていない」

「はあ、そうなんですか」

まだ成り立ての日が浅すぎる瞬にはいまいちピンとこない。

魔法の存在を知ったのもここ数日の事だ。

瞬はただ困惑気味に返答するだけでしかない。

まるでセールスに捕まった客がいくるめられているような凶だった。

逆にロビンはその瞬に苛立ち、目を覚まさせるかのように地面を強く踏みつけ、辺りを揺らしながら勢いをつけて捲し立てる。

「そ！こ！で！だ！俺がお前に『旅人』ってのがどういうものなのかきつちり教え込んでやる！勿論、スパルタ方式でな！どうだ、来るか？」

何も分からない瞬には魅力的な提案だった。だが、瞬にはまだやるべき事があるとまだ離れる気もなかった。それにどことなくロビンを信用しきれていないのもあったかもしれない。

「いや、まだやる事が残ってるので」

「ああ、忘れていた。ちょっと待ってる」

瞬がやんわりと拒否しようとする、ロビンは何かを思い出したのかその場から飛び上がる。

そして、岩壁の上に乗せられていた何かを掴んで引っ張り下ろし、また瞬の前に立つ。

その腕には村長の死体が抱きかかえられていた。

「そ、村長！」

慌てたのは隣で聞いていたミハイルだ。

村長の首には大量の血が流れたであろう動脈を切り裂いた傷口があり、それ以外は傷口らしいものは何も無い。

「なぜ村長が！？まさか、お前が」

「さっきの狼の奴らだ。村から連中が出た時にコイツがついていたらしい。それがばれてこうなったようだ」

実際、ロビンは山を登る前に近くの森で村長を見つけていた。

傷はナイフなどの刃物で綺麗に動脈をとおり、それでいて迷いなく切られているため、手馴れた者のやったことなのだろうとロビンは言う。

それを聞いて、逃げた連中が村の住人を襲いかねないと三マイルと瞬はすぐに連中の後を追おうとした。
ところが、2人の前にロビンが回り込んで2人を止める。

「慌てるな、もうあいつ等は死んでる」

「それはどういう」

「俺が殺った」

「お前さんが、1人でか!？」

「そりやそうだ。嘘だと思っなら山の麓辺りを探してみる、奴らの死体が転がってるさ」

ロビンは軽く言うが2人にはその言葉が嘘には聞こえなかった。

むしろ、彼の言葉で目の前にいるロビンと言う男を見る目が変わる。彼は自ら大量に殺したと告白したのだ。

そんな彼を目の前にして2人は石になったように足が動かず、自然と身構えていた。

「おいおい、俺は助けてやったんだぜ?どちらかと言えばお礼を言ってもらいたいくらいだがな」

2人とも黙ったままだが、ロビンがその後ろを見る様に視線を外すと2人も釣られて振りかえる。

すると、そこにはいつの間にかボリスが立っていた。ボリスは驚きながら立ち止まり、ロビンを見ていた。正確に言うならロビンの腕に抱えられた村長を、だ。

「なんで、その男が死んでいる！？答える！」

ロビンは明らかにめんどくさそうな表情を浮かべ、2人に行ったのと同じ内容をボリスへと伝える。
話を聞いたボリスはまるで力が抜けたようにその場に座り込む。

「どうかしたんですか、ボリスさん？」

「そいつだ、そいつが残りの1人だった」

「な、何じゃと！と言う事は村長もセルゲイを殺した1人なのか
!?!」

「ああ、そうだ」

今日になってから何度となく驚かされ続けているミハイルだが、この驚きだけは信じたくはなかった。

自分の住む村を治める者がまさか私利私欲の殺人に加担しているなど。

事実打ちひしがれる様にミハイルも地面に落胆して座る。

「おい、よく分からんが俺はお前はついてくるのか？」

「え、あ？」

よくよく考えればこれでボリスが村を襲う理由は無くなった。

今後はどうなるか分からないが、とりあえずの平穏は保てるようになったのかもしれない。

だからと言って落胆するミハイルをほっといっていくのも瞬には出来そうになかった。

「瞬。行くといい、いや、むしろ行くべきじゃ」

「ミハイルさん……」

「わしらの事は気にせんでええ。むしろ、部外者なのにここまで助けてくれたんじゃ、それだけで十分じゃ。後はわしらと彼らの問題じゃ」

「で、でも、この山を狙っている連中がいるんでしょっ？」

「そんなもん、俺が全部倒す。俺はソーニヤと山を守る、ついでに村もな」

「ボリスさん……」

ボリスは照れるのを少し隠すように顔を傾けて続ける。

「勘違いするな、ソーニヤを守ってくれた礼だ。それにもしかすると、そこに転がってる俺を改造した奴らも山を奪い取ろうとする奴らも同じ連中なのかもしれないな」

すると隣で聞いていたロビンが口を出してきた。

「ありえない話じゃない、いや、むしろ正解だな。ここは魔力濃度が高い、『W2』の連中が欲しがってもおかしくない。と言うか、こんな辺鄙な場所の山なんか買うのはそいつらしかないな」

「そうか、なら俺が全てねじ伏せてやる。ちよっかいを出す奴は全て、な！だからお前はとつとどこかに行つちまえ」

そこまで言われると瞬も返す言葉が無い。

瞬は黙ったまま2人を見た後に、ロビンへと向き直る。

「貴方についていきます」

「よし、それじゃ俺の後についてこい。いいな？」

ロビンはその場から飛び上がり、石壁の棚に乗る。

瞬は最後に2人へ向くと深々と頭を下げた。

「さようなら、2人ともお元気で」

瞬が顔を上げて笑顔を浮かべ、ミハイルも笑顔を浮かべながら手を振る。

「ああ、ありがとうよ瞬。さよならじゃ」

「・・・さっさといけ」

ボリスはそっぽを向いて呟くように言う。

瞬はその言葉をしっかりと受け取るとその場から飛び上がってロビンの後へとついていく。

2人は石壁を次々に上っていき、その姿はあっさりと見えなくなる。

「不思議な奴じゃったな」

「ああ」

「また会えるかの」

「・・・そうだな」

残された2人は瞬の消えた方を見ながら、少ない言葉を交える。

これから先の事など分かりはしないが、瞬のおかげで今の2人の心は晴れ晴れとしていた。

第23話：魔狼（8）（後書き）

大分、長いことかかりましたが、ようやく22話までを修正したので23話を投稿できました。

待っていた方がおられましたらすいませんでした（――）

気がつけばかなりの日数がかかっちゃいましたが、少しはまともな内容に修正できたのではないかと思います。

修正自体は5月上旬で終わっていたのですが、23話を書くために残り日数をすべて使ったわけではないです。

如月探偵を書いたり、思いついた新しい小説を書いてみたり、気晴らししたりとしていた合間合間で書いた感じですよ。

まあ、そんな感じですが、どうにか投稿できたのでよしとします。

文の構成力や表現力がUPしたかは本人にはわかりませんが、書きたい内容が頭の中にたまり続けていたのが少しでも吐き出せたので頭の中も多少落ち着きそうです（笑）

とりあえず、今後は月1〜3でアップできるのを目安に投稿しているかと思っています。

第24話：お勉強

「よっと、ついたぞ」

ロボンの後に瞬も足を止める。

「ついた……んですか？」

瞬は素直にそう問いかける。

無理もない。

ロボンがついたといった場所は広大な何も無い平地のど真ん中だったからだ。

周りには地平線が見えるほど平地はずっと続いている。

「ここでいいんだ、お前に『旅人』ってのが何かを教えるならなほら、まずはお前の知ってる事を全部話してみろ」

ロボンはその場に似合わない革張りの高級な椅子を作り出して深く座る。

瞬もそれにならって椅子を作り出したが、何処にでもありそうな背もたれのついた椅子で浅く腰かける。

場所が場所なら上司と部下が向きあっていると取られてもおかしくない奇妙な光景だった。

「……話す前に聞いておきたい事があります」

「ん？なんだ？」

「貴方は狼に変身する連中を殺したと言いましたよね？」

「ああ、言ったな」

「なぜ、そんな簡単に殺せるんですか？罪悪感はないんですか？」

瞬の質問にロビンは呆れて青い空を見る様に頭を逸らす。

だが、ロビンはめんどくさそうに思いつ心のどこかで懐かしさも感じていた。

「やれやれ、嬢ちゃんと一緒だな」

「え？」

呟くように言ったロビンの声を瞬はうまく聞き取れなかった。

何を言ったのか聞こうとした瞬だったが、古い記憶を呼び起こしながらロビンは頭を元に戻し、瞬の方を向く。

「なぜ簡単に殺せるか、そんな理由は分かっているんじゃないのか？やらなければやられる、お前がいるのはそういう世界だと言う事だ。罪悪感？戦争でいちいち相手を殺した事を悔いている兵士などほとんどいないぞ」

「こ、これは戦争じゃ」

「戦争だ。いいか、簡単に言ってるやろう。『W2』という組織は世界中のどこにも存在し、ボランテアとしての表とその国の政治を支配するほどの力を持った裏がある。表で色々な国へと入り込み、裏の力であつという間に侵食する。言うなれば性質の悪いコンピュータウィルスみたいなもんだ。そうやって支配を繰り返した結果、今現在、『W2』のいない国はない。つまり、世界中がお前の

敵である訳だ。奴らがその気になれば大量の軍隊が押し寄せるが、お前はそんな状況でもいちいち傷つけずに倒せると思ってるのか？」

「それは……」

「敵を眠らせるだけならいずれまた襲ってくる、だから殺す。殺さなければ終わりは来ない。お前以外の他の『旅人』も昔からそうしている。まあ最も、『W2』の力を使えばいくらでも人員補充は可能だろうな。金や脅し、最後には洗脳まで使うような連中だからな。」

激情に任せて立ち上がった瞬はロビンに詰め寄る事はせず、その場に立ったまま叫ぶ。

「そんな！なんという事を！」

「結局は、だ。巨大すぎる組織は頭を潰すしかない。仮にお前が『W2』の頭と対峙したとしよう。お前はそれからどうするつもりだ？」

ロビンの言っている意味を瞬は理解した。

つまり、止めるためには結局人を殺さなければいけないという事を彼は言っているのだと。

瞬の脳裏に日本支部で自殺した小田切の姿とお前のせいだという言葉がよぎる。

瞬の口からすぐに答えは出なかった。

「まあ、そういうことだ。誰も殺さずに治めるなんて事はでき」

「……しません」

「ん？」

呟いた瞬の言葉にロビンの言葉が止まる。

そして、瞬はポリウームのつまみを捻るように声を大きくして続けた。

「僕は殺しません！誰も！」

「……そうか、お前がそう決めたなら俺はとやかく言わん。ただ、そう決めたなら貫き通す事だな。いずれ壁にぶち当たるだろうがな」

「そんな壁壊してみせます！」

瞬は強い意志を秘めた目でロビンから目を外さない。

嬢ちゃんも最初はそう言っていたが、結局……。

ロビンは心の中で付け加えるが止める気はない。

なぜなら、彼も遠い過去に『旅人』になった時はそう思っていたからだった。

もしかすると瞬なら出来るかもしれないと心のどこかで期待していたのもあるだろう。

「ふっ、俺がお前の行く末を見届けてやるよ、その言葉を本当にできるかどうかを、な。出来る限りの手助けはしてやるが、まずはお勉強からだな」

本題に戻ると瞬は椅子へと腰を落とす。

とりあえず、瞬は事の始まりから話し始め、姫から『旅人』について教えてもらった事を話す。

最初は頷いてまで聞いていたロビンだったが、次第に表情は曇り、最後にはめんどくさそうな顔をしていた。

「こんな所です。他は何も聞いてません」

「くあゝ、やっぱりか。まともに魔力についてすら分かってないのか」

本当、やってくれるぜ、嬢ちゃん。

心の中で毒づいてもその相手は既にどこにもいない。やりきれないような怒りを心の奥底に飲み込んだロビンは、手の上に薫り高い紅茶の注がれたカップを作り出して一息ついて飲む。どうにか怒りは治まったらしく、中身のなくなったカップを消したロビンは手で合図して瞬を立たせた。

「いいか、まずは魔力というものがどういうものか教えてやる。目を閉じる」

言われるままに瞬は目を閉じる。

何が起るのか期待していると、ロビンはその前で手を前に出す。

「意識を集中してみる、何かを感じないか？」

集中と言われてもどうすればいいか瞬には分からない。

とにかく辺りの物事に意識を傾けてみた。流れる風の音。

肌に当たる暖かい太陽の光。

風に乗って届く土の匂い。

そうやって周りの物事を目を閉じて感じ取っている。

すると、どこかボンヤリとした物がロビンの立っていた位置にある

のを感じた。

まるで幽霊の様な実体がそこに存在しているのかすら分からないが、霧の様などにかくモヤモヤとした感じた。

「どうだ、分かるか？これが魔力だ。本来は空气中に雲散している魔力だが、人の体内で凝縮した物が今感じているものだ」

「なんとなく分かります」

「この感覚を十分に覚えておくことだ。これが敵の位置を知らせるレーダーのような役割も果たす。敵が魔法を使えるものなら必ず魔力は発生する。が、例外は存在する」

「例外？」

「そう、例えば敵が魔力の流れを操作出来る様な魔法を持っていたり、テリトリーを張るような魔法だった場合だ。前者はただの一般人を相手するようにまるでレーダーには引つ掛からない。逆に後者の場合は辺り一帯に魔力が満ちるため、術者が何処にいるのかは分からない。こういった例外があるが、それとは別に『魔具』という物が存在する。さっきお前が話していた刀もその一つだ」

そう言われて目を開いた瞬は『天狼』を思い出す。

『天狼』が『魔具』であると言われ、瞬は概ね理解していた。

「魔法の力がある道具だから『魔具』、ですか？」

「まっ、そういうことだ。魔法の力が封じ込められている便利な道具と思えばいいが、こいつらも魔力の探知には引つ掛からない。さっきの狼に変身する連中だが、こいつらはその『魔具』を体に埋

め込まれていると見て間違いないだろう。探知に引つ掛からずに魔法を使える厄介な連中だったという事だ。幸い、お前には関係なかったがな。あ、そうそう、ちなみにだが俺達は相手の探知には引つ掛からない」

「え？一体なぜです？魔法を使うのに」

「俺達は地球を守る存在であり、地球に対して人間よりも近い存在だ。普通の探知では空気中の魔力の中に溶け込んでしまい、何もいないと思われてしまうのさ。ただし、魔法を使った場合は別だ」

瞬の頭の中に病院の屋上で姫が大量の銃器類を並べていたのが思い浮かぶ。

一通り覚えた後、姫は魔力が漏れたと言っていた。

それが敵に感知されていたのだと言う事が今になってようやく瞬は分かった。

「魔力の話はこんなところだ。続けて魔法についてだが、魔法と言うのはため込んだ魔力を人間と言う変換器を通して色々な形で放出するものだ。これについては何度も使っているだろうが、それはあくまで『旅人』の力だ。お前はまだ自分の魔法が使えないだろう？」

「自分の魔法・・・ああ、僕自身のですか」

「そうだ、人間は生まれついた時点で何かしらの魔法の要素が体の奥底で眠っている。普通の生活をしていたら気付かないであろう力だが、お前はいまや『旅人』だ。お前の本当の魔法ではないといえ、魔力の流れる感覚や魔法を呼び起こす感覚はお前自信の魔法を目覚めさせる。そう遠くないうちに魔法が使える様になるだろう」

「そうですね・・・、そういうえばロビンさんの魔法は？」

「俺か？ん、実際にやってみせよう。」

そう言うとロビンは手の中に野球ボール大の石を3つ作り出し、それを適当に空中に放り投げる。

一体何をするのかと期待する瞬の前で、ロビンはCZ75を作り出すとどういつ訳か投げた石とは正反対の方向を向いた。

そしてまるでたらめな方向へとCZ75を構えて3回引き金を引く。

放たれた弾は当然のように石とは逆の方へと飛んでいく。

だが、突然、弾道が大きくカーブして180度反転すると石へそれぞれ弾が飛んでいく。

弾は石を撃ち砕き、3つの石は空中で花火のように粉々に散ってしまった。

啞然とする瞬へとロビンは得意げな顔を浮かべながら今度は大量の石を幾つも作り出し空中へと放り投げる。

雨のように落下し始めた石群の下でロビンは両手に1つずつサブマシンガンUZIを作り出し、瞬へと銃を向けて引き金を引いた。

瞬は咄嗟に盾を出して防ごうとしたが、弾は瞬に当たる前に降り注ぐ石群へと強制的にその軌道を変える。

次々と弾丸は石を砕き、ロビンの両手のUZIが弾切れを示す撃鉄の澄んだ音を上げる頃には石は全てなくなっていた。

「こんなとこだ。どうだ、少しは驚いたか」

「え、・・・ええ。一体何なんですか、今のは？」

「簡単だ、放った物を狙った物に必ず当てる魔法だ。銃や弓矢、手榴弾なんかと合わせて使えばいくらでも敵を倒せる、『旅人』な

らばほぼ最強といえる魔法だ。何しろ、動かなくても大量に武器を作り出す事が出来るんだからな。ちなみに俺は『フェイルノート』と呼んでいる。円卓の騎士の1人が使用していた必ず当たる弓の名前で、別名『無駄無しの弓』なんても呼ばれてるが知ってるか？」

「必ず当たる弓、ですか」

ふと瞬は思った。

ロビンと言う名前と弓とくれば、・・・まさか。

「もしかしてなんですけど、ロビンさんってロビンフッドが好きなんですか？」

「はあ？」

「いや、ロビンって言う名前と弓なんて聞いたら・・・」

そこまで聞いたロビンは最初は堪える様に笑っていたが、耐えるのが限界になると腹を抱えて笑いだした。

やたらと笑い続けるものなので、瞬は何かおかしい事を言ったのかと頬を赤く染めながら考える。

だが、どこにも笑われるような事など言っではないはずだった。

「はーっ、久々に笑わしてもらった。中々、面白い事を言う奴だ」

「そんなに変な事言いましたか？」

「まあな、本人に向かって本人が好きなんですか、とは面白いだろ？」

「ああ、なるほど。ロビンフッドにロビンフッドが好きって聞いても・・・って、えええ！？」

瞬は驚きのあまり、普段の礼儀正しい態度からは想像できない大声を上げる。

目の前にいる若い男が何百年も前の人物と言われてもまるで信じられずにいた。

確かに顔立ちはヨーロッパ系の白人だが、仮に彼の言う事が本当ならなぜここに存在していられるのだろうか。

「一体何歳ですか！？」

「俺？そっいえば数えてないな。確か、生まれたのが1198年だから・・・、およそ800歳ぐらいだな」

ロビンは笑いながら答える。

その表情にはどこにも嘘をついているような様子はない。

いくらなんでもおかしいと疑い始めた瞬だったが、それを見越したようにロビンは付け加えた。

「『旅人』ってのはな、人間の寿命なんてない不老不死なのさ」

「ふ、不老不死ですか！？」

過去、権力者はこの不老不死を追い求め、無数の錬金術師が挑戦したが結局成し遂げる事は出来なかった。

また、今でも不老不死を願う人は少なくなく、最早、人類としての夢の1つとも言える。

そんなものを知らず知らずのうちに手にしていたとは瞬も腰を抜かす。

「う、嘘？」

「なんで俺が嘘を言わなきゃいけないんだ？言っただよな、俺達は地球に近い存在だと。簡単に言えば地球の寿命が俺達の寿命と言う訳だ。傷や怪我が急速に治っていくだろう？それはこの作用なのさ。ただ、厳密に言えば首を切り落とされたりすれば死ぬかもしれないから不死とは言えんかもしれん。さすがにそこまで実験しようとした奴は今までいないからな。逆に『W2』の連中はそれに賭けている訳だ」

「じ、じゃあ、貴方が800歳と言うのは・・・」

「なんだ、疑ってたのか。本当に決まってるだろ」

ふんぞり返ってロビンは言う。

確かに今まで怪我や毒を食らった事のある瞬だが、徐々に怪我は治っていく、最後には完治していた。

さっきの狼人間達との戦いもそうだ。

銃弾を食らったはずなのにその怪我は戦いの合間に痛みすらなくなり、今となっては跡すら残っていない。

彼の言っている話はおそらく本当なのだろうと、瞬は思う。と言う事は。

「え〜と、ひいひいひいひい・・・」

1つひいと言ったたびに瞬は指を折って数えていく。

それを見たロビンはどことなく察したのか、顔を引きつらせていた。

「・・・何を、しているんだ？」

「え、いや、800歳なんてなると一体いくつひいが付くおじい
ちゃ」

「てい！」

瞬の頭にロビンのチョップが叩きこまれ、舌を嚙んでしまった瞬は
痛さに悶絶する。

「そういう事を考えるな！大体、俺のどこがおじいちゃんだ？
旅人」になつたら歳の概念など捨てる！いいな！？」

「ふ、ふぁーい」

痛む舌で返事をしながら、瞬は別の事を考えていた。
となると、姫は一体何時の時代の人なのだろうか。

瞬はふと湧いた疑問をロビンにぶつけてみた。

すると彼は眉をひそめ、しばらく考える素振りを見せた後に答えた。

「嬢ちゃんの事についてはそのうち分かるだろうから言わない。

というか、俺の口から言うよりも自分で知るべきだ」

「はぁ・・・、分かりました、貴方がそう言うなら聞きません」

ありがとうの代わりにロビンは手を振って返してみせる。

「あとは・・・『W2』のアジア支部の場所だが、アノールつて
街に行ってみる。前と変わって無けりゃさっきの狼野郎を作り出し
た施設がある、おそらくそこで場所は分かるだろう」

「貴方は行かないんですか？『W2』は敵でしょう？」

「俺は別の用事がある。残念だが、お前1人だな」

「そんな・・・、ほかに仲間がいるのならチームで動くべきでは」

「仮にだ、ここに他の『旅人』3人がいたとしよう。全員お前1人で行けとしか言わないさ。『旅人』は基本的には1人で行動する。助けは期待するな」

「でも、みなさん『W2』と戦われてるんじゃない」

するとロビンはどことなくばつが悪そうに頭を掻きながら言う。

「・・・残念だが、今ともに『W2』と戦っているのはお前だけだ」

「え、そんな！？なぜですか！」

「1人1人に理由はあるようだが、俺は他にやるべき事もあるし、世界を相手に戦争なんてやってる暇がない。それだけだ」

「『W2』を倒すよりも重要な事、ということですか？」

「まつ、そう思ってくれりゃいい。そんじゃ、とりあえずこれで話しは終わりだ。後は色々と自分で探してみる、じゃあな！」

「あ、ちよつと！」

まだまだ聞きたい事がある瞬だったが、ロビンはさっさとその場か

ら飛び上がっていった。
追おうにもどうやったのか視界からは完全に消えてしまい、瞬は追跡する事が出来なくなる。
仕方ないと諦めて瞬はその場にだしたままの椅子を消しておく、GPSと地図を作り出す。
ロビンの言っていたアノールという街を地図から探すと、一路アノールを目指した。

第24話：お勉強（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

今回は説明的な内容なので会話ばかりになってしまいました。

第25話：霧の街（1）

日が暮れていくのと同時に瞬はロビンの言っていたアノールへとたどり着いた。

はずなのだが、森の中にある街の入口で瞬は止まらざるを得なかった。

目の前に見えるはずの街が辺り一面に広がっている深い霧に包み込まれていたからだ。

霧によつて外からは建物らしき陰があるのがうつすらと分かる程度でしかない。

白い霧を何かの魔法かと考えた瞬だが、試しに手で触れてみてもなら普通の霧とは変わらない。

たまたま、なのか？

そう思いながら今度は耳を澄ましてみる。

ところが誰かがいるような生活音は全く聞こえず、辺りは不気味なほどに静まり返っていた。

まるで廃墟の様な街に瞬は再度、地図を見してみる。

だが、やはりここがアノールであるのは間違いなく、しかも街としてはそんなに大きくもないようだ。

ロビンが嘘を言ったとは到底思えない瞬は、その場で目を閉じて教わったばかりの魔力探査を行ってみた。

意識を集中してみると姿は視認できないがいくつもの魔力を感じ取る。

近くから遠くまで色々な個所から魔力を感じ、どうやら魔法使いの連中がおよそ街全体を警護しているかのようだ。

これだけ魔法使いがいるとなると、ロビンの情報で間違いないと瞬は確信する。

早速、『W2』の施設を探してみようとはしたものの気がつけばもう既に日は落ちていた。

暗闇のトラウマがまだ克服できない瞬は慌てる様に懐中電灯を作り出す。

強い光で丸い光が辺りを照らし、瞬は落ち着きを取り戻すと少しの間考えた。

霧だらけで不思議な街だが、いつまでもここにいてもしょうがないかな。

そう考えた瞬は意を決して霧の中へと入ってみたがやはりただの霧らしく、変な感覚や痛みも苦しさもない。

考えすぎだったのかと思いつながらとりあえず見えていた建物に近寄ってみる。

平屋の家の様だが灯りは見えず、まるで人の気配は感じない。

多少悪気を後ろめたさを感じながら瞬は中を覗いてみる。

中にはテーブルの上にコーヒーの入ったカップやパンが置かれ、新聞が広げて置かれていた。

まるでそこで誰かが新聞を見ながら、パンを食べていたかのようだが、やはり人の気配はまるで感じない。

瞬がドアノブを回してみると、鍵もかかっていないらしくあっさりとドアは瞬を迎え入れる。

瞬は泥棒のように物音をたてないように入り、テーブル上のコーヒーカップに手を当ててみた。

すると、コーヒーカップからは若干冷めたのか温いもののまだ温かさがあった。

たまたま、ここの家だけ人が出かけているだけなのかもしれない。

そう考えた瞬だが、霧の立ち込める中で目についた家を確認して回ってもどこにも人はいない。

「一体、何が・・・」

不思議に思いながらも瞬は街の中へと進んでいく。

だが、霧の中に浮かび上がるようにいくつもの光が見えるが、相変

わらず人の気配はなかった。

それどころか出しっぱなしのシャワーやエンジンのかかった車までもが放置されていた。

まるで人だけがこの街から消えてしまったようだ。

いや、人だけではない。

犬小屋のある家に犬の姿はなく、カラスの鳴き声すら聞こえはしない。

ゴーストタウンというよりも墓場に迷い込んだ様な不気味さを瞬は覚える。

霧の中を懐中電灯だけを頼りにしているため視界は悪い。

にも関わらず自然と瞬の足が早足になっていたのはその不気味さのためだった。

いまだトラウマの暗闇の中に1人でいると言うのも原因である。

「そ、そうだ、魔力を探してみれば誰がいるはず！」

この際、敵かどうかは置いといてとにかく人を見つけたかった。

瞬は焦る気持ちを落ち着け、そしてゆっくりと目を閉じて集中する。だが、霧の外にいた時は間違いないと感じていた魔法使いの存在がまるで感じられない。

というよりはこの霧のように周囲から魔力を感じ、まるでジャミングがかかっている様に魔力を探す事が出来ない。

「そんな、さっきまでは感じたのに！？この霧のせい・・・？」

確証はないが怪しい物と言われるとこれしかなかった。

とにかくここから出た方がいいと追い詰められていくように焦り出し、その場から飛び上がる。

霧を突き抜ければどうにかなると思っていたものの、何時まで経っても霧からは抜けずに元の場所へと落ちていく。

外から見ていた時には瞬が飛べる高さまで霧はなかったはずだが、今は夜空や雲すら見えない。

瞬は嫌な予感を感じ、無我夢中で入ってきた街の入口へと戻っていき。

入口まで戻り、外の森の中へと出ようと足を踏み出した。

だが、ふと気がつくのと、どういう訳か徹司は街の中へと1歩出した。い。

何度も外へ出ようと繰り返しているが、ループしているかのように入口の外へと足が出る事はなかった。

「閉じ込められた・・・」

もうここまでくれば間違いが無かった。

これがロビンの言っていたテリトリーの魔法なのだろうか。

だが、ロビンの話では魔力が空間の中に満ちてしまうために術者が探せないと言っていた。

正に今の状態がそれだった。

誰もいない霧の街に1人だけ閉じ込められた恰好になった瞬間。

とにかく、夜動くのだけは止めておこうと一番最初に調べた家の中へと入る。

電力は生きているらしく、電気をつけると室内が一気に明るくなり、瞬も暗闇が少なくなった事で落ち着いた。

居間の椅子の上に腰かけると気晴らしのようにロールケーキを作り出す。

瞬の中では一番うまいと評価している通販のお取り寄せロールケーキ（3980円）だ。

丸太の様なケーキを切り分け、1つ手に取ると豪快に齧り付く。

その口の中に広がるスポンジの軽い感触と舌触りの良いクリームの味に思わず瞬は安堵の息を漏らす。

ロールケーキを無心に食べ続け、全て食べきるとようやく気分が落

ち着いてきたようだが、これからどうするべきなのかと神妙な面持ちを浮かべる。

この何も感じない誰もいない街の中で魔法使いを探すしかない。そのためには魔力探知が出来ればよかったのだが、それも霧で阻まれているために自力で探し回るしかない。

この広い街の中を、だ。経験の浅い瞬には眉間にしわを寄せるほど考えてもまともな手段が思いつかない。

とりあえず朝になるのを待ち、探し回るしかないと『イージスの盾』を作り出して敵が来るのに備える。

2日連続の徹夜だが、不老不死の効果が無理に寝なくても眠気はあまりない。

瞬は暇つぶしにテレビでもつけようかと椅子から立ち上がるうとした時だった。

外から車が走るような音が聞こえてきた。

誰もいない街の中で車が勝手に走りだす事はない。

瞬は窓の中から外の様子を窺って見ると、確かにこの暗闇の中をライトを頼りに走る車がいた。

街の中に止まっていた車と変わりない車だ。

車はスピードを出さずにゆっくりと動いているが、人は間違いないに乗っているようだ。

敵、なのだろうか？

そう思っている瞬はすぐには家の中から飛び出せず、様子を見る事にした。

すると車は動きを止め、中から人が2人出てくると周りの家に入っていく。

しばらくすると家から出て次の家へと入っていく。

もしかして、僕を探しているのだろうか？

そう考えると敵で間違いないと思った瞬は、いずれくるであろうこの家の裏側に抜け出た。

夜の闇に耐えながら家の壁に張り付くように待っていると家のドアが開く音が聞こえた。

続けてその家の中を歩き回る音が聞こえ、何かを言っている様だ。

「・・・か？誰か、誰かいませんか？」

女性のか細く涙交じりの声を瞬は不思議に思った。

もしかして敵ではないのか、と。

窓からそつと中を窺って見ると茶髪の若い女性が涙を浮かべながら誰かを探し回り、疲れ果てたように椅子の上へと座る。

そこに家の中を探し回ったであろう体つきの良い見た目30代の男が合流した。

男は泣きだす女をなだめる様に肩に手を置く。

「駄目だ、ここにも誰もいない」

「どうして・・・、どうしてこんな事に？」

「分からない。だが、この街から出る方法を探さないと、俺達はそのままここに閉じ込められるたままかもしれない」

「そんな・・・」

女はそれを皮切りにまた泣き出してしまいが、男はため息を一つついて椅子に腰かける。

外で見ていた瞬は試しに魔力を感知してみたが、やはり周囲の魔力に邪魔されて魔法使いなのかどうかは分からない。

だが、話しを聞いている限りでは敵とは思えない瞬は意を決して家の中へと入った。

突然開いたドアに身構える男と隠れる女だったが、そこに瞬が立つ

ているのを見て固まった。

「だ、誰？街の人？」

女が怯えながら問いかける間に男は置いてあつた木の杖を武器として手に取る。

もし、こうなつた原因が目の前にいる瞬であるなら殴りかかる氣だつた。

だが、瞬は落ち着いたように敵意が無いのを表すように両手を小さく上げる。

「落ち着いてください、僕はただの旅行者です。街から出られなくて困っていたら貴方方が僕のいた家に来たので慌てて隠れてたんです」

「隠れた？なんで隠れる必要がある！？」

「それは・・・こんな不思議な状況になつたら誰だつて会う人は怪しむでしょう？」

「ふん、どうだかな！」

「待つて、この人も私達と同じなだけじゃない？それなら力を合わせるべきよ」

女に言われた男は少し思案した後、持っていた木の杖を下ろした。

「・・・よし、信用した訳じゃないがアンタも一緒にいる。その方がお互い都合が良いだろう。俺はドミトリー、彼女は」

「ニキータ、ニキータ・ペトロフよ」

「僕は雨堂 瞬、瞬で構いません」

「どこの国の人なの？見た所、黒い髪に東洋人みたいだけど？」

「日本人です、さっき言った通り旅の途中でたまたま立ち寄った
らこうなりました。貴方方は？」

「俺が仕事でこの街を通り抜けて別の街へ行こうとしたら彼女が
ヒッチハイクしていたんで乗せたんだ」

「ヒッチハイクですか」

「そう、たまたま車が壊れてヒッチハイクしていたら彼が通りか
かったの。目的地が一緒だったから乗せてもらったの」

聞いている限りでは2人に何もおかしい所はない。

だが、当たり前のように嘘をついた瞬はともかく、どちらかが魔法
使いでこの状況の原因と言われてもおかしくはなかった。

逆に彼らからすれば得体の知れない東洋人の方がそう見えるのだろ
うが。

「毎日通っていた街だが、昨日まではこんな事はなかった。人は
いなくなるし、携帯はつながらないし、街からはどうやっても出ら
れない。おまけにこの深い霧だ。一体何がどうなっているのか見当
もつかん。アンタは何かしらないのか？」

ドミトリーは瞬を指差して言う。

彼は瞬が犯人ではないかと疑いの眼差しで見ている。

実際、瞬にはこの原因は分かってはいるが安易に言える話でもなく、何も知らない人に徹した。

「分かりません、僕はこの街に来たら霧が立ち込めていましたが、夜も近かったのでここに泊まるうとしたんです。宿屋を探しているうちに異常に気がついて夜が明けるのをこの家で待っていたら・・・」

「私達が来た、ってことね」

「そういうことです。とにかく、今は暗いですし夜が明けるのをここで待つべきでしょう。家の住人には悪いですが、食べ物などはそのままあるようですし」

「・・・そうだな、それが」

「そんな、困るわ！」

ドミトリーは瞬の案に同意しようとしたが、それを邪魔するようにニキータが立った。

「私のお父さんが死んでしまいそうなの！早く、早く病院に行かないと！」

そう言われても現状では打開策が見つからない男2人は黙ったままだった。

そんな2人に見切りをつけたかのように黙ったニキータは外へ出ようとする。

慌ててドミトリーが腕を掴んで止めたが、それでも早く出ようと動き続ける。

「今は出ても無駄だ！分かるだろ、行くんじゃない！」

「嫌！私のお父さんが死にそうなのよ？行かないなんてそんなこと出来ないわ！」

暴れまわるニキータをただ抑えつけるしか出来ないドミトリー。瞬は諦めたように1つ息をつくると2人へ向かって言った。

「しょうがない。此処から出る方法を探しに行つてきますから此処で待つていてください。それならいいですか？」

またこの暗闇の中に出ていくのはさすがに気が引けていた瞬だが、それと同時にこの原因、魔法使いを倒せるのも自分だけだと考えていた。

まだこの2人が魔法使いという可能性はある。

が、瞬には彼女の涙や必死に止める彼の行動が演技とは思えない。

いや、思いたくなかったという方が正しいだろうか。

2人の動きは止まったが、ドミトリーはニキータの手を放すと目を細めて瞬を睨みつけた。

「いいですか？じゃない！お前1人行かせた所でこの原因が分かるのか？大体、俺はまだお前を信用してないんだ。いなくなつたら逆に何をしでかすか分からない、それなら目の届く所にいた方がまだ安心できる。こんな深い暗い霧の中に出て行かなきゃならんのは嫌だが、しょうがない。お前と一緒に原因を探し回つてやる。アンタはここで待つてるんだな」

「2人とも行っちゃうなら私もついていくわ！1人でいる方が危ないし、それに早く出るなら一緒にいた方がいい」

「そうか、それなら止めはしない」

瞬からすれば1人だけで探した方がよかったのだが、2人の言っている事も正しい。

結局、止めることすらせずに3人で外を探す事になった。

正直なところでは暗闇の中で他の人がいるというのが瞬の救いにはなっていた。

それも止めなかった理由の1つと言えるだろう。

3人は軽い腹ごしらえだけ済ますと外の暗闇の中へと出た。

偶然見つけたという振りをして瞬は2人に懐中電灯を手渡し、その光に2人も少なからず安堵した様だ。

ドミトリーは懐中電灯で照らしながら自分の車へと戻り、助手席のダッシュボードを開く。

すると、その中からホルスターに入ったマカロフ（ハンドガン）が現れ、ドミトリーは腰ベルトにホルスターを取りつける。

「銃！？なんでそんな物を持つてるの？」

ドミトリーはニキータの問いには黙り、その代わりとして上着をめくってみせた。

胸のポケットには警察を示すバッジが付けられていた。

「警察、なのね」

「ああ、本当なら今頃夜勤のはずだった。俺がいない事に気づいて誰かが搜索してくれば良いが、あいにくと小さい署で夜勤は俺1人だ。朝になるまで期待はできないな」

「そう・・・」

肩を落として落胆しているように見えるニキータを瞬は元気づける。

「大丈夫ですよ、きつと間に合いますよ」

「そう、そうよね、・・・ありがとう」

ニキータはそう言うが明らかに言葉に力はなかった。
できるだけ早く何とかしないと。

ニキータの落ち込んだ顔を見て瞬はそう強く思った。

「よし、車に乗り込んでくれ」

車に乗り込むと、ドミトリーは大きめの地図を広げて見せた。

街はそれなりな大きさを持っているようで、形は十字架に似た様な形をしていた。

ドミトリーは十字架で言う所の右の先端を指差す。

「俺達がいるのはここ、見ての通りこの街の端っこだ。俺と彼女が入ってきたのがこの通りの奥から、つまり今いる所の反対側だ。その時にこの街の中心は通ったが人気はなかった。原因が何かは分からないが探すならここら辺だな」

そう言いながら指差したのは長く伸びている街の下の方だった。
特に否定する理由もない瞬はそれで了承し、ニキータも同じように了承した。

ドミトリーは車を発進させて一路、街の中心へと向かっていった。

椅子に深く腰掛けながら、最早日課となっている胃薬を口に何錠か含むと水で一気に流し込む。

一息ついたアジア統括長は以前の『W2』の会議から更にやせ細った体を動かし、執務を行う机の前に座る。

クシャクシャになった金髪を整えながらアジア統括長は机のディスプレイを食い入るように見ていた。

そこには逐一、向かってきているはずの『旅人』の情報が上がっているようだが、数時間前からその情報はピタリとやんでいた。

罨には既にかかった、後はうまくいくのを祈るだけだ。

そう思いながらもディスプレイからは目が離せない。

何時、自分を狙っているという『旅人』が罨を抜けるかもしれないと考えるだけで、彼の胃痛は再発してくる。

くそ、なんで私がこんな思いをしなくちゃいけないんだ！

不安と苛立ちが募る中、ディスプレイに変化が現れた。

「『旅人』への接触に成功」

短い一文が現れたただだが、その一文にアジア統括長は歓喜する。

「よし、よしよしよし！いいぞ！」

まるで野球観戦をしている熱狂的ファンのオヤジのように体中で喜びを表す。

普段は落ち着いて感情など押し殺している彼だが、命にかかわるだけに作戦がうまくいくのは本当に喜ばしい事だった。

そう思いながらもこれはまだ作戦の初期段階でしかすぎない、と彼は心を落ち着ける。

そしてディスプレイに向かうと継続して作戦を行うよう命令を打ちこむ。

ふんぞり返りながらこの後の事を彼は思案してみた。

このままうまく生きさえすれば自分の命が助かるだけでなく、念願である『旅人』の力も手に入る。

落ち着きはしたがまだうまく感情が殺せていないらしく、そう考えるだけで彼の口の端は自然と釣り上がっていた。

街中を走り続ける車の中から外の様子を窺っているが、どこを通っても照明は点いているが人気はなかった。

ふと、ドミトリーが何気なくバックミラーを見る。

すると、後部座席にいるニキータが携帯を触っているのに気がついた。

「ニキータさん、携帯なんて無駄なんだ。外を探してくれ」

「ええ、ごめんなさい。もしかしたら通じるかもしれないと思うから・・・」

謝りながらニキータは携帯をしまい込み、窓から外を注視し出す。だが、どこまで行っても霧は無くならず、他の人にも出くわさない。

「ちくしょう、何処まで行っても誰もいない。もうすぐで端に着いちまう」

苛立つドミトリーの隣で瞬は家から家の間に何かが動いたのに気づいた。

「止めてください!」

慌ててドミトリーは車を止めると、瞬は車から飛び出して家に向かって走り、その後を2人が慌てて追いかける。

動いた何かがいた家と家の間に瞬がたどり着くが、既にどこにも動く物は見当たらない。

巨体のせいか息を切らしながら追いついたデミトリーは瞬が何かを探しているのに気づいた。

「な、何かいたのか？ゲホゲホッ！」

「ええ、何かがありました。左の家から右の家に向かって何かが動いたんです。逃げられたみたいですけど」

「人、だったの？」

「それくらい大きかったです。何せ、この霧ですからハッキリしなくて……ん？ドミトリーさん、あそこ」

何かに気付いた瞬が茂みを指差すと何かがいるのか小さく動いていた。

ドミトリーはホルスターからマカロフを抜くとその茂みに向けて構え、段々と距離を詰めていく。

「アンタらはそこにいろ」

ジリジリと差を詰めていい、マカロフの射程距離にまで入るとドミトリーは声を荒げて叫ぶ。

「おい！そこに誰かいるなら出てこい！こっちには銃があるぞ！」

だが、茂みの揺れは続くもののまるで中にいる何かは出てこようとならない。

ドミトリーが茂みに手が届く距離にまで近づき、茂みに向かって手を伸ばす。

後ろで見守る2人が息を呑む中、ドミトリーが茂みをかきわけた。途端に何か飛び出し、目の前にいきなり何かが見えたドミトリーはその場で尻もちをつく。

「うおっ!?!」

「ドミトリーさん!」

瞬はすかさず飛び出そうとした。

のだが、その飛びだした何かが一体何なのか気付くと気が抜けたようにその足を止めた。

ドミトリーも慌てて、それに向かってマカロフを向けるが、そこにいたのは小さく震える野生の小鹿だった。

「鹿、か?つち、驚かせやがって」

悪態をつきながらも緊張が抜けたドミトリーは立ち上がり、その鹿へ寄っていく。

「この鹿も迷い込んだんでしょかね?」

「そうだろうな。俺達と同じ境遇って訳だ」

さすがに同じ立場の生き物とは言っても鹿を乗せる気は起きず、3人はここから去ろうと鹿に背を向けた時だった。

何か森の中から鹿に向かって伸び、鹿の体に巻きつくとも一気に鹿

を引きずり込んだ。

鹿の叫び声に全員が後ろを振り向いたが、そこに鹿の姿はなかった。

「おい、鹿は何処に行ったんだ？」

「分かりません。霧に紛れてどこかへ行ったのかも」

「ねえ、何時までも鹿にかまっていた所で出られないわ。先に急ぎましょう」

足早に車に戻ろうとするニキータに引かれて2人は車へと戻っていく。

「にしても、お前が見たのは人位の大きさがあつたんじゃないのか？」

「だと思っただんですけどね、何せ遠かったから良く分からなかったのかもしれない」

鼻で笑うドミトリーに瞬は笑って返し、車へと乗り込んだ。

気に食わない奴だ。

ドミトリーは瞬に小さい嫌悪を覚えながら車へと乗り込み、先へと発進させた。

車が霧の中に消えて行った後、森の中からその行く先を見届ける様に巨大な影の赤く光る目が見開かれていた。

第25話：霧の街（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

月1〜3ペースとっておきながら、早くも月1ペースorz

小説にかける時間が少ないわけではないですが、公開していない小説に大分時間を割いているためにどうも進みが遅いです。

そのうち公開出来ればいいですが、それよりも先に旅人をスピードアップするべき・・・ですよ（汗）

今回はホラー的な感じで始めてみました。

ホラー小説は読んだことがないのでこれがそれに近いのかは疑問ですが・・・。

第26話：霧の街（2）

鹿に出会った後からは他の生物には出会うことなく、3人の乗った車は何の手がかりもないまま行き止まりで止まった。

「くそ！鹿以外に何もいない！一体どうすりゃいいんだ！？」

ドミトリーが苛立ちながら叫び、それを聞いたニキータは落胆する。瞬はと言うと何かを考えている様に腕組をし、気になっていた事を2人に問いかけてみた。

「・・・僕たちしか今はこの街にはいない、それなら元いた人達はどこにいったんでしょう？」

「知らん！俺が聞きたいくらいだ！」

まだ苛立つドミトリーだが、瞬は続ける。

「まるでその場から生き物だけが消えた様に生活の後は残っていません。争った様な跡もないとなると、何かによって消されてしまったのかも」

「何かって？思い当たる物でもあるの？」

「・・・考え付く所ではこの不自然な霧位しか」

そこまで聞いていたドミトリーは鼻で笑うと、やり場のない怒りと不安をぶつける様に瞬に当たる。

「ハン！住民が消えたのと霧が関係あるなら、俺達はなぜ消えない？え？お前にそれが答えられるのか？」

小馬鹿にした様なドミトリーにさすがに軽い苛立ちを瞬は覚える。だが、確かに彼の言うとおり霧が原因なら既に自分達は消えていてもおかしくはない。

瞬は少し黙りこんで考え込む。

仮に霧が原因だとしても消えるまでに時間がかかるのか、それとも特別な条件でもあるのか。

魔法によるものと分かっている瞬だが、彼にはそこまでが限界だった。

とは言っても、魔法の存在を口外した所で信じてはもらえそうになりと瞬は噤んでいた口を開く。

「分かりません。もしかしたら、時間がかかるかもしれないし、何か消される条件があるのかも……。とにかく、今やるべき事はこの街から出る方法を探す事です」

「でも、もうこっちは行き止まりよ？どうするの？」

「……ドミトリーさん」

「なんだ？」

「昨日もこの街を通ったと言いましたけど、昨日何か見かけませんでした？いつもはなかった物があつただとか、見覚えのない人がいたとか」

ドミトリーはハンドルに置いた手を下ろし、昨日の事を思い出しているのか頭に手を当てる。

十秒ほど沈黙の時間が流れると何かに気付いた様にドミトリーはハツと顔を上げる。

「そういえば、昨日は町役場に見慣れない連中がいたな。体格のいい連中だったが、軍用トラックが駐車場に止められていた。多分、軍人かもしれない」

それを聞いて瞬の脳裏に今日の朝の事が浮かぶ。

ボリスを追ってきたらしい連中だったが、着ている物は軍服だった。確かに『W2』の影響力から言えば例え、軍といえど掌握していてもおかしくはなかった。

「町役場に行ってみませんか？何かあるかもしれない」

ドミトリーの話によれば町役場は今いる道をずっと戻り、元いた民家の通りと今いる道が交わる交差点の少し先にあるようだ。十字架に似た街の形で言えば頭の部分にまでいく形になる。

ドミトリーは車を進め、今来た道を戻り始めた。車内の雰囲気はとても重苦しく、誰も言葉を発せずに周りの様子を注意深く見ていた。

皆、この先どうなるのかと気が気ではないようだ。

そんな中、瞬だけ違う事を考えていた。

敵は何時攻撃してくるのだろうか、と。

街の外から魔力を感知した限りでは何人かの魔法使いがいるのは分かっていた。

仮にこのテリトリーを作り出す魔法の持ち主が1人だとするならば、他に感じていた魔法使いもこのテリトリー内に存在しているだろう。なにせ、彼らにとっての宿敵が畏にかかって出られなくなっているのだから。

逆に抜け出せない瞬にとっては手がかりが向こうからやってくるた

め、むしろ歓迎したい所だが何も知らない2人を危険に晒したくはなかった。

役場に着いた所でこっそりと抜け出すのを瞬は心に決めていた。

ドミトリーは頭に血が上って「やっぱりあいつだ！」と怒り狂うかもしれないが。

「うおっ！」

ドミトリーが叫んだ直後、車が急に止まった。

急停止で体が前のめりになった瞬だが、すぐに態勢を戻すとドミトリーを見る。

顔を青くして信じられない物を見たかのように目線は何も無い霧の中を見ている。

「どうかしたんですか？」

「血、血だ。道路に血が」

瞬が外に出て車の後ろを見てみる。

すると、確かに彼の言った通り、道路を横切るように血の跡があった。

血の跡はまるで何かを引きずったように太い線の周りに掠れる様な細い線が何本も出来ている。

掠れ具合からいくと右の方へと進んで行ってるようだが、深い霧の中でその姿は見えない。

これが敵の攻撃なのだろうか。

そう考えているうちにドミトリーとニキータも外へと出てきたが、血を見るとニキータの血の気が引いていく。

「な、なんで。どうして、こんな!？」

「そうだ、行く時はなかった、こんな血の跡なんてなかったぞ！」

「・・・何かがいる、んでしょね。これを引きずった何かがある！」

「お、お前、何で平気なんだ！どうして、そう淡々と血を見てられる！」

そう言われて自分でもどうしてなのだろうとふと瞬は思った。

確かについ数日前の自分なら彼らと同じ反応をしていただろう。

だが、最近の何度にも渡る戦いの中で血を見るのなど当たり前になり、血を見た位ではもう何とも思わない数日前とは変わった自分がいた。

これも『旅人』になった事で変わった1つの事なのだろう。

段々、元の自分から変わっていく事に多少の恐怖を瞬は感じたが、今はそうも言ってもらえない。

「旅をしているうちに何度か事件に巻き込まれて、血は見慣れているものですから。そんな事より、この血の跡は向こうに続いているみたいですよ。どうしますか？」

瞬は右側を指差して2人に問いかける。

だが、2人とも逆にそれを瞬に聞きたくて堪らないように押し黙る。意識はしてなかったが知らぬ間にこの中での主導権は瞬が握っていた。

瞬としては何が起きているのか確かめるために血の跡を追いかけた所だったが、2人を守るのが優先すべきだと考えていた。

銃を持ちながら挙動不審に辺りを窺っている2人に向かって瞬が振り向いた時だった。

道路の外に生える草を踏みながら何か近づいてくる音を瞬は耳の

中に捉えた。

それはこつちに向かつているのか段々と音がでかくなっていく。この血の跡を作った奴、ですかね。

瞬は2人に見えないよう麻醉銃を作り出すと、音のする方へと向け
て構える。

「何時の間に銃を!？」

「シツ!何かがこつちに来ます。2人とも早く車の中に」

ニキータは言われた通りにすぐ車の中へと戻ったが、ドミトリーはマカロフを抜いて瞬の隣に立った。

「お、俺は警官だ。一般市民を守るのは俺だ。お前が車の中に戻れ」

例え足が震えていようとも見えない恐怖に立ち向かってドミトリーはマカロフを構えた。

瞬はそれに感動を覚えながらも、彼の指示には従わずに彼の隣から動こうとはしない。

ドミトリーはまだいなくならない瞬に再度言おうとしたが、1人では心細すぎるために中々口から言葉が出ない。

そうこうしているうちに足音はすぐ傍まで来ているのが分かるほどでかく、そして霧の中に巨大な影が映った。

その影は身の丈は3mはあるつかという程でかく、横の幅も1m程あった。

この時点で2人の頭の中には該当するような生物など思いつきもしない。

即座に瞬は懐中電灯を左手に持ち、光を影へと照らす。

現れたのは赤い一つ目の人の形をした巨人だった。

巨人の体は歩くと揺れるほどの大量の脂肪で体中が覆われ、そのせいか歩くスピードは非常に遅い。だが、その体には大量の血が付着していた。さっきの血の跡を作り出したのはコイツだと2人は確信する。

「な、なんだこいつは……」

「来ますよ」

二キータは車内で悲鳴を上げているようだが、それにかまっている時間は2人になかった。

赤い一つ目が瞬達を捉えると巨人は2人へと向かってきたのだ。

「おい、止まれ！止まらなと撃つぞ！」

人の形をしていた以上、人かもしれないとドミトリーは叫ぶ。すると、意外なほど簡単に巨人は足を止めてしまった。

「な、なんだ、こいつ分かってるじゃないか」

意思の疎通ができる上にアツサリと命令を聞いたと拍子抜けした瞬間だった。実際は違っていた。

2人からは見えない死角となる巨人の背中で4つほど穴が開くと、そこから触手が生える様に伸びてきた。

そして、重い脂肪だらけの本体とは違い、素早い速度で2人へと襲いかかる。

「避けて！」

瞬は咄嗟にしゃがんで触手をかわしたが、油断していたドミトリー

はそもいかなかった。

一瞬にしてドミトリーの体へと触手が巻きつくと、成人男性よりも重そうなドミトリーを宙へと持ち上げる。

そして体を折るうとしていているかのように強い力で締め付けにかけ、ドミトリーは苦悶の表情を浮かべる。

「うぐおおっ！こ、の野、郎！」

ドミトリーは巨大な体めがけてマカロフを撃ち続けた。

乾いた発砲音の後に発射された9mmの弾丸が巨体へと突き刺さる。血も吹き出しているのだが、痛みを感じていないのか、それとも効いていないのかドミトリーを締め上げる力はまるで緩まない。

弱まるどころか強まる一方だった。

マカロフの弾は全てなくなってしまう、痛みで意識が混濁してきたドミトリーはマカロフを手から落とす。

立ちあがった瞬はすかさずドミトリーを捕まえている触手を引き剥がしにかかる。

だが、触手はぬめりが強くいくら掴んでも滑ってしまい力がこめられない。

瞬はサバイバルナイフを作り出すと伸びている触手を力任せに切り落とす。

すると1本では支えきれないのかドミトリーは下へと落ちたが、まだ残った1本がしぶとく締め付けていた。

すかさず切ろうとした瞬だが、その後ろから瞬に向かっていった触手2本が伸びる。

「くっ！」

瞬は咄嗟に盾を展開させて弾き飛ばそうとするが、触手は盾ごと掴もうと瞬の周りを円状に包み始める。

盾の中から触手を切り裂いた瞬は、足にあらん限りの力を込めて走りだす。

そして、走る最中にナイフでドミトリーの触手を切り落とすと、そのまま巨人へと体当たりした。

巨体ではあるが『旅人』の強化された全力の力は効いたらしく、巨人の体は数mではあるが宙を待つて地面へと叩きつけられる。

その間に瞬は下へと落ちたドミトリーの様子を見てみるが、痛みで意識が薄れかけているもの大丈夫そうだった。

起き上がるうとする巨人に向かって麻酔銃を構えながら瞬は対峙する。

ふと、その視界の端で動く物があった。

ドミトリーの車だった。

車はいつの間にか動き出し、その運転席にはニキータが座っていた。

「ニキータさん！」

青ざめた顔で瞬達を少しも見ずに車は前へと急発進する。

瞬が叫んでも車は止まらず、あっという間に霧の中へと消えていった。

そつちに気を取られている間に巨人は起き上がると、残っていた無事な触手を瞬へと伸ばす。

それに気付いた瞬は触手を盾で弾き飛ばしながらお返しとばかりに麻酔針を撃ちこむ。

麻酔針は確かに突き刺さったのだが、全く触手の動きは鈍くならない。

巨大すぎるから効いていないのか？

そう考えた瞬は何度も麻酔針を撃ちこみ、6本目が刺さった所でようやく触手が盾を締め付ける力が緩んだかと思うと、巨人は前後に揺れ始めるとやがて地響きを起こしながら仰向けに倒れた。

「ゲホツゲホツ！た、倒したのか？」

ドミトリーは咳き込みながら体だけ起こして倒れた巨人を見ていた。瞬はすぐさま、ドミトリーに駆け寄る。

「何とか。ただこの麻酔銃で眠っているだけなので、早く逃げた方がいいと思います。体は大丈夫ですか？」

「ああ、骨が折れてる感じはない。痛みはあるが打撲程度って所だ。……にしても、こいつは一体何なんだ？」

動かずに横たわる巨人はまるで呼吸する岩のようにでかい。試しに落ちていた木の枝でつついてみると、表面の脂肪が手の様に木の枝を掴み取り、吸いつくように離れなくなる。迂闊に触るとロクな事にはならなそうだ。

「おい、俺は頭がおかしくなったのか？現実にこんな奴がいるはずない！そうだろう？」

「……少なくとも僕は初めて見ましたよ。こんな生き物がいるなんておとぎ話や神話の世界です」

「くそ、こんな時まで気取った喋り方しやがって！……ん？俺の車は何処に行った？」

おそらくさつきまで意識が朦朧としていたためか、ニキータが車を運転していなくなったのはしらないようだ。

それを伝えるとドミトリーは見捨てて逃げた事に腹を立てて怒り、行き場のない怒りをたまたま立っていた民家の壁を殴ってぶつける。瞬からすればドミトリーも最もだったが、ニキータが逃げたのもあ

る程度はしょうがないと思っていた。

なんせ、得体の知れない化け物が一番頼りになるはずの警官を簡単に倒すのだ。

本能的に逃げたくなるのは分からなくもないことだった。

「車はどっちに行った!？」

「このまま真っ直ぐ行きましたから、おそらく町役場に向かったんじゃないでしょうか？ニキータさんがどこか別の隠れやすい場所を知ってなければ・・・ですが」

「ずいぶん含んだ言い方をするな？そもそも彼女はこの街に来た事はないと言っていたんだ。だったらおとなしく町役場に行ってるはずだろ」

「じゃ、僕たちも町役場に行きますか。幸い、車はそこらへんにもある事ですし」

確かに周りにはエンジンがかかったままほったらかしになっている車がある。

車を使えば割と早く役場にまで行く事は出来るだろう。

だが、瞬は良くてもドミトリーからすればできない話だった。

「俺に盗みをしろと言ってるのか？警官の俺に？」

「別に盗むとは言ってません。一時的にお借りするだけです」

「ふん！捕まったコソ泥がよくそう言い訳をしていたな！」

「今は緊急事態ですよ。警官の一時的な徴用とかないんですか？」

「うっ、そりゃあるにはあるが・・・」

頭では理解していても、まだ心の何処かで悪事を行うというように捉えているらしいドミトリー。

そんな彼に瞬は駄目押しの一言を付け加える。

「早くしないとコイツが目覚まして追ってきますよ」

「あれにするか、何してるんだ置いてくぞ？」

「・・・」

素早い代わり身に言葉の出ない瞬は、無言のままドミトリーに続いて普通乗用車に乗り込む。

すぐに車は走り出し、一路、町役場を目指した。

第26話：霧の街（2）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

前回から1週間で投稿してみようと頑張ってみた所、内容が若干薄くなってしまった気がします（・A・）

第27話：霧の街（3）

視界の悪い霧の中をニキータはアクセル全開で車を走らせていた。その顔は貧血を起こした人の様に真っ青で、目は脇目も振らずに前しか見ていないが焦点はまるで合っていない。

「早く、早く街役場に」

震えの止まらない唇で何度もそう呟きながら、車を走らせる。すると霧の中から突然、さっきの巨人が現れ、車に向かって触手を伸ばしてきた。

まさか2体もいるとは思っていなかったニキータは視界の半分を奪うほど巨大な怪物に悲鳴を上げる。

「キヤアアアアアッ！」

ニキータは反射的に大きくハンドルを切り、触手が車に触れる寸前でかわすと巨人を避ける様に道路から草の生い茂る地面の上を走る。巨人はすぐさま全ての触手を車へと向けたが、車はけたたましい音を上げながら猛スピードでその場から去っていた。

「はあっ！はあっ！はあっ！」

どうにかうまくかわす事ができたのだが、ニキータからすれば今の神業のような回避は同じ目に彼女があってももうできないだろう。だが、今のニキータにはそんな事を思い返す余裕すらない。

今は助かったが巨人は他にもいたのだ。

この先他にもいるのか見当がつかない上に、1体やり過ごしただけで彼女は疲れ切っていた。

とにかく安心できる場所に逃げる。

今の彼女の目的はそれ1つだった。

幸い、車を走らせているとすぐに街のど真ん中に位置する交差点が現れ、ドミトリーの言った通り、その先に他より2回りほどでかい施設のような建物が建っていた。

彼女はそれを見ただけで助かったような気分を覚え、否応なしに町役場しか見えない様に盲目した状態になる。

その直後、手前の濃い霧がうっすらと晴れていく。

彼女の視界の端にそれは確かに映っていたが、まるで気になっていなかった。

そこに待ち構えてたと言わんばかりに3体目の巨人が立っていたまでは。

彼女の中で希望が絶望へと変わる。

彼女は咄嗟に小さく悲鳴を上げながら巨人を避けようとしたが、もう遅かった。

巨人の体に斜めに車がぶつかると巨人は大きく揺れて足を止め、車はぶつかった衝撃でコントロールを失い、フラフラと黒い煙を上げながら進む。

ニキータは立て直そうとハンドルを何度も切るが車は立て直せず、そのうち目前に町役場が迫っていた。

ぶつかる！

慌ててブレーキを踏んだが近すぎたため全ての勢いを殺しきれず、車はブレーキの甲高い音を上げながら町役場へと突っ込んでいく。

3階建ての町役場はコンクリートを材料とした頑丈な造りだ。

だが、車は幸運にもガラス戸で造られた入口へと突っ込み、ガラスを割りながら受付カウンターへとぶつかった所でようやく止まった。衝撃によりカウンターはくの字に折れ曲がり、突き刺さる様に止まった車からはエンジン音が消える。

車のドアが開くとそこから震える手に変形したドアを掴む。

ニキータの細腕で力一杯引っ張ると、どうにか車の外へと出ること

が出来た。

エアバックが正常に働いたらしく、彼女に怪我らしいものはみられない。

だが、事故の衝撃で体はまともに動かないのか、まるで陸に上がった亀の様に這いずりながら奥へと必死になって逃げた。

今の巨人がいつ襲ってくるかもしれないという恐怖に彼女はパニックを起こしていた。

その場を静観している人物がいる事に気付かないほど。

吹き抜けになっている1階受付で慌てるニキータを2階から言葉も発せずにジッと見ている女。

女は黒の長い髪を1つに束ねて肩から垂らし、深い緑色の軍服に身を包みただ立っていた。

その顔立ちから中国系のようではある。

ニキータは見られていた事など知らず、机の間を這って進み、1番奥に控えていたでかい机の中へと隠れた。

おそらく少しだけ位の高い人物の机なのだろう。

ニキータが椅子を収める中に入ってもまだ余裕があった。

その中でニキータは必死に気を落ち着けて、息を静めていこうとする。

だが、何時やってくるとも分からない巨人にニキータの呼吸は全く落ち着きはしない。

それどころか表情から分かるほど心労はひどくなる一方だ。

もしかするとここにはこないかもしれない。

自分に言い聞かせる様に何度も何度も心の中で呟くニキータ。

実際、車から小さい物音が聞こえたりはするが、巨人の響く様な足音はまるで聞こえない。

車がぶつかってからおよそ3分が経過したが、辺りから聞こえるのは小さい物音だけだ。

そうよ、あの巨体でここにはいつてこれやしないわ！

全く来ない巨人にニキータは安心し、そう決めつけて机から出よう

とした時だった。

突然、机が一瞬にして宙へと舞い上がったのだ。

「え？」

彼女には何が起きたのかわからなかった。

出ようとした途端、急に視界が広くなり、机が消えていた。

訳が分からず、呆気にとられる彼女はとりあえず痛い体を起して立ちあがってみる。

すると、上から彼女の頭にボールペンが落ちてきた。

彼女はボールペンを拾い上げてみるがどこにでも撃っているごく普通のボールペンだった。

「何で上から？」

彼女は不思議に思いながら上を見上げると、そこにはさっきまで隠れていたはずの机があった。

その机に2本の触手が巻きつき、中から何かを出すように揺さぶっていた。

そこで彼女は思い出した。

あの巨人は入れないほど巨大な体を持つてはいたが、4本の自由に動く触手を持っていた事を。

2本の触手は机の中にニキータがいない事が分かったのか、巻きついていた机から離れると当然の様に机は落ちてきた。

ニキータに向かって。

「キヤアアアッ！」

まともに動けない体のニキータは悲鳴を上げながら咄嗟に手を前に出すが、それも机の質量の前では空しい努力だ。

机が直撃すれば、確実に重傷以上の怪我を追うのは間違いない。彼女は死を覚悟しながら目を閉じ、心の片隅で瀕死の父に助けると懇願する。

すると願いが通じたのか、机は彼女に当たる寸前で動きが止まり、回転しながら車の方へと飛んで行った。

何時まで経つても訪れない痛みには彼女は恐る恐る目を開く。

その目の前にはずっと2階で見ていた女と女と同じ軍服を着た筋肉隆々の男がいつの間にか立っていた。

落ちてくるはずの机を吹き飛ばしたのは男の様で、軽い運動でもしたかのように体の調子を確かめていた。

「え？あ、貴方達は？」

もうどうなっているのかニキータには分かり様もない。

2人はそんな彼女を無視するように町役場の入口を向き、そこから入ってきていた4本の触手と対峙していた。

4本の触手が獲物を見つけた様に2人へ向かって素早く伸びる。

咄嗟にニキータは頭を伏せて顔を覆う。

2人は特に驚いた様子もなく、女の前に男が立った。

男は手を前に出したかと思うと握った手をまるで拳銃の撃鉄の様に大きく後ろに引く。

そして、触手が全て男へと向かってきた瞬間、男は何かを殴りつける様に拳を突き出した。

「ぬうううん！」

唸りと共に突き出した拳は当然の様に何も無い空中で止まる。

だが、その拳が止まった瞬間、拳の周りの空気が歪んで見えたとおもうと拳からオレンジ色の光が放出された。

光は先に伸びるにつれ、拳の大きさから徐々に大きさを増してい

き、触手に届くころには触手全てを包み込むほどでかくなっていた。そして、その光と触手が触れた瞬間、光に触れた部分に火がついたかと思うと触手の形は崩れていき、あっという間に消し炭に変わる。伸び続ける触手は光の中へと自分から突っ込んで行き、次々に炭へと変わって崩れ落ちていく。

光も同様に伸び続けたが、その先に触手を伸ばした巨人がいた。動きの鈍い巨人は回避することもできず、光が下腹部の辺りに直撃すると触手と同じように火が付き、そして丸い形に焼け焦げた肉へと変わっていた。

消し炭になった肉が崩れると体の中心に向こう側が見える黒ずんだ穴ができていた。

巨人は悲鳴の様な叫びを上げながら暴れまわり、そして力尽きたのか地響きとともにその場へと倒れる。

まだ動いている巨人を見下ろすように男は隣に立つ。

そして腰からデザートイーグル（ハンドガン）を抜くと、銃口を巨人の頭に向けるとためらいもなく弾倉内の弾を全て撃ちこんだ。

ブヨブヨとした脂肪が比較的薄い頭を弾丸は簡単に貫き、血を噴き出しながら巨人は絶命する。

辺りに漂う焼け焦げた匂いと血の匂いにたまらず、女は鼻をつまんだ。

「全く、相変わらず暑苦しいわね。アンタも魔法も。この匂いもたまつたもんじゃないわ」

「うるせえ。お前こそ、相変わらず人をおちよくってるような顔と態度だな！いいんだぜ、この場で殺してやってもよ？」

「フフン、できるならね」

向かい合った相手との距離を一定に保ちながらも、お互いの出方を

窺う様に視線は相手から外さない。
立ち込める空気が張り詰めようとした時、落ちてきた机の陰から物音が鳴る。

「……まあ、今は許してやるわ。命拾いたわね」

「どつちがだ」

威嚇するように鼻を鳴らす男を余所に、女は物音の方へと歩いていくと机の物陰に隠れていたニキータを見つけた。
今までの一部始終を見ていたため、訳のわからない事の連続に体の底から怯えきっている。

彼女の眼からは目の前に立つ女も男もあの巨人と変わらない怪物に映っていた。

「た、……たすけ、て」

震える唇でどうにかそう発音したが、それを聞いた女は満足した様な笑顔を浮かべる。
と言っても、どこか含みのあるどす黒さを感じる笑顔だったが。

「安心しなさい、助けてあげる」

拍子抜けなほどアッサリと言う彼女だったが、その言葉にニキータは安堵をおぼえる。

助かった!?

ニキータにこの悪夢のような出来事の中で一筋の希望の光が見えた。神に感謝しながら立ちあがるうとするニキータに女が手を差し出し、立たせる手助けをしている時だった。

女の瞳が黒く輝く。

立ちあがったニキータを腕で引つ張って引き寄せ、バランスを崩した彼女の眼を女は片手で両こめかみを掴んで塞ぐ。突然の出来事にニキータは慌てふためき、こめかみを締め付ける女の力に必死で抗おうとする。だが、女の腕はまるで万力の様にどうやっても動かないし力も緩まなかった。

「い、痛いっ！？やっ、めてっ！助けてっ！！」

「ええ、助けてあげるわよ。私の力でね！」

女がニキータを持つ腕に更に力を込めると、それに合わせて淡く青い光が手からあふれ出す。

ニキータにはこれが魔法である事自分分かってはいなかった。

だが、確実に何かよくない事が起こるのだけは分かっていた。

それは塞がれた視界の端から笑っているのか、端の釣り上がった女の口だけが見えていたからだ。

ニキータの不安が高まるのに合わせるかのように、光は徐々に強くなっていく。

そして、その光が手からニキータへと伝わっていくと、次第に彼女の頭が同じ青い光を放ち出す。

「やめて！い、いやーっ！！」

彼女の頭にまで侵食した青い光が頭の中へと入り込み、彼女の意識を蝕み始める。

どうすることもできないニキータは恐怖に怯えながら暴れるが、女の手から頭は離れない。

そうしているうちにニキータは寝ているかのように意識がぼやけ出し、最後には気絶したのか暴れて振りまわしていた手が力なく垂れ

る。

女の手から青い光が消え、女がニキータを掴んでいた手を放す。意識のないニキータは受け身も取れずに地面へと倒れ込んだ。

「終わったのか？」

「これからがメインよ」

女は素気なく男の問いに答えながら、横たわるニキータを見下ろして邪な笑いを浮かべていた。

霧の中を町役場目指して走る車の中で、ドミトリーは得体の知れない巨人に毒づいていた。

「ちくしょう！あいつめ！締め付けてくれたおかげで腹がいてえ！」

「ちよつと失礼します」

助手席に座る瞬は触手が巻きついていた辺りの服をめくってみる。すると、その太り気味な腹には何本もの太い筋のあざがクッキリと残っていた。

それだけあの巨人の触手は力を持っていたという事を示している。

「これはひどい・・・、痛みますよね？」

「当たり前だ！叫びながら地面の上を転がりたいくらいだ！後に

なっってから痛みやがるなんて、くそつたれめ！」

「今は我慢してください。町役場についてから手当てしましょう」

「言われなくても分かってるよ！お前ってやつは、本当に！」

苛立つ奴だ！

痛みにはら立つドミトリーの息は荒く、気分も悪い上に怒りもたまっていた。

それをぶつける様に瞬に向かつて叫ぼうとしたが、さっき助けもらった手前、その寸前で思いとどまり言葉を呑みこむ。

「？なんです？」

「なんでもない！それよりお前の持つてる銃はなんだ？なぜ、旅行者がそんな物持つてる？」

「旅行している間は常に危険があるので、自衛手段としてです。言っておきますけど、決して犯罪に使ったりはしてませんよ」

「つけ、どうだかな。・・・まあいい、今はそいつのおかげで助かったんだ。深くは聞かん。とりあえず、普通の銃じゃ奴には効かないようだし、またアイツがきたら・・・！！奴だ！」

ドミトリーが声を荒げて、目を見開く。

道路上に霧の中から巨人が現れ、ドミトリーは瞬時にハンドルを大きく右に切った。

止まらない地面の上をドリフトしながら滑るように巨人をかわしたが、巨人の伸ばした触手の1本が車に巻きついた。

巨人は止まらない車に最初は引っ張られて倒れそうになった物の、

その場で踏ん張って車を無理やり止め、他の触手も車へと巻きついた。持ちあがり始める車の中で瞬はすかさずドアを開け、痛みのおかげで動きの鈍いドミトリーを引っ張るように車から飛び降りる。無事にドミトリーを抱えながら着地した瞬。

その間に車は高く持ち上がり、5mも上がったかと思うと巻きついた触手が一齐に締め付けた。車は悲鳴の様な軋む音を上げ、次の瞬間にはスクラップへと変えられる。

信じられない力にドミトリーは啞然とするが、そこを狙う様に車に巻きついてきた触手が離れた。

「危ない！」

瞬はドミトリーを抱えてその場から飛び退き、その直後、上からスクラップと化した車が地面に刺さるように落ちてきた。

巨人は獲物を仕留められなかったのを理解しているらしく、瞬に向かって4本の触手を伸ばす。

「お、おい！どうするんだ！？」

「ごうしましょう！」

「んおっ！？」

瞬は両手を塞いでいたドミトリーを上へと軽く放り投げる。

慌てふためくドミトリーを余所に、作り出した麻酔銃を両手に持ち、立て続けに3連射ずつする。

銃に関してはまだ素人の域を出ない瞬だが、『旅人』の力でトリガーを引く指の動きは早く、そして銃の反動は馬鹿げた怪力でまるで

感じない。

触手が瞬へと届く寸前、放たれた6発の麻酔針は巨人へと突き刺さる。

麻酔針から流れ出た麻酔は瞬時に巨人の体を抗う事の出来ない睡眠へと誘い込む。

強制的に本体が夢の世界へと連れて行かれ、それに同調して触手も力なくその場へと落ちた。

その直後、瞬は麻酔銃を消して腕を前に差し出すと、そこに悲鳴を上げながらドミトリーが落ちてきた。

よし、何とか出来た。

うまく出来たと自画自賛な瞬だったが、腕の中にいるドミトリーの表情は強張っていた。

無理もない。

いきなり持ち上げられた車並みの高さまで投げられ、またそこから下へと落ちたのだから。

「はあっはあっはあっ・・・、お、お前、覚えてるよ!」

「あ、どうもすみません。ちょっと両手が塞がっていたものですから。ほら、何とか倒せましたよ」

落ちる最中に下の事など見る余裕がなかったドミトリーは瞬の指差した方を黙って見る。

すると確かに巨人は倒れ、寝ているのかいびきを上げていた。

くそ、こいつは本当に気にくわねえ!

何か変な事をしていながらも、気がつけばちゃんと助けになっていく瞬間の事がドミトリーは気に入らなかつた。

流暢なロシア語でありながら丁寧な言葉遣いでしゃべる東洋人という得体の知れなさも理由の1つだが、1番の理由は警官の自分より、この軟弱そうな奴の方が強いということだ。

ただ、今の訳のわからない状況で冷静に行動し、初めて見た化け物を倒してしまう頼れる存在でもある。

ドミトリー自体は否定していても、心の奥底の本能では瞬を頼っていた。

「うち！おい、いい加減俺を下ろせ。何時までもお姫様だっこなんざ、やっててもらいたくもねえ」

それもそうだと瞬はすぐにドミトリーを下ろす。

ドミトリーはその足で車を見るが、残念ながら完全に動かないようだ。

「車は無くなった。周りには他の車も見えねえ、歩くしかないな」

「そうですね、まだ距離はあるんですか？」

「いや、ここからなら歩いて5分とかからないだろう。またコイツらがでなければな」

ドミトリーは寝ている巨人を指差す。

さすがに一番最初に出くわしたのは違う巨人である事を2人も分かっていった。

となると、最低2体はいる事になるが、そうになると他にもいる可能性は高い。

ここから町役場までの間に何体の巨人がいるかは分からないが、それでも行くしかなかった。

2人は麻酔銃を持ちながら辺りを警戒しつつ、慎重に足を進める。いつ出てくるとも分からない巨人に2人は緊張しながら進み続け、その霧の先に赤く点滅するランプが見えた。

ゆっくりと寄ってみると、霧の中から巨大な建物が現れ、それが町

役場である事はすぐに分かる。

ドミトリーは頑丈な作りの町役場に多少の安堵感を覚えたが、中に入ろうと事故現場の様な入口から入ると、スクラップ同然の彼の車が彼を出迎えた。

さつきから光っていた赤いランプはこれが正体だった。

「・・・もしかして、これは俺の車か!？」

「残念ながら」

「ああ、くそ！まだローンも払ってないってのに！あの女！」

およそ警察官とは思えない様な言葉を吐きながら、ドミトリーは車のトランクを開ける。

その中には工具やスペアタイヤの他に、ベネリM3（ショットガン）とその弾薬の箱が転がっていた。

ドミトリーはベネリM3を手に取りると弾薬を装填していき、残った弾薬をサイドパックに放り込む。

「よし、こいつならあんなデカ物でもいける！もらっておいて悪いがこいつは返すぜ」

ようやく瞬を頼りにしなくても済むと分かったドミトリーは、笑顔付きで麻醉銃を瞬へと返した。

だが、瞬は何か別な事を気にしているのか、彼とは視線を合わせずに受け取る。

それがドミトリーには引つ掛かった。

「おい、どうかしたのか？」

「この臭い、まるで肉が焼け焦げた様な臭いだと思いませんか？」

「臭い、だと？」

言われてドミトリーも嗅いでみると、確かに鼻がひん曲がりそうな焦げた臭いを嗅ぎとる。

ドミトリーにはこの臭いに覚えがあった。

過去に担当した事件で焼死体が発見された時と同じ臭いだった。

その時は夜勤明け間近であったため、1人で報告のあった森の中を捜索していて発見した瞬間、見るのと同時に吐いたのを彼は思い出す。

瞬は麻酔銃を構えながら奥へと入るが、中は車がぶつかったせいもあり、まるで廃墟の様に荒れ果てていた。

台風が直撃してもこうはならないだろう。

ゆっくりゆっくりと1歩ずつ足を踏み出し、何かがいないか確認して回る。

ドミトリーもそれに続こうとしたが、ふと小さい呻き声のような声に気付いた。

聞き覚えのある声にドミトリーは慎重な瞬を余所に奥へと走り出し、潰れて壊された机の裏にベネリM3を向ける。

すると、そこには意識が無いのか目を閉じて横たわるニキータがいた。

「ニキータだ、彼女がいたぞ！」

その言葉に瞬は警戒を解いて奥へと走り、横たわるニキータに駆け寄った。

体に傷らしいものはなく、体を揺すってみるとニキータの瞼は寝ぼけているようにゆっくりと開いた。

「あれ・・・、ここは？」

「大丈夫そうですね。よかった」

「つけ、ちつともよかねえ。勝手に逃げ出す上に俺の車を壊しまうし」

「ドミトリーさん」

「つけ」

「・・・！そうだ、私！ごめんなさい！あの時はっきり2人が殺されたと思って、怖くなって、それで・・・」

「いいんです、気にしないでください。あの状況だったら仕方ないでしょう。それより、一体何があったんです？」

瞬は壊れた車の方を見ながら視線を壊れた机に向ける。

車までならおおよその見当はつくが、この真ん中からへし折られる様に曲がった机は明らかに事故とは関係が無い。

思い当たるのはさつき見た、巨人が車をスクラップにする場面だった。

何時壊されたかは分からないが、まず巨人の触手によって机は壊されている。

そして、辺り一帯にある焼け焦げた臭い。

何が此処で起こったのかを想像するのは後から来た2人には難しかった。

てつきりその答えが聞けるものだど期待していた2人だったが、ニキータは困った様におろおろしながら期待外れな返答をした。

「分か……りません。どうしてこうなったのか、どうしてここにいるのかが分からないんです」

「事故のせいで記憶が飛んでるのかもしれねえ。あれだけの事故で外傷が無いのは奇跡的だが、頭を打ってりやそうなる」

「ちょうどいいですから、2人とも治療しましょう。さっき偶然救急箱を見つけました」

そう言つて影でこっそり作り出した救急箱を瞬は手渡す。

たまたま最初に入った家で棚に入つた救急箱を見ていたため、書かれている文字もロシア語だった。

ただ、文字の方はどうやら翻訳が出来ないのか、瞬が見ても何と書いてあるかは分からないようだ。

「それで治療しててください。僕は少しここを離れます」

「お、おい、どこに行く気だ？」

「他の部屋を調べて役立つものでも探してきます。僕は怪我也も打撲もしてませんから」

念のために麻醉銃を1丁ニキータに手渡し、ニコリと微笑んで瞬はロビーを後にすると廊下の奥へと足を進める。

当然ながらここにも人気はなく、不気味なほど静まりかえっていた。ドミトリーの話からすればここが閉じ込められた領域を作り上げたのと何かしら関係があるはずだ。

とは言つても姫やロビンならまだしも、瞬には何を探せばいいのか検討などつかない。

何せ魔法に関しての知識は初心者にも毛が生えた程度でしかないのだ。

とにかく手当たり次第に回ってみるか。
そう決めた瞬間は目についたドアを開けて中を見て回り、次々と奥へ進んで行った。
残された2人は反論する間もなく消えてしまった瞬間にそれぞれの反応を示していた。

「勝手な奴だ。っち、怪我が痛みやがる」

「あ、私が見ます。そこに横になって下さい」

ドミトリーは腹の服をまくりながら横になる。

現れたあざにニキータは口を手で覆いながら小さい悲鳴を上げた。

「これ、もしかして、さっきの?」

「そうだ。俺が持ち上げられて絞殺される寸前だった時の跡だ」

ドミトリーがそう言うと、ニキータは押し黙って下を向いた。

「……ごめんなさい」

「何がだ?……あ!い、今は違うぞ、皮肉じゃないぞ!アンタを攻めたつもりはない」

「それでも、申し訳なくて」

「……なら、手当てしてくれりゃチャラってことにしよう。それでいいか?」

「はい!」

俯いた顔を上げ、ニキータは瞬から手渡された救急箱からコールドスプレーを探し出す。どす黒く変色したドミトリーの患部にペンキを塗るようにスプレーをまんべんなく拭きつける。拭きつけられたガスがあざの部分に染み込み、染みる痛みをドミトリーは声にならない声を上げて耐える。その調子で、全ての治療が終わった頃にはドミトリーは息を荒げながら疲れ切っていた。

「はい、終わった。助かったよ、ありがとう。それでアンタは怪我か痛む所はないのか？」

「いえ、私は・・・あれ、そう言われるとなんだか頭が・・・」
そう言いながらニキータは腰をつき、力なく壁へともたれかかる。突然の事にドミトリーはまだ痛む体を起して彼女の両肩を掴んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

「頭が何だか痛くて・・・」

ドミトリーは慌てて救急箱の中を探し、頭痛薬があったのを見つけるとそれを手に取り、顔を上げた。すると、その目の前が一瞬で真っ暗になり、また両こめかみに痛みが走る。

顔に触れるのが人の皮膚であったため、彼は誰かに掴まれているのに気付いた。

ニキータ？彼女がこんな事を！？

そう考えていたドミトリーだったが、実際は違っていた。

吹き抜けの2階に足をかけ、そこから体を下へと垂らしていたのはニキータを襲った女だった。女はニキータを襲った時と同様にドミトリーを掴む右手に力を込め、次第に青い光が溢れだす。目の前が青くなつたのに訳のわからない危機感を覚えたドミトリーは、力づくで腕をはがしにかかる。だが、女の細腕とは思えない、まるで屈強な男並みの力にドミトリーだけの力だけでは外せない。

「やめ、ふぐっ!?!」

力が駄目ならと言葉で訴えかけようとしたが、口ももう片方の手によつて塞がれてしまう。

「困るのよね、騒がれると。彼に気づかれちゃうでしょう?」

「!?!」

聞きなれない女の声にドミトリーの動揺はさらにでかくなる。

その間に光はドミトリーの頭の中を侵食し始め、ドミトリーの意識も遠のいていく。

く、くそつたれめ!

その状況下で出せる力を使って、ドミトリーは肩から吊るしていたベネリM3に手をかける。

彼を掴む腕に銃口を向けて震える指で引き金を引いた。

だが、寸前の所で突然現れた別の手が銃口を下げ、散弾は机に幾つもの小さい穴を開けるだけに終わった。

もう、だめ・・・だ。

青い光が一際光るとドミトリーの意識は深く沈み、女の手からも光が消える。

ドミトリーは膝をついてその場で倒れこむ。
意識のない彼の眼に最後に映ったのは、ベネリM3の銃身を掴んで
いたニキータの手だった。

第27話：霧の街（3）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

大分時間がかかってしまいました。

忙しい日休みだけだと完全にだらけて他のことばかりしてる

ダメ人間です（・A、）

それはそれとして、どなたか分かりませんがお気に入り登録ありがとうございます。

とりあえず、これで大分前に書いた今年の目標は達成できました！

自分の趣味で書いてるものなのでもらえただけ感激です。

でも投稿スピードアップしないのはにせざるご仕様なのでなんとも・

・（・A、）

第28話：霧の街（4）

突然の銃声には瞬は探索の手を止め、急いでロビーへと向かった。

巨人が来た！？くそ、これなら2人を置いておくべきじゃなかった！
そう考えながら地面を踏み抜きそうなほど力強く、廊下を常人など
軽く超えるスピードで駆け抜ける。

その視線の先にロビーが見えると瞬は勢いよく中へと飛び込んで床
の上を何回か転がり、止まったその場で麻酔銃を構えた。

だが、ロビーには巨人がいる訳でもなく、出た時と何も変わっては
いない。

机が壊れている場所に2人はいたが、飛び込んできた瞬に驚いてい
る様子だった。

「ドミトリーさん！ニキータさん！銃声がしましたけど大丈夫・
・だったんですか？」

「あ、ああ、何でもない。うっかり引き金を引いちゃっただけだ
腹がきつめに巻かれた包帯で覆われたドミトリーはそう言った。

確かに空になった薬莢が床の上に1つだけ転がり、机に幾つもの散
弾の跡が出来ていた。

「怪我は？」

「何でもない、そう言っただろう」

「？」

どことなく瞬はドミトリーに素気ない感じを受け、不思議に思う。

彼の性格ならば皮肉の1つでも返してきそうだがそれは全くなく、まるでこの話題を早く終わらせたいかの様な雰囲気だった。間違つて撃つたから気まずいみたいですね。

その瞬間が思っていると、ドミトリーは目つきを細めて瞬に訊ねる。

「それより何か見つかったのか？使えそうな物は？」

「残念ですが特になかったです」

「そうか。待っている間にこの町役場の地図を見つけた。こいつによるとここには地下室があるらしい」

「なるほど、地下ならでかい体も入ってこれないし、触手も届かないかもしれない」

「そういうことだ。しょうがないが今日はそこで1晩明かす方がいいだろう。状況が状況だ、アンタの親父さんには悪いがそれでいいか？」

「はい・・・」

ニキータは力なく頷き、青白い顔をして立ちあがる。

事故の打ち身もあつてよろける彼女をドミトリーが支え、瞬が先頭に立つとその後を2人が歩く形で地下室へと向かつて来た道を戻る。ドミトリーの話では、その先に階段があるという事だった。

だが、窓1枚を境界線に外に面している廊下は、外から丸見えで襲うには絶好の場所でもある。

巨人は今の所は外にいないようだが、銃声を聞きつけていつ現れるか霧のせいで分かりはしない。

「僕が先に行きますから2人はゆっくり来ててください」

「分かった」

瞬は麻醉銃を構えて身を隠すように姿勢を低くする。

そのまま足早に先へと小走りに進み、中ごろまで来た所で外を覗き込む。

何も・・・いないですね。

2人に手招きすると、2人はゆっくりと歩き出す。

早く来てほしいと辺りを警戒する瞬が願うものの、怪我人には無理な願いだ。

それでもどうにか瞬の辺りまでたどり着き、瞬が先導して先を行こうとした時だった。

霧の中から何本もの触手が一斉に飛び出してきた。

「2人とも走って！」

叫ぶ瞬に急かされて2人は懸命に先に進むがその速度はやはり遅い。瞬は麻醉銃を撃ち続けるが、触手の奇怪な動きにまるで当たらない上に触手の数はゆうに10は超えている。

ロビンならば簡単に撃ち落としただろうが、今の瞬には出来る事ではない。

「食らえ！」

ドミトリーが間近に迫っていた何本かの触手に向けてベネリM3を構える。

引き金を絞るとショットシェルから吐き出された幾つもの小さい鉛の弾が触手を襲い、迫っていた触手をまとめて弾き飛ばす。

本体とは違い、触手は銃弾で傷つき、小さい穴が幾つも空いていた。

その穴から出る赤い血は暴れまわる触手からまるで血飛沫の様に飛び散る。

「へっ、こいつならいけるぜ！」

そう言っ得意げな顔をしながらドミトリーはベネリM3を瞬へと放り投げた。

慌ててそれを受け取った瞬は姫に教わった通り、ポンプアクションで次弾を装填し、迫っていた触手に向けて引き金を引く。

迫っていた触手は一瞬で吹き飛び、瞬は次々に迫ってくる触手を撃ち落とす。

だが、痛みがあるのか地面の上で暴れまわる触手から傷が埋まるようにして消えていく。

そして、傷の消えた触手はまた何事もなかったかのように瞬へと襲いかかる。

「自己再生している!?!」

「くそつたれな触手だ!おい、俺のサイドポケットから弾を」

ドミトリーが体ごと向けたサイドポケットからショットシエルを瞬は掴み取る。

おぼつかない手つきで弾を込めてはすぐに撃つのを繰り返し、どうにか触手が来るのを抑えてはいる。

「先に行ってください!僕も後から行きます」

「分かった!頼むぞ!」

「はい!」

ドミトリーはニキータを連れて階段へと向かって歩く。そっちに触手が行かないよう瞬自身も少しずつ移動しながら、撃退し続ける。

ようやく2人が階段にまでたどり着いた。

瞬もすぐにそちらへ行こうとしたが、業を煮やしたのか霧の中から巨人の本体が続々と現れ始めた。

現れた合計3体の巨人は触手を操りながらその重そうな巨体を動かし、町役場への距離を詰めていく。

まずい！

触手の相手で動けない瞬の前に1体の巨人が立つ。

そしてその太い腕を町役場を壊しながら瞬へと伸ばす。

瞬は咄嗟に2人が見ていない事を祈りながら盾を展開し、弾切れのベネリM3を捨てて麻醉銃を2丁生成した。

伸ばされた腕が瞬を掴もうとするが、見えない『イージスの盾』によって阻まれる。

巨人は構わず握り潰しにかかるものの強固な盾はまるで変形することもなく、その中で瞬は麻醉銃を構える。

次々に突き刺さる麻醉針が巨人の体へと浸透し、次第に巨人の体から力が抜けていくと同時に瞬を潰そうとしていた手も緩む。

瞬はすかさず盾を解除して飛びだすと、右手で作り出したAA12（オートマチックショットガン）で触手を撃ちながら、左手の麻醉銃を残っている巨人へと撃ち続ける。

残った巨人達は町役場へと近づく事もできないうちに地面へと倒れていく。

それに連動して触手も地面へと落ちていき、動く者は瞬だけとなっていた。

「ふう・・・、お、終わった？」

辺りを見回しても他の巨人は見えない。

瞬は安心してAA12を消して、2人がどうなったのか階段の方を振り向いた。

そこに2人の姿はなく、先に行っただと思っただ瞬は見られていない事に安堵する。

2人に追い付こうと歩き出す瞬。

だが、階段の見えない死角に2人は立っていた。

その目はどこか虚ろではあるが、ついさっきまで瞬の戦闘をその目でしっかりと捉えていた。

ただ、まるで催眠術が解けたように2人は我に返ると、何事もなかったように下へと向かい始める。

2人には意識のない空白の時間が存在していたことすら自覚はなかった。

霧で足場すらまともに見えない町役場の屋上。

そこに中国系の女、フェイリンと筋肉が盛り上がっているロシア系の男、マクシムはいた。

手頃な高さの換気ダクトの上でフェイリンはノートPCを操作し、マクシムは退屈そうにそれを見ていた。

「パソコンなんて使わずにさっさとあいつ等に『旅人』を襲わせたらどうだ？」

「いかにも筋肉馬鹿な発想ね」

「うち、うるせえ。てめえも『旅人』と一緒に始末してやるうか？ あん？」

フェイリンは呆れた様な顔をしながら手早くPCを操作する。役場内のネットワークに侵入し、使えそうなデータを抜粋していく。そうして画面に現れたのはこの町役場の見取り図に、役場内の監視カメラからの映像だった。

ちようど『旅人』の一行が目的の地下室にたどり着いたらしく、頑丈そうな鉄のドアを閉めている場面が映っていた。

「予定通り地下室に入った。後は隙をついて殺るだけよ」

「俺が行けばすぐ終わるのによ」

「貴方が倒されて、ね」

「・・・上等だ。まずはめえから消してやるよ」

「あら、やる気？」

マクシムは右腕を大きく後ろに引き、フェイリンは両手に青い光を灯す。

互いの顔を睨みつけながら対峙し、空気が徐々に張り詰めていく。2人とも隙あらば相手を殺そうとする意思は揺らぎなかった。

ただ、お互いの手の内を知り合った仲間同士、どちらも手を出すことなく時間は過ぎていく。

不意にマクシムが口を開いた。

「大仕事の前に無駄に魔力を使うのも困る。いいか、今は見逃してやるがいずれ必ず殺す」

「あつそ、期待しないで待ってるわ」

「つち、イラつく女だ」

「あなたもね」

2人はお互いに顔を背け、フェイリンはPCへと視線を戻す。どうやら瞬達は積んであった缶づめで遅めの食事を取っているらしい。

しばらくは動けないわね、もう少し様子を見てから・・・か。

そう考えたフェイリンは手首に付けたデバイスのスイッチを入れる。

「21時40分、『旅人』が地下室に移動。屋上にて監視中。作戦は『旅人』の様子を見て実行に移す」

現在の状況を手短に言うと、レコーダーのスイッチを切った。

「つち、このテリトリーのせいで定時報告が外に送れねえからって、わざわざレコーダーまで持つてくるとはな」

「やけにつつかかるわね？」

フェイリンはこの任務が始まってからというものの、事あるごとにくっつかかるマクシムにいい加減うんざりしていた。

元から組織内部でも不仲ではあったが、今回の任務中はそれにも増してひどい。

イラつきを表すように声に不快感を出すと、マクシムはもたれかかっていた壁から背中を放す。

「別に。ただ、俺はお前と組むのが嫌なだけだ。何だって軍事部と諜報部が共同戦線を張らなきゃならんだ？」

「・・・はあ、私も嫌に決まってるけど、しょうがないでしょ。統括長直々の命令なのよ？アンタにあの人に逆らえる度胸がある？」

途端にマクシムはその不満を漏らす口を紡ぐ。

彼が以前聞いた話では、アジア統括長に不満を募らせた者はアジア統括長の部屋に呼ばれて以降、その姿を見た者はいないと言う。

噂では魔法の生体実験の実験体にされるとも、永久凍土の中に埋められるとも言われていた。

今回の任務も当初はお互いの部署が反発しあっていたが、アジア統括長の一声で丸く収まってしまったのだ。

だが、今は『旅人』抹殺のプレッシャーからか定期的に胃薬を飲み、日に日に体はやせ細っていくのを部下達は見ていた。

元々、ストレスなどとは無縁の生活を送っていただけにその勢いは坂を転げ落ちるように早い。

ところがそれでもなお、眼光の鋭さは消えず、陰口でもばれようものなら殺されかねないと沈黙の日々を部下達は送っていた。

「逆らう気はないね。下手すりゃ死ぬ事がうらやましくなる事にもなりかねねえからな」

「だったらおとなしく作戦まで待っていたら？アンタと一緒に死ぬなんて真つ平ごめんよ」

マクシムは小さく舌打ちをすると黙ったまま、食事を始める。

フェイリンは小さく息をつくとPC画面へと視線を移す。

それ以降はお互いに口を閉ざしたまま、相手の事には干渉しないように時間は過ぎていった。

マクシムはただ黙々と携帯食料を食べ、フェイリンはどんなささいな事も見逃さないようPCから目を離さない。

このまま作戦が始まるまで口は閉ざされたままかと思われたが、不意にマクシムが口を開く。

「・・・俺が今回の作戦を気に入らない理由がもう一つある。お前はこのテリトリーを作った奴を知ってるようだが、俺は知らされていない。こいつぁ、どういうことだ？」

「簡単な話よ、出来るだけ『旅人』に情報を与えたくないだけ」

「そうかいそうかい。まあいいさ、これだけの規模の隔離されたテリトリー、それも何体もの巨人を徘徊させる空間を作り上げる魔法使い。コイツはどう考えてもトップシークレットクラスだ。知ろうとすればアジア統括本部丸ごと敵に回すようなもんだ」

それを聞いたフェイリンは意外そうな答えに驚く。

「あら、てつきり力ずくで聞きだしにくると思ったのに」

「そこまで馬鹿じゃねえ」

「ふん、それで正解よ。私も詳しい話は聞いていないけど、100年に1人レベルの天才らしいわ。当然、魔力の保有量も群を抜いているようよ。幼少のうちに才能を見抜いた統括長が秘密裏に育ててきた魔法使いと聞いている」

「ほう、そんな奴がいたとはな。それで、そいつは『旅人』には見つからないのか？」

「大丈夫よ、安全な場所にいるから」

それ以上の情報を出す気はないのか、フェイリンは会話を終わらせる方向に持っていく。
マクシムもそれには気付いたのか、さっきの発言を裏付けするように後を追う気はなかった。

テリトリー内にいる間はいつかは顔を合わせる・・・だろうな。

そう遠くない未来の事を想像しながら、マクシムは煙草に火をつけて深く煙を吸い込む。

そして、吐きだされた煙は緩やかな風に乗って霧の中へと吸い込まれる様に消えていき、時は作戦の時間へと向かって進み続けていた。

地下室に籠っている瞬達は、ドアを中に積んであった木箱などで塞ぎ終えていた。

これで簡単には外から侵入はできないだろう。

だが、逆に言えば、中から外に出るのも難しい。

また2人を置いたまま探索に向かおうとしていた瞬だったが、それによって否応なしに足止めを食らう事になった。

幸い、逃げ込んだ地下室は災害時の備品が蓄えてあり、食料、水などの他にもテントや毛布があった。

立てこもるには絶好の場所だともいえる。

とりあえず、缶詰での食事が済んだ3人は床の上に毛布を引いてその上に座っていた。

瞬はベネリM3の調子を見ているドミトリーとこれからの事について話をしていた。

ニキータは事故の後遺症があるのか、体調が悪いらしく敷いた毛布の上で横になっていた。

もう眠っているのか呼吸の音しか聞こえない。

2人は彼女を気遣って小声で話を続けていた。

「それでこれからどうするつもりなんですか？」

「さあな、ここで朝まで待ってみるしかないだろ。ここならあいつ等も入ってこれないが俺達からは外の様子も見えやしねえ。たまたま災害用の備えが幾つかあったからいいが、外からの救助を当てにしてここにずっといた所で・・・」

「巨人がいるとあまり期待できそうにないですね」

「そうだ、それなら俺達だけで逃げ出す手段を探すしかないだろ。この町役場に何か手掛かりはあるかもしれないが、俺達は怪我人でおまけに使える武器はコイツとお前の麻酔銃位だ。しかも俺の方の弾薬はコイツに入っている分で最後だ」

ドミトリーは点検し終わったベネリM3を構えて見せる。

サイドパックに突っ込んだ弾は全てベネリM3の弾倉の中に入り、余分な弾は1発もなかった。

弾、いや、もつと強力な銃器をも作り出してあげたい。

そう思う瞬だが、魔法について何も知らない彼の目の前でそれは出来なかつた。

出来れば1人で探索した時にでも見つけたと言って手渡したいが、今は残念ながら死角を作れるだけ離れられるスペースすらない。

「お前、確か2丁持っていたよな？さっきは返しちまったけど、やっぱり貸してくれるか？」

「いいですよ、弾もついでに渡します」

そう言うと瞬はドミトリーから見えない様に麻酔銃と弾を作り出し、

さも腰に差していた麻醉銃を抜いた様に死角から取り出してみせる。それを麻醉銃用の弾が詰まったマガジンもつけてドミトリーへと手渡す。

「・・・なあ、お前はなんでそんな物まで持って旅を続けているんだ？」

麻醉銃を持つ旅行者など聞いた事のないドミトリーは、前から思っていた疑問をぶつける。

「なんで、と言われると・・・」

一方、そう言われた瞬は頭の中に姫との最後のやり取りが浮かぶ。姫の姿は見えない最後だったが、彼女とかわした言葉を一字一句として瞬は忘れていなかった。

彼女が最後に『W2』を潰してほしいと願った理由までは今はまだ分からない。

だが、それでも彼女の願いは瞬の中でやらなければいけない事として心の奥底に深く根付いていた。

「命の恩人と交わした守らなければいけない約束・・・のためですかね」

「ほう、そりゃ興味深い。約束の内容やそれをしたのは」

「残念ですが内容は話せませんし、約束をした訳も言えません。ただ、今の僕にとっては生涯を賭けてでもやらなければいけない事なんです」

「ふん、それなら聞きやしねえよ。だが、その約束とやらを果た

すためにまずはここを出なきゃならんがな。とりあえず、俺は寝る。お前もとつと寝るんだな」

そう言うとドミトリーはベネリM3を傍らに置いて横になる。

しばらくするとドミトリーからいびきが上がり、完全に眠ってしまったようだ。

よほど疲れていたのか眠りにつく速さはかなり早かった。

瞬もそれにならって横になると、目を閉じて眠りにつくこうとする。

本来、不老不死である『旅人』は寝ないでもずっと活動は可能だが、瞬は出来るだけ人間らしい行動を取っておきたかった。

何も知らない2人のためだ。

もう常識では考えられない出来事にかかわってしまったが、これ以上関わるのをどうにかして止めたかった。

少なくとも自分自身がそのきっかけにならないよう気をつけようと言いつた。

いくら睡眠は不要と言っても最初の夜の様に寝れない訳ではないので、目を閉じて眠りにつくまで今日起こった事を思い起こしてみる。ボリス達と別れ、ロビンと出会い、そして霧の街へと閉じ込められた。

フツ、これも姫のおかげかな。

姫と出会う前の自分なら確実と言っていいほど経験できない体験に瞬は目を閉じたまま少しだけ笑顔になる。

下手すると死にかねない状況ばかりだったが、瞬は命の危険で心臓がドキドキするより、初めて知った新しい世界の方への興味で心臓が高鳴っていた。

勿論、数日前まで何も知らなかったド素人大学生であった以上、命のやり取りは常に冷や汗をかいている。

ただ、やはりその心臓の鼓動を速めるのは興味の方が強かったのだ。これからどうなるかなどまるで見当は付かないが、そんな瞬が姫との約束を途中で止める事などありはしない。

一通り頭の中で今日の出来事が思い浮かぶと、まるで待っていたかのように瞬は深い睡眠へとすぐに落ちる。

精神的な疲労はかなり溜まっていたために仕方がなかった。

そして、地下室で動き回る者は誰一人としていなくなる。

その様子を屋上で監視していたフェイリンは見逃さなかった。

「全員寝たみたいね、作戦の時間よ」

「ほう、そうか。じゃ、俺が行ってくるか」

「間違えないで。それはあくまでプランBよ。今はプランA、つまり私の『クリエイトアザー』で命令を聞くようになった彼らを使つての抹殺、もしくは捕獲よ」

「首を落とすつて聞いたが？」

「それが本当に有効かは知らないけれど、私はもう少し面白い事を考えてるのよ」

そこまで言うとフェイリンは上機嫌にノートPCの画面上から地下室の様子を見続ける。

フェイリンは頭の中で寝ている2人に対して命令を送り込み、寝ていたはずの2人はまるで起きていたかのようにふらつと起きあがる。だが、意識はないのか、虚ろな表情のまま2人はその場に立つ。

そして、フェイリンから送り込まれた命令に従ってドミトリーは瞬から借りた麻醉銃を、ニキータは箱の陰に隠してあった棒の様に太い注射を取り出す。

ドミトリーは銃を構え、ニキータは注射の先端を瞬へと向ける。

2人に挟まれた瞬だが意識は深く沈んでおり、2人に襲われそうなことすら気づきはしない。

「よし、やれ」

屋上からモニタリングしているフェイリンの命令に従い、ドミトリは麻酔銃を連射し、ニキータは注射を腕へと突き刺して中身を注入する。

「いつ、たい・・・」

突然の痛みに覚醒した瞬だったが、その視界は瞼が開ききる前にまた閉じていく。

そして、2人は手から持っていた道具を落とすと、また虚ろな状態へと戻る。

「やったわ、『旅人』を完全に眠らせた！」

「うち、これ以後は首をはねて終わりかよ。つまらねえな」

「ふん、言ったでしょ？面白い事を考えてるって」

フェイリンの勝ち誇った態度にマクシムはイラつきを覚えたが、その相手は地下へと向けて屋上から既に消えていた。

右手にPCを持ったままフェイリンは走り、『旅人』に動きが無いかをチェックしながら下へと落りる。

やがて、地下室へとたどり着くと、まるで出迎えの様にドアがひとりでに開き、中へと迎え入れられる。

ドアの側にはドミトリとニキータが立ち、部屋の真ん中には常人なら2度と目覚めない程の麻酔を投与された瞬が寝ていた。

試しにフェイリンは瞬の脈を取ってみたが、平常のようではある。

「やはり、化け物ね。これじゃいつ目覚めるかもしれないし、早速始めましょう」

そう言うと、フェイリンは瞬を跨る様に立ち、右手と左手に青い光を纏う。

彼女の魔法、『クリエイトアザー』だ。

他人を簡単に洗脳するような魔法ではなく、他人の中に作り出した人格を植え込む魔法。

つまり、強制的に人を2重人格に変えてしまう魔法だ。

彼女は命令に忠実に従い、それ以外は自分で何かを考えたりはしないまるでロボットの様な人格を作り出し、それを人に植え付けている。

洗脳とはまた違った攻め方だが、これは安易に洗脳できる魔法としてアジア統括支部ではかなり重宝されていた。

右手と左手の光に彼女は全身全霊の魔力を注ぎこみ、その青い光は今までとはすぐに違いが分かるほど段違いに光が強い。

青い光が目が痛くなるほどの光を放つまで強まると、彼女はその両手を瞬の頭へとつける。

途端に、彼女の両手から青い光が瞬の頭へと流れ込み、頭の中を青い光が駆け巡る。

「つぐあ！があああ！」

意識はなくとも瞬は本能で体を動かそうとするが、麻酔により動く事は出来ない。

脂汗が滲むほどの痛みが体中を駆け回り、特に頭痛は激しいかったが瞬の眼はそれでも開くことはない。

夢にうなされるなどというレベルではない程の絶叫が地下室内に反響する。

常人なら聞きたくない様な叫びだったが、フェイリンはその絶叫に

自分の魔法が有効であることを確信した。

「もう少し！もう少しで『旅人』が私の操り人形！」

抑えきれない興奮を言葉にしながらフェイリンは余すことなく光を瞬へと流し込む。

瞬の体は次第に痙攣し始めていた。

フェイリンは手を緩めずに全力で魔法をかけていると、突然、瞬の腕が麻酔から回復したのか、フェイリンへと向けて振られる。

『旅人』からすれば痛みの原因を遠ざける様に本能的に腕を振っただけだ。

だが、常人からすればそれはヘビー級ボクサーのパンチなどとは比べ物にならない、圧倒的なスピードと破壊力を持った殺人的な攻撃だ。

死、ぬっ！？

死を覚悟したフェイリンだったが、当たる直前、その腕はフェイリンの頬を掠めて地面へとめり込んで落ちる。

目を見開いたまま動けないフェイリンだったが、感覚的に魔法が完了したのだけは分かっていた。

終わった・・・？

そう思うと、体中を今までに経験した事のない様な疲れが襲う。

まるで体に100kgの重りを背負っているかのような倦怠感もある。

死にかけてというだけではなく、魔力が尽きたのも原因のようだ。

少し休めばましになると、彼女は目眩も手伝ってその場に倒れる様に横になる。

体を動かす事もままならないようだが、その顔は笑っていた。

「は、ははっ、はあはあ・・・、こ、これで私の物っ！・・・は

あはあ」

「ほう、そうきやがったか」

声のする方にフェイリンが振り向くとそこにはいつの間にかマクシムが立っていた。

さっき言っていた事が合点が行ったらしく、見下すように気絶した様な顔の意識がない瞬を見ていた。

「そ、そうよ。これで私の未来は約束された様なものよ」

「・・・なるほどな。まあ、伝承では殺すと『旅人』の力は近くにいる魔力の高い人間に引き継がれるらしいが、お前の洗脳なら『旅人』を生かしたままで好きに力が使えるな。おまけに『旅人』から力を譲ってもらえばお前が新しい『旅人』だしな」

そこに立っているだけのマクシムにフェイリンは何か嫌な物を感じ取った。

まさか、こいつ・・・。

フェイリンの勘ぐるような視線にマクシムが気づき、倒れた彼女に向かつてデザートイーグルを向ける。

「じゃ、俺を『旅人』にするよう命令してもらおうか」

「お前、やつぱり！」

「当然だ、誰だってこんな力を、不死を手に入れたいだろ！俺にとつちやW2の繁栄なんて知ったこつちやない。まあ、どうせ追いかけてくるんだから『旅人』の力で壊滅させてやるよ。ちようどそいつもそんな考えだったらしいからそいつも本望だろ？」

冗談じゃない！！

フェイリンは唇を噛んでグツと出そうになった言葉を内にとどめる。命がけで手に入れた『旅人』を奪われるばかりか、短絡的なマクシムに『旅人』の力が渡ろうものなら世界中のW2の拠点で核爆発でも起こしかねない。

理由は簡単で、ただ、追手がうつとつしいからと言うだけ。

少なくともマクシムはそういう短絡な思考の男である事をフェイリンは分かっていた。

すかさずフェイリンは扉脇に立っていた2人を操り、マクシムへと飛びかからせる。

ところが、マクシムはそれも分かっていたのかその場にしゃがむと2方向へと突き出すようにパンチを繰り出す。

すると突き出した腕の前には何もいなかったはずが、ちょうどそこにドミトリーとニキータが現れ、その2人に向かってパンチがヒットする。

2人は吹き飛ばされる様に壁へと叩きつけられた。

「な！？」

「甘いな、お前の魔法の欠点は動きが単調になる事だ。先読みすりゃいくらでも倒せる。そこに麻酔で倒れている化け物でもない限りはな！」

「・・・あらそう、じゃ、お望み通りに」

フェイリンがマクシムに向けてニツと笑ったかと思うと、マクシムの胸に2本の小さな針が突き刺さる。

直後、体中に焼ける様でありながら筋肉が収縮する様な痛みが走る。視界は霞み、意識が飛びそうになるがマクシムは踏みとどまって堪えると、胸にささった針を抜いて捨てる。

その針の先端にはケーブルがつけられ、ケーブルの先を目で追っていくといつの間にか立っていた『旅人』へとたどり着いた。瞬は虚ろな目をしたまま立ち、手には銃型スタンガンが握られていた。

「麻醉からもう回復したのか！？ちいっ！」

マクシムは倒れたままのフェイリンへとデザートイーグルを構えた。そして一瞬の迷いすらなく、すぐさま引き金を引きにかかる。ところが発射される寸前、瞬が常人には捉えきれないスピードでデザートイーグルを簡単に奪い取り、その銃口をたじろぐマクシムへと向ける。

「殺しなさい」

床に伏したままのフェイリンから命令が飛ぶ。

銃の素人でも確実に人を殺せる距離だった。

瞬は言われた通りに引き金を引きにかけ、勢いよく、とは言えないがゆっくりと引き金は引かれた。

「や、止めっ！」

死の恐怖に顔が引きつるマクシムに向かって、1発の銃弾は放たれた。

第28話：霧の街（4）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

遅れながら投稿です。

これで初投稿してから1周年です。

何気なしに頭に浮かんだ妄想を形にしていた結果、ここまでできました。

が、この妄想、書いた分は減るんですけどまた増えていってたりします。

最初に100話は超える、みたいなこと書いてましたけど、頭の中に浮かんでる内容を全て書き出したらそれすら超えそうな今です。

まあ、このままボチボチ書いていくのは変わりないですが、一体終わるのはいつになるやら……。

第29話：霧の街（5）（前書き）

2010/11/8 誤字脱字を修正

第29話：霧の街（5）

放たれた銃弾はマクシムへと向かっていき、マクシムは神に祈りながら咄嗟に体を捻った。

死をも覚悟しながらの回避だったが、無情にも弾はマクシムがかわしきれない内に到達する。

マクシムに向かって銃弾が当たったかのように見えた。

だが、銃弾はマクシムの左耳を掠めて、壁へとめり込んでいた。

死ぬ事を覚悟していたマクシムには一瞬、何が起こったのかが分からなかった。

数秒たってから左耳の痛みで弾が逸れて助かったのを理解するがそれを信じられず、驚きの表情を隠せないのはマクシムだけではない。フェイリンも同じだった。

「何やってるの！？殺しなさい！」

言われて瞬はデザートイーグルの引き金を何度も引くが、今度はマクシムがかわす様な動作をしなくても弾は急所から外れた場所に飛ぶ。

全ての弾がデザートイーグルから吐き出され、マクシムは傷こそあるものの大した怪我はなかった。

私の命令に逆らう！？

床に伏したまま見ていたフェイリンにはにわか信じがたい光景だった。

自分の中で作り出した別の人格が彼女の命令を拒否したのだ。

今まで何百という人間を操ってきたが、こんな事は初めてだった。

まるで飼い犬に手を噛まれた気分であり、彼女の中の魔法に対する絶対的な自信にヒビが入っていた。

「っ！？私の命令を聞きなさい！あの男を殺せっ！！」

叫びながら命令を下すと、瞬は持っていた弾切れのデザートイグルを捨て、『天狼』を作り出して構える。

まだ銃口を突き付けられている様な状況であるマクシムは身動きができない。

だが、彼にはデザートイグルの弾を全て外した事である確信があった。

自分はコイツに殺されない、と。

何が影響しているのかはマクシムにはさっぱり分からないが、今も日本刀を振りまわす『旅人』は当てる気が無いのか見当違いな方向へと振っている。

これでは何時まで経ってもマクシムに日本刀の刃は当たらないだろう。

「ふ、ははっ！どうということかは分からんが、どうやらそいつはお前の命令が聞けないらしいなあ！立場逆転か、おい？」

マクシムはかわす動作などせず、そのままの位置で腕を折りたたんで後ろに引く。

まるで、銃のコッキングの様な動作でフェイリンには彼が何を考えているかを察した。

「直接殺して『旅人』の力を奪う気ね！？」

「大正解、ご褒美に俺の『フレイム』をくれてやる！食らえ！」

震えるほど力一杯引いた腕を勢いよく前へと突き出す。

すると、その手の辺りから大量の炎が放出され、まるで火炎放射器の炎の様に火の波が室内にいた全員へと向かう。

マクシムの魔法は基本的には腕から炎を出す魔法だったが、その放出する形状は選択ができた。視界を塞ぐ壁の様な炎を出したり、まるでビームの様に極限まで圧縮して打ち出す事も可能だ。

今回は行き場のない地下室であるなら逃げ場をなくせば終わるといふ発想で、マクシムは出入り口を塞ぐように炎を壁の様に作り上げていた。

迫りくる火炎の壁に息苦しさを感じながらフェイリンは死を覚悟する。

だが、その瞳に映った最後の希望に気づくと己の命を最後の希望へと託す。

「火を消しなさい！」

その言葉を聞いた途端、瞬は『天狼』をその場に置いて炎に対峙したかと思うと、両腕を突き出してそこから大量の消火剤を噴出した。火の勢いはそれによって急速に弱まり、瞬達へと届く寸前で火は消えていく。

全ての火が消されて火の壁がなくなり、啞然とするマクシムと瞬は余熱で現れた陽炎を挟んで対峙した。

「ば、馬鹿なっ！俺の炎はそんなしょそこの火事程度じゃないんだぞ！？魔法で作られた炎がただの消火剤で簡単に消えてたまるか！・・・魔法で作った消火剤、だからか！？答える！」

実際、マクシムの言うとおりだった。

ただの消火剤に入っている消火剤であれば、マクシムの火を消すのに部屋を埋め尽くすほどの消火剤の量がいる。

それを簡単に消してみせたのは瞬が消火剤と同時にある物を生成していたからだ。

消火剤に混ぜる様にして生成した物、『不死鳥の粉』と呼ばれる魔具の1つであり、炎を抑制する効果が非常に高い。

マグマすら弾くとまで言われるそれは当然ながら魔法の炎にも強く、炎に関して言えば『イージスの盾』とほとんど変わらない程の防御力を誇った。

当然、これは姫から教えられた中の1つで、その記憶を元に瞬は無意識下でそれを作り出していた。

「……………」

「無駄よ、私の命令しか聞かないのはよく知ってるでしょ？」

「くそ！もう1回」

マクシムが苦虫をかみつぶしたような顔をしながら2発目を打とうと腕を後ろに引く。

それに気づいたフェイリンは瞬へと命令を下した。

「あいつを気絶させなさい！」

すると、殺すのを命じた時とは打って変わった様な俊敏な動きで一瞬のうちにマクシムへと詰め寄る。

突然、目の前に現れた瞬にマクシムは体が固まった様に腕も止まり、その間に瞬からパンチが繰り出された。

構えもない全くのド素人のパンチだが、それはマクシムが今までに体験した事のない程の速さを誇った。

鳩尾を狙って放たれたパンチはガードされる前に食い込むように鳩尾へと叩きこまれ、呼吸の出来ない悶絶するような痛みにもマクシムはたまらず床の上へと倒れる。

意識はないのか倒れたままピクリとも動かない。

どうにか助かったとフェイリンは体の力が更に抜けるのを感じながら、眼で瞬を捉えながら考える。

咄嗟に気絶させるよう命じたが、その時はあっさりと命令に従った。だが、マクシムを殺す時だけは命令を拒否するというよりも、殺そうとしながらも抵抗しているようだった。それが彼女はどうにもひっかかっていた。

「ひよっとして・・・」

彼女の中で事前にもらっていた情報と今の行動からある一つの仮説が浮かび上がった。

この『旅人』は人を殺すのを本能で拒否しているのかもしれない、と。

それでもなければ人を殺す時だけ命令を拒否する訳が無い。

彼女もこの『旅人』が殺しを今まで1度もやっていないのは聞いていた。

加えて、部下ごと殺そうとしていた日本支部長から部下を守りながら彼を倒してしまったのも聞いている。

過去の出来事が生まれつきの性格かまでは分からないが、本能が殺しを否定しているという事で間違いはなさそうだとフェイリンは納得する。

それと同時に彼女の胸のあたりに何かこみ上げるものがあった。だが、彼女は特に気にした様子もないまま、瞬へと命令を出す。

「まあいいわ、人を殺せなくても使い道は十分すぎる程ある。とりあえず、ここはまずいいわね。私を担ぎなさい」

瞬は言われるがままにフェイリンを持ち上げ、お姫様抱っこする。まさかそういう担がれ方をするとは思ってなかったフェイリンは恥ずかしさから赤面したが、見る者などいない以上、気にするだけ損

だと気持ちを切り替える。

残った2人にはついてくるよう指示を出し、この場から離れようとした。

だが、出る寸前で床にうづくまるマクシムに目がいく。

このまま生かしておいても厄介な事にしかならない。

そう判断した彼女はドミトリーに指示を出す。

「目障りよ、殺して」

命令を受けたドミトリーはベネリM3の銃口をマクシムへと向けて構える。

後はそのトリガーを引くだけでマクシムの頭は吹き飛び、完全に絶命するだろう。

意識のないドミトリーは躊躇なくそのトリガーを絞ろうとした時だった。

突然、ドミトリーの体が吹き飛び、その衝撃でトリガーがひかれて発砲された。

だが、ショットガン自体がドミトリーと同じように吹き飛んだため、ショットガンの弾丸は床に穴を空けるだけに終わり、寸前の所でマクシムは助かっていた。

フェイリンはマクシムが助かった事などどうでもよかったが、ドミトリーを吹き飛ばした原因に驚いた。

「っち！こいつら入ってきたのか！」

フェイリンの視線の先には巨人が使っていた触手が何本も存在していた。

波打つように動き続け、まるで獲物を探しているかのようだ。

ドミトリーはその内の1本に弾き飛ばされ、頭でも撃ったのか気を失っているようだ。

フエイリンは頭の中から無線の様にドミトリーへと呼びかけるが、
気絶しているのかまるで反応はない。

手駒を1つ失った上、大量の触手によって唯一の出入り口は閉まっ
てしまい、このままではここから出ることもすらできない。

にもかかわらず、彼女は焦りなどしておらず、至って冷静だった。
なんせ、彼女を抱いているのは史上最強の怪物なのだから。

「あいつ等を倒しなさい！」

すると瞬は片手でフエイリンを持ちながら、床に落としていた『天
狼』を手取る。

そのまま触手の群れへと向かっていき、触手の群れもそれに反応し
て瞬へと向かって伸びる。

だが、瞬は直前に『イージスの盾』を展開し、見えない壁に阻まれ
て触手は瞬とフエイリンに触る事は出来なかった。

「へえ、これが世界最強の盾ね。確かに衝撃すらないなんて信じ
られないわ」

彼女も『イージスの盾』のようにバリアや障壁を作り出す魔法使い
は知っていた。

だが、その誰もがこの『旅人』の盾に比べれば稚技に等しいと思え
るほど、『イージスの盾』は完璧な防御を誇っているように彼女に
は見えた。

彼女が知っている魔法使い達、例えば時速40kmを出した車がぶ
つかるものなら多少の衝撃はあるものの無傷でいられる。

ただし、それが100km、200kmとなった場合はどうなるの
か。

造り上げた壁の強度を衝撃が上回った瞬間、壁は崩壊して魔法使い
も轢き殺される。

『W2』アジア支部の中でも上位クラスの魔法使いでさえ、多少の能力の違いはあるがその程度なのだ。

にも関わらず、今は耳を塞ぎ、目を塞げばまるで戦闘が起こっている事など分かりはしないほどに全く揺れはない。

絶対的な防御という安堵感と優越感に浸る彼女を余所に、瞬は触手の勢いが弱まった瞬間、『天狼』を『イージスの盾』の中で振った。白銀の刃を盾は邪魔することなく素通りさせ、触手を根こそぎ斬り飛ばす。

何度か斬りつけていると不意に鈍い金属音が鳴り、『天狼』の刀身が半ばから消えていた。

その消えた刀身は回転しながら地面の上へと突き刺さる。

あまりにも力任せな斬り方のせいで折れてしまったようだ。

瞬は動じる様子もなく握っていた『天狼』の柄を捨てると、今度はAA12を作り出す。

血塗れで迫る触手を次から次へと撃ち落とし、触手はたまらず逃げ始め、その身を縮めていった。

「面倒だわ、コイツらの本体ごと倒しなさい！」

途端に瞬は引っ込んで行く触手の跡を追いかけ、町役場の表へと出る。

すると3体の巨人が瞬の前に立ちはだかるように並び、その後ろには霧に隠れて見えないがまだ巨人はいるようだ。

瞬は上へと高く跳び上がると右手から幾つもの閃光手榴弾を作り出してばら撒く。

地上では眩しい光と激しい爆音がそこから中で発生し、やはり感覚はあるのか巨人の動きも更に鈍くなっていく。

その隙に瞬はフェイリンを抱えたまま、巨人たちのだ真ん中に降りる。

そして、そこで回転しはじめると作り出した麻醉銃を目についた巨

人に片っ端から撃ち込み、次々と巨人は倒れていく。奥から続けて現れた巨人から何本もの触手が瞬へと向かって伸びる。だが、触手は全て盾によって阻まれ、瞬に触れるどころか近寄る事さえできない。

その間に反撃のように瞬から麻酔針が撃ち込まれ、5体目を倒した所で瞬へと向かってくる巨人はいなくなった。

瞬の腕の中でその一部始終を見ていたフェイリンは何とも言えない快感を感じていたが、同時に不快感も感じていた。

明らかに人外である巨人すらもこの旅人は殺そうとしないからだ。実際は瞬が本能で命を奪う事を拒否しているだけだが、フェイリンからすればそんな事など知った事ではなかった。

「人を殺せなくても化け物くらい殺しなさい！」

瞬は命令されたとおりにAA12を作り出して、寝ている巨人の頭へと銃口を向ける。

だが、いざ引き金を引くと銃口は頭から外れ、地面に幾つもの小さい穴を穿つ。

連射しても全て同じように外れ、明らかに瞬が外しているようだ。

「何してるの！それは人間でもないのよ！」

フェイリンがそう捲し立てても瞬は外し続けた。

諦めたようにフェイリンが止めるように言い、代りにハンドガンを寄こすよう言うと瞬はM92FSハンドガンを作り上げて手渡す。

彼女はそれを手に倒れた巨人へとどめをさしていく。

最後の巨人にとどめを刺したフェイリンはM92FSをその場に投げ捨てるが、不快感はそうもいかなかった。

見ているイライラとする感覚、やり場のない怒りが溜まっていく。それがただ生き物を殺せないという瞬に対しての怒りだけではない

様な気が彼女にはしていた。
だが、その原因は分からない。

「……もういいわ、私を下ろしてここで待機」

瞬は彼女を下へと降ろすと、直立不動で立ったまま動かなくなる。

地面へと降りた彼女は歩けるまでには回復していた。

ふらつく足取りで2歩3歩歩くと立ち止まり、頭の中で念じて2人に来るよう命令を出す。

「後はここから出るだけね」

とにかく指令を実行出来た充実感を感じながらも、それと同時に何か後ろめたい様な気持ちを感じていた。

いつもはこんな事など感じた事もないが、どうもこの『旅人』を見ていると何かが引っ掛かってくる。

「分からない……」

追及するように深く考えてみると昔の事を思い出しそうになる。
それが何なのかと考えながら、彼女は2人が来るのを待った。

『W2』のアジア統括支部、その長は一室にて深く椅子に腰かけながらPC画面を凝視していた。

時刻は日付が切り替わろうとする寸前だが、彼に眠気は微塵もなかった。

興奮と期待で眠る事などできはしないからだ。

まるでテレビのアニメ番組を齧りつく様に見える子供の様だが、その表情は真剣そのものだった。

「まだか、まだ来ないのか!」

最後の報告をもらってからもう3時間は立とうとしているが、いまだに報告が来ない事に彼は苛立っていた。

貧乏揺すりが激しさを増す中、見かねた様にディスプレイにウィンドウが表示される。

続きの報告に彼は貧乏揺すりを止めて表示される文を読んだ。

すると一番最初の文で狂喜して天井を仰ぎ見るが、続きを読んで行くともまるで落ちつかせられているかのように、先に進むほど内容は急転直下していく。

「『旅人』の支配下に成功。フェイリンの『クリエイトアザー』にて別人格を植え付けている。ただし、作戦に同行していたマクシムが裏切り、従えた『旅人』で倒したがフェイリンの手により殺害。フェイリンは『旅人』を従え、外へと逃走。おそらく『旅人』の力を狙っているものだと思われる」

「な、なんだと〜っ!?!」

彼は慌ててキーボードを叩き、それが本当なのかと返信する。

するとすかさず返ってきた返信には「間違いはない」と返事が返ってきた。

アジア統括長は頭を抱えた。

これではただ単に『旅人』の力が諜報部勤務の女に渡るだけではないかと。

実際はフェイリンはマクシムを殺してはいないし、『旅人』の力を奪う事など考えておらず、ただ指令を遂行しているだけだった。

だが、この男が信用できる情報はこのPCに映し出される文だけ。フェイリンが裏切っていない事など今の彼には知る由もなかった。

「裏切るとどういう目に遭うか教えてやれ！『旅人』の力が渡る前にな！」

アジア統括長は叫びながら命令をキーボードで叩きこみ、送信する。想定していた自体とは違う事に多少の戸惑いを伴いながらも、男はまたPCを見続ける作業へと戻った。

音がなくなつたかのように静まり返った地下室で動く人影があった。

その人影は手に小型の折りたたみ式携帯端末を持ち、アジア統括長からの命令を受け取った。

「・・・さて、動きますか」

携帯端末を胸の中へとしまい込むと、その人影はそのまま外へと出ようとした所である事に気づく。

床にマクシムが気絶したまま倒れていたのだ。

「報告通りにはしておかないと、ね」

人影は落ちていたデザートイーグルを拾い上げ、マクシムの腰からマガジンを抜きとると手馴れた様子でマガジンを交換する。

そして、その銃口をピクリとも動かないマクシムへと向けると、何発も撃ち込む。

撃ち込まれた衝撃で体が多少動いていたが、明らかに彼は死んだ。

「まあ、私を殺そうとしたんだから殺されて当然」

人影はマクシムの死体に見向きすらせずに先へと進む。

それと同時に室内で倒れていた者も起き上がって外へと歩いていく。

「……ちようどいい」

人影はその後について歩き、外へと向かっていった。

外で待っていたフェイリンの前に呼び出した2人が現れた。

怪我のせいか足取りは2人とも重く、そして遅い。

どうにかフェイリンの前にまでつくると2人はその場で立ち止まった。2人が立ち止まったのを確認したフェイリンはニキータへ手を伸ばしていく。

そして、ニキータの両こめかみを掴んだ瞬間だった。

突然、フェイリンの腹に鋭い痛みが走った。

「あぐっ!？」

咄嗟にフェイリンはニキータから離れ、痛みの酷い腹を見てみると5cm位の傷口から大量の血が流れ出ていた。

フェイリンは傷口を抑えながらニキータを見ると、その手には地下で折れた『天狼』の刃が握られていた。

「ど、どつし……ゴフッ!」

支配下にいるはずのニキータに問いかけようとしたが、吐血により強制的に質問は止まる。

刃は彼女の中の器官を幾つも傷つけていた。

彼女は力なく下に腰を落とし、息を荒くしてニキータを睨みつけるしかできないでいた。

「今までご苦労様でした。後は私が継ぎましょう」

「なんでっ、貴方が・・・!?!」

「私も『旅人』の力が欲しいの。あの魔力に満ちた存在に私はなりたいのよ。この空間を作り出すのに魔力を何日分貯めるか分かる? 3年よ、3年! それを地球につながつているからと一瞬で使えてしまう冗談の様な存在がいるなら、私はその存在にとって代わりたいの。勿論、その何でも作れちゃうって言うふざけた魔法も、不老不死も目当てよ」

「統括長が・・・黙ってないわ」

「ああ、大丈夫。もう偽の報告は出しておいたし、筋肉馬鹿は始末したわ。そうそう、今、あっちでは裏切り者の貴方を殺す特殊チームを編成中らしいわ。まあ、見た所、後5、6分もすれば死んじやいそうだけどね」

フエイリンはそこまで聞いて確信した。

『W2』アジア統括支部で隠された存在だった彼女、ニキータは最初から裏切るつもりだったのだと。

「でもま、正直、ここまでうまくいくとは思わなかったわ。私の

中に私以外の人格が2つも存在しているなんて奇妙な気分だったけど、こうして成功したから良しとしましょうか。傷も『旅人』の力で治るし」

「その場に跪いて死になさい！」

自ら死ぬよう命じたがニキータは得意げに立っただけだった。フェイリンは段々と薄れていく意識の中で気力を振り絞って再度命令する。

「死になさい！」

「あゝ、無駄無駄。これで貴方の魔法は既に解除してるから」

そう言ってニキータは手で握っていた『天狼』の刃をヒラヒラと振って見せる。

フェイリンもそれを見た途端、合点がいった。

元の持ち主は日本支部の支部長であり、魔力を切り裂く力があの刀にある事は知っていた。

つまり、彼女は斬ったのだ。

自分にかかっていたフェイリンの魔法、『クリエイトアザー』を。

それによってフェイリンが植えつけていた命令に従う人格、そして父親が危篤で駆けつけようとする至って普通の女の子の人格が消え、フェイリンの支配下から彼女は抜け出した訳だ。

「残念ね、その『旅人』や警官と同じように主導権を握るようにはしておけばよかったけど、私はそうもいかないからね。じゃ、これ以上時間をかけるのも嫌だし、貴方も苦しいでしょうからとどめをさしてあげるわ」

彼女は拾ったデザートイーグルを構える。
笑いながら引き金は引かれ、デザートイーグルから弾丸が発射される。

弾丸は確実に彼女の頭を捉え、死を覚悟する間もないままにフェイリンは死ぬはずだった。

弾が額に触れそうな寸前、その間に瞬の腕が入り込んだ。
瞬の腕に当たると魔法によって強化されていたため、その弾は小さい跡を残してひしゃげて下に落ちる。

殺したのを確信していたニキータはいきなり現れた『旅人』に驚く。

「何時の間に！？命令は出していない・・・そうか、念じたのね」

「・・・貴方が構える寸前で命令は出していたわ」

息も絶え絶えにフェイリンは言うが、その瞳は最早ニキータを捉えてすらいなかった。

瞬はそんな彼女を抱え、見えない盾を展開させる。

ニキータは連射したデザートイーグルの弾が弾かれた事で手が出せなくなったのを知った。

「ハン！でもどうする気？そこで死ぬまですっとそうしている気？それとも裏切り者になって『旅人』の力を奪う気？」

「・・・なんとなく分かっていたの」

「は？」

「何で・・・こんなに貴方を見ているとイラつくか」

その霞む視線は瞬を捉えていた。

彼女は瞬に世界を平和に保つと信じていた組織、『W2』に新人として入った時の自分を重ねていた。当時は人を殺さなくても分かりあえる、人は殺してはいけないと、今になって考えればとても青臭い考えを持っていた。

だが、いつしか『W2』の命令をこなしているうちに人を殺し、世界を平和に保つためと言い聞かせながら次々と人を殺し、そして操った。

大きな流れに合流する川の流れのように彼女も人殺しとして染まっていた。

もう昔の甘い考えの自分には戻れないだろう。

そう考えることすらなくなった時だった。

昔の自分と同じ様な男が現れたのだ。

同じ考えの持ち主でも敵は助ける上に、無意識化でもそれをやろうとしない。

ここまで人を殺さないという強靱な意志の持ち主は初めてだった。苛立ちの原因、それは自分にできなかった事をやっている男への羨望、そして失敗した自分への失望からだった。

「今ごろ気づくなんてね・・・」

フェイリンは震える手を伸ばし、瞬のこめかみへと手を当てる。

「ちよつと！？まさか！」

「貴方の思い通りになるのは御免・・・よ、それに私は彼の生き方を・・・見てみたい」

フェイリンは思い通りに動かなくなってきた腕に込められるだけの回復した魔力を込める。

その口元からは大量の血が流れ出し、腹からの出血は滴る雨の様に

地面を赤く染めていく。

だが、彼女は手を止めない、止めようとしないうやがて、手から光が溢れだすと瞬の中を駆け巡っていた彼女の魔力が消えていく。

最後に一際大きな光を放ったかと思うと、彼女の手は下へと落ちた。

「これで、……終わり」

最後の言葉を残し、フェイリンの命は消えていった。

その数秒後に亡骸を抱いたまま、意識を取り戻した瞬はフェイリンの亡骸に目を落とす。

そして、強く抱きしめると涙を流す。

「あり、が、とう……」

涙声でそう呟くと、ニキータを睨みつけた。

どうやら操られている間の記憶はニキータの様に全てであるらしい。

普段は見せない様な寂しげな表情を浮かべる瞬。

「……ニキータさん、どうしてこんな事を？」

「君の力のせいよ。何も知らない君には分からないでしょうけど、『旅人』の力は何を代償にしても手に入れたい力な訳。例え、全財産を捨てると言われても、無垢な赤ん坊を殺せと言われてもやる人間なんてそこら中にいるわ。まあ、私もその中の1人で、うまい具合にそのチャンスが目の前に転がっている。あとは私の物にするだけ。さあ、おとなしく私にやらねさい！」

ニキータの言葉を皮切りにいつの間にか集まっていた巨人たちからの触手が一斉に瞬目がけて飛ぶ。

四方八方から飛ぶ触手は見えない盾ごと包み込み、空中へと持ち上げていく。
すると、その触手に黒く太い刃が何回も円を描く様に触手を通り抜け、触手は細切れになる。
触手が無くなつて地面へと降りた瞬の手には姫が雪山で見せた大型の西洋剣が握られていた。

「お見事。でも、ここは私の空間なの」

ニキータは手のひらを広げて上に向ける。
すると、その上に周囲の霧が流れ込んで行き、巨大な霧の塊ができる。

それをニキータは瞬へと向かって撃ち出し、直撃した瞬の周りは高密度の霧で自分が今地面に立っているのかさえ分からないほど視界はない。

「・・・」

瞬は黙つたままその場で立ち止まる。

そこに何本ものナイフが飛び、全て盾で弾かれる。

瞬はナイフが飛んできた方向を見て麻醉銃を何発か撃ち込むが、まるで当たっている様子はない。

今度は左手に人影を見た瞬は素早くそちらへと麻醉銃を向けて何発か撃つ。

だが、針が人影に到達する前に人影は消えてしまう。

消えた辺りを凝視していると盾の上にニキータが現れ、落ちながらナイフを盾目がけて突き立てた。

すかさず瞬はニキータへと麻醉針を打ちこむ。

だが、どういう訳か針はニキータを素通りし、霧の中へと消えていった。

ニヤツと笑ったニキータは盾の上から飛び、また霧の中へと隠れた。

「なんで……」

どうして攻撃が通り抜けたのか。

その疑問の答えが瞬には分からない。

そんな瞬をあざ笑う様に瞬の前へニキータが歩いて現れる。

「ほら、当ててみなさいよ」

腕を胸に当てて瞬を挑発しているニキータ。

即座に瞬は麻酔銃を撃つが、さっきと同じように針はニキータの体を通り抜けてしまう。

まるで幻でも相手にしてかのようだ。

「フフツ、私に当てるのは貴方じゃ無理そうね」

ニキータはニツコリと笑ってみせると指を鳴らす。

すると、どこからともなく地響きを起こしながら霧の中に巨大な影がいくつも浮かぶ。

現れたのは何体もの巨人だった。

「まだ、いるんですか」

「言ったでしょ？ここは私の空間なの。私が呼べば何体でもコイツら呼び出すのは可能よ。まあ、コイツらは言わば、私の守護者みたいなものだしね」

周囲を巨人に囲まれ、その一体の肩にニキータは飛び乗る。

「やりなさい」

その命令を受けて巨人達から一斉に触手が飛び出して瞬へと襲いかかった。

第29話：霧の街（5）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

投稿した文字数がそろそろ20万文字に到達しそうです。

原稿用紙で言うなら500枚相当です。

これだけ書いてたのも驚きですが、飽きっぽい自分がここまで続けているのも驚きです。

最後まで行くと文庫本1冊分くらいには・・・なるんでしょうか。

そこまで頑張れ、自分（・A、）

第30話：霧の街（6）

襲いかかる触手の大群に瞬はその場から大きく跳び上がった。

地面がうつすらと見える中でどうにか着地すると、抱えていたフェイリンの亡骸をそつと下ろす。

だが、その間すら待つてくれない触手の群れは方向を変えて瞬へと襲いかかる。

咄嗟にその場から離れた瞬の前に触手は迫り、瞬はAA12を作り出して連射する。

今までならそれで触手を吹き飛ばせていたが、今度は触手の本数があまりにも多く狙いが絞りきれない。

何本か触手を飛ばしはしたが、触手の勢いはまるで津波の様に止まらず、飲み込む様に瞬を盾ごと巻き込んだ。

一瞬にして瞬の視界は暗闇だけの世界へと変貌した。そして、瞬の脳裏に海底でのトラウマがよみがえってくる。

「う、うわあああつ！」

焦るように作り出した大剣を触手へと突き刺して振り抜き、嫌な音を上げながら何本もの触手を斬り飛ばす。

どうにか触手の攻撃から逃げられ、下に地面が見える。

地面へと落ちていく瞬。

だが、それを防ぐように残っている触手が下から瞬を支え、そして隙間が無い程に触手が盾の周りに巻きついた。

また暗闇の中へと戻り、慌てて瞬は懐中電灯を作る。

作り出された懐中電灯の光に少しだけ冷静さを取り戻した瞬。

「大丈夫だ、怖くない、大丈夫・・・」

まるで自己暗示かのように落ちつくようつぶやき続ける。しかし、彼の心にダメージを与えてくるのは暗闇だけではなかった。目の前の蠢く触手の壁に押し潰されそうな圧迫感を瞬は感じていた。もし、盾を解いたなら一瞬にして押し潰されそうだった。

駄目だ、ここにいたくない！

精神の許容限界を超えたのか、それだけが瞬の頭の中の大部分を占め、すぐさま瞬は触手へと剣を突き立てる。

まるでケーキでも斬っているかのように剣は触手を瞬の振った通りに切り刻む。

そうやって瞬が焦りながら触手を手当たり次第に斬り飛ばした結果、瞬の足場も崩れて再度下へと落ちる。

ようやくたどり着いた視界の開けた場所。

瞬は落ち着きを取り戻そうと深呼吸していた。

その様子を霧の中に溶け込むようにニキータは隠れ見えていた。

なぜ、不老不死で絶対防御を持つ『旅人』があんなに肩で息をしているのか……。

それが絶対防御を誇るあの『旅人』を倒す手段になるのではないかと、ニキータは考える。

物理攻撃では傷をつけられないでも、精神的な攻撃であれば体験させるだけで攻撃となる。

ただ、問題はそれが何かだった。

「触手の中、か……。わざわざライトを作るという事は暗所恐怖症といったところね。いいわ、試してみようじゃない」

ニキータが腕を上げると周囲の霧が一段と濃くなり、自分の下半身すら見えないほどに霧が立ち込める。

すると彼女は腰からゴーグルを取り出し、それを頭に被った。

あらかじめマクシムの装備の中から抜いていたサーマルゴーグル（熱感知式ゴーグル）だ。

それにより彼女の視界は温度の無い霧に塞がれることなく、クリアに瞬を捉えていた。

対照的に瞬は作り出したライトの光が霧に反射し、何処を見ても白い霧しか見えない。

盾の内側にまでは霧も入ってこないが、巨人やニキータの影すら見えない。

まるで雪山で遭難した時の再現だった。

「何も見えない・・・っ！」

更に周囲を明るく照らしていた街灯が次々に巨人の触手で壊され、霧の中でボンヤリと光って見えた光が消えていく。

辺りは薄暗い霧に包まれた。

その途端、瞬は足元がグラつく様な感覚を覚える。

勿論、それは暗闇から来るトラウマのようなものと瞬は分かっていた。

すぐさま大量のライトを作り出して体の至る所につける。

照らしだす光が盾の内側のみを明るく保ち、どうにか瞬は落ち着きを取り戻す。

だが、それはこの暗闇の中ではいい的ではなかった。

四方から周りを取り囲んでいるであろう巨人からの触手が飛び交う。全ての的確に瞬目がけて飛び、次々と盾へぶつかっていくがその攻撃には終わりがなかった。

反撃しようとする瞬間も触手にAA12を向ける。

引き金を絞った瞬間、散弾が放たれると同時に触手は霧の中へと消える。

当たった様な様子はない。

続けて襲ってきた触手にも同様に瞬はAA12を撃つが、霧の中からいきなり現れて消えていくのではまともに当てる事は出来なかった。

「何処にいるか分からないなら、これで」

瞬は次の手として大量の閃光手榴弾を触手が襲いかかる中で作り出した。

それを触手が飛んできた方目がけて投げつける。

直後にその周辺にいるはずの巨人に目が眩む光と反射的に耳を塞ぎたくなるような爆音を食らわせるつもりだった。

だが、投げつけた手榴弾が爆発した音は確かに瞬にも聞こえるものの、光はまるで見えない。

それどころか音もまるで収縮したかのようないつもより小さい音だった。

「無駄よ、この霧を操れる私には音や光は届かない」

どこからともなく聞こえるニキータの声。

瞬はいる方向を探し出そうとするが、反響する様な声にまるで居場所が分からない。

「い、一体どこに？」

無駄とは分かっているつもりでも目を閉じて、魔力を探す。

だが、やはりノイズのようなものが頭にぼんやりと浮かぶだけで、ここに本当にニキータがいるのかさえ分からなかった。

なにより、生き埋めになっているかのような白い濃密な霧の壁に囲まれ、絶え間なく触手が襲いかかるのでは誰も集中出来はしない。息が乱れていく程、瞬は焦り出していた。

「と、とにかくこの霧を何とかしないと・・・、そうだ！」

瞬は何かを生成しようとする。

その様子を霧の中で窺っていた二キータは『旅人』が何かの行動を起こそうとしているのに気付いた。

一気に畳みかける様、巨人に命令を出す。

「全ての触手を出せ！『旅人』を取り囲め！」

命令に合わせて周りにいた巨人達の背中がボコボコと変貌していく。元は4つだった触手の穴が至る所から穴が空き、その数は20を超えていた。

その穴から一斉に触手が伸び、空中で他の触手と重なっていく。まるで空中に建物が浮かんでいるかと思わせるほどでかい塊になると、瞬へと振り下ろされた。

幾重にもまとめられた触手が『イージスの盾』を一斉に取り囲む。瞬の周りは白い霧から一瞬で何本もの蠢く触手へと変わる。

「うああ・・・」

捕えられた瞬はさつきと同じように圧迫されているような感覚へと陥る。

霧とは全く違う、異質な触手だから感じる恐怖もあった。

恐怖に駆られた瞬は作り出そうとした物を大剣へと変え、触手へと突き立てた。

そのまま力を入れて切り裂くが、斬った触手の下にはまた触手があった。

何度斬っても押し寄せる触手は変わらない。

「う、うわああ！」

正気を保つのも難しくなってきた瞬は力任せに斬り続けたが、何本

斬ってもまだ触手の壁は続く。

一体、どれだけの本数があるのか見当すらつかない。

呼吸が荒くなつていく瞬。

その様子は見えないが、外では何時まで経っても出てこない『旅人』にニキータはほくそ笑んでいた。

彼女が聞いている限りでは他の『旅人』達は手段を選ばない。

非人道的など知った事ではない、とばかりに場合によっては核爆発すら平気で起こす奴までいるらしい。

だが、目の前に捉えた『旅人』は違う。

その性格からか『旅人』の力を持ちながらもこの触手の檻すら破れない程であり、中では今頃、恐怖し絶叫しているかもしれない。

ニキータは様子を見守りながら、期待せずには居られなかった。

「早く、早く死になさい！盾を解いて触手に押しつぶされなさい！」

口を開けたまま、ただ1つの事を思いながら触手の群れを見ていた。まだ私に『旅人』の力は移らないのか、と。

裏返して言えば、彼女がそこまで『旅人』の力に魅力を感じているという事だ。

だが、傍目に見ればまるで思考が狂って停止した女の様でしかない。そうして彼女が集中して見ていると、触手の群れに変化があった。

触手の群れが少しだけ全体的に凹んだのだ。

「やったの!？」

ずっと見ていた彼女は『旅人』が盾を解除したために押しつぶされたのだと思った。

だがそれ以降、何の変化も訪れない。

中が見えない彼女には中を見るには触手を開くしかなかった。

「開ける・・・いや、死んでいるなら私に力が移るはず。もう少し待つべきね。そろそろ特殊部隊も到着するし」

彼女は用心深く、今まで以上に何が起こっても見逃さないように監視する。

ただ、一瞬だけ腕時計に目を落とすと時刻は午後11時となっていた。

統括長にメッセージを送る時間だった。

当初の計画では既に『旅人』の力を奪い、その後は逃げているはずだった。

だが、今は少しでも戦力が欲しい以上、特殊部隊の受け入れも含めて連絡しなくてはいけなかった。

彼女はゴーグルと同じようにマクシムから奪っていた無線にスイッチを入れる。

無線からはノイズだけが永続的に聞こえてくる。

この閉鎖された空間で外との通信は出来ないはずだった。

そんなことなど構わないかのように彼女はそれを耳にあて、そのまま意識を集中し始める。

すると、彼女の意識が集中するのに合わせて徐々にノイズが小さくなり、人の声が断続的に聞こえ出す。

やがてまともに聞き取れる程クリアな通信へと変わっていく。

この空間、『ニヴルヘイム』の管理者である彼女には元の世界とこの空間を自在に繋げる事が出来た。

今ならば瞬も逃げ出す事が出来ただろうが、今の状況ではそうもいかないだろう。

彼女は注意深く様子を窺いながら無線の相手に統括長を出すよう言う。

無線の向こう側ではすぐさま統括長に相手が代わり、ニキータは手短に現在の状況を嘘を交えながら伝える。

報告を信じるしかない統括長は戦力増強として、今から5分後に特殊部隊が『ニブルヘイム』へと突入する事を告げた。特殊部隊を迎え入れた後、そのまま『旅人』を倒し、力を奪い取った所で皆殺しにして逃走。

統括長の話に彼女の頭の中でプランは固まった。

彼女はタイマーをセットし、その時を待つべく『ニブルヘイム』を一時的に元の世界から切り離す。

「後5分・・・」

おそらく20代そこそこの彼女が歩んできた人生の中で、一番長く感じる5分になる事だろう。

サーマルスコープ越しで触手の塊に変化がないか見ているだけ。

だが、それだけでも手のひらに汗は滲み、まだ1分も経っていないというのにまだ鳴らないのかと苛立ちを覚える。

彼女がそうやって苛立ちを募らせ、2分程過ぎた時だった。

突然、爆弾が爆発したかのような音が触手の中からあがる。

すると触手の塊が大きく上へと膨れ上がっていき、次第に触手がほどけていく。

「っち！緩めるんじゃない！」

彼女が命令を下すと、触手は上へと押しつける力を抑え込むように下へと戻っていく。

一体何が起こったのか不安に駆り立てられるニキータだったが、その不安を増大させるように一度は下に下がった触手が上へと弾き飛ばされていく。

触手の檻がほどけていくのと同時にその隙間からは赤い光が漏れだし、霧を赤く染めた。

ニキータはその光をサーマルスコープで捕えたが、彼女には光の色

が赤ではなく白に見えていた。温度を視覚化するサーマルスコープでは温度の高い物は徐々に赤くなっていくが、表示しきれないほどの高熱を放つ物は白く見える。

「アレは一体なんなの!？」

赤い光を抑え込むように新しい触手が次々に光へと触手を叩きつける。

だが、触手が光に触れた途端、触手に火がついたかと思うと一瞬で表面が焼けただけ、消し炭へと変えられていく。

抑え込みの効かない赤い光はゆっくりと触れた触手を焼き尽くし、触手の中から赤い光が溢れ出る。

周囲を覆っていた霧は赤い光が現れると、風でも吹いたかの様に辺り一面から吹き飛んでいく。

まるで夜の闇を払う日の出の様な光景だった。

ニキータは何が起こったのか分からず立ちつくしていたが、球体から吹く全身を焦がす様な熱風を浴び、光る球体は何なのか理解する。

「超高熱の球体？まさか、これをあいつが!？」

霧がなくなり、意味がなくなったサーマルスコープをニキータは外す。

直に見る赤い球体は吸い込まれそうなほど綺麗な色だが、見た目とは裏腹に触れる触手を一瞬で焼き尽くし続ける。

ただ、彼女はこれに見覚えがあった。

魔法と科学を融合して作った武器の試作品『スコルピオン』、その実験結果の記録でだ。

彼女がどういう事か思案する前にその球体から何かが目の前に飛び出る。

咄嗟に彼女は持っていたデザートイーグルを撃つが、その全ての弾

は見えない『盾』によって力を吸収された様に下へと落ちる。目の前に現れた『旅人』は口の端を釣り上げると、一旦離れようとしたニキータの腕を掴む。彼女は反射的に訓練された動きで『旅人』にハイキックを放つ。鋭い角度で放たれたキックだが『旅人』は右腕を上げて簡単にガードし、逆に彼女を捕まえている腕を捻りながら下へと落とす。それに引つ張られて彼女の視界は上下逆転し、うつ伏せに地面へと叩きつけられる。更に手際よく掴んだ腕を後ろ手に固定し、彼女の動きを完全に封じた。

「ぐっ！お、お前！」

「動かない方が良い。その気になればあっという間に殺せる」

「！？」

さっきまでの虫も殺せない様な男の忠告とは思えないセリフだった。彼女の狙い通り恐怖で追いつめることには成功したが、それが『旅人』を追い詰め過ぎた結果なのだろうか。それを確かめようと微動だにしない『旅人』に彼女は顔を向ける。だが、止めるべきだったとすぐに後悔した。見る物全てを凍らせる様な冷たい無機質な眼が彼女の眼と合ったからだ。目が合っただけ、たったそれだけで人殺しも厭わない彼女の全身の毛が逆立つ。

「あ、アンタ、一体、何者、なの？」

震える口で絞り出すように聞く。

それを聞いていないのか『旅人』は黙ったまま、ただジツと彼女を見ていた。

その気があるなら殺すのに躊躇もなく、一瞬で殺される！

まるでロボットののように身動きしない『旅人』に、彼女はさっきの忠告は間違いなく本当だと理解した。

「……ここから出る方法を教えてもらおう」

「はっ、ははっ！ 言っておくけど私を殺してもしたら貴方はここから一生出られない。それなのに答える訳、……ギヤアアアツ！」

精一杯の虚勢を張って彼女が答えたが、その途中で骨の折れる音が鳴る。

すると、彼女の答えは悲鳴へと変わり、辺り一体に悲鳴が響き渡る。見ればニキータの捻りあげられていた右腕に関節が1つ増えたように、腕の真ん中がへし折れていた。

だが、彼女が苦痛に暴れまわろうとも『旅人』は全く気にした様子もなく、表情はまるで変わらずにただ彼女を見ていた。

「あ、あぐっ、痛い……」

「もう一度言う。出る方法を教える」

「し、知らな、ギヤアアアアー！！」

ニキータが全て答える前に今度は彼女の左腕が半ばで折れていた。大量の脂汗を流しながら痛みに耐えるニキータに『旅人』は告げる。

「次は右足だ。出る方法を教える」

「わ、分かった、分かったから、止めて」

力なく告げたニキータだが、頭の中では合図一つで『旅人』を襲うよう、巨人達に命じていた。

もうすぐ5分になり、特殊部隊を受け入れる時間が来る。

どちらにしろ外と繋げなければいけない時間だった。

ここで少しでも陽動が効けば、ひよつとすれば助かるかもしれない。彼女は『旅人』の力を諦め、ひたすらに自分が生き残るためへの算段を組み立てていた。

「こ、このテリトリーはわ、私が集中すればすぐに外と繋がる。ただ、集中には少し時間がかかる」

「よし、やれ」

「こんな態勢じゃできない。せめて座らせて・・・」

『旅人』はニキータを抑え込んでいた手を緩めると、その途端に彼女は走り出した。

逃げたといっても常人レベルでの脚力ではものの数秒で『旅人』に追い付かれる。

彼女に『旅人』の手が触れようとした瞬間、その間に割って入るように大量の触手が『旅人』を襲った。

その触手へと『旅人』が飲み込まれる事で彼女は助かったかに見えた。

だが、それもものの数十秒の話だった。

展開された『イージスの盾』に守られた『旅人』は、その中で雪山で見た『スコルピオン』を作り上げる。

ロケットランチャーの形状をしたそれを触手の中へと突っ込み、ためらいもなく引き金を引く。

すると、0距離で発射された特殊弾頭が爆発し、発生した赤い球体状の炎が触手を全て消し炭へと変える。

伸びてきていた触手を全て燃やすと、今度はその根元である巨人達に向けて『スコルピオン』を次々に撃つ。

動きの鈍い巨人にかわす事など出来もせず、着弾した弾頭の火に次々と焼かれていく。

その隙にニキータは茂みの中へと飛び込み、折れた腕の痛みを堪えて意識を集中する。

腰のアラームが鳴りだすのと同時に『ニブルヘイム』が外との連結を完了した。

巨人達が次々と燃やされる中、ニキータは外からの救助に望みを託した。

「早く・・・早く来なさいよ」

そう呟くニキータだが、その願いとは裏腹に援軍のへりや車の音はまるで聞こえてはこない。

アジア統括長の話では街の手前で援軍が待機しているはずだったが、5分たつと突入する手はずだったが、どこにもその姿は現れない。

「ど、どうして!?!」

「何かは知らんが当てが外れたらしいな」

「!?!」

いつの間にか茂みの前に『旅人』が立ち、ニキータを見下ろしていた。

その手には黒い西洋剣が握られている。

ニキータは巨人に助けるよう命令するが、どこからも巨人は現れな

い。
横目で周囲を見てみるがそこには燃え散った巨人の残骸しか残っては
おらず、魔法で造られた命の無い生物は空气中に分解される様に
散っていった。

「もうお前を助けられる奴はいない。この街で感じる魔力はお前
だけだ」

「そんな、霧のジャミングは効いてないの!？」

「いいや、ちゃんと効いている。ただ、魔力探知を500年もや
つてきた私にはジャミングを無視する術があるだけだ」

「500年……、アンタ一体？」

「お喋りが過ぎた、これが最後だ」

『旅人』は黒い剣の刃をニキータの首に当てる。

「このテリトリーを解除しろ、さもなければ殺す」

「……分かったわ」

ニキータが眼を閉じると、次第に周囲の霧が消えていく。
そして、辺りが大きく地震の様に揺れたかと思うと壊されたはずの
街の灯りが戻っていた。

『旅人』が辺りを見回すとそこは人の生活している様子が見て取れ
る本当のアンールだった。

「テリトリーは解除した。もう何処にでも行ったらいいわ」

「そうか」

それだけ聞いた『旅人』は『天狼』を作り出すと、その切っ先を折った。

それを持ったまま近くの民家の裏側に回ると、そこにはドミトリーが戦闘から避難するように隠れていた。

どうやらフェイリンが死ぬ間際に逃がしてくれていたらしい。

『天狼』の切っ先でドミトリーの手を軽く切りつけると、フェイリンの支配がなくなり、その場に膝をついた。

「い、一体、今までの出来事は何だったんだ？お前ら、何者なんだ？」

「気にしない方がよい。運悪く巻き込まれたが貴方は今後関わらず、いつも通りの生活に戻るんだ。さもなければ死ぬぞ」

何か言いたい事があったドミトリーを『旅人』は最後の一言で完全に黙らせた。

小さく震えるドミトリーに『旅人』はダイヤやサファイヤなど小さい宝石の粒を作り出して手渡す。

「それを金に換えるといい。しばらくは仕事もまともに手につかないだろうからな」

「あ、ああ・・・、な、なあ、お前は本当に瞬なのか？」

ドミトリーもまた今まで一緒にいた青年とは思えない目の前の人物に素直に疑問を投げかけた。

すると、『旅人』は小さく笑うと一言だけ答える。

「・・・まあ、彼の保護者みたいなもんだ。それじゃ」

「お、おい！」

まだ聞きたい事のあるドミトリーだったが、『旅人』は家を飛び超えて消える。

そして、そのまままだ横になっていたニキータへと寄っていき、恐怖に顔がゆがむ彼女を捕えた。

「ひっ！命は助けるんじゃないの！？」

「それは守る。瞬を人殺しにすることはしたくないからな。お前にはもっと聞きたい事がある。ついてきてもらおうぞ」

逃げようとする彼女を脇に抱えると、その場から飛び上がった。

「い、いやあああー！」

ニキータの叫び声が夜空に響き渡った。

街の外れ。

そこでは人気のない道でロビンが近くの岩に腰かけながら煙草をふかしていた。

吐き出す煙が消えていくのを見ていると、不意に彼の視界に空へと飛び上がる瞬の姿とその脇に抱えられたおまけの姿が映った。

どうやら次の目的地も決まったらしい。

「やれやれ片付いたらしいな」

ロビンはそれだけを確認すると、煙草を消して岩から立ち上がる。予測していた通りに事が運んでいるのを喜びながら鼻歌交じりに歩き出す。

その彼の歩く後ろには戦車や輸送トラックが炎上し、その周りには大量の人が血塗れで死んでいた。

更に森の中には墜落したヘリが幾つもあり、その全てが銃による無数の弾痕が刻まれていた。

本当ならこれがアノールへと突入し、今とは違う結果をもたらしていたかもしれない。

だが、それは全て彼の手により全て防がれていた。

「まあ、これくらいは手助けしてやるさ。後は成り行きに任せる
としよう」

そう呟いたロビンは夜の闇へと消えていくように空へと飛び上がった。

第30話：霧の街（6）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとうれしいです。

ようやく霧の街が終了です。

結構強引な展開の気もします。

小説は文法表現的にも展開的にもうまく書くのが難しいですorz

第31話：新たな指示

とある山中の中腹へと『旅人』はたどり着いた。

まるで知っているかのように辺りを見回し、人が登るのを拒むかのような険しい山壁へと手を当てる。

その山壁の一部をいきなり殴りつけたかと思うと、その壁が崩れていき小さい洞窟の入口が現れる。

『旅人』はその中へと躊躇なく入ると長く続く洞窟を進み、少しだけ開けた何も無い空間へとたどり着いた。

そこに抱えていた意識のないニキータを放り投げ、その中間に火のついたランタンを床に置くと重厚な椅子を作り上げてその上に腰かける。

投げられたシヨックで意識を取り戻したニキータだが、周りの様子が意識を失う前と全く違うのに焦り、焦点の合わない眼で『旅人』を見る。

「何処？ここは何処よ!？」

「私の隠れ家の1つだ。ある山の中とだけ言っておこう」

「そんな所に私を連れ込んでどうする気!？命は助けるって」

「言った。だが、私も聞きたい事があると言ったな？」

「・・・ア、アンター一体何者なの？ただの平和ボケした国の学生じゃないでしょ!」

そう言われて『旅人』は少し考える素振りを見せ、しばらくしてから口を開く。

「『旅人』の1人、雨堂 瞬だ。正確に言えばその体にいる別の意識と言った所か」

「な、何よそれ・・・？」

『旅人』について知られている事はニキータも知っているつもりだった。

だが、初めて聞く話に呆けたように聞き返す。

それを見た『旅人』は少しもつたいつけたように説明し出した。

「・・・『旅人』と言うのは人から人へと移るのは知っているだろう。長い時間をかけて体と同化した『旅人』の力、それを渡すために元の持ち主の体ごと『旅人』の力は受け継がれる。その時に元の持ち主の魂も新しい『旅人』へと移る」

「魂？」

「そう、魂だ。魂は存在する限り転生し続け、命あるものとして生まれ、それが死に至り、また別の生き物として生まれ変わる事を繰り返す。だが、『旅人』の場合、大概はさっき言った魂のループへと組み込まれるが、その気になればその『旅人』の中に残る事が可能だ」

そこまで聞いたニキータは大体の事を察した。

目の前にいるのが腐抜けた甘い男などではない事も理解できた。

彼女の顔から血の気が失せ、青ざめていく。

彼女は震える手で指差しながら尋ねた。

「つまりアンタは・・・」

「瞬に託した後、その体に残っている前『旅人』の魂、ヴァネッサ・イーグランドだ」

「ぼ、『亡霊国の血塗れ姫』！！」

ニキータが叫んだ瞬間、その頬を何かが掠めた。

彼女が不思議に思っ手をつくと、その手には血がついていた。慌てて後ろを振り返ると地面に1本のナイフが刺さり、それを見た途端、ニキータの頬に斬られた痛みが走る。

「命が惜しければそう呼ばない事だ。嫌いなんだ、その呼ばれ方は」

「・・・つく！でも何でアンタが出てきたのよ！もうその力はその男の物でしょ！」

「本来ならそうだが、まずい状況で気を失ったからな。まあ、3日前まで平和ボケした国の学生だった男だからしょうがないと言えましょうがないが、『旅人』である以上、そうも言ってもらえん。あまり良い方法ではないが私が出てきた訳だ」

ヴァネッサは深く息をついて椅子の背もたれにもたれかかる。

そして、気持ちを切り替える様に眼を細めて、ニキータを睨みつけた。

突然睨まれたニキータは恐怖からか石になった様に体が固まる。

「さて、今度はこちらの質問という。『W2』の本拠地はいつているか？」

「そ、そんな最重要機密知ってる訳ないでしょ!」

「じゃ、アジア統括支部の場所がいい」

「知らないわ。私はそこに行つた事もない」

「……あの村に研究所があつたのは知っているか？」

「正確な位置は知らない。ただ、他の奴に聞いた話じゃ、脱走者が出て爆破したらしい。今じゃ跡形もないとか」

「なら、どうしてあの村で罫を張っていた？」

「私はただ無線で命令を受けたから魔法を使って、フェイリンの魔法で家族思いなただの女に仕立てられただけ。その後はアンタも聞いてたでしょ？」

「……なるほど、つまり外で活動しているエージェントの1人か。となると、情報はないに等しいな。」

ヴァネッサが理解した様でニキータはほっと胸をなでおろす。これで自分が何も知らない女である事は理解してもらえたと。命は守ると約束した以上、もう解放するだろう。

「も、もういいでしょ？私の知ってる事なんてその程度なの。早く解放してよ!」

「……いいだろう。ただし、一時的に眠ってもらつがな」

「え？眠るって」

ニキータが不思議に思っている間に彼女の腕へ小さい針が突き刺さる。腕の小さい痛みにもニキータは視線をそちらへ向けていくが、段々と視界がぼやけ、腕に針が刺さっているのを眼で捉えた頃には眠りに陥る直前だった。意識もなくなつた彼女はその場に横たわり、ヴァネッサは少し考える様に顎を引いて手を当てる。

「もう時間もない、私に出来る手助けは・・・」

横たわるニキータへと目が言ったかと思うとそれで考えがまとまらなくなり、彼女はすぐに行動に移る。

ニキータの体を脇に抱えて持ち、洞窟から飛び出るとある場所めがけて一目散に走った。

次々と景色が流れていく中で、彼女はある街へとたどり着くと近くの高台へと上る。

そこから見下ろしながら目的の場所を探し当て、小さく笑いながらニキータを見た。

「フフツ、命は助けよう、命はな」

彼女は高台から飛び降りるとその場所目がけて走っていった。

何をするかは分からないが、その口元はこれからの事を考えているのか少し緩んでいた。

真上に輝く太陽からの光が差し込む森の中、そこで瞬は倒れている。

た。
手に何かを握り締め、上から降り注ぐ日差しが彼の臉に差し掛かると、その眩しさに瞬はゆっくりと意識を取り戻して目を開く。
見覚えのない場所に瞬は飛び起き、咄嗟に『盾』を張って警戒したがどこにも二キータの姿も巨人の姿もなかった。

「ここは？一体何が・・・？確か、触手の壁に囲まれてあまりの気持ち悪さに気を・・・」

だが、辺りには触手の一本もなく、気持ち悪いどころか清々しい場所だった。

あまりの記憶違いに瞬は混乱するが、手に何かを握っているのに気づいた。

見るとそれは一枚の紙に包まれた何かの端末だった。

携帯型ゲーム機のようなそれをよく見てみると、所々にGPSと記された文字が印字されていた。

瞬はそれをジッと見ていると、大分前にどこかで見た様な覚えがあった。

「・・・ああ、そうか。賢悟に連れられて、近所の探偵社に見学に行った時見せてもらったGPS追跡用の装置だ」

そこまで分かって多少スッキリした瞬だが、まだまだ疑問は尽きない。

それどころか、なぜ自分がそんな物を持っているのか理解もできない。

頭を悩ませながら目線を下に落とすと、追跡用端末をくるんでいた紙に何かが書かれているのに気づいた。

内容は日本語だが筆跡はまるで何年も日本語を書き続けているかのような達筆で、自分が書くよりも綺麗な字に瞬はますます不思議に

思いながら読み始めた。

『瞬、これを読んでいるという事は意識を取り戻したのだろう。お前は覚えていないだろうが、気を失ったお前に代わって私がお前の体を使ってニキータを倒した。安心しろ、殺してはいない。ドミトリーも解放されて、あの村も元に戻った』

そこで一旦読むのを止めた。

確かに瞬に記憶はないが、誰かが自分の体を使って代わりに何とかしてくれたと書いてある。

それを信じるなら一体どこのだれにそんな事が出来るのか。

瞬自身、まだまだ『旅人』については知らない事が多すぎるため、体を使われたと言われても否定することすらできない。

少し考えてはみても何かをひらめくわけでもなく、とにかく先を読むしかなかった。

『だが、今回の事で分かったはずだ。お前は力は既に持っているが、圧倒的に知識や経験が足りない。言ってしまうえば力が強いだけの素人だ。此処から先は敵も使える手段は全て使ってくるだろう。その時に今のお前ではやられてしまつかもしれない』

ここまで読むと瞬の面持ちは自然と強張った顔へと変わる。

実際、今回の村では気を失ってしまふ事になった。

この手紙の主がいなければ、瞬は今頃此処にいなかったかもしれないのだ。

『そこでだが、GPS端末が指し示す場所へいけ。そこでならお前に足りない物を補ってくれるはずだ』

GPS端末には入力された経緯と緯度が表示され、進むべき矢印が

表示されている。

地図の代わりにこれで場所を探せという事の様だ。

『そして1ヶ月後、お前の持っているGPS端末で受信した場所へと向かえ。おそらく、アジア統括支部へたどり着くはずだ』

「え？一体どうやってGPSを」

『ちなみにその方法を書く気はない。気にせず先へと進む事だ』

「・・・」

なんとなく瞬は嫌な物を感じたが、瞬の事を理解しているらしい人物なら人道的な手段から外れる事はしないはず。そう無理やり思い込んだ瞬は再び手紙へ目を戻す。

『お前に無謀な事を押しつけてしまったって本当にすまない。出来る事なら私がやるべきだったが、どうしても私にはできないのだ。瞬、頼んだぞ。 姫』

「これは・・・姫からの手紙!？」

最後まで読んでようやく誰からの手紙か判明したが、瞬は思いがけない人物に思考が停止する。

なぜ、消えたはずの姫がまた現れたのか？

当然だが、瞬には姫の言っていた魂の概念など知る由もない。

まるで冷凍された様に固まったままの瞬だが、不意に顔を上げるととにかく姫の指示に従おうと決めた。

今は疑問だらけでもここに行けば解決するかもしれないからだ。

とりあえず、持っているGPS端末を受信ではなく、緯度と経度を

直接入力してGPSで場所をナビするよう変える。

目的地へと向かう用設定された端末は矢印が画面上に表示され、瞬はその方角へと向かって歩き出した。

何が待ち構えているのか、不安と期待を胸に抱きながら。

時は瞬が目覚める2時間前にさかのぼる。

二キータは打ち込まれた睡眠薬の効果が薄れ、目をこすりながら起き上がった。

まだ眠気があるが、揺らぐ視界で捉えた見覚えのない場所に思考はすぐに覚醒する。

「・・・っ、ここはどこ!？」

周りはコンクリートの壁であり、ちょうど1人が横になれる程の広さがある正方形型の部屋だった。

ただ、彼女の目の前には壁の代わりに太い鉄の棒による鉄格子があり、外に出る事はできない。

そう、ここは牢屋だった。

何が起きたか理解できない彼女は鉄格子の外を覗きこんでみるが、そこには誰もいなかった。

少なくとも近くにヴァネッサはいないらしい。

彼女はそれを確認すると、一方的に痛めつけられた上に連れられ、た事を悔しがる。

「くそ、あの女!・・・とにかく、ここから出るのが先ね。ねえ! 誰かいないの!？」

彼女が叫ぶと少しして牢屋に面した廊下の奥にあるドアが開いた。そこから不機嫌そうな警官が現れ、彼女の前に鉄格子越しに立つ。ニキータは警官を見た事でここが警察だというのに気づいた。

「なんだ？目が覚めたのか」

「こ、これはどういう事？私が何で捕まっているの？早く出しなさいよ！」

「うるさい！いいか、お前が盗みを働いたのは分かっているんだ。後でみっちり取り調べてやる」

「盗み？一体、何を」

「言っておくが両腕が骨折してるからって同情もしない。おとなしく白状した方がいいぞ。じゃあな」

「ちよ、ちよっと！」

整理が追い付かないニキータを置いて警官は出てきた扉へと入っていった。

また、誰一人としていなくなってしまった留置所。

「私が盗み？・・・っち、あの女の仕業か！？」

腹立たしい怒りが膨れ上がっていくのを覚えながら彼女は理解した。麻酔で眠らせて盗みの犯人に仕立て上げ、警察に連れ込んだのだ、と。

実際は盗みどころではなく、かなりの人数を殺している彼女だが、その罪は『W2』が隠匿している事で表沙汰になる事はなかった。

「つち、しょうがないけど、『W2』に連絡して出してもらおうしかないわね」

次に警官が来たら電話をかけさせてもらおうと考えたニキータはとりあえずベッドに腰を下ろした。

だが、壁に背中からもたれようとした時、警官が出てきた扉が開いた。

彼女は警官が来たのかと体を起して、鉄格子へと寄ったが、扉の中から現れたのは黒いスーツを着た2人の男だった。

男達はニキータと目が合うと、ニキータの牢屋へと足を進める。

その後ろに慌てて追いかけてきた警官が事情を説明しろと喚くが、男達は無視してニキータと対峙した。

「アジア統括支部の命令で迎えに来た。同行してもらおうか」

「あら、連絡する手間が省けた訳ね」

「お、おい！アンタら一体何者だ！？こいつは今から取り調べを無視されようともしつこく叫ぶ警官に、男の1人がしょうがないとばかりに懐から取り出した書類を警官の目の前に突き付けた。

いきなり出されて面食らった警官だったが、半ば奪う様に書類を取る。

それを読んでいくと途端に警官の顔が青ざめ、2歩、3歩と後退して立ち止まり、背筋の伸びた綺麗な敬礼を行った。

「し、失礼しました！」

「分かればいい。この女はある事件の最重要人物だ。連れていく

ぞ」

「はい、了解しました！」

警官は迅速に牢屋の鍵を外すと、壁に貼りつく様に後ろへ下がる。

ニキータは警官の変貌ぶりを笑いながら外へと出ると、2人の男に挟まれる様にして警察を後にした。

小さい警察署の前に黒塗りの高級車が1台止まっており、その後部座席にニキータは座らされる。

すぐに車は走り出したが、男達の間で会話はなく、ニキータへの説明もない。

それが彼女を苛立たせ、ニキータから質問し始めた。

「何処に連れていく気？」

「アジア統括支部だ。気が付いたところには着いている」

その言葉にニキータが嫌な予感を覚えると同時に腕に痛みが走った。見れば腕には針が刺さり、目の前には銃を向けている助手席の男の姿があった。

その男の眼は感情が無いかのような冷徹な眼をしていた。

「ま、またな、の・・・」

猛烈な睡魔に抗う事が出来ず、彼女の意識はそこで途絶え、後部座席にもたれながら眠りへとつく。

完全に意識がなくなつたのを確認した男は銃をしまいこみ、前を向くように座り直す。

運転している男との確認などもなく、車内は静かなままだった。

そんな重苦しい2人とは裏腹に、車は軽快なスピードでアジア統括

支部へと向かっていく。

ある場所へと車は到着し、停止した車から2人の男が降りる。

天井や左右の壁がコンクリートで固められ、2人の目の前には大型搬送用エレベータの入口だけがあった。

そのエレベータの扉が開き、中から白い軍服を着た男達が現れる。

ここは既に『W2』の領域だった。

軍服の男達は足のついた担架を引っ張って車の隣へと横付けすると、車からニキータを引っ張り出して担架へと乗せ、拘束具で体を固定する。

手際よく作業を終えるとその担架をまたエレベータへと戻し、運んできた男達と一緒に下の階へと降りていく。

眠ったままのニキータを乗せたエレベータは深く下がりがり続け、ようやく着いたかと思うと降りたのは運んできた男達だけ。

彼女は更に深い階層にまで連れて行かれ、一番下にまで到達するとエレベータを降りる。

そこは薄暗いコンクリートの廊下が続き、奥には扉が1つあるだけ。軍服の男が担架を押し込むように中へ入ると、そこはドーム状の形をした空間だった。

その壁の上部には見下ろす様な所にガラスが張られ、いくつものスピーカーやカメラが設置されていた。

ドームの中央に彼女が運び込まれると、体を拘束されたまま担架が縦に回転し、彼女は強制的に立たされている様な状態になる。

1人の男が準備が完了した事を伝え、ガラスの向こう側に『W2』のアジア統括支部を任されているやせ細った男が現れる。

その眼は充血し、どことなく様子がおかしく、鼻息も荒い。

「覚醒させる」

その一言にニキータの側にいた男が注射器を取り出すと、彼女の首筋に針を刺して中身を注入する。

すると、今まで何の反応もなかったニキータが呻きだし、瞼をゆっくりと開いていた。

今の自分の置かれている状況がさっぱり分からない彼女は自由に動かない体に焦り、暴れ出す。

「やめろ！私をこれ以上怒らせたいのか！？」

一喝された彼女は相手が支部長であるのに気づくと、萎縮した様に動きを止める。

まるで蛇に睨まれた蛙の様に。

「さて、どうなったのか説明してもらおうか？」

当然ながら、統括長に報告を求められる。

統括長には最後に行ったフェイリンの裏切りを伝えるメールが最後ののだ。

彼女の頭の中で色々な事が行き交い、最善な手段を考える。

何せ、彼女は『W2』を裏切ろうとしたのだ。

「え、あ．．．は、はい、私は裏切り者のフェイリンを殺害したのですが、その時に『旅人』の洗脳も解けてしまい、そして『旅人』に『ニブルヘイム』を解除されました。その時に私は眠らされて連れて行かれ、私が何も知らないというのが分かれると私を窃盗犯と偽り、警察に逮捕させたようです」

「ほう、つまりお前は任務を全うしたが『旅人』には叶わなかつ

たという事か」

「そう・・・ですね」

これでうまく行った。

任務は失敗したが『W2』の任務は負傷しても忠実に行った。

失敗で今の立ち位置よりも低い立場になるかもしれないが、今後機会がある事を考えればこれが一番いい方法だと彼女は考えていた。これで裏切った事はごまかせると確信していた。だが、次の統括長の一言は予想外の一言だった。

「私に嘘をつくとは良い度胸だな」

彼女の心臓が跳ね上がる。

「え、う、嘘？何の事です？」

「とぼけても無駄だ。お前が裏切り、フェイリンとマクシムを殺害した上にフェイリンが洗脳した『旅人』を奪おうとしたのも分かっている」

彼女の視界が映りの悪いテレビの様に歪む。

外界とはやりとりできないはずの空間で起こった事をどうして統括長が把握しているのか。

その答えが彼女には分からず、ごまかそうにも統括長がどこまで知りえているのかが分からない。

彼女は何も言えず、ガラスの向こうにいる統括長の視線から眼を背ける。

「なぜ、私が『ニブルヘイム』の中での事を知っていると思う？」

「これがあるからだ」

ニキータは伏せていた顔を上げると、統括長が何かを持っているのに気づいた。

細長い形状のそれはフェイリンの腕に巻かれていた定時連絡用のポイスレコーダーだった。

あの女、死んでからも余計な事を！

ニキータは歯ぎしりしながらフェイリンを恨み、その様子を見た統括長はやはり間違いないと確信した。

「これにお前が裏切ったからの音声はすべて記録されていた。『旅人』を奪い取るうとする様子もな」

「そ、それはフェイリンの用意した偽物です！本当は私は任務を！」

「黙れ！どうやってフェイリンがお前の音声まで用意できる？お前が協力したとでもいうのか？どっちにしても貴様は裏切った事になるがな！」

「ぐっ！」

彼女は言葉に詰まり、何も言う事が出来なくなる。

観念したように頭を俯け、もうどうしようもない事を悟ると自然と体が震えだした。

何しろ、裏切った相手は使う魔法すら下の者達には秘密とされ、反抗する者は容赦なく殺されると噂されている統括長なのだ。

「・・・さて、お前の処罰だが」

彼女は息を飲む。

どう転んでも死ぬのと同様な罰を突き付けられるに決まっているからだ。

「地下牢にて10年の禁固刑とする」

「えっ、禁固刑・・・？」

一瞬、ニキータは聞き間違いかと思った。

てつきり銃殺でもされるかと思っていたが、禁固刑10年というのはあまりにも予想外だった。

なんだかよく分からないけど、助かったの？

そう受け取った彼女だったが、そう考えるにはまだ早かった。

統括長は安心したニキータを見て、口の端を釣りあげながら続けた。

「ただし、服役する間、魔法実験の被検体として過ごす事を命じる」

「じ、実験！？そ、そんな！この魔法実験なんて言ったら・・・」

彼女は口が開いたまま言葉が出なかった。

ここで行われている魔法実験も噂でしか知らないが、あまりの凄惨な生体実験により、変死した死体が次々と出来上がっていくと聞いていた。

10年もの歳月を生き残れる訳はない。

つまり、これは事実上の死刑宣告と同様だった。

それもただの一瞬で死ぬ様なものではなく、生地獄を味わい続けて最後に死ぬといった拷問の様な話だ。

「お前には特殊な魔法があるからしつかり役に立て、以上だ」

「そんな！？ま、待つてください！私が悪かったんです！心を入れ替えて忠誠を誓うので被検体は止め」

「残念ながら人の信頼をぶち壊してまた元に戻すのには長い年月がかかるんだ。私はそこまで気長ではないし、君が信頼を取り戻す方法はもうない。私は忙しいんだ、後は任せたぞ」

その言葉を最後にニキータが引きとめる言葉など聞こえないかのよう
に統括長はガラスの向こう側から姿を消した。

目尻に涙を浮かべながら統括長に慈悲を求めたニキータは泣き喚ぎ、
そのまま側に控えていた男が担架を引つ張っていく。

「い、いやーっ！！助けて！！」

男が入ってきたのは逆の扉を開くと、そこからむせかえる様な血
や焼け焦げた臭いが溢れだし、それに乗って悲鳴や呻き声がニキ
ータの耳にも届く。

恐怖にひきつった顔で必死に助けを求めても男はまるで反応はなく、
扉の中へと担架を引つ張っていく。

担架は暗闇の中へと消えていき、扉が閉まると彼女の叫びもホール
に届く事はなかった。

第31話：新たな指示（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

基本的に土曜日、日曜日の深夜投稿です。

寒くなってきてキーボードを使うのも少し躊躇するようになってきました。

素手で書いているものの10分程度で完全に手が冷え切り、小説の進み具合まで遅くなる始末。

早く暖かくならないものか。

第32話：幻想支配者（1）

通り抜ける風の音しか聞こえないほど静まりかえった村があった。村とは言っても真ん中に大通りがあり、その両脇にほんの数軒分の建物があるだけで、村と言うよりも集まりと言った方が正しいかもしれない。

周りには何もなく、ただ平地がずっと続くだけの場所だが、その集まりには人氣が全くない。

ゴーストタウンと化した村は、まるで地の果てから続く道の終着点の様だ。

そこに1台の赤い車がやってきた。

運転していた初老の男は道が終わっているのに気付くと車を止めて辺りを見回す。

「一体、ここはどこだ？」

見回す男の眼に立てられていた看板の文字が目止まる。

『ようこそ、シカラフへ』

男は思っていた場所とはまるで違う所へ来てしまったらしく、ガツカリしたような表情を浮かべながらその場でUターンし始めた。

ところが男の不運は道を間違えただけでは終わらず、車が急に普段聞かない変な音を上げ始め、男が不思議に思った途端に動かなくなる。

男は焦った。

なんせ、こんな場所で車が動かないとなると目的地に着くどころか、遭難したも同然だったからだ。

「おいおい、頼むよ！動いてくれ！」

何度キーを回してみても、エンジンがかかる音は聞こえず、諦めてボンネットを開けてみる。

すると、中からは黒い煙が上がリ、男はむせながら中を覗き込んで見るがどこが悪いのかすら男には分からない。

諦めて車を呼ぼうとしたが、持っていた携帯は当然の様に繋がらない。

なんせ、周りは何もない平地であり、携帯の基地局なんてある訳がない。

「くそつたれ！こんな場所でどうしろってんだ！」

男は行き場のない怒りをぶつける様に車を蹴ると、せめて電話はあるだろうと辺りを探してみる。

公衆電話らしいものは見当たらないが、近くの電柱から1軒の寂れたバーに向かって電話線が伸びているのに男は気づいた。

その希望にすぎないようにバーの中へと入ると、明るい外とは打って変わり、中は薄暗い上にカビ臭く、その臭いに男は顔をしかめる。

当然の様に誰もおらず、男はその中へと入っていくとカウンターの上に電話機があるのを見つけた。

今では使われていない様な古い型の電話機から受話器を手に取った時だった。

「アンタは誰だい？」

「おわっ！」

突然、店の奥から声が聞こえ、男は心臓が飛び出そうなほど驚き、その拍子にバランスを崩して床に倒れた。

顔を強打し、痛みをこらえながら男が顔を上げるとそこにはいつの間にか老婆が立っていた。薄暗がりで見えないが、老婆は心配しているのか男に声をかける。

「大丈夫かい？」

「あ、ああ、大丈夫だ。それより、急に声をかけないでくれ。思わず心臓が止まりそうになった」

「そりゃ悪かったね。ただ、アンタも悪いんだよ？勝手に電話を借りようとするんだから」

そう言うと老婆は男に背を向けて壁のスイッチを押す。すると、頭上の古ぼけた電球に電気が走り、室内を明るく照らし出した。

ようやく男の目に老婆のハッキリとした姿が映ったが、彼女は腰が曲がり、見た目は80はありそうなほど高齢の様だった。

立っているのがつらいのか、近くの椅子に腰かけると男の方へ向き直る。

「アンタ、一体何しに来たんだい？こんな場所には何も無いよ？」

「いや、実は道を間違えてここまで来てしまったが、生憎と車が故障してね。出来れば修理屋を呼びたいんだが、携帯が使えない。金は払うから電話が繋がるなら貸してくれ」

「そりゃ災難じゃったな。その電話は通じ取るから好きに使ってええ。金は要らんからその修理屋が来るまで話し相手にでもなってくれんか？」

「そんな事でよければ付き合いますよ」

男がそう言うと老婆は嬉しそうに背もたれに背中を預けて一息ついた。

電話をかけたが男は不思議に思った。

話しをしているのは構わなかったが、そもそも彼女はなぜこんな辺鄙な場所にいるのかと。

老婆が住む環境にしては過酷過ぎる場所だ。

番号案内でどうにか近くの街の修理屋に来てもらうよう頼んだ男は、得体の知れない老婆の相手をしようとして電話を切って後ろを振り返った。

だが、さっきまでいたはずの老婆の姿はそこにはなく、その姿はバーの中には見当たらなかった。

てつきり外にまで出たのかと外へと出てみた男だが、どこにも老婆の姿はなかった。

男はまるで幽霊とでも会話していたような奇妙な感覚を覚える。

諦めて中で待とうと振り返った瞬間、すぐそこに老婆の姿があった。

「うわっ！あ、貴方はマジシャンか、何かか！？」

「何の事じゃ？修理を呼べたのなら私の相手をしておくれ。少しは食べ物もある」

老婆が指さす先には確かにテーブルの上にパンやチーズ、それに果物などが置かれていた。

一体、何時の間にここに並べたんだ！？

男がバーを出た時には間違いなくなかった食料が、外に出てからもの5秒ほどで用意されている。

それどころかバーの中には老婆の姿が無かったはずだった。

まるで魔法か手品でも使った様な老婆に男は段々と不気味さを感じていた。

そんな事など気にならないのか、老婆はさつさと席に着くと男が対面に座る様に指示し、男は戸惑いながらもそれに従って席に着く。

老婆が会話の主導権を握る形で話は始まったが、聞いてくるのは最近の外の様子ばかりだった。

彼女はここ最近はこの一帯から出た事がないらしく、外の事情には疎いため、男から聞くこととしたというのだった。

こんな辺鄙な場所で生活なんて出来るのか？食料は？水は？どうしてここに？

話していても男の中での疑問は膨れ上がる一方だった。

一通り最近の外の様子を話し終わると、今度は男がたまった質問を聞きだそうとした時だった。

外の道路に何台もの黒塗りの4WD車が走り、渋滞でもしているかのように行き止まりで一直線に並んで止まる。

「おや、またお客さんだね」

老婆は穏やかにそう言い、男はてっきり修理屋が来たのかと待っていたとばかりに外へと出る。

だが、男の目に明らかに修理などとはかけ離れた車に合わせて、黒いスーツを着た得体の知れない男達が下りてくるが映り、異質な彼らに男は足を止めた。

「な、なんだアンタ達？」

「お前は・・・違うようだな。そこをどけ！その中の者に用がある」

スーツの男達の手には様々な重火器があり、その銃口がバーの入口

を塞いでいた男へと向いた。

男はいきなりの脅しに慌てて入口から離れ、自分の車へと走る。まさか、あの老婆をこんな連中が殺しにでも来たのか!?

まるで戦争でも起こすかの様な装備の男達に、男は小刻みに震えながら自動車の陰に隠れて様子を窺う。

それを確認した1人の男がバーを指差すと、男達が半分に分かれて片方は入口へ、もう片方は裏口へと回る。

別れた男達は突入する入口の周りへと張り付いて息を整える。

張り詰めていく空気の中、耳に取り付けられた無線に突入の指示が入った。

次の瞬間には入口の連中が中へと突入し、椅子に座っていた老婆を見つけるとその銃口を老婆へと向ける。

「こいつだ!」

「アンタら、一体何だい?」

「とぼけるな、お前が魔法を使うのは分かっている。俺達と一緒に来ればよし、そうでないなら・・・」

後は分かるだろう?

言葉の後は男が言わずとも銃を構える仕草と態度が物語っていた。

ところが老婆はまるで慌てる様子もなく、男達を一通り見回すと落ちついて言い放った。

「お断りだね」

「何の魔法か知らんが俺達相手に生き残れると思ってるのか?」

「試してみたらどうだい?」

「いいだろう、撃て！」

その言葉を合図に次々と老婆に向かって銃弾が吐き出され、まるで大群でも相手にしているかの様に手榴弾やグレネードランチャーの弾までも飛ぶ。

木製の机をただの木屑に変える程の銃弾の後に爆発が老婆を中心に巻き起こる。

爆発で起こった衝撃は机やイスを吹き飛ばすだけでなく、木造のバ―を軋ませ、壁や天井へと火をつける。

辺りには粉塵が立ちこめ、男達からは老婆の姿は見えなくなっていた。

だが、彼らはあの攻撃の後でも警戒を緩めず、銃口は老婆がいた場所を向いていた。

全員の視線は一点に集中していたが、一番後ろに立っていた男の後ろに浮き出たように人影が現れる。

男に向かって人影から手が伸び、何も気づかない男の首を掴んだかと思うと次の瞬間に男の首はあり得ない方向へと曲がった。

その音に気付いた男達は一斉に銃口をそちらに向ける。

ところがその人影はまるで幻の様に消えてしまい、今度は裏口側から突入した男の首がへし折れ、男が倒れた後にそこには何もいない姿が捉えられず次々と仲間が殺られていく中、男達の恐怖と焦りは高まるが迂闊に発砲はできない。

辺りを警戒しているが次々と仲間は殺られていき、ようやく視界を塞いでいた粉塵が消えると20人はいた男達は半分にも減っていた。

そして、どこにも老婆の姿はなく、ただ砕け散った木片や火がついた机が転がっているだけだった。

「くそ！探せ！どこかにいる」

「おやおや、最近では礼儀がなくなってないね」

その声に全員が銃口を上へと向ける。

そこには容姿からは想像がつかない、右腕の力だけで天井の梁に掴まってぶら下がる老婆の姿があった。

不思議な事に銃弾による傷や爆破による火傷もないどころか、服に埃すらついていない。

「撃てえ！うおおおお！」

男達は仲間を殺された恨みを晴らすべく次々と銃を撃つ。

だが、その銃弾は老婆に当たる直前で見えない何かに弾かれ、次第に男達も気付き始めた。

1人の男が爆炎の合間から老婆の妙に落ち着いた表情で見下すの顔を見た。

その途端、自分の首に死神の鎌がかかっているかのような死の錯覚を覚え、体中に吹き出すような冷や汗をかきながら呟く。

「ば、化け物」

その言葉はウィルスの様に全員の耳から恐怖を伝染させ、次第に顔が青ざめていく。

コイツは殺せない化け物だ！

全員の考えは自然と一致し、まるで意思を共有しているかのようにその場から一斉に離れた。

「やれやれ、ちよっかいを出すのは構わないけど、自分の手を全く汚さないんだから困った奴らじゃ。さて、さっさと片づけるとしよつかね」

老婆はその言葉を皮切りに天井から落ちると、ありえないほどの俊足で男達を追いかける。

そして、背中を向ける手近にいた男を捕まえ、恐怖に歪む顔を見ながら首を折った。

その調子で次々と殺していく。

老婆が屈強な男達を1人ずつ首を折って殺していくなどホラー以外の何物でもない。

仲間の悲鳴を聞きながらも後ろを振り返らず、生き残った男達は車へと乗り込んで急発進させた。

逃げられた車はたった1台だったが、その車内の男達は助かったと安堵していた。

道路の先に老婆を見つけるまでは。

「ヒイイツ！や、奴だ！」

「構わん！轢け！」

車は老婆目がけてスピードを上げる。

老婆はそれを受けてか、その場から逃げだしもせず、何処からともなく2mはあるつかという剣幅の太い大剣を取り出して両手で握る。

それはまるで恐竜でも狩るかのような剣だったが、人が持つとは思えない様な規格外の物だった。

老婆はその剣を軽々振り回して見せると弓の矢を射る様に後ろに引いて構える。

やがて車が目前にまで迫り、老婆へと突っ込んできた瞬間、老婆は横に飛び退きながら大剣を横一文字に振るった。

車と老婆が交差し、車はそのまま走り抜ける。

上部が無くなった状態で、だ。

老婆の振り抜かれた大剣により車体からエンジン、男達まで全て真

つ二つに押し潰されたように断たれ、置き去りになった上部も走り去った下部も爆発する。

「これで全部・・・あゝ忘れとったわ」

老婆は爆発などそつちのけで何か思い出し、大剣を消してしまうと俊敏な足でバーにまで戻る。

そこには故障して止まった車の中で地震でも起こった様に震える最初に来た男がいた。

男は壊れているなどお構いなしに何度もエンジンをかけようとしていた。

「その車は修理待ちじゃなかったのかい？」

「ギヤアアアア！こ、殺さないでくれ！俺は何も見っていない！」

今までの一部始終を見ていた男は涙を流しながら懇願した。

だが、目撃してしまつた以上、口封じされるのも分かつていた。

運悪く道を間違えたためにこんな事に出くわした自分の不運を呪い、必死に助けしてくれるよう願つた。

ところが、そんな男の必死さとは裏腹に老婆は困つた様な表情を浮かべ、何かを男の前に落とした。

それは車のキーだつた。

意味が分からず、男が顔を上げると老婆は笑いながら言つた。

「殺す？とんでもない。私は理由もなく人殺しはしないよ。さっきの連中は私を最初から殺そうとしていた悪い連中だつたからね。ほら、連中の車のキーを上げるからそれで出ていくと良い」

良くは分からないが、とにかく助かつた事だけは理解した男はキー

を拾い上げると車に乗り込もうとする。
その男の肩に老婆の手がかかり、老婆は力づくで男を引き寄せて一言だけ耳元で呟いた。

「ただし、ここでの事を言つと・・・」

「わ、分かりました！言わない、絶対に言いませんから！」

それに満足したように老婆は手を放すと、男は抑え込まれた反動を放つように車に飛び乗り、車を急発進させる。

老婆は手を振りながら笑顔で見送る中、車はあっという間に視界から消えた。

すると老婆の振る手が止まり、塵気楼のように老婆の姿が歪み始め、段々と別人へ変貌していく。

変化が止まったその姿は流れる様な金髪をショートカットにした見た目15、6歳位の少女だった。

「場所もばれてるようだし、何時になったら私の待ち人はくるのやら」

彼女はため息を1つつくと、壊れかけのバーに手を当てて大剣の時の様に消しさる。

そして、木片1つすら無くなるとそこに壊れる前と全く同じバーが瞬時に出来上がる。

一仕事終えたように少女は手を払い、空に向ける様に広げた手の上に写真を出し、それをジッと見つめる。

そこに映っていたのははしゃいでいる彼女と静かに佇むヴァネッサ・イーグランドの姿だった。

「お姉さま・・・」

寂しげに一言だけ呟いた少女はまた老婆の姿へと変わると、バーの中へと消えていった。

「報告します、シカラフの魔法調査に向かわせた連中の連絡が途絶しました」

深く椅子に腰かけ目を閉じていたアジア統括支部長はゆっくりと目を開き、報告を行う若い女性隊員に目を向ける。

彼女は恐怖の象徴でもあるアジア統括支部のトップの前で萎縮し、緊張してか若干声が上ずっていた。

支部長はしっかりと彼女を下にくまの出来た眼で捉えると、彼女はそのまま続けた。

「衛星からの映像を分析している限りでは『旅人』のナンバー4の可能性が高いとの事です」

「・・・新人狩りで忙しいこのタイミングでまた別の『旅人』か。奴らに仲間意識はないと思っていたがな」

「どう・・・されるんですか？」

困惑した様に佇む彼女から視線を外した支部長はPCへと視線を移す。

そして、キーボードとマウスで画面を変え、今現在で報告されている『旅人』の所在MAPを表示し、そこに過去の経路を表示して考え込む。

そこで何かに気づいたらしく目を見開くと、彼女へと向き直った。

「どうやら新人はそこに向かっていているらしいな。合流されたら手を出しにくが、アレを試す機会でもある、か。『ミヨルニル』を準備させる」

「『ミヨルニル』をですか!？」

「シカラフ周辺に人はいないのだろ? 試した所で問題はない。他に通達は出しておくからさっさと行け」

「は、はい!」

女性隊員はドアから出ると急いで命令を伝えに走る。

支部長はもう一度椅子に体を深く静めると、これで安心して眠れる日々が来る事を願い、根回しのために電話へと手を伸ばした。

姫から指定された場所を目指していた瞬。

途中で何度か『W2』に追いかけられたが、どうにか撃退か逃走をしているうちに出発してから1週間程経過していた。

と言っても、指定された場所もロシア西部にあるらしく、東部から西部までまるで大陸を横断しているほど長い道のりだった。

公共機関なども使えず、ましてや車も運転できない彼には走る以外に方法がなく、ひたすら走り続けた。

だが、その甲斐あってかようやく目的地にまでたどり着きそうだった。

周りには何も無い道路が1本だけある場所をGPSナビに従って瞬

は走っていた。

後もう少しすればたどり着くところまで来た時、ちょうど前から車が走ってくるのが見えた。

瞬は慌てて足を止め、ゆっくりと歩いて車をやり過ぎそうとする。だが、猛スピードで走っていた車は瞬の近くで止まったかと思うと、窓が開いて血相を変えた初老の男が顔を出した。

「君！どこに行く気だ！まさか、この先の村か！？」

「そ、そうですけど」

「悪い事は言わない！すぐに引き返しなさい！私が近くの街にまで送り返すから！」

男の剣幕に瞬は思わずたじろぐが、目的がある以上引きさがれはしなかった。

「残念ですけど用事がありますから。どうかしたんですか？」

その素直な質問に男は答えようとした。

だが、脳裏にあの老婆が浮かび、身の安全のため自然と口を濁す。

「い、いや・・・、その・・・、得体の知れない連中が大勢いるんだ。危険な連中だ！」

「それなら大丈夫です」

「ど、どうしてだ？」

呆気にとられる男に瞬は笑顔を浮かべながら言った。

「僕、それなりに強いですから」

「……」

男は上から下まで瞬の体を見るが、どう見ても強い男には見えはしない。

それどころかいたぶられて殺される様な優男だ。

だが、この東洋人はどうしても男の話に乗りそうにもない事は男にも分かった。

「私はもうこれ以上止めはせん。いいな、忠告はしたからな？」

そう言うと車は走り出し、また猛スピードで走り去っていった。

取り残された瞬は男の言葉から『W2』が手をまわしているのかもしれないと先を急ぐ。

すると、道の途中で上部と下部に分かれた黒こげの車の跡があり、瞬も足を止める。

「う……、ひどい」

瞬は思わず袖で鼻と口を覆い、目を伏せたくなるような惨劇の跡を見る。

車の中には4人ほど乗っていたようだが、生きている者などいるはずもなく人だった物が残っているだけだった。

彼が言っていたのはこれの事か。

そう納得した瞬だが、問題はこれを行ったのが誰か、もしくは何かという事だった。

かろうじて残っていた車体の分かれている部分は斬れている訳ではなく、力で無理やりねじ切られた様な跡だった。

魔法知識も警察の鑑識の様な知識も持ち合わせていない瞬には、何が起こればそうなるのか見当もつかない。

とにかくこの先に何かがあるのだけは確信すると、そこから先へと走る。

次第に道の終点である小さな集落が見えてきたが、そこも惨劇の跡だった。

黒いスーツの男達が首の骨を折られて次々と死んでいたのだ。

燦々たる状況に瞬はその場で立ちつくしていたが、ふと手に持っていたGPSから小さく音が鳴っていたのに気づいた。

GPSが指示していた場所に到着したと告げていた。

次から次へと瞬の頭には疑問が湧くが、とにかくどういふ事が起こったのかを調べ始めた。

見るからに一方的な殺戮が行われたようだが、男達も抵抗したのか銃には弾薬が残っていないものばかりだった。

ただ、ここにその薬莢は落ちてはいないし、戦ったような跡も見えない。

一体どういふ事なのか瞬には分からなかった。

だが、身に危険を及ぼすほどの何かしらがあるのはまず間違いない。それだけは理解した瞬は麻醉銃を生成し、辺りを注意深く見回す。

敵らしい者も見つからず、試しに魔力探知をやるうとした時だった。

「また客かね」

瞬はその声に素早く反応し、振り向きざまに麻醉銃を構える。

ところがバーの入口に立っていたのは、腰の曲がった老婆だった。なんでお婆さんがこんな場所に？

素直に瞬はそう思い、あまりに場違いな老婆に面食らってるで時が止まった様に麻醉銃を構えたまま固まっていた。

「いきなり銃を向けるなんて感心しないね」

「あ、ああ、すみません」

嫌そうな顔を浮かべた老婆に慌てて瞬は麻酔銃を隠し、謝った。

「あの、ここで一体何が起こったんです？」

「はあ？何の話じゃ？」

「あそこの死体・・・あれ！？」

瞬はさっきの男達の死体があつた場所を指差したが、そこには死体の影も形もなかった。

それどころか銃や男達が乗ってきたであろう車、遠くで転がっていた上下に分かれた車も全て消えていた。

「そんな馬鹿な！」

瞬はまるで白昼夢を見ている様な気分だった。

触った感触もまだ指が覚えていたため、さっきのは本物だと自分に言い聞かせながら老婆へと訴えかける様に言った。

「さっきまでそこに男の死体や黒こげになつた車があつたんです
！」

「どこにもないじゃないか？」

「本当です！そこに死体の山が・・・」

「長い道のりを移動してきて疲れたんじゃない？ほら、中で休んで

「いったらどうじゃ？」

笑って瞬に休むよう老婆は勧める。

瞬はさつき見たはずの物に戸惑いを覚えながらも誘われるままにバーの中へと入り、手近な椅子の上に腰かけた。

その真向かいに老婆は座ると、笑顔を浮かべながら瞬へと問いかけた。

「ところでアンタは何をしにこんな場所に来たんじゃ？」

「ある人にここに来るよう言われたんですけど……、どういう事なのかさっぱりで」

困った様に瞬が言つと、老婆の目が瞬が気づかない程度に細く鋭くなっていく。

「ほう、指示されてか。見た所東洋人の様じゃが？」

「日本人です。名前は瞬と言います」

「……そうか、瞬か」

名前を呟きながら老婆は顔を伏せた。

何か変な事でも言ったのかと瞬は気に向け、老婆の肩に手をかけようとした時だった。

突然、老婆の体がぶれたかと思うと、既に瞬は吹き飛ばされてバーの外にまで叩きだされていた。

その腹には深くめり込んだ拳の跡があり、不意に訪れた強烈すぎる痛みには瞬は苦悶の表情を浮かべ、地面へと叩きつけられる。

「ガハッ！・・・ゴフッ！」

腕で体を起こし、土下座する様な形になった瞬は口から大量の血を吐きだす。

肩で息をしながら態勢を整えようとするが、銃で撃たれた方がましだと思えるほどのパンチに思う様に体が動かない。

「あなたがお姉さまの後継者？全く話にならないわ」

苦しみの中で瞬は顔を上げると、バーから老婆が出てくる所だった。ゆっくりと1歩ずつ瞬へと歩みよると同時に老婆の姿は歪むように変貌していく。

瞬の前へとたどり着くと老婆の姿は何処にもなく、そこにいたのは金髪の少女だった。

彼女は呆れた様な表情で瞬を見下していた。

「なんでお姉さまは自分の命まで捨てて、こんな・・・こんな奴を！」

少女は怒りにまかせて咳き込む瞬を思い切り踏みつけた。

あまりの力に地面にヒビが入り、瞬の強化されているはずの体も骨は砕け、内臓は破裂寸前だった。

「ガッ！ガハッ！・・・う、うっ」

瞬の意思とは無関係にゆっくりと閉じていく視界の中、手を伸ばして少女にやめるよう伝える。

だが、そんな事などお構いなしに少女は手を払いのけると、とどめの一撃として瞬の顔面を殴りつけ、瞬の意識は完全に飛ばされてしまった。

ピクリとも動かない瞬を見下ろす少女は少しは怒りが晴れたのか、肩を下ろす。

その体格に見合わない力で楽々と瞬を担ぎあげてバーの中へと入り、そこらへんに放り投げると窓際の席へ座る。

「なんだってこんな奴なんか・・・」

少女は小さく呟くと物思いに耽る様に何処までも続く空を眺めていた。

第32話：幻想支配者（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

あけましておめでとございます。

投稿を始めて2回目の正月ですが、あと何回迎えるのやら。

投稿は遅いですが、今年もよろしく願いいたします。

第33話：幻想支配者（2）

傷だらけで常人であれば死んでいて当たり前の傷を負った瞬間。

意識はないが、仮に意識があれば激痛に叫び、体を動かすことすらままならないだろう。

だが、『旅人』の力により、体の傷はゆっくりと塞がっていき、内臓や骨も傷つけられる前へと戻っていく。

まるで逆再生の映像を見ているかのよう。

ものの1分としないうちに見る見るうちに傷が治っていくと、横たわっていた瞬間に大量の水が降り注いだ。

「・・・う、冷たい」

完全に飛んでいた意識が冷たい水で強制的に覚醒させられると、瞬はうつすらと目を開いた。

直前の事は覚えているらしく、体を動かしてみると痛みはなく、支障もまるでなかった。

瞬はその場でゆっくりと立ち上がり辺りを見るが、どこにいるのか見覚えはなかった。

意識を失ってる間に建物の中へと運ばれていたものの、寂れたバーにはさっきの少女どころか誰もいない。

傷はまだ治療されている途中らしく、起き上がって歩くと体が痛むものの瞬は痛みなど気にしていられなかった。

さっきの人外の様な力を持つ少女、おそらくそれが姫の言っていた目的なのだろうと考えていたからだ。

瞬にはよく分からなかったが、ロビンと違って瞬に対し、憎しみを抱いていたようだった。

だが、瞬も考えてはみるものの、彼女に今まで出会った事はない。ひょっとして彼女は・・・。

そう考えていた時だった。

「おい、私はここだ」

ふと上から落ちてきた声に、瞬は上を向いた。

すると、そこには最初からいたのかさっきの殴り飛ばした少女が梁の上に立っていた。

上から睨みつける少女には可愛らしさもまるで感じられない。

「あの貴方は『旅人』ですよ？こつちに降りてきてもらえません？」

「断る、貴様にこれ以上近寄りたくもない。お姉さまの頼みだからしょうがないけど、私はお姉さまの命を奪った貴様が嫌いだ」

「・・・命を奪った？ひょっとして姫の事ですか？」

ずっとボケたような返答を瞬が返すと、少女の眉間に何重ものしわが寄り、イラついた様に叫ぶ。

「そうよ！貴様のせいで私を置いて1人で旅立ってしまったお姉さまの事よ！貴様は一体お姉さまの何なんだ！」

「姫の・・・んゝ・・・そう言われるとよく分からないな」

よくよく考えなおしてみた瞬だが、あくまで姫は命の恩人という人だった。

姫の事はよく分からない以上、他の関係性など瞬が知るはずもない。ただ、初対面の時に姫はどういう訳か瞬を知っていたようではあったが。

「はつきり答える！」

「分かりません。ただ、僕と友人が姫に命を助けてもらったというだけの関係です」

キツパリと少女に言い放った瞬だが、少女は呆氣にとられて固まっていた。

「それだけ？」

「それだけ、って言われても。命を助けてもらったんですから十分じゃないですか？まあ、その代わりに『W2』を壊滅させてくれとこの力ともども託されたんですけどね」

「なんでお姉さまはこんなボンクラに・・・」

消え入る様な声で少女は呟くと呆れたように下へと降りた。小難しい顔をしながら少女は床の上へと降りると、改めて目の前の男を見回す。

様々な憶測が少女の脳内を駆け巡るがどれにも証拠などある訳がなく、ただの机上の空論でしかない。

だが、理由は分からないものの長く付き合いのある自分よりも、そこから辺にいそうな男に託したのが少女は気に入らなかった。

そして、お姉さまと敬愛する姫の命を奪うことになった事も。

お姉さまの真意は分からないがその見極めを行うべく少女は瞬を見回すが、とても『W2』を潰せるような様には見えない。

「あの、多分、僕はここで鍛えてもらうらしいんですが？」

瞬はそう言つと姫が書き残した手紙を差し出す。

少女はそれを見ると、その字が間違ひなくお姉さまの字であり、中の文も最後に会つた1年前に依頼された内容に告示している事にも気付いた。

「ふん、お姉さまの頼みだから仕方ないけど、全て終わつたら私は貴様を殺すかもしれないわ。覚悟しておくことね」

最後に一睨み効かせるが、瞬は笑いながら答えた。

「はい、よろしくお願いします！」

清々しいくらいに気持ち良く一礼されて少女は面食らつた。

殺すと言われても、顔色一つ変えずに頭を下げる。

さつきも死ぬ寸前まで追いやつたはずなのに、まるで気にしていない様に少女に話しかけてきた。

一体何なんだ、こいつは？

少女は困惑しながらも背中を向けて、バーの外へと出ようとした時だつた。

「あ、その前にお名前を聞いてなかつたんですが？」

少女は後ろを向かずにそのまま歩きながら答える。

「イリア・クリュンシフだ。呼ぶ時はイリア様だ。分かつたな？」

「はい、イリア様」

あつさり笑顔で従つた瞬にイリアは肩透かしを食らつた様に膝が折れ、足が止まる

いきなりの高圧的な態度に少しは反抗したりイラついた様に返すものだが、微塵もそんな気は感じられない。

「・・・な、何なのこいつ？」

イリアは瞬のせいで調子が狂った様に感じながら外に出るとその後に瞬も付いて外へ出る。

すると、さっきまでとは明らかに外の様子が違っていた。

いや、瞬からすればさっき見たはずの景色が広がっていた。

頭が変な方向に曲がった黒いスーツの男達の死体、何台もの車、そして、遠くには黒こげになった車の残骸。

ここに最初に来た時に見たはずのものばかりだった。

瞬はすぐに死体に手を触れてみるが感触は間違いなく本物だった。

「やっぱり見間違いじゃなかった！でも、さっきまでここには・・・」

言葉を途中で止めると瞬はイリアを見た。

視線だけでこれがイリアの仕業かと問いかけた瞬に対し、イリアも口の端を釣りあげて笑って返す。

「一体どうやって・・・、魔法、ですか？」

「そんな簡単に教える訳ないでしょ？自分で考える」

「分かりました。でも、どうして・・・殺したんですか？」

今まで笑顔を浮かべていた瞬は寂しげな顔を浮かべる。

明らかに雰囲気が変わった瞬にイリアは気づくと、一呼吸入れて答えた。

「・・・命を狙われたら逆に殺しちゃいけない？貴様は知らない

だろうが、この男達は私を見つけた途端に銃を撃ってくるような連中なの」

「だからってむやみに命を奪うなんて」

そこまで聞いてイリアは大きいため息をついた。

ああ、こいつもなのか、と。

イリアは俯いたまま立つ瞬の前に立つとその胸倉をつかみ上げ、真剣な表情で睨みつけた

「いい？貴様がこの先どうやって『W2』を潰すつもりか知らないけど、殺し合いは避けられない！殺すか殺されるか、ただその繰り返した日々を送るだけ。相手を気絶させる？眠らせる？そんな程度じゃ目を覚ますと同時に奴らはまた襲ってくる。言うなれば『W2』のトップを神と崇める狂信者の集団よ。奴らは私達を殺すために何でもやるし、それを止めるには殺すしかない。襲ってくる奴らは全て殺す！それがお姉さまに託された使命を達成する最低条件よ」

「ロビンさんにも同じような事を言われました」

諦めたように呟いた瞬をイリアは突き放すように手放した。

納得したのだろうと思っただけのことだった。

だが、瞬は納得などしてはいなかった。

「でも、僕は殺したくない。人間であるなら殺さずとも分かりあえるはずなんです」

「あつつつ、そう！もういい！！元々、私は貴様に期待などしていないしな！お姉さまの頼みは果たすがその後は知らん！いいな！？」

「・・・はい」

一度だけ瞬は頷いた。

その表情はまだ哀しそうな表情ではあるが、眼は強い意志を秘めているのかしつかりとした眼差しだった。

イリアは瞬が甘い考えを捨てる気がまるでない事には気づくが、口で言っても聞かない以上どうする気もなかった。

いや、口で言っても分かる様な物ではない事が分かっていたからだ。

（お姉さま、私、人は信じるべきだと思っんです！）

不意にイリアの頭の中に過去の自分の言った言葉がよぎると、それを打ち消すように左右へと頭を振る。

とにかく、イリアはさっさと取りかかろうと開き直ったように気持ちを切り替え、胸を張って瞬へと向き直った。

「早速始めるぞ。お前に何ができるか知らんが『旅人』としての戦い方を教えてやる」

「『旅人』としての戦い方、ですか」

「そうだ、無敵の盾を持ち、疲労知らずで傷はすぐに癒える。そして武器はいくらでも作り出せる上に身体能力は伝説の怪物並みに強化されている。その気になれば地球上の文明を終わらせる事も出来る程の存在、それが『旅人』だ」

イリアの物々しい例えに瞬は唾を呑みこんだ。

彼女の言っている事が決して冗談ではない事が分かり、改めて認識するとんでもない力を持っているのを実感する。

「実際、一昔前はそこまでの力は持つていなかったが、今の科学は進歩している。単純に殺したいだけなら何も考える必要がない。ただ核爆弾でも気まぐれに作成して盾に守られながら起爆すればいい」

「そんな馬鹿な事」

「ふん、そうだろうな。人を殺さない事を明言しているお前には絶対できない戦い方だ。まあ、技術も経験も不足している貴様にそれ以外で出来る戦い方など力押しくらいしかあるまい。どうせここに来るまでの間にも強引な手段ばかりでやってきたんだろ？」

そう言われて瞬は『旅人』の力を姫から譲られた後の事を思い起す。

確かにどの場面を思い浮かべてもイリアの言うとおり、とにかく撃ち続けたり『イージスの盾』で体当たりするなど強引な手段ばかりなのを思い出す。

無駄な力を存分に使い、常に余裕など無い状態だった。

まあ、今まで戦闘とは無縁な男であったために仕方がない事でもある。

指摘された事が見事に凶星であるのに瞬は少し居心地悪そうにする。その反応に気付いたイリアは目を細める。

「やはりな。お前からは何度も死地をくぐり抜けた強者の気配などまるで感じない。ただの通行人と何ら変わりはないな」

「はあ、そうなんですか？」

「ッチ！これを育てようとはお姉さまも人が悪い！・・・でも、

ここまで来たらどうしようもない、か。おい、貴様！後ろだ、敵が来たぞ！」

見晴らしのいいこんな場所に音もなく敵が来る訳がない。

そう考えて冗談半分で後ろを振り向いた瞬だったが、後ろを振り向くとその目前に湾曲した刃が迫っていた。

「うわっ！」

咄嗟に瞬は後ろへと飛び退くが、その背後からいつの間にか現れた黒いスーツの男達が一斉に剣で襲いかかる。

音もなくいきなり人が現れるのに驚きながら、瞬は反射的に『イージスの盾』を発動させた。

見えない盾により周りから振り下ろされた剣は全て弾かれる。

その反動で男達がバランスを崩すと同時に瞬は作り出した麻醉銃で狙いにかかる。

だが、照準を合わせた途端、男の姿がぶれる様に消えていった。

「!？」

まるで白昼夢でもみているかのような光景だったが、それは夢ではなかった。

他の男に銃を向けても消えてしまい、気が付けば後ろから剣を振り下ろされている。

何が起こっているのかなど瞬には見当がつかない。

ただ、敵に麻醉銃を当てようと撃ち続けるだけだった。

「ど、どうして？」

不思議なくらい当たりはせず、次から次へと男達は消えては瞬の背

後に現れる。

同じ作業を繰り返し返している事で若干だが落ち着きを取り戻した瞬は、このままでは駄目だと閃光手榴弾を作り出してばら撒いた。辺りを目が潰れそうなほどの光が覆い尽くす。

瞬間的な光が収まると、瞬の周りから男達の姿は消えていた。

「大体わかった。それがお前の戦い方か。やっぱりただのド素人だな、反応も鈍いし反撃もおざなりだ」

一部始終を見ていたイリアは何事もなかったかのように冷静だった。それとは反対に、いきなり現れた敵が今度は痕跡もなく消えてしまったのに瞬は再び混乱しそうだった。

頭で考えようが出てきた方法も消えた方法も検討はつかない。

実は一瞬の間に移動する様な魔法があるのかも知れない。

だが、それを使ったかどうかなど瞬には分かる訳もない。

彼に分かるのは目の前に立つ小さい少女はおそらく答えを知っているという事だけだった。

「・・・やったのは貴方ですか」

「さあ？何の事だか分からないわ。証拠でもある？」

イリアは意地悪く笑って見せ、確実に彼女がやったのだと瞬は確信した。

これが彼女の仕業なら、彼女の魔法が関わっている。

彼女の使う魔法とは一体？

聞いても簡単には教えてくれそうもなく、瞬は自分で考えようとするがイリアは遮るように言った。

「他の事を考えるのは止めろ、今からは自分が強くなる事だけを

考える」

そう言われ、瞬は一旦、彼女について考えるのを止めて頷く。

「とは言っても貴様は『旅人』の力は既に完成された力だ。貴様自信の魔法は使えるのか？」

「いえ、さっぱり」

「ならば、『旅人』の力の活かし方が貴様自身の強さになる。力を生かす技術、発想、戦術、それがお前が身につけなければいけない物だ。これから行うのはその全てを補う戦闘訓練だ」

何が行われるかさっぱり分からない瞬を余所に、イリアは視界で瞬を捉えながら意識を集中する。

すると、瞬の周りにまた黒いスーツの男達が現れる。

その手には銃や剣など多数の武器が握られていたが、問題はその数だった。

さつきは5人だったが、今周りを囲んでいるのは瞬から見えるだけでもおよそ数百人はいる。

その男達に囲まれた中でイリアはその場にリクライニングのついた椅子を造り、その上に腰かける。

「また、ですか」

「まあそういうことだ。ただし、『イージスの盾』を使うのは禁止だ。身体能力と『リアルメモリ』のみで全て倒してみる」

「……始める前に1つ聞きたいんですが、貴方の魔法はもしかして幻覚を見せる類の物ですか？」

瞬は思い出していた。

ここに最初に来た時、見たはずの死体が消えていたり、彼女の姿は老婆だった。

そして、後ろを振り返った途端に音もなく現れた男達。

これらすべてに共通しているのは、瞬の眼に映った情報だと言う事だけだ。

そこから想像してみた推理を瞬は椅子の上でくつろぐイリアにぶつける。

イリアは驚く様子もなく、鼻を鳴らして軽く笑うと口を開いた。

「ようやく気付いたか。それぐらいは魔法に携わる者なら分かって当然だがな」

「やっぱり幻覚だったんですね！？それならここにいる人達も」

「当然、幻覚だ。このようにな」

椅子の上に寝そべりながらイリアは作り出した短刀を1人の男へと投げる。

勢いよく短刀は男の頭へと飛んでいくが当たるかと思われた瞬間、

短刀は男の頭の中にめり込むように消えたかと思うと後頭部から抜け出て地面へと突き刺さる。

まさにその男が存在していないことを証明して見せた。

瞬も動かない男によって手で触ってみるが、その手は肩透かしを食らった様にすり抜け、勢い余って瞬の体は男の体へとめり込んだように見えた。

だが、瞬には男の体に触れている様な感触などまるでなく、むしろ遠くから吹き抜ける風が体に当たる感触しかなかった。

「本当に何も無い！」

「これでお前の訓練を行ってやる。貴様の攻撃が当たればコイツらは消えていく。逆に・・・腕を前に出してみる」

言われるがままに瞬は右腕を前に出すと男の1人が動き、その手に持っていたハンドガンで瞬の右手を狙って撃つ。

本物同様に弾が発射され、銃口からは硝煙が上がるが、当然の様に瞬の右手に傷はない。

「グアッ！」

ところが、瞬は右手に走った激痛に思わず右手を抑える。

痛みはすぐに収まり、瞬は恐る恐る右手を見てみたもののやはりそこに傷は無い。

「こ、これは・・・」

「幻覚、とは言っても自分が撃たれたなら撃たれたという情報が脳へと伝えられ、脳は怪我を負ったと判断し、その結果、撃たれた個所から痛みを感じる。つまり、かわし損ねれば本物とまではいかないがそれなりの痛みを伴う訳だ。実戦形式のいい訓練だろ？」

ニタリと不敵に笑うイリアに、瞬は笑顔を浮かべて返した。

ええ、そうですね、と言わんばかりの表情だった。

それが面白くなかったのかイリアは舌打ちすると、指を1度だけ鳴らした。

それを合図として一斉に周りにいた男達が、各々の獲物で瞬へと襲いかかる。

いきなり始まった訓練に瞬はその場から飛び上がり、攻撃をかわし

ながら麻酔銃で手当たり次第に撃つ。

麻酔針はやはり幻の男達をすり抜けるとその姿は消えていくが、その数はまるで減っていない。

上へと飛び上がった瞬に、今度は下から銃弾の嵐が襲いかかった。

『イージスの盾』を使う事を制限された瞬は咄嗟に鉄の壁を下に向けて作り出し、銃弾を全て防ぎながら落ちる。

落ちて地面につけば即座に幻の大群に襲われるのは間違いない。

瞬は鉄の壁から右手を差し出すと、その手におそらく銃弾の幻が掠めたであろう小さい痛みが連続して起こる。

それに怯まず、右手を出したままで瞬が想像すると、その場に地面まで届く長い巨大な煙突が現れた。

瞬の育った街で見た工場の煙突だった。

落ちながら態勢を立て直した瞬はその煙突へと掴まり、次々に飛んでくる銃弾から逃げる様に煙突を足場に今度は遠くへと飛び上がる。数百人ももの幻を飛び越し、その途中で閃光手榴弾を次から次へとばら撒く。

イリアの魔法が幻覚であれば、強い光で消えるかもしれないと考えた行動だった。

地面に降り立って効果があったのかを確かめようと振り向いた瞬だが、そこにはまるで数の変わらない男達の姿があった。

今までを椅子の上でオレンジジュース片手に見ていたイリアは、戸惑う瞬へと叫んだ。

「一応言っておくが、私の魔法はそんなチャチな光で消える物ではない！コイツ等を消すにはお前が有効打を与えた時のみだ。ほら、重火器でも使ったらどうだ？」

「お断りします！人を殺すやり方を覚えたくなどないんです！」

「……ツチ！甘い奴め」

不機嫌そうにイリアは呟くとそれ以上は何も言わず、オレンジジュースのストローを口にくわえた。

まるでつまらない映画を見ているかのようにイリアは退屈していたが、その主役は迫る大群にどうすればいいかと必死だった。

距離はあつてもそんな距離などあと数十秒もしないうちに無くなる。『イージスの盾』さえあれば今まではどうとでもなったが、それが無くなっただけでこうなるのは素人なら必然だ。

とにかく数を減らさない！

全員をまとめて相手にするのが無理であるのは明白で、そう考えた瞬はふと頭に考えが浮かんだ。

男達はもうそこまで迫り、考える時間もない以上、その考えで行く事を瞬は決意する。

両手を前に出すと、目の前に視界を塞ぐほど巨大な壁を作り出した。人が乗り越えるのは難しいであろう、3mはある高い壁だった。その作り出した壁は横にずっと伸び、瞬と男達を区切っている。

だが、瞬はその壁の上へと飛び乗ると、壁の下へとたどり着いた男達から離れる様にその上を飛び越えて反対側へと着地する。

そこでまた巨大な壁を作り出し、またその上へと飛び乗ると今度は男達へと向かって同じ壁を作り出す。

伸びていく壁が男達を押しつけて分断し、瞬は壁の上を端から端へと走りながら何度も同じように壁を作り出す。

男達は完全に分断され、1つの区切りで約50人にも満たない数になり、1つの巨大な集団から10の集団へと分けられた。うまくいった事に安堵する瞬。

「ほう、まとめて閉じ込めるなんて少しは考えているらしい」

その様子を横になって見ていたイリアは、瞬がそれなりに『リアルメモリ』の使い方を分かっているのを素直に評価した。

無尽蔵な魔力を物へと変換し、圧倒的な物量を持って敵を窮地へと追いやる。

戦い方としては『旅人』別に個人差はあるものの、瞬がやったのは正にそういう戦い方だった。

イリアは喉をオレンジジュースで潤しながらも、試験官でもしているかのように瞬の様子を事細かく観察し続ける。

「柔軟な発想はそれなりに出来るようだ。・・・だが」

瞬には遠すぎて聞こえないイリアの言葉を合図に、塀の中の男達から何人かが塀の中から飛び出した。

終わったとばかり思っている瞬目がけて何本もの剣が振り下ろされる。

気が抜けていた瞬も咄嗟に気づいて前へと飛ぶ。

だが、2、3本の剣が回避し損ねた瞬の足へと突き刺さり、痛み瞬の顔が強張って思わず呻き声が出てしまう。

「ガアッ！」

痛みを耐えながら男達と距離を取ろうとした瞬だが、男達はすぐにその距離を詰めにかかる。

また飛ぼうとした瞬だが、刺された痛みはまだ残るのか足に力を込めると激痛が瞬を襲う。

存在しない幻から受けた痛みでも、瞬の額に大量の汗が滲むほど体にも影響を及ぼしていた。

うまく動けず焦る瞬は向かってくる男達に麻醉銃を撃ち続ける。

何人も消したがそれでもなお、残った男達は常人とは思えぬほどの足の速さで向かってきた。

そして、瞬を剣の間合いへと捉える。

無表情な男達は機械的に剣を瞬へと振り下ろす。

ところがその剣は振り切られるまでに止まり、それ以上進みはしない。

瞬は2本の『天狼』を交差させて頭上で受け止めていた。そこから全員を弾き飛ばそうと力を込める瞬。

痛みをこらえながら息を整えて振り払おうとした時だった。

胸に鋭い痛みが走り、瞬が目を向けるとそこには1本の剣が心臓の辺りへと突き刺さっていた。

まるで体験した事のない強烈な痛み、周りの男達を吹き飛ばすどころか力が抜けていき、手から『天狼』が零れ落ちると受け止めていた剣が瞬の体へと振り下ろされる。

「ギヤアアアッ！」

獣のような純粹な痛みの叫びを上げ、途中で叫びは止まる。

すると、男達の姿が全て消え、そこには痛みで失神した瞬の横たわる姿だけが残った。

イリアはオレンジジュースと椅子を消すと、横になった瞬の側へと飛ぶ。

横になった瞬は痛みになされ、息も荒い。

それを見たイリアは少しはお姉さまが奪われた溜飲が下がったのを感じた。

だが、あくまで名目上は修行であるのを思い出し、少しすっきりした表情を元の真剣な表情へと戻す。

「まあ、こんな所だな。これから1ヶ月この調子でいくでしょう、ククク」

見ている者に恐怖を与える様な笑みを浮かべながら、瞬を叩き起こそうとした時だった。

イリアが瞬に向かって手を伸ばした瞬間、イリアは何か反応し、

その手を止める。

そして、すかさず辺りを見回して何もいないのを確認したが、イリアには何かが引つ掛かっていた。

誰かが見ているような気配、そして殺気を周囲から感じていたのだが、どこにいるかはまるで見えない。

意識のない瞬をすぐに担ぎあげたイリアは『イージスの盾』を展開させる。

その瞬間、イリア目がけて音もなく弾丸が四方から飛び交い、その全てが弾かれる。

判断を間違えていれば一瞬で蜂の巣になっていただろう。

イリアは冷静に弾丸が飛んできた方向の1つを見据えるとその方向へと瞬を抱えたまま走る。

「チツ！こいつの訓練は移動してからやるべきだったな！おい、起きろ！」

肩にかけて瞬を何度も揺するが、瞬は呻くだけで起きそうもない。いつそこに放り出してしまおうか？

イリアの頭にそんな考えが一瞬浮かんだ。

ここで放り出せば間違いない。『W2』に殺されるだろう。

だが、そんな事は出来ない事も理解していた。

仇の様な存在と言っても最愛だった人物から言われているのだ、その命を奪った仇を手助けするように、と。

イリアは苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべ、色々な考えを打ち消すように空へと飛んだ。

今はとにかくこの男を守って奴らを叩きつぶそう。

そう決めたイリアは下へと落ちて着地すると、その目前の何も無い様に見える部分を凝視する。

「もうばれているぞ」

イリアがそう言うと、少し盛り上がったように見えていた部分が布の様にめくれ、その中からM82A1（アンチマテリアルライフル）を構えた男が現れた。

男はすかさずM82A1をイリアに向かって突き出し、引き金を引く。

当然の様に弾丸は弾かれ、それは何度撃っても同じだった。

「気は済んだか？じゃ、こっちの番だな」

イリアがそう言うと片手で男を地面へと引き倒し、1本のナイフを作り出して胸へと突き刺す。

「グオツ！」

「動くな」

痛みで身動きしようとした男だったが、深く沈んだイリアの声にその動きを止める。

「心臓の真上で止めてある。今から質問するが答えてやれば命は助けてやる。答えなければ死だ」

命が手の上にある事をアピールするようにナイフを足で押さえる。少しでも力を込めれば、ナイフは心臓を貫くだろう。

ところが男は怯えるどころか、生きるのを諦めたように無表情だった。

それがイリアには気にくわなかった。

「私の言ってる意味、分かってる？」

「ああ、分かってるさ。・・・今にどういいう事が分かる」

男はそう呟いたかと思うと、奥歯を強く噛みしめる。

すると、奥歯の中に仕込まれたカプセルが割れ、そこから流れた毒が男の中へと流れ込む。

途端に男の中から血がこみ上げ、口から大量の血を吐き出した。

その吐きだす動作により、心臓手前で止められていたナイフは心臓を貫き、毒とナイフにより男は絶命した。

イリアはその男の死にざまにいい予感はしなかった。

仕込んでいた毒といい、男の諦めた様な表情といい、最初から死ぬ事を前提にこの男は殺しに来ていた。

他にいた連中も全てそうなのだろう。

『W2』が何かを起こそうとしている。

そう考えた時、ふとイリアの視界に空で何か光るものが見えた。

それは飛行機やヘリの類よりももっと早い速度で移動し、段々とこちに向かってくるように見える。

死亡する事が前提、飛来する何か・・・まさか！

イリアはすぐにこれから何が起こるのか理解すると、その場から離れようと走り出した。

だが、迫る光は徐々に大きくなっていき、目で捉えきれない速さで地面目がけて突っ込んだ瞬間、辺りは光に包まれた。

第33話：幻想支配者（2）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとうれしいです。

近頃はどうにもやる気の出ないことばかりです。

なんかこう鬱な気分から脱出するようなことでも起きないものか

（A、）

第34話：幻想支配者（3）

閉鎖されたように周りを山に囲まれた窪地の中、透き通るような山水の流れる小川の側に1軒の家があった。

不思議な事に家へとたどり着く様な道はなく、大自然の中にそんな家が立っている事自体が不自然だ。

その家に備え付けられた木製のベンチに腰かけた少女がいた。

周りにはまだ雪が残っているものの少女は薄着であり、見た目の年齢からは不釣り合いな新聞を広げ、その傍らには淹れたての熱いダージリンティーもある。

少女は片手で新聞を持ちながらダージリンティーを一口飲み、新聞に目を戻そうとする。

その瞬間、どこからともなく少女に向かって折れた剣先が飛んできた。

剣先は少女の頭を捉えているかのように真っ直ぐと飛び、あわや当たるかと思われた瞬間、剣先はまるで時間を止められたように止まる。

少女が指2本で挟むようにして止めていたのだ。

ため息を一つついた少女は剣先を何処かへ投げ飛ばし、何事もなかったように新聞へと視線を戻す。

ところが、今度は幾つもの槍や剣、重火器が少女へと向かって飛び、少女はイラつきを覚えて心の中で呪文を唱える。

途端に少女の周りに『イージスの盾』が展開され、全ての武器が弾き飛ばされた。

ただ、あまりにも絶え間なく飛んでくるため、痺れを切らした少女は新聞から目を外して叫んだ。

「おい！新聞を読む邪魔だ！違う所でやれ！」

「そ、そんなこと言っても無理ですよ、イリア様」

「全く！これだから新人は」

イリアはブツブツ言いながら新聞に目を戻すと、答えた男は苦笑いしながら視線を戻す。

家の小川を挟んだ向こう側、数十分前までは風の吹き抜ける心地よい草原だったが、今は焼け野原となり、その上には何十人も黒いスーツ姿の男達が倒れていた。

更にその先では1人の男に何人も男達が群がるように飛びかかり、次々と襲いかかっていた。

とても逃げ場などなく、男は絶体絶命のようだったがその表情には余裕があった。

剣が、槍が、斧が男へと触れる瞬間、『イージスの盾』が展開されてイリアと同じように全てを弾き飛ばす。

男は盾に守られながらその場で一回転したかと思うと、群がっていた男達をまとめて吹き飛ばした。

吹き飛んだ男達は体の所々に打撃を受け、そのどれもが男達の意識を飛ばすのには十分な衝撃と痛みを伴った一撃だった。

「ふう……、これでは……100人位かな」

そう言っただけで先には武器を構えた男達が立っていた。

その一番奥には何台もの重機関銃を搭載したトラックが止まり、操作する男によってその銃口は敵対する1人の男、瞬へと向けられていた。

「今更遅いですけど、話し合いでの解決は……」

「……」

誰も何も答えなかったが、男達のぎらついた表情、体から立ち上る殺気がその返答を行っていた。

「ないですか、そうですか」

「撃て！」

瞬は残念そうに肩を落とすと、号令と共に大量の銃口が火を噴いた。銃弾の豪雨は瞬ばかりか後ろの家をも襲い、家には銃弾の跡が刻まれていき、見るも無残な家へと変わっていた。

まるで戦争の中心地に建っていた家のように建っているのが信じられない程だった。

銃撃は止んだが、その代わりとばかりに今度は大量の爆薬が投げつけられ、次々と爆発していく。

地形を変えそうなほどの激しい爆発に家はとうとう倒壊し、辺り一面が焦土と化す。

黒煙が男達の視界をも塞ぐが、その黒煙の一部が浮かび上がる様に濃くなっていく。

男達はあれだけの爆発を巻き起こしながらも油断などなく、その影に一斉に銃を向ける。

空気が張り詰めていき、男達の額にも緊張の汗が流れる。

そして、煙が大きく揺れ動いた瞬間だった。

先走った誰かが銃を撃ち出し、それに釣られて全員が一斉に射撃を開始する。

ところが、煙の中から飛び出した針が次々と男達へと刺さり、強制的に眠らされて地面へと崩れ落ちていく。

その様子に残っていた連中も焦った様に撃ち続けるが、煙の中からの攻撃は終わらない。

すると、煙の中から飛び出した瞬が男達の真ん中へと降り立った。

すかさず追撃しようとした男だったが、引き金を引く寸前で別の仲間止められた。

「撃つな！仲間に当たる！」

同士討ちを避けようと男達は銃を引つ込めるが、それは瞬の狙い通りだった。

麻酔銃と体術を駆使して近い者から次々に意識を刈り取っていく。逆に男達はナイフなどの近接武器で反撃するが、まるで相手にはならない。

全てを吹き飛ばす様な嵐の様に瞬は男達を眠らせていき、気がつけば立っている者は瞬以外誰もいなくなっていた。

「残りは逃げたみたいですね」

とりあえず終わったのに安堵する瞬だったが、いつの間にかその隣にはさつきまで新聞を読んでいたイリアが立っていた。

「ふん、ようやく終わったか。移動するぞ」

「はい。次はどこへ？」

「東だ」

「ちなみに理由は？」

イリアは口で答えずに、手に持っていた新聞を目の前に突き出し、小さい記事を指差した。

読めと言っているのだろうが、残念ながら瞬にロシア語の新聞は読めなかった。

ただ、記事の中に小さくパイの写真が写っているのに嫌な予感がしていた。

「読めないんですけど・・・」

「つち、勉強不足な奴だ！まあいい、ここから東の街で連日大人気の新作パイが売られているそうだ」

「え」と、パイ・・・ですか。一応聞いておきますけど、僕の修行に関係は」

「ない！私が食べただけだ、ほら行くぞ」

「・・・」

キツパリと言いきったイリアに瞬は言葉も出ない。

もうパイの事しか考えていない彼女は先に走りだし、やれやれとため息をついた瞬もその街目指して走り出した。

瞬とイリアの出会った日、その日から4週間の日が経っていた。

気絶した瞬を抱えていたイリアにミサイルが撃ち込まれ、地面へと激突したそれは眩しい程の光を放ちながら爆発した。

半径5km内にある物を全て消し飛ばすほどの爆発だった。

爆発後には着弾地点に巨大なクレーターが出来上がり、それを中心に辺りが更地になっていたのはミサイルの威力を十分に物語っていた。

にも関わらず、イリアは生きていた。

ミサイルでも『イージスの盾』を破る事が出来ず、爆発直後、衝撃や爆炎は流れる様に逸れていた。

当然、その肩に抱えられていた瞬も気絶したままだが生きていた。厄介な事になる前にここから去ろうとしたイリアだったが、ふと『

シカラフ』があつたはずの場所に出来たクレーター、その中心部に得体の知れない黒い物体が蠢いていた。

例えるなら、お互いを侵食しあう様な闇の球。

それが近くの球をとりこんででかくなり、時間が立つとしぼんでいくのを繰り返していた。

イリアですら見た事もない現象に驚きながらも探知を行つてみると、辺り一帯に濃度の濃い魔力が満ち、その中心部の黒い物体からはあり得ない程強い魔力が溢れ出ていた。

ところが球はドンドンと数を減らしていき、最後の1個も時間が経過すると消えてしまった。

強い魔力が凝縮して何かを形成しようとしていた、何かの実験か。どうやらミスイルには魔力を搭載していたらしく、イリアにはまるで良い予感はない。

早々にこの場から去るべきだと判断したイリアはその場所からすぐに離れ、とある場所にまで移動すると瞬を叩き起こした。

本当にミスイルを使つてきた事に戸惑う瞬だったが、それを無視するかのようイリアはすぐに修業を始めた。

ミスイルの爆発後に起こつた事は黙つたままで。

まずは魔法使いの知識としては入門レベルな瞬に対して、知識を徹底的に叩きこまれた。

魔力というものについての話から魂などの概念など。

1日近い時間をかけ、濃密な時間を過ごした瞬もそれなりに知識を得たようだった。

知識が十分になると別の修行、ある意味、ここからが本番の修行へと移った。

幻を用いて痛みを伴う実践形式で戦わされ、更にイリアは次から次へと無理難題を吹っ掛けた。

最初は何もできず、幻から受ける痛みに悶え苦しむ毎日だったが2週間も過ぎるとそれなりにこなせるようになっていた。

何せ、力自体は持っている上に時折飛んでくる指示は『旅人』の先

輩であるだけあり、非常に的確だった。

更に疲労知らずな体と何時まで経っても折れない根気が重なり、2
4時間フルに修業を続ける事が出来た。

ある程度の戦い方が身についてくると、最後の1週間はイリアとの
実際の組み手だった。

幻も盾も何も無い。

ただ格闘や剣、銃だけでシンプルに戦う。

これにはさすがに『旅人』の力を持っている瞬といえど、全く歯が
立たなかった。

幻との戦いで身に付いた力を試そうがごとく弾かれてしまい、
瞬の自信も折れそうになる事ばかりだった。

休みなしで行われ続ける修業だったが、例外があった。

たまに居所を嗅ぎつけた『W2』が襲いかかってきたのだ。

その際、イリアは傍観者というスタンスで手を出さず、瞬1人で撃
退し終わるとイリアの気の向くまま、というよりは我儘に付き合っ
て場所を移動していた。

アジア統括支部長は今頃、『旅人』の不規則な動きでロシア国内を
荒らされているのに頭を抱えている事だろう。

そして、今度はパイ目当てで東の街に行くという事だった。

この数週間でイリアの性格と言うものを概ね捉えた瞬は仕方ないと
イリアの後を走るが、ふと持っていた新聞の日付が目についた。

「そうだ、そろそろ姫の言っていた1ヶ月だ」

姫からの手紙で指定していた1ヶ月がもう間近に迫っているのに気
づいた。

せいぜいあと数日程度しか残っていない。

焦った様に瞬はスピードを上げるとイリアの前に出て、手で止まる
様に制止した。

なにせ、常識はずれなスピードで走っている間はまともな会話など

できる訳がない。

地面を抉りながら止まったイリアに合わせて瞬も止まる。

「なんだ？私のパイを邪魔する気か？」

腕を組んで仁王立ちしながら瞬を睨みつける。

静かに押し殺した声は聞いた者の体を強張らせる程の殺気を放っていたが、完全に頭の中はパイの事だけであるのが見た目どおりどこか可愛らしい。

瞬はそれに動じず、落ちついた声で返した。

「申し訳ないですけど、あと数日で姫の指定した日付です。パイを食べに行く余裕は」

「ふん、そういえばそうだったか。しょうがない、パイは諦めて最後の修業といこう。ついてこい」

東へと進路を取っていた彼女は90度反転すると北へと向かった。

どこに行くのか不思議に思いながら瞬は後に続き、そのまま無言で走り続ける事3時間。

ようやく目的地に着いたらしく、彼女は唐突に足を止めた。

釣られて瞬も足を止め、辺りを見回してみるとそこは左手には森、右手には山がそびえるだけのそれ以外は何もない平原だった。

人の手も入っていないらしく、道路どころかタイヤの跡なども全く見られない。

ここで何をするつもり・・・なんでしよう？

素直なほどにあっさりとパイの事を諦めた彼女に瞬は走っている間も嫌な予感を感じていた。

ここ4週間の付き合いで会話もあまりなかったが、1つ分かった事があった。

自分の主義を意地でも通そうとする結構、いやかなりの我儘な人だと言う事だ。

性質が悪いのはそれを通してしまうほどの力を持っており、趣味には全力を尽くす、そんな人だった。

その彼女が目的を諦め、わざわざ誰もいない場所へと移動した。不安になるなど言う方が無理な話だった。

鼓動を速めながら辺りを見ても皆目見当のつかない瞬間に、満を持して振り向いたイリアは言い放った。

「これが最後の修業だ、私と戦え」

「……イリア様、とですか？今までもやってたじゃないですか？」

「殺すつもりでかかって来い、と言っている。貴様が強くなっていれば、『W2』を壊滅する日まで殺すのは待ってやる。ただし、強くもなければこの場で引導を渡してやる！」

何を言っているのか瞬にはすぐにわからなかった。

いや、言葉の意味を理解はしても、体が凍りついた様に固まった。

「……え、え〜と、それはつまり、僕は結局死ぬんじゃないでしょうか？」

「当たり前だ、私のお姉さまを奪った罪は重い！死刑程度じゃ足りないほどにな！」

「そ、そんな！」

「ただし！お姉さまからの依頼を果たせると私が判断すれば、そ

れが終わるまでは待つてやると言う事だ。分かったならかかって来い！」

語尾を強く言いきつたイリアは瞬に対して半身に立ち、左腕と左足を前に出し、右腕を後ろへと引いて武術の様な構えをとる。

武器を使わずに相手をするとという事の様だ。

準備が整ったのを表すと同時に瞬への挑発として、どこかのアクシヨンスターの様には左手の指先を何度か内に折ってみせる。

まるで機械の様に落ちついた視線はジツと瞬を見据え、その真剣な表情から瞬にも冗談ではない事が分かる。

「はあっ、結局殺されるんじゃないですか。・・・でも」

言葉を一度切つた瞬は両腕を頭を守るように立て、まるでボクシングでもやるかの様に拳を握る。

当然ではあるが、優男である瞬は過去にボクシングなどやったことはない。

格闘技などまるで経験がなく、唯一知っていたのがこれというのも理由としては一理あつたが、この4週間の修行でほぼ独学に近い形で習得した体術がこれだった。

純粹に手を出す速度を速め、手数で敵を圧倒するというのが瞬の覚えたスタイルだった。

両者間の空気が徐々に張り詰めていく。

合図など何もなかったが覚悟を決める様に瞬は息を吸い込むと、イリアへ強く真っ直ぐな視線を向けて叫んだ。

「何もしないで殺される訳にはいきませんからね！行きます！」

瞬は足元にクレーターが出来る程の力で飛び出すと、イリアへと真っ直ぐ突っ込む。

信じられないような速度で距離を詰めると、イリアへと渾身の力を込めて拳を振るった。

ためらうこともない。

いや、ためらって力を少しでも出し惜しめば逆にやられてしまう。

『旅人』の先輩を侮る様な油断は瞬から抜けきっていた。

ヘビー級ボクサーでも真つ青な顔にする程の力が籠ったパンチだったが、イリアは何事もない様に半歩引いてかわす。

かわされた事など気にせず、瞬は弾幕でも張るかのように次々と拳を繰り出す。

まるで嵐の様な攻撃だった。

ところが、イリアは特に驚いた様子もなく、冷静に瞬の両手の動きを見ながら次々と拳をかわす。

イリアからは一切手を出さず、体を曲げたり屈むだけで瞬の必死の攻撃をよけ続け、瞬にも次第に焦りの色が浮かぶ。

鼻先を紙一重で通り抜けた拳をイリアは両の眼でしっかりと捉えると、視界に捉えた無防備となった瞬の脇腹へと左手を突き出す。

隙だらけだと呆れていたイリアだが、彼女の左手を瞬の左手が捕まえた時にその考えは変わる。

「ふっ！」

どこかイリアは楽しげな笑みを浮かべ、掴まれた左手を逆さにとり、息を吐いて自分の方へと引っ張った。

強い力で引っ張られた瞬はバランスを崩し、そこにイリアの力が籠った右拳が顔に向かって飛ぶ。

避けようのない一撃。

特大の柏手を打ったような破裂音が辺りに響き渡る。

だが、イリアはその手に伝わる感触が腹や顔を殴った時のものではない事に気づく。

右手は瞬の左手によって止められ、顔にまでは届いてはいなかった。

両手が交差したまま瞬に止められたが、イリアはそこで踏みつける様な前蹴りを繰り出す。

咄嗟に足を上げてガードした瞬だったが、蹴りの威力はかわいらしい少女の見た目からは想像もできない衝撃を放ち、上げた足ごと体が上へと持ちあがった。

「くっ！」

それでも掴んだ手を放さない瞬は、逆にその反動を利用してイリアの頭上を回転しながら飛び越え、地に足がつくとその勢いでイリアを力の限り放り投げる。

回転しながら着地したイリアへと追撃の手を緩めずに仕掛けた瞬。イリアが顔を上げると同時に低く跳んで飛び蹴りを放つ。

足が届こうとしていた直前にイリアはかわすどころか逆に体を沈めた。

そして、一瞬でため込んだ力を放つように地面を蹴り上げ、逆に上半身を後ろへと引いた。

逸らした体の上を瞬の足が通り抜け、かわされた事に驚いた瞬の顔へと真下から現れたイリアのつま先が叩きこまれる。

瞬の体が力を失って吹き飛ぶ前で、イリアは綺麗に一回転を決めて地面に降りたつた。

サマーソルトキックと呼ばれる蹴り技が華麗に決まり、常人なら悪ければ死ぬほどの衝撃と痛みが瞬を襲う。

ただ、その瞬も常人ではない。

「旅人」なのだ。

「いたたたっ！き、決まっはとおもほったのに」

顔の顎の骨が砕け、口の中を何か所も切ったらしく大量の血が口から流れる。

だが、痛みをこらえながら瞬は悔しげに呟くと今度はイリアが目前に迫っていた。

「今度はこっちから、だ」

瞬は咄嗟に身構えたが、その視界からイリアの姿は幽霊のように掻き消えた。

戸惑う瞬は背後から小さく砂利を踏む音が鳴ったかと思うとすかさず前へと飛び、今までいた場所に中段蹴りを放つ。

次の瞬間、さつきまで瞬の立っていた場所にイリアの足と瞬の足が交差して止まっていた。

力が拮抗して互いの足が震えていたが、両者の顔はうっすらと笑みを浮かべていた。

「ふん、見えていたか？」

「音がしたものですから、ね！」

治癒で完全に顔の怪我が治った瞬はそう答えると、イリアの足を掴んだ。

交差した足をそのまま下段へと振り下ろし、体を支えている片足を狙う。

イリアはそれを読んでいたのでそのままの状態で飛び上がり、瞬の攻撃をかわしながらも体を捻って、更に上から瞬の脳天目がけて足を振り下ろす。

顔の強張った瞬は掴んでいた足を引っ張り、蹴りを太ももで肩に受けて衝撃を殺しながら右手で無防備な腹へとパンチを放った。

直撃した！

今度こそ確信した瞬だが、拳と腹の間に素早くイリアの手が現れ、完全に受け止められた。

イリアはパンチの勢いを殺さずに素直に吹き飛び、瞬から一旦距離をとる。

「中々やるな、さすが私だ」

「・・・僕、じゃないんですね」

「当たり前だ！ただのド素人をここまで鍛えた私が凄いな。貴様の根気も認めてやらんでもないがな」

「それはどうも」

二人はお互いを正面に捉えてまた構えを取る。まるでもう一度最初からやり直すかのように。

「さて、まだまだ時間はある。私に貴様を認めさせてみる」

「努力します」

風が吹き抜けると同時に踏み出した二人の拳は中央で激突し、辺りに風が吹き荒れた。

最後の修行開始から2日が経過した。

戦いの決着はまだついてはいなかった。

とは言っても、対峙する二人の様子は全く異なっている。

片や整った顔立ちで微動だにせず隙のない少女、イリア。

片や体中が泥や血塗れで立っているのもつらそうな程、疲労してい

る青年、瞬。

どちらが優勢かなど一目瞭然である。肉体的には疲労が無い瞬だが、2日間フルでイリアと対峙し続けた精神的疲労はもう限界を超えていた。

地面の上にはそこらじゅうにまるで戦場の様な血の跡があり、更に途中から武器を使用しての戦闘へと変わったため、地面の上にも無残に転がっているのは全て瞬の作り出した武器のなれの果てだった。

「もう終わりか？」

イリアはうすら笑いを浮かべながら少し嫌味なように聞いてきた。その様子にはまだまだ余裕が感じ取れる。

「ま、だ、・・・です」

気力を振り絞って返答する瞬。

誰が見てもこれ以上は無理だと思える。

「そうか、ならいくぞ」

ところがイリアはその手に2mはあるのかという巨大な大剣『グラム』を作り出すと、後ろに大きく振りかぶる。

まるで死神が大鎌を振りかぶるかの如き、強烈な威圧感が瞬を襲う。意識も朦朧としていた瞬はそのプレッシャーだけで片膝をつく。

どうにか立ちあがり、フラフラとしている瞬はその手の中に『天狼』を作り出す。

まだやるという意思表示だ。

そのヤル気に少女は口の端を釣りあげて笑い、瞬を鋭い眼光で捉える。

「クツクツクツ！根気だけは確かに本物だな。だが、こいつで終わりだ！」

『グラム』を構えたまま、神速とも言える速さで瞬との距離を詰める。

そして、振りかぶった『グラム』を振り切った。

小細工も何もない、大剣での正面からのただの斬りつけ。

とは言っても、その剣速は『W2』の隊員達が振るうただの剣とは比較にもならないほど速い。

大剣は空気を切り裂きながら瞬の胴体を真つ二つにせんと迫りくる。瞬はその最中、意識が途絶えたのか大きく前に倒れようとしていた。その眼は閉じられ、迫る大剣にはなす術もない様に思われた時だった。

瞬の眼が見開き、倒れかける体を支える様に右足で大地を踏みしめる。

更にその右足に力を込め、視界に面喰らった様な表情を浮かべているイリアを捉える。

前へ！

そう強く思い、足に込めた力を解き放ち、イリアへと向かって低く飛ぶ。

迫っていた大剣が背中を通り抜けるのを感じながら体が自然と『天狼』を構え、イリアへと向かって斬撃を繰り返した。

振り抜いた『グラム』を即座に消して、瞬へと反応したイリアだが既に遅かった。

イリアの隣を通り抜けた瞬の手には振り抜かれた『天狼』が握られ、少しの間を開けて瞬の体は地面へと崩れ落ちた。

完全に意識が飛んでいるらしく、ピクリとも動こうとはしない。

逆に立っているイリアは何事もなかったように瞬へと向き直り、小さく鼻で笑うと瞬の体を抱きかかえた。

「まさか、本気でないとはいえ私に1発入れるとはね。しかも峰打ちとは恐れ入った」

イリアは斜めに斬り裂かれたはずの胴体に眼をやると、瞬の食らわせた斬撃、それを示す様にイリアの体に一筋の窪みが出来ていた。瞬がほぼ無意識に近い半覚醒状態で振り抜いた一撃。

今まで何をやっても届かなかったイリアに確かに届いた一撃だった。

「やれやれ困った、これで貴様・・・いや、瞬、お前を認めてやるしかない」

微かに笑みを浮かべたイリアはどこか気持ちよさげに空を見上げる。

「これでよかったですか、お姉さま？」

その言葉は青い空へと吸い込まれる様に消えていった。

腐臭と血臭が漂う薄暗い石造りの牢屋が並ぶ、まるでホラー映画に出てきてもおかしくない通路。

その通路から牢屋の中を見れば、中にはおよそ元人間とは思えない異形の怪物たちが蠢いていた。

怪物とは言っても伝承や神話に出てくるようなものではなく、正確に言うなら魑魅魍魎の類に近い様な存在だった。

アジア統括支部の最下層に造られた実験施設。

その被検体を閉じ込めた場所はさながら化け物の博覧会といった様子だ。

アジア統括長は人間へと魔法を埋め込む実験と称し、正気の沙汰とは思えない人体実験を行い続けていた。

以前、瞬を襲った人狼の集団はその実験の成功例である。

ただ、実験には失敗はつきものであった。

失敗した末路がこの牢屋に入れられた者達だった。

その通路の一番奥、そこにいた異形の者はまだある程度の人の形は保っていた。

とは言ってもその体は弱々しく、眼は死んだように閉じられ、綺麗だった茶髪は糸くずの様にボロボロだった。

ニキータは動く気力もないのか床にひれ伏したまま動こうとはしない。

だが、その内部では確実な変化があった。

胃の内面に張り付いていた親指程の大きさを持つ箱、その箱に光が灯った。

同時に箱からある特定周波数の強力な電波が発生し、誰にも気づかれない信号はある男を導くため地下に造られた牢屋の中から外へと向けて発信された。

「……る」

「う、うん」

「……い！……きろ！……つち！」

まどろむ意識の中、最後に舌打ちを聞いた様な気がした瞬だが、強烈な刺激が瞬の意識を覚醒させる。

そして、次に感じたのは物凄い冷たさだった。

「うわっ！」

瞬は何が起こったのかと反射的に身構える。

まだはつきりしない視界で捉えたのはバケツ片手に立っているイリアだった。

「やっと起きたか」

「え、あ、冷たいっ！」

目の前にいた少女はしょうがないと言った感じの呆れ顔を浮かべ、その手に持っていたバケツを消した。

瞬は体に尋常じゃない寒さを感じ、自分の体を見みると大量の水がかけられてびしょ濡れだった。

今はもう3月半ばで春も近いとはいえ、まだあちこちに雪は残っている。

氷水の冷たさも一際増す。

その上に屋外で吹き抜ける風はもはや凍死級だった。

起こし方としては中々ひどい方法に瞬は文句を言いながらストーブを出して暖を取る。

「あれ？そういえば、修業は？」

「覚えてないのか？私に一太刀入れたそのまま意識がなくなったんだ」

「・・・なんとなく覚えている様な」

「ふん、まあいい。私に一太刀入れたのは紛れもない事実だ。お

前の事を認めてやるさ、瞬」

その言葉に瞬は驚いた。

1ヶ月近い付き合いだが、今になってようやく名前で呼ばれたのだ。たったそれだけの事とはいえ、瞬の胸の内に何かこみ上げる物があり、自然と涙がこぼれた。

「何で泣くの!？」

「いや、なんだか嬉しくて」

「あっそう、私が仮にも認めた男なら泣くのは止めてくれない？私もそうというのは嫌いだし」

そう言って顔をそっぽ向けるイリアの頬は若干赤みを帯びていた。

「それはそうとお前が意識を失って丸一日たった。お姉さまの信号は出ているのか？」

瞬は慌ててGPS受信機を作り出す。

すると、信号を受信してある場所を指定する。

「どつやらそこがアジア統括支部の本拠地らしいな」

「のようですね」

「悪いがここからは私は手伝えない。ここからはお前1人だが・・」

「大丈夫ですよ。イリア様に1回でも攻撃できただけで自信がつ

きましたから」

瞬はそう言うと笑みを浮かべた。

それを見たイリアはまた頬を少し赤くし、恥ずかしいのか小さくつぶやくように言う。

「……その『様』はもういらん。イリアと呼べばいい」

「でも、今までイリア様だったから」

「私が良いって言うてるでしょ！？素直に従いなさい！」

怒った様に地面を踏みつけるイリアに見た目相応の可愛さを瞬は感じました。

その足元が陥没しているのを見て思わず笑みが引きつるような恐怖に冷や汗を掻いていたが。

「そ、そうですか、じゃ……イリア、さん」

さすがに呼び捨てには抵抗があるらしく、瞬は恐る恐る「さん」付けで呼んでみる。

「もう、それでいいわ。さっさと行きなさい。全て終わったらお姉さまの仇を取ってやるんだから、しっかり倒してきなさい！」

終わってから殺されると明言されたが、瞬にはそれが応援しているようにしか聞こえなかった。

イリアに向かって深く一礼する。

「今までありがとうございます。それじゃ、行ってきます！ま

た逢う日まで！」

瞬はイリアに背を向けるとGPSを頼りに走りだした。

段々と小さくなっていく瞬に、イリアは何処か寂しさを覚えながらも自分は正反対に向かって走る。

まるでその寂しさを振り払うかのように。

「お姉さま、貴方の後継者は中々・・・、フフツ。面白い奴でした」

小さい呟きはお姉さまに届いたかどうかは分からない。

ただ、少女は楽しげに笑いながらも、その目尻には涙が滲んでいた。それが一体何の涙なのかは誰にも、本人にも分かりはしなかった。

第34話：幻想支配者（3）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第35話：アジア統括支部（1）

年代物の街灯が頼りない光で照らす道を1台のトラックが通り抜ける。

その後には他の車もなく、静寂が辺りに訪れる。

茂みの中で様子を窺っていた瞬は慎重に誰もいないか様子を窺う。

人がいない事を確認し終えるとゆっくりその姿を道路上に現し、道路の先へと足を進める。

暗闇の中、懐中電燈もなしに先へと進む瞬には以前の暗闇への恐怖は何処にも感じられない。

イリアとの修行中、トラウマの事をすっかり漏らした途端、イリアは鬼のような形相を浮かべた。

修業は即時中止となり、イリアなりのトラウマ克服法が行われた。

と言っても、カウンセリングの様に瞬と向き合ってじっくり話し合ったりする訳ではなく、「嫌いなら慣れる！」の一言で瞬を縛り上げて何もできない状態で洞窟の中へと放り込む。

悲鳴を上げながら芋虫のように外へと出ようとする瞬に対し、イリアは入口を巨大な岩で塞ぐ。

荒療治と言うよりは更に酷いトラウマを刻み込もうとしているだけの様な行為にしか思えないが、それで瞬は治ってしまったのだから瞬は反論するどころか感謝していた。

こんな事でトラウマが治ると勘違いしそうな瞬だったが、実際は違っていた。

イリアは外から中の様子を一緒に放り込んで置いた通信機で瞬が気絶する寸前なのを知ると、瞬の目前に幻を作り出して闇に対しての恐怖が無くなる様に刷り込みを行っていた。

それが何だったのか、そもそもそんな事があった事は全て瞬の記憶にはない。

あるのはイリアへの感謝の気持ちだけだった。

そんな事もあり、暗闇の恐怖を克服できた瞬は暗い夜道を明りもなしに歩けるようになっていた。

ふと、足を止めて懐から取り出したGPS探知機を確認すると、光点は確実に道路の先から届いてくる信号を表示していた。

瞬はそれに従って歩いていたが、どうにも納得できない事が1つあった。

「こんな所が本当に『W2』のアジア統括支部なんでしょうかね？」

疑問を浮かべるのは無理もない。

事前に瞬はネットでその場所を調べていたが、そこは『ハリニト』という名のただの街だった。

それも近代的に発展した様な街ではなく、良く言えば昔懐かしい、悪く言えば時代に取り残されたというような街だ。

人口もとても少ないし、いるのも老人が大多数を占めている。

その上、街のある場所は文化圏から外れる様にかなり辺鄙な場所で、近隣の街まで約60kmは離れ、周囲は木々しかない。

そんな場所に本当にアジア統括支部があると信号は示しているのだから、誰でも不信任を抱く。

「あれが『ハリニト』か」

足を止めた瞬の見た先にボロボロに錆びた鉄の門が建っていた。

その更に先にはいくつかの民家が見えるが、表面の土壁はボロボロで屋根の天井には幾つも小さい穴があいている。

ミハイルやボリスのいた『カラフ』とは比べ物にならないくらいひどい建物ばかり。

最早、本当に人が住んでいるのかと思えるほど廃墟に近い街だったが、確かに人はいるらしくガラス窓から漏れる灯りは見える。

とりあえず、行ってみますか。

いくらか間違っただけでもここ以外にいく場所がない以上、瞬は信号と重なる位置を探しに門を抜けようとした。

ふと、門を超えようとした所で何かに気付いたのか瞬の足が止まる。そのまま足を数歩下げると、門の上を見上げる。

するとそこには錆びた鉄の中に埋め込まれる小さく光る物があつた。それが何なのか瞬は不思議に思いながら凝視してみると、どうやら小さいカメラレンズのようだ。

その事に気付いた瞬は頭の中でカメラがある意味を考え、ある結論に至った。

「……まさか！」

その瞬間、瞬の背筋に冷たい何かが走る。

瞬は反射的に『イージスの盾』を展開させると、どこからともなく飛んできた何発もの銃弾が盾に弾かれてあらん方向へと飛んでいく。もし、盾が無ければ全ての銃弾は瞬の頭へと突き刺さっていただろう。

ところが、瞬は冷や汗を掻きながらも助かった事ではなく、違う事に対して安堵していた。

ここで間違いないようだ、と。

やはり、姫に間違いはないのだ、と。

大きく息をついた瞬は銃弾が飛んできた方向へと向かい、銃弾の嵐の中を走る。

森の木の陰から狙っていた狙撃手の眼前に瞬は立つ。

人間を超えた速度で現れた『旅人』に狙撃手は小さく悲鳴を上げたが、咄嗟に持っていたライフルを捨てると腰に刺したナイフを抜く。抜かれたナイフは『旅人』へと向かうはずだったが、抜かれた位置からナイフはピクリとも動かなかった。

ナイフが振られるより先に瞬がその手首を捕まえていたからだ。

動きを封じていた手首に力を少し込めると狙撃手の手首から軋むような音が鳴り、手にしていたナイフを落としながら悲鳴を上げる。

「ギヤアアッ！」

「ここがアジア統括支部で間違いない、ですよ？素直に答えてくれれば離します」

丁寧な言葉遣いにいつも浮かべる笑みとは違う不自然な笑顔を浮かべる瞬。

その恐怖と痛みに耐えかねた男はそれから逃れようと何度も蹴り付けるが、全て盾で弾かれる。

手を剥がそうとしてもまるで金属に掴まれているかのごとく、ビクともしない。

何度行ったか分からない挑戦の末、男は答えは一つしかないという事を悟り、諦めたように頭を下げた。

「言うから手をはな」

その瞬間だった。

男の頭へ小さい穴が開くと、ついさっきまでうるさい程の悲鳴を上げていた口からもう2度と悲鳴は上がらなかった。

「え？」

掴んでいた男の突然の死に、瞬は驚きから手を放してしまう。

男の遺体は横たわると頭から血を流し、緑の草を赤く染めてゆく。

「……な、仲間を殺すなんて!？」

信じられない出来事に瞬は怒りと同時に哀しさを覚えた。情報が漏れるのを防ぐために殺す。

ならば、自分が捕まえさえしなければ彼は死ななかつたのではないか。

そんな考えが浮かび、動かない死体から離れる様に瞬は飛んだ。

表情は何処かやりきれないような苦々しい顔をしている。

追撃の銃弾を盾で受けながら街の中心、なにもない場所へと瞬は降り立つ。

すると何処からか現れた『W2』隊員達が特殊部隊並みの速度で展開すると、近くの物陰に隠れながら瞬を包囲する。

今までとは違い、『イージスの盾』を警戒して迂闊に撃ってはこないようだ。

様子を窺った膠着状態になるかと思われたが、逆に瞬はちょうどいと息を大きく吸い込み、溜まった思いを吐き出すように叫び上げる。

「仲間を殺すなんておかしいとは思わないんですか！仲間を殺してまで得る物に意味があるんですか！？」

「・・・」

瞬の叫びにどこからも反応はない。

隊員達はただ静寂を保ったまま、瞬をAK47（アサルトライフル）のサイト内に収めて構えているだけだった。

瞬は彼らの答えを受け取ると静かに一度目を閉じる。

「貴方方は仲間を殺すのも厭わないんですか？貴方達は間違っている！仲間を殺すなんて最低の行為だ！」

瞬は目を見開き、叫びたてる瞬。

だが、その叫びに対する反応は否定するかのような四方八方からの銃撃だった。

何発もの銃弾が飛び交う中、瞬は残念そうに顔を伏せ、両手に麻酔銃を作成する。

「・・・言っても分かってもらえないようですね。それなら・・・僕は全力で貴方達を倒します！」

その場で小さく跳び上がり、素早く回ったかと思うと次々に隊員達は倒れていく。

隊員達の体には麻酔針が突き刺さり、戦う意思どころか意識さえも遠のいていく。

瞬がやった事。

それは単純に回転しながら視界で捉えた隊員に麻酔銃をポイントイングし、引き金を引いたというだけのことだった。

言ってしまうえば簡単だが、飛んで回る間にこんな芸当をするのは銃に慣れ親しんだ者でも難しい。

イリアとの修行で1対多の戦い方を身に付けた瞬の技能と言えるだろう。

「!?!?隠れる!撃たれるぞ!」

何が起こったかを理解した隊員は事前に聞いていた『旅人』との違いに驚きながら注意を促す。

学生だった男がたかが1ヶ月程度でこんな技術を身につけているとはにわかには信じ難かった。

だが、目の前で起こってる以上、認めざるを得ない。

瞬は麻酔銃を向けようとしたが、銃口が向く寸前で隊員達は物陰に隠れてしまい、射線上には誰も顔を出さない。

それならば、と瞬は両手の麻酔銃を消した。

何をやる気なのか、気が気ではない隊員達が覗き込む中、瞬は大量のスタングレネードを辺り一面に放り投げる。

放物線を描きながら何本ものスタングレネードが、隊員達の隠れている物を迂回してうまく横にまで転がっていく。

転がり込んだ物を見て慌てふためく隊員達の目の前で、弾けたスタングレネードから爆音と閃光が巻き起きる。

咄嗟に耳を塞いで目を閉じ、回避した隊員達。

戦闘経験が豊富であるらしく、スタングレネードで気絶しないための予防法も分かっているようだ。

彼らは強烈なフラッシュの余波で目の前はちらついていたが、そんな状態でも『旅人』を捉えようとする。

目を抑えながら覗き込んだ隊員だったが、目の前の出来事に驚愕した。

さっきまでいたはずの『旅人』の姿がどこにもなかったからだ。

時間にして5〜10秒程度。

たったそれだけの時間だが、瞬には十分な時間だった。

スタングレネードを投げると同時に瞬は上へと飛び、閃光から逃れる。

そして、瞬を見失っている隊員の背後に降りると気付いた隊員が振り向いた瞬間、首筋に手刀を叩きこむ。

意識を刈り取る一撃に隊員の体は崩れ落ち、瞬はすかさず後ろへと飛び退くき、まだ見失っている隊員達へと麻酔銃を連射する。

瞬に気付いた隊員達は混乱の中でもAK47の銃口を瞬へと向け、反射的に引き金を引いた。

本来なら麻酔銃に勝ち目などある訳がない。

せいぜい眠らされながらも大量に吐き出された弾丸は体を貫き、致命傷を与えられているだろう。

ただ、それは『イージスの盾』がなければの話した。

弾丸はそうなるのが当たり前と言わんばかりに瞬へと届く事もなく、見当違いの方向へと弾かれていく。

逆に隊員達は瞬が一度引き金を引けば、刺さった誰かは眠りへと落ちていき、確実にその数は減っていった。攻防戦ともいえない一方的な戦い、俗に言う殲滅戦は瞬が最後の引き金を引いた時に終わった。立っている者は瞬以外誰もおらず、ついさっきまで戦闘があったのが嘘のように静寂へと戻る。

「終わつたみたいですね」

そう呟くが安堵というよりは悲壮感が瞬からは漂っていた。仲間を殺させるようにしたのは自分のせいなのかもしれない、と悔やんでいたからだ。

自分が手を下した訳ではない。

そう仕向けた訳でもない。

だが、死んでしまったのは確実に瞬が関わったからだ。その事を受け止めようとしても簡単に受け止められるものではなかった。

一度大きく息を吸い込み、落ちつけるように、そして気持ちを切り替える様に瞬は息をつく。

「……アジア統括支部を探そう」

かろうじて冷静な部分がアジア統括支部を探すよう体に命じる。

足取りは重いがその場から離れる様に瞬は街中を歩き始めた。

やはり目に映るのは土壁が風化して手でも崩せるほどボロボロの建物ばかりだが、不意に瞬は灯りの付いた1軒を窓から覗き込んで見た。

ただ、そこには誰の姿もない。

他の建物も同様に覗き込んでみるものの誰の姿もない。

『アノール』で遭遇したのと同じ誰もいない無人の街。

だが、魔法により発生した霧に包まれてジャミングされていたのは違い、魔力探知を試してみてもまるで何も感じはしない。となれば、瞬が思い至るのは1つだった。

「罨、なのか？」

わざわざ街1つを使っての罨と言うなら納得がいった。なんせ、ミサイルを撃ってくるような連中なのだから、街1つを罨に使う事など有りうる話だ。

実際、門をくぐった際のカメラに瞬が気づくと同時に銃撃が始まった。

罨を仕掛けていたと言えば、それで十分に説明はつく。

とはいえ、姫が残した情報が間違っているとはどうしても瞬には思えなかった。

とりあえずこの信号の発信元を辿ってみるべく、GPSを頼りに歩いてみる。

あっという間にその場所へはついたが、そこは周りに何も無い更地なだけだった。

周りを見渡してもとてもじゃないが信号を出しているような機器は見えない。

余計に分からなくなってきた瞬だが、今の状況を頭の中で整理し、ある1つの考えが浮かんだ。

「地下・・・かな？」

そう考えてみるが辺り一面に切れ目などなく、地下への入口など見えはしない。

周りにあるものと言えば、誰も存在しない今にも崩れそうな家ばかりだ。

家の中に地下への入口でもあるんですか？

他に何も無い以上、瞬はちょっと無理のある事を考えながら無人の家へと入っていった。

中はやはり誰もおらず、どこにも下へ下る様な階段は見あたらない。肩透かしを食らった瞬だが、内心ではやっぱりと思っていたのでそうがっかりした様子もない。

他を当たろうとその場で反転し、外へと出ようとした時だった。

瞬の背後で小さい物音が上がった。

反射的に振り向いた瞬だが、どこにも物音が立つほど動いたような跡が見えない。

ただ、若干テーブルの位置がずれていたのに気づいた瞬はすぐさまテーブルをどかし、下に敷き詰められたカーペットをひっくり返した。

すると、そこには木製の床に埋め込まれる様に金属製の蓋がはまっていた。

力任せにそれを取り除くと、人1人が通れるだけの幅を持つ金属製の筒の中に、下へと伸びる梯子が取り付けられていた。

覗き込んで見るとずっと下に床らしきものが見える。

「もしかして、これは」

小さく思索し、言葉を切った瞬はその中へと飛び込んだ。

赤色灯が点灯する縦穴はすぐに下が見え、地面へと降り立つとそこは日本支部で見た様な金属で造られた近代的な通路だった。

ここが統括支部で間違いないと瞬は確信し、そして、姫を疑った事を心の中で謝罪する。

姫はやはり正しい道を示していたのだ、と。

通路は右と左に伸び、左は行き止まりの壁が見えるのに対し、右は先がどうなっているのか分かりにくい程長い。

深く考える事もなく瞬は右へと足を向けて走り出した途端、通路の脇から所狭しと隊員達が現れ、一斉に鉛弾や火炎、氷柱、雷などを

放つ。

そこまで広くはない通路を埋め尽くしそうなほどの攻撃を、瞬は特に驚いた様子もなく『イージスの盾』を展開させる。

全ての攻撃は流れる様に盾に弾かれ、周囲の天井や壁へと命中する。

「化け物め！撃て！奴を近づけるな！」

その声に従い、隊員達はとにかく撃ち、手榴弾を投げつける。

ただの肉体を強化されただけの瞬だったなら、今頃消し炭にされていてもおかしくはない。

だが、『イージスの盾』の何物をも退ける力は攻撃の中でも瞬に落ち着きを与える程強力だった。

何しろ、何をしても全て弾いていくのだ。

盾に守られながら瞬はその中を歩き始め、手に麻醉銃を作り出す。

そして、射程距離内に3人いる事を確認した瞬間だった。

麻醉銃の引き金が素早く動き、次の瞬間には視界に捉えた3人に麻醉針が突き刺さっていた。

強力な麻醉に意識を刈り取られた隊員が横たわっていく中、瞬はさらに前進し、次々に隊員達を眠らせていく。

相対する隊員達からすれば恐怖以外の何物でもない。

逃げだす者はいなかったが、隊員達の士気は低く、倒すなどは考えずに少しでも時間を稼ぐために奮闘していた。

すると、それを後押しするかのように瞬の背後へと何かが落ちる。

辺りが軽く揺れる程の質量を持ったそれは、人の形をしていたがその体は分厚い金属で出来ていた。

「口、ロボット！？」

瞬が初めて見たそれは着地の姿勢からゆっくりと体を起こし、頭部に取り付けられた鈍く光るカメラレンズが瞬を捉える。

起こした身長は2mを超え、人間としては規格外な太い腕や足を持ち、体もそれに比例してでかい。

巨人のような体格でありながらも造り物であるためかその姿はなめらかに洗練されている。

頭も完全に覆われ、目の代わりとして人間で言えば眉間の辺りにでかいレンズが取り付けられていた。

真ん中に瞬を納めるよう微調整を絶えず続けている。

リモート重装甲歩兵『ウォーカー』。

中に人を搭載することなく、カメラや取りつけられた様々なセンサーの情報を元にオペレータが遠隔操作し、任務を果たすという遠隔操作型の軍用ロボットだ。

見た事もない近未来的なロボットの登場に瞬は驚きを隠そうともしないが、目の離せない瞬に向かつて『ウォーカー』は腕を差し出す。何をやる気なのか、と瞬が思った瞬間、腕の中から携行型小型ミサイルが飛びだし、天井へと着弾する。

その途端、爆発に耐えられず破損した場所から大量の土砂が瞬に降り注ぐ。

盾の周りに土砂が降り注ぐ中で、『ウォーカー』は内蔵された背中ジェットパックが露わになると、足から小さいホイールが幾つも飛び出す。

ホイールが小さい白煙を巻き上げ、ジェットパックから火が噴き上がった途端、『ウォーカー』は瞬時に加速し、瞬との距離を一挙に縮める。

土砂に隠れる様にして近づいた『ウォーカー』は右腕を振りあげて勢いをつけて振り落とす。

降り注ぐ土砂をおとりにしての無機質な一撃は土砂を吹き飛ばし、一瞬だけ視界の開けた瞬の眼に右腕が映る。

盾に振り下ろされた右腕が激突する。

だが、盾は音もなく右腕を勢いそのままに逸らし、勢いの止まらない右腕は地面へと直撃する。

鈍い音を上げて激突した地面はバケツほどの大きさに陥没していた。生身の人間が受けければ確実に体ごと吹き飛ばされかねない、言わば即死級の攻撃だ。

『ウォーカー』は右手を引き抜くとそのまま瞬へと向かって振り、盾に流されようが左手と同時に何度でも攻撃し続ける。

一方、瞬は目の前で行われる獣のような猛攻の中、構えもなくその場にたたずむ。

息を吸いこむと『ウォーカー』を見据え、小さく前へ飛ぶ。

振りまわす凶器の様な腕を盾はいともたやすく弾き返し、瞬の進路を開いてみせる。

飛んだ勢いに乗り、瞬は『ウォーカー』のから空きになった胸目がけ、右足を突き出した。

消えたと見間違うほど速い右足は防御すらする間もなく胸へと叩きこまれ、鈍い金属音を響かせながら分厚い装甲を大きく凹ませる。

それだけに終わらず、蹴りによる衝撃はその巨体を浮かし、数m後方へと吹き飛ばした。

足をつけてバランスを保とうとする『ウォーカー』だったが、その体はまともに立っている事が出来ずにぐらついたかと思うと大の字になって床の上へと倒れた。

まだ動こうとしているのか腕や頭は動いていたが、起き上がるまでの動きには至らず、それ以上の事は出来ない。

「こんな物まで作れる時代になっただんですね」

しみじみと時代の進歩に驚く瞬だが、その後ろで隊員達は開いた口がふさがらなかつた。

なんせ、『ウォーカー』はトラックの衝突にも耐える性能を持っていたのは隊員なら常識であった。

それを魔法で強化されたとはいえ、ただの蹴り一発で戦闘不能に追いやったのだ。

銃を撃つことすら忘れた隊員達は目の前にいるのが間違ひなく化物であるのを再認識した。
例え、初めて見るロボットを物珍しげに目を輝かせて見ている子供っぽい男であつても、だ。

「撃てえ！撃てえっ！」

パニックの様に銃を撃ち続ける隊員達。
飛び交う銃弾に気付いた瞬はロボットから目を離し、半狂乱な隊員達へと向き直る。

「いきますよ」

そう呟いた瞬は絶望感漂う隊員達へと走り、無表情な顔で恐怖の色に染まる隊員達へと突っ込んで行った。

『旅人』侵入の警報とアナウンスは既に止められていた。

普段ならアジア一帯の軍事情勢や国情勢をコントロールしている司令室だが、今は慌ただしく対応に追われる隊員達が行ったり来たりしている。

その一番奥には他の物とは違うでかい机があり、そこにやせ細ったアジア統括支部長は座っていた。

最近頻発する頭痛に自然と手を頭に当て、細めた眼でメインモニターに映し出される『旅人』の姿を凝視する。

そこには次々と襲いかかる隊員達を軽々と体術や麻醉銃で眠らせていく瞬の様子が映し出されていた。

『ウォーカー』ですら瞬は止められず、彼の進んだ道の後には意識

のない隊員達と壊れた『ウォーカー』が何体も転がっていた。

「……来てしまったか、ここで止められなければ私は終わりか」
落胆するように肩を落とす統括支部長。

だが、その表情は何かを期待しているかのように目は死んでいなかった。

「……ク、……クツク、クハツハツハツ！いいだろう、ゲームと行こうじゃないか！」

狂ったように笑う支部長に隊員達は驚いた様に統括支部長に注目していた。

彼らからすれば統括支部長が笑う所など今まで見た事がなかったからだ。

注目の的となった統括支部長は目線を隊員達へと向けたかと思うと、すぐに冷徹ないつもの表情へと戻り、次々と更新される現状を確認する。

「Fブロックを進行中か。隣接するDからHブロックに保安要員を回せ。軍事課、諜報課、どの課だろうが使える人員を向かわせろ。細かい指示は現場に一任する」

「統括支部長！で、ですが、無計画に戦わせても『旅人』には勝てません」

困惑した様に1人の隊員が意見を挟んだ。

それに統括支部長は少しイラつきを覚えたが、他のオペレーターも困惑した様な様子でいるのに気づく。

やれやれ、とばかりに頭を左右に振ると椅子に深く座り直す。

「誰が・・・仕留めると言った？」

「え？」

「奴を仕留めるための罠は既にできている。後はそこに誘い込むのみ。つまり・・・」

「罠と言う事ですか？」

「罠にたどり着くまでに感ずかれるようでは困る。出せる戦力を惜しまず、徐々に罠へと誘い込む事で疑念は薄れ、罠にかかりやすくなる。分かったらさっさと『ホール』に誘い込むよう向かわせる！」

「は、はい！」

納得がいったのかオペレーター達は画面へと向き直り、アジア統括支部に所属している何百名にも及ぶ戦闘要員の隊員達に指示を出す。統括支部長は1度だけ鼻を鳴らすと、手を上げて側に控えていた直属の部下を呼ぶ。

「実験動物を『ホール』前の区画に放っておけ。試すにはちょうどいい機会だ」

「は！」

「それとあいつを『ホール』に待機させておけ。んん、何と云ったかな、あの殺し屋？」

「『名無し』ですか？」

「そうだ、そいつだ。部外者であり、ふざけた名前だがアジア圏内1の腕前を誇ると言われているだけに無視できん。大丈夫なんだろうな？」

「ええ、今までに依頼をこなせなかった事はないと言われているそうです。今指示を……」

手元のコンソールで部下は『名無し』を待機させている部屋を映しだす。

ところが、部屋の様子が映し出された途端、部下の眼は見開かれた。

「い、いません……」

「ん？何がだ？」

「その、『名無し』が……」

「どういうことだ？奴には待機するよう命令していたんじゃないのか!？」

新しい頭痛の種が出来たように思えた統括支部長は頭に手を当てながら叫ぶ。

それに慌てた部下は取り繕う様にコンソールを操作し、統括支部内の『名無し』の居場所を探る。

だが、その姿は何処にも確認はできない。

「一体どこに行ったんだ!？」

「も、申し訳ありません。今探して・・・」

目の前に立ちほだかる統括支部長から目をそらすように部下はメイ
ンモニターを見た。

相変わらず『旅人』の進撃は止まらない様だが、その脇の小さいサ
ブモニターにふと目を止めた。

倒れた隊員達に屈んで何かをしている者がいたからだ。

それは決して治療と言ったものではなく、麻酔針を抜いて調べてい
るようだった。

着ている服は確かに隊員の制服だったが、どこことなく不審な感じが
漂っていた。

その男は満足がいったらしく、立ちあがると監視カメラを見上げる。

「ああっ！」

「貴様、私から目を背けて何を」

「い、いました！あそこです！」

慌てて部下はサブモニターを指差すと、そこには確かに1人の男が
映っていた。

どこの国の人物なのかも分からない東洋系の男は小さく微笑んだか
と思うと、顔を伏せて『旅人』との戦闘が行われている方へと進む。

「連絡は取れないのか？」

「携帯に連絡します！」

部下は仕事用として使う携帯を取り出し、すぐに連絡を取る。

遅れてモニターの男、『名無し』は足を止めると胸ポケットから携

帯を取り出し、耳に当てる。

「待機していると言っただろう！なんでそんな場所にいる？」

部下は上司に怒られた恨みを晴らすように怒鳴りつけ、耳が痛くなりそうな大声に『名無し』は耳から携帯を遠ざける。ある程度その声が治まってくると再び携帯を戻した。

『騒がしくなれば状況の確認位するんじゃないのか？』

「その服はどうした!？」

『ああ、たまたま通りかかった男が俺にくれたんだ。ついでにIDカードもな。おかげでゲストカードじゃいけない場所もいけそうだ』

モニターの中で『名無し』はカードをヒラヒラと振って見せる。コンソールでの検索にひっかからなかった事に合点がいった部下だったが、ふざけた返答に怒りはたまる一方だった。

「ふざけるな！いいか!？お前には『旅人』を殺害してもらおう！こちらの指定する場所に今から」

『断る』

「な!？」

予想外の返答に部下は固まった。言葉が返ってこないのを良い事に『名無し』は一方的に言いつける。

『殺しに関しては俺の好きにやらせてもらおう。それは場所、方法、時間などあらゆる事に関してだ。結果さえあればいいんだろう？だったら、俺のやり方に口出しするのは止めておけ。断わっておくがそれでもまだ言うなら、俺は依頼を断るか、それかお前の死体が標的と並ぶ事になる。理解したか？』

「な、こ、こいつ!？」

「よかろう」

そこまで静観を続けていた統括支部長は一言だけ言った。

その言葉が部下の予想するものとは真逆だったために、部下の男の怒りは自然に消滅し、また言葉を失った。

統括支部長は部下に向かって手を拱き、意図に気付いた部下は慌てて携帯を手渡した。

「君の好きにやればいい。ただし仕事は完結させろ、いいな？」

『ああ』

それで電話は途切れ、モニター内の『名無し』は止めていた足を再び進めた。

統括支部長は携帯を放り投げると、受け止めた部下の顔は困惑で一杯だった。

「あいつは大丈夫なんでしょうか？」

「さあてな。まあ、罠に誘い込む呼び水になればいいが、相手が『旅人』と知っても怯んだ様子もない。もしかしたら・・・あるかもな、クツクツクツ」

楽しげに言う統括支部長だが、部下は気が気じゃない様子で他の作業へと手をつけるために一旦席を外した。
残された統括支部長はメインモニターへと目を向けると、奮闘する瞬へと開いた手のひらを重ねる。

「今日が貴様の命日だ。いざとなれば私が手を下してくれる！」
忌々しい存在を潰すように開いた手を握り、その瞳の中から『旅人の姿を消すと狂気に満ちた笑みを浮かべた。』

第35話：アジア統括支部（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

第36話：アジア統括支部（2）

ゆっくりとではあるが、着実に先に進み続ける瞬。

どこに行けば司令室に行きつくかなど分かりはしない。

そもそもアジア統括支部自体が『旅人』に攻め込まれた時の事を想定してか、MAPや部屋の表札といった物がまるでないのだ。

見ず知らずの基地の構造などただの学生だった瞬が把握している訳もなく、とにかく妨害してくる連中の向かってくる方へと進む。

その様子を背後から窺う者がいた。

廊下の角から鏡を出し、反射を利用して見ていたのは『名無し』だった。

その顔は日本人や中国人の様な東洋系であり、男のようだが中性的な顔立ちをしている。

歳は瞬とほぼ同じかそれよりも少し上といった所か。

「あれが有名な『イージスの盾』か」

次々と攻撃を流すか、弾き返す見えない何かに『名無し』は感嘆の声を上げる。

魔法使いの殺害などは何度も行ってきた彼だが、何物をも防ぐ防御魔法を相手取るのは初めてのことだった。

そんな彼は情報収集とばかりに手出しせずの様子を隠れてうかがっていた。

完全に気配を消して隠れているために瞬はまるでその事に気づく事はなく、目の前の相手に集中していた。

そして、見られている中で瞬は閃光手榴弾を作り出すと前の隊員達へと放り投げる。

「そして、『リアルメモリー』か。俺にあんな力があれば商売も

もつと楽なんだろうがな。いや、金を作り出すから働く必要すらないか・・・うらやましい奴」

本当にうらやましがっているとは思えない冷めた口調で言うと、その辺に鏡を放り捨てた。

盛大な音を立てて割れた鏡だが、大音量の銃声や爆音で『名無し』の耳にしか届きはしない。

「それに加えて肉体強化型の魔法か。攻守兼ね備えている上にゆくゆくは自分の魔法まで使えるとは厄介極まりない。仕事は完了させる、と言ったがこいつは中々難しいな」

何時の間にもやら真剣な表情へと変わる『名無し』。

その目つきは殺し屋らしく鋭く、そして瞳は機械の様な無機質な物へと変わっていた。

作業を行う、ただそれだけ。

物言わぬはずの瞳はそう言っているかの様だった。

完全に仕事モードへと切り替わった『名無し』は、左手で腰のホルスターから装飾されたコルトパイソン（リボルバーハンドガン）を抜く。

コルトパイソンには何かの文字が何ヶ所も刻まれているが、一見すると文字ではなく装飾の一部として見えるように装飾と文字がうまく重なっている。

『名無し』は弾丸が装填されているシリンダーを開き、装填された弾丸を全て抜くとその代わりに懐から先端が鈍く赤色に光る弾丸を取り出してさし込むように入れる。

開いたシリンダーを閉じると『名無し』はコルトパイソンを左手に持ち、壁に背をつけたまま立ち上がった。

廊下の角から半身を乗り出し、前の相手に集中して背中を向ける瞬間へとコルトパイソンを向ける。

銃口が瞬に重なった瞬間、指がぶれたように動き、引き金が引かれた。

指のあまりの速さに銃口から飛び出した弾丸は6発だったのに対し、銃声は2発分が伸びたように辺りに轟く。

正確に撃ち出された弾は頭に向かって6発、寸分たがわず同じ場所に目掛けて飛ぶ。

1発目が見えない盾へと着弾すると小型爆弾程の爆発を巻き起こし、次々に同じ場所へ飛来した赤い弾丸が爆発を起こす。

撃った直後、半ば反射的に角へと身を引っ込めて隠れた『名無し』は息をひそめて冷静に様子を窺う。

ある程度の効果があればと思っていた『名無し』だが、そこには何事もなかったように立っている『旅人』がいた。

それどころか後ろからの攻撃に気付いた瞬が振り向こうとするのに気づき、『名無し』はすぐに身を隠す。

瞬の視界に捉えられる寸前で姿を消すのに成功した『名無し』に瞬は気づかず、不思議に思いながらも前を向いて隊員の相手に戻る。

「この程度の爆発じゃ駄目か。ダメージもない所からするとミサイル直撃にも耐えたのはどうやら本当らしいな。・・・となると、次は」

驚きもなく淡々とした口調で呟きながら『名無し』は壁を背にコルトパイソンに弾丸を装填する。

角から顔を覗かせ、瞬を視界に捉えると目を細め、意識を極限にまで集中させる。

その瞬間、辺りの空気がまるで重力が増したかのように重くなり、戦い続ける瞬や隊員達の体中を冷たい何かが駆け抜け、互いの銃声が止んだ。

つい数秒前まで戦闘が行われていたとは思えないほどの静けさだった。

『名無し』の視界に入った全員がここにはいけないと本能が訴えかけるものの、まるで金縛りにあったように体は動かない。一部の隊員達には気を失って倒れる者までいた。瞬はどうにか気を失う事はないようだが、体は重く感じ、動きも鈍くなっていた。

「こ、れは!？」

突然の出来事に瞬は戸惑いを隠せず、まるでそれを待っていたかのように『名無し』は角から飛び出した。飛び出すと同時にコルトパイソンから計6発の銃弾が瞬時に撃ち出される。

瞬も彼の素早い動きに翻弄されたが、その攻撃は銃による物だと安心しきっていた。

なぜなら、最強の見えない盾が自分を守っているのだから。

『名無し』の放った銃弾はまた盾に弾かれる・・・はずだった。

見えない盾と弾が接触した次の瞬間、弾かれるはずの弾が瞬の腹へと突き刺さり、赤い血が吹き上がった。

「ぐっ!？」

反射的に瞬は腹を抱え込むように抑え、予想外の攻撃は痛みと驚きで脳を満たす。

具体的に何が起こったのかと考える暇もなく、次々と飛来する弾が瞬の腕や胸へと突き刺さる。

急所にこそ当たりはしなかったものの、ここにきて初めて食らった攻撃は常人なら致命傷といった所だ。

だが、そんな治っていく怪我よりも瞬には信じていた盾が機能しなかった事に驚愕していた。

どうして攻撃がすり抜ける!？

理由は分からないが、考える暇すら与えないつもりなのか立つたまま動きの鈍い瞬へと『名無し』の攻撃は続いた。次々と弾が突き刺さっては肉を抉り、爆発が起こっては肌や肉を焦がす。

終わらない痛みには耐えかねた瞬はその場で鉄の巨大な壁を作りだし、通路を丸ごと塞いだ。

強引に『名無し』と切り放した途端、瞬にのしかかっていた重さは消え、体中を襲っていた悪寒も感じなくなる。

それは隊員達も同様で、何が起こったか分からないまま隊員達はまた任務へと戻り、各々の武器から瞬へと向けて大量の弾丸を撃ち出した。

怪我で反応が遅れた瞬は銃弾の嵐が襲いかかるのをグツとその場に踏みとどまり覚悟する。

ところがそんな瞬を余所に、銃弾の群れは軌道を逸らされて上下左右へと分かれていく。

いつもと変わらぬ『イージスの盾』の魔法だ。形こそ見えないが盾は正常に機能している。

それだけでも瞬には貴重な情報だった。

「使えている・・・、さっきのは一体・・・」

理解が出来ない攻撃に瞬は戸惑いながらも目の前の相手に集中し、次々と相手を眠らせていく。

一方、無理やり離された『名無し』は携帯を取り出すとすぐに連絡を取る。

その面の様な表情からは殺し損ねた事を悔む様な感情は読み取れない。

「奴の前に回り込む通路を教えろ」

『お前、一体何をやった！どうして『旅人』に傷をつけられる！？方法を教える！魔法か？それとも』

電話向こうの男、統括支部長の部下は喚き立てる様に質問攻めをしてきた。

おそらく、彼も司令室から戦いの様子を見ていたのだろう。今まで最強と言われ、何をやっても破れなかった『イージスの盾』。それを破ってしまうと言う信じられないことをやってのけた『名無し』に、彼どころか司令室にいた全員がその疑問を考えていた。どうやってやったのか、と。

彼が『名無し』に対しての質問の嵐も当然と言える。

それに対し、『名無し』は面倒くさいように小さく息を吐くと押し殺したような静かな声で言った。

「もう一度言う、奴の前に出る通路を教える。さもないと」

『っ！・・・そこを右に進んで、道なりに進んだ後、左だ。おそらくそれで先に出られる』

それだけ聞くと『名無し』は通話を終わらせて携帯をしまいこみ、言われたとおりの道順で通路を走る。

「まだ奴にはれてなければ同じ手は有効か。いや、ばれていたとしても奴では防げない」

走りながらも冷静に現状を考える彼だが、手元ではコルトパイソンへのリロードを行っていた。

何度も何度もやってきた動作は考えの外で自然と行われ、次のラウンドへの準備を淡々と進める。

心なしかその口元は笑っているように見える。

まるで、『旅人』との戦いを楽しんでいるかのよう。

「おい、止まれ！」

走っていた彼の前に隊員が現れ、止まるように言ってきた。

男は彼を旅人に恐怖し、逃げだしてきた隊員だと勘違いしていたようだ。

隊員の階級は命令できる立場、隊長クラスなのだろうがそんな事は外から招かれた『名無し』には分かる訳がない。

そのまま走る足を止めず、突っ込むようにその隊員へと向かう。

逆に止まらない下の階級と思われる男に得体の知れない何かを感じた隊員は、AK47を向けようとしたが既に『名無し』は目前にまで迫っていた。

「邪魔だ」

「止ま、グオツ！」

AK47を構える前に鳩尾へと『名無し』の突きが放たれ、隊員は意識を失って倒れた。

それを見ていたその男の部下連中はこれから来るであろう『旅人』の方へと構えていた銃口を一斉に『名無し』へと向ける。

「面倒な。お前ら、俺に対しての命令は聞いていないのか？」

「何の話だ！？よくも隊長を！」

「あゝ、ヤル気になっているのに悪いが、死にたくなければ俺に銃口を向けるのはよせ。死にたくなければ、な」

緊迫した空気が辺りに立ち込める。

殺気立ち銃を構える隊員達に対し、『名無し』は持っているコルトパイソンを向けるような真似はしない。

だが、隊員達の中には『旅人』と戦う巨大な恐怖が存在し、彼らはそれを他の事で膨張させるのは止めたかった。

そんな意識があつてか全員の銃を持つ手には力が入り、今にも引き金を引きそうだ。

しようがない、やるか。

隊員達を戦いの駒としてではなく、障害物として切り替えた『名無し』は目を細めて意識を集中させる。

何かをやる事に気付いた隊員はそうはさせないと号令を叫んだ。

「こいつは敵だ、撃つ！ 待て！ 撃つな！」 ツ！ 中止だ！」

その場にいる隊員達の指が引き金を引ききる寸前、飛びこむようにきた無線連絡にその指を止める。

後少し遅ければ、確実に号令のもと、一斉砲火が行われていただろう。

その後はどうなったか分からないが。

『そいつは味方だ、撃つな！ 気絶した隊長に代わり指揮を執る』

「しかし、隊長を無理やり」

『司令部に逆らう気か？』

「いえ、そついう訳では」

『ならば、お前達の前にいる男の指示に従え。分かったな？』

無線は切られたが、向こうからかけられた重圧はそう簡単に消えるものではない。

隊員達は皆、不服そうに『名無し』へと向けていた銃口を元の方へと戻して構える。

「……命令は、何ですか？」

目を伏せながらためらいがちに聞いてくる隊員に『名無し』はおおよその事を察した。

「ほう、俺が隊長か。……そうだな、『旅人』が現れたら撃ち続ける。俺にそれ以上の指示は求めるな」

「それだけ、ですか？」

隊員は呆れたように聞き返すが、彼は感情もなく答える。

「それなら誰でも出来るだろ」

その一言は隊員達には皮肉に聞こえたらしく、一気に彼に対する不満は高まる。

だが、司令部からの命令である以上、この男の指揮下でやるしかないと全員が渋々納得していた。

そんな彼らを障害物から駒へと切り替えた『名無し』は、正面から向かうのは連中に任せて奥に隠れた。

一見すればどこにいるか分からない物陰は戦闘を終えた所を突くには絶好の場所であり、また壁で銃弾からも隠れられるという場所だった。

戦闘の切れ間、その隙について殺す事にした彼だが、問題はハンドガン程度の火力では殺しきれないという事が既に彼には分かっていた。

た。

ただの人間程度なら1発でも致命傷なコルトパイソンも、肉体が強化され、それと同時にトカゲなどを軽く上回る再生能力を持ち合わせた『旅人』相手では何発撃てばいいのか見当もつかない。

彼は数秒ほど目を閉じて色々な試算を行い、やがて覚悟を決めたように目を見開くとリロードしたはずのコルトパイソンから全ての弾を抜いた。

その代わりに5発の青い弾頭、そして1発の銀色に輝く弾頭の弾を装填する。

銀の弾が頭に来るよう合わせてシリンダーを戻すと、それに連動して刻み込まれた文字が青く光り出す。

その幻想的な淡い光はまるで蛍の光のようだった。

「ただの弾丸程度なら耐えるだろうが、こいつはどうかな」

準備完了の合図を確認した『名無し』は、いずれやってくるであろう『旅人』に必殺の一撃を叩きこむ瞬間のために物陰へと身を沈めて時を待つ。

すると、程なくして待ち構える隊員達の前に瞬が現れた。

耳を塞ぎたくなるほどの銃声上がり、戦闘が始まった事を彼に知らせる。

現れた瞬は銃弾が飛び交う中を走り抜け、今までと変わりなく隊員達を戦闘不能へと陥れていく。

その動きにはどこにも怪我を引きずっている様子はない。

万が一を考え、物陰から覗く事が出来ない『名無し』だが、音に集中するだけでおおよその見当はついていた。

やはり傷は治っているか、化け物め。

心の中では歯ぎしりする様な事を考えていても、それは彼の表情には出ない。

感情は表に出すことなく、内面で冷静に考えて処理していく。

殺し屋という職業上、自分の感情を出す事は損にしかならず、実際、彼は感情的に動いて死にかけた事が何度もあった。

そんな経験から今の術を会得し、リスクを減らすために常に冷静でいるよう努め、まるで機械がやっているかのように彼は仕事中は常に無表情となった。

だが、あくまで表に出さないだけで、実際の所、普通の人と同じで感情はある。

今の彼の内面で一番強い感情、それは恐怖だった。

人知を超えた様な化け物を本当にこの1発で殺せるのだろうか？

さつきとは違い、完全に逃げ場のない場所からの不意打ちに賭けたが、不安は尽きない。

自然と彼の額が汗ばみ始めた頃、辺りから銃声が途絶えた。

瞬が全ての隊員を倒したという事だ。

物音もしなくなつたかと思うと誰かの歩く音だけが『名無し』の耳へと届き、その足音は徐々に彼へと近づいてくる。

悟られないよう息を殺し、通り過ぎる一瞬を待つ『名無し』。

次第に伸びる人の影が目に入り、あと数歩も歩けば捉えられる位置にまで来ていた。

何も知らずに歩く瞬に対して、『名無し』の心臓の鼓動は高まっていくな。

だが、物陰に差し掛かる寸前で瞬の足は止まった。

まさか、気付かれたか！？

飛び出して不意打ちをかけようかと考えた『名無し』だったが、ふと火薬の焦げる匂いに交じって微かに香ばしく良い匂いが鼻につく。一体、何をしているのか気が気ではない彼だったが、今度は耳に陶器を重ねる様な音が聞こえてきた。

覗きこめはしないが、彼は匂いと音で大体何が起きているのか見当が付き、苛立ちを覚えた。

・・・まさか、アイツ！？

そう、瞬は落ちつこうとしていたのか、その場で紅茶を作り出して

飲んでいた。

この場所、このタイミングで飲むなよ！

表情には出ないが、心の中で盛大に突っ込んだ『名無し』に対し、瞬はその作り出した紅茶の味をじっくりと堪能していた。

「やっぱり、紅茶はダーズリンですね」

知・る・かーっ！さっさと進め！

すぐ側で自分を殺そうとする殺し屋が突っ込んでいる事などつゆ知らず、紅茶の味を堪能した瞬は空になった陶器を消す。

ようやく歩き出し、あっさりと『名無し』の前を通過していく瞬。

その直後、物陰から音もなく飛び出した『名無し』はすぐさま瞬を視界内に捉えると、コルトパイソンを構えた。

だが、今度は先ほどと違い両手で構え、まるで衝撃に耐える様に両足を開くと腰を落とす。

それはまさに大口径の銃を撃つ時のフォームに近かった。

ただ、世間で言う所の大口径とは『名無し』が片腕で連射してみせたコルトパイソンなどを指している。

今からそれ以上の衝撃が訪れると彼自身が語っていた。

構えたまま意識を集中させ、先ほどと同じように極限にまで集中を高める。

すると、辺り一帯の空気が鉛でも含んでいるかのように瞬の体に重く纏わりつき、全身に寒気が走る。

「これは！？さっきの！」

咄嗟に壁を作り出して避けようとする瞬だったが、後ろで構えた『名無し』は既にトリガーを引くのみだった。

「遅い」

淡く光るコルトパイソンのトリガーを引いた途端、その銃内部では5発分装填された青い弾丸から内部に蓄えられた電力が放出される。コルトパイソン内を奔走する電流は銃身へと集中し、更に目には見えない道を銃身の先、空気中へと作り出す。

そこへ放たれた銀色の弾丸は通常通り発射された後、電流が走る道を通る事で超加速し、ただの銃ではあり得ないほどの速度をはじき出す。

レールガン化した銃から放たれた銃弾は、発射された次の瞬間には向かい側の壁へと大穴を開けていた。

その直線上に立っていた瞬の胸に大穴を開けて。

「ガフツ！？・・・に、が」

言葉にならない声を上げながら瞬は自分に何が起こったのか分からない。

信じられないほどの痛みを胸に感じ、ぶれる視線を胸へと向けるとそこにあるはずの胸がまるで最初から何も無かったかのように丸々無くなっていた。

体はどうか繋がっているものの、心臓のあつた位置を中心に空いた穴からは遅れたように大量の血が噴き出す。

立っていられない痛みにふらついたが、倒れる寸前で膝を立てて耐える。

死んでもおかしくない強烈な痛みが瞬を襲う中、気力を振り絞ってどうにか意識を保つ瞬。

それを見下ろす『名無し』の顔には安堵と言った表情もない。

無言でまたコルトパイソンの再装填を行うのみだった。

コルトパイソンから空になった薬莢1つと色を失った5つの弾丸を抜き、また同じ弾丸をセットする。

「頭を狙ったが、不安定な盾に弾かれて胸に当たったか」

瞬は片膝をついたまま、声のする方を見上げるがその視界に初めて『名無し』を捉えた。

だが、その姿は5重位にぶれて見え、全くと言っていい程分からない。

仮に互いがまともな姿で顔を合わせても瞬には風穴を開けた男だとは分からないだろう。

一方、そんな『旅人』に『名無し』は無慈悲にコルトパイソンの銃口を向ける。

狙う先は息も絶え絶えながら『名無し』を見返してくる瞬の額だった。

その瞳には力も何も感じられない。

最早、『名無し』には最強の怪物と対峙している恐怖もない。

「そんな気力があるとは驚きだが、こいつで終わりだ」

彼がトリガーを引こうとした瞬間、瞬は力の入らない震える手を前にかざした。

「ガアアッ！」

口から大量の血を吐きながら掲げた手から現れたのはピンの抜けた閃光手榴弾だった。

その瞬間、辺り一帯に視界を失うほどの閃光が溢れる。

「くっ！」

咄嗟に引きかけたトリガーから指を外し、後ろへと飛び退いた『名無し』。

圧倒的な光に目が眩み、瞬の姿を見失った、だが。

「そこだ」

頭の中に描かれた情報を元に瞬へと向けてトリガーを引いた。

放たれた弾丸は『名無し』のイメージ通りに飛び、瞬がいるはずの場所を通り過ぎ床へと大穴を開ける。

当たったかどうか確認できないが、徐々に目が回復してきた彼は白みがかつた中で瞬を探す。

すぐさま、瞬を見つけるとピクリとも動かない瞬に倒したと確信を得た。

俺が『旅人』を殺した、俺がっ！

コルトパイソンへの再装填を行いながらも、直に確認しようと瞬へと歩み寄る。

距離が近づくにつれて目は正常に戻っていき、瞬まであと3〜4歩と行った距離まで来た時だった。

そこで彼の足が止まった。

見下ろした瞬には吹き飛ばしたはずの頭がまだあったからだ。

『名無し』は半ば反射的にコルトパイソンを瞬へと向け、何度も引き金を引く。

ところがその弾は全て見えない盾によって弾かれ、あらん方向へと飛んでいく。

「まだ生きてるのか」

「やってくれますね。さすがに死んだと思いました」

「っ!?!」

目の前でゆっくりと立ちあがる瞬。

胸に空いた穴は完全に塞がり、怪我の一つも見当たらない。

その顔は笑ってはいるようだが、張りついた様な造り物のような笑顔を浮かべていた。

さすがに殺されれば誰だって怒りはある。

得体の知れない威圧感を放つ瞬に、『名無し』は後ろへと飛び退き、コルトパイソンにレールガン用の弾丸を仕込む。

「なぜさっきのが当たっていない？」

「目の見えなくなった貴方が頭を狙ってくれたおかげ、ですかね」

「どういう事だ？」

「簡単な事です、閃光手榴弾を造った後で一旦力尽きた僕は倒れたんですが、その上を貴方の弾丸は通過していっただけです。あれが当たっていれば死んでいたかもしれませぬ」

「そうか、ならもう一度やるまで！」

意識を集中させ、瞬へと見えない攻撃を仕掛けようとした時だった。

「それは殺気ですよね？」

瞬の一言に『名無し』の行為は止まった。

相変わらず表情は無いが、内心では動揺が走る。

「知っているのか？」

「師匠が教えてくれました。人を殺し続け、その間鍛え抜かれた集中はやがて人に重圧をかけるほどの気を放つようになる、と。意

識が弱い者ならそれだけで意識を飛ばす事も可能であり、『イージスの盾』ですら防げはしない。何と言っても殺意を高めただけの気配ですからね。ただ、受けた時に『イージスの盾』が不安定になるとは初めて知りました」

「フン、それでその師匠とやらに対抗する方法も聞いているのか？」

「聞いた限りでは同じように人を殺し続けた者、もしくは精神を鍛えた者には効かない、と」

「その通りだが、それじゃお前には防げないな。なら、もう一度食らえ」

『名無し』はすかさず意識を集中させる。

殺気を放つまでにかかる時間など、殺しが日常と化している彼ならば2秒とかからない。

だが、その目の前に瞬はスモークグレネードを放り投げる。一瞬で辺りに立ち込めた煙に『名無し』の集中は途切れた。

「クッ！」

「教えてもらった方法にはもう1つあるんです。集中を途切れさせる、つまり、集中を妨害するか、集中の対象になる者を見えなくさせれば良い。実際、貴方から初めて殺気を受けた時、咄嗟に壁を出して見えなくなると貴方からの攻撃は止まった」

「知っていたか」

「これで殺気は使えない！」

『名無し』の方へと瞬は麻醉銃を連射する。
その音に反応し、咄嗟に伏せた『名無し』だが、盾を無効にする手
段はない。

これ以上の攻撃は無駄であると判断した彼は煙の中を後退する。
瞬もその姿が見える訳ではないが、段々と遠のく足音に彼が離れて
いくのに気付いた。

「逃げる気ですか？」

「ああ、そうさせてもらう。あくまでこの場合は、だがな」

『名無し』はその場から物陰を利用してドンドンと離れていく。
煙が晴れた頃にはどこにも『名無し』の姿はなかった。

「……死ぬかと思った」

今までの体験の中、一番死に近い戦いだった。
瞬はまるで緊張の糸が切れたように震えが収まらない。

修業をしてそれなりに力をつけたつもりでも、此処までの深手を負
わされた事にもショックを受けていた。

まだまだ力不足、ということでしょう。

不甲斐無い自分に対して乾いた笑いを上げると、瞬は基地の奥へと
向かって進む。

第36話：アジア統括支部（2）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

展開のスピード遅すぎるorz

ただ、書きたいように書いた結果ですが、文字数を増やしてるだけのような気がしてます。

まとめるのがやっぱり下手だな、自分。

第37話：アジア統括支部（3）

人が慌ただしく行き来していたはずの司令部では、『名無し』の撤退した所がメインディスプレイに映し出されていた。

そこにいた全員がそれを見上げ、言葉も発せずにもその場に立ち止まる。

結果的に撤退したが、その戦い方は隊員達の手や足を止める程に興味を引いていたからだ。

この基地に瞬が来てからまともにダメージを与えたのも今の所、『名無し』のみ。

誰も外から雇った殺し屋が無能だったなどとは言える訳がない。

司令部の奥で高級な椅子にふんぞり返るアジア統括支部長も、今の戦闘結果は有益だったと考えていた。

だが、その表情は険しく、眉間にしわも寄り、怒りが溜まっている様にしか見えない。

右手で後ろに控えている部下を呼び寄せ、そちらを見ずに尋ねる。

「隊員の中に殺気とやらを使える者はいるのか？」

静かに怒りを放つ統括支部長に部下は冷や汗を掻きながら歯切れ悪く答えた。

「その、先ほど確認してみましたか・・・使える者は、いない、そうです」

「奴らは人を殺し続けた者と言っていたが、内の連中にも似たような者はいたはずだ」

「それなんですデータベースで確認した所、殺気を放つのに具

体的な条件が明確になっていないそうです。人を殺し続けただけで使える訳ではないらしく」

そこまで聞いていた統括支部長は苛立ったように机を叩きつけて立ちあがった。

控えていた部下も反射的に体がビクついたが、睨みつける統括支部長と目が合うと動きと息が止まる。

そこに統括支部長が歩み寄ると、今にも掴みかかりそうなほどに顔を近づけ、鬼の様な剣幕で部下に怒鳴りつける。

「フリーの殺し屋が『旅人』に怪我を負わせたんだぞ！？外部の者を超越する者が内にいないというのか！このアジア統括支部にだ！そもそも殺気が『旅人』に有効ならなぜ今までそれを誰も習得しようとしてない！？」

「そ、それが、今までの『旅人』は殺し屋の比ではないほどの人殺しばかりであるため、殺気が有効ではないと判断されていたんです。そのため、対抗手段としては除外されていて」

「もういい！・・・『名無し』は何処に行った！？」

部下は慌てて『名無し』に奪われたIDの位置を検索しようとするのと、ちょうど彼の携帯電話が鳴りだした。

すぐに電話に出ると聞き覚えのある不躰な一言が飛び出す。

『奴の位置を教えろ』

「『名無し』か！？ちょうどいい、今何処にいる！」

『知らん、壁にはH-2と書いてある』

そこまで聞いて通話を一旦保留にすると、オペレーターの1人に位置を伝える。

即座に現在位置がディスプレイに映し出された地図に記される。

同じように表示された『旅人』の位置までそう離れてはいないが、2人の位置は『ホール』前の区画へと差し掛かっていた。

実験動物が放たれているという区画だ。

それが意味する事を一般の隊員では理解出来ないが、統括支部長の直属の部下である彼は把握していた。

保留を解除しても静かな電話に向けて彼は言った。

「奴はお前の1ブロック先にいる。追うつもりだろうが、これから先、実験動物が放たれているから気をつける事だ」

『実験動物？』

オウム返しに聞き返され、彼は統括支部長の顔色を伺う。

統括支部長は一度だけ重く頷くと、部下は質問に対する答えを返した。

あくまで周りに聞かれないよう、小声で。

「・・・魔法の生体実験で出来た異形の怪物だ。奴らのほとんどがまともな意識などない。お前を見かければお前を敵だと思いこみ襲いかかる」

『ほう、頭のいかれた組織だと思っていたが、そこまでいかれていたか』

「軽口を叩いて相手出来る奴らじゃないんだぞ！お前でも殺される可能性が」

『それで?』

「それでって、お前!」

『そいつらを殺しても文句は言わないんだろ?俺が言いたいのはそのだけだ』

会話はそこで強制的に途切れた。

『名無し』が言うだけ言って切ったためだ。

自分勝手な彼に部下は携帯を叩きつけたくなる衝動に駆られるが、腕を振り上げた所でどうにか自制に成功した。

部下の話している内容からおおよその事を把握した統括支部長だが、やり取りを見て少しだけ怒りが治まったらしく硬かった表情も少し緩む。

ついでに冷静さも取り戻したのか、再び椅子に腰かけるとメインディスプレイへと目を向ける。

「まあ、見物だな。戦闘データの記録も取れる。制限をかける」

「了解しました。・・・これより先の戦闘は機密事項だ!上級未満の隊員は此処から出る!」

部下の一声に走り回っていた隊員達が一斉に司令室から去っていく。残ったのはせいぜい元いた隊員の4割程度といった所だ。

「さて、後はお前が指揮を取れ。私は『ホール』に向かう」

そう言うと統括支部長は立ちあがり、呆気にとられた部下を尻目にその場から去ろうとする。

突然の話に部下は慌てて止めに入った。

「ま、待って下さい！なぜ、貴方が司令室から出るんですか!？」

「・・・私に口答えする気か？」

「いえ、そんなつもりは。で、ですが、支部長が司令室にいないのでは・・・」

「後の命令など何もない、誰が座つていようがどうともなる。それに私の力はおそらく『旅人』にも通用するだろうからな」

言い切った統括支部長に、少なくとも嘘を言っている様な様子はない。

『旅人』の理不尽なスペックを知りながらもそう言い切ったのだから、勝算があるという事なのだろう。

彼がただのボンクラや新兵ならそんな事など信じられるはずもないが、実力と計算で昇りつめた地位はいまやこのアジア全域を治める立場にある。

ただし、彼の魔法の詳細について把握している者は彼以外、誰一人としてこの施設にはいないようだ。

「私がいく事によって罨にかかる確率も高まる。それにだ」

「それに？」

「・・・私の手で殺してやりたい!」

『名無し』の無感情とはまったく違い、血管が浮き出る程に忌々しげな表情へと変貌する統括支部長。

その表情や瞳からはは明確な殺意が伝わってくる。部下はそんな彼に何も言えずに立ちつくし、その間に彼はその場から去っていった。

急に隊員の姿が無くなり、瞬は戸惑いから進む足を止めた。

先ほどまでは強固に守られた通路を次々と突破してくることで、司令部の位置が守られている先だと瞬は思っていた。

だが、今はどこにも隊員の姿はなく、進むべき道もそれなのか分からない。

一瞬、彼の脳裏に罨という考えがよぎるがふと目の前の通路を何か慌てて後を追いかけた瞬だが、横切った何かの姿は何処にも見えない。

「今のは一体・・・？人、ではなかった？」

瞬は見て捉えた映像を思い起こす。

チラッと視界の端に見えたのは確実に人の形をしてはいなかった。

とりあえず追いかけようとすると今度は後ろの方から物音がし、瞬が振り向いた時には壁に影が映るだけだった。

その影はやはり人ではなく、犬の様だった。

どことなく嫌な予感がし始めた瞬は麻酔銃を両手に持ち、警戒しながら前へと進む。

その様子を気配を断った『名無し』が背後から見ていた。

ふん、出くわしたらしいな。

統括支部長の部下が言っていた実験動物だと確信した『名無し』だが、彼もまたその姿は捉えていなかった。

鬼が出るか、蛇が出るか。

辺りを警戒しながらも瞬を見失わないよう後を追いかける『名無し』。

だが、その足はすぐに止まることとなる。

廊下の窪みから得体の知れない殺意を感じ取ったからだ。

さすがに立ち止まった『名無し』だが、足を止めると同時に暗がりへと向けてコルトパイソンを構える。

油断など微塵も感じられず、その気概に隠れている方が追い詰められていく様な錯覚に陥る。

「ウ”ウ”ウツッ！」

「声からすると犬か？何時までも隠れてないで出てきたらどうだ？」

人語である以上、相手が犬だったとしてそう伝わる訳はないが、まるで挑発している内容が伝わったかのように暗がりから何かが飛び出した。

それは確かに犬だった。

だが、体の表面は焼け爛れた様な酷い状態で体中から血を流し、見た目からすれば死んでいてもおかしくない様な犬だった。

その犬は荒れ狂った様に叫びながら肥大化した牙を持つ口を開けて『名無し』へと飛びかかる。

常識はずれな速度で犬の牙が『名無し』の首筋を捉え、その巨大な牙を突き立てる。

「残念だが、はずれだ」

犬が何も銜えていない牙を上下重ね合わせると、捉えていたはずの『名無し』はいつの間にか犬の隣に回り、無防備な腹を蹴りつけた。

壁へと叩きつけられた犬はよろめきながらも起き上がり、まだ『名無し』への敵意を露にして低く構える。

それに対して『名無し』は音を出さないようにとどめの一撃を見舞おうとした時だった。

犬の噛みつくために開かれていた口の奥から赤い光が溢れ出したのに彼は気づく。

何が起るのかなど『名無し』に分かるはずもないが、良い予感はないがなかった。

咄嗟に構えるのを止め、『名無し』は左へと大きく跳びのいた。

すると、轟音とともに彼のいた場所に火炎が吹き荒れ、そのまま彼を追いかけて移動し始める。

「よりにもよって火を吐く犬か。さしずめケルベロスってところだな」

距離を取りながら見据えた火炎の隙間に走るケルベロスの姿が見えるが、その口から吐き出される火炎放射器を思わせる様な炎は途切れない。

仕方ないと諦めたように『名無し』はコルトパイソンを向かってくる炎の壁目がけて構え、引き金を2度引いた。

炎で姿が見えにくい中、放たれた弾丸は的確にケルベロスをつえ、

1発目は火炎を吐き出す口の中へと、2発目は1発目が当たった事で若干跳ね上がった頭部へと見事に命中する。

火炎が止まるとほぼ同時にケルベロスは絶命し、大量の血を噴き出しながら倒れた。

「銃声？」

いまだ敵とは出くわしていない瞬だったが、突然の銃声を聞きつけ向かおうとした所だった。

目の前に『名無し』と対峙したのと同じ表面が焼け爛れた犬、ケルベロスが2匹現れた。

「ひどい・・・、一体何をされればそんな姿に」

全身火傷の様な姿に瞬は心から同情していたが、そんな瞬とは対称的に2匹のケルベロスは瞬へと敵意を剥き出しに唸っていた。今にもとびかかりそうな2匹だが、瞬はそのあまりにもひどい見た目に助けることしか頭にはない。

「大丈夫、助けてあげるから、おとなしく・・・」

「ガウツ！」

「大丈夫だから」

歩み寄る瞬に対して引かないまでも威嚇を止めない2匹のケルベロス。

次第に距離は縮まり、瞬が4歩目を踏んだ瞬間、ケルベロス達は隔てていた壁が無くなった様に瞬へと襲いかかる。

いきなり飛びかかってきた犬達は鋭く尖った牙を瞬へと突き立てようとしたが、その途中で見えない盾により攻撃は流される様に防がれ、何も無かったように2匹は地面へと降りる。

当然ながら実験動物として扱われた犬に『イージスの盾』などという魔法の事など分かる訳もない。

ケルベロス達の中にあるのは体中から感じる焼けつく様な痛みと、すぐそこに立っている人間へと襲いかかりたい衝動だけだった。

瞬を挟むように何度飛びかかろうと、何度噛みつきこうしてもまるで攻撃は通じない。

さすがに何かを理解したのか犬達は無駄な攻撃を止めて、後ろへと

飛び退いた。

自分に対する敵意しかなかった犬達に驚いた瞬はその場で足を止めていたが、眠らせようと麻醉銃を構えようとしたがケルベロスの口が赤く光るのに気づくと、その手も止まる。

不思議に思う瞬へと向けて、ケルベロス達は口から息を吐き出すように炎を吐き出した。

勢いよく吐き出された火炎は驚く瞬へと両側から迫り、360度の視界を埋め尽くすほどの炎が盾の周りに溜まり続ける。

「炎を吐いた!？」

本来であれば、魔法を認識し使うことのできるのは人間のみだと瞬はイリアから聞いていた。

だが、目の前にいる犬は紛れもなく炎を吐いている。

実際は体の中に埋め込まれた炎の魔具から炎を出す魔法を疑似的に得ているだけだが、魔法の生体実験の事など知らない瞬には犬が魔法を使っているようにしか思えない。

とにかく炎を止めないと。

そう考えた瞬は『不死鳥の粉』を作り出し、回転するように辺りへと振りまいた。

その途端、空气中に舞った粉が襲いかかる炎を完全に退け、抑え込まれるように炎は収縮していく。

ケルベロス達はなぜ炎が小さくなっていくのか理解が出来ず、炎の壁が消えていくと目の前にいる哀しげな目をした瞬と目が合う。

その刹那、2匹とも眉間へと麻醉針を撃ちこまれ、押し寄せる睡眠に意識は流されていき、床へと崩れ落ちていく。

寝息を立て始めた犬達に瞬は治療しようと歩み寄り、手を伸ばす。その手が触れようとした時、不意に耳触りなノイズの様な音が瞬の耳へと届く。

手を戻して麻醉銃を構えた先には体長50cmはあろうかという大

きな蝙蝠が羽ばたき、赤く小さい眼で瞬を凝視していた。

見た目は飛んでいるだけなのでかい蝙蝠だが、問題はその数だった。狭い通路の天井を覆い尽くし天井光を遮断するほどの数、およそ50匹はいるだろう。

不快音は1匹1匹の蝙蝠が羽ばたく音が重なり合う事で発せられ、聞き続けていた瞬は段々気分が悪くなってきた気さえする。

そんな瞬を無数の赤い目が瞬を捉え、先頭の1匹が瞬へと突撃するように急降下する。

それに続いて蝙蝠の群れも急降下し、瞬を覆い尽くさんばかりに一齐に群がった。

盾によつて防がれてはいるが、その周りではおそらく血を吸うため、蝙蝠達は小さい牙をむき出しに瞬へ噛みつきこうとしている。

見えない盾がある事もケルベロス達と同様に理解はしていないが、しつこさはケルベロス以上でまるで離れようとはしない。

「今度は蝙蝠ですか」

さっきの犬達もこの蝙蝠達も『W2』の攻撃である事は理解した瞬。すると蝙蝠達は一齐に口を開けたままその場で羽ばたき、瞬へと襲いかかるのを止める。

犬達と同じように何かを仕掛ける気だと察した瞬はすぐさま撃ち落とそうと麻醉銃を向けると、すかさず何発も麻醉針が撃ち出された。その場から動かない蝙蝠達は格好の的であり、全ての針が狙い通りに蝙蝠達へと向かう。

だが、勢いよく飛んでいったはずの針は途中で押し戻されるように力を失い、失速して地面へと落ちていく。

「そうですね、また魔法を使うんですか」

蝙蝠達は答える口など持つてはいない。

ただその場で羽ばたき続け、瞳の中に瞬を捉えているだけだ。何度針を撃つても、まるで向かい風でも吹いているかのように見えない何かに落とされていく。瞬はその場からかけ出し、盾によって無理やり蝙蝠の何匹かを押しつけて離れる。

蝙蝠達はすぐに瞬の方へと向き直り、通路を塞ぐようにフォーメーションを組むとやはりその場から動かない。そして、瞬へと向かって音もなく何かしらの攻撃を行い、その余波で蝙蝠達と瞬の間の床や壁に亀裂が入る。

「これは、もしかして超音波か!？」

解答が告げられる訳はないが、瞬の推測は当たっていた。

本来、蝙蝠が仲間とのやり取りや地形の把握などに超音波を用いているが、目の前の蝙蝠達は魔法実験により物体へと作用する超音波を吐き出すように改造されていた。

1匹でさえ人間を倒しかねない強さを誇るが、今、瞬の周りにいるのは50匹もの大群だ。

合わさった超音波の前に人ならば立つことすら許されず、訪れる死を激痛の中で迎えるしかない。

だが、蝙蝠達の相手をしているのは無敵の盾を持つ『旅人』だった。詰まる所、空気の振動である超音波は『イージスの盾』によって防がれ、その中で瞬は野球のピッチャーのように大きく振りかぶる。高く上げた腕を振り下ろし、握っていた何かを蝙蝠達へと力一杯投げつける。

超音波の荒れ狂う中、回転しながら飛ぶそれは麻醉針とは違い、ある程度の質量を持っていたため簡単に落ちはしない。蝙蝠達の元へと届いたそれは破裂し、溢れ出る光と爆音が瞬へと群がっていた蝙蝠達の眼や耳を潰す。

「キーツ！」

断末魔の様な叫び声を上げながら、閃光手榴弾が直撃した蝙蝠達は気絶して次々と床へと落ちていく。

「すいませんが寝ててください」

全て倒したのを確認した瞬は申し訳なさに一言言うと、その場で反転して銃声のした方へと向かう。すぐに銃声がした場所は分かった。

瞬の足元に撃ち殺されたケルベロスの死体があったからだ。

血だまりの中に沈む死体はピクリとも動かず、濁った瞳は虚空を見つめている。

酷い事を・・・、これは？

死体に2発の大きな銃痕があるのに気づいた瞬は、何となくではあるがあの男の仕業だと確信していた。

銃声がついさつきという事もあり、まだ近くにいるのだろう。

気をつけるべき相手が魔法を使う動物だけではないという事に瞬は疲れを覚える。

そんな瞬の背後へといつの間にか『名無し』は忍び寄っていた。

通路の角から必殺の一撃を叩きこもつと、レールガン用の弾丸は既にコルトパイソンにセットされていた。

後は殺気を放ち、『イージスの盾』を無効化した上で引き金を絞るのみ。

「これで終了といきたいが・・・」

自分の殺しの方法が『旅人』に通じたとはいえ、また仕留めきれないのではないかと不安は尽きない。

それを切り捨てる様に眼を閉じて静かに息を吐き出すと、意を決し

たかのように角から飛び出した。

「え？」

「なっ!？」

すると、ちょうど後ろを振り向いていた瞬の真ん前に飛び出す形となり、さすがに常に無表情だった『名無し』も驚きの声を上げる。飛び出した以上止められる訳もなく、コルトパイソンを構えようとする『名無し』に対して、瞬も慌てて麻酔銃を構える。

互いに銃を向けあつたまま拮抗しているような状態になる。

だが、有利なのはただの攻撃など全て退ける『イージスの盾』を持った瞬の方だ。

その事を分かっているからこそ、一刻も早く『名無し』は殺気を放って動きを制限したかったが、目の前にいるのでは瞬が撃つ方が確実に早い。

逃げる事しか頭になかった『名無し』の思考を遮るように瞬は話しかけてきた。

「早い再開でしたな」

「ああ、そうだな。というより、俺はお前を諦めたつもりはなかったからな」

「そうですね。それなら完全に諦めてもらいましょうか！」

瞬が引き金を引いた瞬間、『名無し』は素早く身を静めて麻酔針をかわし、壁を蹴りつけて跳び上がると瞬の方へと飛んだ。

それに対して瞬はすぐさま、『名無し』を追う様に麻酔銃を連射する。

ところが、飛来する麻酔針をコルトパイソンの底で叩き落とした『名無し』はそのまま瞬の頭上を越えて、瞬の背後を取る。即座に殺気を放ちにかかるが、放つ前に瞬の回し蹴りが『名無し』を襲う。

「つち！」

舌打ちしながらも殺気を放つのを止め、上体を反らして蹴りを回避するがそこに次々と瞬の拳や蹴りが襲いかかる。

どれをとつても食らうとまずい一撃だが、長年の経験からどうにか回避する『名無し』。

瞬が右フックを放ち、空ぶった瞬間、隙が出来たのを『名無し』は見逃さなかった。

後ろへと大きく飛び退き、そのまま殺気を放ちに意識を集中する。

それに気付いた瞬が麻酔銃を撃ちながら、左手で通路の天井から床までを貫く柱を作り出した。

その柱に瞬の体は完全に隠れ、『名無し』の殺気も相手の姿が見えないのでは放てはしない。

これなら逃げられる。

瞬を殺すのではなく、あくまで逃げる事を目的としていた名無しは麻酔針を叩き落ししながら身を翻した。

走る足音に気付いた瞬は柱を消すと麻酔銃の銃口を名無しへと向ける。

「動くな！」

その言葉に名無しは銃を向けられているのを知り、立ち止まって瞬の方を向く。

振り向きざま青く光るコルトパイソンを構えて。

「麻醉針を叩き落とすなんて良く出来ますね」

「普通の弾なら出来ないが、そいつは弾速が遅い。反射神経があつて、慣れがある奴なら出来るさ」

「僕にできる気はしないですけどね。・・・さて、降参してくださいませんか？」

「冗談のつもりか？俺はお前に負けているつもりはない。それでもというなら、力づくでやってみろ」

「それがあまり好きではないから言ってるんですけど・・・でも、犬をあんな風に殺す人も好きではない！」

「ああ、ケルベロスの事か。魔法実験で出来た化け物をただの犬と思う奴がどこにいる？むしろ、殺してやった方がいいってもんだ」

「そんな身勝手な」

「お前とこれ以上話しても意見が一緒になるとは思えん。さっさと続きに戻つたらどうだ？」

「・・・最後に1つだけ聞かせてください」

「なんだ？」

「貴方の名前です」

そう言われて見れば名乗った覚えなどなかったなと、『名無し』は内心で笑いを上げる。

「俺は『名無し』と呼ばれている。本名はとっくに忘れた」

「『名無し』……ですか。分かりました、『名無し』さん、倒させてもらいます！」

「生憎、倒される訳にはいかん」

互いに向けあったハンドガンの引き金を絞ろうとした時だった。

瞬の背後に巨大な影が映り、それを見た『名無し』のみならず、異質な気配を感じ取った瞬も手を止めた。

影は段々と濃さを増していき、くつきりと映ったかと思うと通路の角から人間の手が現れた。

しかし、その位置は高さ4mはある通路の上部にあり、少なくとも3mは超えている。

そのまま角を掴んだ腕に引つ張られるように全身が出てくると、『名無し』と瞬の2人は言葉も出ないほど驚愕する。

巨人でも出てくるのかと思えば、サイズは普通の人間と変わりはない。

ただ、それは上半身のみの事で、腰から足にかけて巨大な蛇の胴体がついており、その長さは優に10mはあろうかというほど長い。

その蛇の胴体が少し起き上がる事で、人間ではありえないぐらいの高さになっていた。

「これは……一体……」

「なんだこりゃ……」

2人とも言葉を失っていく中で目の前の怪物は蛇の部分をとぐる上に巻き、2人を見下ろす様な位置で動きを止める。

ふと、固まっていた瞬だったが、怪物の人の部分、その顔を見た途端に霧に包まれた街での事を思い出した。

「ニキータ・・・さん？」

その言葉に反応したかのように怪物は身を震わせ、まるで血で染まった様な赤い両目で瞬を睨みつけた。

そう、神話で出てくるような蛇の怪物メデューサ、その上半身となっているのはアノールで瞬を襲ったニキータだった。

「アンタの・・・アンタのせいよ！」

いきなり激怒した声を上げるニキータだが、瞬にはどういう事なのか訳が分からず、戸惑いしかない。

「ちょ、ちょっと待って下さい。僕が何かしたんですか？」

「お前を殺す任務に失敗したせいよ！そのせいで私は・・・私はこんな体にい！！！」

涙を浮かべるニキータだが、瞬は困った様に反論した。

「それは逆恨みでは・・・。そもそも、あれはニキータさんが『旅人』の力を独占しようとしたからじゃないですか？」

「ほう、『W2』を裏切るとは大した女だ」

瞬の反論に合わせて感心するそぶりで追撃する『名無し』。

何とも言えないまともな反論に一瞬ニキータはたじろぐが、腹の底から吹き出す怒りはそんな事で止まりはしなかった。

「うるさい！うるさい！お前さえ殺せば元に戻してくれると約束されている！私におとなしく殺されて責任を取れ！」

「そんな無茶な」

今にも襲いかかりそうなニキータに瞬はジリジリと後ろに下がりだす。

ふと、そこでその場にもう一人いたはずの敵がいない事に気付いた。下がりながら探してみると何時の間にもやら瞬よりも離れた場所へと移っていた。

「『名無し』さん！逃げるんですか？」

「その蛇女はお前を指名だ！お前達のいざこざが終わったら相手してやるよ」

「そんな一緒に戦ってくれと言ったじゃないですか！」

言った覚えのない一言に『名無し』の足が止まった。

「おい、待て。誰がそんな事」さあ、ニキータさん、僕達が相手です！「おい！？」

ニキータは逃げたそうとしていた『名無し』を睨みつける。どうやら目標として認識されたらしい。

「待て、お前は勘違いをしている。俺はお前の味方だ。『W2』に雇われた殺し屋だ」

「の振りをして僕と『W2』を潰そうとしているんですね」

「お前ちよつと黙ってる！」

さすがに冷静でいらなくなった『名無し』は珍しく叫ぶように瞬を怒鳴りつけた。

今の『名無し』には瞬がどす黒い詐欺師のように見えているに違いない。

言い合う2人の後ろで怒りに体を震わせていたニキータは長い胴体の一部を床へと叩きつけ、その地震の様な振動と音に2人は口を止めた。

「どうだっていい！味方だろうが敵だろうがめんどくさいから殺す！」

見開かれた赤い目はしつかりと『名無し』と瞬を捉え、うまくいったとばかりに瞬は笑顔を浮かべる。

どうやら殺されかけたお返しのもりらしい。

冗談じゃない、付き合ってられるか！

『名無し』は一目散に走り出したがその行く手に強固なシャッターが降り、退路を断たれて仕方なく足を止める。

「どこに行こうというの？私に殺されるんですよ」

ニキータは楽しげにそう言ったかと思うと、手に握っていた小さいシャッターのリモコンを後ろへと放り投げる。

そして、体に変化が起こり始め、蛇の胴体部分の様に上半身も深い緑色の蛇の鱗に覆われていく。

今なら上半身だけでも蛇人間と言えるだろう。

「さあ、殺してやるわ！」

天井すれすれにまで体を起こしたニキータの前で対峙する瞬。
その隣に諦めたように歩いてきた『名無し』は面倒くさそうに呟いた。

「はあ、どうやら逃げ場もないらしい、お前のせいだな」

「あははは、さあ、頑張って倒しましょうか」

「……言っておくが、俺はお前と共同戦線を張る気はない。奴も殺すがお前も殺すぞ」

「それなら僕も貴方と彼女を倒す事にします。ほら来ますよ？」

2人へと向かって迫りくる巨大な蛇の尻尾。

『旅人』と殺し屋と蛇の怪物、下手すれば三つ巴になりかねないバトルが火蓋を切った。

第37話：アジア統括支部（3）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第38話：アジア統括支部（4）

迫る丸太の様な蛇の尻尾に『名無し』はその場から飛び上がり、瞬は動かずに『名無し』へと向かって麻酔針を何発か放った。

瞬へと巨大な尻尾が激突するが盾によっていなされるように弾かれ、その軌道が変化すると麻酔針と同様に『名無し』へと向かっていく。空中で先に来た麻酔針を叩き落とした『名無し』は向かってくる尻尾へと向かって腕を出し、尻尾を掴んだかと思うと強引に押しつけて回避する。

そのまま、床に着地した『名無し』はすかさず瞬を視界へと捉える。殺気を放つため集中し出すが、瞬は彼に対しての姿が隠れる鉄の壁を作り出す。

瞬は右手で壁を支えながら、左手で作り出した麻酔銃をニキータへと向けて連射する。

的はとにかくでかいので外すはずもない。

だが、麻酔針はニキータの蛇の鱗に当たるとまるで金属の様な音を上げながら弾かれ、まともに肉体へ刺さりはしなかった。

これでは麻酔の効果は期待できない。

その間にニキータは壁へと激突した尻尾を引っ込ませる代わりに、起こした上体が瞬へと向かって蛇のように蛇行しながら襲いかかる。両手を振りかぶって向かってくるニキータの手からは何かの水滴が垂れていた。

素早い動きであつという間に距離を詰めたニキータは振りかぶった両手を瞬へと振り下ろした。

当然の様に盾で止められた両手だが、その背後へといつの間にか『名無し』が回り込んでいた。

すぐさま、意識を集中させて瞬へと殺気を放つ。

「ぐっ!?!」

途端に瞬の体を倦怠感が襲い、力が抜けていく中で『イージスの盾』も不安定になる。

せき止められていたニキータの両手は盾をすり抜けそうにはなるが、少しだけ中に入った所で止まってしまいそれ以上は進まない。

どうやら腕の太さがつかえて進まないらしい。

とはいえ、手の先から滴る紫色の液体はどう見ても毒でしかなく、瞬の目の前で毒付きの手が動きまわっているのはいい状況ではなかった。

更に背後では『名無し』がレールガンを撃ちこもつと発射態勢を取っていた。

それに気付いた瞬は右手で支えていた壁を消さずに出せる力でそのまま蹴りつけた。

宙へと舞った鉄の壁を右手でコントロールし、背後へと立てかける。その途端、『名無し』の視界から外れて瞬を襲っていた殺気の効果は消えさる。

だが『名無し』の指は止まらず、引かれた引き金から連動して撃鉄が弾丸へと振り下ろされ、火薬が爆発すると爆発に乗って弾が飛び出し、更に銃身内の電力によって作り出された磁気のレールに乗り超加速する。

撃ち出された弾丸は瞬が作り出した鉄の壁をも貫いたが、その先にある復活した『イージスの盾』によって弾かれる。

弾道すら人の眼には見えない弾は弾かれてからも運動エネルギーは失わずに直進し、ニキータの背後の壁へと突き刺さった。

その間に合ったニキータの蛇の胴体を掠めて。

「ギャッ！」

途中まで入っていたニキータの手は瞬の盾が復活すると同時に強制的に排出され、ニキータは突然の痛みにも手どころか体を引っ込めた。

痛みが走った箇所を目をやると、そこには最初から何も無かったように一部が半円状にくり抜かれた胴体があった。

ニキータが驚きながら見ていると思いき出したように血が流れ出し、痛みにニキータは呻く。

『名無し』はもう一度レールガン用の弾をリロードしながらニキータに目を向ける。

「悪い、『旅人』を狙ったら当たっちゃった」

特に悪びれた様子もない『名無し』にニキータの怒りはさらに溜まる。

「こ、この……」

怒りの言葉をぶつけようとしたニキータだったが、いつの間にか目前にまで迫っていた瞬に気付き、すかさず尻尾を振りまわす。

瞬はその場で止まったかと思うと『イージスの盾』を切り、足を開き両手を前に構えた。

「受け止める気か？」

後ろで見ていた『名無し』が思うとおり、瞬は尻尾を腕で掴み取る勢いに押されて後ずさりする。

だが、ものの数m下がった所で動きは止まると、掴んだ尻尾を思い切り引いた。

強大な引っ張る力がニキータの体を瞬へと引き寄せる。

抗おうとしたニキータは信じられないほどの強力で体を引きずられる中、体を跳ねる様に波を作り出す。

それによって瞬の手繰り寄せの手が外れてしまい、辛くもニキータは脱出した。

そして、そのまま瞬へと攻撃しようとしたものの、瞬の背後でコルトパイソンを構えている『名無し』の姿に思わず体をずらした。さっきのように流れ弾を食らうのは御免らしい。

ニキータが避けるのに気づいた瞬は背後へと反転し、消していた盾を出すのとコルトパイソンの引き金が引かれたのはほぼ同時だった。咄嗟に体を沈めて回避していた瞬の頭上を見えない弾丸は通り抜け、背後の壁へともう1つ巨大な弾痕を造る。

瞬の盾を出すのが僅かばかり遅れていたが、回避する事でかろうじてかわす事に成功していた。

対峙した2人は同時に大きく息をつくが、その意味は別々だ。

「危ない所でした」

「あらら、惜しかったな。もう少し早く撃つてりゃよかったか」

「・・・撃ちたくても撃てなかったんじゃないですか?」

その言葉に『名無し』は慌てた様子もなく無表情で聞き返す。

「どうしてそう思う?」

「ただの推測ですけど、貴方が撃つてからもう一度撃つまでのタイムラグが何秒かあるようですから。ひよっとしてわざわざ構えを変えるのと一緒に、強すぎる反動で手が痺れているんじゃないですか?」

不思議そうに尋ねる瞬を『名無し』は鼻で一笑すると、リロードしながら答えた。

「残念だが外れた。ただ単に、お前の行動に驚いただけさ。まさ

か『イージスの盾』を切るとはな」

『名無し』は笑いながらそう言ったが瞬にはそれが本当の言葉とは思えなかった。

よくは分からないが必ず理由がある、と。

深く考えてはみたかったが、殺し屋と怪物に前後を挟まれた以上、そんな余裕もない。

「話は終わった？じゃあ、死になさい！」

話の終わりを待っていたようにニキータが威嚇するように体を高く起こし、2人を上から見下ろしていた。

その胴体には『名無し』が付けた傷はなく、傷があった事を示す血の跡だけが胴体に付着していた。

瞬と『名無し』が話しこんでいる間、ニキータはその場から動けなっていた。

傷口周辺の細胞はまるでトカゲの様な驚異的な再生力で増殖し、吹き飛んだ部分を埋める様に作り上げていくが急速な再生に激痛が走ったからだ。

話が終わるタイミングに滑り込むように怪我が治ったニキータは何事もなかったように戦闘へと戻る。

瞬の周りを回るように高速で走り、麻醉銃による攻撃も全て強固な鱗で弾き落とす。

円を中心に瞬を捉えながら段々と円は小さくなり、瞬の視界を蛇の胴体が埋めていく。

大蛇が使う様な締め付けを行うつもりだというのに気づいた瞬は、その場から飛び上がって蛇の胴体を超えた。

そのまま、麻醉銃を消したかと思うと代わりに黒い箱のような物を作り出し、金具の付いた先端を蛇の胴体へと押しつけた。

「ギヤアアアッ！」

その途端、ニキータの体中に電流が体中に走り、ニキータは悲鳴を上げながら白目をむく。

意識が飛んだニキータの体は動きを止め、瞬は役目を終えた改造スタンガンを消す。

空いた両手を無造作に突き出してニキータの体を押すと、強い力で吹き飛ばされた蛇の体に引っ張られてニキータは飛んでいく。

後ろで隙を窺っていた『名無し』目がけて。

「ちいつ！蛇女を物扱いかよ！」

迫りくる巨大な蛇女に『名無し』は壁へと向かって飛び、壁を足場として高く跳び上がる。

その下をニキータは飛んでいき、壁へとぶつかった所でようやく止まった。

『名無し』は床へ着地するとニキータへと視線を向ける。

するとぶつかった衝撃で目を覚ましたらしく、彼女は小さい呻き声を上げながら体を起こした。

なぜ自分が壁に持たれているのかスタンガンで意識が飛んでいたために覚えてはいない。

ただ、体中から上がる痛みと特に痛い胴体部分に両手の平の跡で何をされたのかを察した。

「やってくれるわね！アノールじゃ私の作った巨人すら殺せなかった優男のくせにひどいことするじゃない!？」

「まあ、アレから色々とありましたから。それに時と場合と人によつては実力行使も仕方ないと思います」

肩を竦めて答えた瞬に再びニキータの怒りは爆発する。

激怒して瞬へと向かってくるニキータだったが、そんな事より瞬はその場に『名無し』の姿がない事に気付いた。

周囲を見回すといつの間にかシャッターで閉じられていない方の通路側に立っていた。

どうやらここから一旦離れる様だ。

瞬はそれに気付くとすかさず『名無し』を追いかけて走り出す。

その瞬の後をニキータが追いかけるというまるで鬼ごっこのような状況だったが、『名無し』はニキータの投げ捨てたりモコンを見つけて拾い上げる。

「しばらくお別れだ」

リモコンのボタンを押すと『名無し』と瞬の間にシャッターが降りていく。

瞬とニキータの走る速度は人を超えてはいるが、シャッターが完全に下りるまで間に合いそうにはないと予測を立てた『名無し』はその場を去ろうと身を翻す。

「間に合え！」

閉まっていくシャッター目がけ全力で走る瞬だが、やはり完全に閉じる方が早い。

瞬がたどり着くと同時にシャッターは完全に閉まり、向こう側とは隔離された狭い中に閉じ込められた。

足が止まった瞬の背後へとニキータが迫り、恨みつらみの言葉を吐きつつ、攻撃してくる手は止めない。

盾に守られる中、瞬はシャッターの開け方に悩んでいた。

分厚い金属製のシャッターはちょっとやそつとじゃ破れそうにはない上に、ただの爆破をしても破れそうには思えない。

かと言って壊せるほどの爆発を起こせば、ニキータは確実に死ぬだろう。

それは瞬の信念に反する行為だ。

「死ね！死ね！死ねえ！！」

「うん、どうしたものが」

先にニキータを倒してしまうべきなのかと考えるが、そうすればまた『名無し』が不意打ちをしてくる。

今の所、唯一の脅威と言えば彼なのだ。

できれば逃してくはないが、シャッターを簡単に抜ける手段が瞬には思い浮かばない。

とりあえず、ニキータを倒そうと今まで視界に入っていなかったニキータを見た途端、ふと瞬の頭をよぎる物があった。

「・・・あつ、そうか！」

何かを思いついた瞬は手の中にリモコンを作り出した。

ニキータが退路を断つために投げ捨て、『名無し』が利用して持ち去ったシャッターのリモコンだ。

瞬は迷うことなくシャッターの開閉ボタンを押しこむ。

それに連動して轟音を上げながらシャッターは開いていく。

少しの隙間が開いた所で瞬は盾を切って滑り込み、すぐにシャッターを閉じるようボタンを押しこんだ。

上がりきる前に一旦停止したシャッターはそのまま下降する運動を始め、ニキータを閉じ込めにかかる。

「逃がさないわよ！」

徐々に閉まるシャッターへとニキータは体を滑らし、執念で追いかけてきた。

咄嗟に盾を展開させた瞬間にニキータは再度攻撃を仕掛けにかかるが、あと2、3m程度といった所で動きが止まった。まるで小屋に繋がれた犬の様に襲いかかるうとしても体は先に進まない。

それどころか、ニキータは胴体的一部分が押し潰されるような強烈な痛みを感じていた。

後ろへと目をやってみると下降するシャッターが胴体を挟み、これ以上動けないようにするどころか完全に閉じようと更に下降を続ける。

勿論、間に挟まれた彼女の胴体は無傷な訳がない。

「ギヤアアア！痛い！痛い！」

あまりの痛みにより本日2度目の絶叫を上げるニキータ。

彼女の胴体程度では巨大な質量を持ったシャッターを止める事は出来ず、徐々に肉へと食い込んで行く。

「ヒギイイツ！た、たすけ！」

さすがにこれ以上やってはいけまない。

殺しかねないと判断した瞬間はシャッターの停止を押し、少しだけ上昇させて止める。

ニキータの悲鳴が止まると瞬はリモコンを消し、『名無し』を追って先へと急いだ。

「ま、待ちなさい！くそ、体がひっかかって」

「申し訳ないですけど急いでいるので」

今のニキータには癪に障るだけのさわやかな笑顔で答える瞬。
とりあえず、彼女はこれ以上は追ってこれないと高を括っていたが、
そう簡単に止められない事を聞き覚えのある音が後ろから知らせて
くれた。
嫌な予感はしていたが思い切って振り返った瞬の背後にニキータは
迫っていた。

「待てえ!!!」

鬼のような形相で追いかけてくる蛇女を一目見れば、誰でも本能的
に止まるわけなどない。

なぜ抜け出せたのかという疑問を遮った本能に従って逃げだした瞬
は一瞬だけ、一目見ただけだったがシャッターが上がり続けるのを
目撃していた。

大方、司令室の人達が彼女を手助けしたんでしょね。

『名無し』が戻ってきたとは考えにくい以上、見ている連中の仕業
だろうと当たりをつける。

とはいえ、それが正解であっても今はどうこうする事もできないた
め、先に進もうと曲がり角を曲がった所で通路が奇妙である事に気
付いた。

道が一本しかないのだ。

その先にはポツカリと開いた入口らしきものが見えているが、それ
以外は何も無い。

いや細かく見ると、他の通路らしいものがさっきと同じシャッター
で防がれている。

あの先へと瞬を誘導したい思惑がみえるが、引き返そうにも後ろか
らはニキータが追いかけてくる上にまるで退路を断つようにシャッ
ターが閉まっていく。

畏であるのは明確で先に進みたくはない瞬だが、そんな瞬を後押し

するように突如、1発の銃声が聞こえた。

更に最初の銃声を皮切りに次々と銃声が響き渡る。

『名無し』さんがこの先にいる。

それが分かった瞬は頭の中から嫌な予感を追い出し、入口の中へと飛び込んだ。

「うわぁ・・・」

急に開けた視界に瞬の口から自然と言葉が漏れる。

入口をくぐったそこはとても広い円形上の部屋だが、ただ単に馬鹿広く、とても地下の一室とは思えないほどの広さに瞬は思わず足を止めた。

天井までの高さも通路の3倍は高く、上の方にはガラスで区切られた様な部屋が幾つも見える。

「地下にこんな広い場所があるなんて」

瞬は大学で見た実験施設に似ている印象を受けていた。

あながちそれは間違っではない。

ここは職員達の間で『ホール』と呼ばれる大がかりな魔法実験場だ。魔法の才能が開花した職員のテスト、新規開発された魔具の実験、そして一般職員には知られていない魔法生物の実験場として使われている。

見た目は何も無い空間だが、色々な事を想定して機能や頑丈さはアジア統括支部の中でも最高レベルを誇る。

特に頑丈さはそれこそ核シェルターと同じ、もしくはそれ以上だ。そんな『ホール』に二キータが到着すると扉が閉められ、このホールの中に閉じ込められた。

やっぱりそうですか。

瞬は内心でやはり罫である事にため息をつきながら顔を上げると、

視界の端で『名無し』が立っているのが見えた。

振り向くとそこには硝煙の上がるコルトパイソンをぶら下げ、赤い池を思わせるほど大量の血を流す人が6体転がる中心に『名無し』は立っていた。

倒れている人達の頭には寸分たがわずと真ん中を撃ち貫かれた跡が残り、間違はなく彼の仕業だった。

瞬が顔を青ざめて視線を向けていると、向こうも瞬に気付いたらしい。

「何をやってるんですか!？」

「見ればわかるだろ? 殺しだ」

「人を殺すだなんてやってはいけない!」

「・・・『旅人』のくせに面倒くさい奴だな。でも、お前はアレを相手にしてそう言っていられるのかね?」

表情は無関心の様だが挑発的な言葉を投げる『名無し』は、持っていてコルトパイソンの銃身を指の代わりに見立てて『ホール』の壁がスライドするのを指す。

壁が動き、抜け道のように出来た暗い穴の中からゆっくり光に慣れる様に足を動かす人が出てきた。

その目は虚ろで見た目からはコミュニケーションが取れないほど壊れた人に見える。

肌の色は青白く、体はやせ細り、着ている服もボロボロだが、その中で一際目を引いたのは大量の血が体中の至る所についている事だった。

壁に空いた計4つの穴から続々と同じような人達が『ホール』を埋め尽くさんとばかりに出てくる。

「この人達は・・・？」

白内障の様な濁った眼で戸惑う瞬を捉えた男が、フラフラと瞬に向かつて歩き出す。

『MW2』の被害者だと考えた瞬だが、得体の知れない不気味な様子に自分からは近づかない。いや、近づけなかった。

「コイツらは！」

後ろで無駄な攻撃を続けていたニキータは近づいてくる集団に何かを思い出し、地面を滑り瞬から離れる。

彼女が離れる程危険な人達なのかと瞬は先頭の男へと麻醉銃を構えた。

「止まって下さい！僕の言葉分かりますか？」

瞬の言葉が通じていないのか、はたまた聞こえていないのか、連中の歩みは止まらない。

それどころかバランスを崩して前のめりになったかと思うと、その勢いに乗って瞬へと向かって走り出した。

洪水の様に押し寄せる人達に瞬は恐怖し、半ば反射的に麻醉銃を撃ち込む。

先頭の集団に次々と刺さっていく麻醉針。

いつもであればすぐに眠りについて動きは止まる。

だが、目前にまで迫る集団にその兆しは見られなかった。

「効いていない！？そんな！」

信じられない物を見ているように驚愕する瞬。

そのすぐ隣で『名無し』も同様に前後から大量の人が押し寄せた。

驚きで固まる瞬とは違い、既に相手が何なのか分かっている『名無し』はコルトパイソンを構え、素早く6度引く。

短い間隔で撃ち出された弾丸は先頭の6人どころか、その後ろに奴の頭まで貫く。

倒した奴らが将棋倒しのように倒れていく事で前方の波を止めた彼は、振り向きざまに腰からぶら下げた4個の手榴弾をもぎ取るとその勢いに任せて床へと転がす。

迫りくる先頭の連中が差し掛かったのと同時に手榴弾が爆発するなか、『名無し』は落ち着いた様にコルトパイソンをリロードしていた。

「何で殺すんですか！」

瞬を掴もうと襲いかかる連中から盾によって守られる中、瞬は『名無し』のやり方に抗議の声を上げた。

そんな瞬に対し、コルトパイソンを連射しながら『名無し』は溜息をついて言う。

「お前、コイツらが何なのか分かってないのか？」

「・・・え？」

「コイツらはな、ここで実験動物にされた連中だ。あの蛇女と同じにな」

『名無し』がチラッと見た先には部屋の隅で大蛇の体を振りまわし、近寄る連中を全て吹き飛ばすニキータの姿があった。

視線はそちらに向けているもののその間も迎撃の手は緩まないし、ぶれない。

「おそらくだが、ホラー映画で言えばゾンビって奴だ。コイツらの体には巨大な手術痕があり、俺が殺す前から心臓は止まっていたようだ。誰かが魔法で死体を動かしている可能性もあるが、動きから見て意識はある。数ある魔法の中にも死者を蘇らせる魔法は存在しない以上、コイツらは魔法実験で死んだまま生きている状態にある。つまり」

「歩く死者ゾンビとでも言いたいんですか！？意識がある？これのどこに意識が！」

押し寄せる大群は我先に瞬を襲おうと手を伸ばす。

だが、見えない盾がある事を認識できていないのか、何度弾かれ流されようと勢いは止まらない。

その光景は引きずり込もうとする亡者の波が襲いかかってくるという見た者をゾツとさせる光景だ。

「あるだろ？自分の腹を満たしたいという欲が」

「っ！？この人達は僕や貴方を食べようとしているんですか！」

「ホラー映画ならお約束だろ。自分の体を動かすためのエネルギー摂取、俺達は餌という訳だ」

「そんな馬鹿な事が・・・！」

「フン、お前がどう思おうが俺には関係ない。ただ、お前はどうする気だ？」

非人道的な実験に瞬は怒りを露にしていたが、不意の問いかけに瞬呆けたような表情を浮かべる。

何を言っていたのか忘れた様な表情で『名無し』を見た瞬に対し、もう一度ため息をついて言い聞かせる様にゆっくりと言つ『名無し』。

「お前は俺に対して、何で殺すのか、と言ったな？だが、そもそもコイツらは生きてるのか？この状態で生きていたいと思うのか？」

「・・・それは」

「そこでお前はどうするんだ？殺すのか？それとも、このままでも生かしておくのか？言っておくがコイツらを元に戻すのは奇跡が起きない限り無理だろうな。今は動いていても身体的には死んでいる訳だから」

「・・・」

「さあ、答えてみる『旅人』！」

言葉も出せずに震えながら俯く瞬。

その顔はどうしたらいいのか分からない迷いと、どうにもできないという悔しさが入り乱れた表情だった。

「僕は・・・僕は・・・！」

あらかた向かってくるゾンビが片付いた『名無し』は立ちつくす瞬を見て、呆れながらもコルトパイソンへとレールガン用弾丸を仕込む。

そして、瞬へとコルトパイソンを向け、意識を集中させた。悪いがこれも仕事でな。

彼の優しさをつく様な真似をした事を心の中で詫びる『名無し』。だが、その動きは鈍る事などない。

いまだに動きを見せない瞬に『名無し』は仕事の終わりを感じながら殺気を放った。

襲いかかる殺意の重圧に瞬の体は沈み、ゾンビの群れの中へと埋もれる様に消える。

『名無し』はかろうじて見える瞬の体の一部からおおよその頭の位置を割り出し、そこに向けて構えた銃の引き金を引いた。

放たれた弾丸は目に見えない速度で瞬へと迫り、その間にあるゾンビ達の部位など紙の様に貫く。

やったのか？

胸中は不安な『名無し』だが、それを見届けさせようとばかりに部位を失ったゾンビ達がバランスを崩して倒れていく。

開けていく視界の中で彼が見たのは床に手について四つん這いだ。どこにも傷のない瞬の姿があった。

「馬鹿な！」

頭のある位置も撃った位置も完璧に撃った。

だが、まるで何事もなかったかのようにいる瞬の存在は『名無し』に驚きの声を上げさせるには十分だった。

外しただけなのかとコルトパイソンに赤い弾頭の弾を装填し、6発全てを撃つ。

勿論、狙いは頭だ。

飛来した弾丸はその狙い通りに突き進むも、当たる寸前で不可解な動きをして周りのゾンビへと方向を変え、突き刺さると同時に爆発する。

「・・・今は」

『名無し』にも何度か見覚えのある弾の動き。あれはまさしく『イージスの盾』が正常に機能している時の動きだった。

放っている殺気が緩んでいたりと、弱まっている訳ではないのは放っている『名無し』が一番わかっていた。

現に、その視界上に入っていたニキータは動きが鈍り、重い体を引きずってどうにかゾンビの相手をしている始末なのだ。

どういふ事なのかと答えが分からない内に、瞬は顔を上げたかと思うと力強く立ち上がった。

そして、片手に1本ずつM60（重機関銃）を作り出し、腕を広げる様に銃口をゾンビ達へと向けて構えた。

その目からは涙を流しているものの、今までにはなかった意思の強さが感じられる。

「ごめんなさい、貴方方の事は僕が背負います！」

一言呟くと引き金が引かれ、装填してある大口径の弾丸が勢いよく吐き出される。

ゾンビの群れに襲いかかる強力な弾丸は次々とゾンビの部位を吹き飛ばし、体中を穴だらけにしていく。

弾幕はまるで途切れる事はなく、撃ち尽くされても一瞬のうちに弾丸が装填された新しい物へと変わる。

自我を持たないゾンビ達に回避行動といった事もできず、その身を次々に肉塊へと変えられていく。

何度目かのM60を作り出した時、瞬の周りのゾンビ達は物言わぬ屍へと変わり、血の海を作り上げていた。

ごめんなさい。

中心に立つ瞬は涙を流しながら今は亡き人達へとまた謝っていた。

地獄の様な光景の中で1人だけ神々しさを放つという不思議な光景は、有名画家の描いた1枚絵の様に深く引き込まれそんな光景だった。

「つち、そういうことか」

その様子をゾンビを撃退しながら見ていた『名無し』はなぜ殺気が効かなかったのか合点がいった。

殺気を防ぐ条件は視界に入らないか、人を殺し続けた者、もしくは精神を鍛えた者。

完全に視界を防ぐ事は出来ていなかった以上、視界の条件ではないとなると考えられるのは精神が鍛えられたということだろう。

ゾンビとはいえ、人を殺す事を覚悟し、受け入れた瞬間の精神はそれこそ熟練した僧侶をも超える物へと変わった。

普段から命を奪う事に対する意識レベルでの拒否を受け入れたとなれば、下手をすれば自己崩壊を起こしかねない話だ。

だが、今の瞬は自己崩壊を乗り越え、奪った人達の命を自分自身に背負った。

いつか奪った人達へ何らかの形で返す、それが彼なりの解決方法だった。

「くそ！追い込むつもりが、追い込み過ぎたせいで余計に強くなったのか」

『名無し』はある程度の分析で自分で追い込んだ結果がこうなった事に気が付いた。

殺しやすくするためではあったが、それで強くなってしまったのはどうしようもない。

何と言っても、殺気が効かなくなってしまったのだから。

最早、彼に殺す手段は油断した瞬を撃つ闇打ち程度のものとなった。

今後の身の振り方も含め、どうするべきか考えていると彼に寄ってきていたゾンビ達が圧倒的な弾幕により壊されていく。

その弾丸の元は当然、瞬だった。

何を考えているのか、次々とゾンビ達を倒していき、結果的には『名無し』もニキータも救って恰好になる。

ゾンビ達を全て倒しきった瞬はM60を消すと代わりに麻醉銃を作り出し、その銃口を『名無し』へと向け、反射的に『名無し』もコルトパイソンを向ける。

「・・・殺さないんじゃないのか？」

「貴方が言っただけじゃないですか、殺した方がいいと。僕も散々考えて迷いました。ただ、彼らが死んでいるならば囚われている魂を介抱しなければ彼らはどこにもいけない、それこそ死んだ体が朽ちるまで。それを彼らが望んでいるとは思えない」

「魂の開放、か。まるで宗教の様な考えだな」

「いいえ、魂は存在します。僕にも貴方にも。貴方がさっき言った死者を蘇らせる魔法がないのは、人が死に魂という存在が抜けてしまったためです。嘘かどうか確かめる術はないですが、これは『旅人』や魔法使いの極一部に知られている事です」

初めて聞く話に『名無し』は興味を示すが、今はそれどころではない。

目の前には麻醉銃を構えた『旅人』が立っているのだから。

「面白い話だが、そっちよりもこれからどうするかの方が俺には気になるんだがな。また、ここで撃ち合うつもりか？」

気を再度引き締めた『名無し』に辺りの空気が張り詰める。

見た目は拮抗している様な状態だが、実際は『名無し』に勝ち目はない。

彼の手持ち手段で『イージスの盾』を破る事は出来ないのは明白だからだ。

瞬が武器を麻醉銃へと変えたという事はまだ見境無しに人の命を奪う事はしないようだが、『名無し』はその制限がかかった中でも勝つ事はおそらく出来ない。

お互いにそれがわかつているため、平然と立つ瞬とは対照的に無表情である『名無し』の額や背中に大粒の汗が滲みだしていた。

そんな中でニキータは襲いかかるうと壁に寄り添って機会を窺っていた。

彼女も攻撃が通じないのは分かっていたが、まだあの得体の知れない自称殺し屋に瞬の『イージスの盾』を無効にできる力があると思っていたためだ。

隙あらば襲いかかり、あわよくば殺そうと考えていたニキータだが、壁の至る所から何かの起動音が聞こえて動きが止まる。

それどころかまるで何かが溜まっていくかのように、その音は次第にでかくなっていく。

「ん？」

その変化には銃を向けあつた両者も気づき、互いに気が少しだけ逸れる。

そして、全員がある異様な事に気付いた。

部屋の壁がまるで電車から見る景色の様に流れ始めたのだ。

不思議な光景に『名無し』は注意深く見てみると、どうやら『ホール』内の円柱状に湾曲した壁が緩やかに回り始めていたようだ。

始めは人が歩く程のスピードだったが徐々にスピードを増し、一定の回転速度で安定すると今度は壁の表面に小さく青白い光が幾つも

走り出す。

蛍がいるかのような幻想的な光景にも見えるが、それはあつという間に光の強さを増していく。

更に光の中から地面や天井へと向かって電流の様な筋が走る。

見ていた者に蛍をイメージさせた光景は、最早、電流が荒れ狂う様に見える危険な光景へと変貌していた。

「この魔力は・・・まさか!？」

瞬と『名無し』は何が起こるのか用心していたが、ニキータはふと感じ取った魔力に顔が青ざめていく。

彼女は何かを知っていると気付いた瞬が問いかけようとする頃には、ニキータは逃げようとしているのか辺りをせわしなく見回している。その表情には焦りと恐怖の色しか見えず、瞬や『名無し』の存在も今は見えてはいないようだ。

『名無し』も何かしらまずい事が起こるのは察したが、同時に逃げ場がない事も分かっていった。

周りは回転する壁に囲まれ、天井は遠く、床は手持ちのレールガン程度では破る事も出来ないだろう。

正に八方塞がりな状態に彼はため息をつきながら死の覚悟をする。

そのうち壁の速度が最高速にまで達すると部屋の魔力濃度は一気に高まり、それによって中央にモヤモヤとした白いガス状の球体が現れた。

それは次第に大きく広がっていったかと思うと一瞬で部屋中を埋め尽くす。

咄嗟の回避もままならないうちに取りこまれた瞬達は気が付くと、霧が立ち込める部屋の中へと立っていた。

ただし、壁は深い霧によって一切見る事が出来ず、『名無し』が1発の弾丸を投げてみると音もなく跳ね返ってきた。

「もしかして」

彼の行動を見ていた瞬は何かに気付いた様に霧の中へと突っ込んだ。だが、壁にぶつかる事もなくたどり着いたのは元の部屋だった。

「どうなってるんだ？」

「ニキータさん、これは」

始めから分かっていたようにニキータは動きもせず、ただその場できぐるを巻いて頂垂れていた。何もかも投げ捨てたように気力もなく呟く。

「ええ、その通り、私の魔法だった『ニブルヘイム』よ」

その言葉に脱出不能だった霧の街を思い出したため息をつく瞬の隣で、『名無し』はなんだそりやと当然の疑問を浮かべていた。

第38話：アジア統括支部（4）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

PSN復旧が遅れていたため、投稿速度が上がりました。

第39話・アジア統括支部(5)(前書き)

2011/06/19 最後の部分を修正

第39話：アジア統括支部（5）

獲物が畏にかかった事に喜び、溜まっていたストレスが抜けていく様な感覚を覚えるアジア統括支部長、グラン・ヴォルト。

ここ数カ月の間感じた事のなかった解放感に浸り、その快樂に近い感覚に彼の体は小刻みに震えていた。

見下ろす『ホール』には僅か5cm先すら見えないほど濃い霧が溜まり、その中にいた者は全員霧の中へと吞まれた。

脱出不可能な霧の中へ、だ。

それこそがまさに彼の待ち望んだ瞬間だった。

いつもは冷静であり疲れた様子の彼だが、この時ばかりは自然と体全体でガッツポーズを取るほどの快感と興奮が脳内を駆け巡る。

『支部長！この霧は一体・・・？』

ふと手に持っている指示用に持ち出した通信機からの声に我に戻る。さすがにガッツポーズは止めたものの、興奮はいまだ冷めあらぬといった状態だ。

「やったぞ！『旅人』を閉じ込めた！『ニブルヘイム』の中にだ！ハーツハツハツ！」

『あ、あの、それはテリトリー魔法の事ですか？』

今まで接した事もない様なテンションの上司に部下は困惑気味に尋ねる。

それに気付いているのかいないのか、グランの勢いはいささかも衰えず、それに乗る様に答えた。

「その通りだ！『ホール』のあの様子が見えるだろう！？あれは実験動物から抜き取った魔法の1つで、内に閉じ込めた者を絶対に外に出す事はない魔法だ！これ以上ない程に完璧な檻なのだよ！」

『は、はあ・・・』

捲し立てる様に早口で言うグランに対して、通信相手である司令室の部下はただ曖昧な相槌を打つしかなかった。

ただの空間魔法である割には上司のこの喜びよう。

部下が破られるのではないかと懸念しているが、それすらも馬鹿馬鹿しい事だと言っているかの様にグランは笑い続ける。

まるで相反する2人の反応だが、どちらともある意味自然といえる反応だった。

今まで秘匿され続け、アジア統括支部内はおろか『W2』でも知るのには極少数という『ニブルヘイム』。

作り上げた霧の檻の中では全ての出口は入口となり、内部に入った者を逃しはしない。

テリトリー内の魔法使いを捕える以外、いかなる手段を用いても脱出は不可能とされ、捕える手段としてはこれ以上ない程有効な魔法ともいえる。

それを知っているグランは勝ちを確信していたが、それを知らない部下としては上司の笑いの意味もおそらく1割程度しか理解していないだろう。

そもそも捕えたからと言って『旅人』の力を手に入れた訳ではない。笑い声の中で冷静に考える部下だが、それも見越したようにグランは先に口を開いた。

「よし、『ホール』内の固定砲台を全て起動させる！銃座も出せ！一斉射撃後、自動制御の『ウォーカー』と実験動物を突入だ！」

突然の命令に驚いた部下だが、それよりもその内容に驚く。

『一斉射撃つて・・・、そ、その何処に向かってですか？』

「決まっているだろ？霧の中に向かってだ！撃ち込んだ弾丸は外にも抜けず、何度か霧の壁で反転しながら進んだ後に落ちる。こちららは安全な外から『旅人』が疲弊するまで攻撃し続けるだけだ。まあ、持久戦になるだろうが奴も長い間攻撃され続けなければいずれ精神も壊れる。その時が奴の最後になる！分かったらさっさとやれ！」

『は、はい！』

自信満々に命令するグランの叱咤に部下は司令室内のオペレーターへと指示を飛ばす。

すると、次々に『ホール』内の壁に不自然な窪みが現れ、パネルの様に切り放された一部の壁がスライドして収納される。

その穴の中から全長2mはあろうかという巨大な銃や、戦車からもぎ取ってきたかのような大砲が姿を現す。

銃身が穴の中から飛び出す辺りで前に出てくる動きは止まり、突き出した様な銃口はその先を霧の中へと向ける。

そっちの準備が整ったのに続き『ホール』内のシャッターが開いたかと思うと、そこには通路一杯を埋め尽くすほどの幾つもの『ウォーカー』が佇んでいた。

また、別のシャッターの中からはまるでおとぎ話や神話に出てくるかのような見た事も無い異形の怪物たちが蠢いていた。

怪物たちは互いの事には興味がないのか、襲いあう様な事がないがコミュニケーションを取る様な事もない。

ただ、その場で唸り声を上げながら何かを待っている。

「弾丸の雨を降らせる！」

『了解!』

グランの命令を受け取った部下の号令が司令室の中へと響き渡った。

「つまり、元々は蛇女の魔法だった空間魔法の中に閉じ込められた訳か」

蛇女という言い方にニキータは『名無し』を睨みつけたが、すぐにどうでもいい様に顔を背けた。

彼女はただ、訪れる死を待つつもりしかないらしい。

簡単な説明で理解した『名無し』に瞬は頷き、説明を続ける。

「そう言う事です。ちなみにテリトリを解除する方法を僕は知りません。普通なら中にいる魔法使いが解除する事で出られるらしいですが・・・」

そう言うと瞬の動く目線に『名無し』も合わせて視線が移動し、止まった先には寝そべるニキータがいた。

それに気付く様子もないニキータへと近づいた『名無し』は、胴体へと渾身の蹴りを見舞った。

「ギャッ!」

飛び跳ねるニキータの頭を掴んだ『名無し』は、こめかみにコルトパイソンの銃口を押し当てる。

まるで、と言うよりは脅迫そのものだった。

「おい、元々お前の魔法だったといったが、お前に魔法を使う力は残っていないのか？」

「なんでアంతアに教えなくちゃいけないのよ」

「・・・いいのか？」

彼は押し当てたコルトパイソンに力を入れ、押される痛みニキータは顔を歪めた。

更に本当にやるというのを表すためか、『名無し』の体から殺意が溢れ、それを受けたニキータは体中に寒気が走る。

だが、ニキータはすぐに無気力な表情へと戻るとため息を一つついで答えた。

「残念だけど残っちゃいないわ。それに残っていれば私がとつくに解除してるでしょ？」

「さてどうだかな。『旅人』の力を奪うために実は捕まった演技をしているとも考えられる」

「あつそ、そう思うならそう思えばいい。ただ、解除しないならお前も私も殺されるだけよ」

言葉の意味が分からず、『名無し』は頭を捻る。

それは瞬も同様らしく、戸惑った様な表情を浮かべた瞬が2人の会話を割って入った。

「それはどういう意味ですか？」

「簡単な話よ。此処は入る者を拒まず、出る者を拒む結果。なら、中に捕えた『旅人』を殺すのに外にいる者はどうすると思う？」

「・・・外からの攻撃、つまり、安全な場所からの一方的な攻撃か」

「そういうこと。外からなら霧の中にいる者の位置が魔力探査でおおよそは分かる。ならばはそこに攻撃を集中させるだけ。お前は一方的に攻撃されながらも手は出せず、私達はその余波で間違いく死ぬ。分かった？それが私が生きるのを諦めている訳よ」

「うち、さつさと破らないと殺される訳か」

さすがに状況が状況だけに『名無し』も無表情を崩すほどの焦りを覚える。

何と言つても、将棋で言えば詰み、チェスで言えばチェックメイトと言える状況なのだから。

だが、ゲームと違い、投了する事も出来ず、また相手に交渉すらする事も出来ない。

一方的に命を奪われるだけという絶望、それがいち早く気づいていたニキータを無気力にさせる原因だった。

その上、自分の魔法で自分の命を奪われるなど滑稽な話でしかない。頂垂れるニキータの様子に『名無し』は嘘はないと判断すると、その後の行動は早かった。

「おい、『旅人』！」

「は、はい？」

「俺の負けだ。これ以上、お前に手出しはしない」

両手を軽く上げて降参の意思表示を見せる『名無し』。突然の申し出に驚く瞬だが、その意図が何を意味してるかを今の状況から察し、呆れたように笑って言う。

「それで、力を合わせて脱出しようという事ですか？」

「理解が早くて助かる」

「僕を死ぬ寸前まで追いやってそれは都合がよすぎやしませんか？」

「ああ、そんな事もあったかな。・・・それでどうするんだ？俺を殺すか？」

怒りを露にする瞬に挑発的で開き直った様に言う『名無し』。互いに睨みあいながらも互いに一言も発しない、沈黙の間が流れる。重苦しい雰囲気か辺りに漂っていたが、瞬は細めた目を緩めるとそれに釣られて『名無し』の目も緩む。

「分かりましたよ。貴方の提案に乗りましょう」

「そうか、それはよかった」

表面上は平然とした顔の『名無し』だが、内面では1つ厄介事が片付いたと高まっていた心臓の鼓動が少しだけ収まる。

彼には命を奪う事をためらう瞬だからこそ、これだけの挑発でも殺されないという自信があった。

そして、交渉に踏み切った事により停戦どころか協力まで結びつけた。

とは言つても、今現在抱えている生還のための障害。その中でも一番低い障害をクリアしただけにすぎない。

「ただし」

「っ！？な、なんだ？」

障害が無くなったかと思つた彼にとって予想外の一言だつた。思わず素の反応をしまいそうになつたが、寸前で踏みとどまる事が出来た。

「約束してください。ここから出られたなら人殺しは止めて今までの罪を悔いて生きると」

「・・・いいだろう」

「え？そんな簡単に？」

思ひのほか、あっさりと了承した『名無し』に今度は瞬が驚く。

「死亡する可能性を少しでも下げるためには仕方ない。命あつてこそだ。今、この時から俺は人殺しを止める」

「それに嘘偽りは・・・」

「ない」

こんな場所で殺し屋廃業宣言をする事になるとは考えてもみなかった『名無し』。

言い切りはしたものの何処となく引つ掛かるものがあるのも事実だ。

それを生きるためと無理やりねじ伏せた彼の真剣な言葉を瞬は信じる事にした。

「分かりました、信じましょう。それで、ニキータさんはどうするんですか？このままここで死ぬつもりですか？」

「・・・」

「脱出する手段なら探せば何かあるかもしれませんよ？」

「・・・そんな、・・・そんな都合良くあるわけないでしょ！もう放っておいてよ！私はここで死ぬのよ！」

ニキータは心の底から溜まっていた感情を吐き出すように叫ぶ。やけくそ気味な彼女だが、その気持ちは瞬にも分かる。

本当は助かりたい、出来る事なら生きたいのだと。

『名無し』には劣るものの何人もの人を殺している彼女であるが、自身が死ぬとなるとその感情は簡単に崩壊しかかっていた。

涙を浮かべて寝そべる彼女の隣に『名無し』を移動させ、瞬はその周りへ大量の鋼鉄の壁を作り上げた。

人1人程度では動かす事さえできないであろう壁が何重にも周りを埋め尽くし、どこからも中を狙えはしない。

「そこで待っていてください。周りを調べてきます」

『名無し』から了解したと返事があり、瞬は濃い霧の壁の前に立つ。何度か触れた後、霧の中へと突っ込んでみるとやはり前の時と同じように同じ場所に立っていた。

脱出の手段と言っても皆目見当がつかず、とりあえず他の場所を調べようと移動し、手を触れようとした時だった。

辺りに立ち込める霧がより一層濃くなり、視界が1mすら先も見えなくなる。

まるで雪山でのホワイトアウトのように瞬は自分だけしかそこには存在しないかのような錯覚を覚える。

「来たぞ！奴らの攻撃だ！」

姿は見えないが『名無し』の警告で我に返った瞬は叫んだ。

「絶対にそこから動かないください！」

その直後、外から霧の壁を突き抜けた高速の弾丸が雨の様に降り注いだ。

瞬は盾によってそれを防ぎ、『名無し』達は築き上げた鋼鉄の壁で銃弾から逃れる。

銃声すらなく飛んでくる弾丸は、唯一鋼鉄の壁に当たった時だけ甲高い音を立て、まるで何十人も人間が壁を叩いている様な騒音に思わず『名無し』とニキータは耳を塞ぐ。

瞬の耳にはその音が届きはするものの、深い霧によっておおよその位置でしか分からない。

「霧が濃くて位置がっ！大丈夫ですか！？」

戸惑いを浮かべ叫ぶ瞬。

だが、その声は鉄鋼の音にかき消され、二人の耳に届く事はない。安否が気がかかりな瞬はその場に巨大なキャンプファイヤーを作り出すと、燃え上がる炎の圧倒的な熱量が周囲の霧を吹き飛ばす。

2人のいた方へと移動しながら次々に同じ物を作り上げ、すぐに銃弾を防ぎ続けるそびえ立つ壁までたどり着いた。

その耳を塞ぎなくなる程の音の中で、瞬は背面に同じような壁を作

り上げると前方の壁を消す。
そこにはまだ無事な2人の姿があった。

「よかった！無事ですか！」

「俺達の心配より脱出する方法を探せ！このままじゃいくらこの壁が頑丈でも持たん！」

『名無し』が言ったそばから鋼鉄の壁が倒れそうなほどの衝撃が四方八方から襲いかかる。
互いに支えあうような形でどうにか立ったままの壁だが、このまま同じような攻撃を何度も受ければ倒れる事は間違いない。
それどころかその重量で2人を軽々と押し潰してしまうだろう。

「くそ！何かの砲撃でも受けたか！？」

焦る『名無し』を更に追い詰める様に銃弾の中に砲弾が混じって次々と壁を破壊していく。

呻くような軋みを上げる壁を瞬は別の壁を作り上げて補強して回るのが、圧倒的に攻撃の速度が速い。

誰が見ても2人が死ぬのはすぐだと思っただった。

『名無し』の横で今まで伏せていたニキータが不意に顔を上げた。

「・・・来る」

「何か言っただか！？」

「来るのよ！」

「うち！一体何が来るって・・・止まった？」

激しい嵐の様な攻撃が嘘のように止み、至る所がへこんだ壁の前には大量の潰れた弾や巨大な砲弾が転がっていた。

耳鳴りがする耳を押さえながら、瞬は入る時に開けた隙間から外を覗く。

「完全に止まっている？一体どうして？」

「さあな、とりあえず弾切れを起こしたとは考えにくい。奴らの気まぐれか、それとも作戦か。何にせよ、大声で喋らなくて済むのは助かる」

同じように耳を押さえる『名無し』はそう言いながらも、大体の見当はついていていた。

隣にいたニキータの咳きが本当であるなら何かの中へ入ってくるのだと。

また、その咳きも言った直後に銃撃が止まった以上、嘘や偶然とは考えにくい。

奪われた魔法とはいえ、まだ何らかの繋がりを持っているようなニキータに『名無し』は脱出の可能性を見出していた。

「何が来るか分かるのか？」

「そんなもの、分からないわよ！ただ、かなりの数の何かの中へ入った。私に分かるのはそれだけ」

それだけ言つとニキータは頭を伏せ、また床の上に横たわる。

「うち、それだけじゃ抜けるのには役に立たんな。おまけに殺すために直接何かを送り込んできたとなると、ここで防戦するしかない

いか。これと同じ弾を出してくれ。残弾が厳しい」

『名無し』はポケットから取り出した弾頭の色が違う弾丸を瞬に見せる。

そのまま空いた反対側の手を瞬の前へと差し出したが、何かを考えているのか瞬は反応はなく棒立ちしていた。

「どうした？」

「・・・何かが入ったのが分かる、と言う事は一時的に外と繋がったのが分かると言う事ですか？」

「ほお、なるほどな。どうなんだ？」

2人の期待を帯びた様な目線を受けながら再びニキータは起き上がる。

「ええ、そうよ。ただ、正確に言えば私に分かるのは魔力の流れだけよ」

「魔力の流れ？」

「何かが入ってくる時、普段は霧として漂っている魔力がそこに向けて凝縮する。つまり、それがこの世界への一方通行の入口を作る時と言う事よ。何かが完全にこちらへと入ると入口は閉じられ、集まった魔力は分散する」

「なら、その入口から出ればいいんじゃないのか？」

「残念だけど、あくまで一方通行よ。こちらからその入口を使っ

て外に出ようとしても無駄。もし出れたとして体が半分になっていても不思議じゃないし、出ることすらできずに異空間をさまようかもしれない。それでもやるの?」

小馬鹿にしたように問いかけるニキータ。

脱出への光明が射していたと思った2人だが、完璧に否定されて二の句もつげない。

そうこうしている内に瞬の耳は何かの金属音が幾つも近づいてくるのを捉えた。

アジア統括支部へと突入してから何度か聞いた足音だった。

「っ！ロボットが来ます！それも大量に！」

「あれか。それならレールガンでぶっ飛ばして……」

そこまで言うと『名無し』の声が途切れた。

何かを意識を集中しているかのようで、その視線は彼の背後へと向けられていた。

「こつちからも何かの大群が押し寄せてきているな。っち、このままだと囲まれる。おい、もう一度言うぞ、弾だ」

『名無し』の要求に瞬は慌てて大量の弾丸を作り出して答えた。

両掌の上に大量に生成された色とりどりの弾丸へと手を伸ばす『名無し』だが、掴む寸前で瞬は弾丸を手前に引いた。

当然の様に空振りする『名無し』の掴み。

「ふざけている場合か？」

「いえ、ふざけたつもりはないですが、さっきの約束は覚えてま

すか？」

そう言われて『名無し』は瞬が何を言わんとしているのか気付く。要するに殺さないよう誓いを立てたのだから守れという事なのだろう。

「約束は守る、人は殺さん。ただ、ロボットなら構わんだろ？」

それで納得したのか瞬が止めた手から『名無し』は弾を掴み取る。そして瞬の背後へと向かってコルトパイソンを構えると、足音を頼りに微調整を行うと即座に引き金を引いた。

既にセットされていたレールガン用弾丸から大量の電流が放出されて磁気のリールを作り上げると、そこを通り抜けた1発の弾が超加速して放たれる。

周りの霧さえも吹き飛ばす弾丸は一瞬で『ウォーカー』の胸へと突き刺さり、分厚いはずの鎧を通り抜けて後ろにいた別の『ウォーカー』をも貫通する。

1体目は向こう側が見える程の大穴が胸に空き、そこにあったはずの部品などはバラバラに吹き飛ばされていた。

2体目の見た目は1体目より損傷は少なく見えるものの、緻密に計算されて設計された内部をかき回し、正常に動く事などできはしない。

損傷を受けた2体はその場で動きを止めると、2度と動く事はなかった。

・・・あれに撃たれたんだ。

そう考えただけで瞬の体中に寒気が走る。

見た事もない銃の威力に瞬は自然と胸をさすり、顔から血の気が引いていた。

その隣で薬莢を排出し、再びレールガン用弾丸をセットする『名無し』。

「ロボットは俺が引き受けよう。お前は後ろ、ん？どつかしたか？」

「いえ、・・・別に」

「？」

不思議そうな顔をしている『名無し』から逃げる様に彼の後ろへ回ると、瞬はその手に麻醉銃を作り出す。敵の影は霧の中から浮かび上がる様に徐々に鮮明になっていくものの、すでにどう見てもただの人間などではなかった。

一番先頭を歩いていた人間らしき影は3m近い巨体を持ち、更に手には巨大な斧らしい影が映る。

集団の中でも飛び抜けてでかく、瞬が気が付いた時には既にその斧を大きく後ろへと振りかぶっていた。

ため込んだ力を解き放ち、渾身の力を持って振り下ろされた斧は瞬へと正確に迫る。

斧は霧を切り裂く様に瞬へと迫り、盾にいなされてその勢いを地面へとぶつける。

途端に辺りが少し揺れ、風圧によって霧が吹き飛び、地面に巨大な亀裂が走る。

その人間とは到底思えない威力を見せ付けた巨人へと瞬は怯むことなく麻醉銃を連射した。

正確に飛ぶ針は巨人の頭と四肢へと突き刺さり、さすがに巨大と言えど効いたのか、巨人はグラついたかと思うとその巨体を瞬の方へと向かって倒れる。

その倒れる背中を走り抜け、巨人の頭で踏み切って飛び上がった何匹もの小さい猿の群れ。

どの猿も狂気に満ちた赤い目で瞬を視界に捉え、鉤爪を思わせる様

な巨大な爪を振り下ろす。

「残念ですが」

瞬は小さく呟いた途端、爪は瞬どころか盾にまで届く事はなく、次々に瞬の早撃ちで麻醉針をつき立てられると力尽きて落ちていく。だが、その様子を目の当たりにしても怪物の群れの更新は止まらない。

巨人の倒れた体を乗り越えると次々に瞬目がけて襲いかかる。

体に電撃を纏い、異常に伸びた腕を鞭のようにしならせる手長猿や体中の所々が腐り落ちているゾンビの灰色熊。

更には巨大な蝙蝠やニキータの様に蛇と同化した様な獣の皮膚を持つ人間。

見た事もない様な怪物達は様々な攻撃を仕掛け、そのどれもが『イージスの盾』に弾かれる。

怪物たちが群がる中、その相手であるはずの瞬は目の前の事よりもその先での戦いに興味が引かれていた。

瞬の見る先には霧で視界の悪い中をコルトパイソン片手に飛びまわり、次々と『ウォーカー』を壊していく『名無し』の姿があった。

その動きは無駄がなく、回避すると同時に『ウォーカー』のバイザー部分に電撃の魔力が込められた弾丸が叩きこまれ、レールガンを使用せずとも次々と最新の軍用ロボットをいともたやすく鉄クズへと変えていく。

ただの人間でもあんな事が出来るのか。

まるで軽業師のような動きに瞬は見惚ると同時に尊敬の念を抱いていた。

見られている視線に気づいた『名無し』は、群がる怪物達を気にすらすえずこつちを見ている瞬に驚いたが、その動きは止まる事がなかった。

「おい！サボって、……っと。サボるんじゃない！」

巧みに攻撃を回避しながらも瞬に撃を飛ばす『名無し』。
我に返った瞬は慌てて左手に『天狼』を作り出すと、盾に防がれていた魔法系の攻撃を全て切り裂き、その裂け目から麻酔針を飛ばす。その時、壁の中で耳を塞ぎながら寝そべっていたニキータがふと顔を上げた。

「今のは？」

壁の隙間から外を窺うとちょうど瞬が同じように攻撃を切り裂いていた。

同時にニキータが感じている魔力の流れに陰りの様なものが生じた。

「あれは……、そうだわ、その手があつた！」

ニキータの視線は瞬の持つ『天狼』に注がれ、何度か振るわれるたび発生する力に確信を持つ。

あれこそが脱出するための鍵であると。

生き残る希望を見出したニキータは戦い続ける瞬へと向かって叫ぶ。

「『旅人』！その剣を寄こしなさい！」

「剣？この事ですか？」

不思議そうに手を止めて『天狼』を掲げて見せる瞬。

「そう、それ！早く投げなさい！」

「よく分かりませんが、いきますよ」

鞘に収まった『天狼』を作り出すと、それをニキータ目がけて投げた。壁の隙間から『天狼』を受け取ったニキータは瞬の力を狙う時の様な歪んだ笑みを浮かべ、鞘から『天狼』を抜き放つ。

そして、戦う二人を横目に人知れず霧の壁へと近寄り、意識を集中させた。

魔力の流れが次々と送られてくる怪物やロボットによってそっちに流れ、それにより周りを囲う壁の魔力はその時々で薄くなる。

その変化を感じ取ったニキータは霧の壁の前で『天狼』を構え、意識を集中するべく目を閉じながら時を待つ。

後ろでは化け物と言っても過言ではない2人が敵を倒していくため、送られる援軍はいまだに止まらない。

変化の止まらない壁の状態を探るべく、ニキータは神経をとがらせ、意識がすり減っていくような中で元自分の魔法と向きあい続けていた。

「右に5m、今度は左に3m・・・、来た！」

魔力の流れが瞬間的に薄まったのを感じ取ったニキータは『天狼』を振るい、霧の壁を切り裂いた。

するとその場を霧となつて漂う魔力が『天狼』によって切り裂かれ、霧から元の魔力へと戻っていく。

霧の壁に入った一筋の斬り込みは大きさを穴程にまで広げ、ニキータは『天狼』を投げ捨てる勢いよく飛びこんだ。

その後、何事もなかったように穴は閉じ、ニキータの姿は何処にもなかった。

彼女が脱出できたのか、どうか。

それは分からないが、後ろから彼女が逃げ出すのを『名無し』は見ている。

「あの蛇女、外に出たかもしれんぞ！」

「え？ニキータさんが？でも一体どうやって？」

「良くは分からんがその刀だ！そいつで切り裂いて霧に穴が出来た！」

「分かりました！やってみます！」

怪物達の猛攻などお構いなしに壁にまで移動すると、瞬は『天狼』を振るった。

素人の域はとくに出ているレベルの斬撃を霧の壁に見舞うが、霧は吹き飛んだものの何処にも穴などは出来なかった。

「駄目です！穴は空きません！」

「うち！アイツは一体どうやったんだ？」

明確な解答など出ないまま、とにかく2人は霧の中で戦い続けるしかなかった。

霧に覆われたドームから飛び出したニキータ。

目の前に霧はなく、『ニブルヘイム』の中から逃げだせた事を実感する。

「やった、やったわ！」

助かったという安堵感を覚えながらも、ふと何かがおかしい事に気付いた。

出てきたのは怪物達側の入口に近い場所からだが、不思議なほど静かすぎるのだ。

『ホール』内に立ち込める霧のドームからは元から音など聞こえないが、あまりにも不気味なほど静まりかえっている。

一体、この静けさは何・・・？

疑問を覚えながらもとりあえず、『ニブルヘイム』から離れたい彼女は通路の中へと走り込む。

すると、その途中から嗅ぎ慣れた臭いがするのに気づく。

地獄のような監獄の中でずっと嗅ぎ続けていた鼻にツンとくるような独特の匂い、血の匂いだ。

すかさずニキータは足を止め、その場で止まった。

これ以上、先に進めば何かがいる！

蛇女になった時に野生の勘でも身についたというのか、それとも元々持っている直感か。

何か彼女の中で行くのを止めると押しとどめる。

だが、彼女からすればここに留まると言うのはいつ『旅人』に対する攻撃に巻き込まれるかもわからない。

ニキータは体中を襲う寒気と警告を告げる勘を押しとどめながら通路の中を覗いた。

「なに・・・これ・・・」

そこに溢れかえっていたのは援軍として送り込まれるはずだった大量の怪物の死体だった。

第39話：アジア統括支部（5）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第40話：アジア統括支部（6）（前書き）

2011/07/11 間違っていた個所を修正
2011/12/26 レナルドの設定を変更

第40話：アジア統括支部（6）

目の前の惨状にニキータは息をするのを忘れるほど茫然としていた。

首をひねられて殺されている者や鉄球にでも押し潰されたように壁にめり込んでいる者。

黒こげになった地点から四方に体がちぎれ飛んでいる者、更には鋭利な刃物で原型が分からないほど細切れになった者など、多様な殺し方をされた死体が通路の中に大量に転がっていた。

戦場、と言うよりも猟奇殺人の現場と言った方が近いだろう。

凄惨さで言えば人殺しすら厭わないニキータが言葉も出せず、現場に飲み込まれるほどだ。

音もなくただ立ちつくすニキータだが、ふと彼女の視界に壁に飛んだ血が地面へと垂れていく様が映った。

「・・・っ!?!」

それが何を意味するか理解したニキータは辺りを何度も見回し、誰もいないかと確認する。

血が固まらずに地面へとまだ到達していない、つまりこの惨劇は起きてから数分と経っていないのだ。

となれば、これを行った奴は近くににいる可能性が高い。

仮にその相手と対面したとして、見境のない殺し方から推察するに言葉のやり取りなど無意味だろう。

怪物の1人であるニキータならば、出会った瞬間に殺される事は間違いない。

ニキータの必要以上の警戒はそういった考えがあった。

「誰も・・・いない・・・、ふう・・・」

幸いな事に通路内に1人として動く者はいない。

緊張でこわばった顔が少しゆるみ、無意識に安堵の息をつくニキータ。

そして、その溢れかえる異形の死体のさらに奥、通路の先に目を向ける。

早く『ニブルヘイム』から離れないと・・・！

出来る事なら通りたくない場所ではあるが、戻るという選択肢がない以上、彼女は意を決して先に進みだした。

下半身が大蛇でありながら床に出来た血溜まりを器用にかわし、極力音を立てない。

どこにも敵の姿は見えないが、転がっている死体を見るだけで自然と心臓の鼓動は高まり、冷や汗が体中から止まらず、拳動不審に辺りを見回す。

その様子を一目見れば、誰でも彼女が極度に緊張していたのは間違いない分かる。

だからなのだろう。

通路内に突然響き渡った銃声で彼女は驚きの声を上げてしまう。

「ぎゃっ！？・・・い、今のはどこから？」

青ざめた顔で辺りを見回すニキータ。

どこかで戦闘が始まったのか、最初の銃声を皮切りに何十、百発分の銃声が彼女の耳に届く。

どうやら銃声は彼女の進む先からしているようだ。

「この銃声・・・、AK47（アサルトライフル）？」

銃声を発する物がこのアジア統括支部での隊員標準装備であるのに気づいたニキータ。

となれば、『MW2』の隊員達と何かが戦っている事になる。この先に一体何がいるのか彼女には知る由もないが、いまだに銃声が止まないとなるとそれだけの数が敵だと言う事なのだろうか。もしくは『旅人』のような者でも相手にしているという可能性もある。

どちらにしる、彼女の道を塞ぐ障害でしかない。

隊員達に加勢する様な気はさらさらないが、だからと言って敵対する奴に手を貸す気も彼女にはない。

あるのは己が助かるためにどう動くかという考えだけだ。

とりあえず、何が起きているのかを確認しようとニキータは奥へと歩み寄り、折れ曲がった通路の先を影に隠れながら覗き込む。

そして、覗き込んだ事を即座に後悔する事になる。

そこで起こっていたのは一方的な虐殺、それもたった1人の男によるものだ。

さつきと同様に色々な手口によって無数の屍と化した隊員達の中に1人だけ立つ短い金髪の長身の男。

歳は40代の中年と言った様だが、身に纏う雰囲気はただの大人という言葉では括れない。

上下ともに黒づくめの男が己へと向けられた集中砲火の中を悠然と歩き、その弾は男に当たる事もなく逸れていく。

次々に魔法によって造られた炎の弾や氷の刃が飛び交ってもその歩みは止まらない。

「う、撃てえ！奴を近づけるな！殺されるぞ！」

「ひ、ひいっ！」

隊員達の間には明らかに敵意とは別な物が感じられる。

そう、向かってくる男への恐怖だ。

仲間の死の瞬間を何度も目撃し、パニック寸前までに高まった恐怖

は、隊員達から見る男の姿を鎌を振りあげた死神の姿と変貌させていた。

「くそ！撤退だ！距離を」

「逃がさんよ」

後退の指示を隊長クラスの隊員が出そうとした瞬間、男の青い目が細まると場の空気が一変し、重圧が隊員達を襲った。

まだ戦闘に慣れていない隊員達はその場で白目をむいて倒れる。

ベテランの隊員達は意識は保ったものの、体にまるでコールトールがまとわりついていてるかのような重苦しさを感じている。

『名無し』と同じ殺気を放った男は攻撃が弱まった途端に走り出し、一気に距離を詰めた。

そして、倒れている者や重く感じる体に迎撃もままならない者に手を触れていく。

その途端、ある者は鋭利な刃物で切った様に首が飛び、ある者は口ープがかかっているかの様に首が絞められていく。

更にある者は呼吸ができなくなると苦しさに床の上を転げ回り、またある者は内臓が損傷したのか血を吐きながら倒れた。

男に触られた者は例外なく次々と死んでいった。触ると死ぬなど、さながら本物の死神だ。

物陰から見て何が起こっているのか皆目見当がつかなかったニキータだが、その死の魔法から男が誰なのかを思い出した。

思い出した途端、体中から血の気が失せていくように青ざめ、体中が寒くもないのに震えだす。

「う、嘘……、なんでこんなところに奴が!？」

彼女が思い出したのはまだまともな人間だった時に見た『旅人』の

資料の1つ。

そこに記されていた？2：レナルド・ロドリゲスの情報だった。通り名は『処刑人』。

触った者に様々な死を訪れさせる『マダーハンド』という特殊な魔法を持ち、彼に対する近接戦闘は死に行くのと同じ意味となる。普段は人里離れた山奥などに潜伏しているはずだが、どういう訳だか100mとない距離にいる。

彼に見つかればニキータにも死を訪れさせていただろう。

幸い、今は隊員達を皆殺しにするのに忙しいらしく、ニキータの方に顔が向く事はなかった。

ニキータが顔を引つ込めてもなお、レナルドによる一方的な蹂躪は続いた。

銃の弾は『イージスの盾』によって弾かれ、ナイフをつき立てようものならカウンターで触られる。

次々とタッチされて虐殺されていく中、触られて死を覚悟した隊員の中には銃を頭に向けて自決する者までいた。

そうして、一番奥にいた隊長クラスの隊員の前に立った時、彼の部下だった者で立っている者は誰1人としていなかった。

目の前の惨状、部下の惨い死に隊員は膝をついて懇願した。

「た、つた、頼む！殺さないでくれ！死にたくない！」

「『ホール』の魔法の止め方を知っているか？」

「……え？し、しらな、……つつつ！？」

隊員が良い終わる前にその肩へと死神の手が置かれた。

慌てて払いのけた隊員だが、その直後、体が持ちあがり助けを求め、る間もなく尋常じゃないスピードで地面へと叩きつけられた。

体中の骨が砕け、隊員の命も砕け散っていた。

「やれやれ」

あれだけの人を殺したと言うのに微笑みを浮かべるレナルド。まるで罪悪感の欠片も持っていないとでも言うのか、どこにも悔む様な様子は一切ない。

魔法や身体能力に加えて人をゴミの様に扱う思考、人としては最低だが、殺人者としては最高といえる男だった。

銃声が一切なくなつたのをニキータは耳で聞き、戦闘が一方的に終わつたのが分かつた。

間違はなくレナルドの勝利と言う形で。

『ホール』の中の『ニブルヘイム』に戻るのは嫌だが、ここにおいてもいずれ殺されるだけな状況。

とにかく1歩も動かず、レナルドがいなくなるのを心の底から願っていたニキータだが、その願いはあつという間に壊された。

目の前にいつの間にかレナルドが立っていたのだ。

「あ、がっ!？」

咄嗟に身構えたニキータだが、そんな事など気にならないのかレナルドは彼女に問いかけた。

「『ホール』の魔法の止め方を知っているか？」

「しっ、・・・知っている」

「どうすればいい？」

とても質問している立場とは思えない様な見下す冷たい視線がニキータの体に突き刺さる。

嘘でもつこうものなら即座に殺されかねないだろう。そんな中でニキータはどうか稼働する頭をフルに回転させ、生き残りの道を探し出した。

「た、助けられるなら教える」

「ほう、私に交渉か。いいだろう、交換条件だ」

すかさずニキータの体を襲っていた重圧が無くなり、とりあえずは助かったと思つたニキータ。

だが、目の前で仁王立ちのまま絶対零度の見下す視線ははまだ彼女の動きを封じるには十分だった。

多少ビクつきながらニキータは嘘など一つもなく、『ニブル Heim』を形成する『ホール』の仕組みを教えた。

簡単に言ってしまうえば、彼女から抽出した魔法を別の有機体へと強制的に移し、魔力濃度の高い空気から抽出した純粋な魔力をその有機体へと人工的に与え続ける。

その結果、他人の魔法を半永久的に使える装置が完成するという訳だ。

以前から研究されていた魔法研究の1つだが、彼女が監獄に囚われている間に完成し、更に対『旅人』用として初めて建造された装置に抜き取られた彼女の魔法が使われていたと言う訳だ。

「装置については分かった。その魔力の元を止めれば止まるということか」

「そういうことよ。『ホール』の外周を回っている壁から『ニブル Heim』の魔力が放出されていた。どこかにその元があるはずよ」

「その場所は？」

「わ、私は知らないわよ！」

「……どうやら嘘はない様だ。お前の命は助けよう」

興味すらなくしたようにニキータに背を向けたレナルドはその場から去る。

今なら不意打ちも可能だが、ニキータは自分から谷底に落ちる様な選択はしない女だ。

手を出した所でせつかくつないだ命を無駄にするだけでしかない。気が付けば視界の中からレナルドは消えており、気が抜けてニキータはその場にへたりこんだ。

「な、なんであの男がここにいるのよ!？」

「そうそう」

「つつ!？」

いなくなったはずのレナルドが突然ニキータの目の前に現れ、その手をかざしていた。

ニキータが動けば確実にその手は体に触れ、命はあっという間に消し飛ぶだろう。

「分かっているだろうが、さっきの話が嘘ならお前の地の果てまでも追いかけて殺す。いいな？」

言葉も出ないが、黙って頷くしかないニキータ。

それに満足したのかレナルドは手を引つ込めると口の端を釣りあげた笑みを浮かべ、ニキータに背中を向けた。

「ああ、命を助けてやるついでに君の質問にも答えてやるう。私
が此処にいるのは、約束のせいだ」

ついでと言われたのが引つ掛かったニキータだが、そんなことより
も後の言葉が気にかかっていた。

何せ、人との接触を好まないレナルドをアジア統括支部を襲撃する
のに引つ張り出した理由だ。

「約束？」

「遠い昔、友と交わした、な。・・・さて、約束を果たしに行く
か」

ニキータが戸惑っているうちに姿が幻の様に薄れていき、気が付け
ばどこにも彼の姿はなかった。

彼がいない事を確認したニキータは安心すると同時に、止まりかけ
た心臓のハイペースで鼓動を打つ大きい心音が耳に届く。

緊張の糸が切れたようにその場に横たわるニキータ。

僅か数分間対峙しただけでニキータは惨めな死の恐怖に憔悴しきり、
逃げる気力もなく、ただレナルドが消えた通路を見ていた。

体にまとわりつく様な濃霧の中をキャンプファイヤーの光を元に
戦い続ける瞬と『名無し』。

何時になつたら終わるのかと瞬はともかく、『名無し』に疲れが見
え始めた時だった。

敵の増加が止まり、攻撃の手数が激減していったのだ。

その様子をすぐに感じ取った『名無し』だが、これも『W2』の作戦かと思いを巡らせる。

一方、瞬の方もそれには気付いていたが、攻撃が止まれば脱出もできるのではとニキータの行っていた脱出方法を考えていた。

二人とも別な事を考えながらも、その体は俊敏に、そして的確に敵を倒していた。

「『旅人』！ 気づいているだろ!？」

「ええ！ 敵が減ってきている!」

「何かの罠かもしれん、俺は片がついたら一旦壁の中に引っ込むぞ!」

「分かりました！ 僕がその後でニキータさんと同じ方法を試してみます!」

簡単に作戦を決めた2人はとにかくその手を止める事はなく、次々に敵を倒す。

そして、ようやくその怪物もロボットも打ち止めなのかもう襲ってくる様子はなく、さすがに疲れた『名無し』は荒い息を上げていた。瞬と戦う時も終始無表情を貫いていた彼だが、今の表情には明らかに疲れの色が浮かんでいる。

だが、ここで終わった訳ではない。疲労困憊の体で鉄鋼の壁の中へ逃げ込もうと足を進める。

「つち、さすがに限界が近いか」

今にも倒れそうなほどふらつく足取りで歩き、バランスを崩して倒れそうになった瞬間、その体を瞬が支えた。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、何とかな。疲れただけだ」

「後の事は任せて休んでいてください」

「悪いがそうさせてもらおう、しっかりと頼むぞ」

こんな状況にもかかわらず能天気には微笑んで頷いた瞬に『名無し』は妙な期待感を抱く。

本当にこの男なら何とかしてくれるかもな。

そう思えるほど、『名無し』には肩を貸してもらっている男が信頼できた。

同じ奇妙な状況にいるというのが連帯感を生んでいたが、それ以上にこの『旅人』の人格は不思議なほどに人を惹きつける。

殺し屋として長い間1人で命のやり取りを行っていた『名無し』に信頼感を生みだすほどに。

壁の中へと連れ込まれた『名無し』の前に次々と食料や薬、弾薬などが置かれ、所狭しとばかりに置いた瞬はその場から離れた。

「全く、どれだけお人好しなんだアイツは」

呆れたように呟く『名無し』だが、その顔には笑みが浮かんでいた。彼には久しくなかった感情だった。

自分が笑っている事に気付いた『名無し』だが、とくに気にする事もなく詰まれた食料に手をつける。

奴だけに任せておけないなとコルトパイソンのメンテナンスを行いながら、食料を腹の中に入れていき体力の回復に努めた。

その間、敵襲も銃撃もない中を瞬は『天狼』片手に立ち、霧の壁へ

と向かって何度も斬りつけていた。
魔力の乗った霧にジャミングされ魔力の流れなど分かりはしない瞬間には、ただ闇雲に霧の壁を斬りつけるしか方法がない。

「一体どうすれば外に出られるのか・・・」

疑問は浮かんでもそれに答えしてくれる者はいない。

ただ、瞬には一つだけ試してみたい事があった。

『天狼』を消したかと思うと、鞘に収まった『天狼』を作り出し、左手で鞘を腰に当て刀の柄を右手で握り締める。

屈むように姿勢を落とし、まるで徒競争でもするかのように足は縦に大きく開く。

イリアとの修行中に学び、無意識のうちに放った結果、イリアに一撃を入れる事に成功した居合切りだ。

瞬は今まで全力で試した事はなかったが、やればおそらく今まで出した事もない様な強力な斬撃を出せる予感がしていた。

それならばニキータが何をやったかは分からないまでも、何かしらの結果を出せると彼は考えていた。

「これで駄目なら・・・何度でも試すまでだ！」

低い姿勢から更にもう一段階低く身を沈めた瞬間、爆発した様に前へと飛び出す。

一瞬で目の前に迫った霧の壁の寸前で渾身の力を込めて地面を変形させる程の踏み込みを行い、地面を足の裏一つで捉える。

凝縮された力を足から体全体へと伝え、体中が加速する中で力を込めて『天狼』を抜く。

「あああああ！」

常人を超えた力と加速に加え、刀自身を鞘の中で走らせて通常の斬撃程度では及びもしない程の超加速状態の勢いのまま、全力の斬撃が放たれる。

誰の目にも捉える事が不可能な斬撃が霧の壁へと放たれ、瞬が抜いたと思つた時には既に『天狼』は振り切られた後だった。

その直後、周りの霧を吹き飛ばす風が瞬を中心として吹き、爆発した様な音が辺りに轟く。

瞬は知る由もないが、その音こそ音速を破つた事を示す破裂音だった。

今の自分に放てる最高とも呼べる一撃を放つた瞬だったがその代償もあり、見れば体中に斬られたような傷ができていた。

『天狼』を振り抜いた右腕の損傷は特に激しく、まるで表面が破裂したような右腕へと変貌していた。

音速を突破した事で生じたソニックブームがカマイタチの様に体を襲い、もし『旅人』でなければ死んでいただろう。

強化された『旅人』の体でも音速の壁を生身で突破するのは容易ではない。

それは瞬の体を見れば理解でき、事実、瞬の体の至る所から痛みが上がり、それをこらえるので表情が自然と硬くなっていた。

だが、その痛みの価値はあった。

「これは!？」

瞬の目の前には霧の壁の中にポツカリと空いた巨大な穴が出来ていた。

ニキータが抜け出す時に作った穴よりも数倍でかい大穴だ。

全力で放つた斬撃は刀の先に真空の刃を作り出し、『天狼』の延長になる真空の刃にも魔力を切り裂く力が『天狼』から流れ込んでいた。

その結果、広範囲を切り裂く長刃の『天狼』へと瞬間的に変わると、

刀何本分もの長さをもって霧は刹那の速さで斬られていた。魔力の流れが弱まっているなど関係ない。

瞬は強引に辺り一面の霧を切り裂き、外への通路を作り出していた。

「でき・・・た？これが出口？」

体が自然に治癒していく中、目の前の何でも飲み込んでしまいそうな程でかい穴にどうすればいいか迷っていると、その背後に『名無し』が現れた。

まだ食事は途中だったのか、口一杯に物を含んでいたが、驚いた状態で一気に全てを呑みこんだ。

「これだ！さっき蛇女が出ていく時にそんな穴が出来ていた！」

「となると、後はこれが本当に外に通じているのかどうか、ですか」

「そういう事だ。とにかく飛び込んでみないと話は進まんだらう。何より俺はここにいたくない」

「分かりました。じゃ、僕が担いで『イージスの盾』で守ります」

そう言うと『名無し』の体を軽々と持ち上げて、担ぎあげる瞬。

今まで経験がない程簡単に持ち上げられた事に驚く『名無し』だが、その直後、不愉快とも言わんばかりに表情が曇る。

「・・・おい」

「なんですか？」

「これはふざけているのか？」

「いえ、別に」

悪気はなさそうに答える瞬だが、『名無し』は瞬の腕の上で小さく小刻みに震え、怒りの声を上げた。

「ふざけんな！男をお姫様だっこする奴があるか!？」

叫ぶついでに頭めがけてチョップを入れる『名無し』。

だが、強化された瞬の体では痛みが手に帰ってくるだけだった。

今の彼の状態、それはまるで王子様がお姫様を抱える様に胸の前で相手を持つ、所謂お姫様だっこのお姫様が『名無し』となっていた。その扱いには文句の声を上げる『名無し』だが、瞬はさつきと変わらず微笑んでいるだけだった。

どことなく狙ってやっているのではないかと思わせるほど不自然に笑っている瞬。

『名無し』が突っ込みを入れたのも無理はない。

「今は一刻を争いますから、行きます！」

「ま、待て！せめて脇に抱えるとか背中にい!？」

無表情で淡々と仕事をこなす、ロボットの様な殺し屋として有名だった『名無し』。

そんな彼が瞬のせいで片無しである。

喚く『名無し』を余所に瞬は『イージスの盾』を展開し、今にも消えそうな切れ目へと飛び込んだ。

濃い霧が続く中を瞬は小走りに進み、『ホール』の壁が見える事を祈る。

2人を取り囲んでいた霧が段々と薄れていき、もう『ニブルヘイム』から抜け出せたと思った2人だったが、足を止めるとそこはまた同じ霧が支配する空間だった。霧が薄れたのは瞬が斬り裂いた場所にまた戻ってきていたからのようだ。

「また・・・元の場所、ですか」

「つち、駄目か」

明らかに落胆する2人。

抜け出せそうな気が強くしていただけにその反動は大きい。

「また別の手だな。それより早く下ろせ」

「はいはい・・・ん？『名無し』さん、あれは？」

肩を落としていた瞬だったが、なんとなく見ていた上の方で霧が晴れていくように薄くなっていくのに気が付いた。

ようやくお姫様抱っこから解放された『名無し』も体を伸ばしながら目を向ける。

薄れていく現象は降りていくように全体へと広まっていき、徐々に霧の濃さも薄まり、視界も拓けていく。

まるで霧が蒸発でもしているかのようだ。

「・・・魔法が消えようとしているんじゃないか？もしかするとお前の一撃で魔法構造そのものが壊れたかもしれない」

「ん〜、手ごたえも何もなかったから良く分かりません。でも、外に出れると言うのなら」

言葉を切った瞬は右手に麻醉銃を、左手に『天狼』を作り出す。これから起こるであろう戦いに備えて。

瞬の雰囲気が変わったのに気づく『名無し』だが、茶化すように両腕を上げると鼻で笑う。

「・・・まつ、俺は敗北宣言したんだ。せいぜい邪魔にならない様に消えさせてもらう」

「そうですね。しっかり約束は守って下さいよ？」

「残念ながら嘘はつかない主義だからな。まあ、真っ当に生きていれば2度と会う事もないだろう」

そのやり取りの間に霧はほぼなくなり、段々と霧の隙間から外の無機質な金属製の壁が顔を出していた。

「さよならだ」

「ええ、お元気で」

空いた穴の中へと飛び込んだ瞬に続いて『名無し』も別の穴から外へと飛び出した。

瞬は床の上へと転がると辺りを確認し、そこが間違いなく『ホール』の中であることを確認した。

どうやら戻ってこれたみたいですね。

肩の力が少し抜けた瞬だが、消滅しかかっている『ニブルヘイム』の近くから離れるために通路の中へと飛び込んだ。

すると、その眼前に広がる光景に絶句した。

見渡す限りの怪物化した死体の山。

『ニブルヘイム』の中で襲ってきたのと同じタイプの怪物もいれば、初めて見たタイプの怪物までいる。彼らはおそらく瞬を襲うために待機していたというのを想像するのは難しくない。

瞬もその考えにたどり着いたが、一番の問題は別だった。

「一体、何が起こったのか・・・？」

吐き気を催すほどの光景に思わず口元を押さえながら極力見ない様に先に進む。

どこを見ても生きている者はおらず、瞬は警戒するだけ無駄に思っていた。

だが、そんな瞬に警告するように曲がり角の先から小さい物音が聞こえ、その音を捉えた瞬は極力足音を消して角に張り付く。

そして、意を決して角から飛び出すと麻醉銃をその先へと向けた。

「ひっ！！・・・え？」

「あれ？ニキータさん」

後ろから突然の物音にまたレナルドが現れたのかと凍りついたニキータだったが、そこにいたのが見知った優男であるのが分かると強張った顔が一気に緩んだ。

それでも瞬は敵なのだが。

一旦はニキータの気も緩んだが、ふと思いついたように叫んだ。

「アンタも抜け出せたの!？」

「まあ、何とか」

「どうやって！？そんな簡単に『ニブルヘイム』が敗れる訳がない！」

「それが気が付いたら霧が薄れてきたものですから・・・」

苦笑しながら答える瞬に、ニキータの脳裏にレナルドの姿が思い浮かぶ。

あの男の仕業か！

原因がほぼ特定できたもののどうしようもない程の力を持つ『旅人』ではどうしようもないと忌々しげに唇をかむニキータ。

「あの、それはそうと、何が起きたんですか？この大量の死体は」

「アンタの仲間の仕業よ！どうせ知ってて言ってるんでしょ！」

「仲間・・・？そう言われてもさっぱり分かりません」

困った様に返す瞬の反応から、本当に何も知らないのだとニキータは分かった。

となると、レナルドが言っていた約束の相手は少なくとも瞬ではないと言う事だろう。

「じゃあ教えてあげる。アンタを助けたのも、怪物や隊員達を殺したのも皆、アンタと同じ『旅人』がやった事よ！」

「誰ですか！？その『旅人』というのは！」

自分と同じ『旅人』が原因であるのに驚きながらも、それが誰なのか知りたくてたまらない瞬。

彼はこんな酷い事をロビンやイリアがやったとは考えたくもなかつ

た。

そんな事などつゆ知らず、予想以上の反応を返した瞬にニキータはさっさと去ってもらいたかった。

何せ、『名無し』がいない以上、瞬と戦えば確実に負けるのは間違いなかったからだ。

「アイツなら多分この先よ。急げばまだ」

ニキータが言い終わるのを待たずして、瞬は駆けだした。

「ちよつと！」

「すいませんが先に行きます！相手はまた今度で」

言いながらも足は止めず、あっという間にニキータから離れていく瞬。

その胸中は仲間に出るといふ期待感と、死体の山を短時間で作り上げるまだ見ぬ力への恐怖で一杯だった。

第40話：アジア統括支部（6）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

どうか40話に到達です。

文字数にして約30万字らしいですが、本当に飽き性な私がよく続いたものだと思います。

まだまだ内容は続きますが、一体いつになれば終わるのやら。

他の投稿されている方で1日1話ペースで出来る人並みに書ければと羨ましがる日々です。

第41話：アジア統括支部（7）

車が10台は止まれそうなほどの広さを持つ部屋の中は、巨大な装置一つで埋め尽くされていた。

だが、その唯一の装置は所々が損傷し、中の部品が見えるほど壊れた個所からは煙や火の手が上がり、表に付いている計器類に光は灯っていない。

完全に動きを止めた『ニブルヘイム発生装置』の前で、三脚の付いたM2機関砲（重機関銃）のグリップを握っていたレナルドはM2機関砲を消し去った。

「やれやれ、こんな所か」

修理など不可能なレベルにまで破壊された装置にレナルドは興味が無くなったかのように背中を向けて出ていく。

歩きながら煙草箱台の小さな灰色の塊を作り出した彼はそれを無造作に後ろへ放り投げた。

鉄くずと化し、床の上を転がる『ウォーカー』達の間を歩きながら、レナルドはスイッチを作り出すと同時に押し込む。

その途端、装置の前まで転がった灰色の塊の内部に組み込まれた信管のスイッチが入り、灰色の塊はその量からは想像もできないほどの爆発を引き起こした。

室内で荒れ狂う爆発は当然の様に唯一開いていた出口を抜け、その途中にいたレナルドへも容赦なく襲いかかる。

当然の様に爆発は『イージスの盾』によって防がれ、レナルドを避ける様に爆発は通り抜けていく。

そんな中、レナルドは1本の煙草を作り出すと、それを上へと掲げて『イージスの盾』からギリギリ先を出す。

ライターなどとは比べ物にならないほどの熱量は一瞬で煙草の先端

に火が付くどころか灰にし、レナルドが煙草を下げると普通よりも若干短い煙草になっていた。どうにか火は付いていたため、レナルドは気にした様子もなく口に銜えて煙を吐き出す。

「これで約束は果たした。ヴァネッサの奴にもう一度会ってみたかったが、それは叶わん話・・・だな」

鼻で笑ったレナルドは収まった爆発の結果を見る事もない。

いや、下で原形をかるうじてとどめている黒こげの『ウォーカー』の残骸からすれば室内など見るだけ無駄だろう。

吸い終わった煙草を放り捨てるとスッキリした様に背伸びをする。

さて、役目も終わったし、家に帰るとするか。

長い間、彼の中で残り続けていた約束が消化された事で、彼の肩の荷が下りたようだ。

もうこれ以上、新しい『旅人』に関わる事もないだろう。

そう考えながらレナルドがその場を去ろうと歩いていた時だった。

「待つて下さい！」

黒こげになっている廊下に響いた声にレナルドは後ろを振り向いた。そこに立っていたのは『W2』とも『旅人』とも到底関係している様には見えない、シャツにジーンズといったラフな格好の瞬だった。

「貴方、『旅人』ですよね？」

「この姿を見ればわかるだろう？で、お前はなんだ？ここに迷い込んだ一般人か？」

両手を広げておどけているように言うレナルドだが、その鋭い目は

瞬の一挙一動を見逃さんと体の各所を見張っていた。その様子に瞬は目を背けながらばつが悪そうに答える。

「……いや、僕も貴方の仲間なんですけど」

「冗談か？」

口でそう問いかけながらも魔力探查で即座に瞬の話が本当かどうかを調べるレナルド。

そして、それが本当である事は瞬から感じる魔力ですぐに分かった。

「本当です！何なら何か作り出して」

「いや、いい。本物であるのは分かった。お前はアレだろ？ヴァネッサの後任なんだろう？」

「ヴァネッサ……、ああ！姫の事ですよね？」

「やれやれ……。お前にとっての姫がヴァネッサを指すかどうか知らんが、多分そうだろう。なら、初めましてだが、ついでにさよならだ」

その場を去ろうとするレナルドの前に瞬は慌てて回りこんだ。

「ちょ、ちょっと！色々と聞きたい事が」

「あ、そういうのはめんどくさいから無しだ。それに俺は久しぶりの労働でさっさと家に帰りたい。それを邪魔するなら仲間とはいえ、容赦する気もない」

途端にそれが嘘でないのを示すかのようにレナルドの体から威圧感が放たれる。

殺気にも似た強烈な圧迫感が瞬を襲うが、瞬はその場で踏みとどまる。

「ぐっ、なら少しだけ質問を！」

怯まない瞬にレナルドは少しは認識を改める。

如何にもめんどくさいと言わんばかりにため息をつく、火のついた煙草を1本作り出して口にくわえる。

「……いいだろう、この煙草が吸い終わるまでの間だけだ」

「貴方は一体何をやるうと思ってここに来たんですか!？」

「……あんまり言いたくはないが、俺はヴァネッサからお前を一度だけサポートするよう言われている」

「え？ 姫に？」

レナルドは一度だけ頷いた。

「ああ、一度だけだな」

「それなら、あの通路の大量の死体を作り上げたのも貴方ですよ
ね？」

実の所、瞬はイリアの口から他の『旅人』についても軽く情報を教えていてもらった。

目の前で煙草を吸っている男が『処刑人』の異名を持つ『W2』に

とっては死神のような存在である事も知っている。

だからこそ聞いてみたい事があった。

どうしてそこまで簡単に人が殺せるのかと。

レナルドはめんどくさげに頭の髪を掻き毟ると深く煙草の煙を吸い込む。

「当然だ。お前がどこまで俺の事を知っているかはしらんが、一瞬であんな殺し方を出来るのは世界中探しても俺だけだからな」

「なぜ、そこまで人の命を軽く扱えるんですか!？」

・・・なるほど、ヴァネッサの奴が姿を見せずに助けろといった訳だ。

その一言でレナルドは何百年前の約束の意味を知った。

「なぜ?と言われればそうしないとまた襲ってくるからだ。お前も分かっているだろ?」

「だからってそう簡単に殺すなんて!」

「知らんな。俺はただ静かに暮らすのを邪魔する奴がいれば排除するのみだ。・・・煙草も切れた。話はここで終わりだ」

先の短くなつた煙草を放り捨てると瞬に背中を向けるレナルド。

「っ!?!ちよつと待って下さい」

慌てて追いかけようとした瞬だが、その瞬間、体中が動くのを拒否するように足を出せなかった。

まるで、体が自分の物ではないかのように動こうとはしない。

その原因であるレナルドは体中から殺気を放ち、ただ悠然と前を歩いていただけだった。

とはいってもただの殺気であれば、瞬にも耐える事は可能だったはずだがこの殺気は『名無し』が放っていたものとは次元が違い、ただ純粹で殺すという巨大な気配が瞬の精神を押しつぶしにかかっていた。

「……がつ!?ま、待つ……て」

見えない重圧にたまらず床に片膝をつく瞬だが、その手は去ろうとしているレナルドへと伸ばしていた。

声に反応して後ろを振り返ったレナルドは表情も変わらないが、足を止めて瞬へと向き直る。

「ほう、これでもまだ追いかけてこようとすると、軟弱な奴だと思っていたが少しは骨がある。……いつかまた出会う様な事があれば、一戦交えてみるか。フッフ」

そう言った途端、レナルドの体から殺気が消え、床に這いつくばっていた瞬ののしかかっていた重圧も消える。

瞬は顔を上げてレナルドのいた方を見たが、そこには彼の姿は見当たらず、まるでマジックでも見ているかのような錯覚を覚える。

「一体どこに……」

「いたぞ!こつちだ!」

「敵ですか。本来の目的に戻った方がよさそうですね」

半ば反射的に『イージスの盾』を展開させる瞬。

それと同時に両手を構え、その手に麻醉銃が握られる。今の出来事で姫について分からない事がまた1つ増えた瞬だが、彼女の願いを果たすべく、敵の群れへと突っ込んで行った。

完璧だと思っていた罠が敗れた事について、グランはショックを受けていた。

別の統括支部長達や本部長の重圧に耐え、胃が痛む毎日の中で考え抜いて作った罠。

物理的に破る事が出来なければ確実に『旅人』を捕え続けておけると確信にも近い自信があった罠であるだけに受けたショックも一際でかい。

そんな彼はまだ『ホール』を見下ろす特別室で頂垂れていた。

「く、くそお！完璧だった私の罠が！何だつて？2がこんなタイミングで現れる！？奴らは助けあいなどしない連中じゃないのか！」

そこに司令室で代理の指令を取っている部下から連絡が入った。

『支部長！どうやら奴らは装置を破壊後、二手に分かれ、その…』

『…』

「……なんだ？」

『いえ、その……？2は出て行ったそうです』

「出ていった？どついつい意味だ？」

『文字どおりの意味です。？2はアジア統括支部から去り、何処かへ行ってしまったそうです』

部下の言う事が分からないグランはようやく意味を理解したものの、それでもやはり訳が分からない。

「ど、どういうことだ！？何で出ていく!？」

『分かりません！で、ですが、？1は引き続き進行を止めないそうです』

まさか、助けに来るだけ来てさっさと家に帰るとは思いもしないグランは混乱の渦に巻き込まれる。

例え、どんな秀才、天才達が考えに考え抜いてもその答えが出るとは思えない。

むしろ、何も考えずに言った方がよほど当たりそうである。

「ツチイ！なら、？1を補足し、攻撃を続ける！私は・・・『ミヨルニル』の起動に入る」

『っ!？ま、待って下さい！ここで『ミヨルニル』を使えば』

「分かっている、この辺一体が吹き飛ぶだろう。ただ、私は失敗したのだ。いずれ制裁を受けるのは間違いない。最早、奴を倒して力を奪うか死ぬか、だ」

『だ、だからと言って全員を道連れにする気ですか!？』

焦る部下の声にグランは顔が狂気に歪み、終いには笑いだした。

「クククツ！逃げるなら逃げる！臆病者の部下などいらん！」

『狂ってる……。くそ！総員撤退だ！早く逃げないと死ぬぞ！』

その言葉を最後に部下の通信は途絶え、グランの耳に届くのは砂が流れる様なノイズのみだった。

役立たずとなった通信機を放り捨てた彼は揺れる様に歩き出し、『ホール』より奥に存在する最重要区画へと足を進める。

「全て吹飛ばしてやる！クククツ！」

常軌を逸した笑みを浮かべるグランは闇の中へと消えていった。

地下だと言うのに風の吹き抜ける中、瞬は何が起こったのかと考えていた。

ついさつきまで戦っていた『W2』の隊員達が一斉に撤退したのだ。後に残ったのは命令のみを理解できる異形の怪物だったが、その怪物達も床の上に横たわって瞬へ襲いかかる事などない。

既に瞬の手によって眠らされるか、気絶させられていたからだ。

誰もいなくなった巨大な通路には何とも言えない不気味な静けさだけがあつた。

「一体、何が……。？」

また別な罠かとも考えた瞬だが、それにしてもはまるで敵である自分の事すら眼中にない様に逃げていく隊員達の様子が気にかかっていた。

様子がおかしければ逃げる。

師匠であるイリアからはそう襲わっているが、ここで引くわけには
いかない瞬は前へと歩き出した。

すると、それを待っていたかのように通路の隅に取り付けられたス
ピーカーから声が響き渡る。

「旅人お〜！私はここだ！さっさとこっちにこい！」

「貴方は誰ですか？」

「誰・・・？お前が荒らして回っているアジア統括支部の長、グ
ラン・ヴォルトだ！」

「・・・ようやく現れてくれましたか」

幾つもの戦闘を駆け抜け、様々な罠を超えてようやく声だけと言
え、現れた統括支部長。

瞬はようやく本部への手がかりが見えてきた気分になる。

「貴様を殺す舞台は整っている！私はそこで待っているぞ！」

グランの放送が終わると、瞬の立っている近くで扉が開いた。

本来、最重要機密へと通じるその扉を開くためにはカードや指紋、
網膜などの認証を行わなければならない。

ところが、今は重厚な扉が敵である「旅人」を迎え入れる様に開い
ている。

「誘って・・・いるんでしょっね」

扉の開いた意味を理解した瞬はその中へと入る。

すると、扉は閉まっつていき、重く鈍い音を立てながら完全に閉じられてしまう。

扉を背にした瞬の前には今までと何ら変わりのない通路が続いているが、幾つもの扉がある中からまた一つが勝手に開いていく。警戒をしながらも瞬はその中へと入り、また別の扉へと入る。これを何回繰り返したのかおぼろげになってきたころだった。

「これは・・・」

最後の扉へ入った時、瞬は自然と言葉を漏らし、足が止まった。目の前に現れたのが先ほどの『ホール』とは比較にならないほど巨大な部屋だからではない。

その広大な空間を占める30m級のミサイルが何基もあつたからだ。さながら軍のミサイル基地といったところだろう。

「ミサイル！？　そういえば師匠が前にミサイル攻撃を受けたと」

『よく来たな！　旅人』！』

スピーカーから響いてきた声に瞬は声の元を探し、一番奥のミサイル、その周りを囲う作業用足場にいる人影を見つける。

男がいるというのがせいぜい分かる程度の距離が開いていたが、瞬はその人物こそがスピーカー音声の主であると確信を持つ。

瞬が辺りを見回してみると、壁に取り付けられた小さいマイクを見つければ、瞬はそれを手に取った。

「貴方がここを治めている人ですね！」

『その通り。貴様が何の目的で来たか知らんが、ここで貴様を仕留める！』

「そうはいきません、ここも潰させてもらいますし、本部への道も教えてもらいます」

『・・・なるほど、それが貴様の目的か。よからう、私に勝てたら教えてやる。だが、そう簡単に勝てると思うなよ！』

スピーカーの音声が続くと同時に辺りから銃弾の雨が瞬を襲う。ミサイルの足場やミサイルの陰に隠れたグランが独自に持つ子飼の特殊部隊による攻撃だ。

銃弾一つをとつても人をまとめて数人は貫くほどの威力を持っているが、瞬の周りは攻撃によって変わっていくものの瞬自身に攻撃は届きはしない。

『イージスの盾』に守られる中、瞬はPSG-1（スナイパーライフル）を作り出し、立ったまま照準を覗く。

既に飛んでくる弾の位置、弾を発射する際に発生する閃光であるマズルフラッシュからおおよその敵の位置は割り出していた。

覗き構えた先には当然の様に敵があり、その敵へと照準を合わせる。

「風もなし、高低差と重力を考慮して・・・」

師匠に教えられた事を思い出しながら、微妙な調整を行い照準をずらす。

一方、銃口が自分へと向けられているのに気づいた隊員は即座に体を起してミサイルの陰に隠れようとする。

彼の判断は決して遅くはなかった。

だが、彼が身を翻すと同時に肩に小さい痛みを感じた。

恐る恐る確認してみた彼の眼には、自分の肩に突き刺さる麻酔針が映り、まだ体は隠れようとしていたが頭の思考はすぐに鈍くなり、それに合わせて体の動きも鈍まると最後には意識を失って倒れた。

そこまで離れた距離とは言えないものの、ハンドガンによる近接戦闘しかできないと聞いていたグランと隊員達の間には驚愕と戦慄が走る。

「当たった！」

だが、その結果に一番驚いていたのは瞬自身だった。なぜならイリアとの修行中、スナイピングの修行や練習も当然行っていたが、銃に関してはどちらかと言えば素人に近い瞬が正確に当たる事は中々出来なかったからだ。

それこそ10発撃てば何とか1発当たると言う程度。

1発に集中し、1発で全てを終わらせるスナイパーになど到底なれるレベルではない。

それが本番で1発目に当たったとなれば、自然と瞬も喜びの声を上げてしまう。

「よし、次だ！」

意気揚々と次の標的へと狙いをつけて撃つ。

ところが、そこで彼の勢いは止まった。

次々に体を出している敵を見つけ撃つものの、上へ左へとまるで当たりはしない。

やっと当たったと思えば、着こんでいた分厚いアーマーに皮膚に針が当たるのを阻まれ、何事もなかったかのように攻撃が続く。

「・・・」

3マガジンほどの弾を費やした所で意気消沈した瞬は黙ったままPSG-1を消し去る。

その代わりにいつもの麻醉銃を作り出すと、ミサイルに隠れる敵目

がけて走りだした。
ミサイルとの距離はあっという間に縮まり、部隊が隠れるミサイルの目前にまで迫っていた時だった。

「きたぞ！やれ！」

グランの指示が飛ぶと、側に控えていた隊員は小型のスイッチを握りこむように押す。

すると、瞬の足元に隠された少量のC4（プラスチック爆弾）が爆発し、その周りを埋めていた大量のスモークグレネードから煙が辺りに立ち込める。
サーモグラフィが搭載されたスコープで瞬を捉えた隊員は、瞬がその場で足を止めているのを確認する。

「足が止まりました！」

「構えろ！」

攻撃する者とは別に今まで隠れていた者達が影から現れると、その手に持った銃の形をした装置を瞬へと向ける。

照準で瞬の胸元辺りを捉えると、引き金は引かずにその場でとどまった。

「よし、撃て！」

グランの指示に合わせて構えた全員が引き金を引くと、銃の様に弾は出ない。

ただ、装置からは起動音の様な低い音が聞こえ、先端の丸い窪みが振動し続ける。

一方、視界がなくなり、一旦は足を止めた瞬だが、再度部隊へと向

かって走り出そうかとしていた時だった。

「つぐ!？」

突然、何筋かの細く小さい凹みが煙の中に空いたかと思った途端、瞬の体の至る所から激痛が走る。

体の痛みが起こる個所では血管が今にも破裂しそうなほど浮かび上がり、実際に破裂しているか所は幾つもあった。

何が起こったのかなどまるで見当がつかない瞬だが、その痛みはちよつとした痛みで収まるほどの痛みではない。

当然、瞬の額には大量の脂汗が浮かび、その強烈な痛み瞬の顔も苦痛にゆがむ。

「な、なにが・・・っ!？」

呼吸すらままならず、まともに喋れない瞬。

その中でどうにか体を動かそうとするが体がうまく動きはせず、とつとつ耐えきれずに倒れる。

どうにか意識を保ったまま痛みに耐える瞬だが、どついつ訳か倒れた途端にその痛みが弱まったのに気づく。

何かしらの攻撃を受けたとまでは判断できるものの、その方法は皆目見当がつかない。

何しろ『イージスの盾』をすり抜けてきた攻撃だ。

一旦、引くべきだと体を起こそうとした時、上の部隊の方では緊迫した空気がグラン達の間を満たしていた。

「旅人が倒れました!体を起こしにかかっています!」

「いかん!全員、照準を合わせる!・・・撃て!」

全員が引き金を絞った途端、見えない攻撃が治癒効果が始まっている体を襲い、瞬の体へと見えない何らかの力が働く。

「ま、またっ!？」

それによつて体中を負傷させられていく中、瞬は咄嗟に目の前に鉄の城壁を作り出した。

少しでも攻撃を防げればと考えただけの手だった。

だが、それが功を奏したのか瞬の体を襲っていた見えない攻撃が急に途切れ、瞬の体を『旅人』の力が修復していく。

「防げた・・・? 一体、どうして？」

破れるものはないと言われている『イージスの盾』には防げず、ただの魔法の力などない鉄の壁には防げる攻撃。

まるでとんちのような話だ。

どんな魔法、どんな装置を使っているのかなど皆目見当がつかない瞬だが、最初に攻撃を受けた時の煙の動きを思い出す。

煙を押しつけて飛んでくる弾丸とは違い、まるで実態もなく空気が揺れる様に何かが向かってきた。

それは一体何なのか。

それが分かれば対策などいくらでも出来るが、今の所は目の前に『イージスの盾』とは別の盾を作り出す程度しか分からない。

さすがにまだ戦いの経験が他の『旅人』達に比べて劣る瞬には簡単に答えなど分からない。

とりあえず、煙の中を鉄の壁を押し進み、ミサイルの真下についた瞬。

上では足場から乗り出すように装置を構えた隊員達が現れるが、瞬は手を上に掲げてその手の平に直径4mはある巨大な鉄板を作り出す。

隊員達は引き金を引いたが、鉄板はそれを防いでくれているようだ。

「まさか、こんな所で祭イベントの巨大鉄板焼きに使った鉄板を出す事になるとは。でも、どうやら防いでくれているようですね」

前は巨大な鉄の壁、上は巨大な鉄板焼き用の鉄板に守られて安心する瞬。

上では、何度攻撃をしても全て防がれてしまうのにグランは苛立ち、指示を出そうにも簡単には出せない。

「まさか、奴は気付いたのか!？」

「わ、分かりません!ただ、これが気付かれたのであれば、もう・

・

「うるさい!分かっている!・・・総員、構えている!」

グランは手を下に向けると意識を集中させ、心の中で魔法の発動キ―を唱える。

すると、グランの手から黒い小さな球体が現れ、ピンポン球程度の大きさになるとグランの手から離れた。

落下する重力と手から撃ち出した勢いが重なった結果、中々のスピードで瞬へと向かい、瞬の掲げる鉄板へと触れる。

鉄板に球体が触れた途端、球体が一気に膨らみ、鉄板を侵食するよ―うに鉄板へと溶け込む。

小さいながらも広がりきった球体が消えていくと、鉄板にはまるで工作機械が正確に測定して切り取ったかのような綺麗な穴ができていた。

突然、支える部分が無くなった事に驚く瞬。

鉄板は当然の様に支えをなくし、瞬の手から転げ落ちるとグランは

その機を逃さずに指示を出す。

「撃て！」

一斉に構えた装置から見えない攻撃が放たれ、『イージスの盾』をすり抜けて瞬の体を次々と壊していく。

「ぐあっ！」

体の至る所が次々に悲鳴を上げる中、瞬は力を振り絞ってもう一度鉄板を作り出した。

傷ついた体でしっかり支える事は出来ず、体全体でもたれかかるように支え、どうにか攻撃は防げている。

またさっきの球体で鉄板を消されかねない状況だが、瞬の眼は死んではいなかった。

「見えた。あの装置がこの攻撃の元みたいですね」

体で鉄板を支えながら見えた装置を手元で作ってみる。

巨大な銃の様な形をしているが、先端部分は丸い窪みがついているだけの殺傷能力など全くない様に思える。

試しに銃を構えて床に向けて撃ってみるものの、動いているのは分かるが特に何も変わりはない。

この時、瞬には分かりもしないが、実際には床に向けて攻撃は行われていた。

とは言っても、実際に目で確認できるものではない。

微弱な程の振動、それこそ仮に人に向けられて撃っていたとしても、何も感じない程度の振動。

ある時、音が聞こえる『イージスの盾』はある程度の空気の振動までは通していると予測を立てた『W2』の科学者がいた。

実際に、何度もの戦闘の中で行われた実験により、それは確信に変わる。

それを元に作られたのが瞬の手にある『オルフェウスの豎』だった。これがただの1機だけなら何の問題もない。

ただし、数機、いや何十機と集まればどうなるのか。

『イージスの盾』をすり抜けた所で別の攻撃と集約し、更には相乗効果によって体を表面から破壊していく兵器となる。

瞬には到底想像もつかない様な武器だった。

瞬は解明するのを一旦諦め、ある程度治ってきた体で鉄板を支え、上へと飛び上がった。

「なっ!?!」

隊員達の顔が一瞬だけ驚きの色に染まるが、即座に対応すべく銃を構え、グランも魔法を放つ。

瞬はそれよりも早くミサイルの足場に飛び乗ると銃口を向ける隊員に俊敏に駆け寄り、腹へと一撃を叩きこむ。

悶絶しながら崩れ落ちていく隊員だが、その周りを集まった隊員達を取り囲み、銃口と『オルフェウスの豎』を向ける。

「この距離は僕の距離です」

呟くと同時に瞬は構え、次々と麻醉銃や体術によって隊員達の意識を刈り取っていく。

攻撃の方法すら分かりはしないが、とにかく銃口を向けられれば即座に回避し続けて別方面から攻撃を仕掛ける。

銃ならまだしも、俊敏に動く瞬へ『オルフェウスの豎』を同時に向けて撃つなどではしないのだが。

「どうやら大丈夫なようですね」

その場にいた全員を眠らせると瞬は次の足場へと飛び移り、また襲ってきた隊員達を次々と撃破していく。

その状況に歯軋りを立てながら一番上で見ていたグランはこれ以上は無理である事を悟り、1人、死ぬ覚悟を決めていた。

「死なば諸ともよ！」

ミサイルの弾頭部分に手を添えると、己の魔法を全てミサイルへと注ぎこんで行く。

今時点で持っている魔力全てを魔法へと変換し、ミサイルへと貯める。

その全てを吐き終えたとき、息も荒々しく座ったグランの目の前には『旅人』が麻酔銃を構えて立っていた。

「隊員達は全て眠らせました、僕の勝ちです。さあ、本部への道をおしえてもらいます」

「……ク……クハハハッ！ 貴様の勝ち？ ふん、貴様は勝つておらん」

「何を言っているんですか？」

「分かっておらん、この勝負は私の勝ちなのだよ！」

そう言うとグランは隠し持っていたスイッチを押し込む。

すると、全てのミサイルの内部で次々に爆発するタイマーの設定が入る。

「何をしたんですか!？」

「なあに、ただ、ここのミサイルを全て爆破するだけだ」

「貴方の部下を巻き添えにする気ですか！？それに、そんなことしても」

「貴様には通じない、か？」

「そうです！だから」

止めてくださいと告げようとした瞬は見た。
グランの顔が狂気的笑みに歪むその顔を。

「クククツ・・・ハハハハハツ！貴様は私の魔法『ヘブンズゲート』を見ただろう？私が作り上げた小さい球体が鉄の板を完全に消失させて穴を開けた」

「それがどうしたんですか！あれは鉄板を消しても『イージスの盾』を破れはしなかった！」

早く爆破を止めたいがためにいきり立つ瞬。

そんな瞬を前にしてもグランの妙に落ち着いた様な態度は変わりはしなかった。

「あれが触れた物を消すだけの魔法だと思っただら大間違いだ。あれは物ではなく、空間を削り取り、私も知らない何処かへ送り込む魔法だ。貴様、いや『イージスの盾』には確かに効かないかもしれないが、貴様の周りの空間を全て削り取るとどうなると思う？空間魔法には貴様も取り込まれたよなあ！？」

「まさか……」

「そう、そのまさかだよ！お前も何処かへと送り込まれてしまうのさ！世界の果て？宇宙の藻屑？はたまた、異界か？」

グランは勢いよく腕を振り上げて、後ろに幾つもそびえるミサイルを指す。

「そして、私の魔法を貯め込み、着弾後の爆破と同時に魔法を展開するミサイル『ミヨルニル』がここにある！これが爆発すれば、この部屋どころか辺り一帯が吹き飛ぶ！お前が逃げる事は不可能だ！」

「くっ！？早く爆破を止め」

グランの体をひっぱり起こし、手に持っていたスイッチを奪いあげる瞬。

だが、何度スイッチを押しても反応はなく、小さく表示されたカウントは止まらない。

「止め方を教えなさい！早く！」

「もう遅い……。ああ、勝者の情けで貴様にも教えてやるう。」

本部の居場所は……」

その時、瞬が持っていたスイッチのカウントが0になり、小さい電子音を上げた途端、後ろのミサイルから光が溢れた。

咄嗟に掴んでいたグランを『イージスの盾』の中に引き入れ、瞬達の四方八方を大量の大蛇が押し寄せるかのような炎が渦巻く。仮に瞬が『イージスの盾』を切ってしまったなら、一瞬にして二人

とも消し炭も残らないだろう。
作業用足場も当然ながら爆発した瞬間に吹き飛び、瞬と掴まれたグ
ランも下へと落ちていく。

「うおおおおおおっ!？」

グランが耳と目を塞ぎながら叫び声を上げる中、瞬は眩しい光に目を覆いながらも見た。
まるで爆発を食いつぶしていくかのように黒い得体の知れない何か
が広がっていくのを。

「あれが魔法かつ!」

2人へと迫る『ヘブンスゲート』。

瞬は2人を軽く覆い尽くす程、巨大な岩石を作り出すものの、炎は
一瞬で消し炭へと変えてしまい、崩れ落ちた所に黒い波が押し寄せ
る。

なすすべなく飲み込まれていく2人。

「くっ!駄目か!」

瞬は本日何度目か分からない死を覚悟し、視界は目を閉じたくなる
ほどの光から一転して暗闇へと包み込まれた。

第41話：アジア統括支部（7）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

何本か原作者になろうに送ってみたため、遅くなりました。

採用されればうれしいですが、かなり厳しいんでしょうね・・・

・A、)

それはそれとして、ようやくアジア統括支部編が終わりました。

さらっと終わらせる気だったんですが、気づいたらやたら長くorz

ついでに以前から書きためた小説も投稿します。

今回は展開にこけて失敗したので、今後はそうならないように頑張ろう・・・。

第42話：亡霊国へ（1）

地平線が見えるほど広大な土地には、吹き抜ける風を妨げる様な物がないほど平坦で何もありません。

その中に瞬は横たわり、意識がないのか動く様子はない。

そこに地面の土埃をすくい上げ、巻き込みながら吹き抜ける風が瞬へ直撃する。

呼吸を遮られて反射的に咳き込む瞬だが、そのおかげで意識を取り戻す。

まだ治まらない咳をしながら目をゆっくりと開き、何もない広大な土地に唖然とする。

「ここは・・・どこだ？」

咳いた所で答えてくれる者など何処にもおらず、瞬の咳きは風の中へと吸い込まれるように空しく消える。

体中から痛みを感じる瞬はとにかく今の位置を知ろうとGPSを作り出そうとする。

ところが、今までは何の失敗もなく作り出せたはずなのに何も作り出せはしない。

何度やってもそれは変わらず、瞬はそこである異変に気付いた。

「・・・怪我の痛みも消えない!？」

何時もであれば『旅人』の自然治癒で完全に体の怪我や傷は治り、痛みも既に治まってもおかしくはない。

それがまるで普通の人間の時と同じく治まらず、痛々しい生傷や擦り傷などが体中に残ったままだ。

「まさか」

不意に思いついた考えを確かめようとその場から立ち上がり、全力で上へと飛んでみるもののせいぜい数十cm程度飛んだだけで終わる。

瞬の年齢からすればただの一般人レベルだ。

更に置いてあった小石を握ってみるが潰れはせず、上へと放り投げて『イージスの盾』を試すものの、小石は見事に瞬の頭へと落ちてきた。

そこまでして、ようやく自身がどういう状態に陥ったのか結論が出た。

「間違いない、『旅人』の力が、姫にもらった力が消えている！
？そんな・・・」

唯一、ヴァネッサと自分とを結び付けていた力が無くなり、繋がりを失った様な錯覚に陥る瞬。

よほどのショックを受けたのか、四つん這いになって頭を力なく落とす。

彼の頭の中ではどうしてこうなったのか、此処は何処なのかと様々な疑問が渦巻くが、どれも自問自答するだけでは答えなど出はしない。

まともに考えられる部分が弾きだした答えは、人を探すと言う事だけだった。

それに従い、瞬は体を起して辺りを見回る。

微かに地平線の端に木の様なものが立っているのを見つけると、他に目印らしいものもないのでそちらへと向けて歩き出した。

『旅人』になっっている間は忘れていた、喉の渇き、空腹感、そして体中の打撲から来る痛み。

歩くだけでも息は自然と上がり、痛みとは別の息切れによる苦しみ

も味わう。

更にそれに追い討ちをかけるかのように空から照りつける太陽。なぜこうなったのか？

その明確な答えが数ある疑問を抱える瞬にとって一番欲しい答えだった。

瞬が倒れていた所から4 km程離れていた木はどうやら森の一角だったらしく、瞬が歩いて寄っていくたびにその本数は増えていく。

2時間ほどかけてようやくその森へとたどり着いた瞬。

生い茂る草の上に倒れる様に横になり、荒く息をしながら仰向けに大の字になる。

「はあっはあっ、み・・・水・・・」

彼が今一番欲するのは人ではなく、水へと変貌していた。

息が徐々に収まってきた瞬は疲れた体を起こし、改めて森を見てみると大分深い森らしく、奥の方には木々しか見えない。

ちようどその場に落ちていた丈夫な枝を杖代わりにし、水を求めて森の奥深くへと入っていく。

鳥の鳴き声や風に揺れて鳴る木々の揺らめきなど、散歩するなら落ち着く様な場所だが、生憎、今の瞬にはそんな余裕はない。

ひたすらに水音がしないか耳を澄ませ、とにかく歩く。

すると、それが功を奏したのか、不意に彼の耳に小さく川が流れる音が届いた。

それに疲れていながらも素早く反応し、その音の方へととにかく急ぐ。

水源が近いせいか、木や草は更にその濃さを増しており、川に近づこうとする程、まるで行く手を阻もうとしているように瞬を邪魔してくる。

それに負けじと瞬は草をかき分け、木の間をくぐり抜け、ようやく視界が開けた所へと飛び出る。

突然、目に飛び込んできた光に目が眩みながらも、やっと水を飲むと喜ぶ瞬。

「やっと、水が飲め・・・」

目を見開いた彼の言葉はそこで途切れた。

そこは川ではなく小さな池であり、その周りを濃い木々が覆っている。

だが、瞬が言葉を止めたのは池が太陽光を反射して綺麗に輝いているからではなく、ましてや木々が池を守る様に生い茂っている神秘的な光景だからでもない。

その池に1人の女性が入っていたからだ。

それも一糸纏わぬ裸で。

慌てて目を閉じようとした瞬だったが、その女性と目が合った途端、衝撃が走ったかのように心臓が大きく脈打ち、目を放す事が出来ないその顔に思わず声が漏れた。

「姫・・・」

池の中に立っていたのは、瞬にとっては忘れる事など絶対できない姫、ヴァネッサ・イーグランドその人だった。

『旅人』の力を受け継がせた時に消えたはずの彼女が、瞬の目の前に立っている。

瞬の少なからず残っていた理性は彼女がなぜそこにいるのかと疑問を持つが、体中が振るえ、自然と涙が零れ落ちるほど彼女がそこにいるという事に心が激しく動かされた瞬には些細な事に分類されていた。

「姫！会いたかった！」

感極まっつてヴァネッサへと歩み寄ろうとする瞬。

池の中に佇むヴァネッサもそれを受けて、一言もしゃべらずに微笑みを浮かべながら瞬が来るのを待った。

瞬へと向かってまるで早く来てほしい様に左手を差し出し、瞬も池の中へと足を踏み入れる。

その時だった。

目の前にいたヴァネッサが左手を引いて池の中から大剣を取り出すと、瞬目がけて横薙ぎに払った。

咄嗟に気付いた瞬は慌てて体を後ろへと引いてかわす。

「あ、危ないっ！？ 姫、一体何を！？」

何で攻撃されたのか全く分からない瞬に対し、苦い表情を浮かべたヴァネッサは池から飛び出て追撃を仕掛ける。

『私の裸を見るなど賊如きには許すまじ行為だ！ さっさと我が剣の錆となれ！』

鋭い突きが瞬目がけて放たれる。

ちょうど杖代わりになっていた木の枝で瞬は剣を叩きつけた。

武器としてはあっさり負けてしまうが、今回は剣の横っ腹を叩きつけた力で押し切り、どうにか突きをしのぐ。

弾いた勢いで地面へと先端が突き刺さった剣を踏みつけ、武器を抑えた事で話し合いに持ち込みたかった瞬へヴァネッサがしなやかにしなる足から上段蹴りを放つ。

それを受けて上体を後ろへと反らして回避する瞬。

『旅人』の力を失っても今まで体験した戦闘からか、ヴァネッサの動きをしっかりと目は捉え、攻撃の軌道予測も簡単だった。

ただし、回避しながら反撃に転じたのは『旅人』の筋力があってこそだったため、元の間人に戻った今となっては攻撃をかわすだけ

で精一杯だった。

「や、やめてくだ、おわっ！」

『くっ！ちよこまかと！さっさと私に殺される！』

「何言ってるか良く分からないけど、今、殺すって言ってませんでしたか!？」

慌てふためく瞬へとヴァネッサの剣が襲いかかる。

後ろへと下がった瞬だが、その足元には木の根が出ており、下がったと同時に足を引っ掛けてしまうとバランスを崩す。

『もらった!』

倒れそうになっている瞬へと飛びかかるヴァネッサ。

かわそうにも倒れている最中では出来る事など限られている。

殺される事を覚悟した瞬だったが、不意に彼女の背後にある池、その反対側の茂みに光るものがあるのに気づく。

その光るものが構えられた弓矢の矢じりだと気づくのはすぐだった。僕を狙っている? いや、まさか、姫を?

可能性としてある事を考え、その考え方に至った途端、傷ついた瞬間の体に力が湧き出てきた。

持っていた杖を地面へ突き立て体を支えると、跳ね返る様に体を起こす。

迫りくるヴァネッサの剣を体を捻ってかわして被害を腕に掠らせる程度にとどめた。

まさかかわすとは思ってもいなかったヴァネッサの顔が驚愕に染まるうちに瞬は背後へと回り、ヴァネッサを押し倒すように倒れる。

すると、瞬の背中に肉を抉られるような痛みが走り、苦痛に顔を歪

める。

「ぐっ！」

『放せ！』

突き飛ばされた瞬は地面へと横たわり、そこにヴァネッサは剣を突き立てようとするが、呻くだけで動かない瞬に手が止まった。

『どうした、抵抗しないのか？ん！これは・・・』

横たわる瞬の背中に矢が刺さっているのに気づいたヴァネッサ。それと同時に耳が風切り音を捉え、音の方に素早く反応すると飛んできていた矢を剣で弾き飛ばした。

『出てこい！』

周囲の様子を窺い、対岸の森の中にここから去ろうとしている複数の人影があるのに気づくヴァネッサ。

顔まで見えはしなかったものの、その服装はヴァネッサに見覚えがあった。

『隣国の連中か？となると、この矢は私を狙っていたのか・・・
ふむ』

瞬にではなく、地面へと剣を突き立てたヴァネッサ。

痛みに耐える瞬を見下ろしながらしゃがみ、汗のにじむ瞬の額へとそっと手を置く。

『どうやら、お前に守られたらしいな。フフッ、それなら私はお

前を斬れはしない』

その時、痛みで朦朧とする意識の中、瞬は見た。今までの殺意を抱いた顔から一転して姫と初めて出会った時、時折見せていた安らかな顔を浮かべる彼女を。

やっぱり、姫だ。

疑問が解決した様に安心した瞬は意識を手放し、暗闇の中へと沈んでいった。

小さい灯りを灯した家々が並び、その周りを石で造られた強固な壁が守り、外と中とを隔離している街。

その家々の中心には深い闇が辺りを包む中、浮き出る様にそびえ建つ城がある。

その城の中のとある一室、幾つかの家具があるだけの小さい部屋のベッドに瞬は寝かされていた。

体には至る所に包帯が巻かれ、ベッドの上で苦しげに小さく唸りながら顔を赤らめている。

『今夜は話などできそうにないな』

ベッドの傍らで椅子に腰かけたヴァネッサは、ランプの薄暗い光の中で本を読みながら瞬の様子を見ていた。

そこにドアがノックされ、ヴァネッサは中に入るよう声をかける。

入ってきたのはメイド服を着たヴァネッサよりも年上の女性だった。その手には水差しといくつかのパンが載ったトレイを持ち、心配そうな面持ちでヴァネッサを見る。

『失礼します。姫様、大丈夫ですか？』

『何も無い。治癒使いが帰ってからもずっとこのままだ』

『そうですか・・・、やはり毒が』

『ああ、怪我自体はほぼ治りかけているそうだが、矢に塗られていた毒だけは毒消しに頼るしかないからな。こればかりは回復するのを待つしかないだろう』

『・・・早く意識を取り戻してほしいものですね』

『全くだ。このまま死なれでもしたら私が困る。命の恩人には礼儀を尽くさなければな』

2人の視線が横たわる瞬間に集中するが、そんな事など今の瞬間にはまるで分からない事だ。

悪夢にうなされているかのように呻く瞬間にメイドはどことなく恐怖を覚え、ヴァネッサに一礼してその場を去っていった。

ヴァネッサは手渡されたトレイを机の上にそっと置き、痛みに呻く瞬間の傍へ立つと体をかがめて顔を近づける。

『生き貫いてみる。名も知らぬ旅人よ』

瞬間の耳元で小さく呟いた彼女は椅子に座ると再び本を読もうとした時だった。

「うつ・・・、ひ、め・・・？」

まるでヴァネッサの言葉が瞬を呼び起こしたようにうつすらと目を

開く瞬。

開いた本をすぐさま閉じたヴァネッサは瞬の傍へと駆け寄った。

『起きたか！？』

ベッドの上の瞬は確かに意識を取り戻したようだが、大分衰弱していた。

目は開いているが、ヴァネッサを捉えていないような虚ろな目をし、顔色はあまり良くない。

そんな瞬へ、ヴァネッサは水差しからコップに水を移すと、瞬の体を起して口に水を含ませた。

飲ませてくれようとしているのに気づいた瞬もコップから流れ込む水を弱々しくも喉へと流し込み、水が体中へと染み込んでいくような感覚があった。

コップの水を何度か空にした所で、瞬は飲むのを止め、ヴァネッサもコップを口から離れた。

水を取った事で少しは体に力が戻ったのか、瞬はしっかりとした視線でヴァネッサと向き合っていた。

「ありがとうございます、姫」

『む？今のはお礼か？最初に合った時から『姫』と私を呼んでいたな。まあいい、今のお前は体を治す事に専念しろ。話はまた今度聞く。と言っても、通じてないだろうな』

困った様に悩むヴァネッサの考えた通り、瞬には今の言葉がよく理解できていないのか困惑していた。

と言っても、ヴァネッサの言葉は瞬にとって学校で聞き覚えのあった英語の様に聞こえ、彼女が喋る中にも意味が通じる部分と通じない部分があった。

断片的ながら意味が分かった瞬は少しばかりの間を開けて、英語であると見切りをつけた。

『助けていただいてありがとうございます』

『ッ！！喋れるのか！？』

突然、たどたどしいながらも同じ言葉を話し出した瞬に、ヴァネッサは驚きを隠せない。

『少しだけなら』

『そうか』

苦しい状態でも笑顔を浮かべて返答する瞬。

言葉が通じると分かった事で安心したヴァネッサはベッドから離れ、姿勢を正して胸を張る。

『私はヴァネッサ・イーグランド。お前の名は？』

命の恩人に対する期待の籠った彼女の視線に対し、瞬は戸惑い、どういっていいのか口籠る。

その様子をヴァネッサは言えないような境遇なのかと思い込み、向ける視線も若干厳しくなっていく。空気が重くなっていく中で瞬はゆっくりと口を開いた。

『僕を・・・覚えてないんですか？』

『何の事だ？お前とは初対面だが？』

「そんな・・・、僕に『旅人』の力を渡して『W2』を倒すように言って消えたんじゃない、そうだ、そもそも姫は消えたはず・・・。一体どうして？」

ヴァネッサの言葉にシヨックを受けたかと思えば、独り言をつぶやき、頭を抱える変化を見せる瞬。

何を言っているのかも分からない彼女には奇怪な行動にしか見えな
い。

『何をブツブツと言っている？私はお前を知らないが、お前は私を知っているのか？』

『えっと、そう言われると良く知らないです』

『なら、名乗れ。私が名乗ったんだ、お前も名乗るのが筋だ。そこから互いを知ればいい』

『僕は瞬、雨堂 瞬と言います』

『瞬、か。よし、瞬。お前への質問はまた明日行こう。今はとにかく休んで体を治せ。傷は治ってもまだ毒で無くなった体力は戻っていないだろう』

『ど、毒？治っている？』

体に巻かれた包帯から確かに痛みは感じないのに気付いた瞬。
右腕の包帯を巻くしてみると、確かに傷ついていたはずの部分が何日も経過した時の様に塞がり、跡だけがそこには残っていた。
一体どうやって？

その質問をぶつけようとした矢先に、ヴァネッサは立ちあがるとド

アへと足を進める。
慌てて追いかけようとした瞬だが、体がうまく動かずに体を起こす
ことすらできない。

「ま、待つて」

言葉に振りかえったヴァネッサは引き留めようとしているのに気づく。
必死で動こうとしている瞬に呆れたように息をつく、足を止めて瞬へと振り向く。

『体力の回復を待て、話はそれからだ』

そう言うので厳しい顔を緩めて少し砕けた笑顔を見せる。

「あ……」

その笑顔に瞬の心臓はまた大きく脈打ち、言っている意味を理解している訳ではないが自然と動きも止まった。

ヴァネッサは満足したようにドアから出ていき、後に残されたのは顔を赤くして固まったままの瞬だけだった。

彼女が去った後も言葉も出さず、ただ出ていったドアを見ているだけ。やっぱり姫だよな？

ようやく視線をドアから外したのは30秒ほどしてからの事だった。ランプが薄暗く照らす天井を見ながら今の状況がどういふ事なのかと考え出す。

とは言っても彼にあつた情報と言えば、『旅人』の力を失つた事と、何処かに飛ばされた事、そして自分を覚えていない姫らしき人物に出会った事のみ。

しばらく考えてはみるものの、いくらなんでも情報が少なすぎて判

断も何もできはしなかった。

ただ、そんな状況でももう一度姫に会えたのかもしれないと考えるだけで、絶望など彼の中には浮かびもしない。

「休ませてもらおう」

とりあえず、考えても分からない以上、成り行きに任せようとヴァネッサの言うとおり体を休める事に瞬は決める。

目を瞑っていると姫と出会った時の事が浮かび、今までの出来事が鮮明に蘇っていく。

本当の姫なら今までの事を話してみよう、何か思い出してくれるかもしれない。

瞬は色々と考えているだけで寝付けそうな気はしなかったが、疲れもあつて思いのほかアツサリと深い眠りへついた。

『寝たのか？』

『ええ、完全に寝たようです』

瞬が寝る様子を壁に空いた小さな隙間から隣室から窺っている者達
がいた。

覗いている者は胸や腹を覆うだけの軽鎧を身に付けた屈強そうな若者で、もう1人は装飾の施された豪華な鎧を着込んだ30代の男だがその眼光は鋭く、生やした髭と強面も相まってかなり近寄り難い雰囲気を放っている。

仮に一般人が街中で会ったならば、目を合わせるのを避け、邪魔しない様に道をおのずと開けてしまつたろう。

そのせいか、若者も瞬の状態を報告するたびに声に緊張が混じり、若干高い声になっていた。

静かに部下の報告を聞いていた男は、静かに目を閉じると右手で顎

の髭をさすっていた。

これが彼の普段考える癖である事を若者も知っており、すぐに命令が来る事が分かっていたため、自然と体が身構え強張ってしまう。

『どの者かは分からんが、姫様が明日にでも話して分かるだろう。私もそこに同席すればいいが、隣国の潜入者という可能性もある。他の兵士を呼んでずっと見張っておけ。何かおかしな行為をし出したら教える』

『で、ですが、これからだとお休みになられるのでは？』

『構わん。もし、奴が潜入者であるならイーグランド国の情報を持ちかえられる。そうなれば、その情報を元に戦争も起きかねないのだ。いいか？これは国の一大事に相当する事だと思え！』

『は、はい！』

『兵士の手配はこちらで行っておく。お前はそのままここで見張っている。何かあればすぐに取り押さえるんだ』

『了解しました！』

そう言うと男は出ていこうとしたが、何かを思い出したように足を止めた。

出ていかない上司に困惑する部下に向き直った男は思い出した事を告げる。

『ただし、一つだけ言っておく』

『なんででしょうか？』

『奴はもしかすると強いかもしれん。聞いていた限りでは姫様の剣を軽々と交わし続けたそうだ』

男の言葉を聞いた途端、部下は驚愕の表情へと代わり、口を魚の様に何度も開いたり、閉じたりを繰り返す。

信じられないといった様子の部下は出ようとしない言葉を捻りだすように聞いた。

『あ、あ、あの、剣の申し子とまで言われている、姫様の剣を、ですか!?!』

『そうだ、にわかには信じがたいがな。傷ついた体と木の枝1本で何度もかわされたそうだ』

『木の枝1本で、剣をかわし続けた、と!?!』

叫びの様な質問に対し、男は無言で頷いた。

普段、冗談など言わないはずの男、ましてやこの場で言うからには間違いなく本当である事が部下には分かっていた。

たった1つの情報でお使い程度の任務だったはずが、一気に要人警護クラスの任務へと化け、自然と部下の喉が飲み込んだ唾で鳴る。

『いいな、寝ているとは言っても油断はするな。しっかり見張っておけ』

『りよ、了解しました・・・』

震えながらも了解した部下を残し、男はその部屋から出ていった。後に残された残された若者は気が抜けたように床へ座りこむ。

『くそ、こんな寝ている奴が何か出来るわけないと思いたいが、そんな事を聞いたら・・・』

一息ついた若者だが慌てて立ちあがり、すぐさま隙間から瞬の部屋を覗く。

こうして、彼の夜が明けるまでの監視任務が始まり、後から来た兵士達と極限の緊張を持って覗き続ける事になるが、その間、瞬は一切起きる事もなく、ただただ見ているだけのお使い程度な任務で終わる事になるのは言うまでもない。

第42話：亡霊国へ（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

新展開というか以前から考えていた展開であり、全体構想のようやく中盤にさしかかったといった感じですが。まだまだ終わりは見えません・・・（A）

第43話：亡霊国へ（2）

晴れ渡る空の日差しが部屋の窓から室内へと差し込み、日光が瞬の顔へと差し掛かった。

寝ている瞬は無意識に腕を上げて日光を遮ろうとするものの、顔にまで腕は持ちあがろうとしない。

自由に動くだけの体力もまだ回復しきっていない体では腕すらまともにも動かさず、無理に動かさそうとした痛みと差し込む日光で瞬は目を覚ました。

「いてててっ、・・・朝か」

寝ぼけた目で体を動かさずともかろうじて見える窓の外を眺める瞬。すると、今にも閉じそうなほど細められていた目が見開き、食い入るように窓の外の景色を見た。

窓の外には空に輝く太陽に照らされた城下町が広がり、町が終わると巨大な壁を挟んで広大な草原が何処までも続いている。

見ているだけで気持ち良くなるような景色に瞬の意識もすぐさま覚醒する。

「良い景色だ」

このまま景色を眺めているだけでも長い時間が立ってしまいそうだったが、不意にドアがノックされると瞬の視線はドアに注がれた。

『起きていらっしやいますか？失礼します』

慣れない英語に瞬は返事もままならず、そのうち勝手にドアは開いた。

そこに立っていたのは洗面器とタオルを持ったヴァネッサが昨晚、部屋にいた時に訪れたメイドだった。

瞬は意識を失っていたので知らないが、城に運び込まれてから介抱していたのは彼女であり、ヴァネッサは一時的に代わっていただけであった。

メイドなど見た事もない瞬はどうしていいか分からず言葉に困っていると、察したメイドは笑顔を浮かべた。

『おはようございます。ようやく目を覚まされたようですね。怪我が治って何よりです』

『あ、ありがとうございます』

『今から体を拭かせていただきます。あまり動かないでくださいね』

何をされるのかを大体察した瞬にメイドはにこやかな笑顔を崩すことなく、水に浸したタオルを手にとって体を拭き始める。くすぐったい様な感覚を覚える瞬だが、体を拭かれるのは気持ち良いのか顔も緩む。

『貴方は何処から来たんですか？』

『日本です』

少なくとも今いるのが外国であると考えた瞬は国名を答える。それなら分かってくれるかと思っていたが、そんな瞬の考えとは裏腹にメイドは面喰らった様な顔をしていた。

『日本……ですか？聞いたことありませんが、国ですか？』

『ええ、そうです。小さい島国ですけど知りませんか。それなら、此処は何処ですか?』

『イーグランド王国の首都アリウスです』

今度は逆に瞬が面食らった顔を浮かべる。

イーグランドなんて聞いた事がないな。

自分の勉強不足だと思った瞬だが、更に突っ込んだ質問を試してみる。

『この国は世界のどの辺りに?』

『ええと、よく分かりません。その、世界地図など見た事ないものですから』

『はあ、そうですか』

若いとは言っても20代なのは間違いない教養のありそうな彼女が、世界地図すら見た事はないという。

瞬からすればそういつた境遇で育ったのかとも考えていたが、逆に彼女からすれば何が不思議なのかと分からない。

色々とズレた感じがあるのをお互いを感じ取る二人。

そのせいで会話をしようにも何を言ったらいいかも分からず、ただ彼女は黙々と瞬の体を拭き続けた。

やがて全ての部分を拭き終え、メイドが片づけをしていると入口のドアがノックされた。

『はい、開いています』

『邪魔をする』

メイドの返答に中に入ってきたのは、昨晚に瞬を隣の部屋から監視するよう命じた装飾の派手な鎧を着た男とその部下達だった。その連中を見た途端、メイドは驚き、すぐに連中の前へと出る。

『エドガー様！どうされたのですか？此処は傷ついた旅人の部屋ですよ？』

『ほう、彼が姫様を救ったと言う旅人か。見た所、ここらの生まれではなさそうだが、一体どこから来たのだ？』

『日本と言う国だそうです。それよりもなぜここに？』

『いや、なに、姫様と引き分けるだけの技量を持った旅人とやらを一目見ておきたくてな』

メイドに向けて穏やかそうな笑顔を浮かべるが、メイドは表情を崩しはしない。

『彼は私が介抱している最中です。来られるのでしたらまた後で』

『おい！たかがメイドのくせにエドガー様に口出しするな！』

エドガーと呼ばれる男の部下がメイドに掴みかかるうと怒りの剣幕で前に出てくる。

それにたじろいで思わず身構えたメイドだが、部下とメイドとの間に差し出されたエドガーの腕で二人の動きは止まった。

『やめないか。失礼した、彼がまだ休んでいるのであればまた出直すでしょう。ほら、いくぞ』

そう言うと部下達は引き上げていき、最後にエドガーも部屋から出ていく。

部屋を出る最後の一步という所でエドガーはゆっくり振り向き、何を言っていたのか理解できていない瞬と目を合わせる。

二人の目が合った途端、瞬の体中を蛇が這う様な気味の悪い感覚が襲い、咄嗟に彼は殺気を弾いた時と同様に強く気を持ってエドガーへと強い意志をぶつける様に見返す。

すると、今度はエドガーの体がまるで瞬に気圧される様に揺れ、瞬の体の心地悪い感覚は消えてしまった。

1歩だけ後ずさったエドガーが結果として部屋の外へと出ると、メイドがさかさずドアを閉めて二人の視線は強制的に合わなくされてしまった。

ドアの前で立ったままのエドガーに部下達はどうしたのかと不思議がっていたが、不意に小さい声で彼が笑っていたのに気づいた。

『エドガー様？どうされたのですか？』

『クククツ！私に気圧されるどころか反撃するとは、やるものだな』

『あ、あの？』

『お前達、怪我が治ったら奴に稽古でもつけてもらえ、いいな？』

彼の突然の命令に部下達は困惑し、代表して彼に一番長く使えている筋肉質な若者が口を開く。

彼は昨晩にエドガーから隣の部屋で瞬を監視するよう命じられた者でもある。

『稽古はいいのですが、奴はそんなに強いのですか？』

『おそらくな。お前達の中に勝てる者はいないかもしれん。いや、ひよっとすると姫様どころか私をも……』

『エ、エドガー様をですか！？』

驚きの声を上げる部下達。

大声を上げた事で近くに立っていた兵士達の視線がエドガー達の集団へと注がれる。

『そこまで声を大きくするな、馬鹿者。あくまで可能性だ』

『で、ですが、剣帝とまで呼ばれるエドガー様を超えるなど、あんな男にそこまでの力があるとは……』

『それを確かめるためにお前達が稽古と称して実力を測ってくればいい。なあに、ただの勘違いなら好きだけ叩きのめせばいい。どうせ言い訳もまともに出来ぬ、ただの旅人だ』

軽くおどけた様に言つてのけるエドガーに部下達は賛同し、先を行くエドガーに続いてその場を後にした。

ドア越しに様子を窺っていたメイドはいなくなったのを確認すると、安堵の息を漏らし、瞬に向き直る。

何が何やら分かっていない瞬にはいきなりエドガーから殺気に似た攻撃を受けたという事しか分からず、メイドの安心している様子の意味すらも分かりはしない。

『今のは誰ですか？』

『彼はエドガー・ラッツインエルト様、この国の兵や武器を取り仕切つて国民を守るイーグランド軍の長です』

『・・・何となくわかりましたけど、そんな人がなぜ僕の所に？』

軽い気持ちで聞いてみた瞬だが、メイドは口を閉ざして何かを考え始めた。

彼女の中では色々と思う所があるようだが、彼が訪れた真意が一体何なのかはただのメイドである彼女には分かりはしない。

また沈黙の時間が始まるうとしていた時、再びドアがノックされるとゆつくりドアが開いた。

そこにいたのはサラサラとした金髪を吹き抜ける風になびかせる、美男子としか表現できないほど顔が整った男だった。

身長もそれなりにある上に中肉中背、どこをとつても異性にもてはやされる事間違いないような男だ。

そんな彼が軽く微笑みを浮かべながら立ち、考え事をしていたメイドは顔を赤く染めながら慌てて邪魔にならぬよう部屋の隅に立つ。

男はゆつくりと部屋の中に入り、その後続く様にヴァネッサも入ってきた。

咄嗟にさっきのエドガーと同様に何かを仕掛けてくるのかと身を強張らせる瞬だが、そんな事など気にせず男は瞬に向かつてかがむ。

『君が私の妹を救つてくれた旅人だね？』

『救つた？』

妹を救つたと言われてもピンとこない瞬の代わりに、男の後ろに控える様に立つヴァネッサが答えた。

『左様でございます、お兄様。名は瞬』

『ふむ、そうか。瞬、私はこの国の王子、オーウェン・イーグラ
ンド。妹を救ってくれたことを感謝する』

突然、頭を下げる行為にヴァネッサとメイドは驚いた。
なんせ自国の王子が何処から来たかもわからない男に頭を下げたの
だ。

謝る時に頭を下げる習慣などこの国にはありはしないものの、知識
として瞬を除いた全員が東洋の感謝や謝罪を表す行為である事は知
っていた。

『や、止めてください！お兄様！』

『そうです、彼はただの旅人なんですよ！？』

『どうしてそう慌てる？大事な家族を救ってくれた者に感謝する
ぐらい誰でもする事ではないのか？』

『だからといって、次期国王の貴方がそんな簡単に』

『気にするな。あくまで将来国王になる身かもしれんが、今は国
王でもなんでもない。一個人としての礼だ』

2人から反論が途絶え、改めて姿勢を正して瞬へと頭を下げるオー
ウェン。

会話が断片的にしか訳せない瞬には内容の事など良く分かる訳もな
いが、少なくとも目の前に立つ美男子が頭を下げる事を後ろに控え
ていたメイドとヴァネッサは、快く思っていないのである。事は2
人の曇った表情を見ればすぐに分かった。

止めてもらいたい瞬だがどう言えば伝わるのかが分からず、その間

に頭を上げたオーウェンと目が会った。

『しつかり体を休めてくれ。その後で君をもてなさせてもらおう』

『ありがとうございます』

『彼の体調管理をよろしく頼むよ』

『は、はい！』

優しい笑顔で言われた命令にメイドはまるで棒が背中に入っているように直立不動で、頬を赤くしながら返事をした。

またお兄様ったら・・・。

その様子を後ろで見ていたヴァネッサは、どこか面白くないと言った様に目を背けて先に外へと出る。

オーウェンもそれに続いて外へと出ていき、後に残されたのはまだ頬を染めながらニヤつくメイドと事情の飲み込めない瞬だけだった。

「英語、もつと勉強しとくんだったな・・・」

『どうかされました？』

『いえ、なんでもありません』

『？』

否定しつつも憂鬱そうな顔の瞬にメイドは疑問を浮かべるが、特に聞くことなくメイドは食事の用意のためにその場を後にした。

1人残された瞬は昨日よりはスッキリした頭で自分の置かれた状況

を整理にかかった。

分かっているのは瞬が今いるのはイーグランド王国と呼ばれる所で、
どういう訳か瞬の事を全く覚えていない消えたはずのヴァネッサが
おり、更に彼女は次期国王であるオーウェンを兄に持っている。

本当の姫だったんだな、道理で。

最初に合った時の印象からヴァネッサの事を姫と呼んでいた瞬だが、
まさか本当にそうであるのかと軽く笑う。

とは言っても彼女が瞬に『旅人』の力を渡した姫であるかは定か
ではない。

それに関してはもっと調べていかないと結論も出せないと一旦考え
に区切りをつけ、改めて部屋の中を見回した。

石のブロックが規則正しく並べられた壁で周囲が囲まれ、部屋の中
には全て木製のベッドにテーブルとイスが置いてあるだけ。

他には何も無く、立ちあがれすらない瞬は次に窓の外に目を向け
た。

さっきも見た通りの気持ち言い景色が広がるが、瞬は下の町に注目
した。

人々が門まで伸びる道を行きかっているが、服装は皆、古めかしい
服を着ていた。

例えるなら、学芸会で中世の演劇を行う際に着る様な麻で造られた
服だ。

彼を介抱してくれたメイドも訪ねてきた人々もおそらく服としての
ランクは違うだろうが、上質な古い服といった印象を受けた瞬。

更に自動車が走っている事はなく、その代わりに馬車や荷車が石畳
の道の上を走っている。

違う世界に迷い込んだとしか思えない瞬は軽い頭痛を覚えた。

「一体、僕は何処に来たんだ？」

『旅人』の力を失っている今となってはGPS端末で場所を調べる

事も出来はしない。

体力もまだ回復せずまともに動けない体も、思い通りの物を作り出せない魔法もないのがとてももどかしく感じる瞬。

今はただ、外の景色を眺めながら出てくる食事を待つしか出来る事はなかった。

深く生い茂る木々によつて緑一色の森の中に、腕の長さ程の剣と円形の盾を携えた男がいた。

いや、男は1人ではない。

同じような装備をした男達が2〜3m程度の間隔で横一列に展開し、その兵士達は優に50人はいる。

全員が足並みをそろえて先へと進むが、その顔に浮かぶのは恐怖や不安といった感情ばかりだった。

『油断するな！奴はこの先にいる！必ず仕留めるぞ！』

『『おおおっ！』』

髭を蓄えた熟練の兵士が恐怖を紛らわすように皆に、そして自分に対して激励を入れる。

兵士達はそれにならい、叫ぶ事で気持ちを奮い立たせ、その脳裏から恐怖を振り払った。

おかげで兵士達の士気は高まり、あとひと押しと言う所でもう一度、熟練の兵士が叫ぶ。

『奴を仕留め、必ず我らの手に、たび、ぐがっ！？』

言葉を遮る悲鳴を上げて突如倒れた熟練の兵士。その胸には身に付けた鎧を貫通する矢が突き刺さり、心臓を貫かれた彼は傷口から湧水のように血が流れる中、既に息絶えていた。異変に気付いた左右の兵士達は突き刺さった矢を見て、それが奴の仕業である事を確信した。

『て、敵襲！！ぎゃっ！』

『何処からだ！？何処から、ぎゃあああっ！』

『くそ！固まれ！盾で円陣を作れ！』

青ざめた顔で残った兵士達は仲間が殺されていく中で集まり、全方位に向けて盾を構えてしゃがんだ。途端に矢が飛んでくるのが止まり、騒がしかった森が一転して一時の静けさを取り戻す。

『だ、誰か奴を見たか！？』

『見てねえ！矢が飛んできた方向かと思えば、逆の方からも飛んできやがった！』

『奴には仲間がいるのか？』

『そんなはずはない。奴はずっと単独でしか行動していないはずだ！』

『その通り、俺はいつでも1人だ』

『！！？』

突如上から聞こえた声に全員が上を向いた所へ、何かが円陣の中心へと落ちてきた。

いきなりの事に円陣が乱れてしまう中、中心に立った黒い衣服の男は両手に携えた短剣を振りまわし、対応の遅れた兵士達を斬りつける。

的確に急所を切り裂く短剣は次々に兵士達を倒し、その勢いは止まりそうにもない。

かろうじて剣で防いだ者は一旦後ろへと下がって距離をとると、仕切り直すように剣を正眼に構えた。

『か、困め！奴を囲んで一斉に斬れ！』

兵士の言葉に同じように攻撃を防いだ者達も乗り、手を止めて動くとしなない男へと一斉に斬りかかる。

四方八方から襲いかかる剣撃に、最早、男の逃げ場はない。

剣の嵐が男の身を切り刻んだかと思われた瞬間だった。

男の体を切り裂くはずの剣が持ち主の意思を無視して途中でその軌道を変え、あらぬ方向へと流されると地面や木へと突き刺さる。

『今のは！？』

『くそっ！……はっ！？』

顔にかかる影に気づいて顔を上げた兵士の言葉はそこで終わった。

剣に振り回されてバランスを崩した兵士達へと次々に男の短剣が襲いかかり、兵士達はあっという間に倒れていく。

一方的な攻防で気がつけば残っているのはたったの5人だった。

1人は男の攻撃を防ぎ続けているものの、攻める事も出来ずに精神も追い詰められているような状態。

だが、その目には諦める様な意思は微塵も感じられない。

それに対して残りの4人は男へと一見しただけで分かるほど恐怖しており、足は地震が来ているかのように震えていた。

その中の1人が何か思いつき、1人で立ち向かう男へと言う。

『お、おい！俺は援軍を呼んでくる！』

『俺もだ！』

『俺も！』

『待て！逃げるな！』

援軍を口実に逃げだした兵士に続き、残りの3人も立ち向かう兵士の制止を聞かず、即座に逃げだした。

自分も出来るものなら逃げ出したい兵士だが、その感情を押し込めるように奥歯を噛みしめて男と対峙する。

化け物の様な強さを誇る男に兵士は既に命を諦め、己が人生で学んできた剣の技量を出し切つてやろうと捨て身の攻撃を仕掛けた。

『うおおおおおっ！』

盾を捨て、命をぶつけるかの如き咆哮を上げて突進する兵士。

全力で走り、全力で振りかぶり、全力で振り下ろす。

ただのそれだけだが、何万回も振った剣は綺麗な軌道を描き、男へと迫る。

笑った！？

男と交差する瞬間、兵士は男が小さく笑ったのに気づき、次の瞬間には視界が回転して地面へと叩きつけられていた。

『があっ!?!』

『お前は中々良い。命は助けてやろう。ただし・・・』

男が手を上にかざすと、そこには弓と4本の矢が引かれた状態でセツトされていた。

限界まで引つ張られている弦を掴んだ男は、4本の矢を上に向けて構え、散りじりに逃げた兵士達全員を目で捉えた。

『逃げだすような奴は殺す』

弓を空へと向けた男が弦を止めていた手を放すと、勢いよく4本の矢は空へと飛んでいき、途中からその軌道が重力にひっぱられて下へと落ちていく。

すると、まるで測った様に矢の落ちる先に逃げだした兵士達が現れ、その首に1本ずつ矢が突き刺さる。

兵士達の断末魔が森へと響き渡り、男の耳にも届くと男は弓を消し去った。

表情が和らいでいく男は背伸びをすると、体の動かない叫ぶ兵士を無視してその場を去っていく。

『さて、それじゃ次はどこに行こうかね?』

拾った枝をほうり投げて行き先でも決めてやろうと考えた男は、拾った枝を軽く放り投げた。

何度も回転しながら飛ぶ木の枝が地面へと落ちようとしていた時だった。

【私の声が聞こえるか?】

『っ!?!?・・・誰だ?』

突然の声に木の枝から視線を外し、辺り一帯の気配を探る男。どこにも人の気配はないが、脳に直接届く様な声が再度彼に聞こえてくる。

【私はガイア。お前達を統べる意思。お前に命令を下す】

男とも女とも思えない様な何処からともなく聞こえる不思議な声に、男は思い当たる事があるのか警戒を止めた。

『これが命令って奴か、いいぜ?何をするんだ?』

【・・・】

他には伝わらない声を男は聞き、その内容に驚きを浮かべながらも最後には頷いて言った。

『分かった。早速向かうぜ』

その返答に満足したのか、男にしか聞こえない声は男の耳にもこれ以降届く事はなく、男は取り出したコンパスで方角を確かめる。

『やれやれ、『旅人』の親玉の命令にしては大した事ない命令だな。・・・にしても、1ヶ月後に向かうつもりだった場所に行かされる、か。まあ、まとめて済ませればいい事か』

男が身をかめたかと思うとすぐにその場から走り出し、手のコンパスを頼りに深い森の中を駆けていく。

次々と迫る様な錯覚に陥る木々をかわし、森から飛び出て一目散に

走る。

『待つているよ、雨堂 瞬！』

小さく呟いた男、ロビン・フッドは気合が入ったかのように走るスピードを上げ、土煙を巻き上げながらイーグランド国を目指した。

瞬が城で介抱されて2日目の夜となった。

街は昼間より静まり返っているものの、所々で酒場に人が集まり、にぎやかになっているのが瞬の個室からも見え、それを瞬は立って見ていた。

どうにか体力が回復し、何かにつかまって歩く事までは出来る様になった瞬。

ただ、本当に歩く事で精一杯のため、まるでリハビリ中の患者のようには体がうまく動かない。

一旦はベッドに腰かけたものの、言い表せない焦燥感に駆られてまた立ちあがるうとする瞬。

傍で見ていたメイドはふらついて窓際に立つ瞬に呆れたように言う。

『まだ動かない方がいいですよ。怪我は治っていると書いても、体力は戻っていないんですから』

『はあっ！はあっ！そう言われても。・・・そ、そういえば、どうやって怪我を直したんですか？はあっ、はあっ』

『え？魔法に決まってるじゃないですか？』

ただのメイドと思っていた彼女の口から魔法という一言が出るとは思っていなかった瞬間。

咄嗟に頭の中に『W2』の事が浮かんで反射的に身構えそうになるが、不思議がつているメイドに敵対する様子もない。疑問を解決すべく、瞬は荒い呼吸のままにメイドへと食ってかかるように聞いた。

『魔法、ですか？まさか、貴方は魔法使い！？』

『いえいえ、違いますよ。治療魔法の使い手が貴方を治したんです。もしかして、魔法を知らないんですか？』

『いや、知ってはいますが、その・・・珍しいので』

不思議そうにしている瞬に、メイドは何を不思議がつているのか見当もつかなかったが、少し考えてみると大体の事を彼女なりに察した。

不安げな表情の瞬へと彼女は笑みを浮かべて返す。

『貴方の国では使われていないのでしょうか？何せ、隣接する国々でもあまり使われていませんから。人がそれぞれ持っている魔法を使うのにはかなりの苦勞を伴いますが、何の魔法にせよ持っている和生活や仕事に活かせるため、我が国では魔法を習得しようとする者を後押しする動きがあります。そのおかげで国民の約7割が魔法を使えるんですよ。あ、ちなみに私は先ほども申した通り、使う事ができません。お城のお世話で習得する時間ありませんから』

最後に小さく笑ったメイドはそう締めくくると、どうにか理解した瞬は感嘆の声を上げた。

『それは凄い』

『貴方の体を治したのも街で医者をやっている方が習得した魔法で治してくれたんです。治癒系の魔法は珍しいため、よほどの事がない限り治療に使われないんですよ？貴方は運が良かったですね』

『いつかお礼を言いに行きます』

『それが良いかもしれませんね。ああ、そうそう、そろそろ姫様が来られる・・・』

メイドがそう言ってドアに振り向くと、ちょうどドアがノックされて部屋の中へとヴァネッサが入ってきた。

『もう立てるのか。それなら話程度は問題なさそうだな』

『では、私はこれで』

ヴァネッサと入れ違いにメイドは出ていき、部屋を後にする。残された瞬はとりあえずベッドに腰かけ、ヴァネッサも椅子に腰かけると瞬に向かい合った。

『さて、瞬。幾つか質問をしたい。私を助けてくれたが、いまだ素性の分からない者が城の中にいるのを快く思わない者もいる。それを解決するためにもしっかり答えてくれ。分かっているとは思いますが、嘘は無しだ』

最後の言葉の時に力強い瞳で睨みつけられ、瞬の背筋が張る様に伸びた。

『その顔や髪から言っても東の大陸生まれだろうが、なぜ、あそこにいる？』

『それが、その、気が付いたら荒野に放り出されていたので、水を求めて歩いていたらあそこに』

『放り出された？どこからだ』

『えっと、どこと言われると『W2』のアジア統括支部から魔法に巻き込まれて、ですかね』

やや困った様に頬を掻く瞬は拙い英語で必死に説明する。

嘘をついている訳ではないのだが、どうしても嘘をついているかのよう信じられない話だった。

ヴァネッサも瞬が何を言っているのか言葉は分かってても、意味がまるで分からない、そんな状態だった。

当然、苛立ちも募る。

『一体何を言っているんだ？『W2』？アジア統括支部？聞いた事がない事ばかり言うな』

「分かりません、か。やはり姫はあの姫とは別人？」

『何を言っている？自国の言葉で話すのは止めるんだ』

『あ、すいません』

『ふう、まあいい、とにかく移動中に馬車から放り出されでもしたのだろう。日本から行商に来た男が馬車から放り出され、たまたま着いた森で私を助けたと言う事で話を通しておく。他の連中への

説明も面倒だしそう言っておく。お前もそれで話を通せ、分かったか？』

『えっと、何とか』

『あまり言葉の通じない者と皆、進んで話そうとはしないから大丈夫だろう。じゃ、次の質問だ。お前は私の剣をかわしてみせたが、もしや剣か何かを使えるのか？』

『剣、ですか？多少習いはしました』

そう言つて瞬が思い出すのはイリアとやっていた地獄の特訓だった。彼女は大剣使いであったが、刀剣への知識や技は非常に豊富で、瞬を指導するのには最適だった。

ただ、どういう訳か彼女が教えたのは刀に関しては基本的な使い方や技を徹底的に教えてくれたものの、剣はあまり教えてはくれなかった。

刀を使つていこうと決めた瞬を尊重しての事だと瞬は思っていたが、彼女の思惑はそうではなかった。その事を今の瞬は知る由もない。

『そうか、それなら私の剣をかわしたのも偶然ではないな。よし、体力が戻つたら正式に手合わせしてもらおう』

『え、ちよつ！なんでそうなるんですか！？』

『うん？強い者であるなら手合わせしたくなるのは剣士として当然だろう？別に真剣を使つての手合わせと言つ訳ではないのだから』

『は、はぁ・・・』

『よし、決まりだ』

目を輝かせて言うヴァネッサ。

瞬は見た事もない表情を見せた彼女に見惚れるが、その当の本人は自分の剣を全てかわしてみせた青年に一撃いれてやるうと意気込んでいる。

その後もいくつか質問は続いたが、特に深く聞く様な話はなく、あつという間に終わってしまった。

『大体の事は分かった。それじゃ、私は戻るからゆっくり休んでくれ』

『あ、あの！僕からも質問が』

『なんだ？言ってみろ？』

出ていこうとした所で立ち止まったヴァネッサが瞬に向かって振り向き、瞬は彼女に向かって言う。

『ここに世界地図はありますか？』

『地図か・・・そうだな、確か学者が持っていたな。よし、少し待っている。今持ってくる』

そう言うと足早に出ていったヴァネッサ。

しばらくして戻ってきた彼女の手には大きな羊皮紙を丸めたものが握られ、瞬の目の前で開いて見せた。

それは確かに地図なのだが、ヨーロッパ地方を中心に描かれているというより、ヨーロッパ地方だけが描かれている地図だった。

それでいて瞬がよく目にしていた正確な地図とは違い、かなり大きなズレがある上に大分見づらい。思っていた物とはまるで違う地図に戸惑いながらも瞬は今いる場所を探す。

『えっと、此処はどの辺りなんですか？』

『そうだな、ここだ』

彼女が指示したのは後のフランスがある場所に近く、国土を示す囲みは周りの国々と比べて物凄く小さい。

そんな所にイギリスなんてなかったはずだけど。

疑問が解決するどころか悪化した様に頭に残るようになってしまったが、ふと地図の左上に記された文字に目が行く。

おそらくは地図を作製した者の名前などが乗っているのだろうが、瞬の眼はある部分に釘付けとなる。

「・・・え？1540年？」

『なんでこんな古い地図を？』

『古い？何を言っているんだ、これは最新の地図だぞ？これより新しい物などどこにもないはずだ』

一番新しいと聞いて瞬の体に得体の知れない不安が襲いかかり、体中を何かが這う様な感覚があった。

いや、そんな、まさか！？

今まで見てきた建築物や人の生活の様子、更には電気を使っている様な物など何一つ見当たらない。

色々な事実から頭の中ではある一つの答えを導き出すものの、すぐ

に否定するというループを繰り返し、ようやく踏ん切りがついた瞬は怪訝な顔をする彼女に聞いたのだした。

『今は、何年ですか？』

『おかしい事を言うな？今は1542年6月13日だ』

『本当に？』

『間違いない』

彼女の言葉で瞬の頭がふらつき、ベッドに倒れこむように顔を埋めた。

ヴァネッサは首をかしげたものの、疲れたのだろつとその場を後にする。

後に残った瞬は色々合点がいかなかった事が全て繋がったものの、その答えは絶望的な答えでしかなかった。

まさか、タイムスリップしたなんて。

体力がない上に突き付けられた現実がとどめとなり、寝ているのに立ちくらの様に瞬の頭は痛み、気を失う様に眠りへとついた。

第43話：亡霊国へ(2) (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第44話：亡霊国へ（3）

瞬が過去へと来てから4回目の朝を迎えた。

過去に来たという重い事実でこの数日間は気が滅入っていた瞬も、体力が回復して自由に動けるようになり、ようやく気持ちの切り替えが出来た。

「帰れる手段を探そう。それしかない！」

窓から差し込む朝日を受けながら決意を新たにしていると、そこに毎朝の恒例となっているメイドが朝食を運んできた。

メイドは立ちあがってスッキリした顔の瞬を見て、驚きの表情へと変わる。

「瞬さん！大丈夫なんですか？」

「ええ、ご心配おかけしました。体力は戻りましたし、もう動けます」

「いえ、そうじゃなく・・・」

「？」

「いいです。元気になられたのでしたら」

分かってもらうのを諦めたメイドだが、明るくなった瞬の様子にホツとした様に息をついた。

何しろここ数日の間、何があったのか塞ぎこみ続け、食事もあまり取らず、ベッドの上からずっと窓の外を眺め続けていただけなのだ。

誰でも気を病んでいるとしか思えない状態に、体調管理を任されたメイドはうるたえ、ヴァネッサも常に心配して何度も足を運んでいた。

どこか上の空になっている瞬には何を言っても反応が薄く、どうしてそうなったのか誰も原因が分からず、成り行きに任せるしかなかったのだがそれが治った。

責任がのしかかっていたメイドが心底安堵するのも無理はない。

『とりあえず、朝食をどうぞ。私は姫様に回復したと伝えてきますので』

『あ、ちよっと』

引き留めようとした瞬の言葉など届かぬうちにメイドはいなくなる。残された瞬は椅子に座ると、湯気の上がる朝食へと手をつけた。

「確か、動けるようになったら手合わせする約束だったはず。・
・できれば無かった事にしたかったな」

タイムスリップのショックから立ち直ったものの、ヴァネッサと手合わせするというのは憂鬱になるほど気が引けていた。

何しろ、『旅人』の時の彼女にはまるで敵いもなかったが、この世界での姫も『旅人』ではないとはいえ、剣技はかわすだけで手一杯だった。

両方とも体力のない疲労している状態ではあっても、体力が回復するだけでそこまでは変わらないと瞬は思っていた。

肩を落として食事に手をつけ始めると、途端に廊下が騒がしくなり、勢いよくドアが開いた。

『瞬！よかった！本当に回復したんだな！』

『あ、ありがとうございます』

突然のヴァネッサの訪問に瞬の Spoon を持ちあげる手が反射的に止まる。

どうにか反応してお礼を言ったものの、次の言葉で彼の体は完全に固まる事になる。

『よし、勝負だ!』

「・・・」

『朝食を食べたら修練場まで来い!待っているからな!』

指をさしてそう言うとヴァネッサは部屋を飛び出し、手合わせの準備へと自室を目指して走っていった。

あまりにも前に見た『旅人』であった彼女とのイメージの違いに悩む瞬を、遅れて入ってきたメイドは見た途端、ヴァネッサが原因である事を理解した。

全力で走る姫について回ったため、息も荒く、ゆっくりと休みたいが瞬を気遣って聞く。

『だ、大丈夫ですか?何か、言われ、ましたね?』

『はあ・・・、その手合わせするよう言われて、朝食を食べたら修練場という場所に来いと』

『は、はは、そうですね。申し訳、ありま、せん。ハアハアツ、ふう・・・。姫様は手合わせとなると目の色が変わってしまうんです。強い相手であるならなおさらです』

『ああ、それであんなドレス姿で走った、と。分かりましたけど、僕は強くなんかありませんよ?』

そこまで期待されているのが逆に申し訳ないと思うほど、瞬には自信などありはしない。

ただ、サンドバッグの様に殴られ、倒されるのがオチだと本気で思っている。

それを否定するようにメイドは首を振り、続けて言った。

『いえいえ、姫様の剣を何度もかわしたとお聞きしています。彼女は剣の申し子とまで言われるほどの剣の使い手ですが、それを満身創痍でかわし続けた貴方であれば、良い勝負をすると皆が思っています』

『おそらく、買被りすぎですよ、それ・・・』

逃げるのを手助けしてくれる人が皆無であるなら、最早、逃げ場などないのだろう。

溜息付きで再び肩を落とした瞬はスープに手をつけて、黙々とパンを食べていく。

ヴァネッサを待たせるのに気が引けたため、あっという間に全て平らげると、今にもため息が出そうな沈んだ顔で満面の笑みを浮かべるメイドの案内に従って修練場へと向かう。

どうか手加減してくれませうように。

無いとは思っていても歩きながら祈らずに入れない瞬。

道中ですれ違う人達からは好奇な視線と珍妙な視線を受けながら歩き、1階の外へと出ると目の前にそびえ立つ修練場は現れた。

中庭の一角に建造されたそれは巨大な城壁と同じ囲いがあり、中では槍や剣を持った者達が訓練を続けていた。

まだ、ヴァネッサは到着していない様だ。

『えっと、ここで待っていてください。すぐに姫様もいらっしやいます』

メイドはそう言って城に戻っていくと、1人残された瞬にまるで見世物小屋でも見ているかのような物珍しげな視線が集中する。

あまり見られない東洋人、ましてやこの時代なら外になど出る事のない日本人がいるのだから訓練している者達の手が止まるのも無理はない。

視線を集めているのは分かっていたが、振り向くに振り向けない瞬に後ろから男の声がかかった。

『おい！お前か、姫様をコケにしてくれたという東洋人は！？』

『え？あ、はい』

馬鹿にした部分がよく分かっていたいなかった瞬は反射的に頷いて答えるが、その回答はヴァネッサを慕っている男の逆鱗に触れていた。

『殺す！』

顔を真っ赤にして瞬へと襲いかかってきたのは、体長は少し低めだが、体中に筋肉の鎧を纏い、口や顎を覆うほどの髭を生やした男だった。

男は手に持った木剣を振りかざし、瞬へと向かって突進する。

『え？えええ！？ちよ、ちよつと何を！』

『つるさい、死ね！』

男が構えた剣を慌てふためく瞬へと振り下ろした。武器もなく、腕で受けたとしても確実に骨は折れそうなほどの強力な打撃が襲いかかる。

その動作を見据えた瞬。

彼の眼には剣の軌道がしっかりと捉えられ、振られる位置からおおよその予測までもが見えてきていた。

姫の時よりも剣の動きが鈍く見える、それなら！

瞬は予測をもとに難なく体を捻ってかわした。

勢いの割に軽快に空振りした男だが、その手は止まることなく次なる攻撃としてタツクルをしかけてきた。

瞬の体をくずすことを目的とした意表をつくタツクルではあったものの、それすらも見透かしたいたかのように瞬は横に飛び退いてかわす。

素通りするタツクルの隙だらけである側面に立った瞬。

『旅人』の力もないけど、これで！

「ふっ！」

『ちいつー！』

武器も何もないが、とにかく男を止めようとする一心で瞬は男の胸の辺りを殴りにかかる。

今までと比べれば非力なただの一般人である瞬。

本人も周りで見ていた者達も、隙を突かれた事を失態と嘆く男でさえ大した事のないパンチだと高を括っていた。

そんな中で男の胸へと瞬の全力のパンチは突きささる。

辺りに鈍い音が響き渡り、更に瞬と殴られた男の耳にはそれとは別の肉が潰れる不快な音が届く。

『ごふっ!?!』

体の芯に響き渡る程の衝撃が男を襲い、かろうじて保った意識で離れようとする男。

胸の痛みと体中に残る痺れでまともに動く事など最早出来ないが、年下とはいえ剣の師匠であるヴァネッサを愚弄された怒りで奮い立たせる。

ところが、言う事を聞かない足は1歩目を踏み出した途端にバランスを崩して頭も大きくグラつき、それにより最後に保っていた意識も揺さぶられる。

『お、お・・・前・・・』

瞬へと何かを言おうとした男の視界は暗転し、白目を剥いて石畳の上へと倒れる。

それを見ていた男の仲間達に彼が倒れた事で動揺と恐怖が走り、それは目の前で起こった事を改めて認識していくと次第に怒りへと昇華されていった。

『アングス!?!おい、しっかりしろ!』

『こ、この野郎!』

『全員でやっちまえ!』

まるで自分がやったのが信じられないとばかりに驚いている瞬の耳にも物騒な言葉は届く。

「・・・え」と

周りを見渡せば、既に四方を木剣を持ち、殺気立った連中が取り囲んでいる。

どこにも逃げ場はない上に孤立無援の状況。

今にも飛びかかってきそうな連中に対し、瞬はどうしたものかと冷や汗を垂らす。

『瞬は来ているか？ん？一体、どうした？』

天の助けがあった。

ちょうど訪れた練習用の服に着替えたヴァネッサは、今いる不可解な状況に当然の疑問を浮かべる。

なぜ、手合わせするはずの男が殺気立った訓練中の兵士達に囲まれているのかと。

ヴァネッサの言葉に一番近い場所にいた男が全員の胸中を代弁するように姫に告げた。

『ひ、姫様！聞いてください！あいつが姫様を侮辱したんです！おまけにそれを注意したアングスを殴り倒したんですよ！』

『ほお、アングスを倒したのか。やはり凄い奴だったか』

軽い準備運動の様に体を動かすヴァネッサ。

会話が終わってしまい、逆に疑問を浮かべた兵士は再度、慌てながら姫に話しかける。

『え、あの、姫様？それだけですか？』

『ん？それだけだな』

『そんな！？姫様を侮辱するなんて禁固刑でもおかしくない位じ

やないですか!？」

必死に訴えかける男だが、ヴァネッサは涼しい顔で言い放った。

『そもそも、瞬は人を侮辱する様な事はしないであろう人柄だ。どうせ、拙い話し方で誤解を招いたんだろう。ここ数日の会話も一応ある程度は話せるようだが、どこかぎこちなかったしな。仮に本当に瞬が私を侮辱したとしても、命の恩人を牢屋に入れるなど数日間とはいえ私には出来ん。それに』

『それに、何ですか?』

『たかが侮辱一つで罪になるのは私も嫌だからな。さて、そんなことより私の用事だ。皆、散れ』

彼女の一声に渋々と兵士達は離れていき、壁際にまでひきさがった瞬が倒したアングラスも瞬を忌々しく睨む兵士達数人の手で運ばれ下がっていく。

助かった……。

リンチを受けずに済んで安心した瞬は肩を下ろす。

そこに目をまるで子供の様に輝かせたヴァネッサが歩み寄る。

『待たせたな! さあ、手合わせしてもらおうか!』

助かってなかった……。

瞬の落ち着いた心をぶち壊すようにヴァネッサは高らかに言い、今からまた戦わなければいけない事に瞬は自然と溜息をつく。

そんな瞬の反応も楽しむかのようにヴァネッサは彼の前に立ち、木剣を構えた。

『お前が倒したと言う男の剣を取れ』

言われるがままに瞬はアングスの落とした木剣を拾い上げ、諦めたような顔でヴァネッサに向かって剣を構えた。

『よし、あの時の続きだ。いくぞ！』

『お手柔らか、につ！？』

礼をしようとした瞬に向かってヴァネッサはすぐさま飛び出し、無駄な動作の省かれた最速の突きを放つ。

慌てて礼をするのを止めた瞬は迫る突きの軌道上に剣を向けるが、それを受けたヴァネッサは強靱な手首を捻り、強引に突きの軌道を変えらる。

曲がった！？

その動きも捉えていた瞬だが、あまりの距離のなさに焦りを浮かべつつ剣の場所をずらした。

木剣同士がぶつかる乾いた音が上がり、ヴァネッサの放った軌道の変わる突きは瞬の体から逸れる様に瞬の剣によって軌道を変えられていた。

まさか防がれるとは思いつかなかったヴァネッサは、自分の中で驚きと喜びの感情が入り混じっているのを感じていた。

『やはりやるな！面白い！ならば、これでどうだ！』

突きを放った剣を引き、その反動を持って再度、突きを放つ。

ただ、今度は軌道は変化しないものの、瞬が剣で弾くと同時にまた突きを放ってくる。

その動きは徐々に早くなっていき、周りで見ている兵士達の中には何が起こっているか分からない者まで出てきていた。

「くっ！早い！」

次々に繰り出される突きをどうにか防ぎ続けている瞬だが、押し寄せる攻撃の波に前に出ることは敵わない。

防戦一方となつた瞬の様子に、ヴァネッサも倒せるのは時間の問題かと思えていた。

だが、多少の気の緩みが生まれたせいか、彼女の突きの速度が遅く、威力が弱まった突きが来たのを瞬は捉えた。

それを力を込めて弾き飛ばし、彼女の体ががら空きとなつた所へと剣を落とすように斬りかかった。

弾かれた剣では防御が間に合わない事を感じたヴァネッサは、咄嗟に後ろへと飛び、態勢を立て直しにかかる。

そこへ瞬が飛びかかり再度斬りにかかるが、ギリギリのところまでたなおしたヴァネッサは剣で防ぐ。

今度は瞬が攻める側となり何度も攻撃を仕掛けるが、ヴァネッサもその澄んだ瞳で全てを見通すかのように攻撃を予測し、瞬の攻撃を全て防ぐ。

つく！なんだ、この重い斬り込みは！？

表面上は涼しい顔でいなしていくヴァネッサだったが、その胸中には一撃一撃が今まで体験した事のない程力強い攻撃であるのに焦りを抱く。

手や腕も痺れを帯びてきた中で、瞬が振りかぶつた攻撃に咄嗟に前に出る事で無理やり罅迫り合いの状態へと持ちこむ。

『ふう、強いな！私とここまで出来るのはエドガーくらいのものだ！』

『それはどうも。じゃ、そろそろ止めて、休憩でも』

『まだまだこれからだ！』

叫んだヴァネッサは大地を蹴る様にして足に力を貯め込み、その力を解き放った事で罅迫り合いの状態から瞬を押し返した。

弾かれてしまったもののよるけるまではいかない瞬。

だが、ヴァネッサが攻撃を仕掛けるには十分な隙が出来ていた。

華麗なステップで瞬の右側面へと回り込んだ勢いを活かし、振りかぶった剣を真一文字に振る。

回転をつけた斬撃は突きとは比較にならないほど重く、力がなぜか増している瞬でも防ぐだけで手が止まる。

そこでヴァネッサは信じられない行動に出る。

止められた剣を手放したのだ。

一瞬、それが何を意味しているのかと分からない瞬の前でヴァネッサは体を沈め、そして回転しながら飛んだ。

空中で落ち行く剣を拾い上げた彼女は回転する勢いのままに、瞬の脳天目がけて斬りかかる。

何が起こったのか咄嗟の判断がつかなかった瞬は剣での防御が間に合わない事を悟り、少しでもダメージを減らそうと頭を体ごとずらして剣の軌道から外す。

そこにヴァネッサの剣が振り下ろされ、瞬の肩へと一撃が入ろうとしていた。

私の勝ちだ！

誰もがヴァネッサの勝ちだと思ったが、次の瞬間、小さく木剣同士がぶつかった音が鳴る。

瞬の肩付近で剣は交差されていたが、ヴァネッサの剣を瞬の剣と肩が支える様な形で止まっていた。

これが本物の剣での事なら、威力は剣である程度防がれ、せいぜいかすり傷と言ったところだろう。

瞬は咄嗟に体をずらす際、ただずらすのではなく下にしゃがむ事で持っていた剣の防御に到達する距離を縮めていた。

それにより、際どい所で瞬の防御が間に合い、致命傷とまで至らない様な決定打を止める事が出来た。

『今のを防ぐのか！信じられん！これまでにない位、倒しがいのある奴だ！』

『あ、危なかった・・・』

『いいぞ！瞬！よし、次はお前の番だ！私の様に技の1つでも出してみる！』

肩のヴァネッサの剣を撥ね退けた瞬は、後ろに飛んで距離を取った。

「ふう、技ですか。技と言われても」

息を整えた瞬はその場で剣をまるで鞘に挿したように剣の向きを変え、その場で体を沈める。

足の位置はまるで短距離走のスタート前の様に右足を前に左足は後方に置かれ、猫の様に背中を丸めながらも目はヴァネッサを捉える。その目は決意を固めたのが見て取れるほど、強固な意志を宿す目をしていた。

「これしか知りません」

瞬とヴァネッサの目と目が合った途端、彼女の全身に嫌な汗が噴き出た。

・・・なんだ、このプレッシャーは！？

目の前にいる瞬からまるで飛びかかる寸前の獣の様な威圧感を彼女は感じ、呼吸も荒くなっていく中、知らないうちに唾を呑みこむほど緊張が高まっていた。

お互いが動こうとしない状況に、最初、外野は鞘に納める真似でつきり瞬が試合放棄をしたものだと思い込んでいた。瞬だけに野次や罵声が飛び交う中、徐々に姫様の様子がおかしいのに気づくと野次や罵声も無くなっていった。

それどころか瞬から感じる威圧感に訓練場から出ていきなくなる者が何名も出始めるが、ヴァネッサの試合を見ないなど失礼きわまる行為であると出ていく事も出来ない。

次第に訓練場内からは言葉が無くなり、ただ二人だけが対峙するのを見守る兵士達という図式が出来上がった。

時間にすれば1分程度。

ただ、彼女が感じていた時間は普通の時計の進み方とは完全に別だった。

微動だにしない瞬とは逆に、ヴァネッサの呼吸は荒く、何筋もの汗を顔に浮かべている。

『くっ！対峙しているだけでこれか！くそ！』

『……止めますか』

攻めあぐねている姫の前で瞬は構えを解いた。

途端に訓練場に漂っていた重苦しい雰囲気は消えて無くなり、兵士達は誰しもが安堵の息をつく。

ただ、それを良く思わない者が1人だけ残っていた。

『なぜだ！なぜ止める！』

剣を放り捨てて瞬を問い詰めようと目前に迫るヴァネッサ。

その勢いから迂闊な解答でもすれば、怒りを増長させるだけなのは誰の目にも明らかだ。

そんな中で瞬は言う。

『今のをやればどちらか大怪我するかもしれませんが、それに』

『それに、何だ？』

『今の僕では出来るか分からない技ですから』

瞬が言うのは『旅人』の力を持っていた時に出来た技だからこそ、今は出来ないかもしれないというつもりで言っていた。

ただ、それをヴァネッサはまだ未熟であるがゆえに出来ないかもしれないという意味で受け取っていた。

あれでまだ未熟であるというのが信じられない彼女だが、一応は納得したのか瞬の前から去っていく。

その表情は悔しげでありながらもどこか楽しげである。

修練場に残された瞬は、ふと自分に集中する視線が変化しているのに気づく。

アングスを倒した後は忌々しさや怒りの籠った嫌悪する様な視線が多かったのに対し、今はまるで怪物を見ているかのような恐怖を含んだ視線ばかりだ。

どうしたものかと悩む瞬に、また後ろから声がかかった。

『お前、姫様と引き分けるとは凄い奴だったんだな』

声に振り向いた瞬の前には殴られた個所を押さえながら立っているアングスの姿があった。

多少の痛みはやはりあるのか、アングスは立っているのも苦しいらしく、息も荒い。

『大丈夫ですか？』

『やった奴に心配されるとはな。俺は大丈夫だが、それよりさつき姫様が言っていた通りなら俺はお前に謝らないといけない。すまなかつたな』

そう言うアンガスだが、やはり瞬はある程度しか聞き取れないため、謝られた意味もぼやけた感じに受け取っていた。

ただ、アンガスに向かって一礼すると、アンガスの肩を持ち上げて肩を組んだ。

『お前、何を？』

『手当てする場所に行きましょう』

『フン、すまん』

それを見た兵士達は瞬へ抱いていた悪いイメージが払拭され、力のある好青年という印象に代わっていた。

とは言っても、まだ恐怖を抱いている者もいる。

アンガスを叩きのめしただけでなく、ヴァネッサと引き分け、更に最後に見せた得体の知れない技の恐怖はそう簡単に消える物ではなかった。

それは修練場を覗き見ていたエドガー達の部下も同様だった。

もしかしたら奴と戦っていたかもしれないだけに、体を襲う焦りや恐怖から来る悪寒は観戦していた兵士達の比ではない。

『お、おい、奴は本当に強いぞ！手合わせなんてしたらこっちがやられちまう！』

『・・・っく、エドガー様に報告だ。どうするかはエドガー様に判断してもらおう』

『な、なあに、いざとなったら毒でも仕込んで殺せばいいんだ』

『そ、そうだな。は、はは、は・・・』

軽口をたたいたつもりでも最後に見た構えが異様に頭の中に残り、気分はまるで良くならない。全員が青ざめた顔をしたまま、彼らの上司であるエドガーの元へと急いで去っていった。

大量の書物がそこらじゅうに詰まれ、カビ臭い空気が漂う部屋があった。

日の光が差す窓もなく、唯一の灯りと言えばテーブルの上に置かれたランプの頼りない光のみ。

その光を頼りに1人、本を読むことに没頭している者がいた。一言も言葉を発する事は無く、部屋の中の唯一の音はページがめくられる音だけ。

ふと、部屋の外から何かに向かってくるかのような音が聞こえ、それは不協和音の様に水滴が落ちるように規則的だったページの音を妨げる。

『やれやれ』

本を読んでいた者はしょうがないとばかりにページをめくる手を止めた。

そして、いずれ来るであろう者を待ち構えるかのように本からテーブルの向かいにあるドアへと視線を変え、程なくしてそのドアが開

かれる。

『お兄様、またここでしたか』

『全く、もう少しおしとやかにする事は出来ないのか？走る音で近づいているのがすぐに分かったぞ？』

『それはその・・・、以後、気をつけます』

『まあ、いいだろう。それで、何か言いたい事があるんだろう？』
呆れたように言うオーウエンは、ドア付近で顔を赤くする妹に対して確信的に聞く。

何か嬉しい事や楽しい事があればすぐに自分に言ってくるという癖があるのをオーウエンは把握していた。

実は嫁に行ってもおかしくないほどの年齢である彼女なのだが、そういった幼少期からの兄弟間の癖が抜けきっていないのもオーウエンの悩みの1つでもある。

その癖通りにヴァネッサは笑みを浮かべながら、楽しげに言う。

『瞬はとても強かったですよ、お兄様！』

『ふむ、お前が強いと言うからには相当なのだな』

『はい！とても倒しがいがあります！』

『そうか・・・』

瞬を倒す事に燃えているヴァネッサだが、そんな彼女を見たオーウエンはもう少し女性らしさを出せないものかと内心で溜息をつく。

何せ、見た目は近隣諸国でも噂になるほどの美貌なのだが、中身は剣や武道の事にしか興味がなく、戦が始まれば自分から軍勢を率いて出ていきそうな程だ。

嫁に出ていけば何をしでかすか分からない。

正にお転婆姫といった所なのだが、その実態を知るのは城内部の者達だけである。

そろそろ、言わなければいけないか。

周りを他の国々に囲まれている小国のイーグランドとしては、政治的にも外交的にも彼女にはそろそろ嫁に行ってもらうべき時期なのだ。

踏ん切りをつけたオーウエンは開いていた本を閉じて言った。

『ところで、お前に縁談が来ていたな。相手は』

『お断りします』

『・・・少しは聞く気がないのか？それとも、既に意中の相手でもいるのか？』

『そ、それは・・・』

オーウエンを見るヴァネッサの頬が赤みを増していく。

それに気づいて見返したオーウエンの視線に、彼女は慌てて視線を下へと外した。

『いるのか、いないのかはつきりしなさい』

『わ、わ、私は、その、私より強い男なら・・・、あとお兄様みたい人とか』

最後の言葉はポリウムを捻った様に小さかったため、幸いなのかオーウエンの耳には届いていなかった。彼女の言った言葉を元に、オーウエンは少し考えてふと閃いた案を言ってみた。

『それなら、ちょうど2週間後に闘技大会が開かれるな。そこでお前を賭けて皆に戦ってもらおうとしよう』

『え！？お、お兄様！？』

『勿論、お前宛てに来ていた縁談の相手で腕自慢の者を見繕って参加させる。最終的に残った者がお前を嫁にする権利を賭けてヴァネッサ自身と対決だ。どうだ、これならよかるう？』

『そ、そんな！待って！』

『今回は待たない、何度も断っていたのだからいい加減に諦めるんだな』

肩を落として落ち込むヴァネッサ。

ただ、彼女の眼は諦めてはいなかった。

『私が勝てば嫁には行かなくて済むんですね？』

『ああ、勿論だ』

『それなら私からも条件があります』

『ふむ、一体何だ？』

『瞬を、私を助けたあの旅人も参加させてください！』

その条件はオーウェンには予想外だった。

彼から見れば、ヴァネッサをもつてしても強いと言わせるほどの実力者を参加させると言っているのだ。

素性もあまり明らかではない部分も気に入くないが、オーウェンには一番そこがひっかかっていた。

『なぜ、彼を加えるんだ？お前が負ける要素が増えるだけだぞ？』

『どうせやるのであれば、全力で戦える舞台を整えてやりたいだけです。私は負ける気はありませんけどね』

自信満々に言ってみせるヴァネッサ。

とりあえず、彼女が言うからそうなのだろうとオーウェンは問題視するのを止めた。

素性の怪しい東洋から来た者であるなら、最悪、彼を国から追い出してしまい、嫁にやる事もうやむやの内に無かった事に出来る。

そうなれば痛手はなしとなるが、嫁に行く話は一旦、消えてしまっただろう。

とはいえ、これで文句もなくヴァネッサが参加してくれるのであれば大目に見ても問題は無い。

そう判断したオーウェンだったが、実際はヴァネッサにも思惑があった。

仮に瞬が優勝してしまい直接の対決となった時、あの優しい人柄の瞬であれば事情を話す事で棄権してくれるだろうと思っていたからだ。

実力はそれなりにあるため、優勝も狙えなくはない。

つまり、彼女からすれば瞬は嫁行きを妨害する刺客として参加させる気だったのだ。

さすがにそんなことまで気づいていなかったオーウェンは首を縦に振る。

『よからう、彼の参加を認めよう』

『ありがとうございます、お兄様。それでは瞬に伝えてきますので』

そう言うと部屋から出ていったヴァネッサ。

残されたオーウェンは誰もいなくなった中で頭を抱えながら大きくため息をついた。

『・・・やれやれ、簡単に決まってくればいいが。さて、そんな事より』

今までの問題をそんな事で片づけたオーウェンは、閉じられていた本を開くと知識をため込む作業へと戻る。

部屋の中にはまたページをめくる音だけが聞こえる時間が始まった。

「ヘックシッ！」

『おい、風邪か？』

『いや、引いてませんよ。でも、悪寒もするし、まさか』

『俺に移すなよ、いいな？』

『はいはい』

医務室へとアンガスを運ぶ同中でくしゃみに見舞われた瞬。
その数分後、彼はくしゃみと悪寒の意味をヴァネッサの一方的な説
明で知る事となる。

第44話：亡霊国へ(3) (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第45話：亡霊国へ（4）

ドアがゆっくりと閉められ、起こった風が狭い室内を唯一照らしていた蠟燭の火を揺らす。

ゆらめく炎に合わせて部屋の壁に移る不動だった人影も揺れ動く。

『姫様と引き分けたか。どうやら、本物らしいな』

部下の報告を聞いた人影の元であるエドガーは、腕を組むと静かに目を閉じた。

周りの国々とはいった戦争が起こってもおかしくない今の状況、そこに現れた腕の立つ謎の東洋人。

奴はこの国の者なのか、それが問題だ。

彼からすれば瞬が何処からかの差し金としか思えないでいた。

奴は本当に東洋からの出身者なのか？

そもそも、姫様を助ける事で城の中にまで運ばれたが、実はそれ自体が入り込むための演出ではないのだろうか？

疑う事を始めれば次から次へと疑問の芽は生えていくものの、考えを裏付ける証拠など何一つとない。

彼は口を閉じ、その事についてどう対処するのが最適であるのかとただ思考の海に沈む。

そんな静かな空間へと開いた窓からそよ風が入り込み、エドガーの影が蠟燭の揺らめきに合わせて揺れ動く。

数秒ほどで風は止んでしまい、火の揺らぎも止まった時、壁に映る影の数が何時の間にもやら増えていた。

『……お前か』

エドガーはいつの間にか背後に立つ者へと話しかける。

そこにはフードを被り、ローブで体中を隠しているため男か女かも分からない、まるで隠者のような者が立っていた。その者は何を言うでもなくただそこに立ち続け、後ろすら振り返らないエドガーは言葉を続けた。

『あの、瞬という男。お前なら仕留められるか？』

『・・・はい』

ローブの者は一度だけ小さい声で返事をし、エドガーは閉じていた目を見開き、命令を下す。

『よし、奴を仕留めろ。ただし、事故死や不自然な死を装え。いいいな？』

頷いたローブの者は一度だけ頷くと、またそよ風が室内に起こる。窓が風によって少しだけ開くとローブの者は消え、エドガーはゆっくりと目を開いた。

『不安の芽は全て摘むに限る』

笑みを浮かべ、歪む口元を隠すようにテーブルの上に手を組んだエドガー。

頭の中では瞬が死んだ後の行動をあらかじめ決めておき、それから疑われない程度な予定が着々と組まれていた。

その眼は蠟燭の火とは違った妖しい光を帯びている様に輝いた。

姫は一体何を言っているんだらうか？

それが瞬の一番最初に思った事だった。

アングスの手当てを行った後、自室に戻ろうとしていた瞬の前にヴァネッサが現れた。

意気揚々と喋る彼女の言葉を瞬は分かっているようだが、意味の方が彼にはすぐ理解できなかった。

『あの、もう一度、ゆっくり言ってもらっていいですか？』

『ふむ、ゆっくり丁寧に簡潔に言ってやる。おまえがーっ！と聞きたくらいにーっ！さんかするーっ！どうだ？』

『・・・はあ』

間違いない、とばかりに言いきって仁王立ちするヴァネッサ。

対して、言われた瞬はと言うと頭を抑えて、立ち眩みの様に壁へともたれる。

なぜ、闘技大会に参加する事になってしまったのか？

その答えがヴァネッサとオーウエンの間で交わされた約束によるものである事など、瞬は露知らず、終わる事のない解答の模索が頭の中で永続ループする。

『あれだけの力を持っているんだ。世間に示してやるべきだ！』

『戦うのはあまり好きではないんですが・・・。それに、目立ちたくないですし』

ただでさえヴァネッサの命の恩人であり、交流のない東洋から来たこの国唯一の黒髪の男である。

さらに言えば、未来から、およそ500年後から来ただけに感覚や

考え方の違いも大きく、この国では浮いた存在と言ってもいい。すれ違う人達の視線が無意識レベルで凝視する視線になってしまうのかもしれない。

『確かにそう言う事はあまり好みではなさそうだな。どちらかと言えば、学者に近い気はする』

『その通りです。だから、こんな闘技大会なんて』

『とは言っても今更取り止めなどできん！それに、今頃噂が立っているはずだ』

『噂？』

『お前が私と引き分けたと言う話だ。今の城下はお前の話が何処に行っても聞こえるほどだそうさ。その当の本人が出ない訳には行くまい？』

『そ、そうなんですか？』

『そうさ』

戸惑うばかりで安易に誘導に乗った瞬間にヴァネッサは内心でほくそ笑む。

そもそも、その噂を兵士達に流すよう手配していたのは他ならぬヴァネッサ自身だった。

本来であれば旅人に引き分けたという失態にも近い噂を外に広めるなどあつてはならないことだ。

王族のそんな情報1つで国民達の不安は掻き立てられ、果ては不信感にも繋がってしまう。

ただ、これは瞬をその気にさせようとしたヴァネッサの策略であり、本人は世論など気にすらしていない。

王族としてはあまり褒められた行為ではないが、国民達は日頃からヴァネッサの武勇伝などを耳にしているため、むしろ引き分けた男が凄いと世間の噂は瞬の事で持ちきりになっていた。

ちなみに勝ち残った後のヴァネッサとの結婚を賭けた対決については告げる気はない。

ヴァネッサの事を瞬がどう見ているかなどヴァネッサは知りもしないが、仮に優勝した時にだけ事情を告げて辞退してもらうつもりだった。

『開催まであと2週間だ、それまでに準備をしておけ』

『準備？』

『武器と防具のだ。本番は真剣を使った1対1の対決だからな』

『あの・・・相手は斬ったら死にますよね？』

『まあ、当然だな』

『・・・辞退します』

青ざめた顔でヴァネッサから眼を逸らす瞬。

そのまま、ここからいなくなるうと足を踏み出しにかかるが、そうはいかないとヴァネッサは彼の前に立ち塞がった。

『却下だ。いいか？別に殺せと言っている訳ではない。相手に負けを認めさせるか、気絶させればいい。それに治療の魔法使いが常に待機しているからこの大会が始まって以来、死者は出た事がない。』

それなら問題ないだろう?』

『そう言われても』

『ええい、面倒だ! 来い! お前の武器と防具を選んでやる!』

『あ、ちよつと姫!』

業を煮やしたヴァネッサは瞬の腕を掴むと強引に引つ張り、無理やり城の外へと連れ出す。

瞬を珍獣でも見ているかのように物珍しげに見る視線や、ヴァネッサに対するまた姫様が何かやるぞという呆れと期待する視線が集まる中、ヴァネッサは瞬を連れて城下町と城とをつなぐ門の前に立つ。欠伸をしながら暇そうにしていた門番だったが、いきなり王族が現れるという不測の事態に驚きを隠せない。

『門を開ける!』

『ひ、姫様!?! なぜ外に?』

『ちよつとした買い物だ、いいから開ける!』

『いや、でも、オーウエン様から簡単に開けるなと』

『開・け・ろ!』

気まずそうに答えた門番へと詰め寄ったヴァネッサは、とても一国の姫とは思えない様な剣幕で詰め寄る。

剣で勝てる者はエドガーくらいだと言われるほどの武人であるヴァネッサの放つ覇気は、門番を震え上がらせるのには十分であり、彼

は泣く泣く扉を開ける羽目になる。
かわいそうに。

心の中で同情した瞬だったが、門が開いた途端、ヴァネッサは瞬を引っ張ったまま城下町へと飛び出した。

『さあ、いくぞ!』

『ちよ、ちよっとおお!?!』

『気の毒に……』

ヴァネッサがいなくなって気が落ち着いた門番はこれから連れ回されるであろう瞬へと同情の言葉を呟く。

街へと出たヴァネッサに、たまたま門の前を通っていた者達は足を止めた。

『姫様だ』

『姫様〜!』

『あの姫様に引きずられている奴は誰だ?』

『黒髪に顔つき、まさか!あれが姫様と引き分けたという噂の奴か!』

『嘘だろう?あんな弱そう奴が姫様と互角なわけないだろ』

『そ、そつだよな!この嘘付き野郎!』

見た目が華奢な上にヴァネッサに引きずられている瞬が、まさかヴ

アネツサを倒したとは思えない街の者達。
実際に瞬とヴァネツサが戦うと事は見ていないため、その反応は当然ではある。

姫へと称賛や歓声上がるのとは対照的に、瞬には野次が飛んだ。言っている事を理解した瞬は、握りつぶした様な難しい顔になる。

『あの、何か色々言われてるみたいなんですけど？』

『気にするな。何時もの事だ』

『姫は良いんですけど、僕の方がどうも・・・』

『ふん、そんな事を一々気にしても始まらない。そんなことより着いたぞ』

瞬が街の人達の反応に気を取られているうち、気がつけば彼の目の前には一軒家程度の大きさの店が現れた。

中へと入っていくヴァネツサに続いて、ようやく解放された瞬も嫌々ながら付いていく。

店内は何本かの剣や短剣、鎧などが飾られ、その奥には数人の筋肉質な男達が火のついた釜戸の前で意見を交わしていた。皆が複雑そうな表情で互いに出る言葉は少ないようだ。

そこに割って入るようにヴァネツサは声をかける。

『おい、お前達!』

『ああん?誰だ・・・って姫様じゃないですか。また城を抜け出してきたんですかい?』

どうやら顔馴染みらしい1人の男がヴァネツサの前へと出てくる。

話しあっていた男達もヴァネッサが来たのでは、と一時休憩も兼ねて解散していった。

『もしや、この間の剣に不具合でもありやしたか？』

『そうではない。実はここにいる男に見合った武器と防具を作ってもらいたい』

そう言われて男が視線をずらすと、とても剣など見えそうにはない瞬を見て困った様に頬を掻く。

これなら俺でも倒せそうだ、と職人である彼は溜息をついた。

『あの、姫様。コイツに見合った剣なんて言われても、せいぜい護身用の短剣程度じゃないですかい？』

『ほう、この街一番の武器職人であるコルーホスの目も曇ったものだ』

コルーホスと呼ばれた男はヴァネッサの物言いでイラついたのか表情を変える。

とは言え、さすがに王族の姫である以上、強くは言えない。

ただ、どう見ても自分の目からはヴァネッサの隣にいる男にそれだけの力があるとは到底思えない。

長年、使い手に見合った武器を作り続け、変わらぬ評価をもらい続けた自分の目がおかしいとも思えない。

何度見返してもこの男が弱いと確信を持ったコルーホスは、長年続けた武器職人としてのプライドから反論せざるをえなかった。

『姫様と言えど、そんな事を言えば怒りますぜ！？俺の目は確かだ、コイツはただの一般人ならまだしも兵士に軽くのされる程度だ』

！』

『ふん、そのコイツが私と引き分けた男でもそうだと言うのか』

『えっ……、は？ひ、姫様と、引き分けた！？コ、コイツが！
？じよ、冗談でしょう？』

口が開いて閉じないほど驚いたコルーホスに、ヴァネッサは心の中
で彼の反応にほくそ笑む。

隣にいる瞬は会話は付いていけているようだが、二人の会話にも口
出しできずにただ困った顔で立つだけだった。

もっともその瞬の反応もヴァネッサは楽しんでいるようだが。

『本当だ。おまけにコイツが途中でやめなければ私は負けていた
だろうな』

『姫様を倒す！？信じられない！そんな事あるはずが』

『よかるう、そこまで言うなら見せてやるう。おい、瞬。適当に
ここにある剣を取れ』

『はぁ……、適当に、ですか』

姫の命令にはとりあえず従う瞬は、言われたとおりに壁にかかった
剣の一振りを取る。

騒ぎを聞きつけて出てきた男達の疑う視線の中で、ヴァネッサは鎧
を飾った人形を瞬の前に持ち出し、次の命令を下した。

『この人形を斬るつもりであの技の構えを取れ』

『え？』

『何も本当に放てと言う訳ではない。アレの構えは十分にお前がただ者ではない事を証明できる。ほら、やるんだ』

『は、はあ……。まあ、人形ですし』

一体何が始まるのか、興味深げな男達の視線の密度も高まる。

やり辛さを感じる空気の中、瞬は腰の辺りで剣の治まった鞘を持つと、体全体を野生の獣が飛びかかろうとするかのような前かがみな低い態勢を取る。

瞬の目が人形を捉え、心の中で斬る事のみを考えた瞬間、周りで見えていた男達に寒気が走る。

『な、なんだあ？鳥肌が立ったぞ？』

『お前もか！俺もだ』

『……。そ、そんなことより俺はここから逃げ出してえ』

空間を支配するかのように瞬を中心とした室内に、瞬から放たれる威圧感が満ちていく。

その威圧感は時間がたてばたつほど高まっていき、ヴァネッサを除いた皆が今すぐにもこの場から逃げ出しくてたまらない衝動に駆られる。

ヴァネッサも今にも斬りかからんとする対峙した時と同じ瞬の迫力に、表面は穏やかそうでも内心では剣士としての体の緊張が続いていた。

『コルーホス、これが技を放とうとしているだけの瞬の威圧だ。』

そんじよそこらの剣士などこの圧迫感の前には・・・』

『も、もういい！分かった、お前が強いのは分かったから止める！頼む！』

コルーホスの頼みを聞き届けた瞬はすぐに構えを解いた。

途端に室内を覆っていた威圧感は一立ちどころに消えてしまう。

そこに立っているのは見る分には確かに瞬だが、男達の目を通して見ればそこにいるのは得体の知れない強者だった。

『ふう、そんだけの腕があるなら今度の闘技大会に出るつもりか？』

『勿論、そのための武具購入だ。彼に見合うだけの装備を頼む』

『そうかい。おい、アンタ、剣はどんなものを使う？』

『え〜と、そうですね』

辺りを見回し、壁にかかっている剣を一通り見る瞬。

さすがに何度も使っている日本刀などあるはずはない。

だが、イリアにも教えを受け、今までずっと使っていた武器だけに瞬は諦め悪く聞いてみた。

『刀、つてありますか？』

『なんだそりゃ？そんな剣は聞いた事もないぜえ？』

『ふむ、私も聞いた事がないな。お前の出身である日本とか言う国の武器か？』

『そうです。形的には……アレが一番近いと思います』

そう言つて瞬が指さしたのは刀と同じように刃が湾曲した1本の剣だった。

『ほあ、サーベルかい。残念だが、俺の所にもないってんなら、この国にやないと思つていいな』

『そうですか……』

肩を落として落胆する瞬。

『普段ならある程度の特注でも受ける事は出来るが、生憎、闘技大会が近いせいで注文は一杯だ。悪いがここにある剣の中から選んでもらうしかねえな』

『それなら、サーベルを貰おう。刀、とやりに近いなら実力もそれなりに出せるだろう』

『じゃ、それで。あと、防具はなるべく軽い鎧でお願いします』

とりあえず、瞬はかかっていたサーベルと体に見合つたサイズの鉄の胸当てと小手を受け取つた。

試しにつけてみた瞬だが、その姿は周りの者達からすれば成り立ての青年新兵にしか見えない。

ま、まあ、これなら他の者に意識されにくい……のか？

実力は知つていても、恰好がそうであるのに不安を覚えるヴァネッサ。

無理やりに利点を捻り出し、心を静めた。

対して、装備などした事もない瞬は、ちょっとしたコスプレ感覚で楽しげである。

「こんな恰好初めてだ、まるで学芸会みたいだな」

『ま、まあ、いいか。全部買い取りだ。代金は後で城の者が払ってくる』

『へい、毎度ありがとうございます。闘技大会頑張って下せえ』

男達に送り出された2人は店の外に出る。

一旦店に消えたため、2人への関心は薄れていたようだが、また外に出た事で人目を惹く。

今度はさっきのように野次が飛ぶほどではなく、小さく囁かれる程度で済んだのには瞬も助かった。

ただ、逆にヴァネッサが残念そうに瞬へと言う。

『お前の言った武器がこの国にあれば都合出来たが、ないのでは無理だ。すまん』

『いえ、姫に謝ってもらわなくても。それに、仕方ないことですから』

『そうか……。では、城に戻って練習でも』

『そこに居られるのはヴァネッサ姫ではありませんか!?!』

城に戻ろうとした2人だったが、その足は突然会話に介入してきた者に止められた。

2人が振り返るとそこには黒塗りの装飾の施された豪華な馬車があ

り、その窓から風になびく金髪の青年が顔を出していた。青年は嬉しげな顔をしているのに対し、その顔を見たヴァネッサは眉をひそめた。

『こんな所で会う事が出来るとはやはり私と貴方は結婚する運命なのですね!』

『勘弁してくれ・・・』

ヴァネッサが頭を抑えながらその場を後にしようと瞬を引きつれて男に背を向ける。

それを阻むように馬車から下りた男が2人の前に回り込み、男の後にお付きの者が数人出てきた。

街を歩いてきた者達も突然の事態にやじ馬として集まっていき、人だかりが出来てしまう。

『どうして帰ろうとするんですか!私は未来の夫ですよ?』

『どうして?面倒くさいからだ!いくぞ、瞬』

『は、はあ。いいんですか?』

『いいんだ。いくぞ。皆、道を開けよ!』

『ちょ、ちょっと待ちなさい!お前達!』

反対側に進もうとした2人を、お付きの者が取り囲むように展開する。

足を止めざるを得ないヴァネッサはしょうがなく立ち止まり、男へと向き直った。

『私達は帰りたんだ！そこをどけ！グラムハム！』

『どうしてだい？どうして僕を避けるのかな、ヴァネッサ？』

『まったく、この男は・・・！』

怒りを露にするヴァネッサだが、男はまるで分かっていないのか惚けた顔をしている。

完全に置いてきぼりの瞬には口出しも出来ない。

ただ、事態の成り行きを見ているだけかと思えば、そんな瞬へグラムと呼ばれた男の視線が動いた。

『君は彼女の護衛か？だったら、これ以上は無用だ。僕が引き継ぐから君は城に戻りたまえ』

『と、言われても』

『ハッハッハッ！心配無用だ。私はこれでも闘技大会に参加するだけの腕はあるからね！さ、帰りにたまえ』

『フン！私にも勝てない男が参加してどうなる？それにこの瞬と言う男はお前よりも数段強いぞ？』

胸を張って自信満々に告げたヴァネッサ。

だが、その隣でしどろもどろな瞬を見てもグラムハムには冗談を言っているようにしか見えない。

鼻で笑って一蹴してやるうかとしたグラムハムだったが、ふと頭にある考えがよぎった。

『いいだろう、そう言うなら僕と彼がやって僕が勝ったら、この後付き合ってもらおう。それでどうだい？』

『よからう、瞬が勝ったらさっさと国に帰れ、いいな？』

グラハムが頷いた事でお互いに合意が成立した。

何時の間にか戦う事が決まってしまった瞬は放置されたまま、周囲の人だかりが広がっていく。

流れを分かっているやし馬である街の者達も、これで噂が本当かどうか分かるかと期待していた。

その渦中の瞬は戸惑うだけでしかなかったが。

「えっ？え？えええっ!？」

グラハムのお付きの者も去っていき、1人残されたグラハムは剣を抜いて構えていた。

『さあ、早く構えろ!』

『な、なんでこんな事につ？』

『いいか、奴はそれなりの使い手だが、お前の敵ではない。軽く倒してやれ』

『ちよっ！そんな！斬ったり斬られれば死んじゃうんですよ!？』

『心配するな、お前が即死させなければ大丈夫だ。いざという時は奴のお抱えに治癒魔法使いがいる。アイツを追い払うには痛めつけてやるしかない。ほら、行け』

ヴァネッサに突き飛ばされた瞬は、数歩前へと出てバランスを取る。すると、その目の前にグラハムの剣が迫り、瞬は慌てて体を下に沈めた。

グラハムは続けて剣を振り下ろし、ヴァネッサよりも数段遅いその剣の軌道を目が捉える。

悠々と体を捻ってかわし、グラハムの追撃が来る寸前で瞬は後ろに飛んでかわした。

『死ねええ！』

殺気の籠った声を涼しい顔で受け流した瞬は、剣を振りかぶって向かってくるグラハムへと走った。

獲物が向こうから向かってきたのに合わせ、グラハムが剣を振り下ろす。

ところが瞬はその場で足を止め、瞬の予測された位置に振り下ろした剣は当然の様に空振り、瞬は剣を持ち上げようとするグラハムへの距離を詰めた。

「恨みもないですけど」

グラハムの視界を半分近く埋めるほど近づいた瞬。自身の失態に舌打ちするグラハム。

「ふっ！」

その無防備になっている腹へと瞬は掌底を叩きこんだ。

『旅人』の力が失われたのにどういふ訳か力が常人よりも強いことを把握した、それなりに加減した掌底だ。

とは言っても常人への攻撃としては十分だ。

現にグラハムの体はくの字に曲がり、少しだけ後ろへと吹き飛ばさ

れる。

周りのやじ馬にざわめきが走り、あの噂は本当じゃないのかと言う声があちこちで上がる。

『ぐほっ！舐めた真似を・・・！』

『分かったか、グラハム。瞬はお前よりも強い。彼も闘技大会に参加する以上、お前の優勝などありはしない』

『くっ！お、お前達、かかりなさい！』

最早、面子や体裁など無視してお付きの者達へと瞬を襲わせる。

命令に従って男達が剣を手に瞬へと襲いかかる中、瞬は腰に挿していたサーベルを抜いた。

そのまま、サーベルの刃を返して構えると、剣で斬りかかってきた者達へと向けて走り出す。

1人目は腹にサーベルを叩きつけ、流れる様に2人目は手を叩きつけ、剣が落ちた所に袈裟切りを放つ。

最後となった3人目だが、多少の実力があるらしく、瞬が振ったサーベルを止めた。

それを弾き返して反撃に移ろうとした男は剣に力を込める。

『フン！？う、動かんだとっ！？』

だが、予想していた通りに剣は動かず、むしろ瞬の剣によって押し込まれていく。

たまらず力を逸らして逃げようとした男だったが、瞬が弾き飛ばすほうが早く、男は足がつかまらずいた様にバランスを崩す。

そこへ瞬の一撃が襲い、防ぐ事も出来ぬまま男は一撃の元に沈んだ。

『な、なあっ!?!』

『これで分かっただろ? さっさと国へ帰れ』

『ま、まだです、まだ私は』

『うるさい!』

まだ立ち向かおうとするグラハムの頭にヴァネッサの拳骨が落ちた。それがとどめとなり、グラハムは泡を吹いて地面へと倒れた。途端に、周りの街の住人達から歓声が上がリ、最早、瞬の実力を疑う者などどこにもいはしなかった。

『ふう……』

『終わったな、さて、帰るぞ』

『あの、もうこういつ無茶ぶりは止め』

『何か言ったか?』

『いや、だから』

『なにか!……言ったか?』

『……別に、何も』

『よし、帰るぞ』

満面の笑みを浮かべるヴァネッサの後に、悲壮感の漂う瞬も付いて

いく。

その胸中はこのままずっとこうなのだろうかという不安と、
姫に頼られてるのが心地良い感覚が入り混じっていた。

第45話：亡霊国へ(4) (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第46話：亡霊国へ（5）

日が暮れていく中、アリウスへと続く一本道を歩く者がいた。既に夜が近い事を見越して、人通りは皆無に近い。

その者もまた目前に迫っているアリウスで夜を超すつもりなのだろう。

手には旅の荷物が詰まっているであろうバッグを持ち、身なりはマントと帽子を羽織っただけの井出達だ。

深く帽子を被っているために顔は見えず、男か女かも分からない。ただ、それでも別に珍しいという程の者ではなかった。

ありふれた旅人の一人と言った所だが、そんな旅人の前に突如、茂みから一人の男が飛び出した。

無精ひげを生やし、旅人よりも数倍汚らしい格好の男だ。

男の手には錆びれた剣があり、得意気に振りまわしている。

『金と荷物を寄せせ！』

男は山賊だった。

旅人は足を止めると、表情は帽子で見えないが声の調子から呆れた様に言う。

『断れば？』

山賊の目がギラついたかに見えた時、茂みの中から次々と山賊の間が現れる。

手に武器を持った山賊達が旅人を完全に取り囲み、最早、旅人に逃げ場などない。

『死だ』

最初に出てきた男の声に合わせて山賊達は旅人へ各々の武器を向けた。

これでほぼ仕事は終わりだ。

あとは命を惜しんだ旅人が金と荷物を全て差し出し、逃がす振りをして後ろから斬りつける。

顔を見られている以上、逃がすと言う選択肢は彼らにはない。

今回も簡単な仕事だった、と山賊達は笑いを浮かべる。

『おら！さつさと出せ！助かりたいだろ？』

『それとも、てめえ、死にてえのか！？』

『・・・』

最終的に殺すつもりではあるが、一応、脅し文句として出せば助かるのを強調する。

単に血塗れになった荷物や金では困るからだ。

旅人は黙っていたかと思うと、どう考えたのかは分からないがバッグを地面へと落とした。

『つち、さつさと出せ・・・よ？』

バッグに向けて伸ばした山賊だったが、まるで幻でも見ているかのようにバッグに手は届かない。

それどころか山賊の腕はなくなり、今までそこにあったはずの腕はマントから出ている旅人が持っていた。

『へぎゃっ！？お、俺の腕え！？』

『同じような目に遭いたくなければ早々に立ち去れ。無駄に命を散らしたいなら別だが』

『ちつきしょう！お前達、かかれ！』

『うおおおおつ！』

仲間の報復に山賊達は旅人目がけて剣を突き出した。多方面から同時に来た以上、旅人に逃げ場はない。

だが、その中心である旅人から焦りなど微塵も感じられず、落ちつき払った態度の旅人に迫る剣が交差する。

見た目通りであれば旅人の体へと何本もの致命傷の剣が突き刺さった。

だというのに旅人は何事もなかったかのように動じない。

それどころか、刺したはずの山賊達は得体の知れない違和感を感じていた。

『刺さってる・・・よな？』

『あ、ああ。ただ・・・』

『感触がねえ。な、なんなんだコイツ！？』

そう山賊達の手にある剣は確かに目の前の旅人へと刺さっているのだが、どういう訳か今まで何度も経験している人を刺した感触がないのだ。

感覚的にはまるで空を切ったかのような手応えのなさは、今の光景からすれば異常だった。

更に、不思議な事に旅人の刺さった部分からは血の一滴もこぼれない。

首を振った旅人は残念そうにつぶやく。

『私は忠告したんだがな』

旅人が長さ3mはあるであろう銀色のハルバートをどこからともなく出す。

天に向けて地面に立てたハルバートに消える寸前の夕日が映え、オレンジ色にハルバートは鈍く輝く。

身長のちょうど二倍の長さのそれを旅人は頭上で軽々と振りまわし、勢いそのままに山賊達へと振るう。

光の軌跡が残像として残り、旅人を中心とした辺り一帯に爆発が起きた様な風が吹き荒れる。

振りまわしたハルバートを再び地面に立てた時には、山賊達は物言わぬ肉片へと変貌していた。

『ば、化け物だああ!!!!!!』

唯一、難を逃れた片腕の男は無我夢中で叫びながら走り出す。

『やれやれ』

旅人が追撃しようとハルバートを投げやりの様に構えた時だった。

『へぐっ!?!』

逃げだした男の首へと一本の矢が突き刺さった。

2度と動かなくなったのを見届けた旅人は、矢が飛んできた後ろへと目を向ける。

『久しぶりだな、おい』

そこに立っていたのは弓を持ったロビンだった。男を仕留めたのも彼だろうが、そんな事など気にする事もなく旅人は元の道へと戻り、アリウスへと歩き出した。

『おいおい、無視か・・・』

まさか自分にここまで関心がないとは思ってもいなかったロビン。彼は慌てて旅人の隣まで走り、追いついた所で並んで歩く様にスピードを落とした。

『せつかくここまで来てやったのに無視はないだろ?』

『・・・』

あくまでもロビンへのリアクションがない旅人はただ黙々と歩き続ける。

空を仰ぎ見てロビンが頭に手を当てるのも無理はない。

『はあ〜っ、俺はお前のためにここに来ているってのにいくらなんでもその態度は』

『嘘をつけ。お前がガイアからの命令で動いているのは知っている』

ようやく成立した会話のキャッチボールだったが、返球の内容にロビンの雰囲気が変わる。

『・・・お前にも命令は届いたのか?』

『一応な』

『なんだ？その一応、つてのは？』

『命令の内容だけ聞いている。おそらく他の『旅人』にも同様の命令が聞こえているはずだ。担当するのはあくまで貴様の様だがな』

『ふん、俺が失敗した時の代わりつてことかね。まあいい、それより俺がやるのは分かったけど、その貴様ってというのは』

そこで急に旅人は足を止めた。

釣られてロビンも足を止めて何事かと隣を見る。

すると、帽子を脱いだ旅人は帽子を手の上で光の粒子へと変え、粒子は空気中へと雲散する。

帽子の中にまとめられていた金色の髪が風になびいて広がり、現れた顔には眉間から口にかけて斜めに斬り傷が入っていた。

容姿から言えば間違いなく女性だが、その傷と眼光の鋭さは決して街中に住む女性とは違う。

彼女は獣の様な威圧感を放つ眼をロビンへと向ける。

『今の内に言っておくが、私は貴様が嫌いだ。ただ、他の『旅人』達よりほんの少し信頼できるといっただけだ』

ロビンは目を合わせながら、両手を上げてため息をついた。

『へいへい、分かっていますよ。俺は命令を片づけるからその間に
お前はお前のやる事をやればいい。その後で俺が後片付けと行く
か』

『いいだろっ』

分かっているならそれでいい。

その後には付けたした様に彼女はロビンへの強い視線を緩め、アリウスへと向き直って歩き出す。

頭を掻きながらロビンもそれに続いて歩きだし、その後、アリウスの門までの間に会話は一つもなかった。

いや、会話として成立するものがなかったと言っるのが正しいだろう。そびえ立つ門の前で立ち止まる彼女と、話しかけても何も言わない彼女に対して心が折れたロビン。

程なくして門の脇にある小さい扉から守衛らしき男が現れた。

『旅人か？』

『ああ、そうだ。もう日も暮れるし、さっさと中に入れてくれ。』

長旅で疲れてるからな』

守衛は二人を見極めんと頭から靴の先までをジッと見て回る。

気まずい無言の時間が続くが、守衛はひとしきり見て回り特に不審な点は見当たらなかった。

『よし、いいだろう。こっちから入ってくれ』

肩を撫で下ろすロビンに対して無表情ですぐに歩き出して中へと入る彼女。

ロビンは慌てて彼女に付いていくように中へと入った。

二人が出た先は城へと続く大通りで、ちょうど城の背後に夕暮れの沈む太陽が顔を出していた。

夜の闇が覆っていく中、夕暮れの光によってまるで城がライトアップされているかのような光景はとても幻想的で、この街に何年も住んでいる者でさえ見惚れた様に足を止めていた。

にも関わらず、二人は足を止めずに大通りを歩く。その目には絶景すら止まる事はないようだ。

『それで？お前は どうするんだ？・・・ってあれ？』

当然隣にいるものだと思っていたロビンだが、気がつけばそこに彼女の姿はなかった。

辺りを見回すロビンは家と家の隙間を進んで行く彼女を見つけて叫ぶ。

『おい、勝手に行くなアイシア！』

アイシアと呼ばれた彼女だが、ロビンの声では一秒たりとも止まることなく進み続ける。

もう一度ロビンが声をかけようとした時にはその姿は消えていた。

『アイツ！・・・まあいいか、探す気になりゃ探せるし、向こうから勝手に来るだろう』

ロビンはアツサリと彼女を追いかけるのを諦め、当面の宿を探す事に決めた。

数分ほど歩きまわった所で宿屋はアツサリと見つかかり、深く考えるでもなく決定した。

何泊かするため、彼は当面の金を作り出して先払いすると情報収集として街へと繰り出す。

辺りはすっかり暗くなり、足元を照らすためのカンテラを片手に歩き回り、夜と言えど騒がしい酒場を見つけて中へと入る。

中はジョッキ片手に騒ぎ続けるオヤジ連中や若者連中が大半で、大騒ぎせずに飲んでいる者達の方が圧倒的に少ない。

ロビンはカウンター席へと腰掛け、適当に酒を注文した。

グラスを傾けながら店内の至る所から聞こえる会話に耳を傾け、彼自身は一言もしゃべる事はない。

そんな彼の耳にオヤジ達の騒ぎ立てる会話が飛び込んでくる。

『凄かったな！アイツ、あんなに強いのか！』

『あんな弱そうな奴が全員倒しちまうんだから、見かけによらねえな』

『全くだ！東洋の戦士つてのは皆あんな感じなのかもな』

『はははっ！かもしれねえな！』

『確か、名前は・・・シユンだったっけ？』

『！！？』

そこまで聞いた所でロビンは他の会話を聞くのを止め、その会話にのみ集中していた。

ここまで簡単にたどり着けるとは思ってもいなかっただけに、彼も少し驚いていた。

『んああ、確かにそんな名前だったな』

『今年の闘技大会に出るらしいが、あんなにつええなら優勝しちまうんじゃないのか？』

『かもな。姫様との結婚といい、見た事もねえ奴といい、今年は今までよりも面白そうだ。まあ、奴は姫様のお抱えみたいだし、姫様との結婚などあり得んだろうがな！』

『そうだな、がははははっ！』

オヤジ達が笑い合っているうちにロビンは席を立ち、酒場を後にした。

『お抱えと言つならおそらく城にいるんだろつな。ちょっと忍び込んでみるとするか』

そう言つとロビンはその場から飛び上がり、家の屋根へと降り立つ。屋根から屋根へと城を目指して渡っていき、その姿はあつという間に暗闇の中へと消えていった。

松明が何本か灯るだけの光源が乏しい城の修煉場。

その中で瞬はただ一人、昼に買ってもらつたサーベルを振り続けていた。

『旅人』の間には感じる事がなかつた肉体的な疲れを感じつつ、息も乱れたまま一心不乱に振りまわす。

まるでどうすれば未来へ帰れるのかと言つ不安を振り払つかのよう

に。
『くあゝっ、おい、いい加減にしたらどうだ？』

入口にもたれかかりながら豪快に欠伸をするアングスは、何時間にもわたつて続けられるサーベルの練習に辟易していた。

彼自身は念のため、数日間の怪我の回復に努めるよう訓練は止められている。

そんな彼がなぜ修練場で瞬の練習に付き合っているのかと言えば、ただの気の良い付き合いと言う訳ではない。

身元が怪しい来訪者に対して張り付いている様、命令されたためだ。勿論、城の案内を行うなどの事もしたが、すまないと思いつつも瞬の一挙一動に目を光らせている。

とは言っても、ここの時間も付き合わされているのでは命令云々など抜きにして、さっさと休みたくもなる。

瞬もその辺の事情は何となく察してはいたが、使い慣れないサーベルにどれだけ練習しても不安は尽きないでいた。

『すいません、もう少しだけ』

『つたく、その台詞は五回目だぞ？いい加減にしてくれ！』

そろそろ限界が近いのか、アングスの眉間にしわも寄る。

しょうがない、今日は止めますか。

彼の反応を見てようやく区切りをつける事にした瞬は、最後に一振り全力でサーベルを振るう。

サーベルの空気を切り裂く音が修練場の中で木霊し、瞬の体から水滴の様にした立っていた汗が辺りに飛び散る。

大きく息をつきながら、瞬はサーベルを鞘におさめた。

『ふう・・・、疲れた、かな？』

これだけ動き回っていた割に瞬が思った以上に体力は削られていなかった。

本来なら地面に突っ伏し、気を失っていてもおかしくないほどの運動量だったはずだが、疲れは感じているものの歩けないほどでもない。

やっぱり、『旅人』の力が残っている様な感じがするな。

力や体力、体の動きも含め、常人のそれを超えているのは瞬も理解していた。

『旅人』ほどの常識外れと言う訳でもなく、あくまで人間としての規格を少しだけ超えている様な力。

過去である世界、誰も頼る事が出来ない世界において、この力は彼にとって唯一の頼り所ともいえる。

感覚を確かめる様に手を開いては閉じるのを繰り返していた瞬は考えに浸る。

力がどこまでであるかを試してみた方が・・・はっ！

背後から殺意にも似た陰湿な気を当てられているのに気づいた瞬。

恐る恐る振り替えた先には不快なオーラを全開にしているアンガスがいた。

『さつさと体洗ってこい！いいな？すぐにだ！』

『わ、分かりましたあっ！』

アンガスの怒気に押され、瞬は慌てて訓練場の側にある井戸へと急いだ。

いつもはヴァネッサの命の恩人と言う事で城の大浴場で入浴していたが、現代と違って蛇口をひねればお湯が出る訳でもない。

必然的にお湯を用意する時間が必要になり、入浴する時間帯も限られた時間になる。

残念ながら今の時間はお湯など冷めてしまった時間であり、お湯を用意してくれなど瞬に言えはしなかった。

そのため、井戸から水をくみ上げた彼は鎧や武器が置かれている部屋へと移動し、汗で湿っている服を全て脱ぐ。

更衣室代わりにこの部屋を使っているのだらう。

用意しておいた布巾に組み上げた水を湿らせ、体の隅々まで拭いていく。

気持ちよく拭き続けていた彼だったが、ふと、部屋の入口から視線を感じ、手を止めて振り返った。
カンテラの火が薄暗く照らす中、瞬が目を細めて見る先にいたのは
ヴァネッサだった。

『え”っ？わ、わあっ、姫!？』

瞬は咄嗟に持っていた布巾で見せてはいけない物を隠し、着替え用にもらった服を手にとった。

見えない様に着替えられる場所を慌てて探す彼へ、裸である事など全く気にしない様にヴァネッサは近寄っていく。

瞬の焦りは彼女が近づくと分増していき、思考が停止しかける寸前の彼の前でヴァネッサは歩みを止めた。

『ちょ、姫、近づ!？』

『お疲れ、瞬』

『あ、あの離れて』

『喉が渴いただろう、これを飲め』

戸惑う瞬の前へと彼女は水の入ったグラスを差し出した。

な、なんか、今の姫はおかしい気がする、な？

一方的にグラスを押しつけてくる彼女に、瞬も戸惑うばかりだ。

仕方なく瞬も受け取ると、今度はそれを飲むのをじっと待っているのか、彼女は脇目も振らずに瞬を見つめている。

『ほら、早く飲め』

『は、はあ・・・』

何時も以上に強引に思った瞬は今までの彼女の行動を思い起こす。いきなり剣で斬りかかれ、無理やり対決し、闘技大会にも勝手に参加させられた上に、武具店では用心棒もさせられた。

・・・あれ、今までと違う気が。

若干、惹き気味な瞬は姫の視線にも耐えられなかったので、グラスに口を付けた。

『終わった』

『え？姫？ちよ、ちよっと？』

それを見届けた姫は、今まで押し寄せる様に詰め寄ったのがまるで嘘のように瞬に背を向けて出ていく。

「何だったんだ？」

不思議に思いながら瞬は水を流し込もうとグラスを傾けた時だった。傾けるはずのグラスは瞬の手からこぼれおち、水をまいて床へと落ちる。

「がっ！？あぐうっ！」

突然、痙攣し始めた体で必死に喉を抑える瞬。

彼の体の喉から胃にかけて鈍い痛みが走り、どうする事も出来ない痛みに耐えられず、床へと倒れこむ。

「がふっ！あ、ついっ！」

焼けつく様な痛みが体中へと広がっていく中、瞬の顔中に玉の脂汗が浮かべて血を吐いた。
治まる事のない痛みに対抗手段を持たない瞬はただ床の上でのたうち回るだけだった。

意識は保っているものの、彼が気を失うのも時間の問題だろう。

『おい！まだか！？いい加減にしないと俺の堪忍袋も・・・おわっ！一体どうした！？』

そこにちょうど遅いのに苛立ったアンガスが現れた。

一発殴ってやろうと思っていた奴が既に血塗れであるのを見れば、そんな考えなどどこかへと飛んでいき、慌てて瞬へと彼は駆け寄った。

『おい！どうした！病気が！？くそ！』

『・・・』

『おい！？』

必死の呼びかけに瞬も返事をしたいが、最早、魚の様に口を開くだけしかできない。

何かを言っているものの声にならないのでは会話も出来ず、アンガスはとにかく人を呼ぶべきだと瞬を抱きかかえた。

『しっかりしろ！今、医者に見せる！』

痛む胸など無視し、必死な形相で彼は走る。

・・・死ぬ・・・のか。

もう声も出せない瞬は己の死を悟り、揺れ動く視界が段々と細くな

つていき、次第に眼は閉じられる。
彼の耳には必死で呼び掛けるアングスの叫びが聞こえるが、まるで500m先から呼んでいるかのように小さい。
せめて死ぬのなら元の世界で、死にたかった……。
段々と周りの音は消えていき、瞬の意識も深く沈んでいき、そして痛みも消えていく。

これで、終わりか。

約束守れなくてごめん、姫。

死を覚悟し、受け入れた瞬。
だったのだが、彼はそこでふと気付いた。
痛みが……。消えた？
途端に揺れ動くアングスの腕の中で起き上がる瞬。

『のわっ！お、起きるな！？』

『ちよつと止まって下さい』

『お、お前、大丈夫なのか！？』

『とりあえず止まりましようよ』

慌てて足を止めたアングス。

驚く彼の前で瞬は床の上に降り、鉄の味が広がる口にしかめっ面をしながら特にそれ以外は何事も無い体を確かめる。

血を吐いただけに内部からの出血があるはずだったが、今の彼は内部の何処にも痛みを感じてはいない。

飛んだり跳ねたりしても痛みがない以上、素人判断だが特に問題はないと彼は決めつけた。

『大丈夫、だと思えます。ご迷惑おかけしました』

『お、おまえ、あんな血を吐いておいて』

『ああ、そうですね。掃除しないと迷惑ですね』

『そうじゃないだろ！なんで平気なんだ？おかしいだろ？』

『……うん、そういう体質なんじゃないですか？』

あっけらかんと言いつ放つ彼に、アングスは頭を抑えた。

『もういい、とにかく大丈夫でも医者には見せるよ？いいな？』

『はい、分かりました！』

『……俺も頭痛がしてきたし、医者に行くか』

『大丈夫ですか？』

『お前のせいだよ!!』

ふらつきながら別れた彼はそのまま自室へと戻っていき、瞬は一人、倒れた武器庫へと戻った。

案の定、そこにはまだまいた水と吐き出した乾いていない血が残っており、これだけ血を吐いたのならアングスさんが不安になるのもしょうがないと瞬も納得する。

ただ、そこにあるはずの物が消えているのに彼は気づいた。

姫から渡され、口を付けたグラスだ。

彼の微かに残っている記憶では、グラスはそこらへんに転がっていたはずだが、どこを探しても見つからない。

「おかしいな・・・」

そもそも血を吐くほどの病気を持っていない瞬は、ある一つの可能性を考えていた。

毒を飲んだのではないかと。

それならば、彼が倒れて運ばれた後、証拠隠滅として毒の付いたグラスを持ち去ったのであれば、グラスが見つからないのも納得できる。

ただ、そうであるなら大きな疑問が一つ残る事になる。

「僕は、姫に殺されかけた？ 姫は僕を殺そうと・・・していた？」

グラスを手渡し、口を付けた後に終わったと呟いた彼女は紛れもなく姫の姿だった。

なぜ、彼女が？

常に強引ながらも前向きで楽しげな姫に対する瞬の信頼にヒビが入っていた。

第46話：亡霊国へ（5）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

最近、1話を読み返していると、どうも気に食わない部分があったため、修正しました。そこから続けて現在6話まで修正しています。今後も過去分をちょいちょい更新します。

過去の自分と今の自分では多少思うところが違うみたいですが、これは腕もアップしてるといえるんでしょうか・・・？

第47話：亡霊国へ（6）

風が室内を吹き抜けた。

机で書類仕事に勤しんでいたエドガーは手を止め、いつの間にか現れた背後のローブで覆われた者へと振り返る。

今朝方、エドガーが命令を下した隠者が此処に来ると言う事は、彼に対して何かしら報告があると言う事だろう。

勿論、その事を理解していたエドガーは一言だけ問いかける。

『……始末はついたか？』

『……』

隠者は黙って一度頷くと、エドガーは満足したのか書類仕事へと戻る。

これで下がって良いという事なのだろう。

国境への軍の派遣、他の国々から着た来賓を招いての闘技大会中の警備案、軍事予算の部署別への振り分けなどなど。

頭が痛くなるような書類仕事を貯めた彼としては、早急に集中して仕事へと戻りたかったのだが。

『まだ何かあるのか？』

『……』

何時まで経ってもいなくならない隠者に彼は視線を送り、隠者はまた黙ったまま頷いた。

『いいだろう、言ってみろ』

『・・・毒を塗ったグラスを紛失しました』

『何！？まさか、回収できなかったのか！』

隠者はまた一度だけ頷く。

あくまで淡々と言う隠者に対し、エドガーはひどく取り乱す。

『グラスがあれば、誰かが奴を毒殺したのがばれるぞ！くそつ、何と言う事だ！お前は何と言う失態を！』

『・・・邪魔が入りました』

『邪魔、だと？兵士か？』

隠者は頭を横に振って続けた。

『兵士ではありません。見た事もない男でした』

『それならお前が始末すればよかつただろう！お前でもそれぐらの判断はついたはずだ！』

部下の失態に怒り心頭のエドガーは机を叩きつけた。

ただ、その怒りをぶつけられたはずの隠者は動揺した様子があるのかどうかも分からないが、少なくともうるたえたり身震いした様子は見られない。

何事もなかったように続けて言う。

『短刀で殺しにかかりました。ただ・・・』

『ただ、なんだ！？』

『矢で短刀を弾き飛ばされました』

一瞬、エドガーは何を言っているのかと面食らった顔へと変わる。

彼には二人がどんな状況にあったのかは分からないが、それでも矢で握っていた短刀を弾き飛ばしたと言うのであれば、偶然か、それとも相当な熟練者でしかない。

後者であるなら厄介な話になってしまった。

思わぬ存在の出現に頭を悩ませる彼は書類仕事そっちのけで隠者に向きあい、詳しい内容を聞きながら今後の方針を頭の中で固めていった。

瞬が毒を飲んだ騒ぎの十分程前。

修練場の中には剣を振るう瞬の姿と何時間も付き合わされ、退屈そうに欠伸をしているアングスの姿があった。

『くあ〜っ、おい、いい加減にしたらどうだ？』

『すいません、もう少しだけ』

『まったく、その台詞は五回目だぞ？いい加減にしてくれ！』

愛想笑いを浮かべながら申し訳なさそうに言う瞬を、天井裏の隙間から覗いている者がいた。

一心不乱にサーベルを振り続ける彼を観察し続ける者、それは。

『ほう、悪くない剣筋だな』

いともたやすく城の中へと潜り込んだロビンだった。

長年に渡る隠密行動で気配の消し方を熟知している彼に気づく者など誰一人としていない。

彼はガイアからの命令対象である瞬は間違いなく下にいる黒髪の東洋人の男であり、剣を振る動きや何気ない動きからおおよその強さを把握していた。

見た目言えば間違いなく、誰の目にもアングスの方が強そうに見えるのは明らかだ。

彼を良く知る者ならアングスが長年の訓練から培った技術や経験、そして丸太の様な鍛えた体に勝る者はそういないと言っただろう。

それに比べ、下で剣を振るう瞬は見た目はとても貧弱であり、まだ新米兵士の様に年も若い。

比べることすらかわいそうにも思えてくる。

ただ、ロビンの目は瞬の動きを静かに見据え、そして納得がいったのか細めた眼を戻した。

『・・・なるほどな。今度の闘技大会の本命、と言った所か？まあ、賭けるなら奴に金貨十枚は賭けてやっても良い』

彼なりに瞬を評価した結果、瞬の強さはそう敵う者はいないだろうと彼は確信した。

人間の中でなら評価できるだけの強さがある、人間の中なら・・・。

大体の強さを測り終えたロビンは満足がいったのか屋根に寝転がり、瞬に接触を凶ろうと彼が一人になるタイミングを待った。

『さっさと体洗ってこい！いいな？すぐにだ！』

『わ、分かりましたあつ！』

ちょうど、そこにアングスの怒号が響き渡り、瞬は慌ててかけ出した。

『好都合だ』

ロビンは隠れたまま瞬の後を追いかける。
井戸の側で水を汲んだ彼は武器庫の中へと入っていき、体を拭こうとしていた。

『うち、野郎の裸何て面白くもねえ。まあ、人目もない場所に行つてくれるのは都合が・・・っ!？』

不意に人の近づく気配を感じ取ったロビンは、その場から飛び上がって壁へと張り付いた。

彼は完全に気配を断ち、暗闇に紛れながら訪れた者の様子を窺う。現れたのはグラスを持ったヴァネッサであり、彼は武器庫の中へヴァネッサが入っていくのを捉えていた。

『あれは、確か・・・、この城の姫だったか？』

身につけている服はどことなく古ぼけた服だったが、顔はまぎれもなく街で見かけた絵画にそっくりだったのを彼は思い出す。
瞬と何の繋がりがあるかなど、ロビンには知る由もないし、また知る気もない。

静かに闇に溶け込んだまま、二人が別れるのをまつだけだった。
ひよつとすれば恋仲なのかも知れない、と長期戦を覚悟していた彼だが、意外にもヴァネッサはすぐに外へと出てきた。

『よし、いく・・・またか』

ヴァネッサが離れた所に今度は鬼の様な顔をしたアンガスが現れた。何時まで経っても来ない瞬にご立腹の様子で、少なくとも俺は関わりたくない」とロビンも面倒事になりそうな気がしていた。

今度こそ長期戦を覚悟した彼だったが、その耳にすぐさまアンガスの声が聞こえてくる。

『何だ？』

距離が離れているために彼にはよく聞きとれなかったが、何かが起こった事を察した。

アンガスが慌てふためきながら走って出てくると、その腕の中に瞬が抱きかかえられているのを捉えた彼は、静かに武器庫の側へと降り立った。

周囲の気配を探りながら彼は開いた扉の中へと入る。

そして、彼の目に殺人現場の様な血が飛び散る惨状が張り付いた。

『これは・・・奴の血か』

血の側で屈み、冷静に場の様子を観察するロビン。

すると、彼は血が水と混ざり合い、淀んでいるのに気づいた。

『水を飲んでいる時に血を吐いた？・・・そうなると』

彼の頭にはつい先ほど見た場面が浮かんでいた。

それに従い、何かを探し回る彼はすぐに目当ての物を見つける。

床に転がっていたそれは、ヴァネッサが持ちこんでいたグラスだった。

中に入る時はグラスを手に持っていた彼女が、外に出てきた時は何

も持っていないかった事に彼は気づいていた。

彼が拾い上げたグラスは血で汚れてはいるものの確かにさつきヴァネッサが持っていたグラスだった。

舐めまわすようにグラスを見た彼は、ふとグラスの内側に何かが付着しているのに気づく。

匂いを嗅いだ彼は少しだけ鼻に来る刺激臭に顔をしかめる。

『ふうん、毒か。となると、奴を殺したい奴がいると言う事か。さっきの姫か・・・もしくは』

そこまで考えていた所で、彼は言葉を切った。

屈んだまま振り返った先には、フードを被り顔も見えない者が立っていた。

エドガーの命令を受けていた隠者だ。

『・・・それをよこせ』

『回収に来たのか。残念だが、俺は「ハイ、ソウデスカ」なんて二つ返事で渡すような奴じゃないんだよね。まあ、捻くれてるからな、ククッ』

『・・・』

どうやらロビンの態度が癪に障ったのか、それとも邪魔になるからと判断したのか、隠者は腰から短刀を取り出した。

それを逆手に構え、静かに殺意を露にする。

一方、ロビンはというとまだ笑ったまま、隠者に向きあいながら立ち上がる。

『ほら、かかってこい』

余裕が見て取れる態度は、更に隠者を苛立たせる。

・・・殺す。

隠者の体が少しだけ沈み、足に力を蓄える。来るか。

ロビンは隠者から見えないように同じような短刀を作り出して身構える。

ところが、彼に向かってきたのは小さい薬瓶だった。

『おおっ？』

咄嗟にロビンは薬瓶を回避し、注意が逸れた一瞬を狙って隠者は飛びかかった。

隠者の短刀がロビンの首へと吸い込まれる様に振られ、逆にロビンはまだ視線を薬瓶へ向けていた。もらった。

数秒後の事切れるロビンを確信した隠者だったが、そこで予想外の手応えと甲高い金属音に確信を取り消した。

『危ないな』

ロビンの視線は割れて透明な液体がこぼれる薬瓶へと向けられているが、体は作り出した短刀で隠者の短刀をしっかりと受け止めていた。

ゆっくりと視線を戻して余裕を浮かべる彼に対し、隠者は焦りを抱いていた。

かなりの手練か。

見ずに攻撃を防いだけではなく、短刀を押し込もうとしてもビクともしない力の強さに、隠者はただの兵士程度に考えていたロビンの認識を改めた。

一旦、離れた隠者は構えを取っているものの、攻める事もままならない。
笑いを浮かべるロビンは、持っているグラスを真上に放り投げて受け止める事を繰り返しながら、攻めを誘っていた。

『ほら、かかってこいよ。もしかしたら今度は殺せるかもしれないぞ?』

『……黙れ』

隠者が仮に経験の少ない兵士程度なら、内で暴れる激情に任せて飛びかかっていたかもしれない。

だが、隠者もそれなりの場数を踏んでいるらしく、激情を蓋をするように抑え込み、頭の中は常に冷静だった。

不意打ちも効かず、力量もある相手からグラスを奪う算段を頭の中で組み立てていく隠者。

……これも駄目。

頭を振り絞って何度も考えるが、組み上がるまでに何かの矛盾により崩れ、完璧ともいえる算段が隠者の頭には出来てこない。
必然的に隠者は睨みあったまま攻める事も出来ない。

『ふん、誘いには乗らないか。慎重だな』

『……』

『まあ、大方、俺の殺し方でも考えてるんだろうが俺を殺すなんて無理な事は止めておいて、さっさと逃げかえったらどうだ?さもないと』

今までふざけた態度のロビンから漂う雰囲気が一変する。

途端に隠者の体の至る所に鳥肌が立ち、目眩と軽い頭痛を覚え、視界もゆがむ。

『殺しちゃうぞ？』

軽い言葉とは裏腹に武器庫を満たすロビンの殺意は、隠者が抱いていた殺意などとは比べ物にならないほどでかく、更に隠者を委縮させる程濃密だった。

こいつは怪物だ！

目の前の男が行った殺しの数は、自分とは比べ物にならないほど多い隠者は悟り、殺す算段を組み立てるのを止めた。

そんな者の前では殺す方法を考えるだけ無駄な行為に他ならないと理解したからだ。

後ろを見せず、外へと後退していく隠者をロビンは不敵な笑みを浮かべながら見ている。

『あ』

すると、ロビンが片手で放り投げて遊んでいたグラスが掴み損ねて床へと落ち、彼は後ずさる隠者から視線を外して屈んだ。

今なら！

その隙を見逃さず、隠者は隠し持っていたもう一本の短刀を掴み、ロビンへ手持ちの二本を投げ放った。

だが、次の瞬間には投げたはずの短剣は甲高い音を立てかと思うと、地面へと落ちていく。

何が起こったか分からない隠者だが、落ちた短剣の側に月明かりで光る物があるのに気づく。

それは鉄で作られた矢じりで、後には当然ながら矢が付いている。二本の短剣の側に二本の矢が落ちていたのだ。

『っ!?!』

『残念だが、俺の隙を突こうなんて三百年早い』

信じられないと顔を上げた隠者は、いつの間にか弓を構えているロビンの姿に驚愕する。

隠者が短刀を出し、一瞬だけ注意を外した内に彼はどこから出したのか弓を構えて弾いていた。

それもたった数秒もない間で一本打つのですら難しいと言っのに、二本を打つなどあり得る事ではない。

更に命中率などガタ落ちになる速射をやったにもかかわらず、的確に矢は短刀に命中している。

『言っておくが打ち落とすだけにとどめただけだ。その気になれば今頃お前の眉間にも刺さっていたぞ?』

『・・・』

『これが最後だ。どうする?』

押し黙る隠者だが、ロビンの言葉に嘘はないと分かっていた。

もう一度仕掛ければ間違いなく殺されるだろう。

無様に逃げる事しか隠者に選択肢はなかった。

短刀と矢を拾い上げた隠者は、ロビンに背中を向けてその場から立ち去った。

『最初からそうしておけばいいのに』

弓と短刀を消したロビンは手に持ったグラスを懐に仕舞いこみ、その場を後にしようとする。

すると、足音を立てて武器庫へと向かってくる者がいるのに彼は気づいた。

『またかよ……。隠れるか』

仕方なく積まれた箱の陰に隠れ、足音へと集中するロビン。

足音は武器庫の中へと入ってきたかと思うと、血があった辺りで止まる。

血を観察しているのか歩く音もないが、しばらくすると足音の主から声が漏れた。

「おかしいな……」

聞き覚えのある声にロビンはそつと箱の陰から声の方を覗いてみた。そこにいたのは間違いなく、毒を食らって血を吐いた揚句に運ばれたはずの瞬だった。

なんだ？アイツは毒が平気なのか？

何事もなかったかのような瞬にロビンも面食らっているが、少なくとも血を吐いたのは間違いがない。

彼の口元にはまだ血の跡が残っていた。

「僕は、姫に殺されかけた？姫は僕を殺そうと……していた？」

自分で考えた結論に愕然とした様子。瞬。

顔面蒼白なのは毒のせいではなく、姫に裏切られたと言うのがよほどショックなのだろう。

やれやれ面倒な所で一人になったもんだ。

放っておけば何時までもそうしていそうな彼の前に、ロビンは箱の陰から出ていった。

『だ、誰ですか!?!』

いきなり現れた人に我に返った瞬はロビンへと向かって叫ぶ。
向けた顔の目尻には涙が浮かび、彼は拭いながら手に持ったカンテ
ラを向けた。

・・・まさか。

すると、火が照らした見覚えのある顔に彼は驚いた。

「ロビンさん!?!」

「俺を知っているのか?」

「あ、・・・そうですね、以前見かけた事があったので」

反射的に名前が出てしまった瞬は、久しぶりに聞いた日本語に新鮮
さを覚えつつ、取り繕う様に言う。

どこか怪しげな雰囲気の中に、ロビンはガイアから受けた命令の中
身が間違いないであろう事を感じていた。

「お前が瞬だな?」

「僕を知っているんですか?」

「まあな。単刀直入に聞くが、お前は未来から来たのか?」

「えっ!?!」

「どうなんだ?」

瞬にはどう答えればいいのかが分からなくなった。

例えば、姫やアングスなどに未来から来たのか？と問われれば、向こうは冗談のつもりだろうし、瞬が真面目に答えても冗談にしかとられないだろう。

だが、目の前にいるのは『旅人』だ。

それも1200年頃の生まれだと言っていた彼は既に300歳を超えている。

下手なごまかしが効くと瞬には思えなかった。

「ほら、さっさと答える。どうなんだ？」

「・・・そうです」

「本当か、なるほどな。何年先だ？」

「およそ500年ほど先です。・・・実は貴方とも会っています。貴方には魔法や『旅人』の事について色々と教えてもらいました」

「未来の俺が・・・ね。俺は500年先でもまだ『旅人』をやっているらしい、ククツ。・・・ん？『旅人』の事も？ひよつとしてお前は」

「ええ、僕も未来で『旅人』でした。と言っても引き継いでからせいぜい3ヶ月程で過去に飛ばされ、『旅人』の力はなくなつたみたいです。どういう訳かある程度は残っているみたいですがね」

瞬は陳列してあった両手剣を持ち、軽々と片手で振るってみせる。両手で持つて振るうことを前提とした両手剣を片手で振るなど、アングスの様な力がありそうな者でも難しい事だ。せいぜい数回振ってみせるのが限界だろう。

その非常識さにロビンは目を見張り、彼の言う事が本当の事だと判

断した。

「そう言えば、毒を食らったはずだが？」

「それも『旅人』が持っていた不老不死の驚異的な自然治癒力、その一部で治ったと思います。今は不調も痛みもないですから」

「興味深いな。まあいい、色々と聞きたい事はあるがここでは人が来るかもしれない。お前は部屋に戻っている。俺が寝静まったころに忍びこむ」

「分かりました。場所は・・・」

瞬はロビンに自室の場所を教え、そのまま一旦別れた。

自分の事を分かる存在がいる！

そう思うだけで彼の感じていた孤独感が薄まり、未来へと戻る希望もでかくなつた様に思っていた。

口から血を垂らしながらも喜びを隠そうともしない瞬。

ロビンが来るのを心待ちにしながら自室へと戻っていった。

『500年、か』

一方、武器庫に残っていたロビンは今の話を頭の中で整理していた。500年後も世話焼きなのは相変わらずか。

自分が500年後も生き残り、若い『旅人』に色々と教えていたらしい事に彼は苦笑する。

そして、未来からの来訪者に思考を切り替える。

『あれが、雨堂 瞬か。確かに危険な存在だな』

未来の情報を保持している事がどういう事なのかをロビンは理解していた。

今は世捨て人であり、『旅人』でもあるロビンに話したのだから大した問題ではない。

だが、下手をすれば時代の流れを早めたり、彼が来た未来とは別の流れをたどって彼の未来自体を壊してしまうかもしれない。それはガイアの望む未来ではないのだ。

『雨堂 瞬の抹殺。考えておくべきか』

ガイアから受けた命令の重要さが分かった彼は、静かに殺意を放ちながらその場を後にした。

第47話：亡霊国へ(6) (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第48話：亡霊国へ（7）

誰もが寝静まる深夜、城の石畳で作られた廊下をランタンを手に徘徊する者がいた。

空いたもう片方の手には槍を持ち、胸当て程度の軽装でその者は辺りを窺いながら歩き続ける。

彼は城の夜間警備中の兵士だった。

欠伸をしながらも、自分の足音が気味悪い程に響き渡り、歩くたびに彼は内心ではびくついていた。

「ふあっ……、ちつくしよ、見回りなんてやってらんねえ」

聞く相手のいない愚痴を言いながらも、彼は辺りを見て回ってから次の所へと歩く。

仕事はまじめに行っている様だ。

ただ、悪口は止まることなく、壊れた蛇口のように不満は漏れ続けている。

『なんだって、俺が。くそ、眠いな……、ん？なんだ？』

今日、何度目になるのか分からない欠伸を終えた彼は、ふと廊下の奥に一瞬だけ何かが通り過ぎるのを見た。

眠気から動きまで緩慢になっていた男の意識が一瞬で覚醒する。

『侵入者かつ！？おい、待て！』

突然の事に彼は走り出し、通り過ぎた影を追って廊下の角を曲がる。そこには誰もおらず、彼は足を止めた。

ただ、彼の耳には夜勤が始まってから常に聞き続けていたうんざり

する音が届いていた。

石畳の上を移動する音だ。

音を頼りに彼は音の聞こえてくる方へと走るものの、存在するであろう者の姿は一向に彼の目には映らない。

『おい！止まれっ！』

男は大声を出すものの、足音は止まない。

暗闇に紛れているのか、いまだにその姿を捉えられないものの誰かがいるのは間違いない。

再度、止まる様に彼が叫ぼうとした時だった。

『くそ！おい・・・なんだ？止まった？』

彼に聞こえていた唯一の音が急に途絶えた。

おそらく、見えない誰かが足を止めたからであろうが、姿はやはり彼の目には映らない。

『隠れた・・・のか。お、おい、いるのは分かってるんだ、出てこい！』

叫んだ声に反応した様な物音はない。

彼は唾を呑みこみ、意を決して槍を構えながらゆっくりと歩き出した。

途中にある物陰などに細心の注意を払い、時には後ろを振り返りながら常に周囲を警戒している。

彼がそこまでするのも当然だった。

忍び込んだ者がどんな者かも分かりはしないが、下手をすれば王族の者を狙う暗殺者の可能性もあり得る。

仮にそうであれば、兵士である以上、全力で止めなければいけない

が、彼が口封じとして先に殺されてもおかしくはない。彼は慎重に成らざるを得ず、戦場とは違う緊迫した中で歩みを進める。

息も自然と荒くなり、粒の汗が額に浮かぶ彼はもう限界も近そうだ。

『そ、そうだ。応援を呼ぼう』

良い考えに恐怖が多少薄らいだ彼だったが、自分のいる場所がどこから分かるとそれが無理だと悟った。

今、彼がいる場所は城でも人通りが少なく、書庫や客間といった普段使われない部屋が連なっている。

ここから彼が叫んだ所で、詰所の仲間に声は届く事はないだろう。かといってこのまま一旦引き下がれば、その間、侵入者は野放しになる。

彼には進んで侵入者を捕えるしか選択肢がなかった。

『ふーっ、・・・よし』

深呼吸をして息を整えた彼は、落胆した心に気合を入れる。

若干ではあるが彼に落ち着きが戻り、再び捜索に戻ろうとした時だった。

彼の背後に、傷のある女の顔が逆さに浮かび上がる。

『おい』

『うおっ！？ぎゃああああっ！？』

振り向いた先に上下が逆になっている女の生首があれば誰だって驚く。

彼も例外なく女の声に反応して振り向いた途端、目にした生首に悲

鳴を上げながら体が思わずのけ反る。

そこへ俊敏に女の手が伸び、男の口と鼻を手に持った布切れで塞ぐ。

『静かにしろ』

『ぶふおっ！？んーっ！？』

呼吸が制限され、咄嗟に女の手を放そうと男がもがく。

ただ、女の力は尋常ではなく、男がいくら必死になって剥がそうとしてもまるでビクともしない。

息が続かない男は空気を吸いこもうとすると、その鼻に何か刺激のある匂いがこびりついた。

な、なんだ、このにおい……。

嗅いだ瞬間、男の意識は遠のき、あっという間に彼の体から力が抜け落ちて女の腕からも手が離れる。

完全に意識が無くなったのを確認した女は男から布を放すと、布は淡い光の粒になって消え、男は床へと倒れ込んだ。

『……』

後に残ったランタンがうつすらと女を照らす中、女の顔が回転したかと思うと上下が入れ換り、正常な位置になる。

額から口にかけての傷が目立つ顔、暗闇の中に立っていたアリウスだった。

ランタンの前に立った彼女は闇に紛れる様な黒い服装であり、光源が乏しい場所なら生首が浮いているかのように見えるだろう。辺りの様子を窺いつつ、彼女は倒れた男の額へと手を当てる。

『こいつのせいで更に迷ってしまった。役に立ってもらおう』

静かに彼女は目を閉じたかと思うと、彼女の男の額に当てた手が淡く光り出す。

『リアルメモリー』を使っているかのようにだったが光は形をなす事はなく、そのまま男に流れ込む様に男の額が光る。

『くっ』

思わず言葉を漏らし、眉をひそめる彼女。

今、彼女の中には男から大量のイメージが流れ込んでいた。

兵士詰所で仲間の兵士達と談笑する場面、食堂で意中の娘へ声をかける場面、訓練所で足腰立たなくなっている場面など、男の主観で体験した記憶の中の体験の様だ。

次々と男の体験した情報が流れ込み、彼女はようやく欲していた場面へとたどり着いた。

それは、男が兵士詰所で見ている城の見取り図だった。

城の見取り図は敵に攻められた事を想定し、そう簡単に表に出回らぬよう手配されているため、彼女も忍び込む前に手に入れる事は出来なかった。

そして、行き当たりばつたりで忍び込んだ結果、迷い、兵士に追いかけられる羽目になった訳だ。

彼女はようやく目的の部屋の場所を割り出すと、男の手から光る手を放し、光は手から雲散していった。

一息ついて立ち上がる彼女だが、立ち眩みでふらつきバランスを取る。

『久しぶりに使ったが、やはりあまり使うものではないか。まあいい、それも後少しの事だ』

眩みもなくなつた彼女は、頭に浮かぶ地図通りに足を運び、窓から飛び出す。

常人なら吸い込まれる様に地面へと落ち、死んでもおかしくないだろうが彼女は『旅人』の力でつけた勢いそのままに、屋上にまで飛び上がる。

そして、屋上の縁に手で掴まるとその前を見張りの兵士が歩いていた。

幸い、兵士には気づかれる事なく通り過ぎていき、アリウスは縁から屋上に飛び出たかと思うと、今度は反対側から飛び出した。落下しながら目的の部屋のバルコニーを彼女は視界に捉える。

『・・・』

命を落としそうな行為をしつつも張り付いた様に彼女の表情は変わらない。

目的の場所が近づいた途端に彼女は手を出してバルコニーへと掴まった。

バルコニーに上った彼女はドアを押しつけ、様子を窺いつつ中へと静かに入る。

そこは誰かの部屋らしく、豪華な装飾が部屋の所々に施され、巨大なベッドが1つとテーブルや椅子などの家具が取り揃えられていた。部屋の主である者は既に寝ているらしく、ベッドで寝息を立てながら布団が上下に動いている。

アリウスは気配を消してもっと中に入ろうとした時だった。

彼女の足に何かが引っ掛かったかと思うと鈴の音が鳴り出し、寝ていた者の寝息の音が止まった。

『畏か』

『何者だ？』

アリウスが足元の細く見えにくい紐を引っ張る事で鈴が鳴りだすと

いう単純な罠に感心している内に、部屋の主であるオーウェンは起き上がり、手には抜き身の剣を携えていた。ベッドから起き上がった彼は剣の切っ先をアリウスへと向ける。

『何者だ、と聞いた。答えられないなら、暗殺者でもとるが？』

剣を向けられているはずのアリウスは苦笑いをしながらも落ち着いて様子だった。

顔は笑っていても目は冷静なままの彼女にオーウェンは気を引き締める。

『暗殺者か、あながち間違いではないかもな』

彼女の言葉にオーウェンは怪訝な顔を浮かべる。

『あながち、だと？』

『お前にとって私は人生を壊す者かもしれないと言う事だ。命を取る気は毛頭ない』

『おかしな事を言うものだ。王子である私の人生を壊すと言うなら、お前はこの国を、イーグランドを壊しにでも来たと言うのか？』

『あくまでもお前個人の話だ。・・・『旅人』を知っているか？』

その言葉に突き付けた剣の切っ先が大きく揺れた。

彼は城の書庫で得た古くから伝わる伝説的な話を知っていた。

信じられないほどの力を持ち、無限ともいえる魔力で何でも作り出し、また不老不死でもある『旅人』という神話で聞く様な神とも思える存在。

場所が場所であるなら彼も国や街を渡り歩きただの旅人を想像して
いただろう。

ただ、目の前の侵入してきた見慣れない女が突然口にした言葉。
オーウエンの頭には『旅人』の事しか浮かんでいなかった。

彼の表情は変わらないが、体の至る所から細かく出る「私は知って
いる」という情報にアリウスは内心で説明が楽だと思っていた。

『その『旅人』が何だ？お前が私の部屋に忍び込んだ事と関係し
ているのか？』

『私がその『旅人』だと言ったらどうする？』

『っ！？そ、そんな馬鹿な事が……。いや、だったら証明して
みせよ。『旅人』は魔力から物を作り出せるはずだ』

『よかるっ』

アリウスが手を彼の前に差し出したかと思うと淡い光が手のひらに
集まり、集約していく。

光が消えた時、彼女の手の上にはオーウエンが構えている剣と全く
同じ物があった。

『信じられん！まさか、本当に』

『お前の剣を作った。見た所、中々な装飾が施してある。同じ物
は2つと存在しないのではないか？』

驚きを隠そうともしないまま、彼は切っ先を向けたまま、剣を手に
取った。

造られた剣は装飾どころか破損している部分まで全く一緒に、長年、

同じ剣を使い続けた彼でも本物がどちらかは分からないでいた。

『これはこの世に一本しかないイーグランド王家に受け継がれる剣だ。それがここまで全く一緒だとは……』

『信じたか？ご不満ならいくらでも出せる』

アリウスは次々に同じ剣を作り出して、床へと落ちていく。湧き出る様に増え続ける一本しかなかったはずの剣にオーウェンは言葉もない。

無造作に溢れ出る剣にオーウェンは剣を引いた。

『……もういい、分かった』

『そうか、なら用済みだ』

アリウスが手で触れた剣は全て消えていき、あっという間に出したはずの剣はオリジナルの一本を残し消え去る。夢でも見ているかのような光景にオーウェンは気分を悪くしたようだが、彼女はそんな事などお構いなしに話に戻る。

『私がここに来たのは他でもない。お前に『旅人』としての素質があるか見極めるためだ』

『！？わ、私を『旅人』にする気がっ！？』

力への羨望や未知への恐怖が入り混じった彼の顔は引きつりながらも笑っていた。

危ういか……？

変化した彼の表情に若干の危機感を抱いたアリウスだったが、目を

見開いて彼女を見るオーウェンに話を続ける。

「まだ見極めているだけだ。私が引き継ぐに足る存在だと思えば、お前に『旅人』としての力を渡す。もし、駄目であるなら私は去るだけ」

「力を引き継げばどうなる？ 私はこの国を去る事になるのか？」

「別にどうもなりはしない。力を持ったままこの国で好きに生きればいいが、ガイアからの命令に対しては絶対順守だ。逆らえば命はない。・・・伝える事としては十分だろう。私は一旦引く」

彼女は後ろへと軽く飛ぶとバルコニーへと飛び出る。

「ま、待てっ！ 話はまだ！」

追いかけてバルコニーへと出ようとしたオーウェンだが、アリウスは羽の様に飛び上がり、バルコニーから飛び出した。

「いいな、しばらくの間、お前を見ている。それを忘れぬ事だ」

下へと落ちていった彼女を目で追いかけるオーウェン。

身を乗り出して下を覗くと、彼女は地面へと直撃する寸前だった。反射的に目を逸らしたオーウェンだったが、視線を戻すとアリウスは屋根から屋根へと飛び移り、城の城壁から外へと飛び出していった。

あれが『旅人』……。

オーウェンは初めて会った『旅人』に打ちひしがれ、バルコニーの手すりに手をかけてもたれる。

彼の頭の中では今の話が2巡、3巡し、体は固まったかのように動

きはしない。

突然吹き抜けた夜風が彼の髪を優しく撫でたかと思うと彼の体は小刻みに震えだした。

『・・・ハ、ハハツ！そうか、あれか、あれこそが『旅人』、か』

妹のヴァネッサや城の者には見せた事もない引きつった歪な笑顔を彼は浮かべる。

自室へと戻るその胸中には何を思い描いているのか誰にも想像はつかない。

「大物だな」

ロビンは呆れたようにため息をついて、手を額に当てる。

彼が見下ろす先にはベッドで横になり、彼を待っていたはずの瞬間がロビンが立っているのにも気づかないほど爆睡していた。

寝息を立てる瞬へとロビンが水の入った桶を作り出し、ひっくり返せば当然水は瞬の顔に降り注ぐ。

「うぶっ！？へ？あ・・・、ロビンさん」

「俺をほったらかしにするとは良い度胸だな、お前」

「い、いや、疲れが溜まってみたいで気が付いたら・・・あはは」

愛想笑いでごまかしにかかる瞬をロビンは真剣な眼差しで見つめる。だが、冗談の通じない雰囲気、瞬の乾いた笑いもすぐに終わる。

「お前、疲れはまだあるのか？」

「え？そうですね、疲れはないと思います。ただ……」

「ただ？」

「お腹が、その」

「腹がなんだ？言ってみろ」

「減りました」

「……」

呆れたロビンは無言でテーブルの上に手をかざすと次々に料理が出てきた。

瞬も見つけた事があるものもあれば、見た事もない変わったものまで所狭しとテーブルの上に並ぶ。

腹が減っているだけに山の様な料理が映れば、瞬の目も輝きを帯びた。

「食え」

「ありがとうございます！では」

次々と胃袋に放り込んでいく瞬を見ながらロビンは思う。

俺が久しぶりに真面目に考えているってのにこいつは一体何なんだ、

と。

どうも調子が狂わされているのを感じながらも、彼は今の瞬の状態には興味があった。

「おい」

「ふぁい？」

口一杯にスパゲッティを含んだ瞬は顔だけはロビンに向ける。リスを想像させる様な姿にロビンは内心で溜息をつく。

「あのな、お前が飲んだ毒だがな、あれは暗殺者達が好んで使う物だ。人1人分を殺すだけの毒だがお前はそれに耐えきり、怪力や疲労回復といった能力まである。どう考えてもその力は『旅人』の力と同じだ。まあ、劣化してはいるようだが」

「んぐつ、そうですね」

「問題はだ、魔力をどこから取っているかだ」

「もぐつ、魔力？」

「そうだ。おそらく力があるのは『旅人』だったため、体に染みついた一部の力が残っているからだろう。1年もたてば力は完全に体と同化し、『旅人』の力を他人に渡す時には体ごと取りこまれると聞いている。ただ、俺はそれまでに『旅人』を止めた者など聞いた事がない。おそらく同化した期間に応じてお前の様に力が残るんだろうな。・・・だが、魔力だけは別だ。『旅人』を止めた事により、お前がガイアから受ける魔力供給は切れたはずだ」

「そうなんですか？はぐっ」

「そうなんだよ！今のお前はお前自身の魔力のみで身体強化を使っている状態だ。使っている自覚はあるか？」

「んぐっ、いえ、全く」

「だろうな。お前が大剣を振った時を覚えているか？あの時、お前から常に魔力が流れているのを感じた。お前自身が魔法を使っている自覚はなくても自動で使われている状態なんだろう。それが全く尽きないと言う事は、お前に眠る魔力はとんでもなく多いのかもしれん」

「はあ、なるほど。・・・はふっはふっ」

「どうしてもよさそうに言うな！そんで食いながら聞くな！」

「いや、暖かい内に食べないと。それにロビンさんがせっかく出してくれたので」

そう言いながらも次は何を食べようかと瞬の目は料理に泳いでいた。立ち上がったロビンは無言で次々と料理を消していき、瞬が手を伸ばしていた料理もその目の前で消す。

「あっ！なんで消すんですか？」

「うるさい！お前が真面目に聞かないのが悪い」

「ちゃんと聞いてますよ。ただ、食べてもお腹がそこまで一杯にならないんです」

「あれだけ食べてまだ？・・・もしかすると、毒からの回復に体力があるからか？『旅人』は飲まず食わずでも生き続けられるが、お前はそうでもない。・・・悪かったな、食ってる」

目の前にまた大量の料理が並ぶ。

瞬は唾を飲み込むが、まずロビンに向かって一礼した。

「すみません、聞いていない様に見えて」

「いいさ、謝る必要もない。・・・さて、お前の状態はそんな所だろう。これからどうするんだ？」

「未来に帰る手段を探します」

「だろうな。一応聞いておくが、こっちに来た時はどういう状況で来たんだ？」

「あの時は・・・」

「ストップ」

「？」

「状況だけでいい、細かい話や未来での話はなしだ」

未来の情報を余り知るべきではない。

ロビンはそう考え、ちよつとしたことからでも未来を知る可能性を減らしたかったからの発言だった。

瞬はそんなこと知ってか知らずか、ミサイルが爆発した時の話を簡

単に教えた。

おおよその内容で納得したのか、ロビンは話を聞き終わるとすぐに口を開いた。

「お前が未来に帰るには、過去に来たであろうそのグランとか言う奴を捕まえるしかないだろうな。少なくとも俺は時間移動が出来る奴は知らん」

「・・・そう、ですか」

目に見えて落胆する瞬。

グランが過去にいるのかも不確かであり、いたとしても何処にいるのが瞬には分かりはしない。

この広い世界でたった一人を探すのは、砂漠に落ちた米粒を探すのも同じ話だ。

「まあ、そう気を落とすな。意外と近くにいるかもしれないだろ？」

「・・・そ、そうですね！探して見ないと分かりませんよね！」

「暇つぶしに俺も探してやるが、くれぐれも未来を書き換える様な真似をするだけは止める。下手をすればお前の来た未来は存在しなくなる」

「気をつけますけど、闘技大会に出るのは・・・」

「駄目に決まってるだろ！」

「ですよね・・・」

「……と、言いたい所だが、こんな小さな国の大会に出るくらいであれば問題ないだろう。舞台に立つ事でグランも見つかるともしれないしな。だが、極力人との接触を避けて優勝だけはするなよ？」

「優勝は駄目？」

「そうだ、優勝すればあの姫と結婚を賭けて戦う事になるからな。もし結婚でもする事になれば、それは歴史を書き換える行為だろう？」

「姫、と結婚……？」

初めてその話を聞いた瞬だったが、その頭によぎったのは毒の入ったグラスを持ったヴァネッサの姿だった。

毒を飲んでも無事だった上に、過去のロビンと会った事で意識の外だった姫への疑惑が再度強まる。

どうして、姫が僕を……。

押し黙り難しい顔で深く考え込む瞬に、ロビンはついさっき彼を殺そうとしたのがその姫である事を思い出す。

「お前、姫に殺される様な事を何かやったのか？」

「いいえ！そんな事は何も！」

「じゃあ、なんでお前に毒を飲ませたんだろうな？」

「それは……分かりません……」

改めて言われたことでショックを受けた瞬は顔を俯けてまた口を紡ぐ。

本当に心当たりはないようだ。

瞬の態度を見ているだけで分かったロビンは、グラスを回収に来た隠者を思いだす。

動きだけを見れば確実に暗殺者の類であるのは確かだった。

それが得体の知れない東洋人に差し向けられた。

姫とどういつつながりがあるのか、また、今が一体どういう状況なのかも部外者である彼には分かるはずもないが、確証も何もなし以上、瞬に軽率に言う気はなかった。

何しろ、下手にそんな話をすれば、自分を殺そうとした真意を探ろうと瞬は犯人捜しを始めることになりかねないからだ。

城が騒がしくなるのは色々と困る事があるロビンとしては、瞬にアドバイス程度しかする気もない。

「まあ、ここにいればお前が死んでいないのは相手にもすぐに分かる。焦った相手は第2、第3の方法で殺しにかかってくるだろう。このまま、お前がここにいるのならば、防ぎ続ける事で真相が分かるかもしれない。だが、一番良いのはここを出ていくことだ。そうすれば今後は何も起きないし、お前という邪魔者が消えた事で歴史は何も変わらない」

「・・・」

「ここでお前を殺そうとした真相を探るか、ここを一旦出るか。どっちにするかはお前が決める」

言われて眉間にしわを寄せて考え込む瞬。

数秒ほどで閉じた眼を見開き、ロビンを見返した。

「城を出ます。僕は本来いない存在ですし、どう動けばいいかもよく分かりません。一度、城から出てみたいと思いますが、お願いが……」

「何だ？」

「ロビンさんについていいですか？」

面食らった顔のロビンは言葉も出ずに固まる。

対して、瞬の顔は真剣そのものであり、「冗談抜きでついていくつもりだよ。」

「おいおい、俺はそこまでお前と仲が良いとは思っちゃいないぞ？出ていくなら一人で出ていけ」

「お願いします。色々と話や教わりたい事があるんです」

頭を下げて頼みこむ瞬。

このまま放っておいても意地でもついてきそうな勢いにロビンも困った顔を浮かべる。

面倒くさそうに頭を掻いた彼は、溜息を一つつくど渋々同意した。

すると、満面の笑みで感謝する瞬は手早く姫から貰った武器を装備し、すぐに準備を済ませる。

部屋に置いてあった紙に持病が悪化したため去るという内容の文をロビンに代筆してもらい、最後に部屋のランプの光を消した。

「さ、行きましょう」

「やれやれ、全く何だっただ俺が子守を」

「子守って僕は・・・、ああ、そういえば歳はおじいちゃ」

「ナニカ、イツタカ!？」

突然放たれた殺意に瞬の出かかっていた言葉が引つ込む。

殺気に耐えられるだけの精神力はある瞬でも、鬼の様な表情と全身から放たれる威圧感に冷や汗が頬を伝う。

「ガツ!？な、なん、だ・・・」

たまたま外を見回っていい兵士が、急に息苦しさを感じて倒れ込み、その音でロビンは我に返る。

すると瞬を襲っていた圧迫感が消え去り、息苦しさを解放されるとたまらず肩で息をする。

「兵士か。気づかれるのも面倒だし、さっさといくぞ。俺に乗れ」

「は、はい」

しゃがんだロビンの背中に乗り、瞬はおんぶされた状態で部屋の窓から外へと飛び出た。

お、おじいちゃんは禁句ですね・・・。

前に会った時は殴る程度で済ませたのを思いだした瞬は、500年という歳月によるロビンの変化を体で感じながら二人は闇へ紛れていった。

第48話：亡霊国へ(7) (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとありがたいです。

第49話：修行&逃避行（1）

太陽が山の陰から顔を出し、アリウスを明るく照らしていく。

闇のカーテンが取り払われていく様な光景の中、城からそう遠くない場所に位置するアンガスの家にも日の光が当たる。

窓から照らす光が室内を明るくしていくものの、アンガスは鍛えた巨体で窮屈そうなベッドに横たわり、早朝であるためかまだ深い夢の中にいた。

いつもなら後数時間は眠り続ける彼だが、それは不意に訪れたドアを叩く音に邪魔される。

それもただの軽いノック程度なら彼も無視して眠り続けていただろうが、ドアを蹴破ろうとでもしているのか、ドアが揺れると同時に棚の埃まで舞い散れば彼も起きざるを得なかった。

『・・・ふがぁーっ！なんだ？』

寝ぼけながら起き上がった彼はまだ寝足りない自分を起こしたドアを忌々しげに見つめ、ベッドから降りた。

ドアに向かう間もドアを叩く音は止まず、段々と彼にも怒りがこみ上げていた。

彼は乱暴にドアを開くと、相手も見ずに怒りを吐き出すつもりで怒鳴り声を上げる。

『こんな朝から誰だ！・・・って、姫様！？』

ドアの前に立っていたのは自分が使えているイーグランド国の姫、ヴァネッサ・イーグランド、その人だった。

いつもの訓練用軽装を身につけ、煌びやかな宝石の類などは一切身につけてはいないものの、凜とした佇まいは王族である事を彼に強

く再認識させる。

いきなり怒鳴られて言葉も出ないのか、ただジッとアングスを見る彼女に対し、アングスは一気に顔が青ざめていく。

『も、申し訳ありません！姫様だとは知らず！』

『・・・悪いな、こんな早朝に』

『い、いえ、滅相ありません！いつでも来られて構いませんので！・・・それで、その何かご用が？』

『これを見る』

そう言つて彼女が突き出したのは一枚の紙切れだった。

目をこすりながら見たアングスはそこに書かれた短い文を読み終え、どこか合点がいったような納得した顔をする。

それが気に入らなかつたのかヴァネッサは眉をひそめる。

『この書置きを残して瞬はいなくなつた。最後にお前が修練に付き合つたと聞いているが、何か知っているのか？』

『修練が終わつた後、アイツが血を吐いて倒れていたんです』

『何！？それでどうなつたんだ！？どうして血を吐いた！？』

今にも掴みかからんとしそうな勢いにアングスも焦り、体をのけ反らせながら彼女に答えた。

『そ、それがよく分かります！見つけた時には血を吐いていて、意識もなかつた。なのに、医務室に運ぼうとした途中で意識を

取り戻して、何事もなかったように起き上がったんです！足元もすっかりしていて、とても血を吐くような重病人には見えませんでした！奴が言うには体質だとかふざけた事を……」

『……そうか、病気が』

慌てふためいて説明するアンガスの言葉にヴァネッサは何か思う所があるのか、彼から視線を外して考え込む。
急に黙り込んだ彼女にアンガスも戸惑いを隠せない。

『あの、姫様？』

『よい、それでその後どうした？』

『い、いえ、大丈夫だと言うので医者に見せる様に言って別れました。私はそれっきりです』

『そうか、瞬は街を出ていった様だが行く先に心当たりは？』

『心当たり……そういえば、アリア湖の話をしました。人が全くいないから澄んだ水が綺麗だと』

『そうか！』

そこまで聞いたヴァネッサはアンガスに背を向けた。
今にも走りだしそうなヴァネッサに本能的にアンガスは手を肩にかけて止める。

『ちょ、ちょっと、姫様！？見た所、護衛もない様ですし、まさか、お一人で探しに行くつもりですか！？』

『そうだ。分かったらその手を』

『そんなことをすれば、王子がお怒りになりますよ!?!』

これはヴァネッサの急所だった。

血の繋がった兄に普段は強気なヴァネッサも逆らう事は出来ず、オ
ーウエンの名前を出せばある程度は彼女の動きも抑制できた。

アンガスはこれでひとまずは落ち着くだろうと、家族をダシにした
卑怯さを心の中で謝りながら彼女が力を抜いたのに気づく。

自然と彼女を掴む力を緩めるアンガス。

彼の思惑ではこれで城の者に搜索を任せて、姫自身は城へと帰る、
はずだった。

完全に彼女からアンガスの手が離れたと同時に、ヴァネッサはいき
なりアンガスの前から走り出した。

『ええっ!?!? 姫様!?!?』

『悪いが、私が奴を探さねばならんのだ。義理を返さねばならん
からな! それにお兄様は朝早くにお出かけになられた! しばらく戻
られないそうだ!』

『なんですって!?!?』

突然の話にアンガスはまた驚く事になった。

瞬は消え、姫は探しに出ていこうとする上に、王は病で養生してい
る中、肝心な王子まで出かけてしまった。

最早、彼にはどうすればいいのか分かるはずもなく、混乱する頭は
とりあえず姫を止めるべきだと判断したものの、ヴァネッサは今に
も視界から消えてしまいそうなほど遠くまで行っていた。

『止まって下さい！ああ、くそっ！』

アングスの家から離れていくヴァネッサを追って、彼は立てかけておいた長剣を取るとすぐさま彼女を追いかけた。

その胸中にはこれから先への不安が胸を締め付ける様に漂っていた。

朝日が差し込み、水面で光が反射して一面が眩しい程に輝くアリア湖。

周囲を山に囲まれ、その間を縫う様にひたすら続く一本道しかたどり着くことはできない。

普段でも人など全く通らない道に当然ながら早朝に人気がある訳もないはず・・・だったが、その道を走る二人の姿があった。

人としては信じられないほどのスピードで走り抜けていく二人だが、一人は疲労している様子が見えるのに対し、もう一人はまるで座つてくつろいでいるかのように余裕が見て取れる。

「はっ、はっ、そ、そろそろ着きますか？」

「ああん？そうだな、もう少しだったんじゃないか」

「ぜっ、はっ、さ、さつきも、そう言っていましたよね。はあっ、はあっ」

「俺がお前にわざわざ付き合っただけでやっつてるんだ、文句言わずに黙って走れ。置いていっても良いんだぞ？」

「す、すいません。ぜつ、でもそろそろきつ、ゲホツ！」

「・・・まあ、お前も一時は『旅人』だっただけで人間だからな。けどな、ゴールは見えてるぞ」

ロビンが先を見る様に顔を振ると、瞬もその先へと視線を向けた。その見る先にはアリア湖がまるで二人を出迎える様に煌びやかに輝いていた。

瞬は走っている苦しさも一時は忘れてしまったが、息を呑みこんでむせるとすぐに今の状態を思いだす。

「ゲホゲホツ！」

「おいおい、大丈夫か？」

「な、なんとか」

「たかが60km程度でそれじゃこの先、俺のしごきに耐えられんぞ？」

「60kmは、僕でもきつつ、はあっはあっ！」

「頼んだのはお前だからな。ついてこれないなら放っておくだけだ」

ロビンは楽しげに笑ってみせ、瞬の顔を更に青くさせる。

頼んだのは間違いだっただかもしれない・・・。

不安だらけの瞬だったが、自分で頼んだからには後悔はないと不安を振り払う。

二人が城から離れた後、瞬のために一時の仮眠を取り、日の出前か

ら移動する時に瞬はロビンへ闘技大会へ向けての修行をお願いしていた。

とは言っても、剣は使い慣れていなくても単純な身体能力だけでヴァネッサと渡り合える力は既に持っている。

付いてくるだけでも面倒くさそうにしていたロビンは一度はそう言ったが、何度も頭を下げて頼む瞬に渋々了承した。

アリア湖に行くのも瞬が提案した訳だが、場所もよく分かっていなかった瞬は、結局ロビンに先導される形で走り続けて早2時間。ようやく湖のほとりにまでたどり着くと瞬は草の上に大の字になって寝転がった。

「はあっ、はあっ……」

「おい、誰が休んでいいと言った？修行するんだろ？」

「は、はい」

ゆっくりと立ち上がった瞬だが、まだ余力は残っているらしく足取りもしっかりとしている。

真剣な眼差しでロビンを見返すと、彼は鼻で笑って小振りな剣を作り出した。

「普通の人間ならまずは体を鍛える所だが、お前の場合は省略だ。戦った経験はあるのか？」

「え〜と、まあ、それなりに。ただ、剣は苦手です」

ロビンは怪訝な顔を浮かべる。

「……今までどうやって戦ったんだ？『旅人』の力を持ってい

「たんなら素手か？」

「そうですね、体術と銃を主に使っていました。剣はあまり知りませんが、刀なら教えてもらった事があります」

「銃、か。やはり未来じゃ銃の時代か。それに刀つてのは日本刀の事か？」

「え、日本刀を知っているんですか？」

「知っているさ。これでも長い間『旅人』をやっているからな」

そう言うとロビンは鞘に収まった刀を作り出して瞬へと放り投げた。慌てて受け取った瞬は高揚する気持ちを抑えながら刀を抜いてみると、美しい波の紋様が彼の目に映り込む。

銘も知らない刀だが、引きこまれる様に美しい紋様に瞬は息を呑む。

「こ、これです！まさか、刀に出会えるとは思ってませんでした」

「そいつはよかったな。それならくれてやるから、それで俺にかかってこい」

「え？」

戸惑う瞬の前でロビンは剣の切っ先を瞬へと向けた。

彼は何かを企んでいるのか、口の端を上げながら瞬へと言う。

「お前の今の力を調べるためだ。全力でかかってこないと返り討ちにするぞ」

ふざけた口調だが、どことなく真剣さを帯びているのに瞬は気づいた。

ロビンの様子に促される様に瞬は鞘を腰に挿し、名も知らぬ刀を抜いて正眼に構える。

背筋の伸びた基本的な姿勢はぶれず、気持ちを落ち着けていく瞬からは自然と無駄な力も抜ける。

明らかに経験がある様子にロビンも顔色を変えると、瞬と同様に剣を正眼に構えた。

「いきますよ」

「ああ、いくらでもいい」

優しく頬を撫でる程度の風が吹き抜けると同時に、瞬はロビンへと飛び出す。

刀を下へと振りかぶり、猛然とロビンへ斬りかかる。

それを受けてロビンは来るであろう斬撃に向けて剣を斜めに構え、後手に回った。

刀の届く範囲にまで詰め寄った瞬は刀を振るうタイミングで、すかさず横へと飛んだ。

体勢を低くし、ロビンからはさも消えたかのようにしてロビンの左へと回りこむと、構えた刀を振り上げる。

人を超えたスピードで常人ならば確実に死んでいるであろう一撃。

だが、瞬にあつた手応えは人を斬ったものではない。

甲高い音を上げる峰にはロビンの剣の刃が交わっていた。

止められた事には驚きもなく、瞬は素直に一旦離れた。

すると、ロビンの不機嫌そうな顔が目につき、瞬は何か悪い事でもしたかと思ってしまう。

「……おい、ふざけているのか？」

「そんな、ふざけてなんかいませんよ」

「なら、その刃はなんだ？俺を斬るんじゃない、殴るつもりか？」

「・・・それは、人を殺したくはないですし」

「俺もなめられたもんだ、な！」

ロビンは踏み込んだ足が爆発したかのように土砂を巻き上げながら瞬へと飛びかかる。

瞬が気付いた瞬間には目と鼻の先に剣先があり、刀で防ぐには遅く、瞬は体をのけ反らせて斬られる寸前の所でかわす。

無茶な動きに体勢が崩れ、倒れかかった瞬へロビンの追撃が襲いかかる。

「くっ！」

瞬は体は倒れるままに刀を強引にロビンとの間に割り込ませ、迫りくる剣を止めたものの圧倒的な抑え込む力に敵いはしない。

背中から地面へと倒れこむと、地面に埋めるかのようにロビンの力は瞬を強く押しこむ。

「がつ！」

「このまま草花の栄養にでもなるか？」

「そ、ういう、訳には、いきません！」

瞬は地面を背にした事で踏ん張りが多少効いた渾身の返しを放つ。

ロビンの剣が押し返された隙にすかさずロビンから逃れ、距離を取ると肩で息をしながら体勢を整える。

その表情は走っていた時の苦しみなど大した事がないかのように思えるほど、血の気が引いて青ざめていた。

「俺を殺す心配より、自分の身を心配したらどうだ？お前も元『旅人』なら俺がその気になれば何時でもお前を潰せていたのは分かるだろ？」

まるでピエロの様に大げさなジェスチャーを交えながらロビンはおどけてみせる。

相変わらずふざけた態度を取る彼だが、言葉の内容が本当である事を実感している瞬には笑えはしない。

「それでもまだ刃を向ける気がないなら俺はお前を殺す。瞬きした次にはお前の命はないと思え」

言葉が終わると同時にロビンの顔つきが無機質な表情へと変わる。途端にロビンから、瞬が体験した『名無し』のとは桁違いの殺気が辺り一帯に発せられる。

木々に止まっていた鳥は我先にと一斉に飛び立ち、湖の中では食物連鎖そつちのけで生物達はロビンとは逆の方へと逃げる。

耐性のある瞬でさえ、胸を締め付けられるような息苦しさを体中の感覚が狂った様な状態に陥り、立ったままロビンと対峙する事さえままならない。

「・・・分かりました」

ロビンから流れ出る殺気に冗談ではないと感じた瞬は、刀を持ちかえ、刃をロビンへと向ける。

すると、今までのが嘘だったかのように瞬は息苦しさや目眩などから解放される。

「それでいい、それじゃかかってこい」

信じられないほどの殺気を放ったロビンだが、今はにこやかに言い放つと剣を構えて瞬を待つ。

何時でもいいと言っているかのように剣先は手招きするように揺れていた。

相変わらずマイペースな人だ。

瞬は心の中で初めてロビンと出会った時を思い出しながら、刀を構えると体中の力をため込み、今か今かと待ちわびる力を解き放つ。さつきとは違う純粹に速さだけに頼った突撃は先の動きよりも早く、余裕のあるロビンへと瞬は正面から斬りかかった。

「フッ！」

「ほう」

ロビンも目を見張るほどのスピードで迫る刀。

だが、ロビンは顔色一つ変えることなく刀の軌道上に素早く出した剣で斬撃を防ぐ。

これだけ見れば先ほどと結果は変わらなかったが、剣と刀が交差している部分では大きな変化があった。

剣の刃に刀がめり込んでいたのだ。

剣を斬るまでには至らないものの刀は剣の半ばにまで食い込み、もう一度同じ攻撃を食らえば折れてしまっただろう。

瞬は1歩だけ後ろに下がると、剣から引き抜いた刀で上下左右に連続して斬りかかる。

次から次へと息もつかせぬ攻撃に対し、ロビンは涼しい顔で全てを

受け切ってみせる。

「どうした？そんなもんか？」

余裕がある発言ではあるが、受け続けるロビンの剣が軋んでいるのを瞬は見逃していなかった。

もう少しで折れるのを確信した瞬は出来るであろう隙を狙ってとにかく何度も斬りかかる。

後少し・・・！

少しでも手を緩めれば反撃される以上、一撃一撃が手を緩めるわけにはいかない。

フェイントも織り交ぜながらの全力の斬り込みは幾度となく続き、ついにその結果が現れた。

ロビンの剣が音を上げて崩壊したのだ。

『旅人』といえど剣を作り出すには多少の時間を要する。

その一瞬を狙い、瞬は渾身の力を込めて斬りかかる。

ロビンは柄しかなかった剣を持ち、その目前には瞬の刀が迫っていた。

内心では勝ったかもしれないと瞬は思っていたが、次のロビンの行動にそれが自惚れであった事を思い知らされる。

ロビンは柄を放り投げると、何を作るでもなく、手を刀へと向けた。

瞬は咄嗟に刀を止めようとするのを余所に、彼は迫りくる刀を片手で掴み取って止めた。

「なっ!?!」

瞬が驚きに固まる間にロビンは同じ剣を作り出し、すかさず瞬へと横薙ぎに振り抜く。

刀を抜く事が出来ない瞬は刀の柄から手を放し、後ろに飛び退いてかわす。

武器が無くなった瞬だが、地面に足をつけると同時に飛び出し、ロビンへと中段蹴りを放つ。

「いいねえ」

満足げな顔で刀を消し去ったロビンは、瞬の蹴りを片手で掴み取り、力任せに引つ張る。

尋常ではない力に瞬は逆さまに持ち上げられていくが、ロビンへと近づく最中で地面へと手をつき、体勢をかるうじて整えると空いた左足でロビンに回し蹴りを放つ。

足を掴む右腕に回し蹴りは直撃し、その衝撃に瞬の足は解放された。支えを失って地面へと倒れこむ瞬。

そこにロビンの剣が迫っていた。

かわせない!?

回避はもう間に合わない事を悟った瞬の脳裏にさっきのロビンの行動がよぎり、迫る剣へと両腕を向ける。

目測を頼りに迫る剣を腕の距離に捕えた瞬間、瞬は柏手を打つように手を勢いよく重ね合わせた。

「はっ！はっ！はっ」

思わず顔を引きつらせて笑う瞬の手の中にはロビンの剣が収まっていた。

真剣白刃取りなどまさか自分がするとは夢にも思った事がない瞬の笑みは消えない。

「笑っていられる状態か？」

残っている右手に同じ剣を作り出したロビンは、横になっている瞬へと剣を突き立てにかかる。

「くあっ！」

瞬は体を曲げて剣を蹴りつけると軌道をずらし、剣は体から十センチ離れた所へと突き刺さった。

引き抜いた剣再度突き立てようとするロビンへ瞬は足をつけると力の限り踏み抜く。

当然の様にロビンはビクともしないが、その反動を利用して瞬は後ろへと滑り抜ける。

抜けた後には手で止めていた剣が体に刺さる寸前で地面に突き刺さり、瞬はかろうじて無傷で抜け出した。

腕立て伏せの様な状態のロビンは体をゆっくり起こして立ち上がり、剣を消す。

その表情はどこか楽しげだった。

「力があるのは元々だが、機転も効くし、使い方もそれなりに調節できている。名のある騎士でも人間ならまず負けないだろうな」

「はあっはあっ！・・・ふう、ありがとうございます」

「ただし、それはあくまで模擬戦までの話だ。戦場では殺意のない剣など役に立たん」

「・・・いいんです。相手を倒すまでで命を取ろうとは思いませんから」

「ふん、甘い奴だ。こんな奴が後の『旅人』とは平和な世の中にもなつたのかね・・・。さて、それじゃ最後にとっておきを見せてもらおうか？あるんだろ？」

ロビンに言われて瞬の動きが止まる。

何故、何時、何処で？

どうして知っているのかと瞬はこの時代に来てから二回ほど見せた時を思い出しても、ロビンの姿などあった訳がない。

むしろ気がつけばすぐに駆け寄っていただろう。

ならば、どうして？

疑いの眼を向ける瞬のリアクションに、ロビンは得意気に笑う。

「クツクツッ！ やっぱりあるのか。サーベルを振っているのを見てもしやとは思っていたが……。ただな、元『旅人』なら簡単にかまかけに乗るな」

「かまかけ・・・あ、嘘ですか」

「嘘ですか、じゃないだろ。お前は嘘をつくのも見破るのも下手そうだな。まあいいさ、ほらやってみろ」

日本刀を作り出したロビンは瞬へと放り投げる。

受け取った瞬は自分からばらした気恥ずかしさで眉をひそめながら、腰に鞘を挿した。

「断つておきますが、これは未完成ですからね。元々は『旅人』の時に腕を潰すほどの技でしたけど、『旅人』の力を失ってから怖くて一度も試していません」

「試してみるよ。俺が受けてやる」

ロビンは小剣を二本作りだし、胸の辺りで交差させて構える。

微動だにしない構えからしても生半可な攻撃では破れそうもない鉄壁の守りと言えるだろう。

瞬は静かに体を沈め、左手を鞘に、右手で刀の柄を握る。

「居合ってやつか」

「これも知っているんですか」

「ああ、日本の武士がやっていたのを見たが、さっきのお前の斬り込みにすら達してはいなかった。お前がやるとどうなるんだろかな」

いたずらを仕掛けて引っ掛かるのを心待ちにしている様な悪ガキの顔を浮かべるロビン。

瞬は知っているのならば大した事にはなるまいと、開き直った様に足の位置を変えて構えた。

視界の中にロビンを捉え、頭の中を斬る事のみにしていく。

瞬を中心とした周囲に斬るといふ気迫からもたらされる威圧感が放たれ、殺気とは違う居心地の悪さに戻りかけていた動物や虫達は即座に散っていった。

ただ、対峙しているロビンだけは相変わらず涼しげな顔のまま、微動だにしない。

「ほう、これは中々。期待してよさそうだ」

あくまで『イージスの盾』を出さずに受け切るつもりでロビンだが、瞬はそんな事など知る事はない。

準備が整った瞬は貯め込んだ力を解き放ち、斬る事のみで頭の中を染め、視界に捉えたロビンへと走る。

ものの二、三步でロビンを刀の範囲に収めると同時に低い体勢が更に低くなる。

鞘を抑える左手と柄を握る右手に力がこもり、瞬間的に刀は鞘から

抜き放たれた。

今までの斬り込みなどなかったかのような驚異的な早さで刀は振られ、眼に移らぬ速さでロビンへと襲いかかる。

だが、ロビンも『旅人』の力や長年の経験から瞬時に攻撃を予測し、その軌道上へと小剣二本を構える。

刀と小剣が交わった次の瞬間、瞬はロビンの背後へと回っていた。その腕は振り切られ、瞬は地面へと倒れこむ。

刀を握った右腕で体を支えるものの、その腕にはいくつもの細長い筋上に切れた傷が出来ており、傷が出来たのを今頃知ったかのように血が流れ始めた。

「ぐうっ！や、やっぱり、痛むのは変わらない、か。ロビンさん、大丈夫、です・・・か？」

瞬は倒れながら後ろを向くと、ロビンは微動だにせず、返事もない。変わりに下へ落ちる物があつた。折れた小剣二本の剣先だつた。

「まさか、二本とも斬られるとは思わなかつた」

振り向いたロビンの体と腕に一筋の線が入っていた。

来ていた黒い服を斬り裂き、その下の体へ横一線の深い傷が出来ていた。

腕は辛うじて千切れてはいないが、どうにかついていると言えるほど半ばまで斬られ、胸も骨と筋肉で臓器類は守られはしたもののもう少し強ければ骨ごと心臓は真つ二つになっていただろう。

どこからも血は溢れだして止まらず、地面を赤く染め上げていく。それを見た瞬も顔から血の気が失せ、自分の怪我などそっこのけで慌てふためいてロビンへと駆け寄る。

「大丈夫ですか！？ごめんなさい！まさかこうなるとは思っていませんでした！」

「ああ、俺も思ってた。せいぜい小剣が折れる程度だと思っていたが、ここまで斬られるとはな。こんな大怪我は『旅人』になつてからは初めてだ」

まだ余裕が感じられるロビンは、冷静に傷を眺め、見ているうちに傷は治っていく。

本人よりも斬つた方が安堵の息を漏らして座り込む。

「はあ、よかった」

「全く、俺がお前程度に殺される訳ないだろ？とは言つても、小剣がなけりゃ『旅人』の力で強化された体でも真つ二つだっただろうな」

「真つ二つ……ですか」

想像しただけで吐き気を催す瞬にロビンは呆れ顔で頭を小突く。

「痛い」

「いいか？俺を斬つたからって満足してもらっちゃ困る。俺の見立てでは幾つも改善すべき点はあるから、それを直してお前の居合は完成といえるだろう。修行はお前の刀や剣の技を磨き、居合も完成させる事を目指す」

「で、でも、これを完成させても人には向けれな」

「黙れ！俺に教えてもらうつなら俺の指導に従え。『旅人』に向ける技かもしれんが、何時、俺や他の『旅人』がお前の敵になるとも限るまい」

「え？それってどういう意味」

「ああ！いたぞ！」

「この声は・・・」

来た道から聞こえた声に二人が振り向くと、そこには馬に乗ったヴァネッサとアンガスが向かってくる姿があった。

第49話：修行&逃避行（1）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともっとうれしいです。

師走だけあって色々忙しく小説を書く間がありません。
書く気も多少無いのがありますが、年内投稿はこれで終わりです。

第50話：逃避行&修行（2）

『しゅーん！そこを動くな！』

「ひっ、姫!？」

遠く離れていてもヴァネッサの鬼気迫る気迫は瞬へと届いた。

迫りくるヴァネッサに焦りを抱いた瞬は、首を左右に振って隠れられる場所を探し、目についた場所へと咄嗟に隠れた。

「・・・おい」

「は、はい？」

「それで隠れたつもりか？」

呆れ顔で言うロビン。

瞬が隠れたのは傷が癒えたロビンの後ろだった。

彼の背でマントの裾を掴みながら、小動物の様に震える瞬は見上げてロビンの顔を見る。

「駄目ですか？」

「駄目だろうな」

「ですよね・・・」

諦めてロビンの背中から出た瞬の前に、土煙を上げて馬が滑る様に

止まった。

その背に跨っていたヴァネッサは背を足場に飛び上がり、瞬の前へと降り立った。

毒を飲まされた事も影響しているが、それよりも目の前で無言で怒りの表情をしているヴァネッサに瞬は怯え、言葉も出ないうちに両肩を力強く掴まれて揺さぶられる。

『黙って出ていくとはどういうつもりだ!』

『い、いや、その、ええっと』

瞬の眼はあらぬ方向を泳ぎ続け、一度としてヴァネッサと眼は合わせないが、逃げ場がない以上最後には合わせるしかなかった。

ちょうどヴァネッサの苛立ちも吐き出されたのはタイミングが悪かった。

『はつきり言え!』

面と向かって叫ばれ、気圧された瞬は音量も低く喋り出した。

『すいません!じ、実は生まれつきの持病で、治療に城を抜けだした、んです?』

『・・・何故聞く?いや、それよりもどうして言わなかった!? 言ってくれば私も手を貸したと言っのに!』

『い、いや、治すのが難しい病気で、えっと、そう!彼じゃないと治せないんです!』

瞬が視線をロビンに向けると、ヴァネッサと遅れてきたアングスの

視線がロビンに移る。

いきなりの無茶ぶりにロビンはため息しか出ない。

「はぁ……この下手糞め」

「?・・・失礼だが、貴方は医者か?」

怪訝な顔で問いかけるアンガスにロビンはどうしたものかと瞬の顔を見る。

「お願いします!お願いします!」

瞬は心の中で必死に懇願し、彼にしか分からない様サインを送る。目配せをする瞬の顔からロビンも嘘に付き合ってもらいたいのは大體理解したらしく、アンガスの問いに頷く形で答えた。

「残念ながらそうだ。ロビンという」

「残念って・・・ええと、ロビン殿ですか。私はアンガスと申します。それと彼女は」

ヴァネッサを紹介しようとするアンガスをロビンは手で制して止める。

「知っている。ヴァネッサ・イーグランド、イーグランド王国の姫だろ?」

二人へと軽く微笑みかけるロビン。

そんな彼とは裏腹に二人に衝撃が走り、アンガスはすかさず体を硬直させながらも腰に携えた剣へと手をかける。

今にも襲いかかりそうなアンガスだが、ロビンは焦る様子もなく、落ち着いて再び手で制した。

『そういきり立つな。俺が旅の最中にたまたま見た事があるだけだ。城下にも簡単に出てくるお転婆姫と聞いているしな』

『お、お転婆だと！？貴様、姫様に何という侮辱を！』

『止まれ、アングス。本当の事だし、気にするな』

『ちよつと！姫様！？』

『それにだ』

『え？』

『・・・おそらく雰囲気や佇まいからして今まで出会った事が無い程の使い手だ。私でも敵うか分らん』

真剣な眼差しでロビンを睨みつける様にヴァネッサは言う。

その様子にアングスも本当なのだろうと知らず知らずに唾を呑みこみ、今までの彼を見る目も次第に変わる。

『まあいい、この者でなければ治療できないと言うなら二人とも城に来るといい。しっかりとてなして』

『お断りだ。人が多い賑やかな所は嫌いだ』

『なつ！？姫様の誘いまで断るか！』

憤慨するアングスに対し、ロビンの態度はまるで変わらない。

ヴァネッサも落ち着いた様子だが、一番胃が痛くなりそうなほど気

をまわしていたのは瞬だった。

と言つても両肩を掴まれたままであるために身動きはできず、一色即発の雰囲気青ざめた顔で見るしかできない。

『どうしても城に來いと言つならこいつだけ連れて行け。俺は絶対に行かん』

『えっ！？そ、それは困りますよ、ロビンさん！』

慌てふためく瞬の前でヴァネッサは小さく息をついた。

『……つまり、二人とも來れないと言つ訳か』

残念そうに頭を頂垂れる彼女。

『あ、い、いえ、闘技大会までには戻りますから』

『……本当か？』

『勿論ですとも』

ヴァネッサは顔を上げて、今までの沈んだ表情から打って変わって明るく笑顔を見せる。

輝く様な笑顔に瞬の心臓は大きく脈打ち、ずっと見ていたいと思わせ、釣られた様に瞬まで笑顔を浮かべてしまう。ただ、それも一瞬の事だった。

彼女の次の一言に瞬どころか、その場の全員が固まる事となる。

『じゃ、私もここに留まるっ！』

『……はっ？』

『私もここで剣の腕を磨く事にする。闘技大会までに瞬と戻るかな。アンガス、お前は城に戻って着替えなどを取って来い。よろしく頼むぞ、ロビン殿』

『おいおい、お嬢ちゃん、それはいくらなんでも』

呆れたように止めようとしたロビンを置いて、アンガスがヴァネッサに詰め寄る。

その鬼気迫る迫力に瞬は逃げる様に後ずさるが、まだ掴まれている以上逃げられない。

『駄目ですぞ！姫様！一国の姫が外で泊まり込むなど！』

『堅い事言うな。ちよつとした修行だ。いいから、さっさと戻って着替えと食料を持ってこい』

『聞いてください！こんな場所で泊まるなど野宿しかないんですよ！？野宿などされた経験ありませんよね！？野生の動物が襲ってくるだけじゃなく、盗賊も出るかもしれないですよ！？それに瞬や私は良いとして、こんな得体の知れない者と野宿したとなればお叱りを受けます！？私もクビになるだけじゃなく、牢屋送りです！』

『心配しなくても私が口を利いてやる。それとお前は帰れ、城の仕事があるだろ？』

『そんな！お一人でなんていけません、姫様！』

『うるさい、野宿ぐらい経験してもよからう。それとも何か？力づくで私を止めるか？』

途端にヴァネッサの雰囲気が一変する。

放たれる威圧感にアングスの言葉は強制的に止められ、まともに言い返す事もできない。

本気でやれば確実に負けるのが分かっているアングスには、最早、ヴァネッサを素直に城へ帰らせるのは難しかった。

彼も一度は引き返すしかなかったが、そこで思わぬ援護射撃が入った。

『姫、帰った方がいいですよ。アングスさんの言う通りです』

『俺も同感だな。というより足手まといはこいつだけで十分だ』

『ロビンさん・・・』

『ふむ、それなら足手まといかどうか試してみるか？』

頂垂れる瞬からようやく手を放したヴァネッサはそのまま手を剣に添える。

すかさず止めに入ろうとしたアングスだったが、叫ぼうとした所で黒目が白目に変わり、一声もあげないまま意識を失ってしまう。

地面へと倒れるアングスの後ろにはいつの間にかロビンが立ち、首に手刀を放ったのか指先まで伸ばした腕が胸まで上がっていた。

『また叫ばれるとうるさくてかなわん。・・・さて、お嬢さん、やるならやってもいいが結果は分かりきっている。それでもやるのか？』

『強いのならばむしろ好都合。その方が挑みがいもある！』

『姫、止め』

瞬の言葉など聞こえていないかのようになり、ヴァネッサは腰に携えた鞘から細身な体には似つかわしくない大剣を抜く。

アングスが使ってもおかしくないほどの刃渡りを持つロングソードを正眼に構え、ロビンを真正面に見据える。

口出できない真剣な雰囲気になってしまった彼女へ、瞬は既に口を挟んで止める事は出来ない。

唯一止められるのは相手となるロビンのみだが、瞬がチラリ見た時、彼は既に背中で隠しながら小剣を作り出していた。

ああ、あの顔はもう駄目だ。

今か今かと楽しげに待ちわびる彼の表情で止める事を諦めた瞬は、ロビンとはかく、姫には怪我がない様祈りながらアングスの体を引きずって後ろに下がった。

『何時でも来い。軽く相手してやろう、お嬢ちゃん』

『その言葉を後悔させてやる、いくぞお！』

常人なら圧倒されるだけの気迫を放ちながらヴァネッサは俊敏に距離を詰め、彩られた装飾は少ない実戦向きである愛剣を薄ら笑いを浮かべるロビンへと振るった。

日は沈みかけ、夕闇が街を覆う頃、アングスは自宅へと戻っていた。

ようやく落ち着ける自宅へと戻ったにもかかわらず、その表情は暗く、親しい友人であったとしても声をかけ辛い程に雰囲気は重苦しい。

『どうしたらいいんだ・・・』

重い足取りで椅子に腰かけると重力に負けた様に思いたため息をつく。今の彼からすればこれから先に何が起こるか分かったものではなく、どうなったとしても悪い方向に進む気がしなかった。それも問題だったが、一番の問題と言えば。

『姫様が野宿だなんてどう報告すりゃいいってんだ、くそ！』

彼は城への報告する内容にほとんど困り果てていた。

彼がアーリア湖で目を覚ますと既に日は高く、辺りには人気はなかった。

そう、一緒にいたはずのヴァネッサや瞬、そしてロビンの姿はどこにも見当たらなかったのだ。

代わりに彼の隣に置き石された紙があり、拾い上げた紙にはロビン達に同行して闘技大会まで修行する旨の内容が綴られていた。

最後にサインがあったため、間違いなくヴァネッサが書いたものだった。

彼は即座に叫びまわって探してはみたものの、アーリア湖とその周りを覆う山々は余りにも広大であり、一人で搜索出来る範囲などたかが知れている。

止むなく彼は引き揚げてきて今に至るが、報告しようにも連れ戻す人手を募るうにも姫が野宿している事実を言わなければいけない。今は王様が床に伏せているため、報告するのは代わりに国を取り仕切っているエドガーとなる。

相手がエドガーになる事を考えた彼は、無意識にまた大きなため息

をついた。

『エドガー様に報告・・・、絞首刑か磔か、よくて禁固刑か・・・』

一応、置いてあつた紙には彼を罰しないようヴァネッサの願いが記述されていたが、そんなお願いがどこまで通じるのか定かではない。

何せ、エドガーはこの国の將軍でもあるのだから。

大抵の事には物怖じしないアングスであつても、さすがにエドガーへ報告するのは躊躇していた。

その不安は足が震えるているのを見ても分かる。

『・・・ええい、悩んでいても仕方ない！なるようになれ！』

悩みを吹つきる様にやけくそ気味に立ち上がった彼は、自分自身を奮い立たせて家を飛び出した。

勢いそのままに城を目指し、止めてあつた馬に跨り走り出す。

付き纏う不安を必死に振りはらつているうちに城へたどり着き、彼の心臓の鼓動もまだ会つてすらいないにも関わらず、高まり続けていた。

馬を下りてすれ違う同僚に顔色が悪いのを心配されながら、エドガーが執務を行う部屋の前にまでたどり着くと心臓は破裂するのではないかと思えるほど脈打っていた。

意を決して彼はノックすると、低い声の返事が返ってきた。間違いなくエドガー本人のものだった。

ゆっくりとアングスはドアを開き、質素な部屋の中で机から振り向いて待ち構えるエドガーの前へと出た。

將軍だけあり、冗談など一切通じない厳格な雰囲気漂う中、彼は膝をついて紙を差し出した。

『なんだ、これは？』

『じ、実はこの間から城に招かれていた東洋人、瞬が持病の治療に城を抜けだしたのですが、それを追って姫様が探しに行かれたのです。私も同行しましたが、瞬の治療をしているという医者に眠らされ、気がつくところの手紙が置かれていたのです』

途中でエドガーの目尻が動いたり、視線が鋭くなるのにビクつきながらもアングスはどうにか言い切った。

エドガーはアングスを一瞥すると、差し出された手紙を無言で読んでいく。

気まずい沈黙の中、アングスは生きた心地がしない。

早く終わって欲しいと思いつながら背中に冷や汗をかいていると、エドガーの顔が上がった。

『場所は何処だ？』

『は？場所、ですか？』

『お前が姫様と別れたと言う場所だ』

『ア、アーリア湖です。湖のひとりでしたが、気がついた時にはどこにも見当たりませんでした。おそらく、その近くにいると思われる』

『・・・そうか』

黙りこんで考え込むエドガーにアングスの冷や汗は止まらない。

彼の頭の中で悲惨な自分の姿が一通り浮かび上がった所で、エドガ

「はようやく口を開いた。」

「報告は以上か？」

「え、は、はい。以上です」

「ならば、この件について他者への発言を禁ずる。下がってよい」

「は、はい！・・・その、処罰は？」

「必要か？ならば」

「い、いえ！失礼しました」

アングスはエドガーの気が変わらないうちに慌てて出ていく。そつとドアを閉めると、緊張から解放されて大きく息をついた。

「た、助かったのか・・・？」

彼はチラついていた目も当てられない行く末がなくなったのかと安心する一方で、後から来るのではないかと疑う。

とりあえず、前向きに助かったと思いこんだ彼はその場を後にした。アングスが去つた後も壁一枚向こうのエドガーは考え込んでいた。どうすれば、今の状況を利用できるのか、と。

「・・・」

彼が不意に無言で振り返つた先にはいつの間にかロープを身に纏つた隠者の姿があった。

隠者はエドガーの言葉を待っているのか無言で佇んでいた。

『聞いていたか？』

『・・・』

隠者は一度だけ頷き、アンガスがいる時は内心で押し殺してはいたが、信じられない内容に今はエドガーも身を乗り出した。今にも掴みかかりそうな彼に対し、隠者は身動き一つ見せない。

『なぜだ！？お前の報告では毒を呑んだはずだろう！』

『分かりません、耐性があつたのかもしれない。ただ、血を吐きだした後はありません。弱った今なら仕留めるのも容易です』

『問題はそこじゃない！奴は医者に治療を受けるようだが、医者が毒の事に気づく可能性が高い！奴が毒の付いたコップを持っていれば尚更だ！それが公になってみる、奴は姫様を疑うだろうが魔法がある以上、他の可能性も捨てきれないはずだ。そうなれば、私までたどり着く事はなくても犯人であるお前を探してまわる事になる！私以外には誰も知らないお前の事をな！』

普段からは想像もできないほど取り乱した様子のエドガーだが、自分の事を言われているにも関わらず隠者の様子はまるで変わらない。いつもの様にただ立っているだけだった。

それが更にエドガーの心を乱すが、机を一度叩きつけた彼は無理やり心を落ち着かせる。

『・・・くそ！とりあえず、お前はアーリア湖に行って、奴と医者とやらを始末しろ！こっちに戻る前にな！』

『・・・』

怒号の様な命令が飛ぶと隠者は一度だけ頷き、気がついた時には姿は消えていた。

後に残されたのは肩を上下させる程荒々しく息をし、興奮しているエドガーのみだった。

第50話：逃避行&修行（2）（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

出来れば文法や書き方、ストーリー展開で意見を頂けるとありがたいです。

お気に入り登録いただけるともつとありがたいです。

あけましておめでとございます。

今年もボチボチ投稿していきますので、好き勝手書いてるこの小説が皆さんの暇つぶし程度にでもなれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212h/>

旅人 ～世界の終わる日まで～

2012年1月4日01時46分発行